

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第120集

上ノ村遺跡Ⅱ

波介川河口導流事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ

2011. 3

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

上ノ村遺跡Ⅱ

波介川河口導流事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ

2011. 3

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

上ノ村遺跡は、高知平野の西部を潤す仁淀川下流にある縄文時代から近代にいたる遺跡です。これまで、仁淀川下流域では戦国期の山城が幾つか知られていただけで、平地部での遺跡の分布はほとんど認められていませんでした。平成16年度、国土交通省高知河川国道事務所による波介川河口導流事業に伴う試掘調査によって新居城周辺から2つの遺跡が新たに確認され、新居城西方の遺跡を北ノ丸遺跡、南に展開する遺跡を上ノ村遺跡と命名しました。

高知県埋蔵文化財センターでは、平成16年の秋から北ノ丸遺跡、17年度には上ノ村遺跡の発掘調査に着手し平成21年度まで6カ年にわたる調査を実施してまいりました。この度刊行になった『上ノ村遺跡Ⅱ』は、18年度から20年度調査の一部の成果をまとめたものです。『上ノ村遺跡Ⅰ』では、主に古代・中世の様相について報告しましたが、今回は縄文時代晩期の土器や石器が中心となっています。これらの中には南九州や近畿地方との交流をうかがわせる遺物も見られ大変興味深いものがあります。

仁淀川右岸の高岡地区では、1990年代以降発掘調査が繰り返し行われる中で、当地が高知平野西部の中心舞台であったことが明らかになってまいりましたが、下流域においても注目すべき遺跡の存在することが判明いたしました。長い歴史の営みの中で、仁淀川流域が重要な役割を果たしてきたことを示しています。地域のより良い発展のためには、何よりその歴史を正しく認識することが不可欠であろうと思われます。埋蔵文化財は、記録が残っていない地域の歴史を語ってくれる掛け替えのない歴史資料です。本書が地域理解のための一助となり、地域発展に資することができれば幸いです。今後とも埋蔵文化財の保護、調査に対しましてご理解とご協力を下さいますようお願い申し上げます。

最後に、調査に対して全面的な協力をして下さった地元新居地区のみなさま、国交省高知河川国道事務所、発掘作業に携わって下さった現場作業員のみなさまに厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター

所長 小笠原孝夫

例 言

1. 本書は、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター（以下高知県埋蔵文化財センター）が平成18年度から20年度に実施した波介川河口導流事業に伴う上ノ村遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、国土交通省四国地方整備局高知河川国道事務所の委託を高知県教育委員会が受託し、高知県埋蔵文化財センターが再委託して発掘調査を実施した。
3. 上ノ村遺跡は、土佐市新居上ノ村字土居屋敷5100-1他に所在する。

4. 調査年次及び調査面積

第2地点1・2区（平成18年10月～19年3月5,900㎡） 同3区平成20年5月～6月300㎡

第3地点拡張区（平成19年10月～20年2月410㎡） 第6地点（平成19年8月～11月400㎡）

5. 調査体制

平成18年度

総括	高知県埋蔵文化財センター	所長	川島博海
	〃	次長	森田尚宏
	〃	調査課長	廣田佳久
総務	〃	総務課長	戸梶友昭
調査担当	〃	調査課第三班長	出原恵三
	〃	専門調査員	野田秀夫

平成19年度

総括	高知県埋蔵文化財センター	所長	汲田幸一
	〃	次長	森田尚宏
	〃	調査課長	廣田佳久
総務	〃	総務課長	戸梶友昭
調査担当	〃	調査課第三班長	出原恵三
	〃	専門調査員	野田秀夫

平成20年度

総括	高知県埋蔵文化財センター	所長	小笠原孝夫
	〃	次長	森田尚宏
	〃	調査課長	廣田佳久
総務	〃	総務課長	恒石雅彦
調査担当	〃	調査員	松本安紀彦

6. 本書の編集出原が行い、執筆は第2地点3区を松本安紀彦が、それ以外は出原が執筆した。

7. 現場作業では下記の調査補助員から協力を得た。
高知県埋蔵文化財センター技術補助員 片岡和美 坂本憲彦
〃 測量補助員 岡林真史 谷川齊
8. 出土遺物については下記の方々からご指導を頂き、資料見学など便宜を図って頂いた。記して謝意を表したい。
今田秀樹(大分県日田市教育委員会) 後藤一重(大分県教育委員会) 小竹森直子(滋賀県文化財保護協会) 鈴木康二(滋賀県立安土考古博物館) 中村豊(徳島大学) 浜田恵子(高知市教育委員会) 湯浅利彦(徳島県教育委員会)
9. 出土遺物の自然科学分析に付いては下記の機関に依頼した。
骨の同定:(株)パリノ・サーヴェイ
石材の産地同定:(有)遺物材料研究所 藁科哲男
10. 鍛冶関連遺物については金属学的調査を九州テクノリサーチ・センターに依頼した。
11. 遺物実測、トレースなどの整理作業は下記の方々に従事して下さった。
高橋由香 竹村延子 土居初子 東村知子 吉本由佳 山中美代子
12. 遺構については、SK(土坑)、SD(溝跡)、P(ピット)、SX(性格不明遺構)等の略号を使用した。
掲載している挿図の縮尺はそれぞれに記載しており、方位Nは世界測地系による方眼北である。
13. 遺物については縮尺1/4を基本とし、石器等必要に応じて縮尺を変えているが、各挿図にはスケールを表示している。
14. 出土遺物は、18年度調査分が「06-8TK」、19年度調査分が「07-8TK」、20年度分が「08-8TK」と注記して埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第I章	各調査区の概観	1
第II章	第2地点の調査(2-1・2・3区)	
1	調査区の概要	3
2	2-1区の調査	3
3	2-2区の調査	29
4	2-3区の調査	46
第III章	第3地点拡張区の調査	
1	調査区の概要	53
2	調査の方法	53
3	地層堆積の状況と各小区の概要	53
	(1) 3-1-1区	54
	(2) 3-1-2区	54
	(3) 3-1-3区	54
	(4) 3-1-4区	60
	(5) 3-1-5区	67
	(6) 3-1-6区	67
	(7) 3-1-7区	67
	(8) 3-2区	68
4	出土土器	
	(1) 縄文土器分類	68
	(2) 各調査区出土の土器	
	① 3-1-1区	75
	② 3-1-2区	75
	③ 3-1-3区	76
	④ 3-1-4区	96
	⑤ 3-1-5区	123
	⑥ 3-1-6区	125
	⑦ 3-1-7区	126
	⑧ 3-2区	126
5	石器	126
第IV章	第6地点	
1	調査区の概要	175
2	トレンチ調査	175
3	陣地跡	175
4	小結	182
第V章	自然科学分析	
1	上ノ村遺跡出土骨の同定	183
2	上ノ村遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査	186
3	上ノ村遺跡出土サヌカイト製遺物の原材産地分析	197
4	上ノ村遺跡出土玉類の産地分析	208

5	上ノ村遺跡出土緑泥石片岩製小玉の産地分析	218
6	上ノ村遺跡出土勾玉の原材産地分析	221
7	上ノ村遺跡出土の安山岩、黒曜石製遺物の原材産地分析	228
第VI章 総括		
1	縄文土器	239
2	石器	248
3	まとめ	251

挿 図 目 次

Fig.1	上ノ村遺跡調査区位置図	2
Fig.2	上ノ村遺跡第2地点調査区位置図	4
Fig.3	2-1区全体図	5・6
Fig.4	2-1区基本層準(南壁)	7
Fig.5	SK1・2平面・セクション・出土遺物	9
Fig.6	SK3～5・10・15平面・セクション・エレベーション・出土遺物	10
Fig.7	SK16・17・30・32平面・セクション・出土遺物	11
Fig.8	SK40・41・43平面・セクション・出土遺物	12
Fig.9	SK45・50平面・セクション・出土遺物	14
Fig.10	SD1セクション・出土遺物	15
Fig.11	SD2集石	16
Fig.12	SD2セクション・出土遺物	17
Fig.13	SD3セクション・出土遺物	18
Fig.14	ピット出土遺物	19
Fig.15	包含層出土遺物1	20
Fig.16	包含層出土遺物2	21
Fig.17	2-2区全体図	27・28
Fig.18	2-2区基本層準(西壁)	30
Fig.19	SK1・2・5・7・8平面・セクション・エレベーション	32
Fig.20	SK1・2・5・8出土遺物	33
Fig.21	SK13平面・セクション・出土遺物	34
Fig.22	SK14・17平面・セクション・出土遺物	35
Fig.23	SK17出土遺物	36
Fig.24	SK24・26・27平面・セクション・エレベーション・出土遺物	37
Fig.25	SK35・38平面・セクション・エレベーション・出土遺物	38
Fig.26	SD1～3セクション・出土遺物	39
Fig.27	ピット出土遺物	40
Fig.28	包含層出土遺物	41
Fig.29	2-3区平面図	46
Fig.30	2-3区北(A-A')・中央(B-B')・南壁(C-C')基本層準	47
Fig.31	2-3区Ⅵ層出土遺物	49
Fig.32	2-3区Ⅶ層出土遺物・表面採集遺物	51
Fig.33	3-1-2区北壁セクション	54
Fig.34	第3地点拡張区全体図1	55・56
Fig.35	第3地点拡張区全体図2	57・58
Fig.36	3-1-3区平面図	59
Fig.37	3-1-3区北壁セクション	60
Fig.38	3-1-4区平面図	61
Fig.39	3-1-4区北壁セクション	62
Fig.40	3-1-5区平面図	63

Fig.41	3-1-5区北壁セクション	64
Fig.42	3-1-6区北壁セクション	65
Fig.43	3-1-7区北壁セクション	66
Fig.44	3-2区南壁セクション	68
Fig.45	深鉢分類① III～V類	69
Fig.46	深鉢分類② VI～VII類	71
Fig.47	浅鉢分類① A類	72
Fig.48	浅鉢分類② B～D類	73
Fig.49	浅鉢分類③ E・F類	74
Fig.50	浅鉢分類④ G～M類	74
Fig.51	3-1-1区出土の土器	76
Fig.52	3-1-2区出土の土器	77
Fig.53	3-1-3区I群の土器① (テラス1)	78
Fig.54	3-1-3区I群の土器② (テラス1)	79
Fig.55	3-1-3区I群の土器③ (テラス2)	80
Fig.56	3-1-3区I群の土器④ (SX1・2)	81
Fig.57	3-1-3区II群の土器	82
Fig.58	3-1-3区III群の土器①	83
Fig.59	3-1-3区III群の土器②	84
Fig.60	3-1-3区III群の土器③	85
Fig.61	3-1-3区III群の土器④ (縄文土器: 182～194)	86
Fig.62	3-1-3区III群の土器⑤	87
Fig.63	3-1-3区IV群の土器①	88
Fig.64	3-1-3区IV群の土器②	89
Fig.65	3-1-3区IV群の土器③	90
Fig.66	3-1-4区I群の土器① (テラス2)	91
Fig.67	3-1-4区I群の土器② (テラス2)	92
Fig.68	3-1-4区I群の土器③ (テラス2)	93
Fig.69	3-1-4区I群の土器④ (テラス2)	94
Fig.70	3-1-4区I群の土器⑤ (テラス2)	95
Fig.71	3-1-4区I群の土器⑥ (テラス2)	96
Fig.72	3-1-4区I群の土器⑦ (テラス2)	97
Fig.73	3-1-4区I群の土器⑧ (テラス3)	98
Fig.74	3-1-4区I群の土器⑨ (テラス3)	99
Fig.75	3-1-4区I群の土器⑩ (テラス4・SX2)	100
Fig.76	3-1-4区II群の土器①	101
Fig.77	3-1-4区II群の土器②	102
Fig.78	3-1-4区III群の土器①	103
Fig.79	3-1-4区III群の土器②	104
Fig.80	3-1-4区III群の土器③	105
Fig.81	3-1-4区III群の土器④	106
Fig.82	3-1-4区III群の土器⑤	107
Fig.83	3-1-4区IV群の土器①	108
Fig.84	3-1-4区IV群の土器②	109

Fig.85	3-1-5区出土土器①(Ⅱ・Ⅲ層, SX1)	110
Fig.86	3-1-5区出土土器②(SX1)	111
Fig.87	3-1-5区出土土器③(SX2)	112
Fig.88	3-1-5区出土土器④(Ⅵ・Ⅶ層)	113
Fig.89	3-1-5区出土土器⑤(Ⅵ・Ⅶ層)	114
Fig.90	3-1-5区出土土器⑥(上層)	115
Fig.91	3-1-5区出土土器⑦(上層)	116
Fig.92	3-1-5区出土土器⑧(上層)	117
Fig.93	3-1-5区出土土器⑨(上層)	118
Fig.94	3-1-6区出土土器①	119
Fig.95	3-1-6区出土土器②	120
Fig.96	3-1-6区出土土器③	121
Fig.97	3-1-7区出土土器	122
Fig.98	3-2区・その他出土土器	123
Fig.99	石鏃①	128
Fig.100	石鏃②	129
Fig.101	石鏃③	130
Fig.102	石鏃④	131
Fig.103	磨製石斧①	132
Fig.104	磨製石斧②	133
Fig.105	磨製石斧③・打製石斧①	134
Fig.106	打製石斧②	135
Fig.107	打製石斧③	136
Fig.108	打製石斧④	137
Fig.109	加工斧	138
Fig.110	石包丁(S132～S139)とスクレイパー(S140・S141)	139
Fig.111	石棒(S145)、石錘(S147)、叩石(S146・S148～S152)	140
Fig.112	叩石(S153～S155)、軽石(S156)	141
Fig.113	玉類(勾玉:S162、小玉:S157～S160、管玉:S161)	142
Fig.114	第6地点調査区位置図	176
Fig.115	TR2セクション・出土遺物	177
Fig.116	交通壕と小銃掩体平面図①	178
Fig.117	交通壕と小銃掩体平面図②	179
Fig.118	交通壕・小銃掩体エレベーション①	180
Fig.119	交通壕・小銃掩体エレベーション②	181
Fig.120	サヌカイト・サヌカイト様岩石の原産地	203
Fig.121	上ノ村遺跡出土結晶片岩様緑色岩製平玉(107798)の蛍光X線スペクトル	214
Fig.122	上ノ村遺跡出土結晶片岩様緑色岩製平玉(107799)の蛍光X線スペクトル	214
Fig.123	上ノ村遺跡出土結晶片岩様緑色岩製平玉(107800)の蛍光X線スペクトル	214
Fig.124	上ノ村遺跡出土結晶片岩様緑色岩製小管玉(107801)の蛍光X線スペクトル	215
Fig.125	上加世田遺跡出土玉類石材のESR信号(結晶片岩様緑色玉類石材、比重3.0～2.7)	215
Fig.126	上ノ村遺跡出土結晶片岩様緑色岩製玉類のESRスペクトル	216
Fig.127	結晶片岩様緑色岩玉類使用遺跡分布圏・ヒスイ製玉類使用遺跡分布圏	217
Fig.128	上ノ村遺跡出土管玉(99735)の蛍光X線スペクトル	220

Fig.129 昼飯大塚古墳出土滑石、緑泥石片岩様玉類の代表的な ESR スペクトル	220
Fig.130 上ノ村遺跡出土緑泥石片岩製管玉の ESR スペクトル	221
Fig.131 上ノ村遺跡出土勾玉 (99734) の蛍光 X 線スペクトル	226
Fig.132 上加世田遺跡出土玉類石材の ESR 信号	226
Fig.133 結晶片岩様緑色岩玉類使用遺跡分布圏・ヒスイ製玉類使用遺跡分布圏	227
Fig.134 サヌカイト・サヌカイト様岩石の原産地	236
Fig.135 金山・五色台地域サヌカイト、黒曜石様ガラス質安山岩の原産地	237
Fig.136 黒曜石原産地	238

挿入表目次

表 1	2 - 1 区土坑法量一覽	8
表 2	2 - 1 区土器觀察表①	24
表 3	2 - 1 区土器觀察表②	25
表 4	2 - 1 区土器觀察表③	26
表 5	2 - 2 区土坑法量一覽	31
表 6	2 - 2 区土器觀察表①	43
表 7	2 - 2 区土器觀察表②	44
表 8	2 - 2 区土器觀察表③	45
表 9	2 - 3 区遺構法量一覽	49
表 10	2 - 3 区出土遺物觀察表	52
表 11	第 3 地点拡張区土器觀察表①	144
表 12	第 3 地点拡張区土器觀察表②	145
表 13	第 3 地点拡張区土器觀察表③	146
表 14	第 3 地点拡張区土器觀察表④	147
表 15	第 3 地点拡張区土器觀察表⑤	148
表 16	第 3 地点拡張区土器觀察表⑥	149
表 17	第 3 地点拡張区土器觀察表⑦	150
表 18	第 3 地点拡張区土器觀察表⑧	151
表 19	第 3 地点拡張区土器觀察表⑨	152
表 20	第 3 地点拡張区土器觀察表⑩	153
表 21	第 3 地点拡張区土器觀察表⑪	154
表 22	第 3 地点拡張区土器觀察表⑫	155
表 23	第 3 地点拡張区土器觀察表⑬	156
表 24	第 3 地点拡張区土器觀察表⑭	157
表 25	第 3 地点拡張区土器觀察表⑮	158
表 26	第 3 地点拡張区土器觀察表⑯	159
表 27	第 3 地点拡張区土器觀察表⑰	160
表 28	第 3 地点拡張区土器觀察表⑱	161
表 29	第 3 地点拡張区土器觀察表⑲	162
表 30	第 3 地点拡張区土器觀察表⑳	163
表 31	第 3 地点拡張区土器觀察表㉑	164
表 32	第 3 地点拡張区土器觀察表㉒	165
表 33	第 3 地点拡張区土器觀察表㉓	166
表 34	第 3 地点拡張区土器觀察表㉔	167
表 35	第 3 地点拡張区土器觀察表㉕	168
表 36	第 3 地点拡張区土器觀察表㉖	169
表 37	第 3 地点拡張区土器觀察表㉗	170
表 38	第 3 地点拡張区石器觀察表①	170
表 39	第 3 地点拡張区石器觀察表②	171
表 40	第 3 地点拡張区石器觀察表③	172

表 41	第 3 地点拡張区石器観察表④	173
表 42	第 3 地点拡張区石器観察表⑤	174
表 43	検出分類群の一覧	183
表 44	骨同定結果	185
表 45	供試材の履歴と調査項目	195
表 46	供試材の科学組成	195
表 47	出土遺物の調査結果のまとめ	196
表 48	上ノ村遺跡出土サヌカイト製遺物の元素比分析結果	202
表 49	上ノ村遺跡出土サヌカイト製遺物の原材産地分析結果	202
表 50 - 1	上ノ村遺跡出土サヌカイト製遺物 (107803) の必要条件と十分条件の産地分析結果	204
表 50 - 2	上ノ村遺跡出土サヌカイト製遺物 (107803) の必要条件と十分条件の産地分析結果	205
表 50 - 3	上ノ村遺跡出土サヌカイト製遺物 (107803) の必要条件と十分条件の産地分析結果	206
表 50 - 4	上ノ村遺跡出土サヌカイト製遺物 (107803) の必要条件と十分条件の産地分析結果	207
表 51	上加世田、的場遺跡出土結晶片岩様緑色岩製遺物による遺物群の元素比の平均値と標準偏差値	212
表 52	川平 I 遺跡・大坪 14 遺跡出土結晶片岩様緑色岩製遺物による遺物群のと元素比の平均値と標準偏差値	213
表 53	上ノ村遺跡出土結晶片岩様緑色岩製玉類の非破壊分析化合物元素濃度	213
表 54	上ノ村遺跡出土結晶片岩様緑色岩製玉類の元素分析値と比重の結果	213
表 55	上ノ村遺跡出土結晶片岩様緑色岩製玉類の原材産地分析結果	214
表 56	上ノ村遺跡出土緑泥石片岩製小玉の元素分析結果	219
表 57	上ノ村遺跡出土緑泥石片岩製勾玉の産地分析結果	219
表 58	上ノ村遺跡出土の結晶片岩様緑色 (クロム雲母) 岩製勾玉の元素分析値と比重の結果	225
表 59	上ノ村遺跡出土の結晶片岩様緑色 (クロム雲母) 岩製勾玉の産地分析の結果	226
表 60	上ノ村遺跡出土安山岩製遺物の元素比分析結果	235
表 61	上ノ村遺跡出土黒曜石製遺物の元素比組成結果	235
表 62	上ノ村遺跡出土安山岩、黒曜石製剥片の検定結果	235
表 63	晩期土器組成	240
表 64	深鉢類型	241
表 65	浅鉢類型	242
表 66	テラス 2 出土深鉢類型	245

図 版 目 次

- PL. 1: 第2地点全景航空写真
PL. 2: 第2地点北部(南から)、第2地点北部(西から)
PL. 3: 2-1区南壁層準、2-1区SK1セクション
PL. 4: 2-1区SK1鍛冶滓出土状況、同上床面の鉄鏝
PL. 5: 2-1区SD2の集石
PL. 6: 2-1区の土坑・セクション
PL. 7: 2-1区の土坑・セクション・ピット
PL. 8: 2-1区遺物出土状況
PL. 9: 2-1区調査作業風景
PL.10: 2-2区SK2、SK2の備前大甕など出土状況
PL.11: 2-2区土師器杯出土状況
PL.12: 2-2区土坑・溝セクション
PL.13: 2-2区遺物出土状況
PL.14: 2-3区調査前遠景(写真中央堤防下)、2-3区調査前近景(写真中央堤防下)
PL.15: 2-3区北壁土層(A-A')、2-3区旧堤防中央土層(B-B')
PL.16: 2-3区南壁土層(C-C')、2-3区Ⅵ層上面検出遺構完掘状況(調査区北より)
PL.17: 2-3区Ⅶ層上面検出遺構完掘状況全景(調査区北より)、同近景(北より)
PL.18: 2-3区土坑、ピット、遺物出土状況、作業風景
PL.19: 第3地点南側上空より、同地点遠景(仁淀川対岸より)
PL.20: 第3地点拡張区完掘状況(直上空より)、同上(北側上空より)
PL.21: 第3地点拡張区完掘状況(北側上空より)、同上(南側上空より)
PL.22: 3-1-2区の完掘状況とベルト1(南西より)、3-1-2・3区完掘状況とベルト3(東より)
PL.23: 3-1-2・3区完掘状況とベルト3(北より)、3-1-2・3区完掘状況とベルト3(西より)
PL.24: 3-1-3区テラス2遺物出土状況(北より)、3-1-3区トレンチ完掘状況とベルト2(南東より)
PL.25: 3-1-1～3区とベルト1～3(南東より)、3-1-4区とベルト3(南東より)
PL.26: 3-1-4区完掘状況(南より)、3-1-4区完掘状況(東より)
PL.27: 3-1-4区テラス2遺物出土状況、同上(西より)
PL.28: 3-1-4区テラス2遺物出土状況(西より)、同上(北より)
PL.29: 3-1-4区テラス2遺物出土状況(北西より)、同上
PL.30: 3-1-4区テラス3遺物出土状況(西より)、3-1-5区ベルト4(南東より)
PL.31: 3-1-5区完掘状況とベルト4(西南より)、3-1-5区ベルト4(南より)
PL.32: 3-1-5区SX1・2(南より)、3-1-6区完掘状況とベルト5(南西より)
PL.33: 3-1-6区完掘状況とベルト5(南東より)、3-1-6区完掘状況(西より)
PL.34: 3-1-6区完掘状況(東より)、3-1-7区完掘状況とベルト6(南東より)
PL.35: 3-2区完掘状況と南壁セクション(北より)、3-1-4～6区作業風景(北東より)
PL.36: 第3地点拡張区完掘状況(東より)、同上(北より)
PL.37: 3-1-3区テラス1、3-1-4区テラス2・テラス3のSX1遺物出土状況
PL.38: 3-1-3～5・7区、ベルト6遺物出土状況
PL.39: 3-1-4区遺物出土状況、3-1-4～6区発掘作業風景
PL.40: 第6地点交通壕調査前(北より)、同上(南より)

PL.41: 第6地点交通壕と小銃掩体③・⑥付近調査前(南より)、同上完掘状況(南より)
PL.42: 第6地点交通壕壁の立ち上がり、小銃掩体④付近
PL.43: 第6地点小銃掩体④の横穴入り口、作業風景(北より)
PL.44: 第6地点交通壕と小銃掩体完掘状況(北より)、同上(直上近景)
PL.45: 第6地点交通壕と小銃掩体完掘状況(直上遠景)、同上(東上空より)
PL.46: 第6地点トレンチ1・3
PL.47: トレンチ4完掘状況、交通壕と小銃掩体調査前、交通壕と小銃掩体完掘状況
PL.48: 2-1区出土の備前焼
PL.49: 2-1区出土の備前焼(内面)
PL.50: 2-1区出土の貿易陶磁器・瀬戸
PL.51: 2-1区出土の瓦質羽釜、同硯
PL.52: 2-2区出土の備前焼
PL.53: 2-2区出土の東播磨系羽釜・瓦質羽釜・瓦質鍋、風炉
PL.54: 2-2区SK17・24・26出土の土師器杯、P71出土の瓦器椀
PL.55: 2-3区出土の貿易陶磁器・瓦質土器・土師器・近世陶磁器他
PL.56: 第3地点拡張区出土の深鉢Ⅲ類
PL.57: 第3地点拡張区出土の深鉢Ⅳ類
PL.58: 第3地点拡張区出土の深鉢Ⅳ類(内面)
PL.59: 第3地点拡張区出土の深鉢Ⅴ類
PL.60: 第3地点拡張区出土の深鉢Ⅵ類・Ⅶ類
PL.61: 第3地点拡張区出土の深鉢Ⅷ類・Ⅸ類
PL.62: 第3地点拡張区出土の深鉢Ⅸ～Ⅻ類
PL.63: 第3地点拡張区出土の浅鉢A類
PL.64: 第3地点拡張区出土の浅鉢B類
PL.65: 第3地点拡張区出土の浅鉢C類
PL.66: 第3地点拡張区出土の浅鉢D・E類
PL.67: 第3地点拡張区出土の浅鉢F・D類
PL.68: 第3地点拡張区出土の浅鉢H・I・J・K・M類
PL.69: 第3地点拡張区出土の深鉢Ⅳ・Ⅵ・Ⅸ類、浅鉢E類
PL.70: 第3地点拡張区出土の石鏃①
PL.71: 第3地点拡張区出土の石鏃②・石錐
PL.72: 第3地点拡張区出土の伐採斧(縄文)
PL.73: 第3地点拡張区出土の伐採斧(弥生)
PL.74: 第3地点拡張区出土の加工斧
PL.75: 第3地点拡張区出土の打製石斧①
PL.76: 第3地点拡張区出土の打製石斧②
PL.77: 第3地点拡張区出土の石庖丁
PL.78: 第3地点拡張区出土の石棒・叩石・石錘
PL.79: 第3地点拡張区出土の玉類(勾玉・管玉・小玉)、第6地点出土の遺物
PL.80: 第3地点拡張区出土の骨

第 I 章 各調査区の概観

1 第2地点

第2地点は、上ノ村遺跡の東南端部に位置し仁淀川旧堤防に接している。当初は2-1区、2-2区の2地点について調査を行う予定であったが、2-2区の調査の結果、旧堤防下にも中世の遺構の広がる可能性のあることから2-3区を設定した。第2地点は、試掘調査の結果、他地点と比べて遺物・遺構が僅少であり、仁淀川に近く氾濫原の広がりをも想定していた。しかし、予想に反して多くの遺構の広がりが確認された。各調査区の面積は2-1区4,100㎡、2-2区1,800㎡、2-3区300㎡の計6,200㎡である。

2-1・2区は平成18年10月から同19年3月まで行ったが、新堤防盛土工事との関係で、南と北とに二分して調査を実施した。すなわち2-1区の南側半分と2-2区南端部の調査を先に実施した後、北側の残りの部分の調査を行った。2-3区の大部分は旧堤防の下に位置することから平成20年度の調査となった。第2地点は水田や園芸栽培畑の跡地であったために、調査に入った段階で耕作土の大部分は除去されており、部分的に地山面が見えているところもあった。包含層は部分的に形成されていたが、遺物は僅少であったために遺構検出面の直上まで重機を用いて土を除いた。検出遺構は土坑、溝、ピットで主に14～15世紀の遺物出土している。前回『上ノ村遺跡 I』で報告した新居城の南側調査区よりも後出する時期の遺構が中心であり、上ノ村遺跡の変遷や広がりを知る上で重要な位置を占めている。

2 第3地点拡張区

第3地点は新居城の城山と仁淀川堤防に挟まれた面積5,280㎡を測る調査区である。試掘調査では主に中・近世の遺物・遺構が認められたが、城山の裾部から縄文晩期土器がまとまって出土したことから、3地点の西側、城山東斜面の裾に調査区を拡張したところ縄文晩期土器を多く含んだ層準のあることが確認された。そこで斜面に食い込むように新たに調査区を設定し第3地点拡張区とした。長軸52m、短軸12m前後、面積410㎡の調査区である。

ここからは縄文晩期土器を中心に縄文中期から弥生時代の土器、石器、土師器、須恵器、中世遺物などが斜面堆積の状態で大量に出土した。晩期土器の中にはテラス状の遺構や凹みから一括性の高い出土状況を示しているものも見られる。特に無刻目突帯文土器がまとまって出土したことは注目されよう。高知平野では初めての出土であり晩期土器の編年や地域性などを明らかにする上で極めて興味深い遺物である。

3 第6地点

新居城の縄張りの中にあるが、調査区内の踏査において関連遺構を確認することはできなかった。ここは後述するように1960年代の公園造営の際に大きく改変されている。南側斜面の3箇所を平場にトレンチ状の調査区を設定し掘削したが、城と関係する遺構を確認することはできなかった。僅かに2点の中世陶磁器などを検出したのみである。しかし南に伸びる細尾根上には旧日本軍が本土決戦に備えて作った交通壕などの戦争遺跡が確認されたので、主としてそれらの遺構の調査を行った。

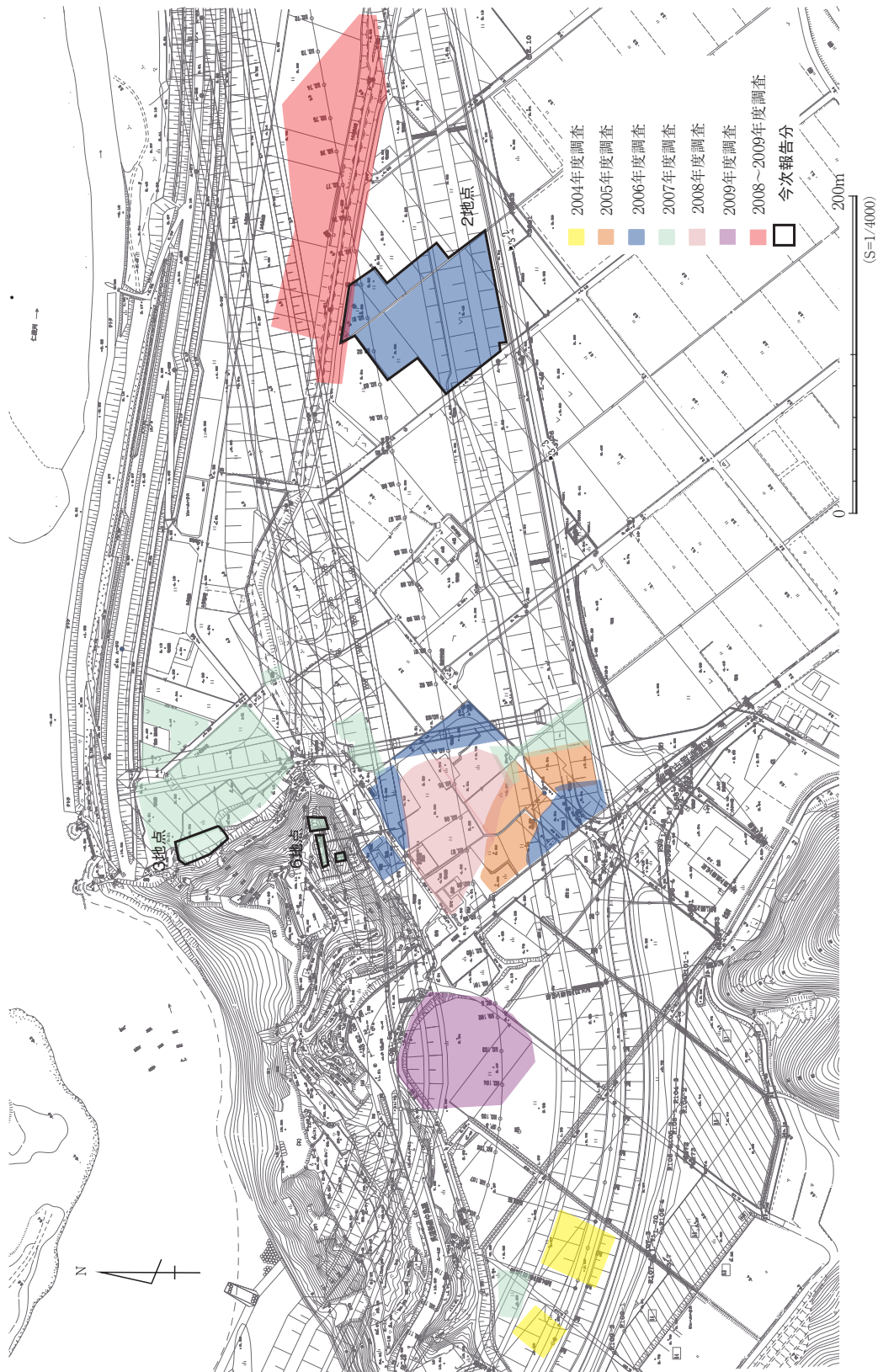


Fig.1 上ノ村遺跡調査区位置図

第Ⅱ章 第2地点(2-1・2・3区)

1 調査区の概要

第2地点は、上ノ村遺跡の東南部に位置し、2009年度に報告した第1地点のN・S区(『上ノ村遺跡Ⅰ』)の東約200mの地点にある。仁淀川旧堤防に接する調査区で、旧堤防の外側は現在では畑地となっているが仁淀川の氾濫原が広がっている。この旧堤防の下で近世初めの護岸や護岸から作り出された猿尾、近代初期の堤防が検出されて話題を呼んでいる。したがって近世以前は、当調査区付近まで仁淀川の河川敷が迫っていたことが考えられる。調査面積は6,200㎡である。第2地点の調査は、2006年度に2-1・2地点の5,900㎡を、2007年度に2-3区地点の300㎡を実施した。『長宗我部地検帳』の「カチャ屋敷」に該当する地点と考えられる。

中世を中心とする遺構・遺物が検出されているが、全体的にかなりの削平を受けており遺存状況はあまり良好とは言えない。

2 2-1区の調査

(1) 基本層準(Fig.4)

I a: 現耕作土。大部分が削平されており、西寄りに層厚2～8cmを測る。

II: 床土。現耕作土の床土で一部にのみ認められる。

I b: 旧耕作土。東部では削平を受けているが西方ではI aの下層に層厚10cm前後で堆積する。

III: 灰白色シルトで0.5～3cm大の小礫を含む。層厚10cm前後を測る。

IV: 黄灰色シルトで0.5～3cm大の小礫を含む。層厚3～10cm前後で西に向かって層厚を減じている。

V: 橙黄色シルトで0.5～3cm大の小礫を含む。層厚3～10cm前後である。中世遺構が掘り込まれている。

VI: 褐灰色シルトで茶褐色のマンガン粒を含む。0.5～3cm大の小礫を含む。層厚3～10cm前後である。

VII: 黄灰色シルトでマンガン粒を含む。0.5～3cm大の小礫を含む。層厚20cm以上を測る。総じて河川堆積物で覆われている。山際の第1地点に粘性土が厚く堆積していた層準とは大きな違いである。古代以降の堆積と考えられる。

(2) 検出遺構と遺物

土坑53基、溝3条、ピット300以上を検出した。これらの遺構は調査区の東部に集中して南北に長く分布している。土坑については、主要なものについてのみ説明を加え、他のものは一覧表を参照にされたい。

① 土坑

SK1 (Fig.5)

調査区南部に位置する。隅丸方形を呈し、長軸1.38m、短軸0.95m、深さ9.2cmを測る。埋土には焼土と炭化物を多く含んでおり、数cmから拳大の鍛冶滓が多量に出土し羽口片も一点出土した。床面には図示したように鉄錆が広がっていた。鍛冶滓14点について金属学的な調査をおこなったところすべて鍛冶関連の遺物で、その大半は鍛錬鍛冶に伴うものであることが明らかとなり、「小鍛冶に伴

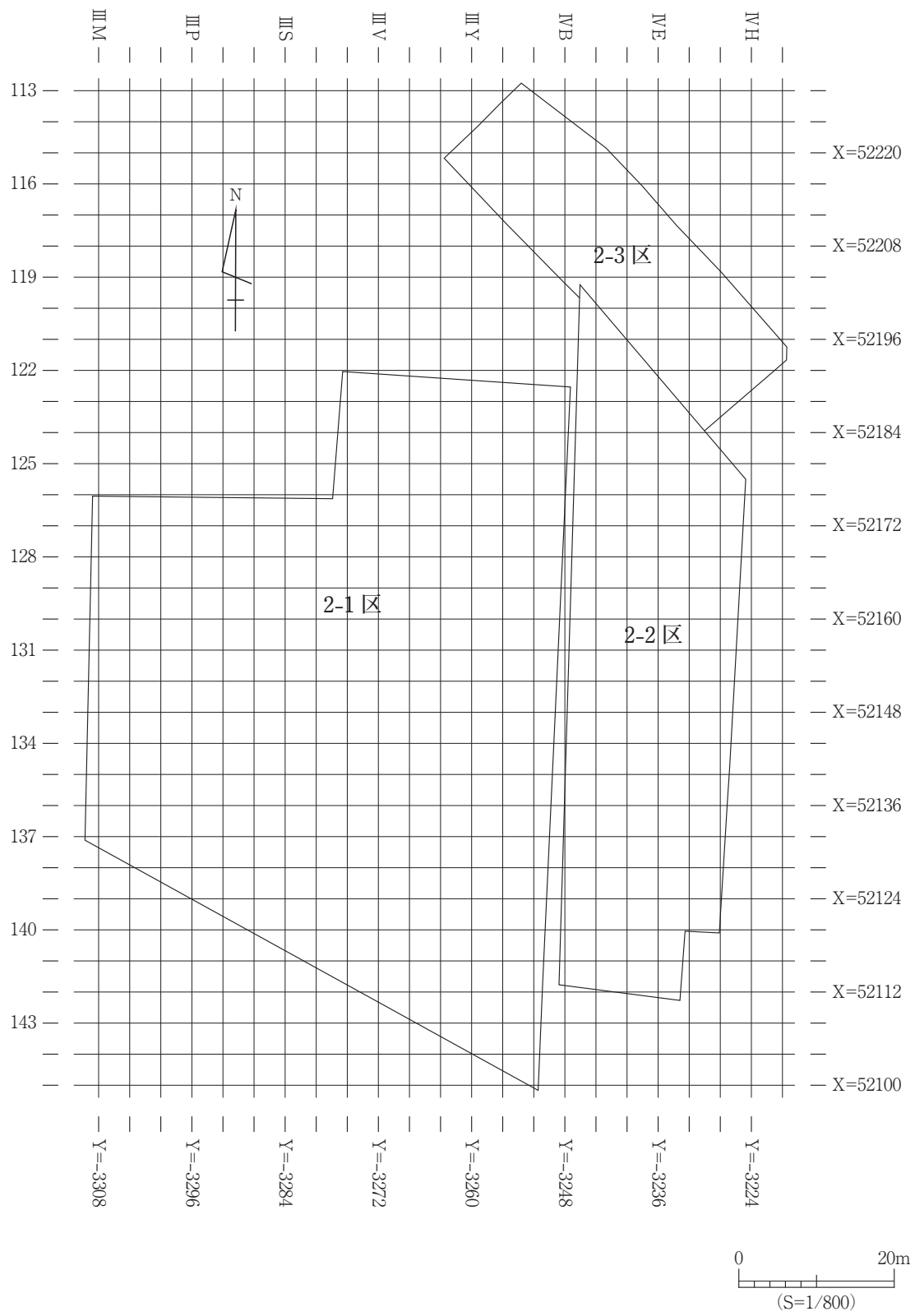


Fig. 2 上ノ村遺跡第2地点調査区位置図

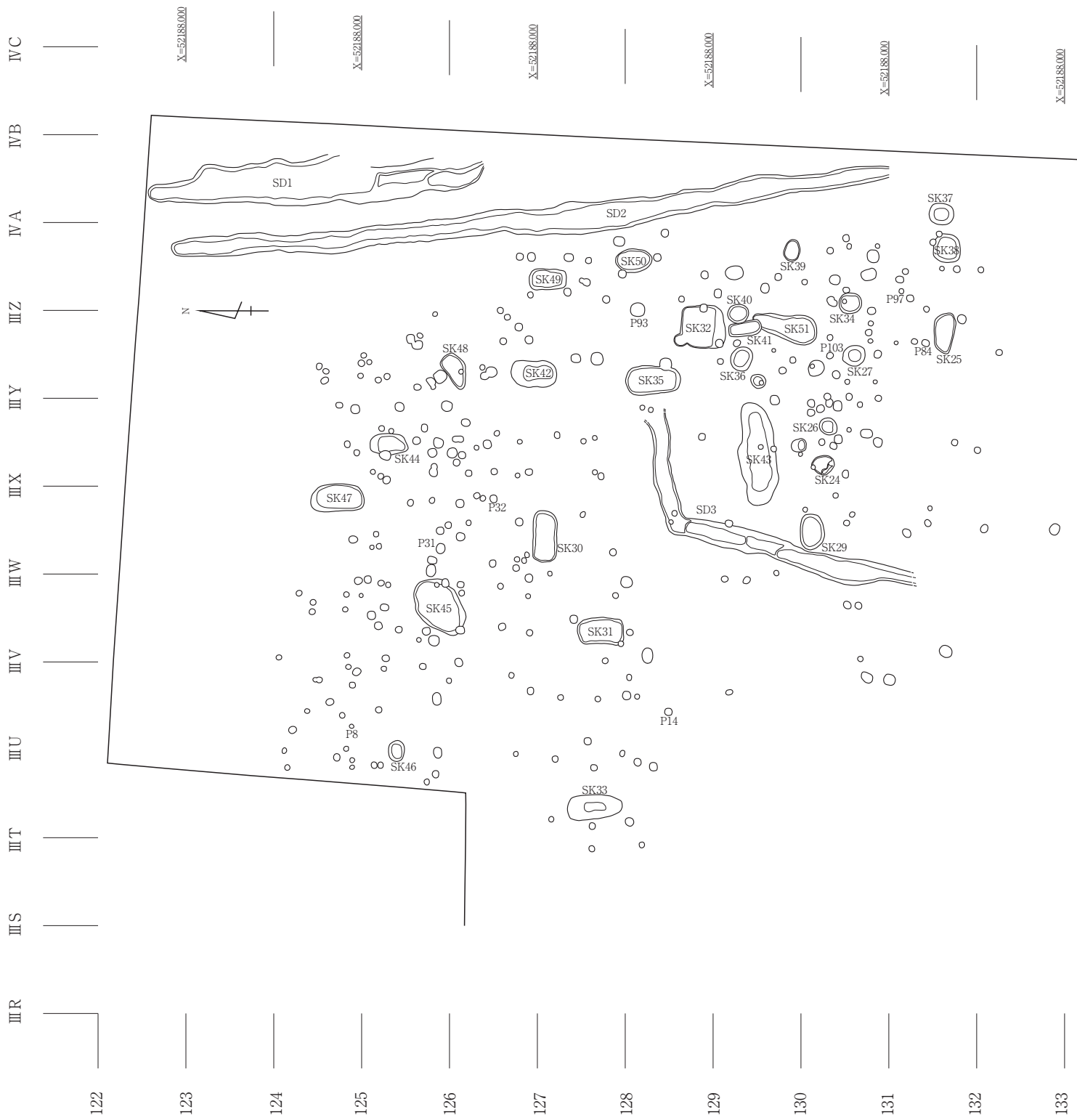
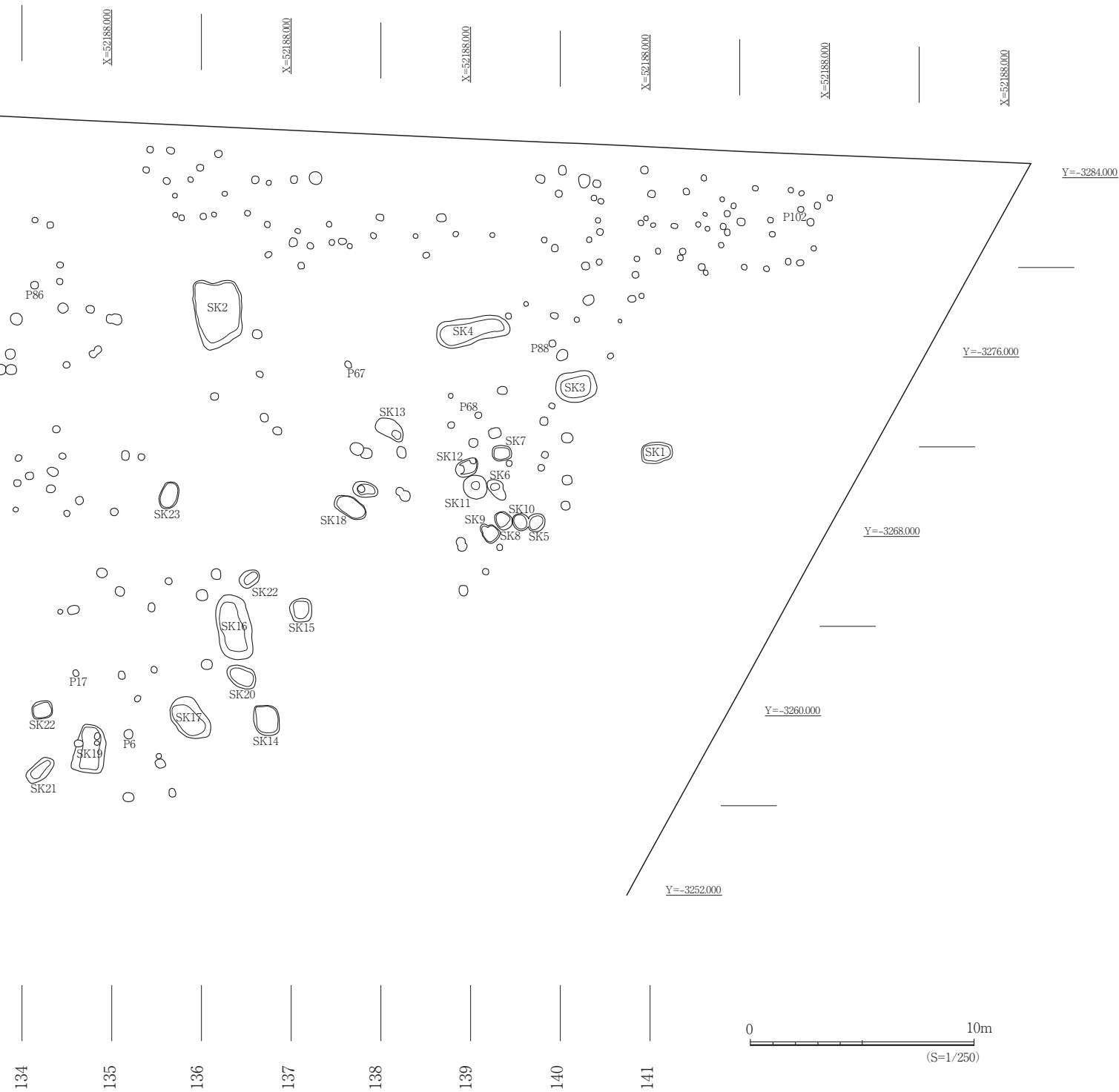


Fig.3 2-



区全体図

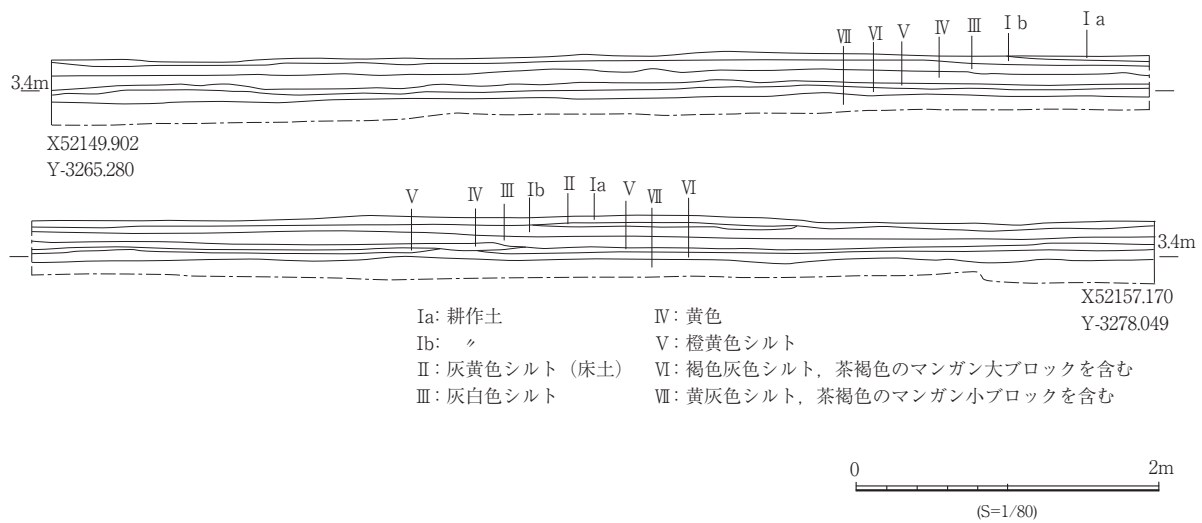


Fig. 4 2-1区基本層準(南壁)

う廃滓土坑と推定される」との結論を得ている。被熱によって海綿状になった土器片は出土しているが、時期の決め手となる遺物は見られない。しかし周辺の状況から見て、13～15世紀の中で捉えなければならない。ここの小字名が「カチャ屋敷」であることから興味深い現象と言えよう。

SK2 (Fig.5)

調査区南部の東寄りに位置する。不整形を呈し、長軸3.24m、短軸2.28m、深さ13.6cmを測る。埋土は黄褐色シルト～砂である。埋土から底径18cmの備前甕の底部(1)が出土している。その他、土師器細片や焼土塊が出ている。

SK3 (Fig.6)

調査区南部に位置する。隅丸方形を呈し、長軸1.83m、短軸1.39m、深さ25cmを測る。埋土はI: 焼土と炭化物を含む黄色シルト、II: Iに0.5～3cm大の小礫を含む。土師器細片が10点ほど出土しているが、図示できるものはない。

SK4 (Fig.6)

調査区南部に位置する。長楕円形を呈し、長軸3.29m、短軸1.22m、深さ15cmを測る。埋土はI: 炭化物を含んだ黄シルト、II: Iに0.5～3cm大の小礫を含む。北東隅の壁にへばりついて東播磨系羽釜(2)が出土している。他に土師器細片が出土している。

SK5 (Fig.6)

調査区南部に位置する。円形を呈し、長軸0.87m、短軸0.79m、深さ12.8cmを測る。埋土は黄茶褐色シルトである。SK10と接している。同様の土坑が北に3基(SK8～10)数珠繋ぎで配されている。埋土も共通しており同時に掘られたものと考えられる。

SK10 (Fig.6)

調査区南部に位置する。円形を呈し、長軸0.8m、短軸0.73m、深さ13.8cmを測る。埋土は黄茶褐色シルトである。土師器細片2点出土している。

表1 2-1区土坑法量一覧

土坑番号	平面形態	断面形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	備考
SK1	隅丸方形	船底形	1.38	0.95	9.2	
SK2	不整形	U字形	3.24	2.28	13.6	
SK3	隅丸方形	船底形	1.83	1.39	25	
SK4	楕円形	船底形	3.29	1.22	15	
SK5	円形	船底形	0.87	0.79	12.8	
SK6	不整楕円形	逆台形	1.09	0.64	44.1	
SK7	隅丸方形	船底形	0.87	0.69	6.5	
SK8	楕円形	逆台形	0.84	0.73	14.9	
SK9	不整隅丸方形	逆台形	0.94	0.75	9.9	
SK10	円形	逆台形	0.8	0.73	13.8	
SK11	円形	船底形	1.09	1.05	30.5	
SK12	隅丸方形	船底形	1.09	0.73	7.2	
SK13	不整楕円形	逆台形	1.4	0.78	15.5	
SK14	隅丸方形	船底形	1.34	1.14	10.2	
SK15	隅丸方形	船底形	1.05	0.99	10.2	
SK16	長楕円形	船底形	2.98	1.53	18.6	
SK17	楕円形	船底形	2.17	1.35	20.8	
SK18	楕円形	船底形	1.53	0.83	18.7	
SK19	隅丸方形	船底形	2.15	1.36	20.3	
SK20	楕円形	船底形	1.42	0.92	12.6	
SK21	隅丸方形	逆台形	1.45	0.74	33.1	
SK22	隅丸方形	逆台形	0.95	0.71	12	
SK23	楕円形	逆台形	1.26	0.82	9.8	
SK24	楕円形	船底形	1.05	0.89	8.7	
SK25	楕円形	船底形	1.87	0.97	15.8	
SK26	円形	船底形	0.87	0.74	18.5	
SK27	円形	船底形	1.09	0.95	13	
SK29	楕円形	船底形	1.62	1.16	11.7	
SK30	隅丸方形	船底形	2.34	1.08	22.8	
SK31	隅丸方形	船底形	2.11	1.19	15.3	
SK32	隅丸方形	船底形	2.33	2.02	17.5	
SK33	楕円形	船底形	2.5	1.14	54.2	
SK34	楕円形	船底形	1.04	0.93	16.5	
SK35	隅丸方形	船底形	2.51	1.35	16.3	
SK36	楕円形	船底形	1.13	0.97	16.6	
SK37	隅丸方形	船底形	1.12	0.97	12.2	
SK38	隅丸方形	船底形	1.3	1.22	11.8	
SK39	隅丸方形	船底形	1	0.73	7.6	
SK40	楕円形	船底形	0.96	0.86	12.5	
SK41	隅丸方形	船底形	1.51	0.67	11.9	
SK42	楕円形	船底形	2.07	1.2	22.5	
SK43	楕円形	船底形	4.7	1.78	25 ~ 31.0	
SK44	隅丸方形	船底形	1.73	0.98	18.7	
SK45	楕円形	船底形	2.92	1.97	17.1	
SK46	楕円形	船底形	0.96	0.72	14.7	
SK47	楕円形	船底形	2.44	1.24	10.5	
SK48	不整形	船底形	1.64	0.91	10.3	
SK49	隅丸方形	船底形	1.69	1.94	25	
SK50	楕円形	船底形	1.67	1.08	10.4	
SK51	楕円形	船底形	3.03	1.32	14.6	
SK52	楕円形	U字形	2.36		8.7	
SK53	不整形	船底形	1.32	1.21	14.5	

SK15 (Fig.6)

調査区南部に位置する。隅丸方形を呈し、長軸1.05m、短軸0.99m、深さ10.2cmを測る。埋土は黄褐色シルトで、土師器細片と鍛冶滓が一点出土している。

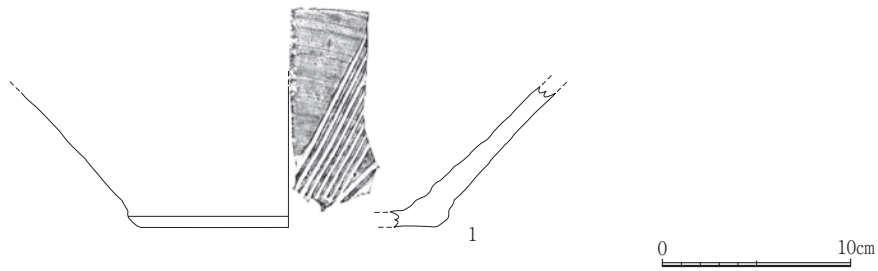
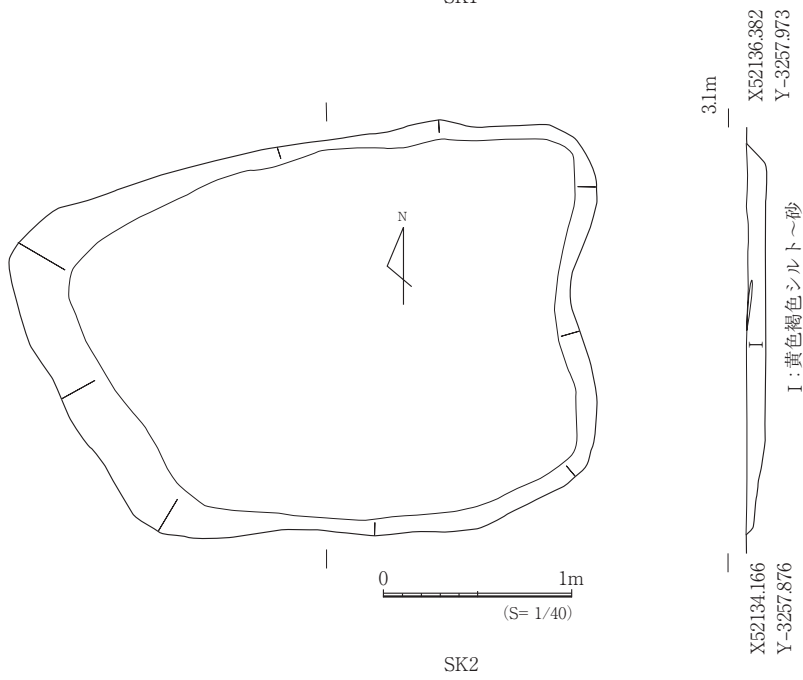
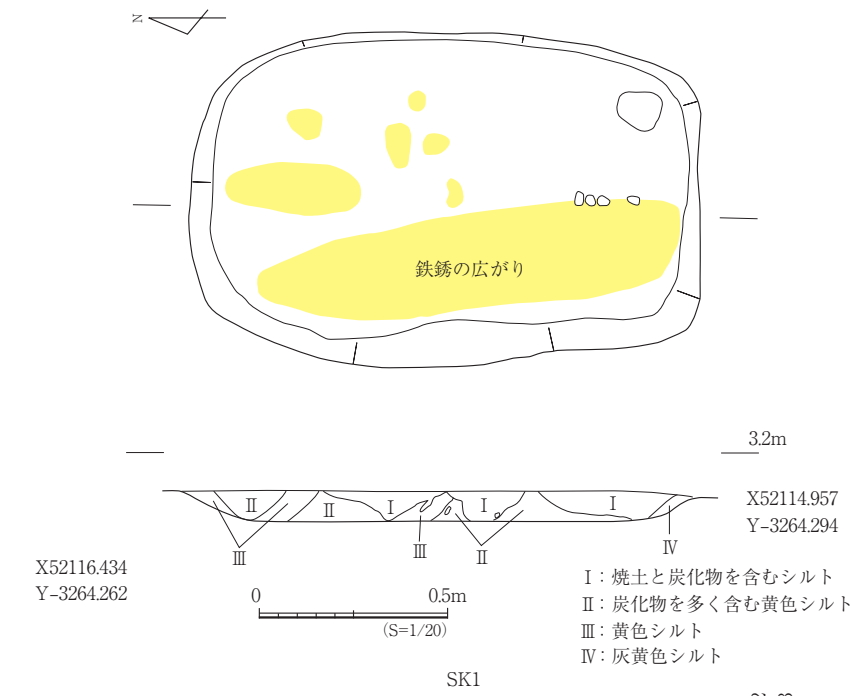


Fig.5 SK1・2 平面・セクション・出土遺物
SK2: 1 (備前播鉢)

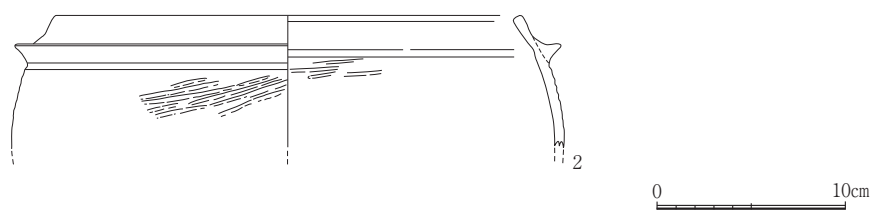
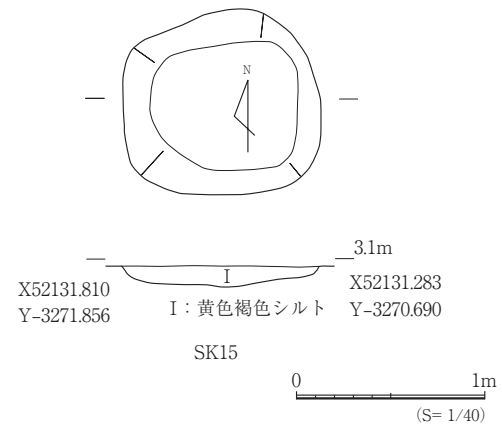
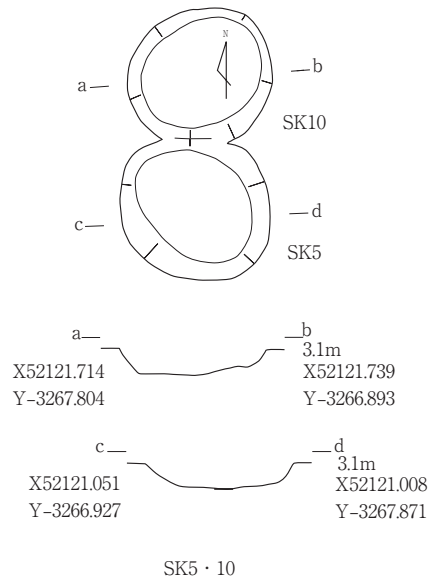
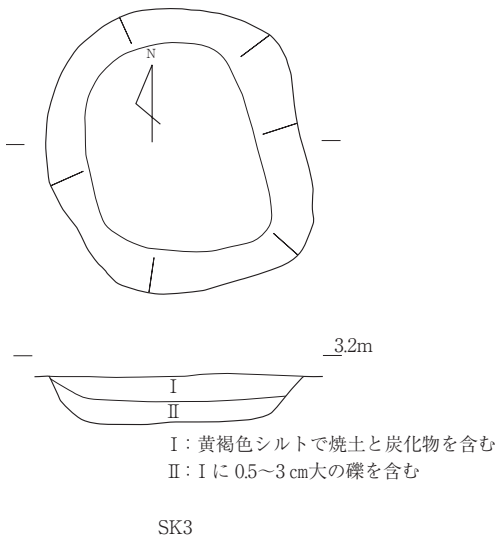


Fig6 SK3~5・10・15 平面・セクション・エレベーション・出土遺物
SK4:2 (東播系羽釜)

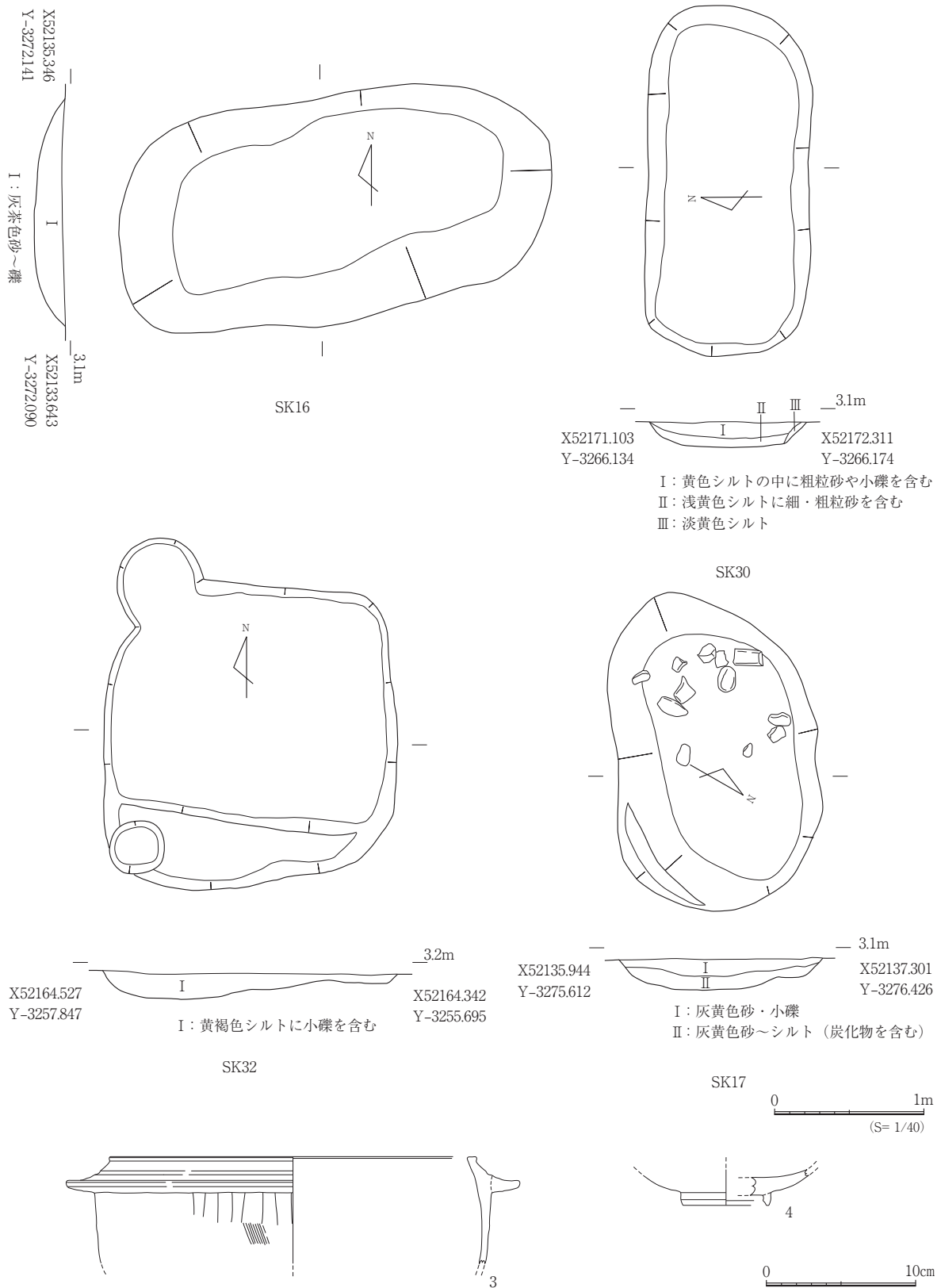


Fig.7 SK16・17・30・32 平面・セクション・出土遺物

SK16 : 3 (瓦質羽釜) SK32 : 4 (青磁碗)

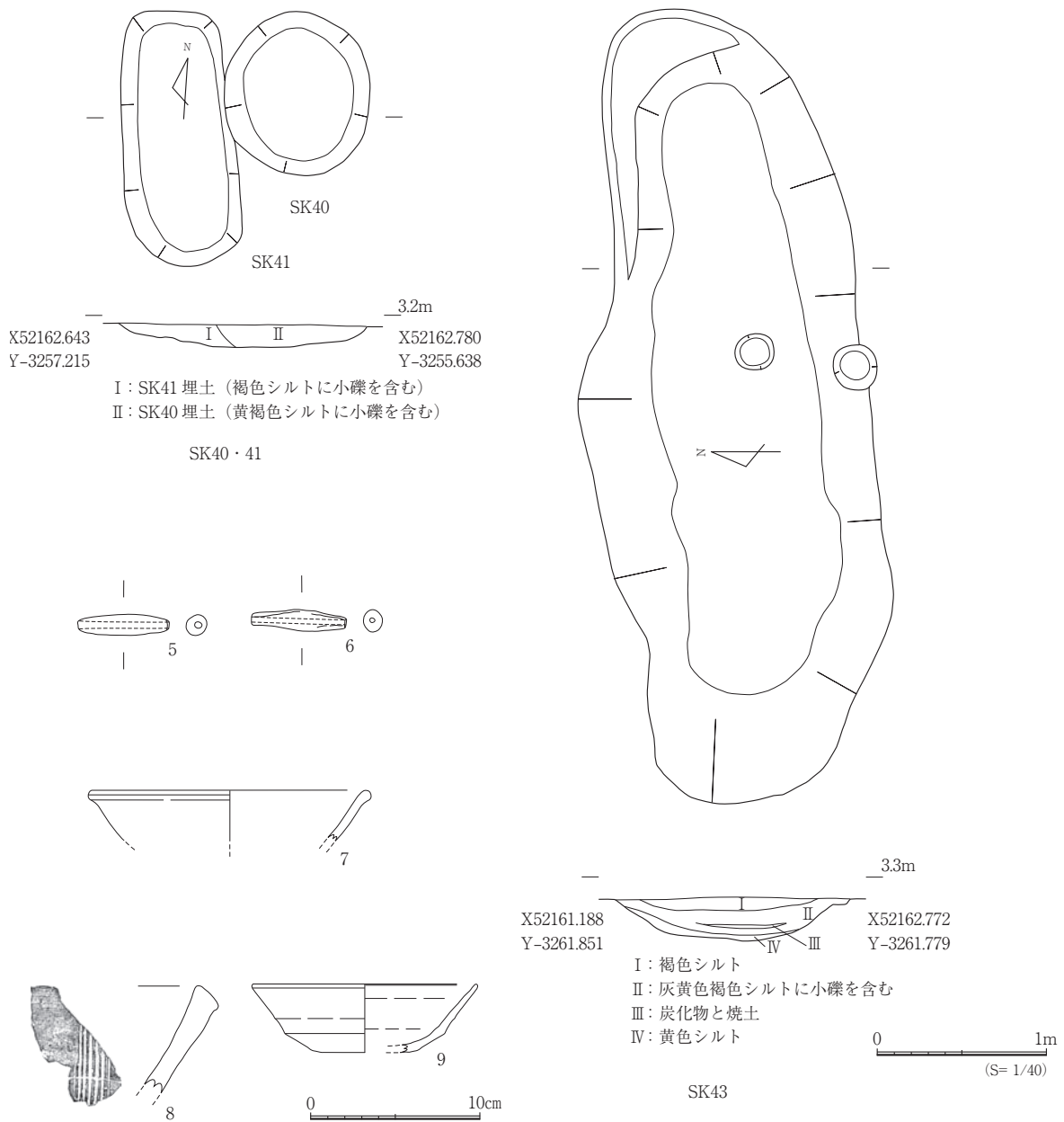


Fig.8 SK40・41・43 平面・セクション・出土遺物

SK41 : 5 (土錘)

SK43 : 6 (土錘)・7 (青磁碗)・8 (播鉢)・9 (土師器杯)

SK16 (Fig.7)

調査区南部に位置する。長楕円形を呈し、長軸2.98m、短軸1.53m、深さ18.6cmを測る。埋土は灰茶色砂～礫層である。床面より瓦質羽釜(3)が出土している。他に埋土中から土師器細片36点、瓦器細片7点、青磁細片1点、備前細片1点が出土している。

SK17 (Fig.7)

調査区南部に位置する。楕円形を呈し、長軸2.17m、短軸1.35m、深さ20.8cmを測る。埋土は I : 灰黄色砂～小礫、II : 灰黄色砂～シルトである。図示したように西側半分から10～20cm大の角礫が床

面から少し浮いた状態で出土している。礫の多くは被熱赤変している。埋土から土師器、瓦器、備前の細片が出土している。

SK30 (Fig.7)

調査区北部に位置する。隅丸方形を呈し、長軸2.34m、短軸1.08m、深さ22.8cmを測る。埋土はⅠ：粗粒砂や小礫を含む黄色シルト、Ⅱ：細・粗粒砂を含む浅黄色シルト、Ⅲ：淡い黄色シルトである。埋土中より土師器細片36点、瓦器細片6点が出土しているが図示できるものはない。

SK32 (Fig.7)

調査区北部の東寄りに位置し、南北でピットと切り合っているが先後関係は不明である。隅丸方形を呈し、長軸2.33m、短軸2.02m、深さ17.5cmを測る。埋土中から青磁碗底部(4)、土師器細片12点が出土している。

SK41 (Fig.8)

調査区北部の東寄りに位置しSK40に切られている。隅丸方形を呈し、長軸1.51m、短軸0.67m、深さ11.9cmを測る。埋土は小礫を含む褐色シルトで炭化物が混入している。埋土中から土師器土錘(5)や土師器や瓦器細片が出土している。

SK43 (Fig.8)

調査区北部に位置する。隅丸方形を呈し、長軸1.83m、短軸1.39m、深さ25cmを測る。楕円形を呈し、長軸4.7m、短軸1.78m、深さ20～30cmを測る。埋土はⅠ：褐色シルト、Ⅱ：小礫を含む灰黄褐色シルト、Ⅲ：炭化物と焼土、Ⅳ：黄色シルトである。青磁碗(7)、陶器播鉢(8)、土師器杯(9)、土師質土錘(6)、硯細片、瓦器細片、鍛冶滓などが出土している。7は上田分類のD類に属する。

SK45 (Fig.9)

調査区北部に位置する。楕円形を呈し、長軸2.92m、短軸1.97m、深さ17.1cmを測る。埋土はⅠ：小礫、粗粒砂を含む灰褐色シルトで炭化物が帯状に堆積する。Ⅱ：黄色シルトである。鎬蓮弁を有する青磁碗細片(10)、備前甕口縁部(11)が出土している。

SK50 (Fig.9)

調査区北部の東寄りに位置する。楕円形を呈し、長軸1.67m、短軸1.08m、深さ10.4cmを測る。埋土は円礫を含む灰褐色シルトである。碁笥底の染め付け皿(12)が出土している。明代の青花で外面には芭蕉文が見られる。当調査区で染め付けが出土した唯一の土坑である。

② 溝

SD1 (Fig.10)

調査区の北東隅から主軸をほぼ南北方向に取っているが、現代の水路に切られている。確認延長15m、最大幅は2m、深さは南部で30～40cmを測る。埋土は粗粒砂、小礫の入ったシルトである。遺物は南部のⅣ A125グリッド付近から出土している。龍泉窯系青磁碗(13)、同盤(14)、備前播鉢(15・17・18)、東播磨系捏鉢(16)、瓦質風炉(19)、同羽釜(20～22)の他に、土師器や瓦器細片が多く出土し、常滑の細片も一点見られる。青磁碗(13)は上田分類D類、備前播鉢(17)は器高が高くⅢ期の範疇に属するものである。

SD2 (Fig.11・12)

SD1の西隣を平行して南北方向に走る。南は現代の水路に切られており、確認延長33mを測る。最大幅は中程にあり1.4mを測り、南北では幅を減じている。深さも最大幅付近が最も深く30～40

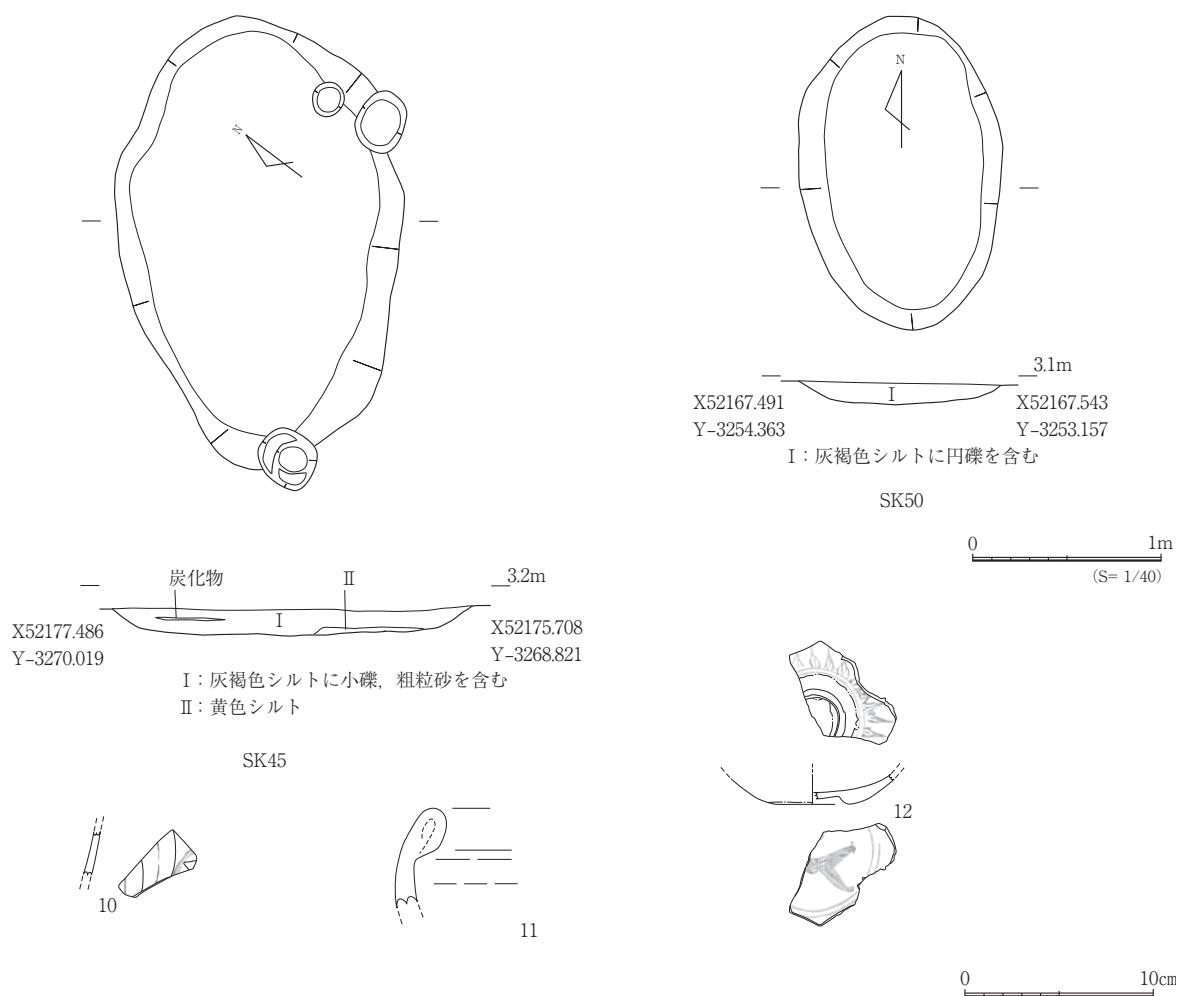


Fig.9 SK45・50 平面・セクション・出土遺物

SK45：10（青磁碗） 11（備前甕）

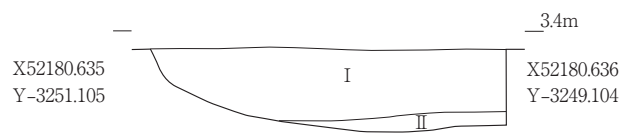
SK50：12（染付皿）

cmを測り、南北では浅くなっている。埋土は明黄褐色シルトで円礫を多く含んでいる。図示したように中央部において集石が見られた。拳大から人頭大の礫が投げ込まれたような状況を呈している。礫は床面にほぼ接していることから礫投入後にSD2は埋没したものである。これらの礫のほとんどは被熱赤変している。

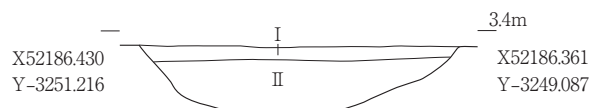
遺物は、床面、埋土中、集石中から出土している。床面からは瓦質羽釜(31・32)、硯(34)、砥石(33)を図示し得た。硯は頁岩製で、背部は剥離欠損している。砥石は細粒砂岩製で四面に使用面が認められる。集石中からは東播磨系捏鉢(29)が出土している。埋土中からは、龍泉窯系青磁碗(23～25)、東播磨系捏鉢(26)、備前播鉢(27・28)、瓦質茶釜(30)が出土している。23は上田編年のD類、24は見込みに陽刻文、25は外面に太筋の蓮弁文、見込みは蛇の目状に釉ハギ、高台脇にも圈線が見られる。この他、土師器、瓦器、龍泉窯系青磁、備前の細片が多く出土しており、鍛冶滓2点、軽石も1点出土している。

SD3 (Fig.13)

調査区北部の中央に鉤状に展開する溝状遺構である。確認延長は南北方向11.2m、東西方向5mの

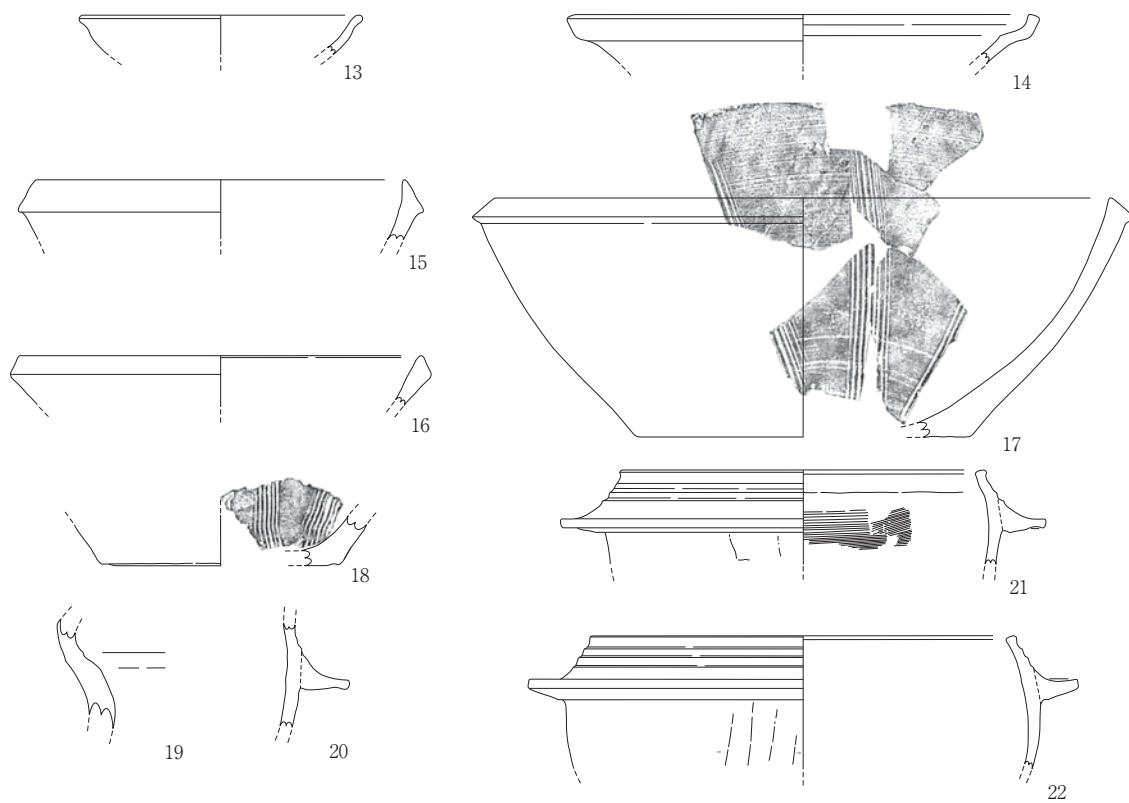


I : 明黄褐色シルトに小礫を含む
 II : 灰黄褐色シルトに粗砂粒と礫を含む



I : 浅黄色シルトに小礫を含む
 II : にぶい黄色シルトに小礫を含む

0 1m
 (S= 1/40)



0 10cm

Fig.10 SD1 セクション・出土遺物

- 13 (青磁碗) 14 (青磁盤) 15・17・18 (備前播鉢)
 16 (東播系捏鉢) 19 (瓦質茶釜) 20~22 (瓦質羽釜)

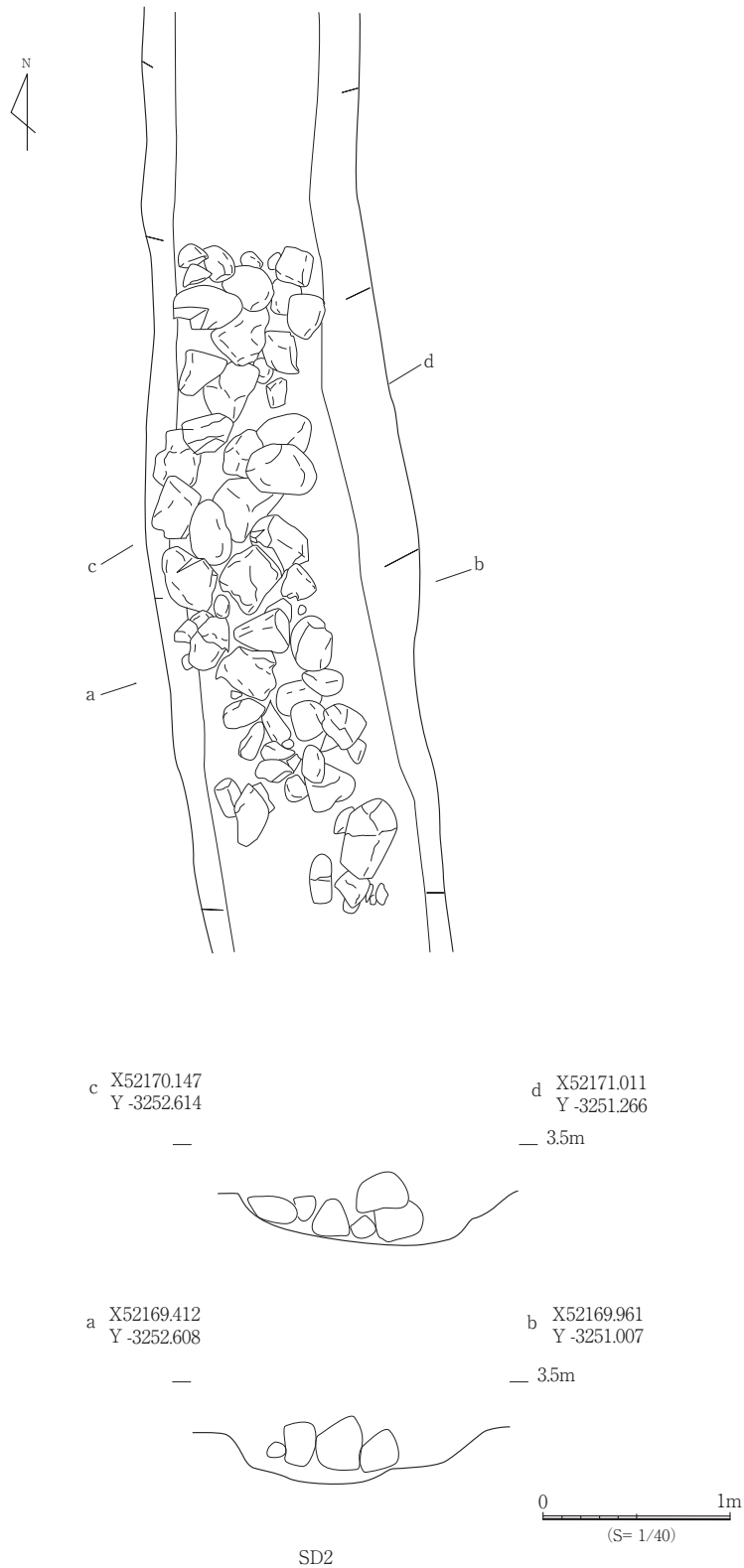


Fig.11 SD2 集石

計16.2mを測る。精査したが両端部を確認することができなかった。幅1.0m前後、深さ10～20cmを測る。埋土は黄褐色シルトに炭化物や焼土が含まれている。遺物は土師器杯(35)、土師質土錘

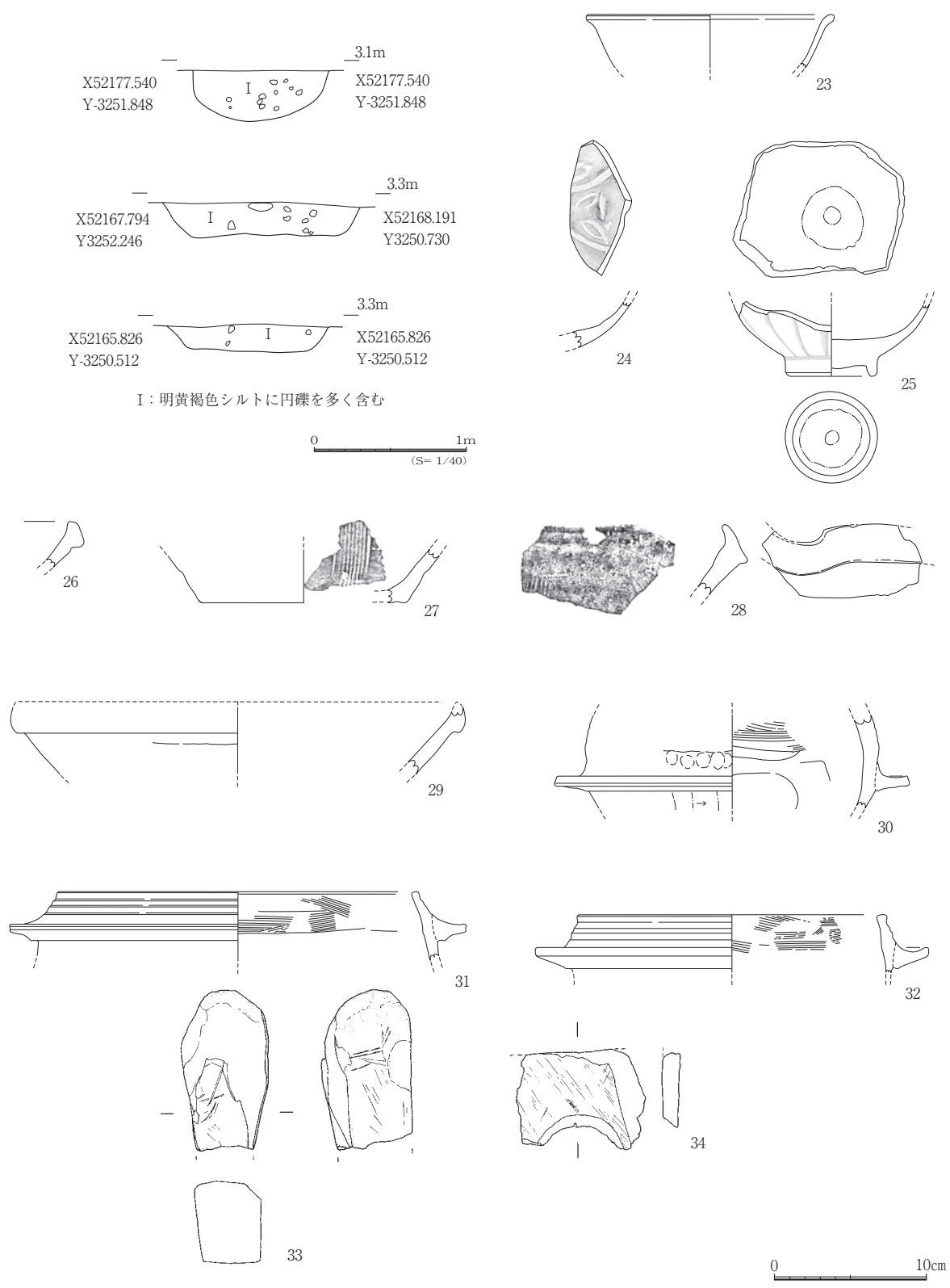


Fig.12 SD2 セクション・出土遺物

23~25 (青磁碗) 26・29 (東播系捏鉢) 27・28 (備前播鉢)
 30 (瓦質茶釜) 31・32 (瓦質羽釜) 33 (砥石) 34 (硯)

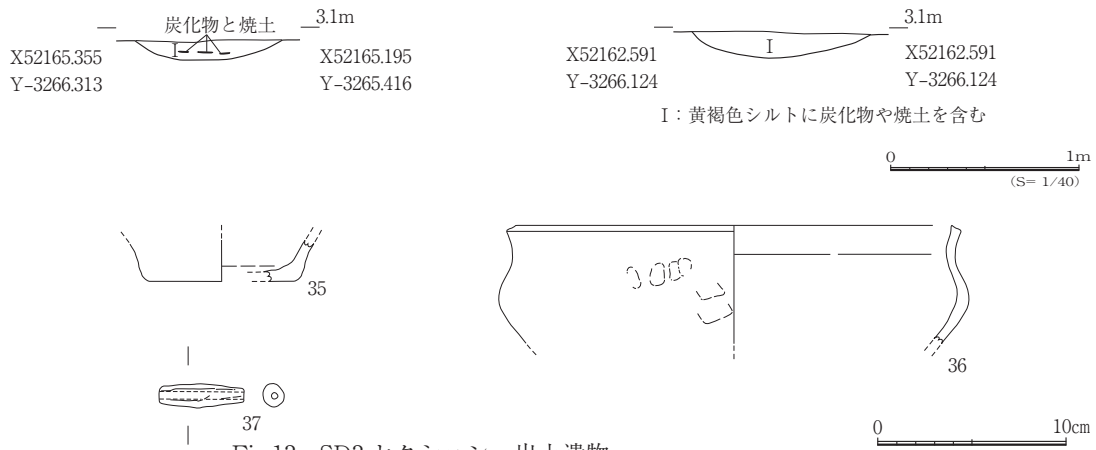


Fig.13 SD3 セクション・出土遺物

35 (土師器杯) 36 (瓦質鍋) 37 (土錘)

(37)、瓦質鍋(36)を図示した。この他土師器や瓦器の細片、備前細片が出土している。

③ ピット出土の遺物(Fig.14)

当調査区では500個以上のピットを検出している。これらの多くは建物の柱穴と考えられるが、建物を復元することはできなかった。106個のピットから何らかの遺物が出土している。土師器杯類を中心に瓦器や土師器・瓦質の煮沸具などが見られるが図示できたものは16点である。

P6: 床面から瓦質羽釜(51)が出土している。断面三角形のしっかりした鑊を持ち、上胴部外面は左から右方向の削りが見られる。

P8: 埋土中から備前播鉢(46)が出土している。内傾気味の口縁部が立ち上がり、内外面丁寧な横ナデ調整がなされている。

P14: 埋土中から土師器杯(42)が出土している。体部下半で屈曲して立上がる。ロクロ成形である。

P17: 埋土中から東播磨系羽釜(48)が出土している。口縁部下に断面方形の鑊を持つ。胴部外面は右上がりの叩きが見られる。外面は煤けている。

P31: 埋土中から土師器杯底部(39)が出土している。

P32: 土錘(52)が出土している。

P67: 龍泉窯系青磁碗の口縁部片(44)が出土している。外面細描蓮弁を配している。

P68: 埋土中から東播磨系羽釜(49)が出土している。口縁部は直立し断面三角形のしっかりした鑊が付く。胴部が外面右上がり叩き、内面はハケ調整が施されている。

P80: 土師質の香炉であろうか(43)。断面方形の短脚が2個まで確認できる。精土を用い厚い作りである。

P84: 土師器杯底部(41)が出土している。

P86: 埋土中から瓦質播鉢(45)が出土している。内面に条線が見られ外面は剥離している。

P88: 埋土中から軽石(53)が出土している。一側縁が平坦面をなしており使用面と考えられる。49.5gである。

P93: 瓦質鍋口縁部(50)が出土している。「く」字状に屈曲する口縁部である。

P97: 備前甕底部(47)が出土している。

P102: 土師器杯底部(40)が出土している。糸切り底である。

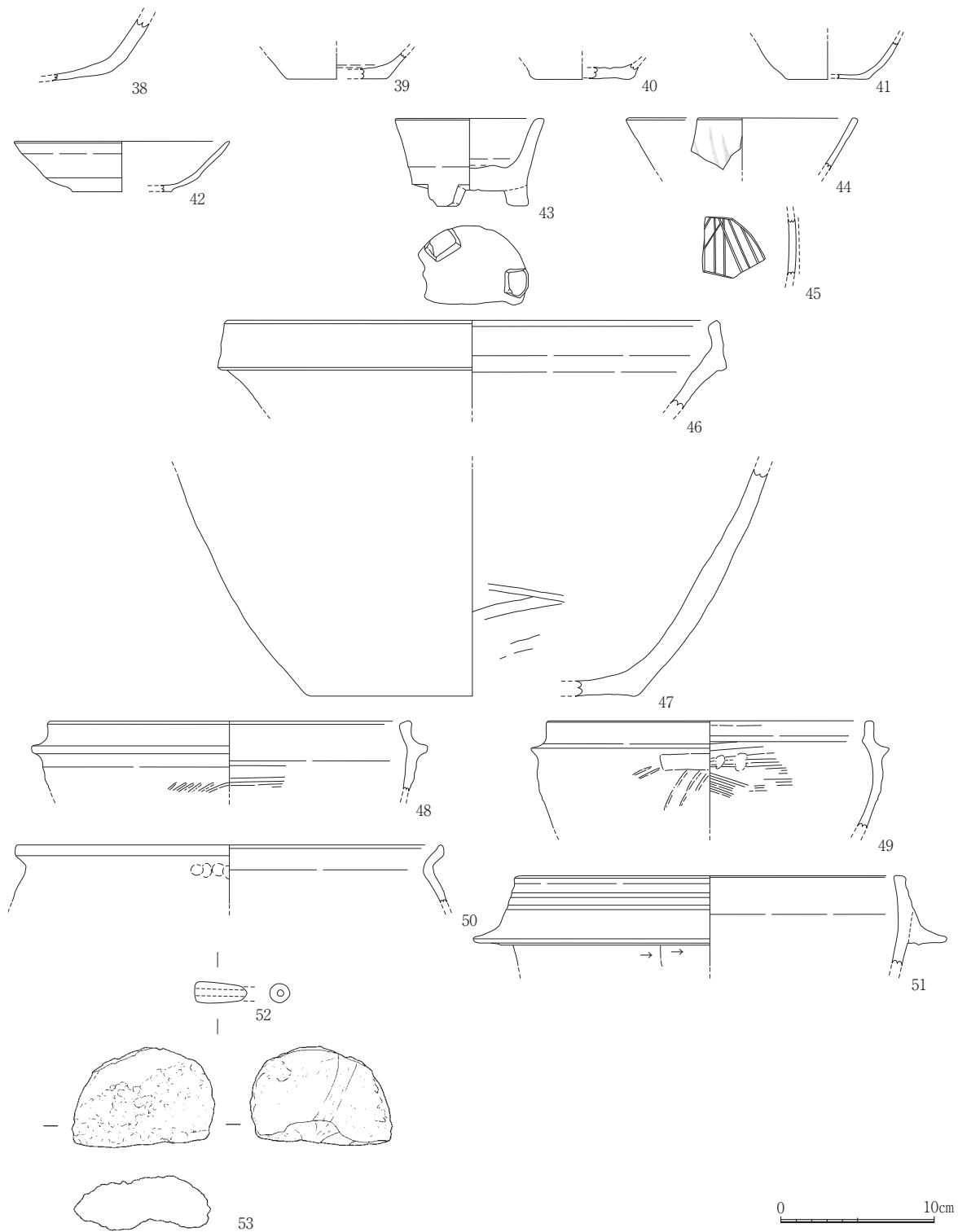


Fig.14 ピット出土遺物

P6 : 51 (瓦質羽釜) P8 : 46 (備前播鉢) P14 : 42 (土師器杯) P17 : 48 (東播系羽釜)
 P31 : 39 (土師器杯) P32 : 52 (土錘) P67 : 44 (青磁碗) P68 : 49 (東播系羽釜)
 P80 : 43 (土師質香炉) P84 : 41 (土師器杯) P86 : 45 (瓦質播鉢) P88 : 53 (軽石)
 P93 : 50 (瓦質鍋) P97 : 47 (備前甕) P102 : 40 (土師器杯) P103 : 38 (瓦質鍋)

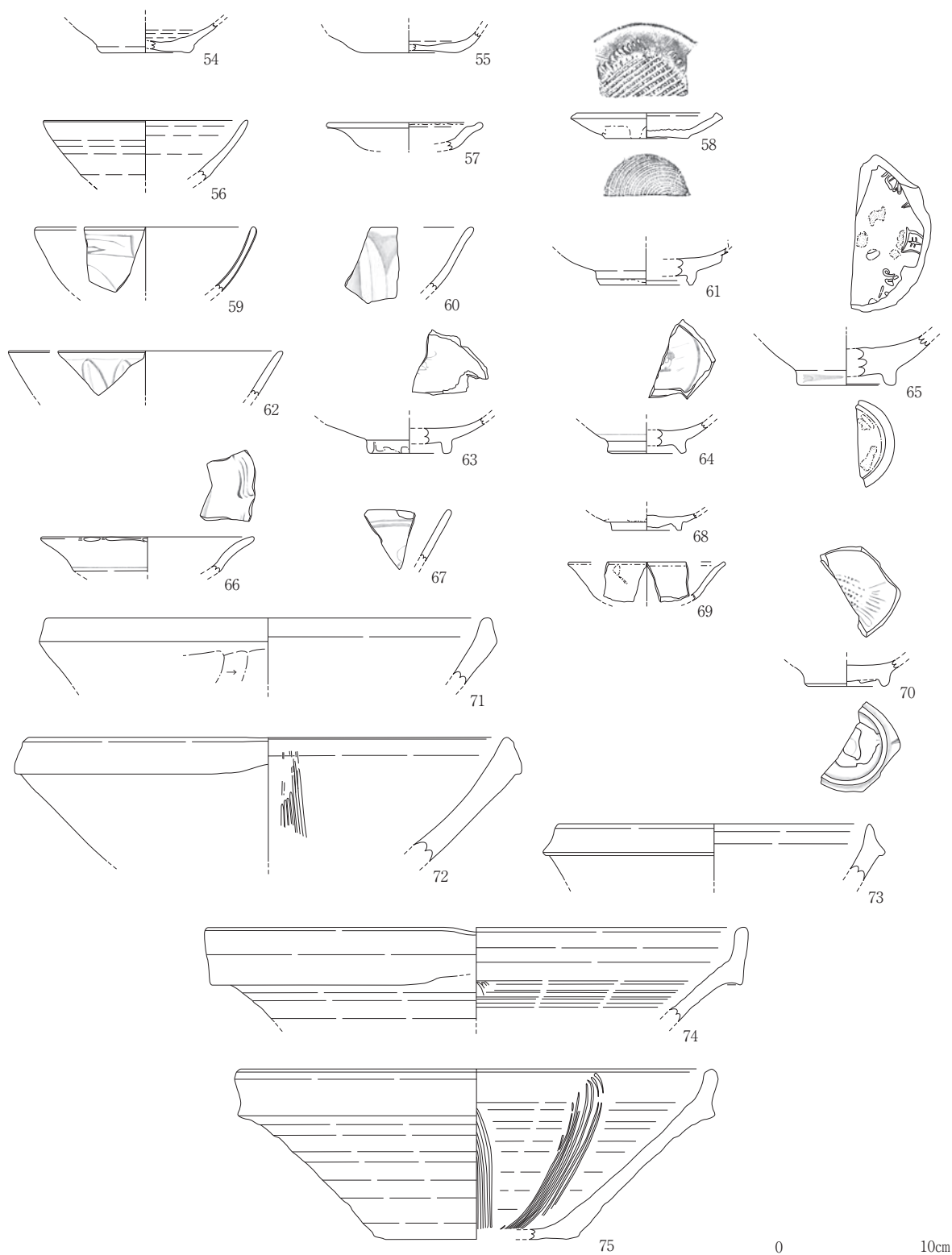
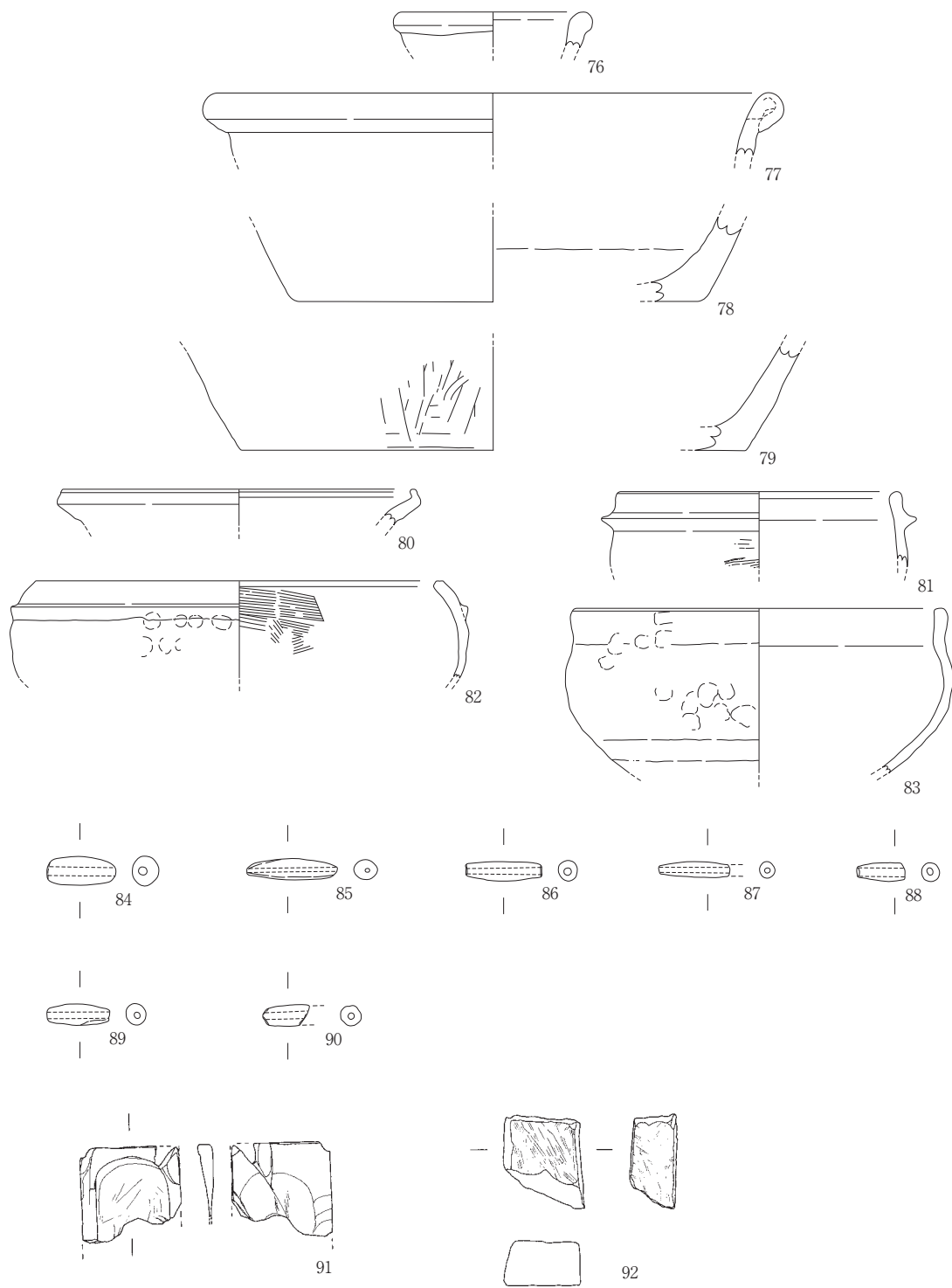


Fig.15 包含層出土遺物 1

54~56 (土師器杯) 57・58 (瀬戸皿) 59~63・65・67・70 (青磁碗)

66 (青磁皿) 64 (近世染付) 68・69 (白磁皿) 71 (瓦質鉢) 72~75 (備前播鉢)



0 10cm

Fig.16 包含層出土遺物 2

76 (備前壺) 77~79 (備前甕) 80 (紀伊型甕) 81 (東播系羽釜)
 82 (瓦質羽釜) 83 (瓦質鍋) 84~90 (土錘) 91 (硯) 92 (砥石)

P103:瓦質鍋の底部片(38)で、外面は煤けている。

④ 包含層出土の遺物(Fig.15・16)

土師器杯類を中心に備前や貿易陶磁器が出土しているが、細片が多く図示できたものは39点(54～92)である。

土師器杯(54～56)：全てロクロ成形で糸切りである。

瀬戸皿(57・58)：57は折縁皿で外面は無釉である。58はおろし皿で、外面にも黄緑色の釉がかかり、底部は糸切りである。

青磁碗・皿(59～63・65～67・70)：全て龍泉窯系である。59は雷文帯、60・62は鎬蓮弁を有する。67の内面には片切り彫りによる2条の圈線が見られる。61・63・65・70は底部である。63・70の見込みには印刻文が施文される。65は見込みに陽刻文が見られ目跡が残っており、高台内面まで施釉されている。66は稜花皿である。

近世染付(64)：「ハ」字状の高台を有し暈付は斜めに削っている。内外に1条の圈線が見られる。

白磁皿(68・69)：68は小皿底部で高台脇まで施釉、見込みは丸く釉を掻きとっている。69は口禿げの皿である。

瓦質鉢(71)：精緻な胎土で外面は左から右方向に強い削りが見られる。

備前播鉢(72～75)：72・73は幅の狭い口縁部が内傾して立ち上がり、74・75は幅広い口縁部が垂直に立上がる。

備前壺・甕(76～79)：76は壺口縁部、77は甕口縁部、78・79は底部である。

紀伊型甕(80)：口縁部端部を摘み上げる特徴を持つ。外面は煤けている。搬入品であろう。

東播磨系羽釜(81)：断面三角形のしっかりした鋳を持ち、口縁部はやや肥厚、体部外面は平行叩きが施される。

瓦質羽釜(82)：口縁部は強く内湾し断面三角の突帯を貼付する。

瓦質鍋(83)：直立する口縁部にボール状の胴部を有する。外面は指頭圧痕が顕著である。

土錘(84～90)：すべて管状土錘である。

硯(91)：海側が大きく欠損している。使用により最も薄いところは1mm程に擦り減っている。

石材は頁岩である。

砥石(92)：大きく欠損しているが、四面を使用している。砂岩である。

(3) 小結

2-1区の遺構は調査区の東部に集中してみられ西部には認められない。遺構は南北に帯状に展開するが、調査区のほぼ中心部、すなわち南北ラインの131・132付近は遺構の分布が稀薄となっており、土坑、ピットの分布は大きく南部と北部に分かれる。

南部には土坑が23基(SK1～23)存在し、大きさ平面形も様々であるが、深さは10～30cm前後までで深いものはない。土坑の性格を明らかにし得ないが、SK1に典型的に見られたように鍛冶滓片や焼土塊を埋土中に含んだ土坑が4基(SK1・2・8・15)見られる。これらはSK1で触れたように小鍛冶に伴って生じたものである。調査区の小字名「カチヤ屋敷」に通じるものであり興味深い。時期の決めてとなる遺物が少ないが、SK4出土の東播磨系羽釜(2)やSK16の和泉・河内型の瓦質羽釜(3)などから15世紀代の遺構として捉えることができよう。

北部は南部よりも少し遺構の分布密度が高く、二条の溝が南北方向に走っている。ここで鍛冶滓

はSK43とSD2から鍛冶滓が少量出土している。土坑からの遺物は総じて僅少であるがSK50からは明の染付けが出ている。遺構出土の染付けは唯一の例である。SD1とSD2は出土遺物を見る限りでは共に15世紀代と考えられるがSD2の中央部には被熱赤変した大小の角礫が集中して見られる。2009年度に報告したS区SD30と類似した現象である。時期的にも一致する。SD3も遺物は少ないが15世紀代と捉えることができよう。ピット出土の遺物も15世紀代のもので占められている。包含層出土の貿易陶磁器には、太宰府分類の龍泉窯系I 5bなど古手のものも見られるが、雷文帯の碗や稜花皿に見られるように15世紀以降のものが多く見られ、播鉢や貯蔵形態に備前が目立ち、瀬戸のおろし皿などが加わっている。中世前期の遺物が目立ったS区、NW・NE区とは大きな違いがある。S区、NW・NE区からは新居城山裾部に古代～中世前期の遺構が見られ、中世後期へと継続することが確認されているが、後期には遺物、遺構とも減少している。2-1地区は後期に営まれた集落であり、当該期、前期の中心部から周辺部へと集落が拡散した可能性も考えられよう。

遺物で注目しておきたいのは硯である。包含層から1点(91)、SD2から1点(34)、図示できなかったがSK43からも1点、計3点が出土している。当該期、一つの遺跡からの出土量としては県下も多い。文字を頻繁に使用することが求められる生活のあったことの証である。小鍛冶という手工業生産的な空間の位置付けとともに中世集落形成と展開を知る上で重要な資料となろう。

表2 2-1 区土器観察表①

遺物番号	機種	出土地点 層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	特徴	備考
1	備前揃鉢	SK 2 埋土		(7.5)	15.6	精土	7条単位の条線、内外丁寧な横ナデを施す。	
2	土師質釜	SK 4 埋土	24.6	(7.0)		石英、長石、赤色風化礫を含む	口縁部は大きく内傾、口唇部は面取り、断面三角形の大きな罫、胴部外面は右上がりの叩き。	掃磨型釜
3	瓦質羽釜	SK16 埋土	24.4	(7.5)		石英、雲母粒を含む	口縁部は強く内傾して端部は短く垂直に立上がる。罫幅1.5cm 端部面取る。上胴部外面削り、外面は激しく焼けている。	和泉・河内型
4	青磁碗	SK32 埋土		(2.0)	5.7	やや粗い胎土	高台の下半は内外方向から削る。透明度のある釉、貫入あり。	龍泉窯系
5	土錘	SK41 埋土				精土	長さ5.5cm、径1.2cm、孔径0.35cm、重さ6.7g	
6	〃	SK43 埋土				精土	長さ5.6cm、径1.3cm、孔径0.3cm、重さ6.3g	
7	青磁碗	〃	16.3	(3.0)		やや粗い胎土	口縁部外反。濁りのある釉。	上田分類D類
8	備前揃鉢	〃				粗粒砂を多く含む	7条単位の条線、内外横ナデ調整を施す。	
9	土師器杯	〃	13.2	(4.0)	6.4	赤色風化礫他の粗粒砂を多く含む	回転台成形、体部下位で屈曲して立上がる。	
10	青磁碗	SK45				精緻な胎土	外面竇蓮弁文。	太宰府分類 I 5b類
11	備前甕	〃				石英その他の粗粒を含む	玉縁口縁、内外面横ナデ、外面自然釉。	
12	明青花	SK50 埋土		(1.6)	3.6	白色精緻	碁笥底。外面芭蕉文。	
13	青磁碗	SD 1 下層	14.6	(2.1)		やや粗い胎土	濁りのある釉、貫入あり。	上田分類D類
14	青磁盤	SD 1	23.9	(2.6)		〃	濁りのある釉。	
15	備前揃鉢	SD 1 下層	19.4	(3.2)		粗粒砂を多く含む	内外面横ナデ調整。	
16	東播系 捏鉢	〃	(21.2)	(2.7)		〃	〃	
17	備前揃鉢	SD 1 埋土	32.6	12.7	17.4	石英粗粒砂を多く含む	8本単位の条線。口縁部の拡張が始まりかけている。器高が高い。内外面横ナデ調整。内面下半は激しく摩耗。	Ⅲ期の範疇に入る
18	〃	SD 1 下層		(2.7)	12.6	〃	内面は激しく摩耗。	
19	瓦質風炉	SD 1 埋土				石英、長石、雲母を含む	頸部下端に細い隆帯を削り出している。内外面横ナデ調整、外面下地に横方向のハケ調整が見られる。	
20	瓦質羽釜	〃				石英、長石などの粗粒砂を含む	口縁部外面横ナデによる3本の凹線、罫幅2.5cm、胴部外面横方向削り、外面煤け。	和泉・河内型
21	〃	〃	19.2	(5.0)		チャートの粗粒砂、小礫を含む	口縁部外面横ナデによる3本の凹線、罫幅2.5cm、胴部外面横方向削り、内面横ハケとナデ調整、外面煤け。	〃
22	〃	〃	22.4	(7.1)		石英、長石細粒	口縁部外面横ナデによる3本の凹線、罫幅2.0cm、胴部外面横方向削り、内面横ナデ調整、外面煤け。	〃
23	青磁碗	SD 2検面 直下壁	16.0	(3.5)		灰色精緻	口縁部外反、透明度のあるオリープ灰色。	上田分類D類
24	〃	SD 2 埋土				やや粗い胎土	見込みに陽刻文あり。	
25	〃	〃			5.5	灰白色精緻	外面太筋の蓮弁、見込みを蛇の目状に釉剥ぎ、外底も蛇の目状に釉剥ぎしている。	
26	東播系 捏鉢	〃				石英など粗細粒を含む	口縁部外面は黒灰色の自然釉。	
27	備前揃鉢	〃			13.6	石英粗粒砂を多く含む	9本の条線、内面は著しく摩耗。	
28	〃	〃				長石、石英など粗粒砂を含む	胴部外面に重ね焼痕あり。	
29	東播系 捏鉢	SD 2 集石		(4.4)	29.8	石英他の砂粒	口縁部外面は黒灰色の自然釉。	
30	瓦質茶釜	SD 2 検出面		(6.2)		石英、長石など粗粒を多く含む	上胴部は大きく内湾、罫幅2cm、下胴部外面は左→右の強い尻刷り。胴部上内面は横ハケ。	
31	瓦質羽釜	SD 2 床面	23.3	(4.5)		石英他の粗粒砂を多く含む	口縁部外面横ナデによる3本の凹線、罫幅2.0cm、胴部外面横方向削り、内面横ハケ+横ナデ調整、外面煤け。	和泉・河内型

表3 2-1区土器観察表②

遺物番号	機種	出土地点 層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	特徴	備考
32	瓦質羽釜	SD 2 床直上	20.2	(3.8)		石英、長石など細粒砂を含む	口縁部外面横ナデによる3本の凹線、鈔幅2.0cm、胴部外面横方向削り、内面横ハケ調整、内外面は炭化物が付着。	
35	土師器杯	SD 3		(2.2)	7.6	精土	内外面摩擦が激しい。	
36	瓦質鍋	〃	23.0	(6.3)		精土	口縁部内外横ナデ調整、口唇部は凹状を呈する。胴部外面は指頭圧痕。	
37	土錘	〃				精土	長さ4.5cm、径0.8cm、孔径0.3cm、重さ5.2g	
38	瓦質鍋底	P103				精土	内外ナデ調整、外面煤ける。	
39	土師器杯	P31 埋土		(1.7)	6.4	精土	内外面横ナデ調整。外底糸切り。	
40	〃	P102		(1.0)	6.0	精土	摩擦が激しい。	
41	〃	P84		(2.5)	5.4	チャートの粗粒砂、小礫を含む	〃	
42	〃	P14 埋土	13.8	3.3	6.4	精土	体部下半で屈曲、内外横ナデ調整。	
43	土師器 香炉	P80 埋土	9.4	5.7	3.8	精土	方形の脚が2本まで確認できる。三脚の可能性ある。全体に厚い作り。	
44	青磁碗	P67	14.8	(3.4)		やや粗い胎土	外面に蓮弁状の文様、薄い作りである。	
45	瓦質播鉢	P86 埋土				精土	内面に条線を認める。外面剥離。	
46	備前播鉢	P 8 埋土	31.6	(5.8)		〃	内外面横ナデ調整。	
47	備前甕	P97 埋土		(14.8)	20.8	小礫を含む	外面縦、内面不定方向のナデ調整。	
48	土師質釜	P17	23.4	(4.6)		石英粒を含む	口縁部内外横ナデ調整、断面方形のしっかりした鈔を持つ。胴部外面右上がり叩き。外面煤ける。	播磨型釜
49	〃	P68 埋土	21.0	(7.0)		精土	口縁部内外横ナデ調整、断面三角形のしっかりした鈔を持つ。胴部外面右上がり叩き。外面煤ける。	〃
50	瓦質鍋	P93	27.5	(3.8)		精土	口縁部内外面四個ナデ調整。	
51	瓦質羽釜	P 6床	24.4	(5.9)		石英、長石など細粒砂を多く含む	口縁部外面横方向のナデ調整により凹線3条。鈔幅2cm。	
52	土錘	P32 埋土				精土	長さ(3.4cm)、径1.4cm、孔径0.4cm、重さ5.6g	
54	土師器杯	III Z - 128 下層		(2.0)	5.8	精土	摩擦が激しい。糸切り。	
55	〃	包含層		(1.5)	6.0	精土	内外面横ナデ調整。糸切り。	
56	〃	III X - 127 下層	13.4	(3.9)		精土	内外面横ナデ調整。	
57	瀬戸折皿	包含層	9.6	(1.8)		灰白色精緻	〃	
58	瀬戸 おろし皿	〃	9.1	1.7	5.5	黄白色でやや粗い胎土	口縁部端部三角形を呈する。糸切り。	
59	青磁碗	〃	14.2	(4.2)		やや粗い胎土	外面雷文帯、その下に幅広の蓮弁文。	
60	〃	〃				灰色精緻	外面蓮弁文。	太宰府分類 I 5b類
61	〃	〃		(2.5)	6.2	灰色やや粗い胎土	高台下半はV状に両側から削り出す。透明度のある薄い釉、貫入がある。	
62	〃	〃	17.8	(2.9)		灰白色精緻	外面蓮弁文。	太宰府分類 I 5b類
63	〃	〃		(2.3)	5.3	やや粗い胎土	見込みに陽刻文あり。高台外面にまで釉。	
64	近世 陶磁器皿	〃		(2.0)	4.6	白色精緻	見込みと高台脇に一条の圈線、見込み中央部に文様が見られる。	
65	青磁碗	〃		(3.3)	6.2	やや粗い胎土	見込みに陽刻文が描かれている。	

表4 2-1 区土器観察表③

遺物 番号	機種	出土地点 層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	特徴	備考
66	青磁 稜花皿	包含層	13.8	(2.3)		〃	内面に櫛描きが見られる。	
67	青磁碗	〃				精緻	口縁部内面に片切り彫りによる二条の圏線。	
68	白磁小皿	〃		(1.1)	4.6	やや粗い胎土	高台脇まで施釉、内底は釉掻き。	
69	白磁皿	〃	10.1	(2.6)		精緻	口禿げの皿である。	
70	青磁碗	〃		(1.7)	5.2	灰白色精緻	見込みに菊花の印刻文、高台内面まで全面施釉。	
71	瓦質鉢	〃	29.0	(4.4)		石英粒を多く含む	口縁部内外面横ナデ調整。体部外面は左→右の削り。	
72	備前播鉢	〃	31.3	(8.2)		石英、他の粗粒を多く含む	内外面横ナデ調整。条線は七条見られる。	
73	〃	〃	20.3	(3.7)		小礫を含む	内外面横ナデ調整。	
74	〃	〃	35.3	(6.2)		精土	口縁部が幅広く立上がる。内外面横ナデ調整。	
75	〃	〃	30.8	11.3	13.4	小礫を多く含む	条線は七条、内外面横ナデ調整。内面下半は使用により摩耗が激しい。	
76	備前壺	〃	10.9	(2.1)		小礫を含む	玉縁状の口縁部を有す。	
77	備前甕	〃	33.4	(3.8)		精土	内外面横ナデ調整。	
78	備前甕 底部	〃		(5.2)	24.8	精土	〃	
79	〃	〃		(6.3)	30.9	精土	内面横ナデ調整。外面縦ハケ調整。外底ハケ調整。	
80	土師器釜	〃	20.8	(2.2)		石英粒を多く含む	口縁端部上方に摘まみ上げ、内外面横ナデ調整。外面煤け。	紀伊型釜
81	土師質釜	〃	16.8	(4.6)		石英粒、赤色風化礫を多く含む	口縁部内外面横ナデ調整、断面三角形の鋳。	東播磨型
82	瓦質羽釜	〃	23.8	(5.9)		チャートの粗粒砂を含む	口縁部下に小さな三角突帯を巡らす。口縁部内外面横ナデ調整、内面には横方向のハケ調整あり。	
83	瓦質鍋	〃	22.2	(10.0)		精土	口縁部内外面横ナデ調整。胴部外面は指頭圧痕顕著。	土佐型
84	土錘	〃				〃	長さ4.2cm、径1.8cm、孔径0.5cm、重さ9.3g	
85	〃	〃				〃	長さ5.5cm、径1.4cm、孔径0.2cm、重さ7.4g	
86	〃	〃				〃	長さ4.6cm、径1.1cm、孔径0.3cm、重さ6.0g	
87	〃	〃				〃	長さ(4.4cm)、径1.0cm、孔径0.3cm、重さ2.6g	
88	〃	〃				〃	長さ(2.9cm)、径1.1cm、孔径0.3cm、重さ2.8g	
89	〃	〃				〃	長さ3.8cm、径1.3cm、孔径0.4cm、重さ4.9g	
90	〃	〃				〃	長さ(2.8cm)、径1.3cm、孔径0.4cm、重さ3.4g	

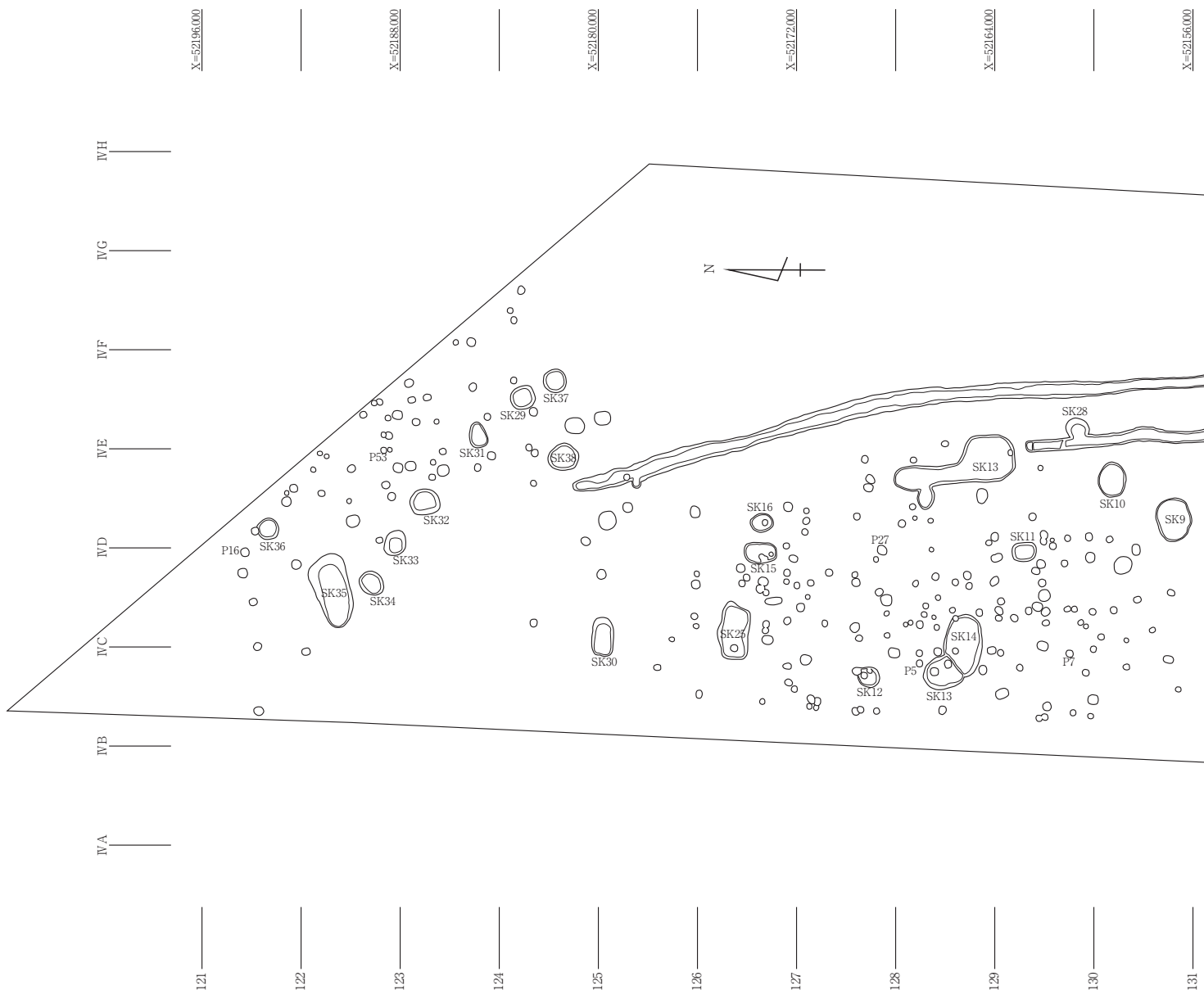
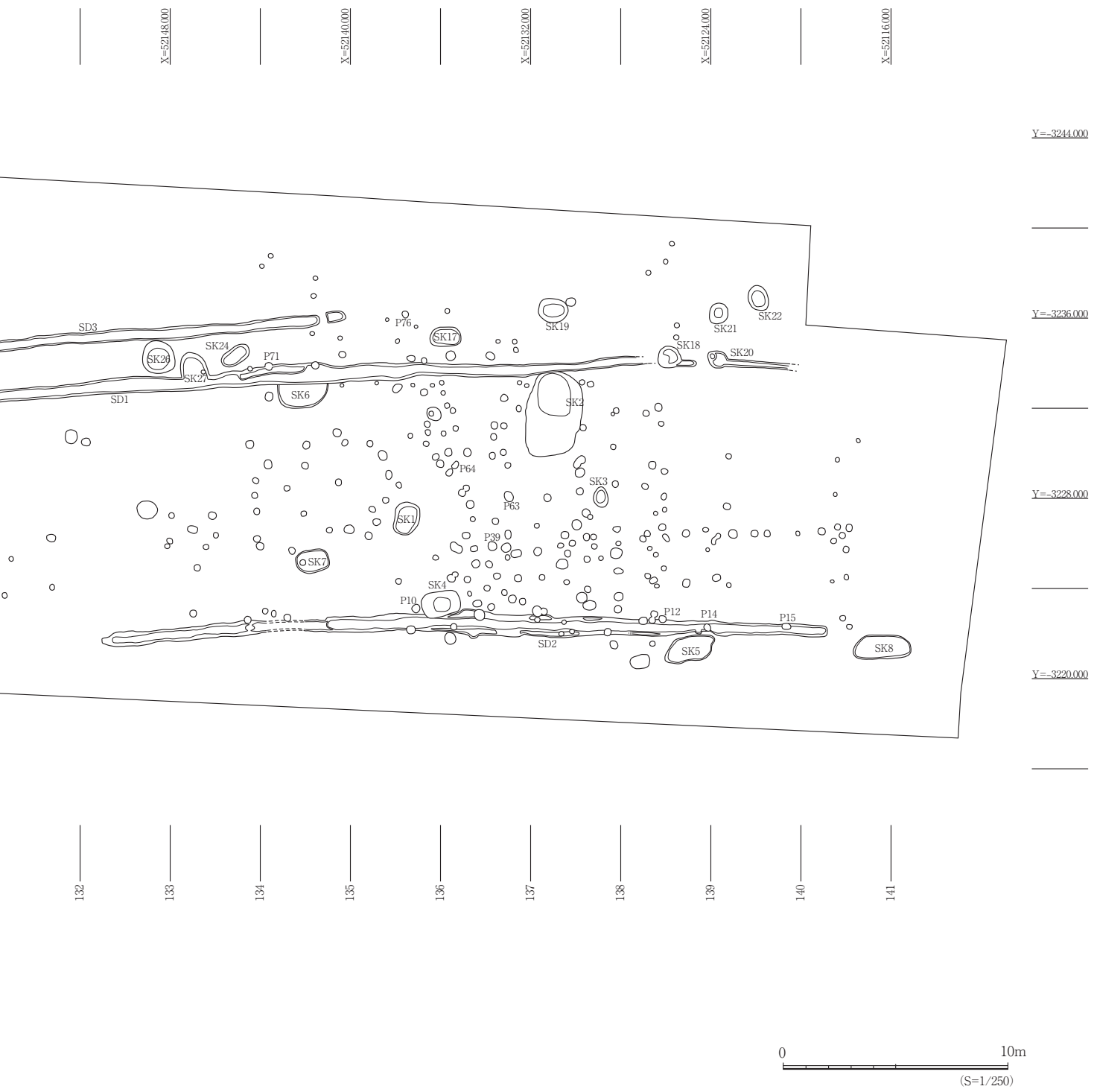


Fig.17 2-2



2区全体図

3 2-2区の調査

2-1と水路を挟んで東隣の調査区で、南北90m、東西22.5mを測る。試掘調査の結果から遺構が検出される東限で、ここからは仁淀川の氾濫原が広がり、近代初めに構築されたと考えられる旧堤防とほぼ接している。

(1) 基本層準(Fig.18)

I：耕作土、灰褐色の細砂に1～3cm大の礫を含む。

II：灰褐色細砂にマンガン粒を含む。層厚5～10cmである。

III：黄灰色細砂に小礫、粗粒砂を含む。層厚5～20cmである。中世の遺物包含層を形成している。

IV：黄茶色細粒砂で中世遺構検出面である。処どころに礫群が露出している。2-1区ではこのような礫群は見られなかった。

(2) 検出遺構と遺物

土坑38基、溝3条、ピット300以上を検出した。これらの内、土坑とピットは調査区の北部、中央部、南部の3箇所に集中し分布している。土坑については、主要なものについてのみ説明を加え、他のものは一覧表を参照にされたい。

① 土坑

SK1 (Fig.19・20)

調査区南部に位置する。隅丸方形を呈し、長軸1.46m、短軸1.17m、深さ19cmを測る。埋土は1～3cm大の礫が入った黄褐色シルトである。遺物は埋土や床面から土師器、瓦器、青磁、備前の細片が出土している。青磁底部(1)、備前播鉢口縁部(4)、同底部(6)を図示した。これら3点は床面出土である。

SK2 (Fig.19・20)

調査区南部に位置する。隅丸方形を呈し、長軸3.9m、短軸2.5m、床面は二段になっており、東側が深く掘られている。深さは西側で10cm、東側で26cmを測る。埋土は1～3cm大の礫を含んだ黄茶色シルトである。床面から備前大甕の破片が29点集中して出土している。その他、瓦器や土師器、青磁なども出土している。土師器杯底部(3)、青磁碗底部(2)、備前播鉢(5)、備前大甕(7)、東播系羽釜(9・10)、瓦質風炉(8)、同羽釜(11)を図示した。2は見込みに印花文を施し、外底は全面施釉後に釉を掻きとっている。8は鏝が剥離しているが、接合部にV字状の切り込みが見られる。

SK5 (Fig.19・20)

調査区南部西寄りに位置する。不整形を呈し、長軸2.24m、短軸1.15m、深さ6cmを測る。埋土は黄茶色シルトである。瓦質羽釜(12)が出土している。

SK7 (Fig.19) 調査区南部に位置する。隅丸方形を呈し、長軸1.48m、短軸1.0m、深さ6cmを測る。埋土は黄茶色シルトである。瓦器細片が少量出ているのみである。

SK8 (Fig.19・20)

調査区南部南端に位置する。楕円形を呈し、長軸2.57m、短軸1.06m、深さ11cmを測る。埋土は黄茶色シルトである。瓦質羽釜(13)が出土している。

SK13 (Fig.21)

調査区中央部に位置する。鉤型のプランを呈し、長軸4.96m、短軸1.9m、深さ9～12cmを測る。埋土は小礫を含む茶褐色シルトである。瓦質播鉢(14)、瀬戸瓶子(15)、瓦質羽釜(17)、瓦質風炉(16)の

他に、土師器・瓦器碗の細片が多く出土している。16の上胴部外面はヘラ描きによる木葉文が見られる。

SK14 (Fig.22)

調査区中央部に位置する。鉤状のプランを呈する。二つの土坑が切り合っている可能性もある。長軸2.54 m、短軸1.56 m、深さ14cmを測る。埋土は黄茶色シルトである。埋土は I : 鈍い褐色シルトに炭化物が入る。II : 明黄褐色シルトに小礫や鈍い褐色シルトの小ブロックが見られる。青磁小皿(18)の他、瓦器細片が出土している。

SK17 (Fig.22・23)

調査区南部に位置する。楕円形を呈し、長軸1.36 m、短軸0.85 m、深さ11cmを測る。埋土は炭化物を多く含む灰茶色砂～礫を含む。床面及び埋土中から多量の土師器杯類が出土しており24点(19～42)を図示した。全て回転台成形で糸切り底である。43～45が小皿、他は杯である。19・22・33・35・37～39の底部脇には1～2条の沈線が見られる。

SK24 (Fig.24)

調査区南部に位置する。楕円形を呈し、長軸1.37 m、短軸0.73 m、深さ10cmを測る。埋土は、黄褐色粗粒砂である。土師器杯(46)、白磁口禿小皿(47)の他、土師器細片が100点以上出土しているが図示できるものはない。

SK26 (Fig.24)

調査区南部に位置する。楕円形を呈し、長軸1.58 m、短軸1.46 m、深さ5cmを測る。埋土は黄茶色シルトである。土師器や瓦器の細片が多く出土しているが、土師器杯(48・50)、土師器小皿(49)、青磁碗(51)、土錘(53)、軽石(54)を図示した。50の体部下半は段状を呈する。51は床面出土で、鎚蓮弁文を有する碗である。これらの他に常滑片も出ている。

SK27 (Fig.24)

調査区南部に位置しSD1と切り合っているが、先後関係は不明である。楕円形を呈し、残存長軸1.3m、短軸1.26m、深さ15cmを測る。埋土は黄茶色シルトである。土師器小皿(52)が出土している。

SK35 (Fig.25)

調査区北部に位置する。不整楕円形を呈し、長軸3.0m、短軸1.54m、深さ26cmを測る。埋土は I : 灰褐色シルトに小礫を含む。II : 橙シルトに小礫を含む。瓦質羽釜(58)、釘状の鉄製品(59・60)が出土している。

SK38 (Fig.25)

調査区北部に位置する。不整形を呈し、長軸1.26 m、短軸1.08 m、深さ12cmを測る。埋土は小礫を含む黄褐色シルトである。土師器杯底部(55)、同小皿(56)、肥前産白磁小皿(57)が出土している。

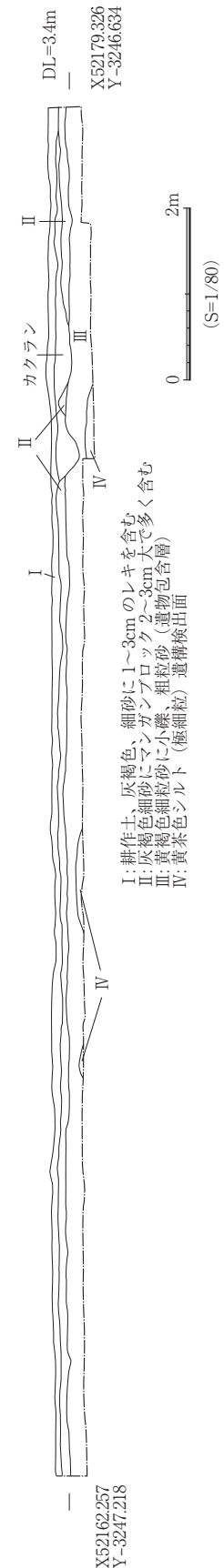
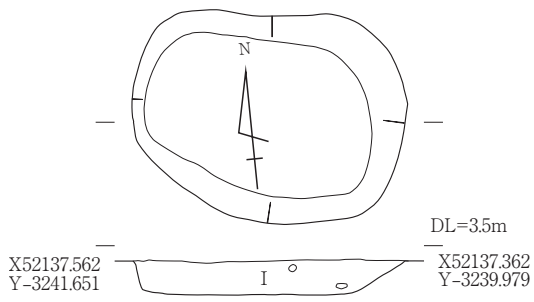


Fig.18 2-2区基本層準(西壁)

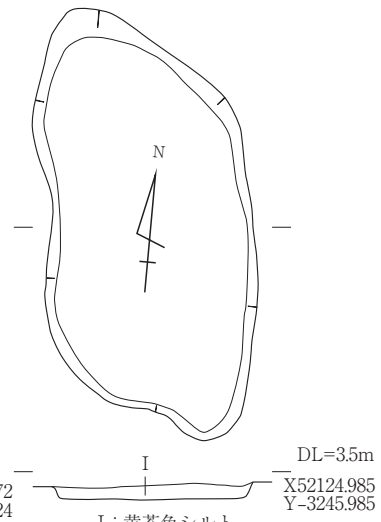
表5 2-2区土坑法量一覧

土坑番号	平面形態	断面形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	備考
SK1	隅丸方形	逆台形	1.46	1.17	19.7	
SK2	隅丸方形		3.9	2.55	25.8	
SK3	楕円形	舟底形	0.92	0.66	16.7	
SK4	隅丸方形	舟底形	1.73	1.11	16.8	
SK5	不整形	U字形	2.24	1.15	5.7	
SK6	楕円形		2.24		2.5	
SK7	隅丸方形	U字形	1.48	1	6.4	
SK8	楕円形		2.57	1.06	11	
SK9	隅丸方形	U字形	1.76	1.46	6.6	
SK10	楕円形	舟底形	1.42	1.12	6	
SK11	隅丸方形	U字形	0.97	0.76	9.5	
SK12	隅丸方形	舟底形	0.89	0.82	1.8	
SK13	不整形	舟底形	4.96	1.91	10.4	
SK14	不整楕円形	舟底形	2.54	1.56	14.6	
SK15	隅丸方形	U字形	1.3	0.86	9.5	
SK16	楕円形	舟底形	0.94	0.76	10	
SK17	楕円形		1.36	0.85	10.9	
SK18	円形	逆三角形	1.04	0.98	24.1	
SK19	楕円形	舟底形	1.31	1.06	22.5	
SK20	隅丸方形	舟底形	0.92	0.77	16.5	
SK21	円形	舟底形	0.96	0.85	16.4	
SK22	楕円形	舟底形	1.16	0.88	27	
SK23	不整楕円	舟底形	1.37	1.32	15.4	
SK24	楕円形	舟底形	1.37	0.73	9.7	
SK25	不整形	舟底形	2.34	1.25	12	
SK26	楕円形	舟底形	1.58	1.46	51.4	
SK27	楕円形	舟底形		1.26	14.8	
SK28	楕円形	舟底形(不明)	0.95		20.5	
SK29	隅丸方形	舟底形	1	0.93	15.4	
SK30	楕円形	舟底形	1.43	0.86	11.8	
SK31	不整楕円形	舟底形	1.04	0.71	9.5	
SK32	隅丸方形	逆台形	1.22	1.04	22.5	
SK33	楕円形	逆台形	1.09	0.88	22.6	
SK34	楕円形	舟底形	1.05	0.91	13.6	
SK35	不整楕円形	舟底形	3	1.54	2.6	
SK36	円形	舟底形	0.89	0.86	13.9	
SK37	円形	U字形	0.94	0.92	15.6	
SK38	不整楕円形	舟底形	1.26	1.08	12	



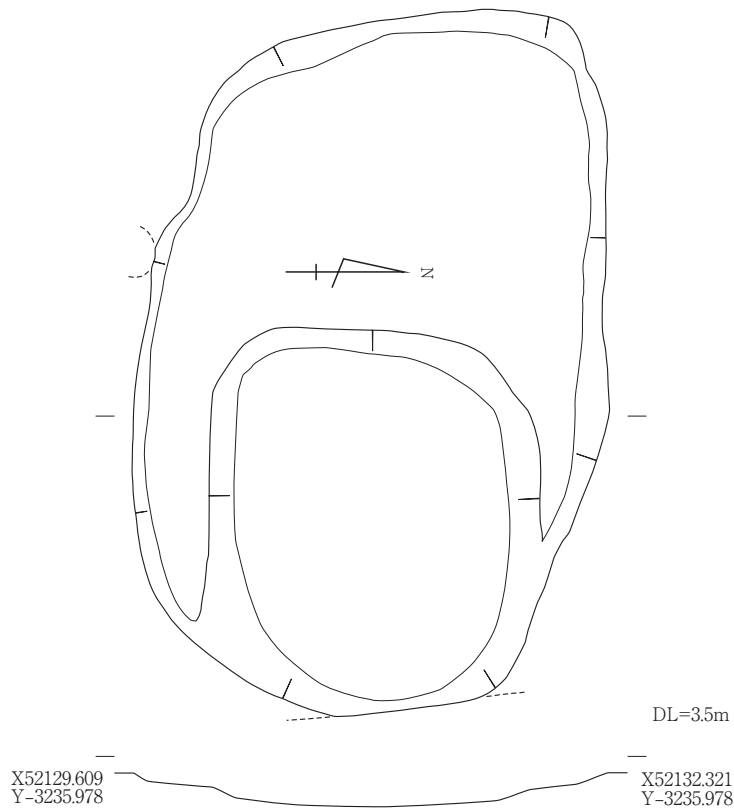
I: 黄褐色に1~3cm大の円礫が混ざる

SK1

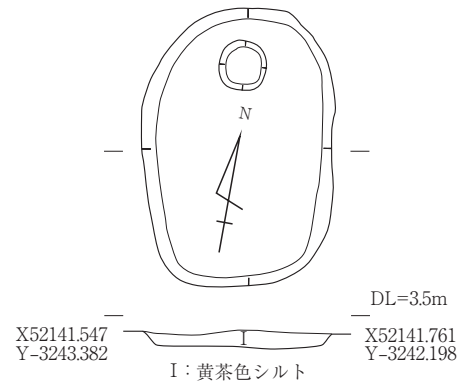


I: 黄茶色シルト

SK5

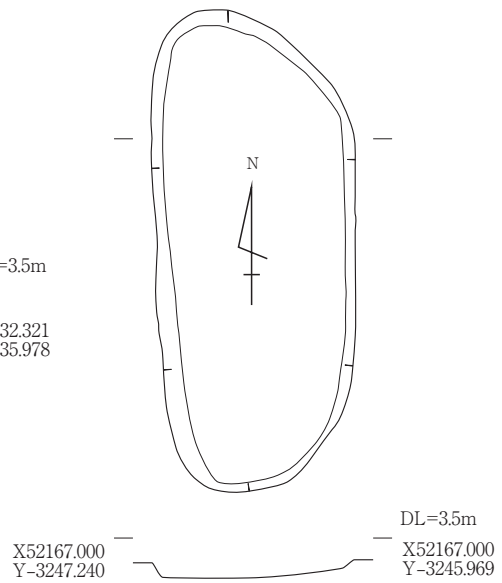


SK2



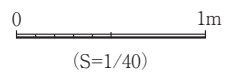
I: 黄茶色シルト

SK7



SK8

Fig.19 SK1・2・5・7・8 平面・セクション・エレベーション



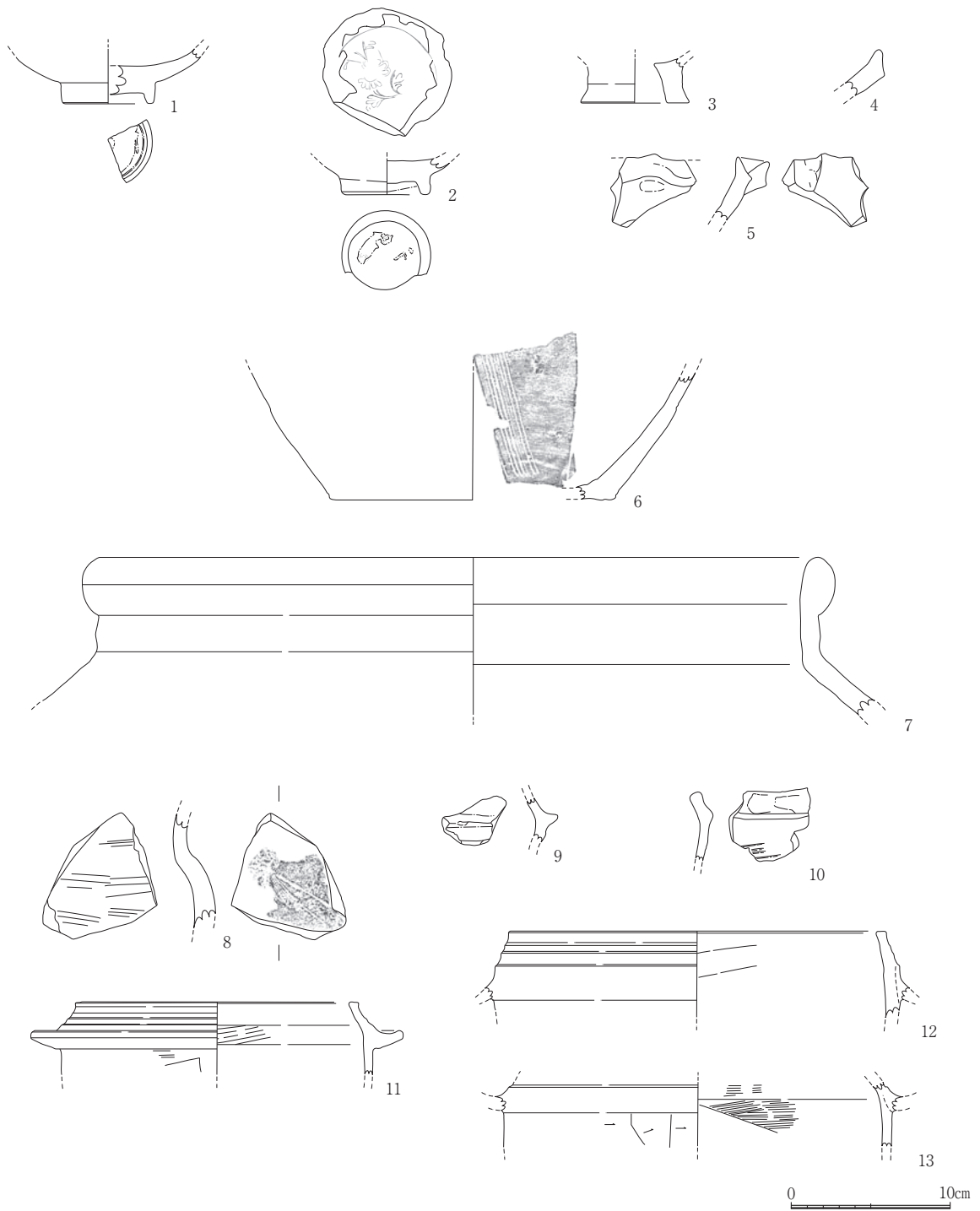


Fig.20 SK1・2・5・8 出土遺物

SK1 : 1 (青磁碗) 4 : 6 (備前播鉢)

SK2 : 2 (青磁碗) 3 (土師器杯) 5 (備前播鉢) 7 (備前甕)

8 (瓦質風炉) 9・10 (東播系釜) 11 (瓦質羽釜)

SK5 : 12 (瓦質羽釜)

SK8 : 13 (瓦質羽釜)

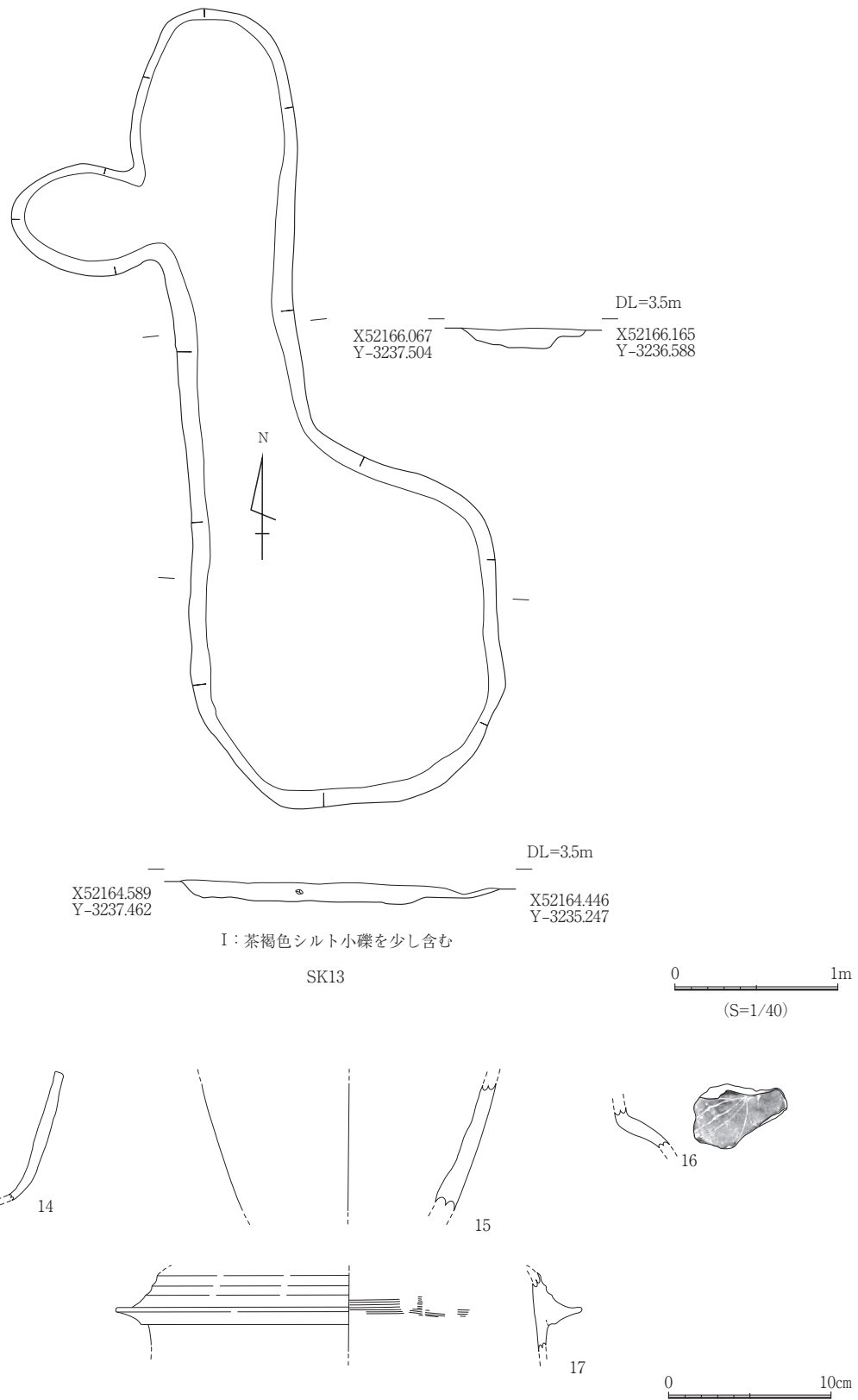


Fig.21 SK13 平面・セクション・出土遺物

14 (瓦質播鉢) 15 (瀬戸瓶子) 16 (瓦質茶釜) 17 (瓦質羽釜)

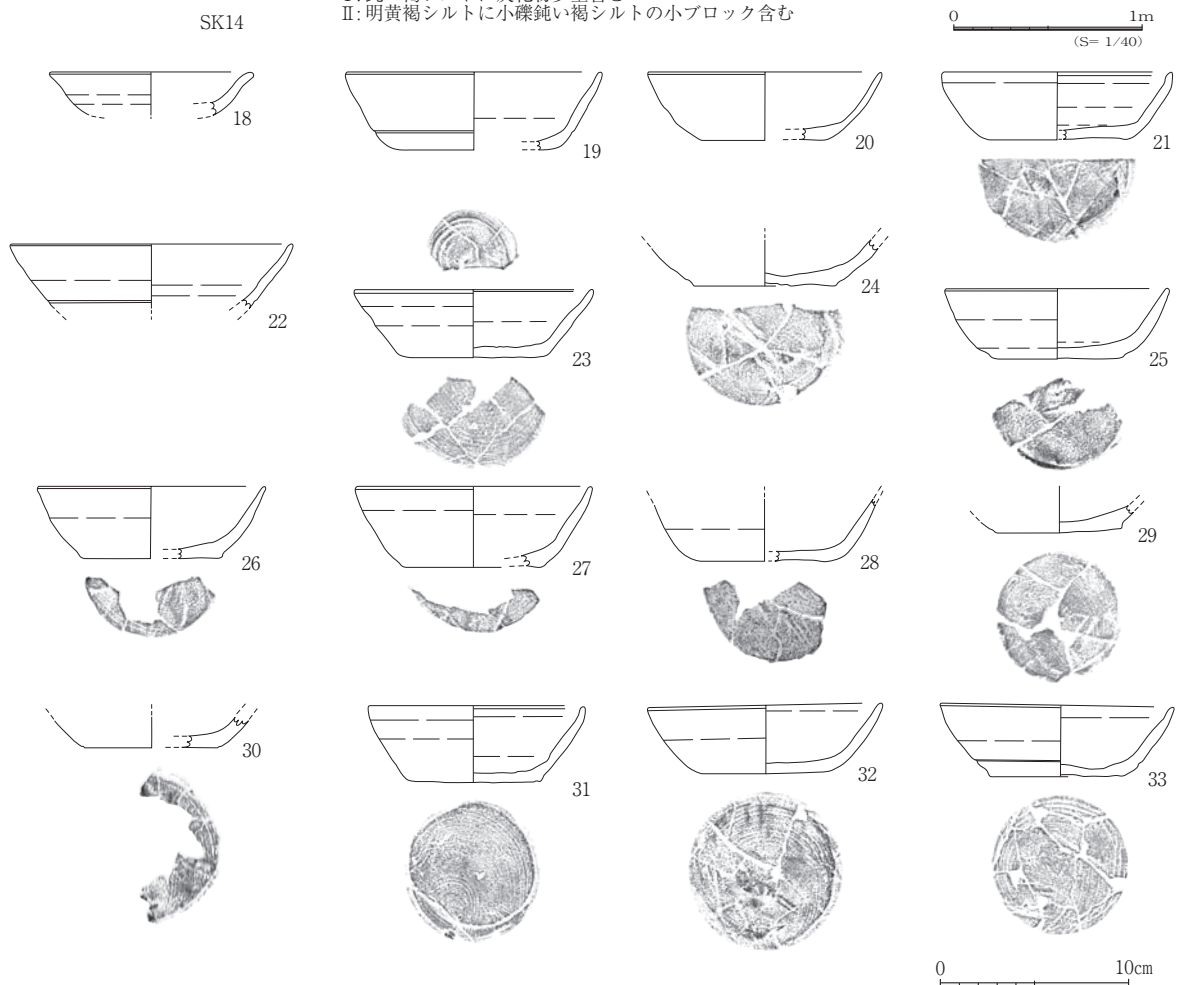
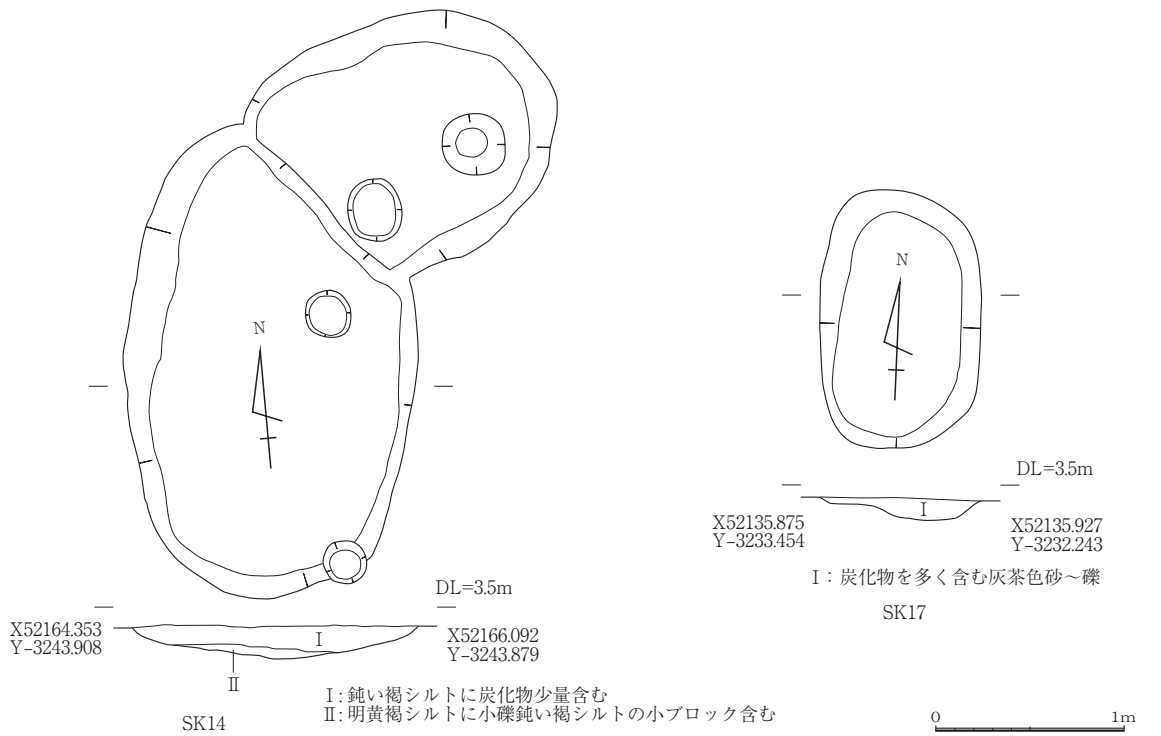


Fig.22 SK14・17 平面・セクション・出土遺物
SK14: 18 (青磁皿) SK17: 19~33 (土師器杯)

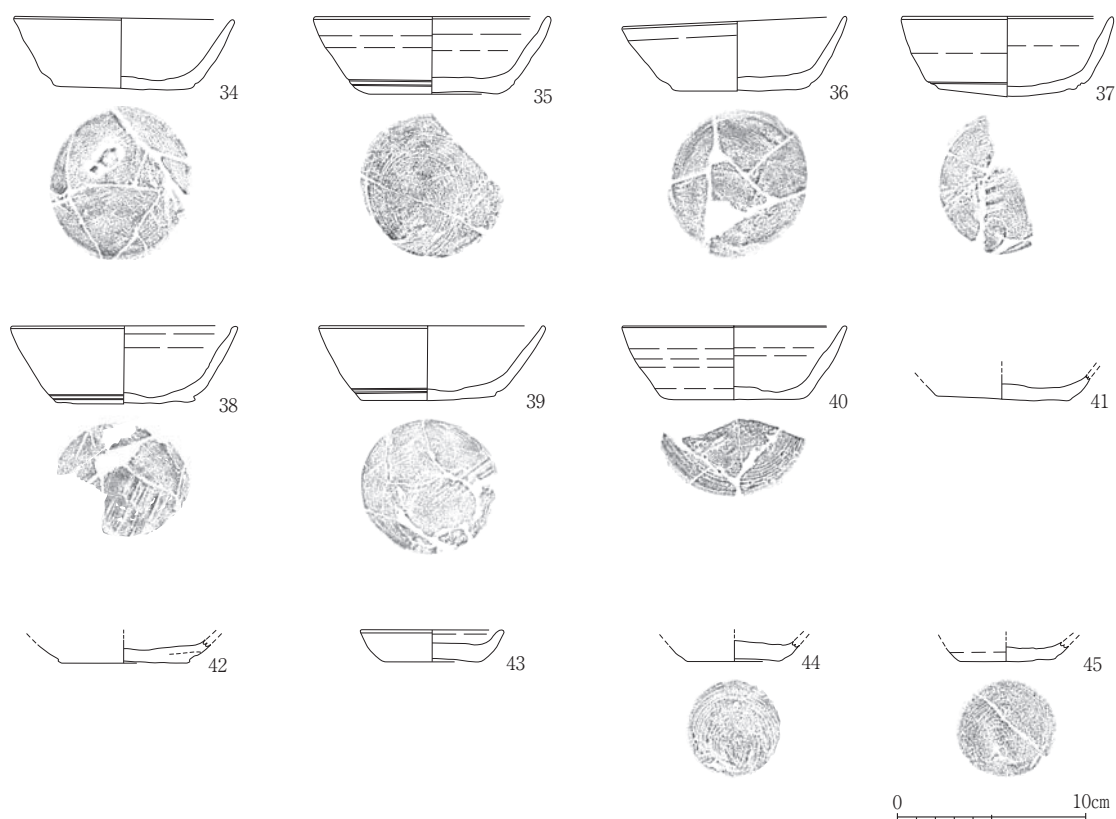


Fig.23 SK17 出土遺物

34~42 (土師器杯) 43~45 (土師器小皿)

② 溝

SD1 (Fig.26)

調査区中央部から南北方向に延びる溝である。確認延長は42.3 m、幅は中程で最も広く0.9 m、両端部が狭く30cm前後、深さは6 ~ 17cmを測る。埋土は拳大の礫を多く含む明黄褐色シルトである。土師器細片が多く出土しているが、図示できたものは土師器杯(61)のみである。

SD2 (Fig.26)

北部から南部にかけてSD1に平行して延びている。確認延長32 m、幅0.3 ~ 1.3 m、深さ5 ~ 27cmを測る。埋土はⅠ:明黄褐色シルトに粗粒砂と礫を含む。Ⅱ:黄褐色シルトに粗粒砂を含む。土師器、瓦器、青磁片が出土しているが図示できるものはない。

SD3 (Fig.26)

中央部から南部に、SD1と11 m程の間隔を保って平行して走る。確認延長29 m、幅36 ~ 78cm、深さ6 ~ 36cmを測る。土師器片を多く含むが図示できたのは土師器小皿(62)のみである。

③ ピット出土の遺物(Fig.27)

P5:瓦質羽釜の底(72)が出土している。外面は丁寧に削りが施されている。

P7:青磁碗細片(63)が出土している。外面には幅広の蓮弁が描かれている。

P12:土師器杯(64)と白磁小皿(65)が出土している。

P14:東播磨型羽釜(73)が出土している。三角形の鏝を有し胴部外面には右上がりの叩きが見られる。

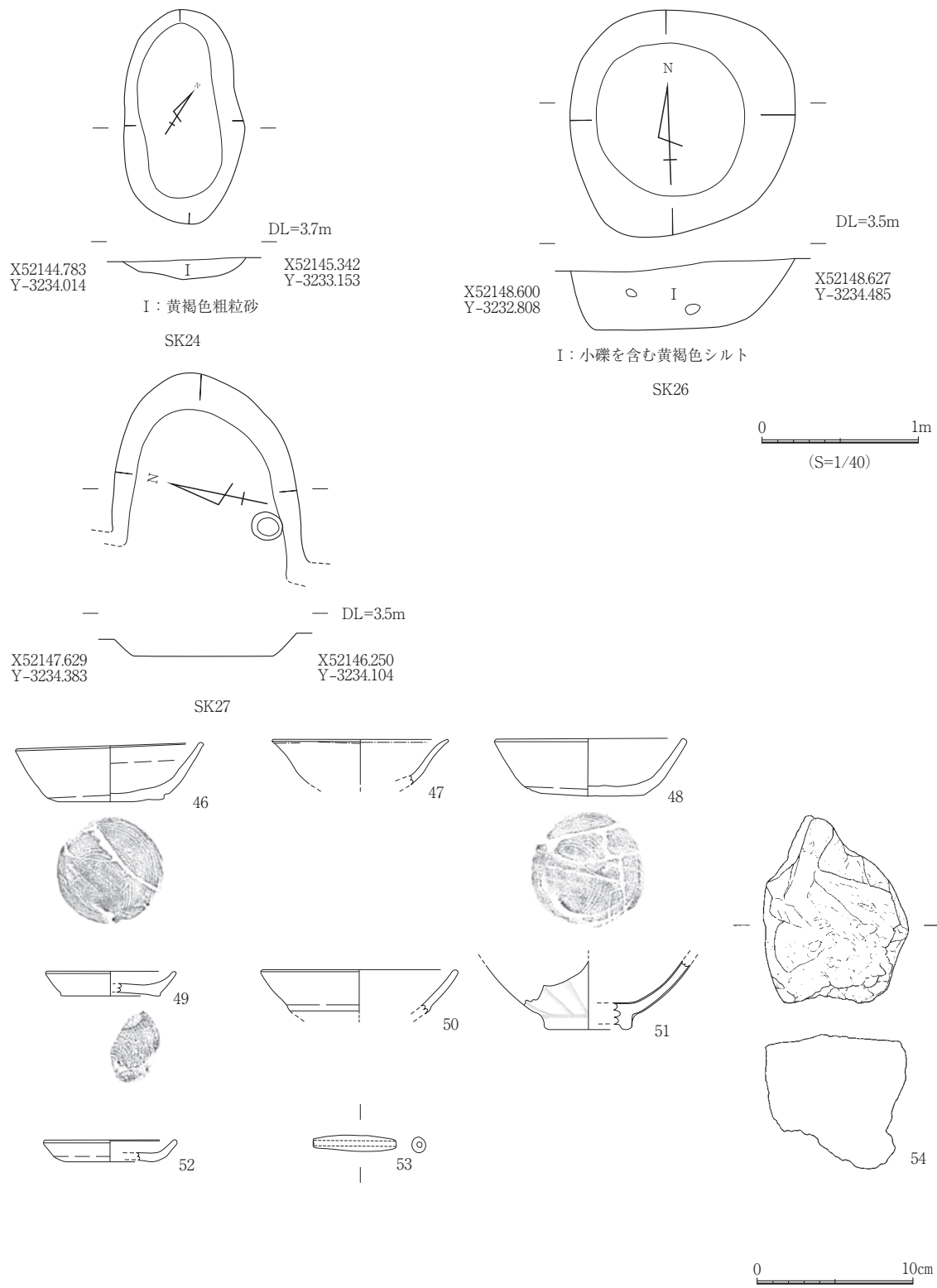


Fig.24 SK24・26・27 平面・セクション・エレベーション・出土遺物
 SK24 : 46 (土師器杯) 47 (白磁皿)
 SK26 : 48・50 (土師器杯) 49 (土師器小皿) 51 (青磁碗) 53 (土錘) 54 (軽石)
 SK27 : 52 (土師器小皿)

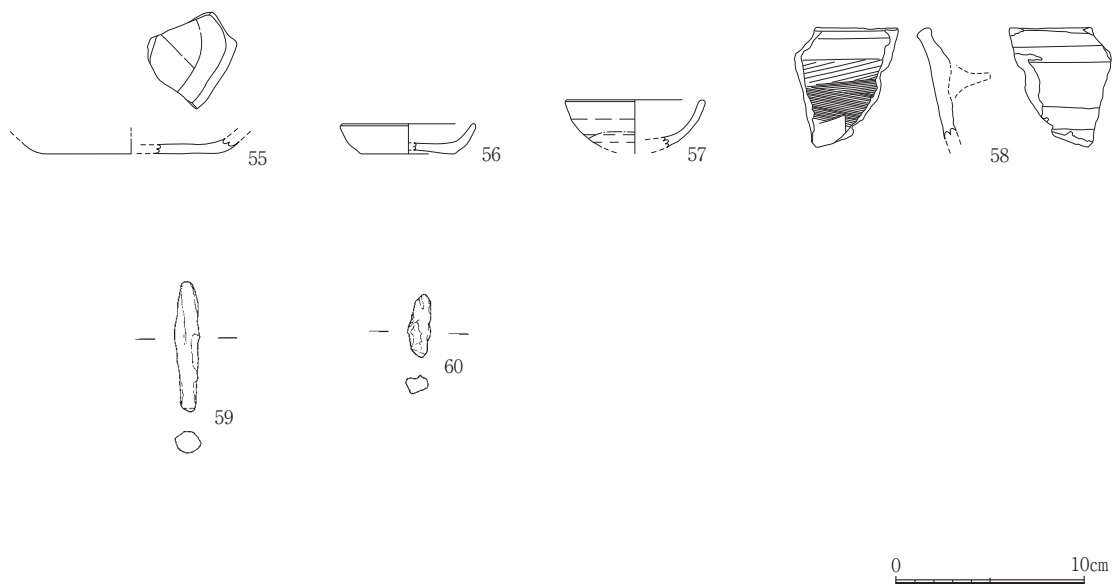
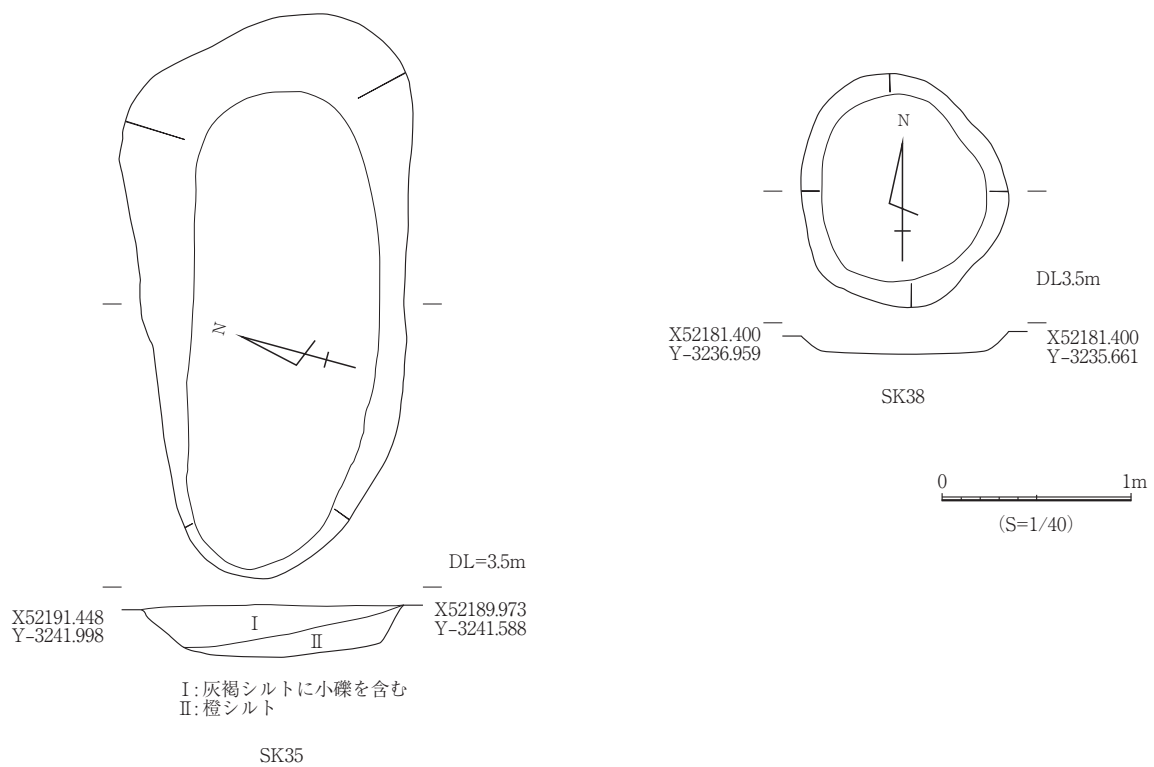


Fig.25 SK35・38 平面・セクション・エレベーション・出土遺物
 SK35 : 58 (瓦質羽釜) 59・60 (鉄製品)
 SK38 : 55 (土師器杯) 56 (土師器小皿) 57 (肥前白磁小皿)

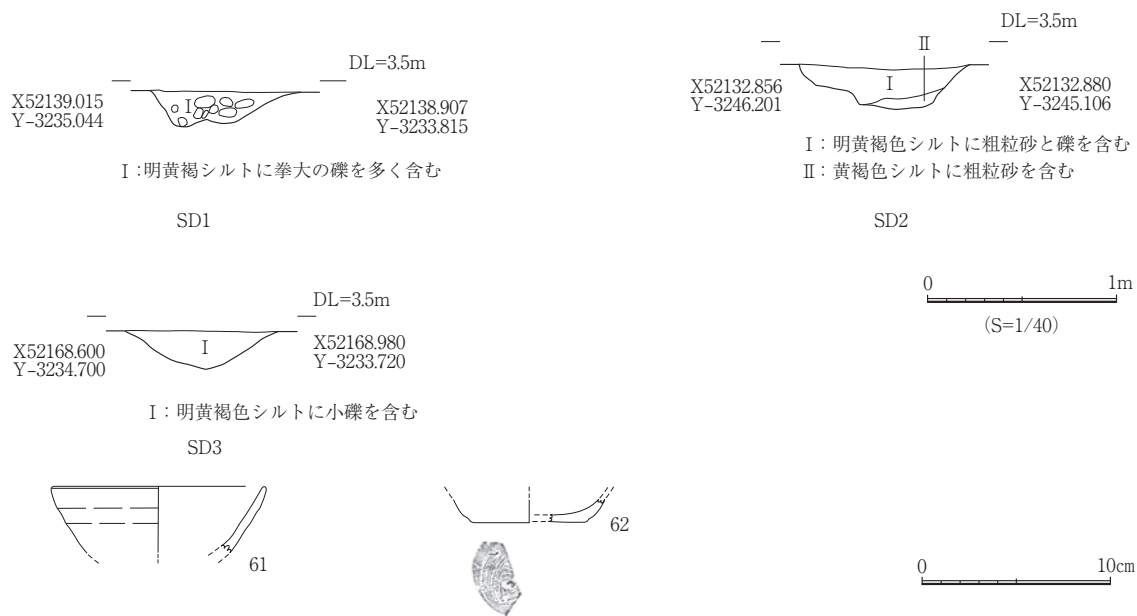


Fig.26 SD1～3 セクション・出土遺物

SD1: 61 (土師器杯)

SD3: 62 (土師器小皿)

P15: 瓦質羽釜(71)が出土している。胴部外面は横方向の削り、口縁部外面は横ナデが施される。

P16: 備前播鉢(69)が出土している。内面に6条の条線が見られる。内面は使用により摩耗が激しい。

P27: 土錘(77)が出土している。

P39: 土師器杯底部(66)が出土している。

P53: 瓦質鍋(75)口縁部細片が出土している。

P56: SK43と切り合っている。埋土中から中国銭が三枚膠着した状態で出土している。一枚は「大元通宝」(宋銭)である。

P63: 瓦質羽釜(76)が出土している。胴部外面横方向の削り、口縁部は横ナデが施される。外面煤ける。

P64: 備前播鉢(70)が出土している。内面7本単位の条線が見られる。

P71: 瓦器碗(67)と瓦質の片口(68)が出土している。微隆起帯のような高台がつく。

P76: 瓦質羽釜(74)が出土している。胴部外面は被熱赤変している。

④ 包含層出土の遺物(Fig.28)

土師器杯・小皿(78～81): 78～80は杯、81は小皿である。全て回転台成形、糸切りである。

青磁碗(82～84): 全て龍泉窯系である。82は鎬蓮弁文、83・84は口縁部が外反するタイプで上田分類のD類である。図示し得なかった細片も20点近く見られるが、総じて後出のD類が多い。

白磁小皿(85・86): 86には見込みに目跡が残る。

陶器(87): 口頸部を欠いている。底部は大きな平底で、胴部外面には自然釉がかかる。

東播磨系捏鉢(88): 口縁部細片である。

備前播鉢(89・90): 口縁部(89)と底部(90)である。後者は使用により摩耗が激しい。

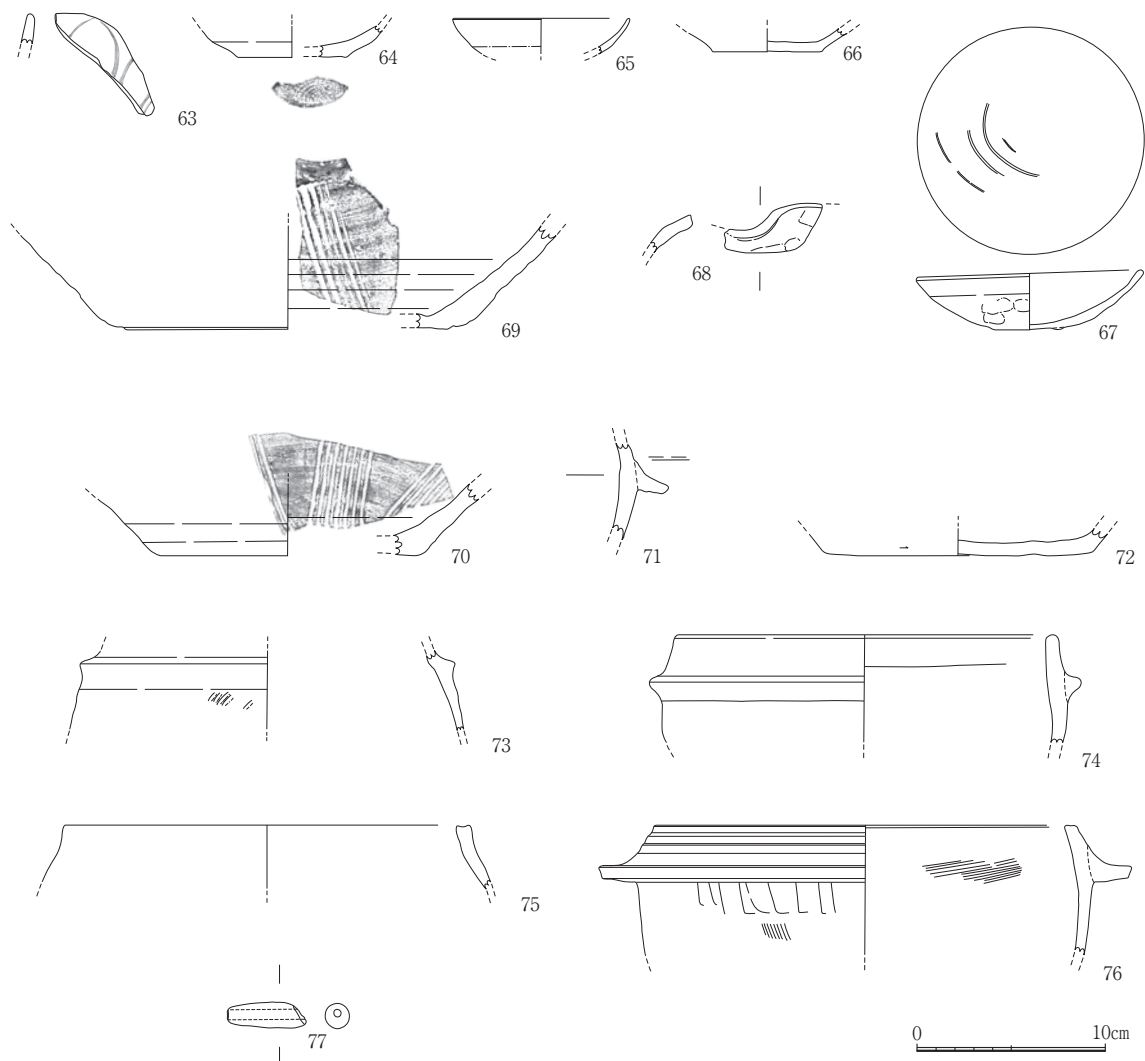


Fig.27 ピット出土遺物

- P5 : 72 (瓦質羽釜) P7 : 63 (青磁碗) P12 : 64 (土師器杯)・65 (白磁皿)
 P14 : 73 (東播磨系羽釜) P15 : 71 (瓦質羽釜) P16 : 69 (備前播鉢) P27 : 77 (土錘)
 P39 : 66 (土師器杯) P53 : 75 (瓦質鍋) P63 : 76 (瓦質羽釜) P64 : 70 (備前播鉢)
 P71 : 67 (瓦器碗)・68 (瓦質片口) P76 : 74 (瓦質羽釜)

東播系羽釜(91・92・93・94) : 91は口縁部を欠く。他は口唇部面取っている。94の鏝には横長の圧痕が見られる。

瓦質羽釜(95～97) : 口縁部外面は強い横ナデを施し、95は2条の97には3条の凹線が見られる。和泉・河内型に属する。

瓦質鍋(98・99) : 両者とも土佐型と称されているタイプである。99は胴部外面に指頭圧痕が顕著である。

(3) 小結

2-2区は南部、中央部、北部と3箇所遺構の分布のまとまりが見られた。このうち南部と中央部の間は、2-1区で見られた遺構の稀薄な地点、すなわち南北グリッドラインの131～132に一致している。掘立柱建物などを具体的に復元することは難しいが、3つの地点に建物など中心的な施設が

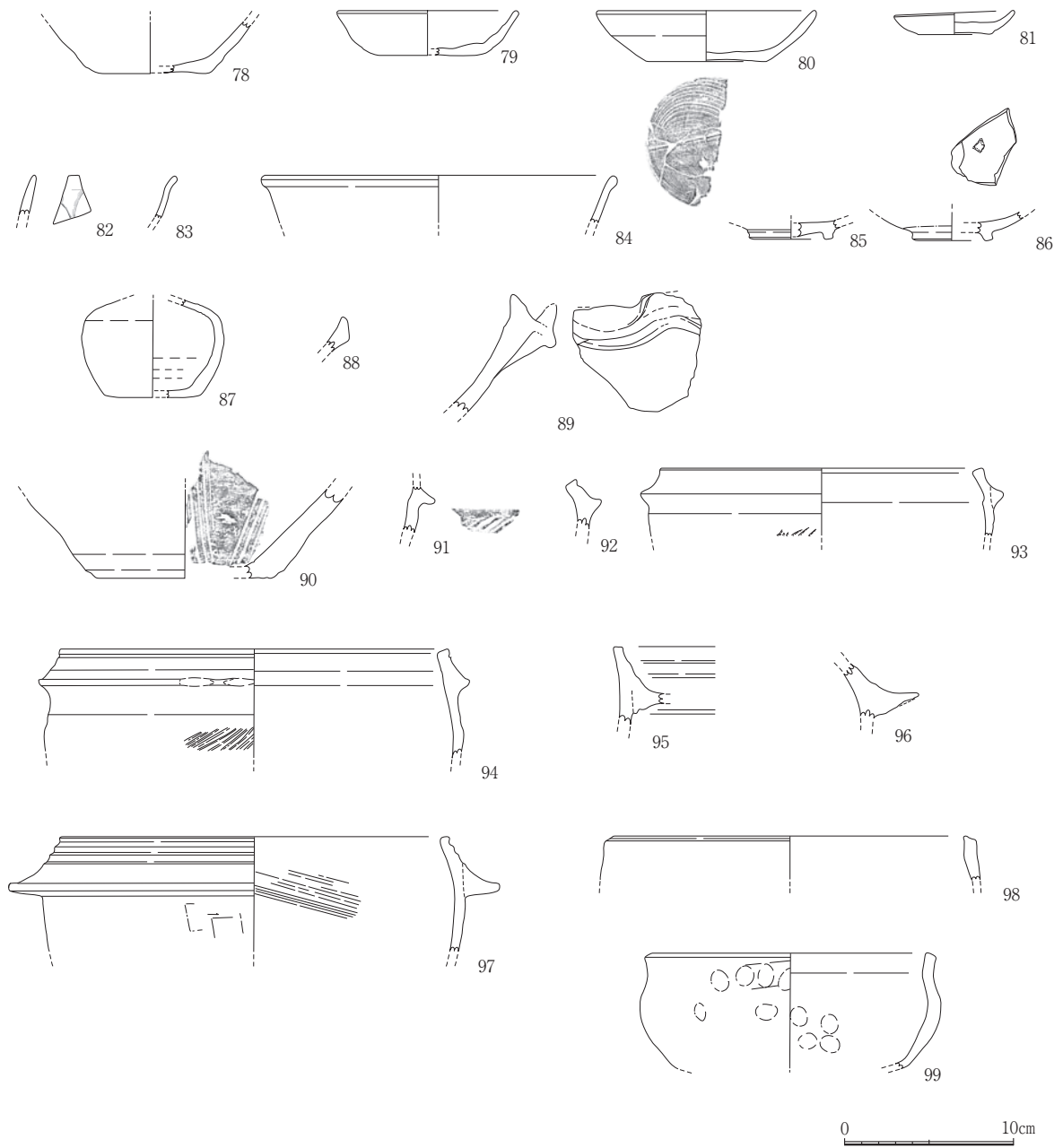


Fig.28 包含層出土遺物

78~80：(土師器杯) 81：(土師器小皿) 82~84：(青磁碗)

85・86：(白磁小皿) 87：(陶器壺) 88：(東播系捏鉢) 89・90：(備前播鉢)

91~94：(東播磨系羽釜) 95~97：(瓦質羽釜) 98・99：(瓦質鍋)

存在し、土坑もそれらに付属していたものと考えられる。全体的に遺物は僅少であるが、南部のSK2とSK17からはまとまった土器類が出土している。SK2からは備前、青磁碗、東播磨型土釜、瓦質羽釜のセット関係が捉えられる15世紀代の好資料が出土している。SK17からは図示し得たものだけでも30点近い土師器杯類が折り重なるように出土している。地鎮など祭祀的な性格が考えられる。3条検出された溝は、土坑などとの切り合い関係から見て、時期差を考えなければならないが、溝からの遺物は僅少であり正確な先後関係を求めることはできない。

当調査区は、出土遺物から見て時期的には15世紀代を中心に営まれた集落跡であり、位置的關係から見ても2-1区と同一の集落を構成していたと理解することができよう。

表6 2-2区土器観察表①

図版 番号	機種	出土地点・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	特徴	分類	備考
1	青磁碗	SK1		(3.4)	5.6	やや粗い胎土	全面施釉後、外底を蛇の目状に掻きとっている。厚い作りの底部。		
2	〃	SK2		(2.2)	5.3	灰色精緻	見込みに菊花の印花文、圏線が一条巡る。		
3	土師器杯	SK2埋土		(2.8)	6.7	精土	足高高台、高台高さ2.5cm。		
4	備前播鉢	SK1				精土	内外面横ナデ調整。		
5	〃	SK2				小礫、粗粒砂を含む	内外面横ナデ調整。片口状を呈する。		
6	〃	SK1		(8.0)	18.0	小礫を含む	内外面横ナデ調整。内面使用による摩耗が激しい。		
7	備前甕	SK2床面	47.0			〃	口縁部内外面横ナデ調整、胴部内面は削り+ナデ調整。		
8	瓦質風炉	〃				石英細粒砂を含む	外面器表剥離、鏝を貼付する位置にV字状の切り込みあり。		
9	土師質釜	SK2埋土				精土	断面三角形の鏝、鏝の上下横ナデ調整。外面煤ける。		
10	〃	〃				精土	僅かに三角形状に出る鏝、口縁部内外面横ナデ調整。外面煤ける。	東播系釜	
11	瓦質羽釜	SK2床面	17.0	(4.5)		石英細粗粒砂多い	口縁部内外面横ナデ調整、外面に三条の凹線が巡る。胴部外面横方向のヘラ削り。		
12	〃	SK5床面	23.6	(5.5)		精土	口縁部内外面横ナデ調整。外面に三条の凹線。		
13	〃	SK8埋土		(4.2)		精土	胴部内面は横方向のハケ調整、外面は横方向の削り。		
14	瓦質播鉢	SK13				精土	内面の条線は六条。内外面摩耗。		
15	瀬戸瓶子	SK13埋土				灰色精緻	外面灰釉施釉。		
16	瓦質風炉	SK13				精土	内外面横ナデ調整。上胴部外面にヘラ描き木葉文。		
17	瓦質羽釜	SK13埋土		(4.9)		精土	口縁部外面三条の凹線が巡る。内面は横ハケ+ナデ調整。		
18	青磁皿	SK14	10.4	(2.3)		灰色やや粗い胎土	灰色味を帯びた釉。		
19	土師器杯	SK17	13.4	4.1	8.0	精土	内外面横ナデ調整。底部付近に1mm幅の沈線。		器高指数 30.6
20	〃	〃	12.3	3.6	6.8	〃	内外面横ナデ調整。糸切り。		〃 29.3
21	〃	〃	12.1	3.5	7.6	〃	口縁部が短く屈曲。糸切り+平行圧痕。		〃 29.3
22	〃	〃	14.8	3.4		〃	体部外面下位に沈線が巡る。		
23	〃	〃	12.6	3.6	7.7	〃	内外面横ナデ調整。糸切り。		器高指数 28.6
24	〃	〃		(2.5)	7.4	〃	〃		
25	〃	〃	11.7	3.7	6.9	〃	〃		器高指数 32.1
26	〃	〃	12.0	3.8	7.2	〃	〃		〃 31.7
27	〃	〃	12.5	4.2	7.6	〃	〃		〃 34.0
28	〃	〃		(3.3)	7.0	〃	〃		
29	〃	〃		(1.4)	6.6	〃	〃		
30	〃	〃		(1.6)	7.0	〃	〃		
31	〃	〃	11.4	4.1	7.0	〃	口縁部が短く屈曲。内外面横ナデ調整、糸切り。		器高指数 36.0
32	〃	〃	12.3	3.7	7.0	〃	内外面横ナデ調整。糸切り。		〃 28.5
33	〃	〃	12.3	3.9	7.0	〃	内外面横ナデ調整。糸切り。体部外面下半に回転による沈線が巡る。		〃 31.7
34	〃	〃	11.5	3.9	7.4	〃	内外面横ナデ調整。糸切り。		〃 34.0
35	〃	〃	12.4	4.1	7.2	〃	口縁部は内湾気味に立ち上がる。内外面横ナデ調整。体部下位に回転による二条の沈線が巡る。糸切り。		〃 36.0

表7 2-2区土器観察表②

図版 番号	機種	出土地点・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	特徴	分類	備考
36	土師器杯	SK17	118	4.0	7.0	〃	内外面横ナデ調整。糸切り。		器高指数 29.7
37	〃	〃	11.1	4.2	7.3	〃	内外面横ナデ調整。糸切り。外底脇に回転による沈線が巡る。		〃 37.8
38	〃	〃	12.0	4.1	7.3	〃	〃		〃 34.2
39	〃	〃	11.8	5.0	7.1	〃	〃		〃 42.4
40	〃	〃	11.8	3.9	7.5	〃	内外面横ナデ調整。糸切り。体部下位に細い条線が巡る。		〃 33.1
41	〃	〃		(1.4)	7.0	〃	内外面横ナデ調整。糸切り。		
42	〃	〃		(1.2)	6.8	〃	内外面横ナデ調整。糸切り。円盤の上に粘土を巻き上げている。		
43	土師器 小皿	〃	7.5	1.7	5.2	精土であるが杯 と異なる	内外面横ナデ調整。糸切り。		
44	〃	〃		(1.1)	5.0	〃	〃		
45	〃	〃		(1.0)	5.0	精土	〃		
46	土師器杯	SK24埋土	118	3.8	6.8	〃	〃		器高指数 32.2
47	白磁皿	〃	11.1	(2.8)		白色精緻	口禿の皿である。		
48	土師器杯	SK26	119	3.7	7.2	精土	内外面横ナデ調整。糸切り。やや厚い作りである。		器高指数 31.1
49	土師器 小皿	〃	8.1	1.6	6.2	〃	内外面横ナデ調整。糸切り。		〃 19.7
50	土師器杯	〃	12.4	(2.8)		〃	内外面横ナデ調整。体部下半で屈曲。		
51	青磁碗	〃		(4.4)	5.0	灰色やや粗い胎 土	鎗蓮弁文、高台脇まで施文。		
52	土師器 小皿	SK27	8.4	1.4	5.6	精土	内外面横ナデ調整。糸切り。		
53	土錘	SK26				〃	長さ5.3cm、径1.0cm、孔径0.3cm、重さ3.5g		
55	土師器杯	SK38		(0.8)	9.0	〃	内外面横ナデ調整。糸切り。内底に指頭による強いナデ調整。		
56	土師器 小皿	〃	7.0	1.6	5.0	〃	内外面横ナデ調整。糸切り。		
57	白磁小皿	〃検出面直下	7.2	(2.5)		白色精緻	下半無釉。	肥前産	
58	瓦質羽釜	SK35				精土	口縁部内外面横ナデ調整。胴部内面横ハケ調整。鏝が剥離している。		
61	土師器杯	SD1	11.2	(3.5)		精土	内外面横ナデ調整。		
62	土師器 小皿	SD3		(1.2)	6.0	精土	内外面横ナデ調整。糸切り。		
63	青磁碗	P7 埋土				灰色精緻	幅広い蓮弁文。		
64	土師器杯	P12 埋土		(1.6)	5.8	精土	内外面横ナデ調整。糸切り。		
65	白磁小皿	P10	9.2	(1.9)		白色精緻	外面下半無釉。		
66	土師器杯	P39 埋土		(1.3)	5.6	精土	内外面摩擦。		
67	瓦器碗	P71 埋土	11.8	3.1	3.6	チャートの粗粒 を含む	口縁部内外面横ナデ調整、内面に僅かに暗文が見られる。痕跡的な高台を貼付。		
68	瓦質片口	P71 埋土				精土	内外面横ナデ調整。		
69	備前播鉢	P16 埋土		(5.5)	18.0	小礫、粗粒を含 む	内外面横ナデ調整、条線六本が見られる。内面は使用により 摩擦。		
70	〃	P64		(3.8)	13.6	精土	内外面横ナデ調整。条線七本。		
71	瓦質羽釜	P15				石英、長石を含 む	鏝の幅1.5cm、胴部外面削り。		
72	〃	P5 埋土		(1.5)	14.2	石英、他の細・粗 粒を含む	外底削り、内底ナデ調整。		
73	土師質釜	P14		(4.2)		長石、石英、雲母 粒を含む	断面三角形の鏝、胴外面右上がりの叩き。	東播磨系羽釜	
74	瓦質羽釜	P76 埋土	20.0	(5.7)		チャートの粗粒 砂を含む	口縁部内外面横ナデ調整、鏝は断面カマボコ状を呈す。外面被 熱赤変。		

表8 2-2区土器観察表③

図版 番号	機種	出土地点・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	特徴	分類	備考
75	瓦質鍋	P53 埋土	21.4	(3.4)		精土	内外面横ナデ調整。	土佐型	
76	瓦質羽釜	P63	22.2	(6.9)		精土	口縁部外面三条の凹線が巡る。内面は横ハケ+ナデ調整。胴部外面は左→右の削り。外面煤ける。		
77	土錘	P27 埋土	0.4			精土	長さ4.2cm、径1.3cm、孔径0.3cm、重さ5.9g		
78	土師器杯	包含層		(3.0)	6.5	精土	内外面横ナデ調整。糸切り。		
79	〃	〃	10.6	2.6	6.0	精土	内外面横ナデ調整。摩耗が激しい。		
80	〃	〃	12.8	3.0	7.0	精土	内外面横ナデ調整。糸切り。		
81	土師器 小皿	〃	6.9	1.4	4.3	精土	〃		
82	青磁碗	〃				灰色精緻	鑄蓮弁文あり。		I5b類
83	〃	〃				灰色やや粗い	口縁部外反、透明度のある釉。		上田分類D類
84	〃	〃	22.7	(2.8)		〃	口縁部外反、丸縁状を呈する。		〃
85	白磁小皿	〃		(1.1)	5.0	灰白精緻	僅かにアーチ状の高台を呈する。		
86	〃	〃		(1.7)	4.8	白色やや粗い胎土	見込みに目跡が残っている。		
87	陶器壺	〃		(5.8)	5.6	精土	内外面横ナデ調整、外面自然釉。		
88	東播磨 系捏鉢	〃				やや粗い胎土	内外面横ナデ調整。		
89	備前搦鉢	〃				小礫を含む	口縁部上下に拡張、内外面横ナデ調整。		
90	〃	〃		(5.2)	10.6	〃	内面は使用による摩耗が激しい。		
91	土師質釜	〃				石英、長石を含む	口縁部欠損。	東播磨系羽釜	
92	〃	〃				〃	内傾して立上がる口縁部、口唇部は面をなす。	〃	
93	〃	〃	19.0	(4.0)		〃	断面三角形のしっかりした鑄を有し、口縁部内外面横ナデ調整、胴部外面叩き。外面煤ける。	〃	
94	〃	〃	22.8	(6.5)		石英、長石粒、雲母を含む	断面三角形のしっかりした鑄を有し、鑄端面を押圧している。口縁部内外面横ナデ調整、胴部外面叩き。外面煤ける。	〃	
95	瓦質羽釜	〃				精土	口縁部外面強い横ナデ調整により2条の凹線条を呈する。	和泉・河内型	
96	〃	〃				精土	口縁部内外、鑄上下面横ナデ調整。	〃	
97	〃	〃	23.0	(6.8)		精土	口縁部外面強い横ナデ調整により3条の凹線、鑄幅2cm、胴部外面左→右の削り、胴内面ハケ調整。	〃	
98	瓦質鍋	〃	20.6	(2.6)		精土	内外面横ナデ調整、口唇部凹状を呈する。	土佐型	
99	〃	〃	16.4	(6.8)		精土	〃	〃	

4 2-3区の調査

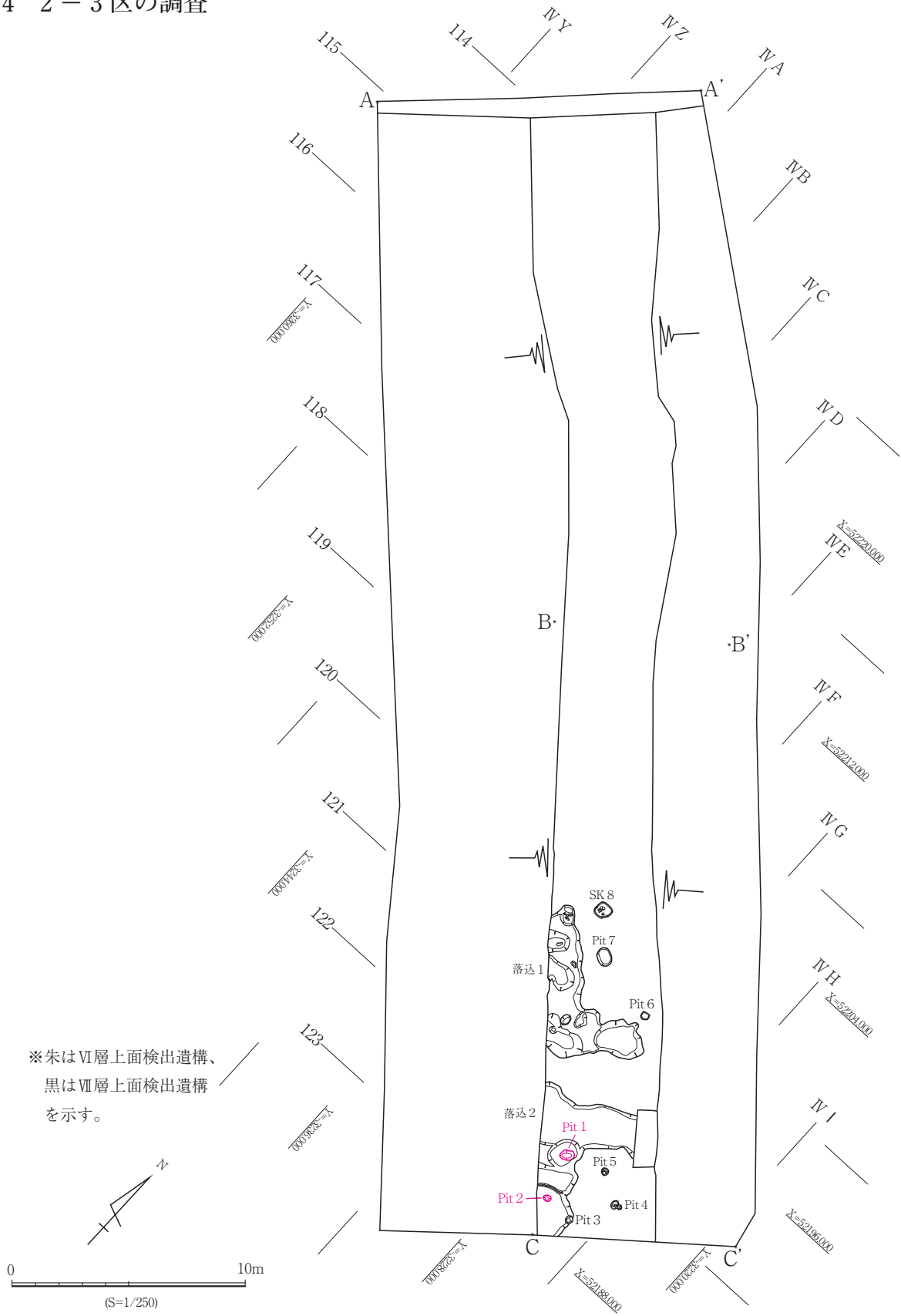
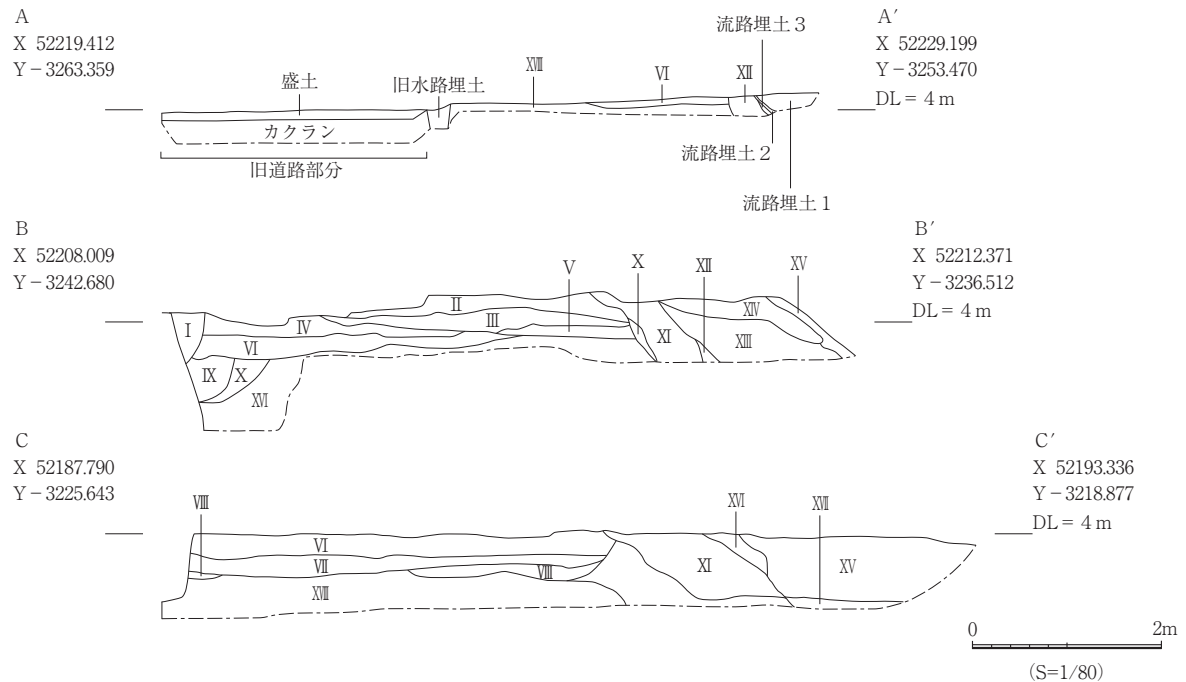


Fig.29 2-3区平面図(S=1/250)

(1)調査経過と基本層準

2-3区は2-1・2区の北に位置する調査区である。この調査区は、仁淀川河口部右岸に構築されていた堤防の下に所在していたが、2-2区の調査成果より遺跡が所在している可能性が高くなり、調査を行うこととなった。

調査の手順は、まず堤防を重機で撤去し、その後周囲のレベルと同じになるまで掘削を進めた。その課程において、当調査区南端において近世から近代にかけての築石堤防が検出され、注目されたのは記憶に新しい。



- I: シルト混粘土 ~5mm大の砂礫を多く含む。拳大の角礫を含む
- II: シルト混粘土 5~20mm大の角礫を多く含む
- III: シルト混砂 ~0.5mm大の砂を多く含む、10~15mm大の円礫をまばらに含む
- IV: シルト混砂 ~10mm大の砂礫をまばらに含む
- V: シルト混粘土 ~10mm大の砂礫を多く含む、褐灰色粘土ブロックが混じる 僅かに土器片が出土
- VI: シルト混砂礫 遺物包含層。10~40mm大の円礫を多く含む
- VII: シルト混砂 遺物包含層。~10mm大の礫をまばらに含む 炭化物が目立つ
- VIII: シルト混粘土 10~15mm大の円礫を多く含む
- IX: シルト混砂礫 0.5~10mm大の砂礫を多く含む 灰褐色シルトブロック及び黄灰色砂礫ブロックを含む
- X: 砂 礫 ~50mm大の礫を多く含む
- XI: シルト混砂礫 ~50mm大の砂礫を多く含む
- XII: シルト混粘土 ~10mm大の円礫をわずかに含む
- XIII: シルト混砂 ~5mm大の円礫をわずかに含む
- XIV: シルト混礫 10~60mm大の砂礫を多く含む
- XV: 礫混シルト ~10mm大の円礫をまばらに含む、赤褐色の斑点が目立つ
- XVI: シ ル ト 赤褐色の斑点が目立つ
- XVII: 粘土混シルト 自然堤防を形成する堆積層と考えられる
- XVIII: 砂 礫 層 鶏卵大から拳大の円礫を主とし、~5mm大の砂礫が混じる
- 流路埋土1: 礫混シルト 流路埋土2: シルト 流路埋土3: シルト

Fig.30 2-3区北(A-A')・中央(B-B')・南壁(C-C')層準図(S=1/80)

その後、遺物包含層検出に向けて重機掘削を進める中で、調査区長軸の中央部分にのみ自然堆積層が残存しており、残存部分の西は近代の道路敷設とそれに伴う掘削によって、東は水路によって大きくカクランされていることが確認できた。よって、調査は自然堆積層が残存する部分について行い、遺物包含層であるⅥ層を検出した時点で4 mグリッドを設定して遺物包含層掘削とそれに伴う遺物の採取と測量を行った。

結果として検出できた遺物包含層は二枚あり、それぞれⅥ層とⅦ層とした。Ⅵ層は攪乱を受けていない部分全体で確認できたが、Ⅶ層は調査区中央より南でのみ確認できた。Ⅵ層上面で検出できた遺構はPit2基、Ⅶ層上面で検出できた遺構はPit5基、土坑1基、落込2ヶ所である。いずれも建物等の施設の復原には繋がらない。また、落込に明確な掘方は認められず、不規則に所々抉られたような痕跡が認められる。よって、水路とまでは言わないまでも季節的な自然流路のようなものが存在した可能性を考慮すべきであろう。これらの遺構中から出土した良好な遺物はほとんど無く、いずれも土師質土器ないしは土師器の細片が出土しただけである。

各遺物包含層の出土量はⅥ層が約510点、Ⅶ層が約390点であり、Ⅵ層が最も多い。しかし、Ⅶ層は中世に帰属する遺物が主体であるのに対して、Ⅵ層は近世に帰属する遺物が多く小片も多い。よってⅥ層は、Ⅶ層が後世の耕作ないしは風雨等の自然作用によって形成された二次堆積的なものの可能性が指摘できる。

本調査区においては家屋や倉庫等の施設は復原できず、出土した遺物の状態も細片が中心であることから、集落の中心より外の空間として位置づけられよう。尚、遺構については一覧表として次頁に記録した。

次に、それぞれの包含層から出土した遺物について述べる。

(1) Ⅵ層出土遺物 (Fig.31:1~17)

1・2は瓦器であり、いずれも椀である。1は摩滅が著しいものの内面に横位の暗文を有する。2は底部内面を周回する暗文を有し、底部外面の高台は貼付けで作出している。

3・4は瓦質土器であり、3は鉢、4は羽釜である。3は胴部が張り、短い口縁部が直立ぎみに立ち上がる器形が考えられる。4は精緻な作りであり、外面のケズリは極めて丁寧なものである。

5~12は青磁であり、5~9は碗、10は壺、11・12は皿である。碗は、8・9以外はいずれも外面に蓮弁文を有するが、7のみ短冊状のものである。10は精緻な作りであり、釉が極めて厚い。11・12は口縁端部に刻みを有し、12は内面に櫛描文を有することから越州窯系稜花皿と考えられる。

13・14は青花碗であり、文様が類似することから同一個体の可能性が考えられる。

15は磁器であり、内面に染付を有する小皿である。

16は陶器であり、備前焼の片口鉢の可能性が考えられる。

17は土錘であって、円筒形の作りである。

表9 2-3区遺構観察表

遺構名	検出 層準	法量(m)			埋土	備考
		長軸	短軸	深さ		
Pit1	Ⅵ上	0.64	0.42	0.27	礫混粘土	
Pit2	〃	0.34	0.26	0.14	シルト混粘土	
Pit3	Ⅶ上	0.34	0.32	0.36	礫混粘土	
Pit4	〃	0.47	0.38	0.12	シルト混粘土	窪みの可能性有
Pit5	〃	0.32	0.31	0.18	シルト混粘土	
Pit6	〃	0.38	0.32	0.09	シルト混粘土	
Pit7	〃	0.08	0.60	0.08	シルト混粘土	
SK8	〃	0.78	0.68	0.12	礫混砂	微細炭化物多し 被熱礫が出土
落込1	〃	2.8	2.1	0.04～0.2	シルト混砂	自然流路の可能性有
落込2	〃	3.4	2.0	0.04～0.12	シルト混砂	〃

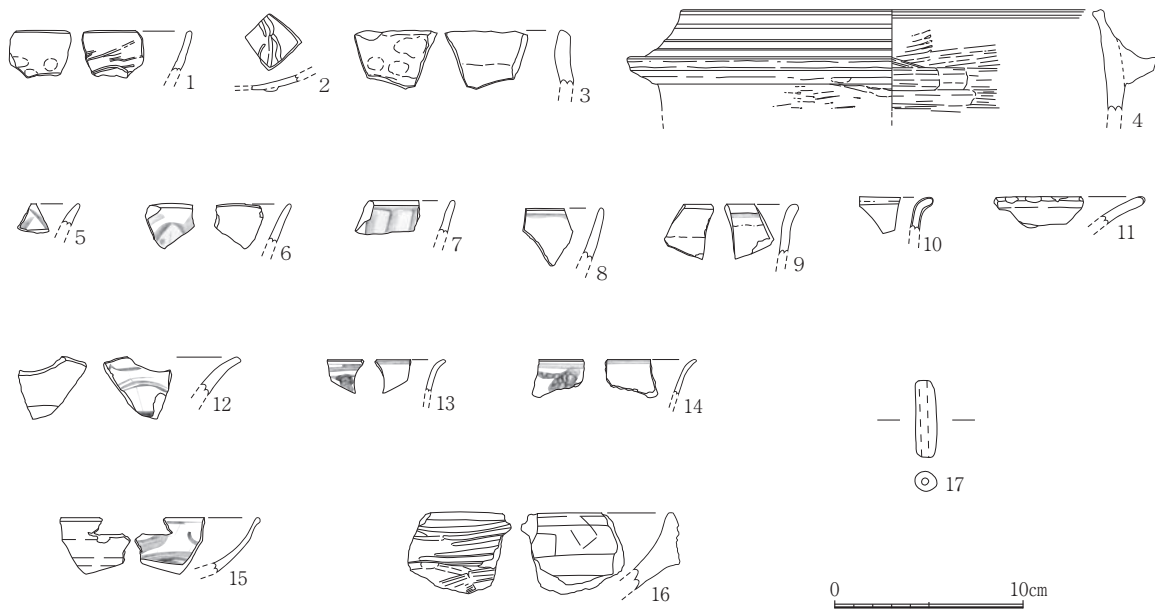


Fig.31 2-3区Ⅵ層出土遺物(S = 1 / 4)

(2) VII層出土遺物 (Fig.32 : 18 ~ 35)

18は須恵器であり、高坏の脚である。焼成は極めて悪い。

19～28は土師質土器である。19～24は坏である。19は底部外面に回転糸切痕と、回転台から取り外す際のヘラ状工具の圧混を有する。22は底部外面に回転糸切り痕を有し、内面にはロクロ目が顕著である。25～28は羽釜である。いずれも口縁端部に強い面取りを有し、体部には左斜行のタタキを施す。

29は瓦質土器であり、羽釜である。精緻な作りであり、精選された粘土を使用している。

30は陶器であり、備前焼の播鉢である。内面に六条一単位の刷目を有する。

31・32は青磁である。いずれも碗であり、31は端部を玉縁状に丸く収めている。32は外面にロクロ目が顕著に残る。

33は白磁である。碗の底部であり、削り出しで作出した高台外面は無釉である。

34は土錘である。紡錘形を呈する。

35は砥石である。四面に使用痕が認められ、使い込まれたものである。

(3) 表採遺物 (Fig.32 : 36・37)

36は青磁である。碗であり、外面に蜜な蓮弁文を有する。高台の内面の中央以外は無釉である。

37は磁器である。近世の碗と考えられ、内外面共に貫入が著しい。

(4) 小結

出土遺物は中世半ばの段階にほぼ限定される。ただし、須恵器の高坏(18)が出土しているため、古墳時代から古代にかけての集落が近くに所在した可能性を考慮する必要があるだろう。

中世遺物で最も際立った出土量が見られたのは土師質の羽釜であり、次に土師質の坏が際立っている。とりわけ土師質の羽釜(25～28)は、胴部外面に左斜行の平行タタキを有すと共に鏝縁部との境に一条の強いナデを施しており、極めて類似した特徴を有する。また、土師質の坏(19)は底部外面に回転糸切痕を有しており、土師質の羽釜と同じ時期の所産と考えられる。羽釜は煮炊きに使う道具、坏は煮炊きしたものを盛る道具であるため、日常的な生活道具と言える。よって、調査において生活を復原できるような遺構は検出できなかったものの、中世半ばの段階において調査区近隣において集落が営まれていたことは確実である。

そして、瓦質羽釜(4・29)は胎土・成形共に非常に精緻な作りであり、搬入品の可能性が考えられる。そして、鎬蓮弁文を有する青磁碗(5・7)や越州窯系青磁皿(11・12)の他、青花碗(13・14)といった大陸からの搬入品が認められるため、この土地における太平洋を介したモノの流通を考える上で重要な資料を提示したと言える。

今後、仁淀川河口部はもちろんのこと水運に適した河口部を有する河川では、当遺跡と同じように大陸からの搬入品とそれに伴う文化の痕跡が残っている可能性を十分に考慮する必要があるだろう。

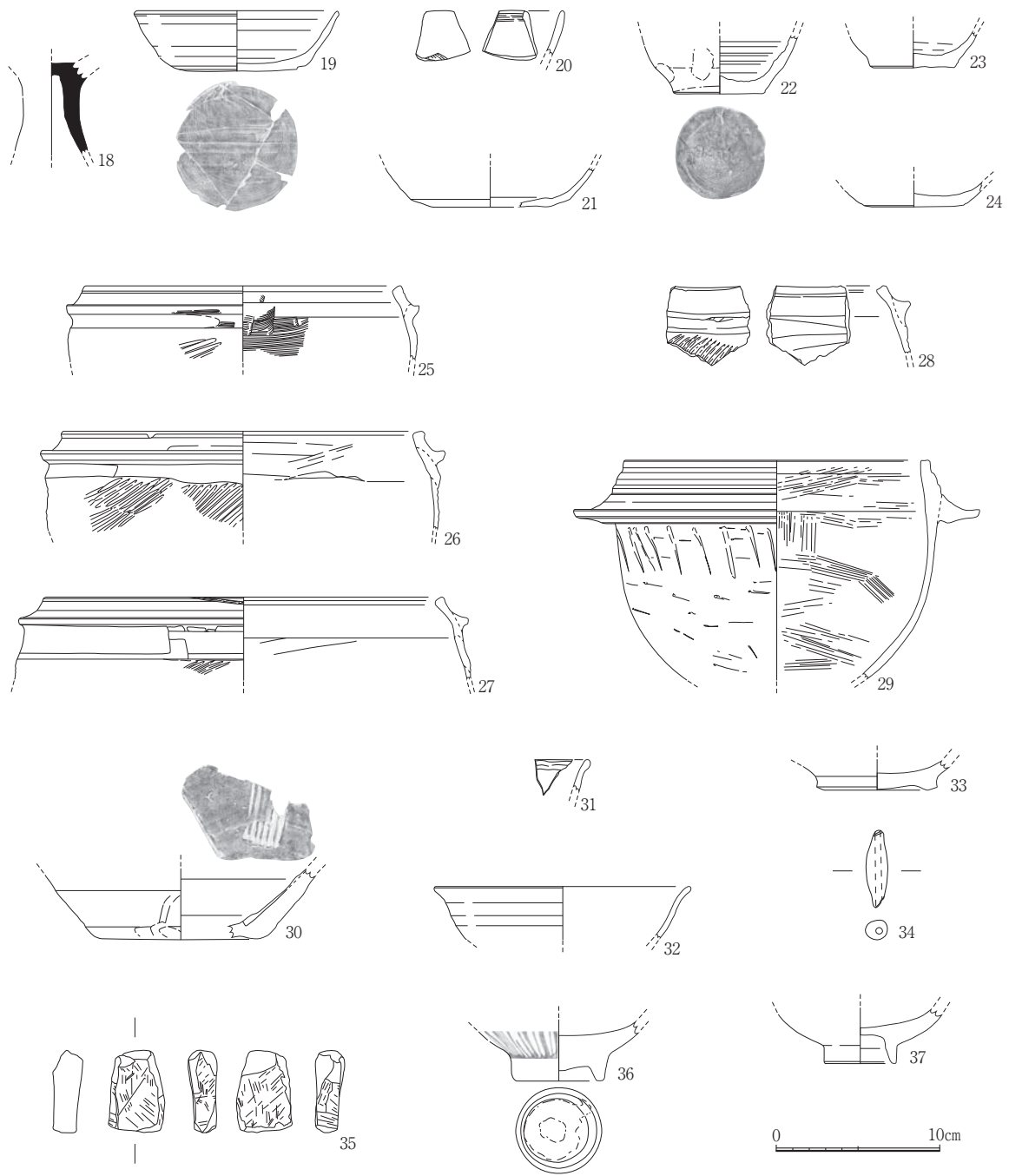


Fig.32 2 - 3区Ⅶ層出土・表採遺物(S = 1 / 4)

表10 2-3区出土遺物観察表

遺物番号	機種	出土地点・層準	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	特徴	備考
1	瓦器 椀	VI	-	-	-	緻密		
2	瓦器 椀	VI	-	-	-	緻密	底部内面に輪状の暗文を有する	
3	瓦質土器 鍋	VI	-	-	-	やや粗	～1mm大の砂粒を含む	
4	瓦質土器 羽釜	VI	21.9	-	-	緻密	～0.5mm大の砂粒を多く含む	体部外面は左から右へのケズリを基調とする
5	青磁 碗	VI	-	-	-	緻密	外面に竊蓮弁文を有する	
6	青磁 碗	VI	-	-	-	緻密	外面に竊蓮弁文を有する	
7	青磁 碗	VI	-	-	-	緻密	外面に竊蓮弁文を有する	
8	青磁 碗	VI	-	-	-	緻密	外面に沈線文を有する	
9	青磁 碗	VI	-	-	-	緻密		
10	青磁 碗	VI	-	-	-	緻密		
11	青磁 皿	VI	-	-	-	緻密	稜花皿	
12	青磁 皿	VI	-	-	-	緻密	稜花皿	
13	青花 碗	VI	-	-	-	緻密	ジ20と同一個体?	
14	青花 碗	VI	13.2	-	-	緻密		
15	磁器 皿	VI	-	-	-	緻密		
16	備前焼 片口鉢	VI	-	-	-	緻密	～0.5mm大の砂粒を多く含む	
17	土錘	VI	最大長 4.05	最大幅 1.1	最大厚 1.05	やや粗	～0.5mm大の砂粒を多く含む	重量4.3g 孔径0.35cm
18	須恵器 高杯 脚	VII	-	-	-	やや粗	～0.5mm大の砂粒を多く含む	
19	土師質土器 坏	VII	12.0	3.7	7.4	緻密	～0.5mm大の砂粒を多く含む	底面に回転糸切痕。最後はヘラ切り離し
20	土師質土器 椀	VI	-	-	-	緻密	～0.1mm大の砂粒を含む	
21	土師質土器 坏	VII	-	-	7.7	緻密	～0.5mm大の砂粒をまばらに含む	
22	土師質土器 坏	VII	-	-	5.4	緻密	～0.5mm大の砂粒を多く含む	底面に回転糸切痕。内面のロクロ目顕著
23	土師質土器 坏	VII	-	-	5.2	緻密	～0.5mm大の砂粒をまばらに含む	内面のロクロ目顕著
24	土師質土器 坏	VII	-	-	6.0	やや粗	～0.5mm大の砂粒を含む	
25	土師質土器 羽釜	VII	19.4	-	-	やや粗	～0.5mm大の砂粒を多く含む	体部外面に左斜行タタキを有する
26	土師質土器 羽釜	VII	21.8	-	-	緻密	～0.5mm大の砂粒を多く含む	体部外面に左斜行タタキを有する
27	土師質土器 羽釜	VII	24.0	-	-	緻密	～0.5mm大の砂粒を多く含む	体部外面に左斜行タタキを有する
28	土師質土器 羽釜	VII	-	-	-	緻密	～0.5mm大の砂粒を多く含む	
29	瓦質土器 羽釜	VII	18.6	-	-	0.1～1mm大の砂粒を含む	角閃石が目立つ	体部外面は右から左へのケズリを基調とする
30	備前焼 播鉢	VII	-	-	10.5	粗	1～4mm大の砂粒を多く含む	
31	青磁 碗	VII	-	-	-	緻密		
32	青磁 碗	VII	15.5	-	-	緻密		
33	白磁 碗	VII	-	-	7.3	緻密		
34	土錘	VII	最大長 4.7	最大幅 1.3	最大厚 1.2	緻密		重量5.2g 孔径0.4cm
35	砥石	VII	最大長 5.0	最大幅 3.4	最大厚 1.75			重量39.8g
36	青磁 碗	表採	-	-	5.2	緻密	外面に蓮弁文を有する	
37	磁器 碗	表採	-	-	2.3	緻密		

第Ⅲ章 第3地点拡張区

1 調査区の概要

第3地点は、上ノ村遺跡の東北部に位置する。新居城と仁淀川堤防に挟まれた面積5,280㎡を測る調査区である。小字名は「古津」「ヲ口ノ内」と呼ばれている。主に中・近世の遺構が認められたが、新居城裾部から縄文晩期土器がまとまって出土したことから、調査区を新居城斜面側に拡張して斜面部に食込むように調査区を設定し第3地点拡張区とした。長軸52.0m、短軸12.0m前後の調査区である。縄文晩期前葉の土器を中心に縄文中期から晩期後葉の刻目突帯文土器、弥生中・後期土器、古墳時代～中・近世の遺物、縄文～弥生時代の石器がコンテナケース約100箱出土している。この地点が長期間にわたって利用されていたことを示している。上ノ村遺跡の中で最も仁淀川に近接する地点にあることから、この地点の空間的意味が問われることになろう。調査区から堤防を越えた河畔には、近世から近代、第二次世界大戦後の一時期まで、対岸の春野町西畑と結ぶ渡し場(十文字の渡し)があったところで、現在もその名残をとどめている。長期間にわたって河川交通の要衝であったことと関係していることが考えられよう。

これらの遺物のほとんどは斜面堆積であり、長期間にわたって斜面に廃棄され続けたことを示しており、新旧逆転した出土状況が頻繁に見られる。しかし後述するように縄文晩期前葉の遺物については、テラス状に削り出された平場や平場の窪みから一括性の高い出土状況を示している。晩期の遺物は城山の南麓からも出土しており、山麓に生活空間が形成されていたことが考えられる。

調査区の微地形は、斜面裾部のラインが東北から西南方向に伸びており、中央部分(3-1-3・4区)が僅かに谷状を呈しており、最も厚い遺物包含層が形成されている。また谷部から北は急勾配を呈しており、そのまま城山北側の断崖絶壁に続いているものと考えられる。

2 調査の方法

調査は、雑木と竹林の伐採から始めて表土を重機で除去した後に、調査区を3地点の調査区割りに対応させて3-1区と3-2区に大きく分けた。さらに3-1区は任意に7つの小区画に分けて遺物の取り上げや地層断面観察を行った。3-1-2区から3-1-7区については北壁で土層断面図を作成した。表土層の下が遺物包含層となっていることからすべて手掘りで進め、斜面の地山が出るまで調査を行った。遺物包含層は最も厚いところでは2m近くを測り、中世遺構面を形成しているシルト層の下に深く堆積していることから、斜面の先端部では現地表下3mほど掘削した。

3-1-3区、3-1-4区のテラスや窪みから一括性の高い縄文晩期前葉の土器が集中出土しているが、その周辺部の土壌は洗浄を行い多くの獣骨や石鏃などを得ることができた。出土石鏃の大部分は洗浄によって得たものである。地山面は凹凸が激しく複雑な微地形をなしているが25cmコンタを入れて最終的な平面図を作成した。

3 地層堆積の状況と各小区の概要

各小区の北壁で堆積状態の観察を行った。各地区ともに複雑な堆積を示しているが、大きく2つの層群から成っている。山側からの堆積物であるA層と仁淀川によって運ばれた河川堆積物で構成されるB層とである。A層は粘性土や風化礫などから成り、縄文時代から近世までの遺物を包含し

ている。B層はシルト、砂、砂礫などから構成されており比較的単純な層準を形成している。

(1) 3-1-1区

長さ8m、幅5mの調査区である。河川の攻撃面に最も近いところから、A層群の堆積はほとんど認められない。傾斜面からの崩落、地滑り等による堆積は絶えず生じていたものと考えられるが、浸食されたものと思われる。表土を除去すると数cmで地山面が露呈し、地山面を覆うようにシルトや砂礫から成るB層群が堆積している。遺物は地山面に張り付くよう少数の縄文土器片が出土している。遺物量は調査区内で最も少ないが、他の地区に比べて縄文後期土器が多く出ているのが特徴である。

(2) 3-1-2区(Fig.33)

長さ10m、幅6mの調査区である。A層群(Ⅱ～Ⅴ・Ⅸ層)の上にB層群(Ⅰ層・Ⅵ～Ⅷ層)が覆いかぶさるように堆積している。A層群ではⅡ層が最も厚く堆積しており、最も厚いところで80cmを測る。図面からわかるように上面は後世の削平を受けている。本来はもっと厚かったものと考えられる。Ⅱ層はⅢ層とともに遺物包含層を形成しており、縄文時代から古代の遺物を多く含んでいる。縄文晩期前葉の土器が最も多い。各層準には、山復から崩落した人頭大あるいはそれ以上の大きさの砂岩礫が認められる。

B層群のⅠ層はシルト層で厚さ1.5m以上を測る。縄文土器～中世遺物を少量含み、ところどころⅡ・Ⅲ層と同様の崩落礫が見られる。Ⅵ～Ⅷ層は砂や砂礫の堆積層で遺物は認められない。

(3) 3-1-3区(Fig.36・37)

長さ8m、幅3.3mの調査区である。ここでもA層群を覆うようにB層群が堆積しているが、両者が相互に堆積を繰り返していることが観察できる。A層群ではⅣ・Ⅴ・Ⅸ・Ⅹ層が遺物包含層を形成している。各層準ともに縄文時代後期から古墳時代にかけての遺物を含んでいるが、縄文晩期前葉の土器が最も多く含まれている。ところどころに砂岩の転落礫が認められる。B層群はⅡ・Ⅲ・Ⅵ～Ⅷ

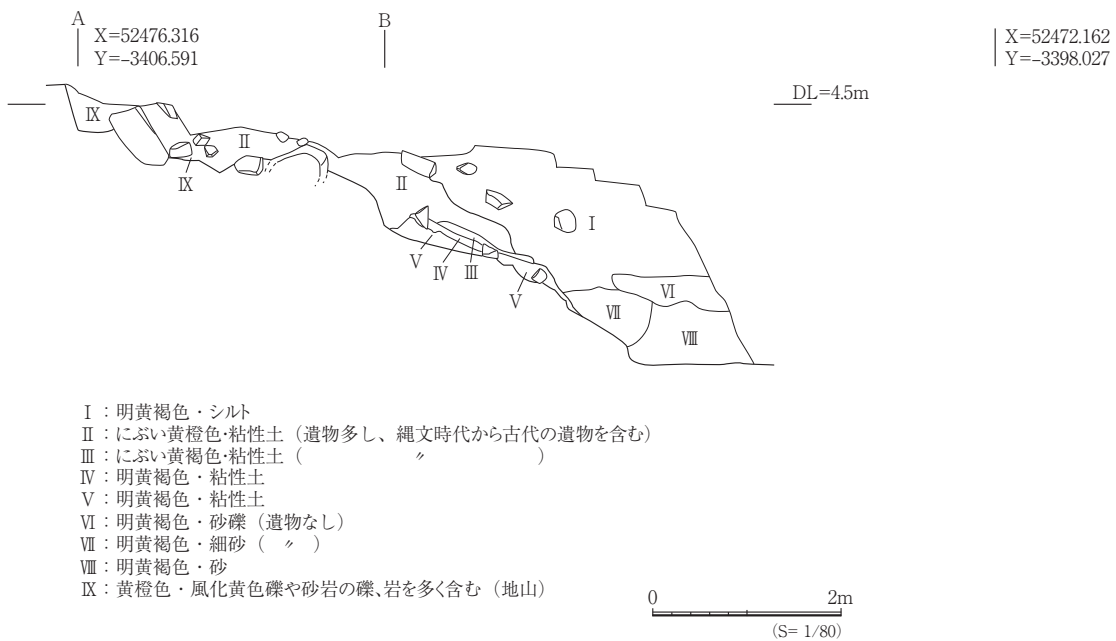


Fig.33 3-1-2区北壁セクション

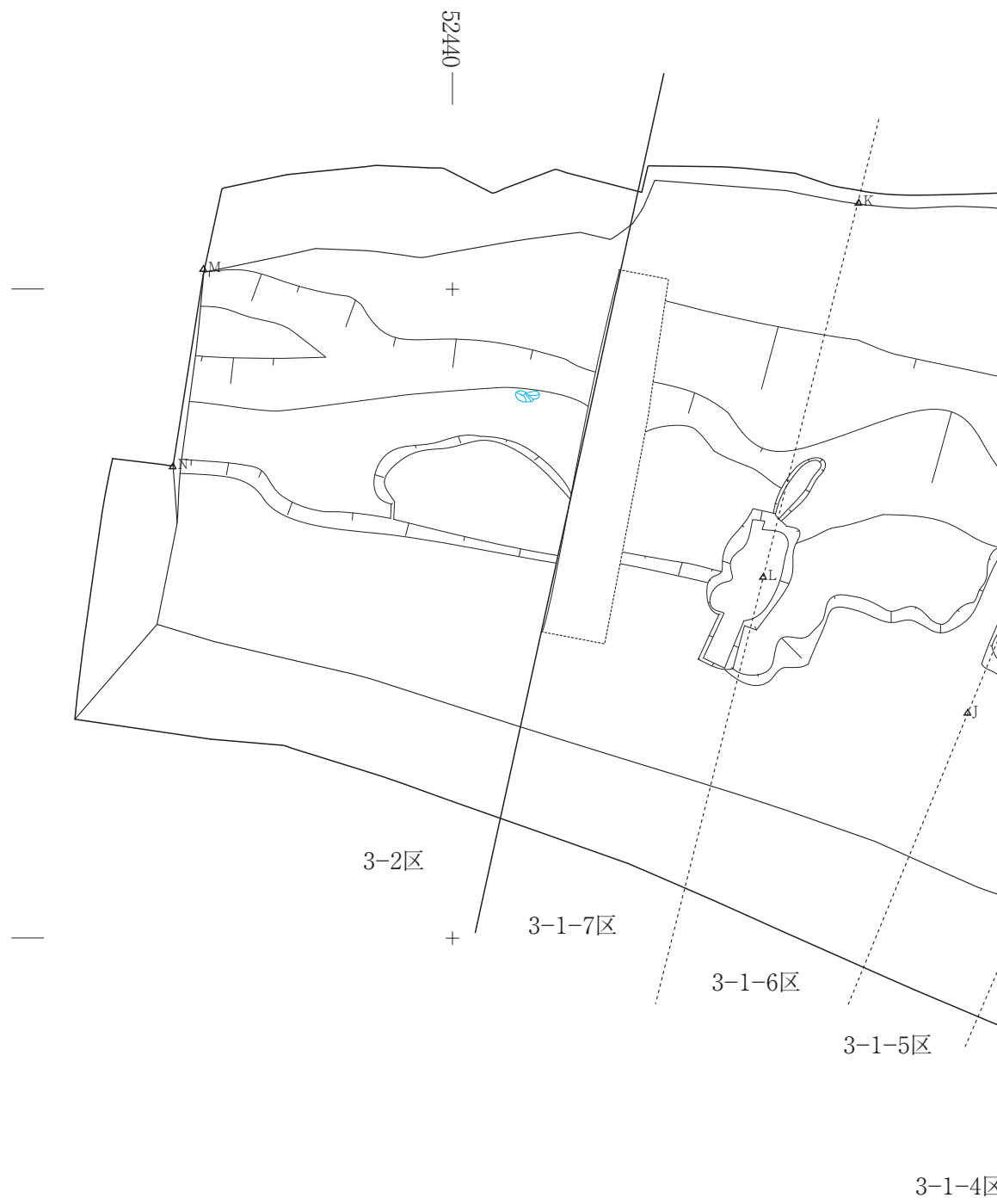
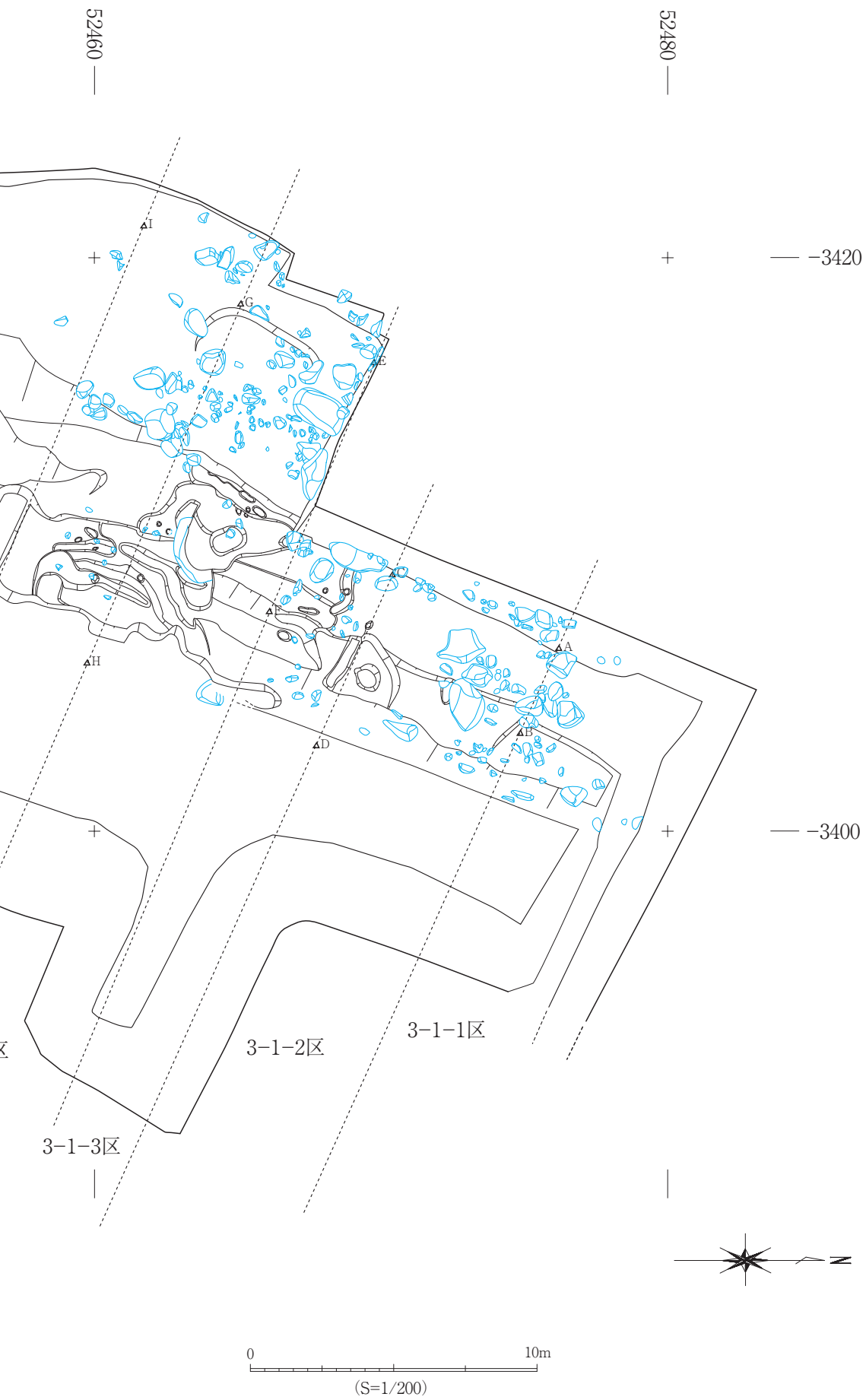


Fig.34 第3地点拡張区全



全体図1

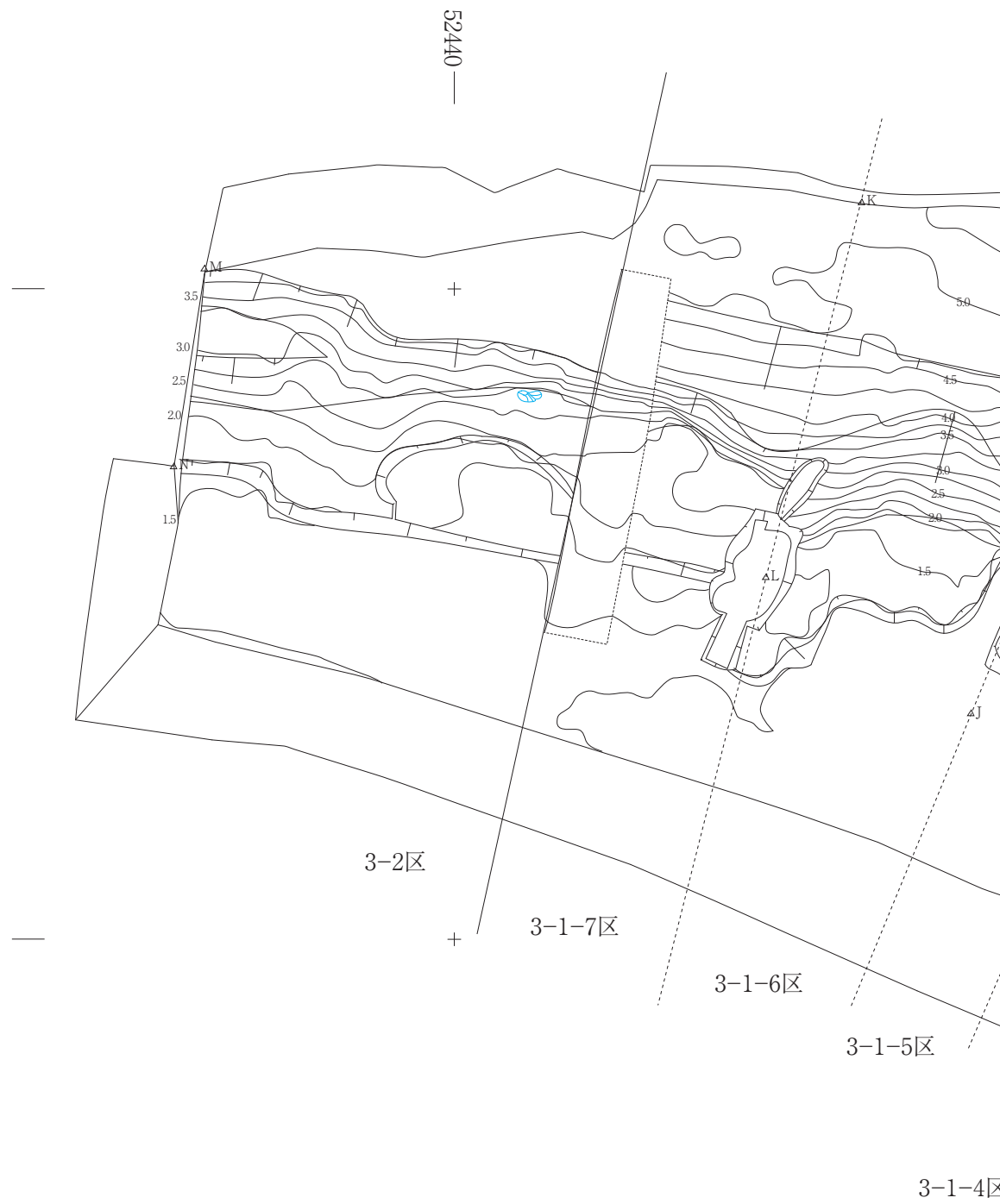
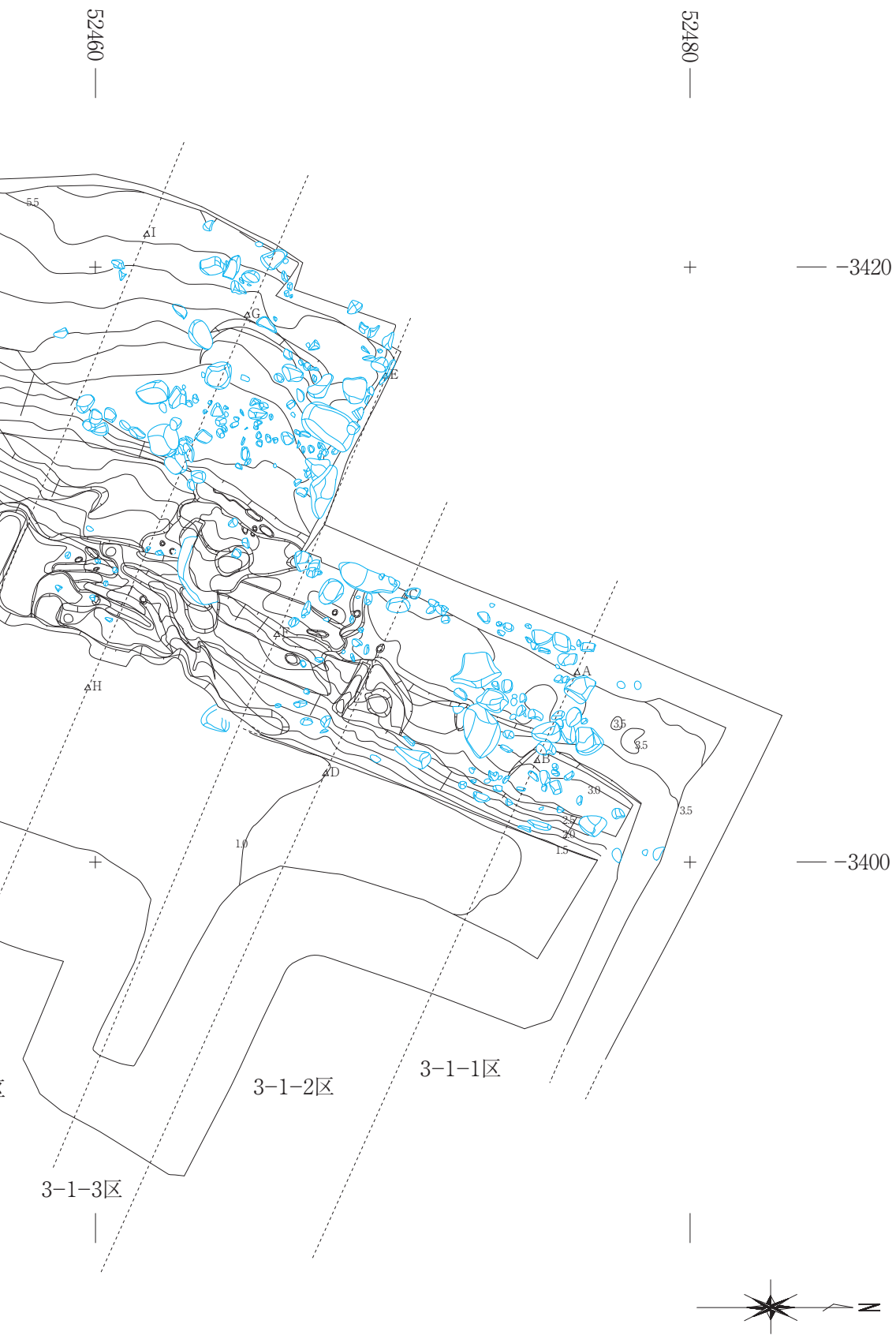


Fig.35 第3地点拡張区全



体图2

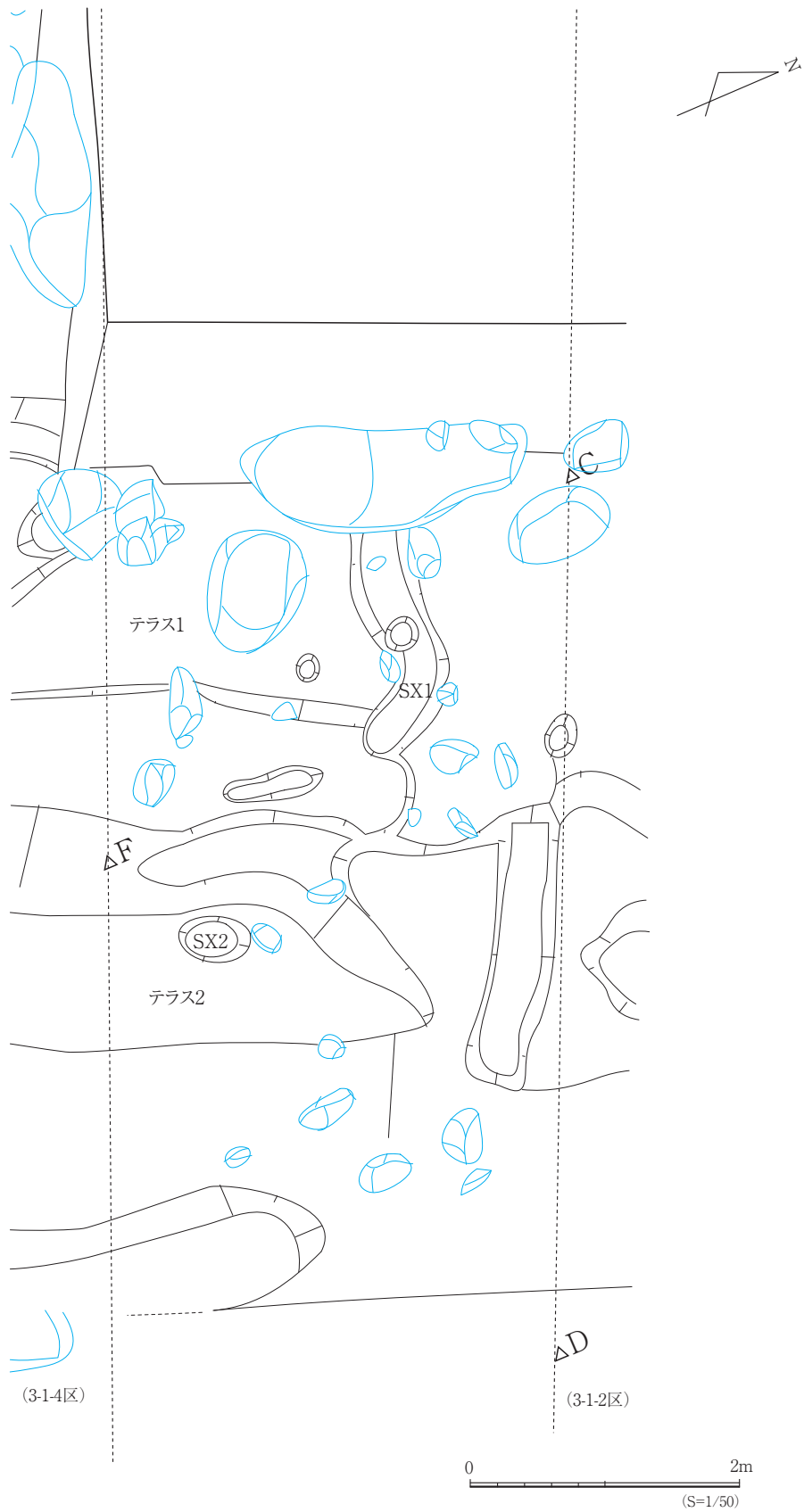


Fig.36 3-1-3区平面図

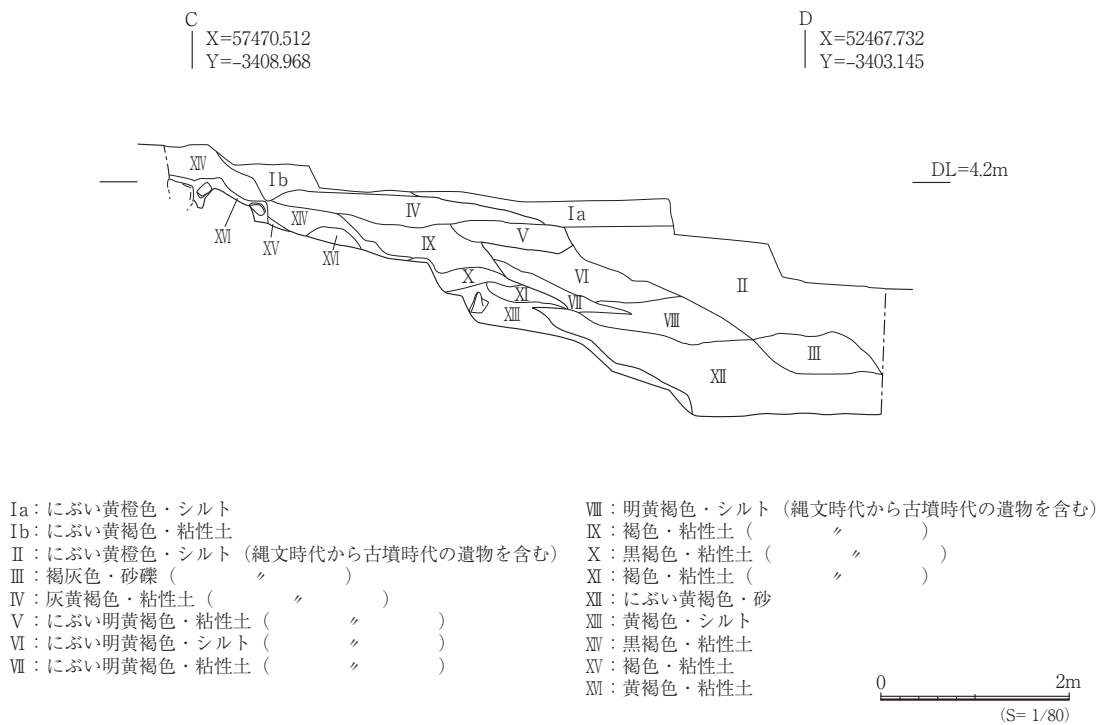


Fig.37 3-1-3区北壁セクション

層から縄文晩期から古墳時代の土器を少量含んでいる。A層群から流れ込んだものである。

山側に平坦部テラス1が、調査区西壁から剥き出している巨岩の下から幅40cm前後、深さ15cmほどの落ち込みSX1が見られる。その下にはテラス2と凹みSX2が見られる。テラス1・2及びSX1・2からは床面から比較的多くの晩期前葉の土器が出土し、炭化物や白色化した骨片も出土している。これらの遺物は晩期前葉の一括性の高いものと思われる。テラス2は、後述する3-1-4区のテラス4に続いている。

遺物はI群土器：テラス1・2、SX1・2の一括性の高い土器、II群土器：VIII・XV・XVI層出土の土器で晩期前葉を中心としながらも古墳時代までの遺物を含む。III群土器：XIV層出土の土器で内容はII群と同じ、IV群土器：Ia・b層、II層出土の土器で晩期から青磁までが含まれる。

(4) 3-1-4区 (Fig.38・39)

長さ14m、幅5mの調査区である。全体を通して最も出土遺物が多かった。A層群を削りながらB層が被さっている様子が観察できる。A層群のIV層は層厚1mを測る遺物包含層で、縄文時代晩期から古代の土器を含んでいる。東部分が強く削平されているところから本来はもっと厚く堆積していたことがわかる。VI層は無遺物層、VII層は縄文晩期土器と炭化物を多く含み、VIII・IX層は晩期土器と炭化物に加えて白色化した骨片を多く含んでいる。地山近くに堆積するVI～IX層は晩期前葉の純粋な包含層として捉えることができる。

図示したように、この調査区では3つのテラス状地形が作られている。山側のテラス2には3m×2mほどの範囲から晩期前葉の土器が地山面に貼付いた状態で大量に出土しており、図示できたものだけでも100点近くを数える。破片も他の調査区に比べて大きく、一括性の高い出土状況を示している。テラス2の下には溝状の落ち込みSX1を挟んでテラス3が、さらにその下には狭小ながら3-1-3

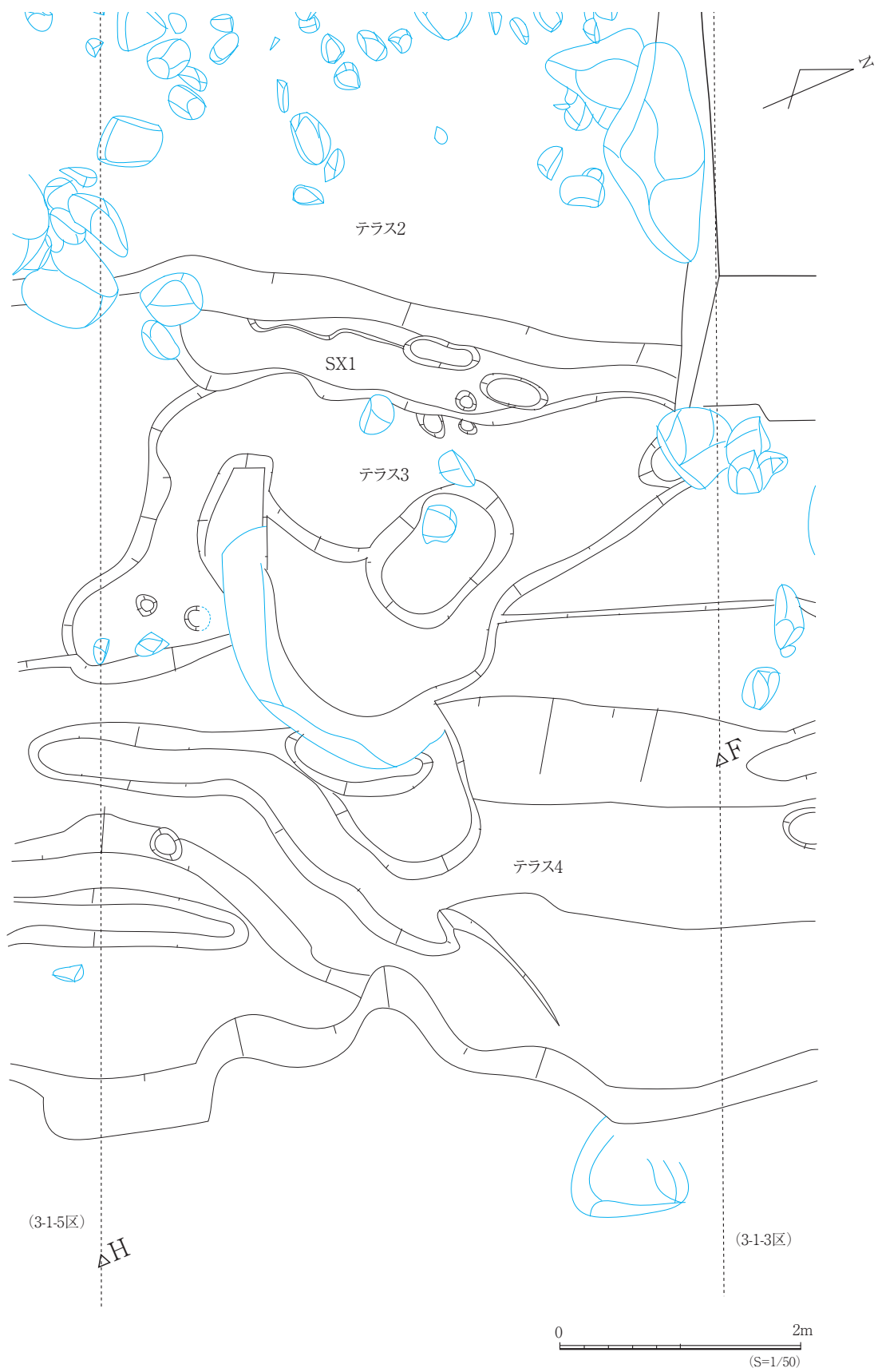


Fig.38 3-1-4区平面図

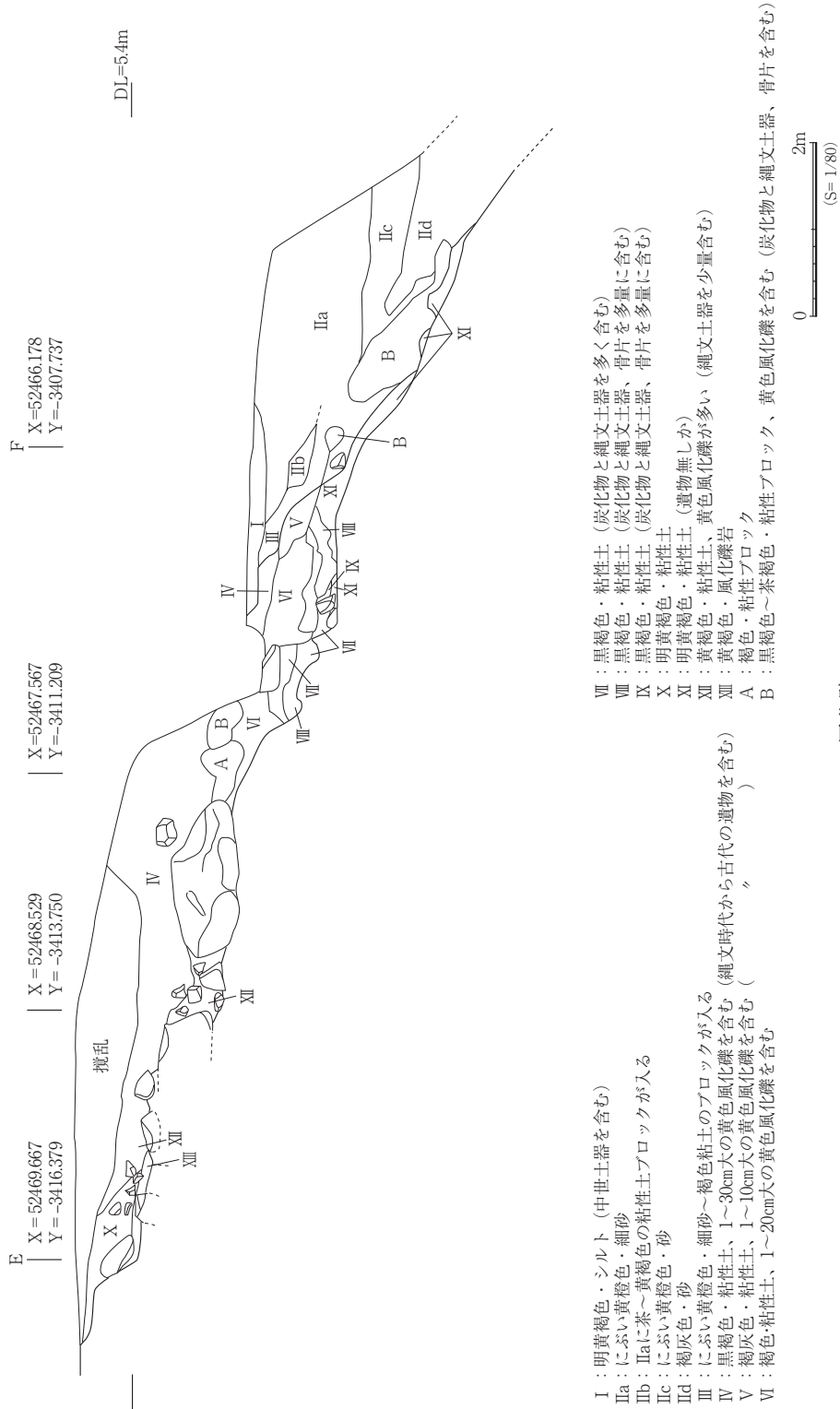
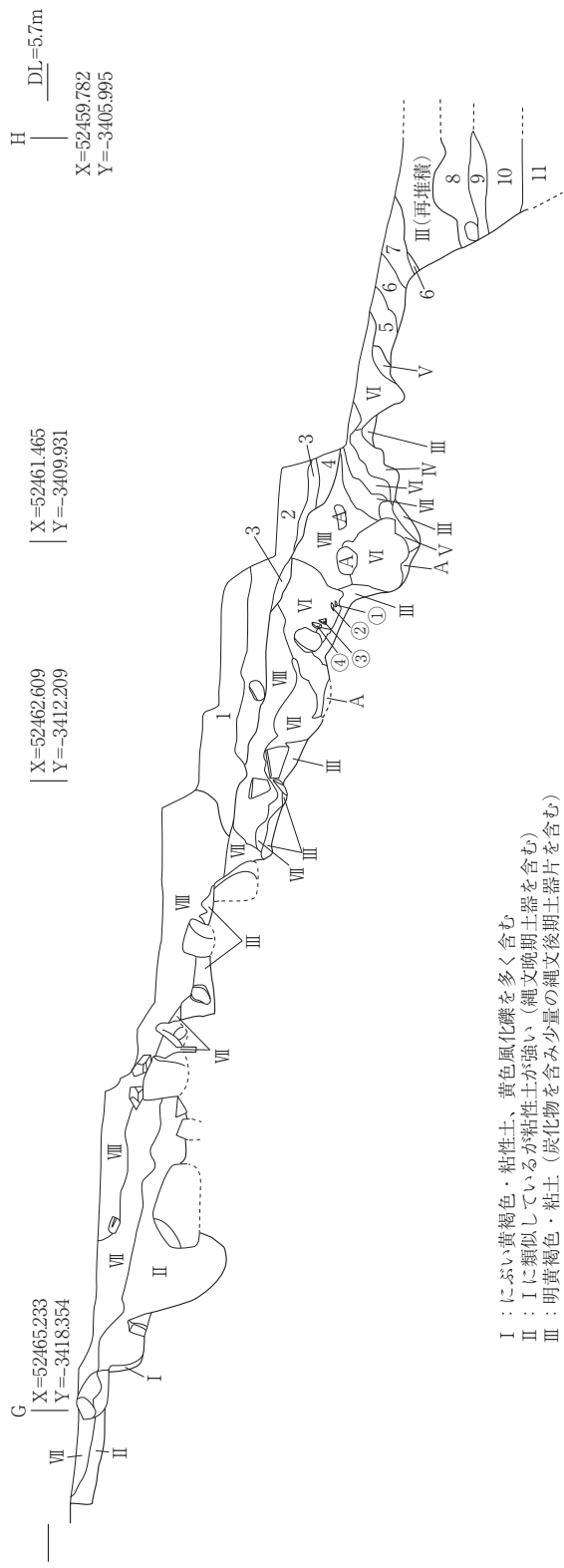


Fig.39 3-1-4区北壁セクション



Fig.40 3-1-5区平面图



G
 X=52465.233
 Y=-3418.354

H
 DL=5.7m
 X=52461.465
 Y=-3409.931
 X=52459.782
 Y=-3405.995

I : にぶい黄褐色・粘性土、黄色風化礫を多く含む
 II : Iに類似しているが粘性土が強い(縄文晩期土器を含む)
 III : 明黄褐色・粘土 (炭化物を含み少量の縄文後期土器片を含む)
 IV : 明黄褐色・砂質土
 V : 明黄褐色・粘性土 (縄文土器・炭化物・骨片を多く含む)
 VI : 暗褐色・粘性土。山側になると、やや赤みを帯びた黄色風化礫を多く含むようになる(縄文土器・炭化物を多く含む)
 VII : 褐色・粘性土
 VIII : 黒褐色～茶褐色・粘性ブロック、黄色風化礫を含む(炭化物と縄文土器、骨片を含む)
 A : 炭化物を多く含む

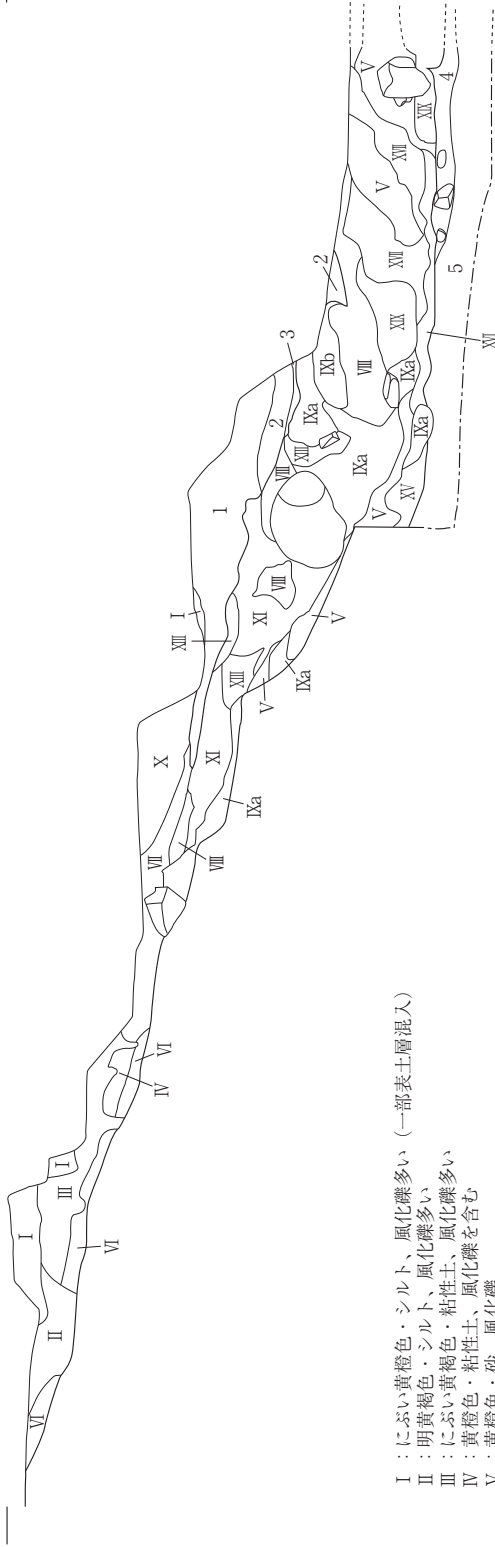
- 1 : 浅黄色・シルト
- 2 : 浅黄色・シルト
- 3 : 2に暗茶色粘土のブロックが入る
- 4 : にぶい黄色・シルト
- 5 : にぶい黄色・砂
- 6 : 黄色風化礫を含む砂
- 7 : にぶい黄色・シルト
- 8 : 暗灰黄色・砂
- 9 : オリーブ褐色・砂礫
- 10 : オリーブ褐色・粗砂
- 11 : オリーブ褐色・砂

0 2m
 (S=1/80)

Fig.41 3-1-5区北壁セクション

J
 X=52455.952
 Y=-3407.029
 DL=6.8m

I
 X=52461.864
 Y=-3421.137



I : におい黄橙色・シルト、風化礫多い (一部表土層混入)

II : 明黄褐色・シルト、風化礫多い

III : におい黄褐色・粘性土、風化礫多い

IV : 黄橙色・粘性土、風化礫を含む

V : 黄橙色・砂、風化礫

VI : 明黄色・粘性土、黄色風化礫が多い

VII : におい黄褐色・シルト、風化礫を少し含む

VIII : 黒褐色・粘性土

IXa : 明黄褐色・粘土 (炭化物を含み少量の縄文後期土器片を含む)

IXb : 明黄褐色・粘土 (炭化物を多量に含み少量の縄文後期土器片を含む)

X : におい黄褐色・粘性土、風化礫の微粒を含む

XI : 褐色・粘性土。山側に近くなると、やや赤みを帯びた黄色風化礫を多く含むようになる (縄文土器・炭化物を多く含む)

XII : におい黄褐色・粘性土

XIII : におい黄褐色・砂礫

XIV : 明黄褐色・粘土

XV : 明黄褐色・粘土と砂、5~10cmの風化礫を含む (縄文土器を含む)

XVI : におい黄褐色・シルト、風化礫を含む

XVII : におい黄褐色・シルト、風化礫を含む

XVIII : におい黄褐色・シルト

XIX : におい黄褐色・シルト

1 : 浅黄色・シルト

2 : 浅黄色・シルト

3 : におい黄色・細砂

4 : 暗褐色・粘性土にチャートの小円礫 (2~3cm)、人頭大の円礫、粗砂風化礫が混入している

5 : オリーブ褐色・粗砂

Fig.42 3-1-6区北壁セクション

K
 | X=52452.544
 | Y=-3422.722

| X=52451.493
 | Y=-3418.723

| X=52451.105
 | Y=-3417.105

| X=52450.653
 | Y=-3415.324

L
 | X=52449.610
 | Y=-3411.210

DL=5.1m

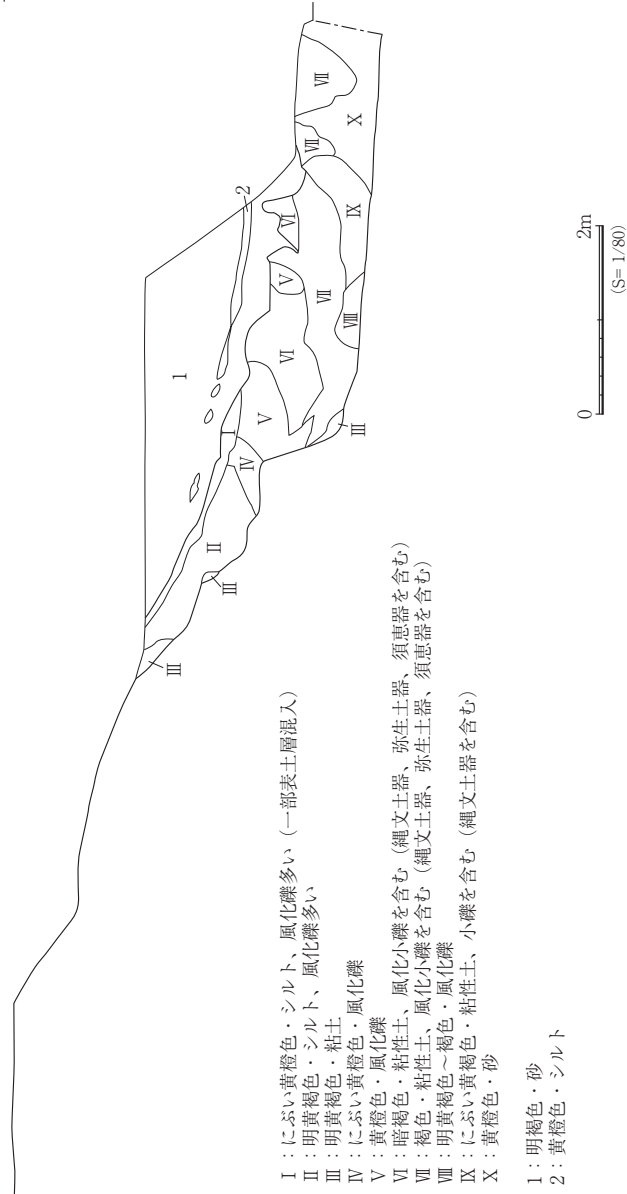


Fig.43 3-1-7区北壁セクション

区のテラス2から続くテラス4がある。各テラスやSX1からは、一括性の高い状態で晩期前葉の土器や石器、多量の炭化物や骨片が出土している。これらのテラスや落ち込みは晩期前葉に地山を削平して作られた遺構である可能性もある。

B層群のI層は中世遺物を含んでいる。II a～II b層はシルトや砂で、II c層中には山側から崩落した黄褐色粘性の小ブロックが見られる。ここにもBとした晩期包含層の大きな塊が転げ落ちている。このB層群は全体的に遺物が少ない。

遺物は、I群土器：各テラス及びSX1出土の一括性の高い土器、II群土器：VI～VII層出土土器で晩期前葉を中心に弥生後期土器を含む。III群土器：IV層出土土器で晩期前葉を中心としながら古代まで含む。IV群土器：I～III層出土土器、B層群に含まれる土器である。これらのうちI群土器は、3-1-3区のI群土器と共に今後晩期前葉の基準資料として位置付けられる重要な資料となるであろう。

(5) 3-1-5区(Fig.40・41)

長さ17m、幅4mの調査区である。地山面が西から東に向かって比較的緩やかな勾配で傾斜しているが、東端で急激に落ち込み砂礫(8～11層)が厚く堆積している。A層群の上にシルトを中心とするB層群の1～7層が被さっている。A層群のVIII層は最大層厚80cmを測り、晩期前葉の土器を中心に含みながらも弥生後期～古墳時代、少数ではあるが中世土器も含んでいる。中央部から東は上部をB層群(I層)に侵食されていることがわかる。VIII層の下層には縄文晩期土器を含んだII・III・VI・VII層が堆積しているが、中央部分から東では層位の逆転現象なども見られ複雑な堆積を示している。II・III層は安定した一次堆積の可能性はあるが、遺物量は少ない。VI・VII層は比較的多くの遺物を含むが二次堆積であり、特にVII層はブロック状をなしていることから崩落によるものと考えられる。B層群(5層)の上にA層群(VI層)が被さり、A層群(VIII層)の上にB層群が堆積し、河川堆積と山側からの堆積が交互に生じて、山麓の平場が形成されている過程が観察できる好例である。

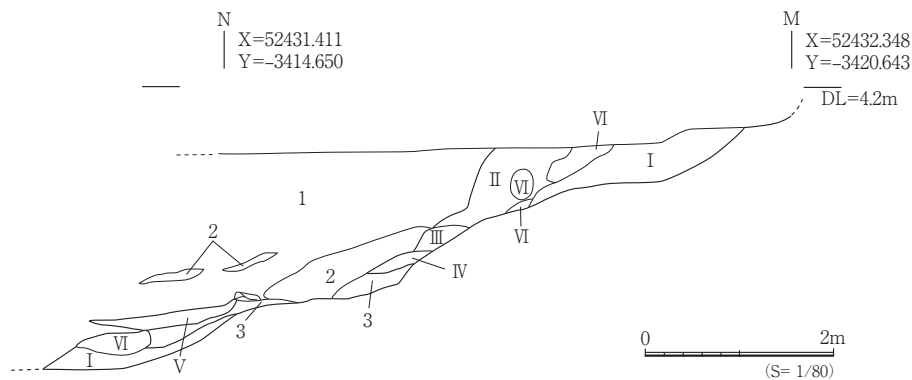
平面的に見れば、斜面東部に溝状の凹みが2箇所(SX1・2)に見られ、主にVI層が堆積しており比較的多くの晩期前葉の土器が出土していた。一括性の可能性があるものと期待しながら掘り進めたが床面で弥生後期土器片が出土した。遺物は、VIII層出土のものを上層、II・III・VI・VII層出土のものを下層とし、それにSX1・2出土の遺物を大きく3つに分けて取り上げた。VIII層は上述の通り中世までの遺物を含み、下層とSX1・2も縄文晩期前葉を中心としながら僅少ではあるが弥生後期土器を含んでいる。II・III層出土遺物は晩期前葉の一括性が高いものと考えられる。

(6) 3-1-6区(Fig.42)

長さ18m、幅7mの調査区である。B層群である4・5層の上にVIII・IX a層など山側からの崩落度が堆積しその上にB層群(1～3層)が堆積している。山側の上部分に見られるVI層が晩期前葉の包含層である可能性があるが、他の層準からは縄文から古代の遺物が混在して出土している。これまでの調査区に比べて遺物が少なく、古代など新しい時代の遺物の割合が多い。

(7) 3-1-7区(Fig.43)

長さ16m、幅6mの調査区である。山側の半分近くは表土を除くと地山面である。西側の平坦部は後世の削平によるものである。山側からの堆積土I～IX層の上にB層群の1層が厚く堆積している。VI・VII層などから遺物が出ているが、縄文から古代の遺物が混在しており、3-1-6区以上に古代の遺物が多い。1層からは中世土器が出土している。



- I : 明黄褐色・粘土、黄色風化礫 (1~10cm大) を多く含む
 II : にぶい黄褐色・粘性土、黄色風化礫 (1~5cm) を含む
 III : 明黄褐色・粘性土、砂を含む
 IV : 明黄褐色・粘性土、黄色風化礫 (1~2cm) を多く含む
 V : IIIに黄色風化礫、砂岩などを含む (砂岩は円礫、風化礫は角礫)
 VI : 暗褐色・粘土、風化礫を多く含む (炭化物と縄文時代から古代の遺物を含む)

- 1 : にぶい黄褐色・砂 (西部は黄色風化礫を所々含む)
 2 : 浅黄橙色・シルト
 3 : 明黄褐色・砂

Fig.44 3-2区南壁セクション

(8) 3-2区 (Fig.44)

長さ15m、幅12mの調査区である。3-1-7区以上に山側からの堆積は少ない。II・III層など山側からの堆積土を抉り取るようにして河川堆積層の1層が厚く堆積している。I~VI層まで縄文中期~古代までの遺物を含むが細片が多く図示し得たのは僅かである。

4 出土土器

(1) 縄文土器分類

ここでは、各小区別に出土土器について見ていくが、全体の8割近くを縄文晩期の土器が占めているので、晩期土器を中心に各器種別に型式分類を行い、それに従って述べていくことにする。全体の形状が確認できるものがほとんどないために、主として口縁部形態を中心に分類を試みた。

① 深鉢 (Fig.45・46)

I類: 縄文中期土器。

II類: 縄文後期土器で、口縁部の特徴から6つに分類した。

- A: 内湾口縁部の外面に沈線による文様帯を有する。
- B: 口縁部外面に縄文帯を有し頸部は無文。片粕式土器である。
- C: 口縁部上面を肥厚させ短沈線を施文する。
- D: 鐘崎式土器である。
- E: 口縁部外面に凹線文を施す。福田K3式に該当する。
- F: 口縁部外面無文。

III類: 口縁部が上に拡張され文様帯を形成する。口頸内外面はほとんどナデ仕上げである。精選された胎土で褐色に発色するものが多い。

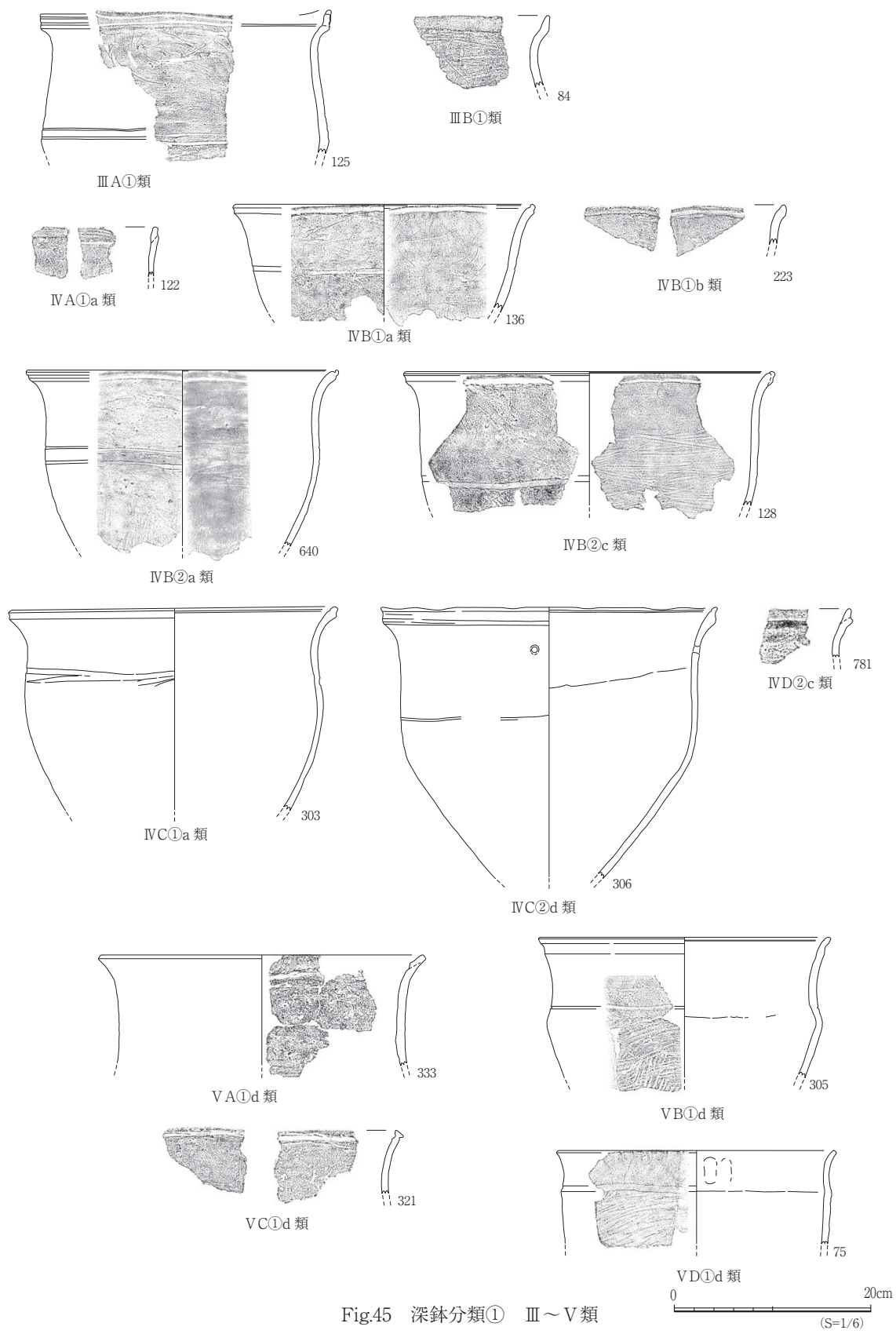


Fig.45 深鉢分類① III～V類

A：口縁部が「く」字状に屈曲して立ち上がり外面に沈線文を施す。波状口縁を有し、波頂部に点文を持つ例がある。頸胴部界に1～2条の沈線を施す例が多い。

B：口縁部文様帯が無文。

C：口縁部に沈線文を施し、頸部から屈曲せずにそのまま口縁部が形成される。

さらに口唇部の形態から2つに分けられる。

①：口唇部を面取る。②：口唇部を丸くおさめる。

IV類：口縁部に無刻目突帯を有する。頸胴部の基本形や器面調整、胎土はⅢ類に類似する。内面の沈線の有無や突帯形状、口唇部形態で細分される。

A：口縁部内面に段を持つ。

B：口縁部内面に段状あるいは削り出しによる沈線を施す。

C：口縁部内面に沈線を有し、まれに2条施文も見られる。

D：段も沈線もない。

口唇部の形態による分類

①：口唇部を面取る。②：口唇部を丸くおさめる。③：口縁部が尖り気味。

突帯の形態による分類

a：口縁下端に僅かに張り出して突帯状を呈する。b：微隆起帯状を呈する。c：三角形状を呈する。d：断面台形や太い三角形状を呈する。

V類：無刻突帯は有しないが全体的な形状はIV類に似る。IV類が半精製深鉢であったのに対して粗製である。口縁部内面の処理や口唇部形態、口頸部内外面の調整などによって細分される。

A：口縁部内面に段を持つ。

B：口縁部内面に沈線を持つ。

C：口縁部内外面に沈線を持つ。

D：口縁部内外無文。

口唇部の形態による分類

①：口唇部を面取る。②：口唇部を丸くおさめる。③：口縁部が尖り気味。

器面調整による分類

a：内外面条痕。b：外面条痕。内面ナデ。c：外面ナデ。内面条痕。d：内外ナデ。

VI類：上胴部で肩が張らずに口頸部が緩やかに外反する粗製深鉢である。口縁部内面の沈線の有無や全体の形状などによって細分される。口唇部形態と器面調整の分類は、V類と同じである。

A：口縁部内面に段を持つ。

B：口縁部内面に沈線を持つ。

C：口縁部内外面に沈線を持つ。

D：口縁部内外無文。

E：口縁部に刻目を有する。

F：頸胴部界に段を有する。

VII類：口頸部が上胴部から大きく外反する。粗製深鉢である。分類基準はVI類と同じである。

VIII類：直線的にのびる口縁部を有する。形態的な分類では、VII類までのA～Fに加えて、口縁部にリボン状突起を持つGが登場する。

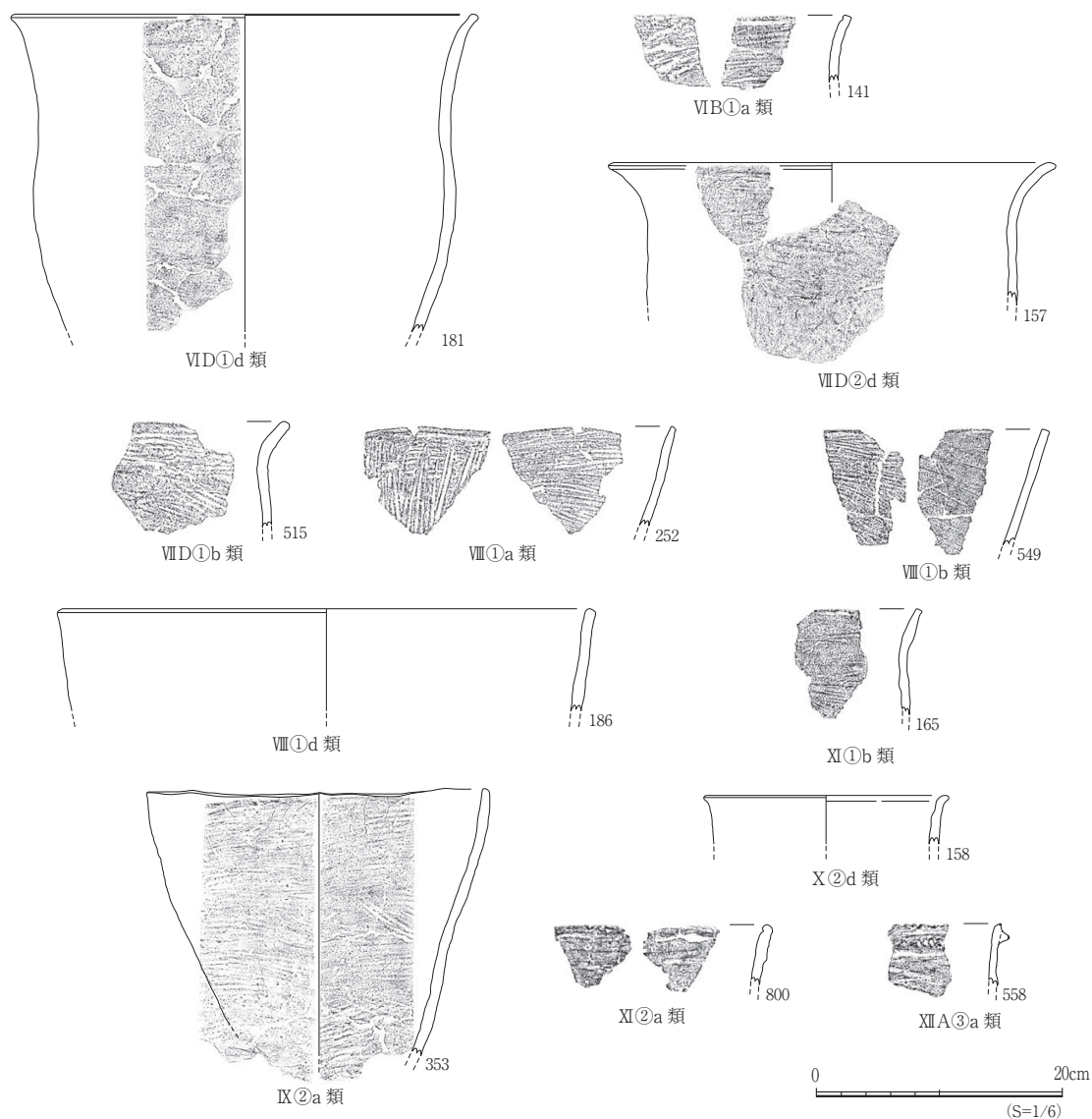


Fig.46 深鉢分類② VI～VII類

IX類：口縁部が内湾気味に立ち上がる。粗製深鉢である。口唇部形態と器面調整によって細分されるが、基準はこれまでと同様である。

X類：直線的に立ち上がった上胴部から口縁部が短く外反する。口唇部形態と器面調整によって細分されるが、基準はこれまでと同様である。

XI類：口縁部が外方に肥厚して段状をなす。口唇部形態と器面調整によって細分されるが、基準はこれまでと同様である。

XII類：刻目突帯文土器である。

A：口唇部に刻目を施す。

B：口唇部に刻目を施さない。

口唇部形態はこれまでの通り①、②、③類に分けられる。

突帯の形状による分類ができる。a：大きな三角形。b：中型の三角形。c：細くて扁平。

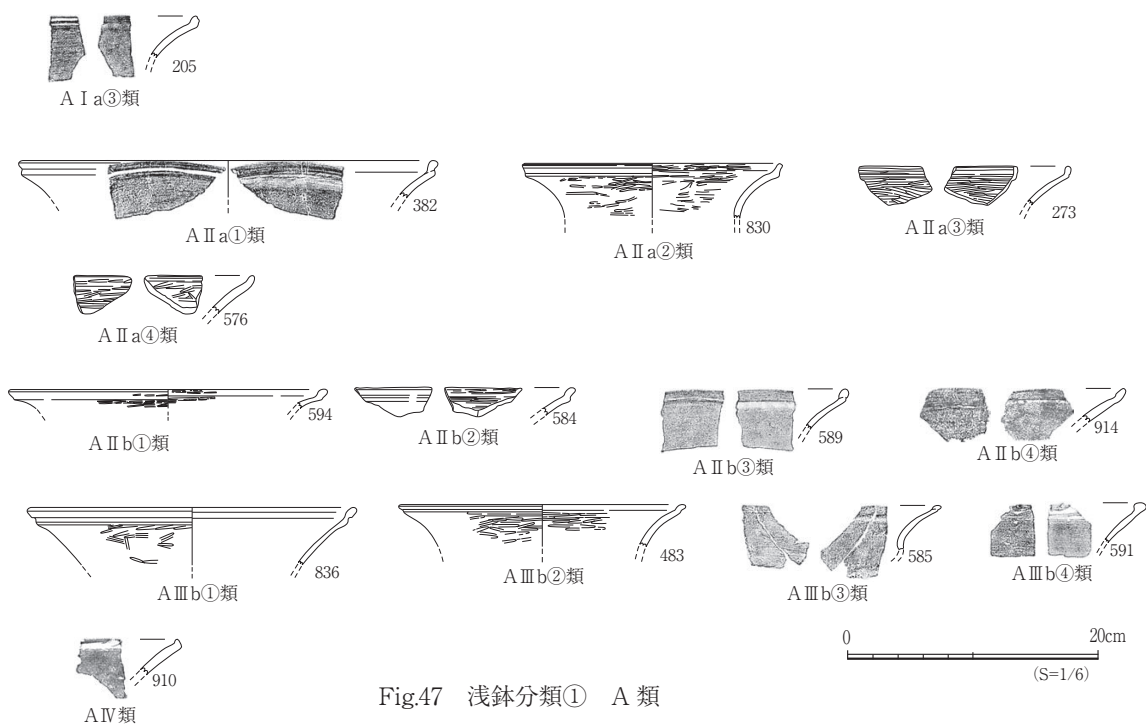


Fig.47 浅鉢分類① A類

② 鉢

I類:コップ状を呈する。

II類:椀状を呈する。

③ 浅鉢 (Fig.47 ~ 50)

全て黒色磨研土器である。全体的な器形でA~M類の13類に大別し、口縁部の形態や文様などによってさらに細分することができる。

A類:長い頸部が大きく外反して立ち上がる。口縁部の形態や文様によって以下のように細分される。

I:口縁部が直立。

II:口縁部が外方に傾く。

III:口縁部がほとんど立ち上がらないか水平にのびる。

IV:口縁端部をつまみ上げる。

a:口縁部が内側に肥厚しない。

b:口縁部が内側に肥厚する。

①:口縁部外面に段状の抉り。②:口縁部外面が凹状を呈す。③:口縁部外面に沈線。

④:口縁部に何も施さない。⑤:口縁部内外面に沈線。⑥:口縁部内面に沈線。

⑦:口縁部内面に段を有す。

B類:全体的な形態はA類に似ているが、頸部の長さがA類に比べて短い。他の属性分類はA類と同じである。

C類:口頸部の長さが胴部の長さに比べて著しく短い。頸部は丸みを帯びて外反する。次の属性に

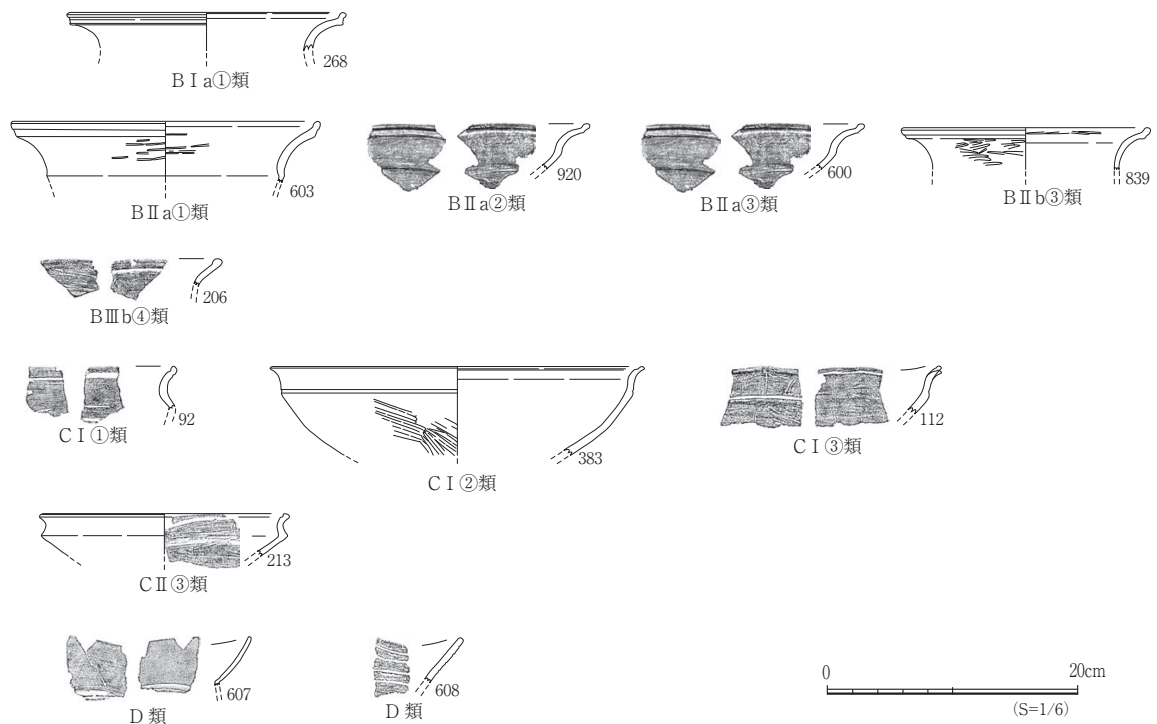


Fig.48 浅鉢分類② B~D類

よって細分される。波状口縁を有するものがある。

I：口頸部長が3cm前後、あるいはそれ以上の長さを有するもの。

II：口頸部長が2cm前後、あるいはそれ以下のもの。

- ①：口縁部内面にしっかりした段を有する。
- ②：口縁部内面に弱い段を有する。
- ③：口縁部内面に沈線を有する。
- ④：口縁部に段も沈線もないもの。

D類：内側に稜をなして長めの口縁部が内湾して立ち上がる。頸部外面は無文のものと沈線による文様が施される例が見られる。

E類：クランク状に屈曲した口頸部を有する。頸部長や口縁部形態によって細分される。

I：頸部長が2cm前後あるいはそれ以上の長さを有する。

II：頸部長が1～2cmを測る。

III：頸部長が1cm未満。

- ①：口縁部内面に段を有する。
- ②：口縁部内面がカマボコ状に肥厚する。
- ③：口縁部内面に沈線を有する。
- ④：口縁部内面に何も施さない。

F類：強く張り出した胴部から頸部が直線的に立ち上がり口縁部にいたる。以下のように細分される。

I：頸部長が2～3cmを有する。

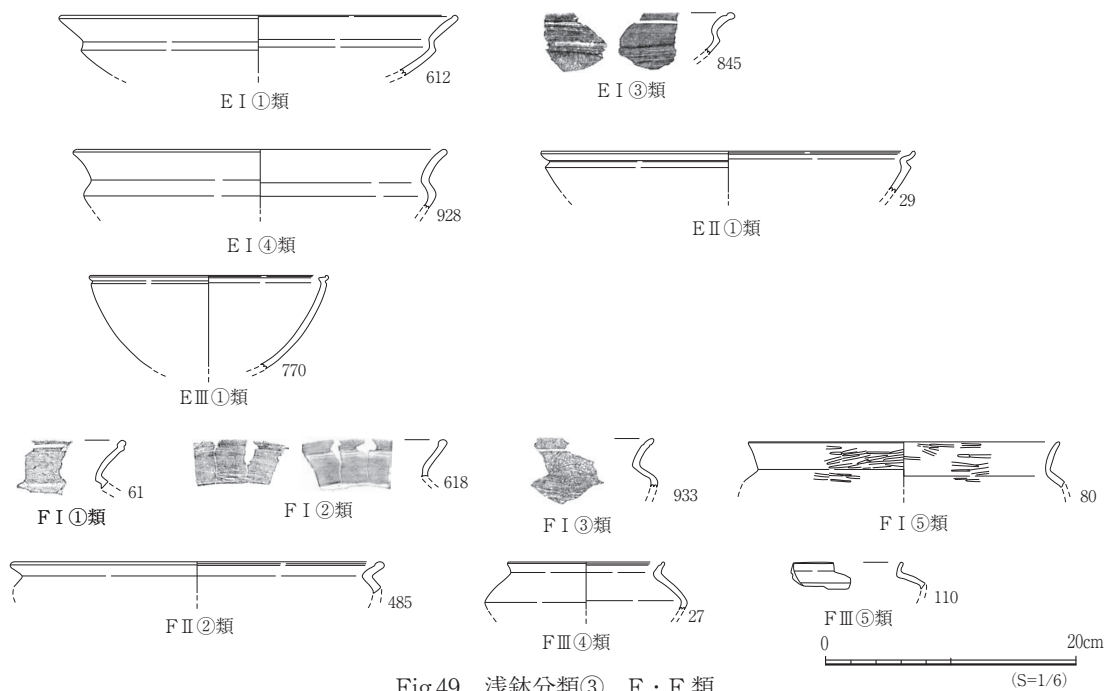


Fig.49 浅鉢分類③ E・F類

II:頸部長が1～2cmを有する。

III:頸部長が1cm未満のもの。

- ①:口縁部外面に沈線、内面は段状を呈する。
- ②:口縁部内面が肥厚する。
- ③:口縁部内外面に沈線を施す。
- ④:口縁部内面に沈線を施す。
- ⑤:口縁部に何も施さない。

G類:椀状を呈する。外面に沈線による文様を有するものがある。以下のように細分されるがD類と判別し難い例もある。

- ①:口縁部内面に弱い段を有する。
- ②:口縁部内面がカマボコ状に肥厚する。

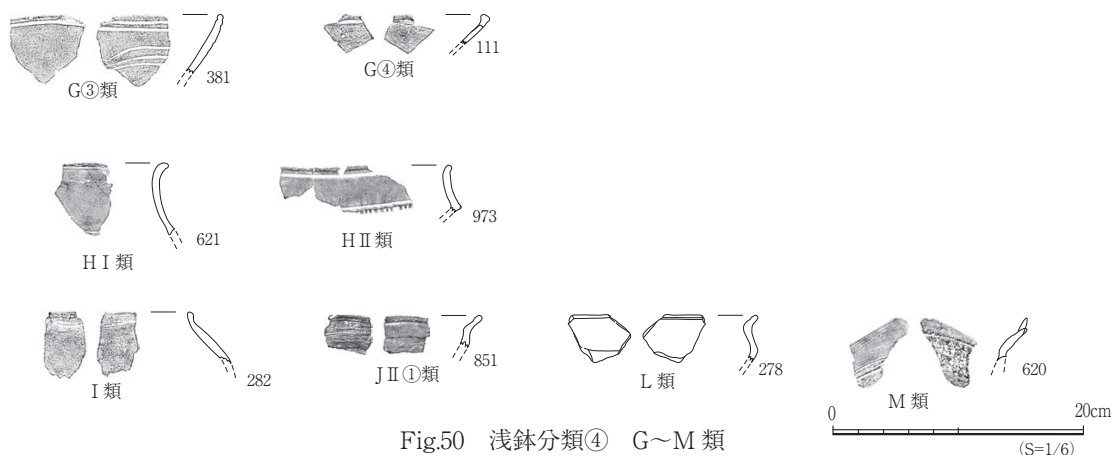


Fig.50 浅鉢分類④ G～M類

③:口縁部内面に沈線を有する。

④:口縁部に突起を有する。

⑤:口縁部に何も施さない。

H類:肩部で内側に強く屈曲し、外反する頸部を有する。

I:比較的長い頸部を有する。

II:短く立ち上がる頸部を有する。

I類:短な口縁部が内傾して立ち上がる。

J類:椀状の体部から直線的に外方に立ち上がる口縁部を有する。

I:頸部が比較的長く立ち上がる。

II:頸部が短く立ち上がる。

①:口縁部内面に段を有する。

②:口縁部内面に沈線を施す。

K類:長くのびる頸部が緩く外反しながら立ち上がる。

L類:逆「く」字状に屈曲した頸部から口縁部が外反。

M類:いわゆる方形浅鉢である。

(2) 各調査区出土の土器

① 3-1-1区(Fig.51) (1～11)

土器の量は僅少であるが、この特徴は晩期深鉢とともに後期の深鉢(1～7・10)が多く出土していることである。1・2・5は口縁部が内湾し外面に文様を有するII A類である。1は窓枠状の沈線文、2は横走る沈線が描かれている。ともに内外面ナデ調整が施されている。5はLRの縄文地に入組文が施されている。3はII D類で口縁部が外方に肥厚し口縁部上面と外面に沈線、上胴部外面にも沈線が見られる。内外面ナデ調整である。鐘崎式土器である。石英や角閃石、雲母などを含み田村遺跡から出土しているものと共通の胎土を有している。4・7はII B類である。口縁部と胴部にLRの縄文を施し頸部は無文である。4は口唇部にも施している。10はII B類の胴部である。II B類は片粕式土器でそれぞれ特有の赤褐色に発色する胎土である。6はVI D類で内外面二枚貝条痕が施されている。8はVII D類で外面に条痕が見られる。9は深鉢底部である。上底で外底には二枚貝の圧痕が見られる。褐色精緻な胎土でIV類の底部と考えられる。11は撚糸文の上に半截竹管で沈線が引かれている。中期の里木2式に属する。

石器はサヌカイト製のスクレイパー (S144)が出土している。長側縁に両側から剝離を施している。

② 3-1-2区(Fig.52) (12～30)

12・13は中期の深鉢である。12は口縁部外面および口唇部にRLの縄文を巡らし、口縁部下には円形文を浮彫り風に描き出している。13は口縁部を内面に折り曲げ口縁部および胴部に撚糸文を施している。14はII A類で後期深鉢である。外面に4条の沈線を巡らし沈線間にLRの縄文を充填している。15～21は晩期深鉢である。15は無刻目突帯を有するIV C①a類で内外面丁寧なナデ調整を施し口縁部内面には二条の細い沈線を巡らしている。16も無刻目突帯のIV B②a類で、僅かに波状口縁を有する。頸部内外面は丁寧なナデ調整を施す。17はVD②d類、19はVD①d類である。17

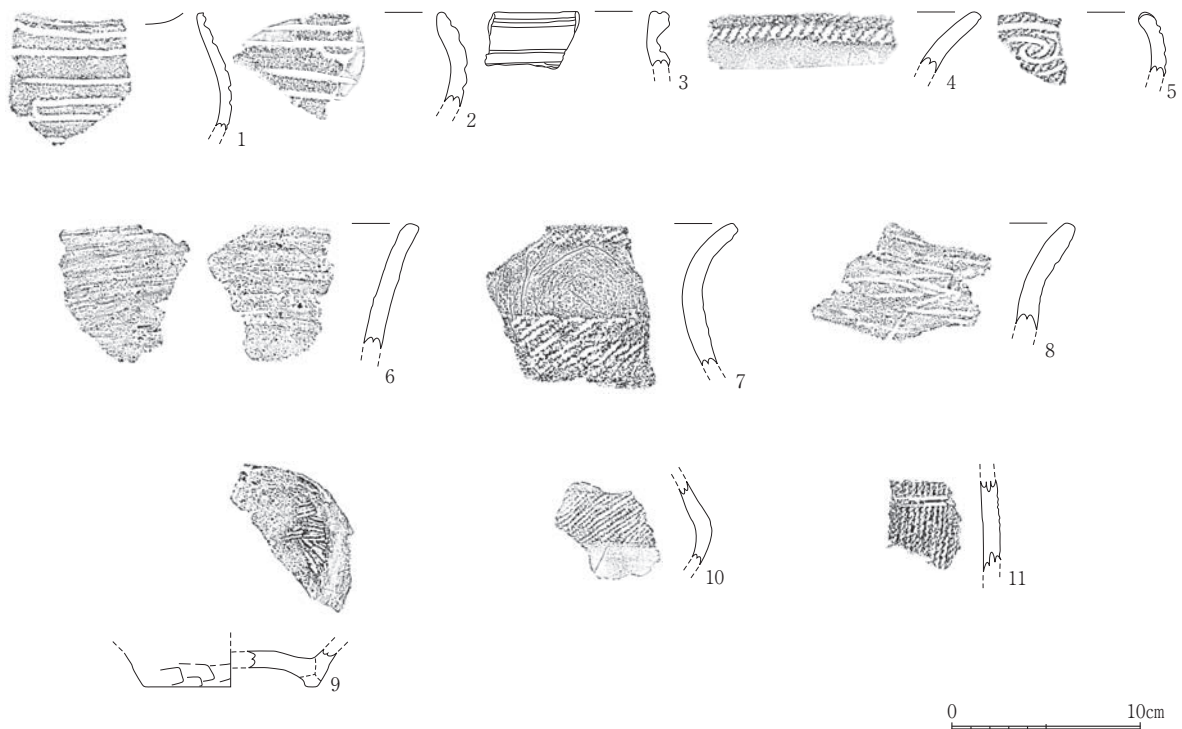


Fig.51 3-1-1区出土の土器

深鉢 II A類:1・2・5, II B類:4・7, VID①a類:6, VID②b類:8, IID類:3

は屈曲部に双線を巡らしている。19は外面ハケ状工具によるナデ調整が見られる。18はVID②a類、20はVIII②d類である。20は内外面巻貝条痕の上をナデ調整している。21はIV類の底部である。15・16・20は半精製品、他は粗製深鉢である。

22～29は黒色磨研浅鉢である。22はA II a①類で口縁部外面は段条の沈線をなし、内外面丁寧なヘラ磨きを施している。23は内面に沈線を有するF II④類で内外面ナデ調整である。24と28はC II③類である。24の口縁内面の沈線は太く頸部下端にも沈線が見られる。28は粗雑な作りで内面には条痕が見られる。また口縁部には一箇所に切り込みがある。25はE III①類で口縁部内面に段がある。26はF I④類、27はF III④類で算盤玉状の胴部を有し口縁部内面に沈線を巡らす。壺形の器形を有している。29はE II①類で、上胴部の屈曲は鋭い稜をなし口縁部内面は段を形成している。30は河川堆積層のI層出土の土師器杯である。回転台成形で糸切り底である。13・14世紀の所産である。

石器は叩き石(S154)が出土している。砂岩の円礫を利用したもので、平坦な一方の主面に使用痕と見られる凹みがある。II層(河川堆積)出土である。

③ 3-1-3区 (Fig.53～65)

先述のように遺物はI群～IV群に別けて取り上げた。I群はテラス1・2、SX1・2から出土した一括性の高い出土状況をしめしている土器である。II・III群は晩期前葉を中心としながらも古墳時代までの遺物を含む。IV群は晩期から青磁までが含まれる。

I群の土器(31～94)

31～60はテラス1出土の深鉢、61～70は浅鉢である。34・38は口縁部外面に沈線文帯を有するIII A類である。34は数条の沈線が錯綜している。38は細い沈線が2条見られる。34は半精製深鉢で

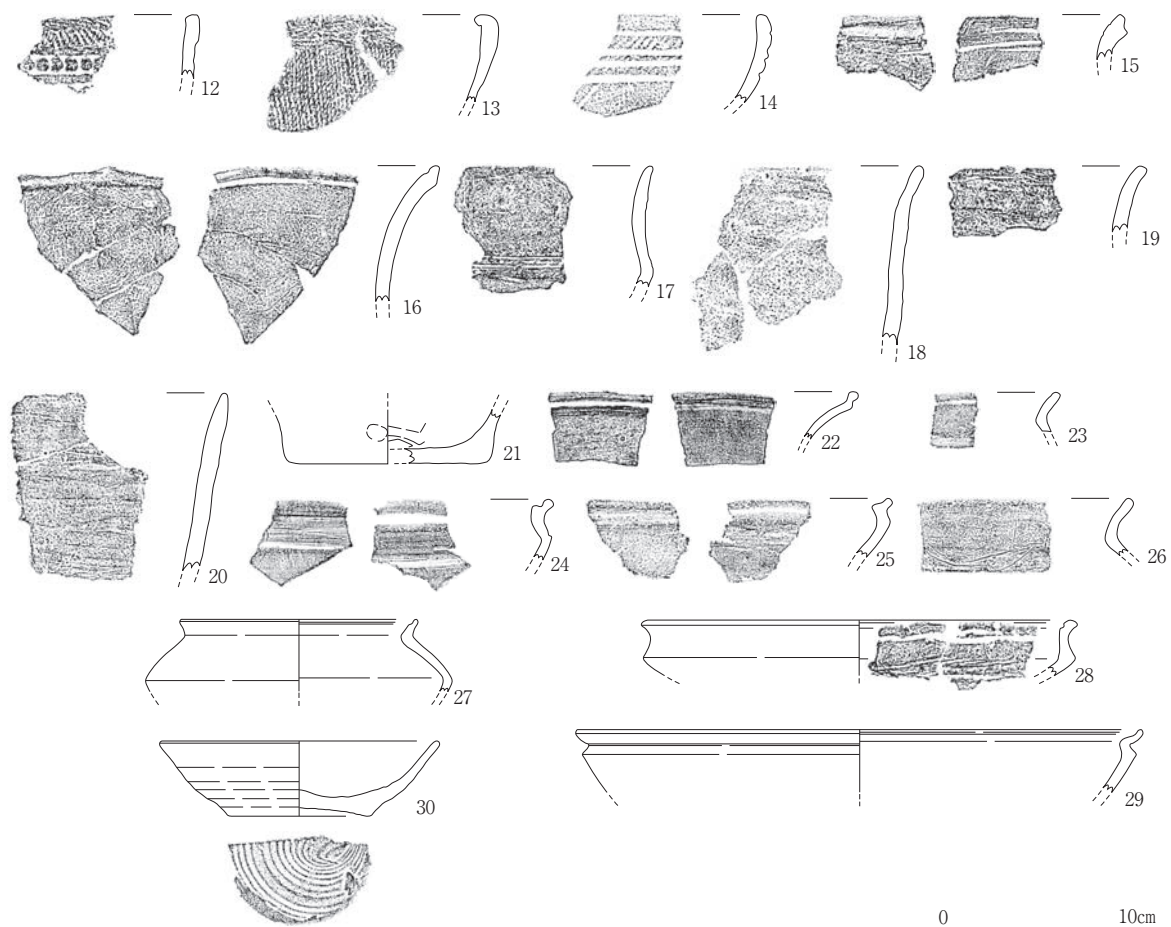


Fig.52 3-1-2区出土の土器

深鉢 I類：12・13, II A類：14, IV B②a類：16, IV C①a類：15, VD①d類：19, VD②d類：17, VID②d類：18, VII②d類：20
 浅鉢 A II a①類：22, C II③類：24・28, E II①類：29, E III①類：25, F I④類：26, F II④類：23, F III④類：27, 土師器杯：30

ある。31～33は無刻突帯を有するIV類である。31・33は内面に沈線を有するIV C類、32は段状の沈線を有するIV B類、突帯は三者とも三角形のc類である。31は貼付、32は粘土紐接合部が突帯状を呈している。三者とも半精製品で外面は煤けている。35・39はV類で、35は内面に沈線を有するV B類である。両者とも内外ナデ仕上げである。37・40・51はVI類、51は僅かに波状口縁を呈し外面は巻貝条痕の上をナデ調整で仕上げている。他の2点もナデ仕上げである。36・41・42・45・46はVII類である。42以外は外面に条痕調整が見られる。36・41は二枚貝条痕、他の原体は不明、42の下地には二枚貝条痕が見られる。47・49・50は直行口縁のVIII類、総じて内外面ナデ仕上げである。43・44・48・52は内湾して立上がるIX類である。44は内面巻貝条痕、外面ナデ仕上げ、他は内外面ナデ調整である。53～60は深鉢底部で53が平底、他は上げ底である。

浅鉢はすべて黒色磨研土器である。頸部が大きく外反するA類(62・63・68・70)が多く出土している。口縁部が直立するI類(63)と外方に立ち上がるII類(62・70)があり、口縁部内面が肥厚しないa類(62・63)と肥厚するb類(70)が見られる。さらに口縁部外面は段上の沈線を有する①類(62・63)と沈線の③類(70)がある。67は頸部が短く外反するC類、69は口縁部を欠くがE I類である。61・65・66は胴部が強く張り出すF類である。口縁部形態は長いものから短いものまでI類(61)・II類

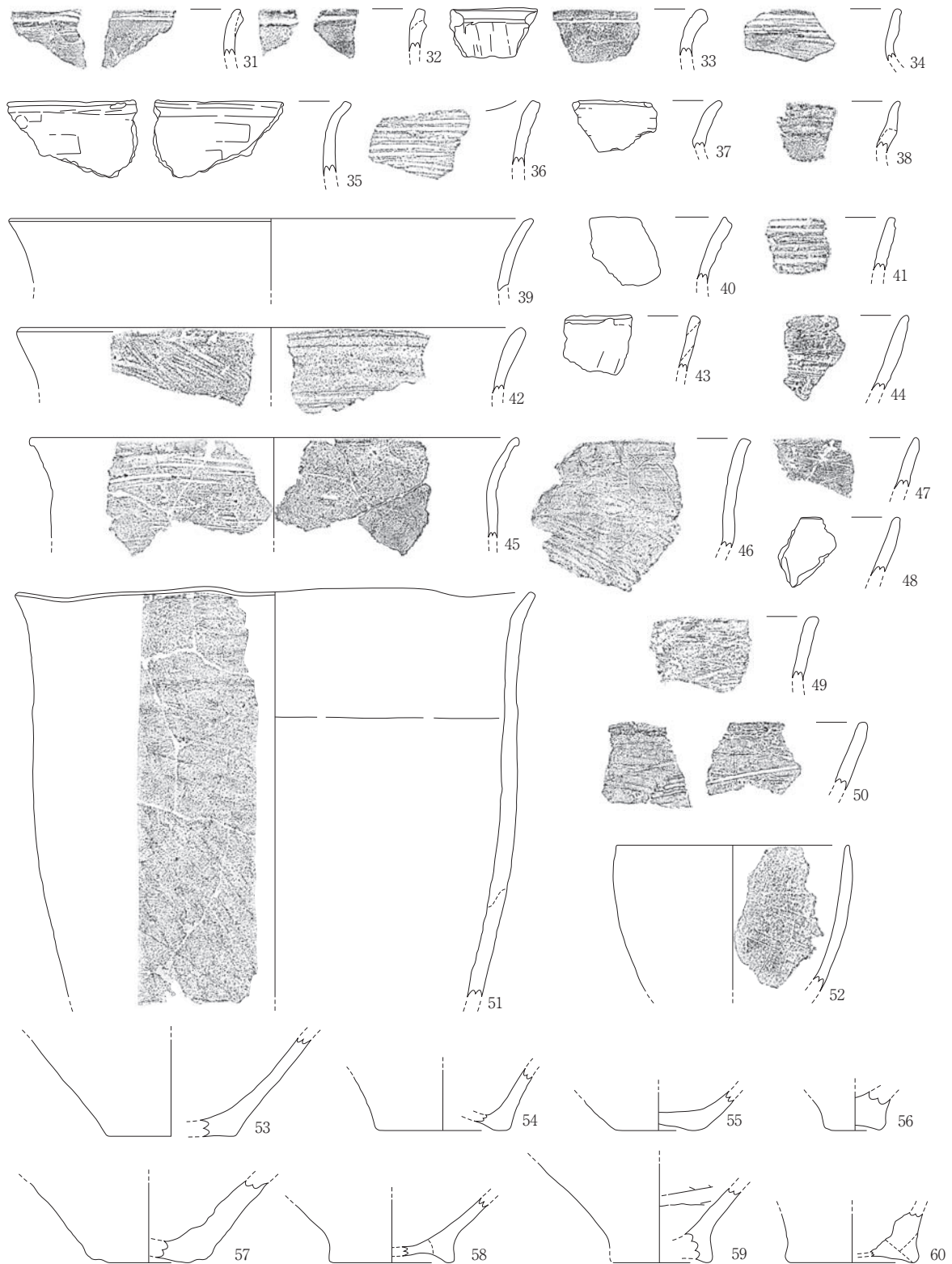


Fig.53 3-1-3区I群の土器①(テラス1)

深鉢 IIIA①類: 34, IIIA②類: 38, IVB①C類: 32, IVC①c類: 31, IVC②c類: 33, VB①d類: 35,
 VD②d類: 39, VID①d類: 40, VID②d類: 37・51, VID①b類: 36・41, VID①d類: 42,
 VID②b類: 45・46, VIII①d類: 50, VIII②d類: 47・49, IX①d類: 43, IX②c類: 44, IX②d類: 48・52

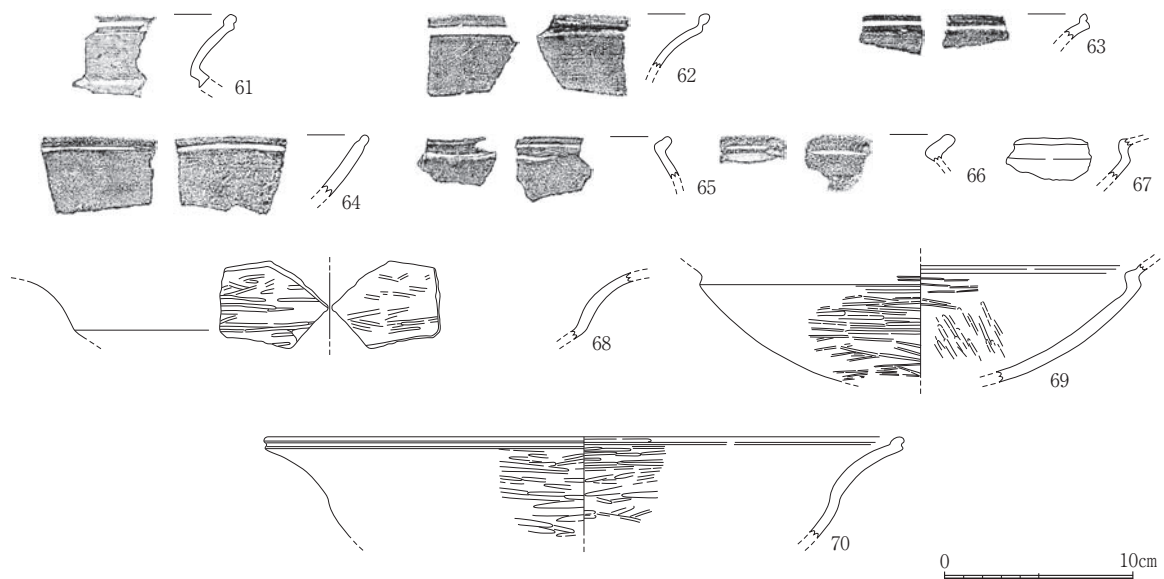


Fig.54 3-1-3区I群の土器②(テラス1)

浅鉢 A類:68, A Ia①類:63, A IIa①類:62, A IIb③類:70, C類:67
E I類:69, F I①類:61, F II③類:66, F III④類:65, G③類:64

(66)・Ⅲ類(65)が揃っており、口縁部内面は段状を呈する①類(61)、内外に沈線を有する③類(66)、内面に沈線を有する④類(65)が見られる。64は椀状を呈しない面に沈線を施すG③類である。

71から79はテラス2出土の深鉢である。74は拡張された口縁部無文のⅢB①類で、頸部外面の下地に巻貝条痕が見られる。73・75はV類で、75の上胴部には幅広い沈線が巡らされている。72はⅦ類で内外面二枚貝条痕が見られる。71・76～79は砲弾型を呈するⅧ類で、すべてナデ調整である。74が半精製品である他は粗製深鉢である。80と81は黒色磨研浅鉢、80はF I類⑤、81はA II b①類である。

82・83・85・86・88・89・91～94はSX1、84・87はSX2から出土している。深鉢は82・83・89がⅨ類でともに内外面ナデ調整、84は拡張口縁部が無文のⅢB類で頸部内外面ナデ調整であるが外面の下地には巻貝条痕が認められる。93はⅢC類である。85・87・88はⅧ類、88は内外面巻貝条痕が見られる。86はⅥD①d類で内外面ナデ調整である。底部90は、下胴部との接合部で剥離している。胎土から見てⅣ類の底部であろう。84と90が半精製品で他は粗製深鉢である。91は鉢Ⅱ類、内外ナデ調整である。92は浅鉢C I①類、94はF I①類である。

Ⅱ群の土器(95～115)

95～108が深鉢、109～115が浅鉢である。95～97・107はⅧ類で95が外面巻貝条痕である他はナデ調整である。98は内面に沈線を持つⅤB①d類、99・101・102はⅥD類、すべてナデ調整である。100はⅦD類、外面巻貝条痕、内面ナデ調整である。103・104はⅨ類でともに内外ナデ調整である。106は口縁部が短く外反するⅩ類で口縁部内面に段、外面巻貝条痕、内面はナデ調整を施す。105は胴部、108は上げ底の底部である。深鉢はすべて粗製品である。

109・110は胴部が強く張り出すF類、111は椀状のG類で口縁部に突起を有する。112はC類で波状口縁を有し頂部から細い垂下沈線が見られる。外面頸部下と口縁部内面に沈線を有する。すべて黒色磨研土器である。

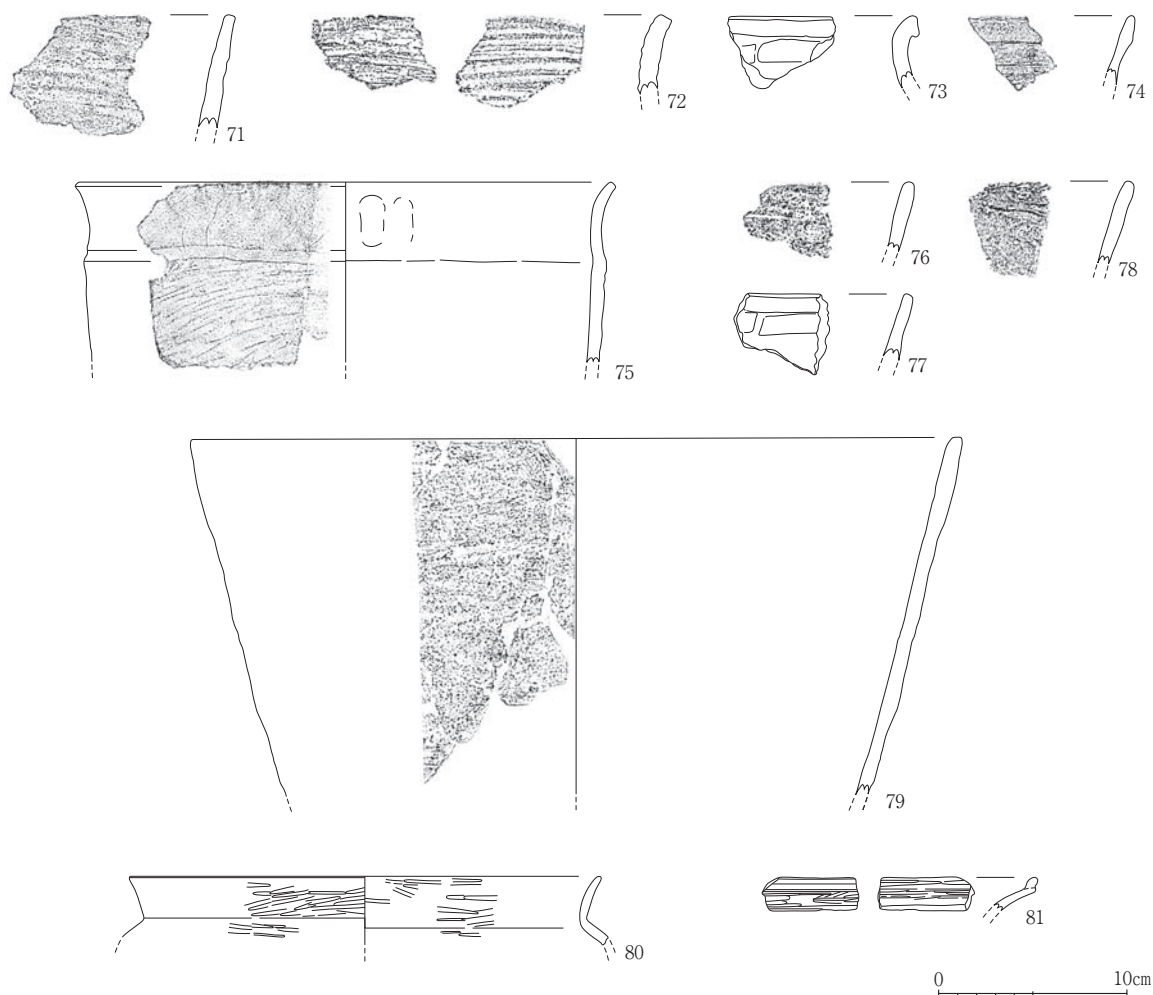


Fig55 3-1-3区I群の土器③(テラス2)

浅鉢 AIIb①類：81, FI⑤類：80
 深鉢 IIIb①類：74, VD①d類：75, VD②d類：73, VID①a類：72,
 VII①d類：71・76・77・78, VIII②d類：79

III群の土器(116～221)

116～119・140は後期の深鉢である。116は口縁部外面にLRの縄文帯を有するII B類で片粕式である。117は頸部の把手である。118は口縁部上面にR短沈を施すII C類、119はII A類で口縁部外面にクランク状の沈線を施しLRの縄文を充填している。140は口縁部無文のII F類で胎土色調から片粕式土器である。

120・121・124～127・200は口縁部を上方に拡張し外面に沈線が施されるIII A類である。多くの場合2条であるが121は3条見られる。125・127は波状口縁を有し127の波頂部下に点文が施されている。125～127の上胴部屈曲部には1～2条の沈線を巡らしている。125・127の口縁部内面には沈線が見られる。頸部内外面は下地に巻貝条痕が残るもの(124・125)もあるが、総じて丁寧なナデ調整で仕上げられている。125の外面は繊維束状の原体でナデ調整している。精緻な胎土、赤褐色の色調はIV類と似ている。すべて半精製品である。138・139は口縁部外面無文、123はIII C類で口縁部外面に2条沈線、内外面は巻貝条痕が残る。

122・128～137は無刻目突帯のIV類である。122は内面に段を持ち僅かに張り出す突帯を有する

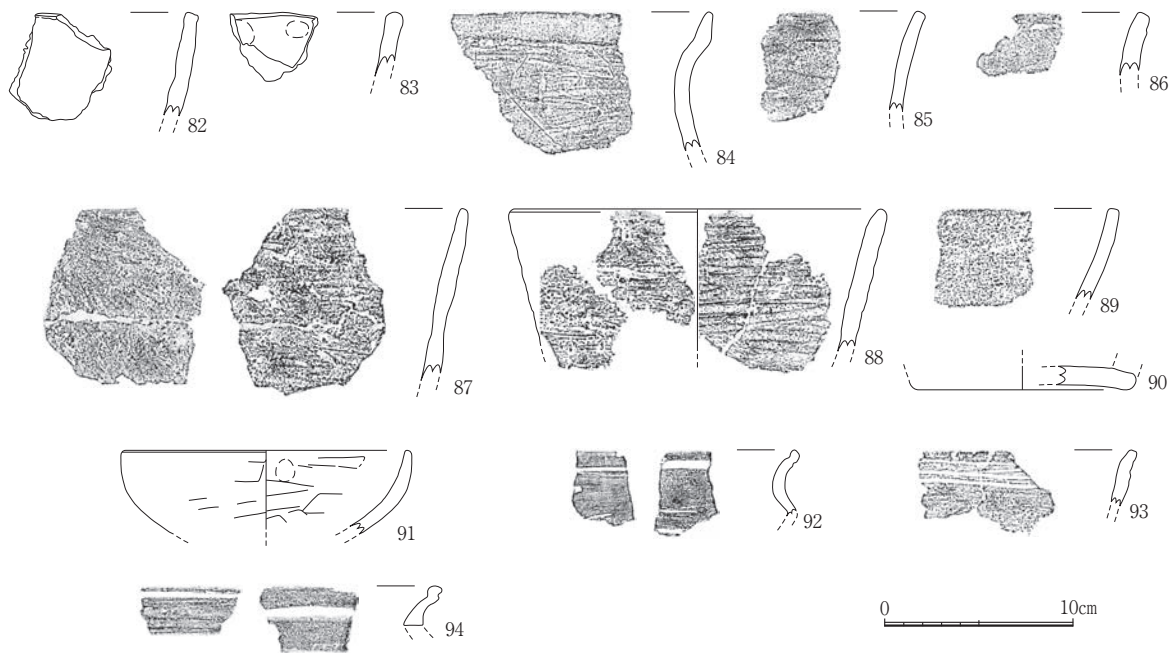


Fig.56 3-1-3区I群の土器④(SX1・2)

深鉢 III B①類：84, III C①類：93, VI D①d類：86, VII ①a類：88, VII ①d類：85
 VII ②b類：87, IX ①b類：89, IX ①d類：82, IX ②d類：83
 浅鉢 CI ①類：92, FI ①類：94

IV A ①a類、131・132・134～136は内面に段状の沈線を削り出すB類で、131・135・136は僅かに張り出す突帯a類、132・134は三角形突帯を有する。口唇部形態は、131が丸くおさめる以外は面取られている。129・130・133・137は内面に沈線を有するC類である。突帯形態は僅かに張り出すa類(130・137)と三角形のc類(129・133)がある。IV類は半精製品である。

142・143・149・151～154・156はV類である。口縁部形態では内面に段を持つA類(143)、沈線を有するB類(154・156)、他は何も施さないD類である。総じて口縁部頸部内外面はナデ調整である。141・146・150・155・166・177・181はVI類である。141は口縁部内面に沈線が見られるB類、177は頸胴部界に段を有するF類である。141は内外面二枚貝条痕を施すが他は全てナデ調整である。144・145・147・157・164・175は口縁部が強く屈曲するVII類である。164は内外面二枚貝、144・145・147は外面に条痕調整が見られる。144の外面には2条の弧条沈線が見られる。157はナデ仕上げであるが下地に巻貝条痕が認められる。148・159・168・170・172～174・182・184・186は直口口縁のVIII類である。148は外面二枚貝条痕外、172・184は外面巻貝条痕を施す。他はナデ調整である。167・171・176・178・183・185は内湾気味に立上がるIX類である。183が内外面巻貝条痕である以外は全てナデ調整である。158は口縁部が短く外反するX類で、内外面ナデ仕上げである。160～163・165は口縁部が外方に肥厚するXI類である。160・163は内面にヘラ磨きが見られる。161は肥厚帯の幅が著しく広く内外面巻貝条痕の上をナデ調整している。162は内外面ナデ調整であるが外面の下地に条痕が見られる。179・180は刻目突帯目を持つXII類である。179は断面三角形の突帯を有し比較的小きな刻目を施す。口唇部は丸く納め刻目を施す。180はやや扁平な突帯で刺突状の刻目を施している。内外ナデ調整である。189～193は底部である。内外面ナデ調整を施す。193は胎土色調からIII類かIV類に属する。

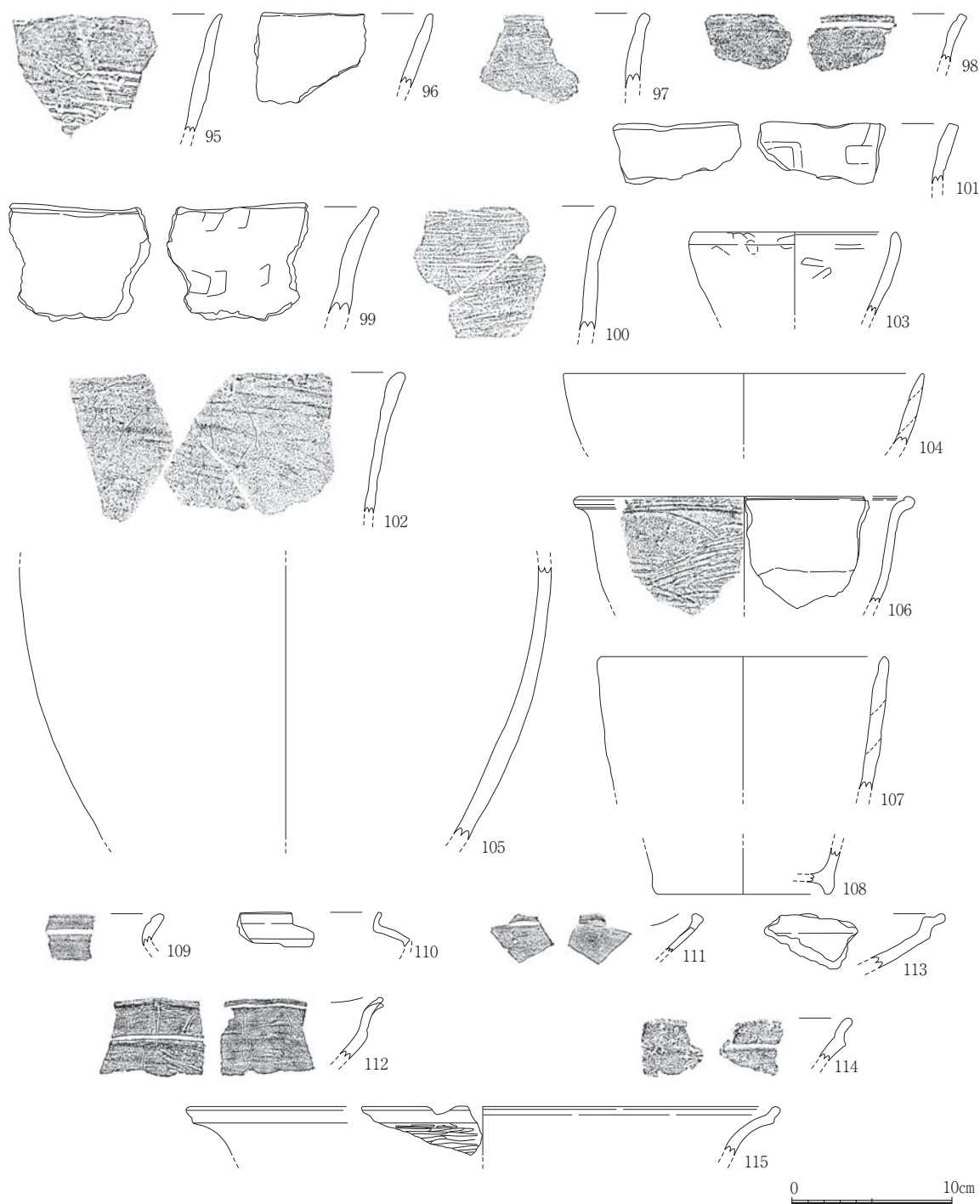


Fig.57 3-1-3区Ⅱ群の土器

- 深鉢 VB①d類：98，VID①d類：99・101，VID②d類：102，VID②d類：100
 VII①d類：97，VIII②b類：95，VIII②d類：96・107，IX②d類：103・104，X②b類：106
 浅鉢 AⅡa①類：115，CⅠ③類：112，CⅡ④類：114，EⅡ③類：113，FⅡ④類：109，FⅢ⑤類：110
 G④類：111



Fig.58 3-1-3区Ⅲ群の土器①

深鉢 ⅡA類：119, ⅡB類：116, ⅡC類：118, ⅢA類：126, ⅢA①類：120・121・125・127,
ⅢA②類：124, ⅢC①類：123, ⅣA①a類：122, ⅣB②c類：128

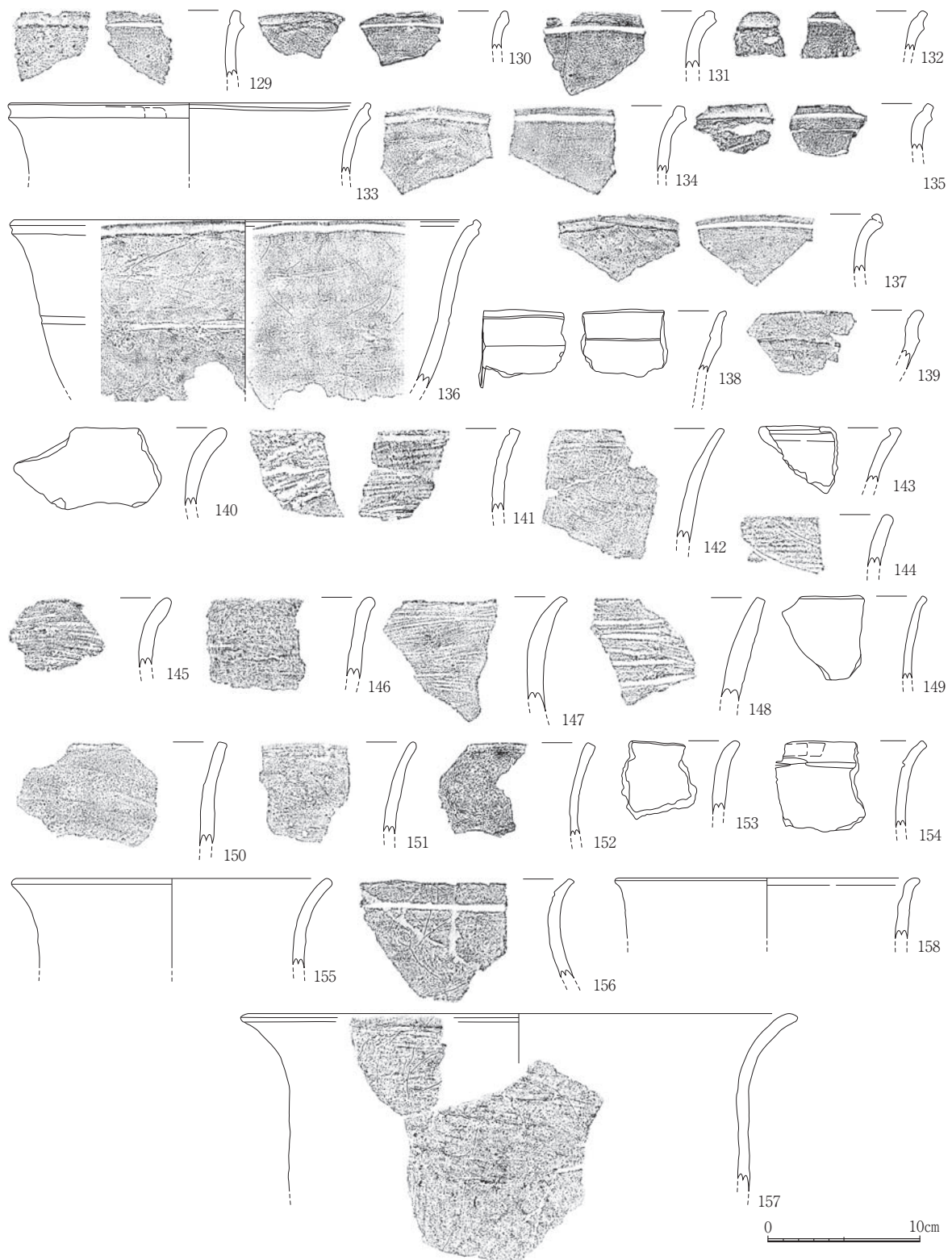


Fig.59 3-1-3区Ⅲ群の土器②

深鉢 II F 類：140, III B①類：138, III B②類：139, IV B①a 類：135・136, IV B①c 類：132・134, IV B②a 類：131
 IV C①c 類：129・133, IV C②a 類：130・137, VA②d 類：143, VB①d 類：154・156,
 VD①d 類：142・149・152, VD②d 類：151・153, VIB①a 類：141, VID①d 類：150,
 VID②d 類：146・155, VID①b 類：144, VID②b 類：145・147, VID②d 類：157, VIII①b 類：148, X②d 類：158

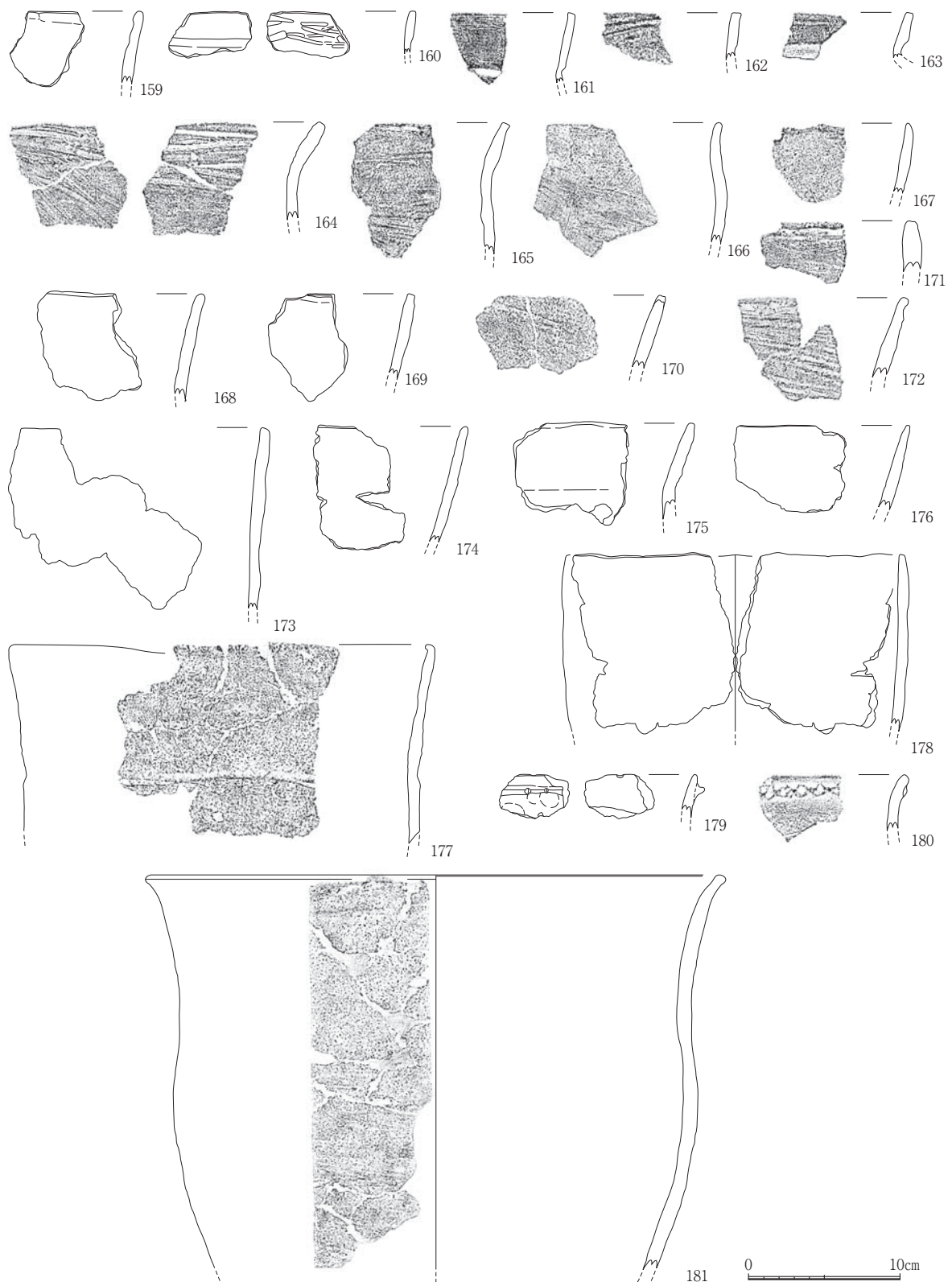


Fig.60 3-1-3区Ⅲ群の土器③

深鉢 VID①d類：181， VID②d類：166， VIF②d類：177， VID①a類：164，VID①d類：175，
 VII①d類：159・170， VII②b類：172， VII②d類：168・173・174， IX①d類：169・171・176・178，
 IX②d類：167， XI①b類：165， XI①d類：160・161・162・163， XII②b類：179・180，

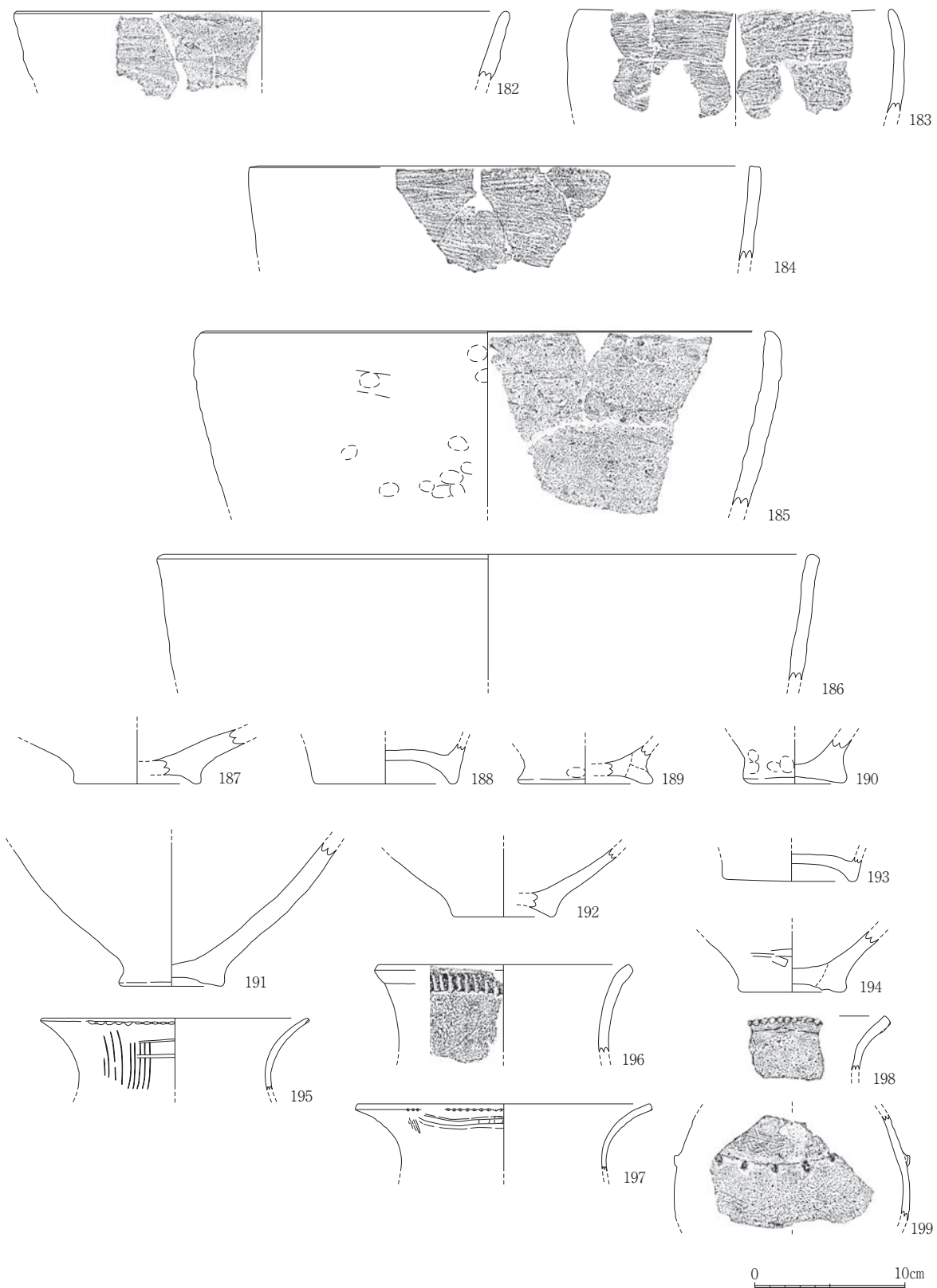


Fig.61 3-1-3 区Ⅲ群の土器④(縄文土器：182~194)

深鉢 VII①b類：184, VII①d類：182・186, IX①d類：185, IX②a類：183, 弥生土器：195~199

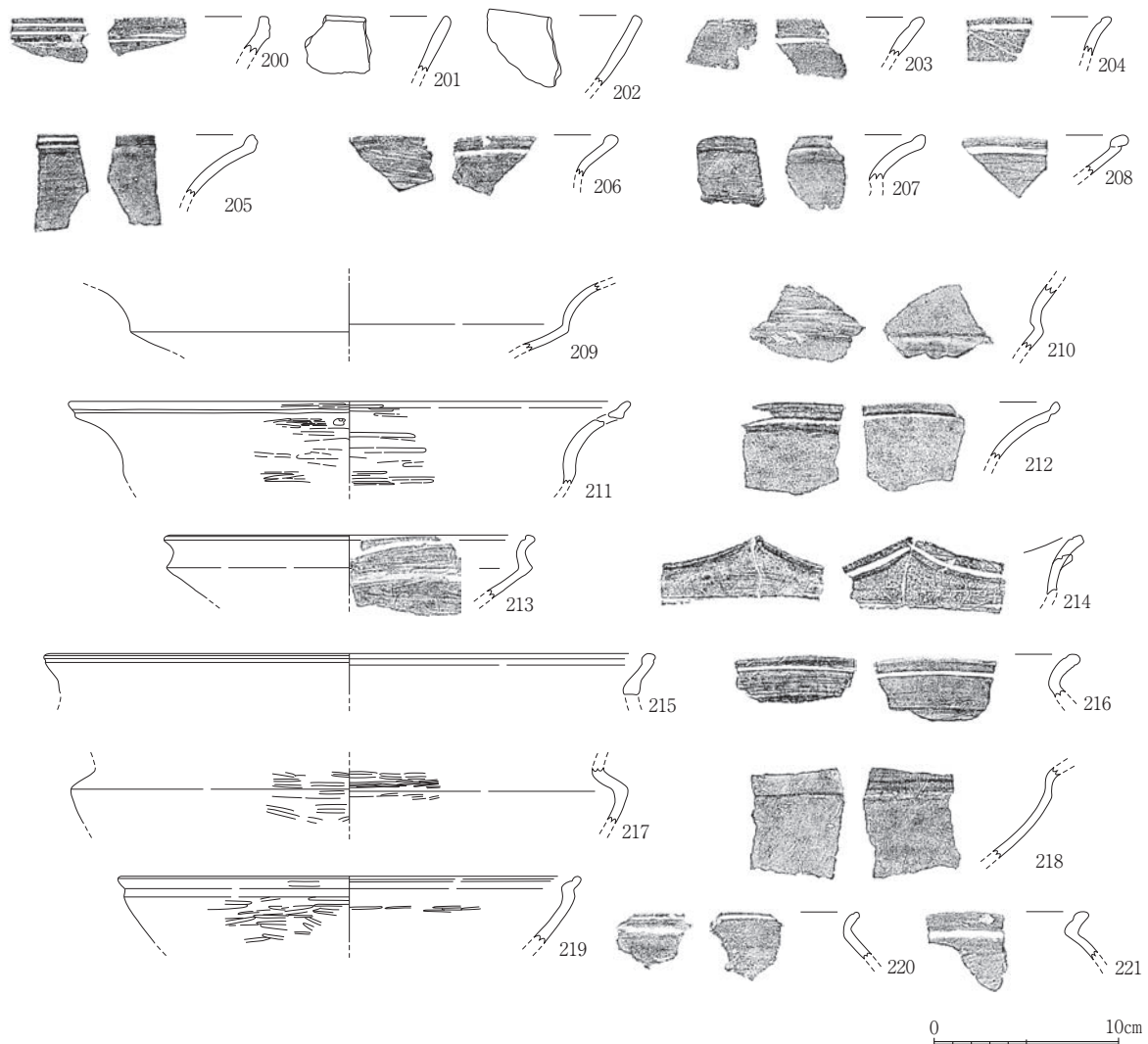


Fig.62 3-1-3区Ⅲ群の土器⑤

深鉢 ⅢA①類：200

浅鉢 A類：209, AⅠa③類：205, AⅡa①類：211・212, AⅡb④類：207, AⅢb③類：208,
 BⅢb④類：206, C類：218, CⅡ①類：214, CⅡ③類：213, DⅠ類：202, E類：210,
 EⅢ①類：219, F類：217, FⅠ①類：215, FⅡ②類：221, FⅡ③類：216, FⅢ③類：220,
 G③類：203, G④類：201, HⅠ類：204

201～221は黒色磨研浅鉢である。205は口縁部が垂直に立上がるAⅠ類で、外面に二条の沈線を施す。207・211・212はAⅡ類で211・212は外面に段上の抉りを入れる。208は口縁部が水平に傾くAⅢ類である。206はBⅢ類で内面が肥厚している。213・214はCⅡ類、213は内面に沈線、214は段状の沈線を有する。214・218は波状口縁である。202はDⅠ類で、僅かに波状口縁を呈する。210・219はE類、210は端部を欠くが219はEⅢ類で内面に段を持つ。215はFⅠ類、216・221はFⅡ類、220はFⅢ類、217はF類であるが口縁部を欠く。201・203は椀状のG類で、203の内面には沈線を有す。204は壺状のHⅠ類で口縁部内面には下方から抉りとするような沈線を施し、その下には細い原体で複線山形文風の文様が描かれる。

195～199は弥生土器である。195は頸外面に垂下沈線を有し一部横方向の沈線が切っている。196の口縁外面には扁平な粘土帯を貼付し幅広刻目を入れている。198は口縁部外面に一条、197は



Fig.63 3-1-3 区IV群の土器①

深鉢 IVB①a類：222, IVB①b類：223, IVB②a類：225, IVC③c類：224, VA①b類：233,
 VB①d類：227, VB②a類：229, VIB①a類：235, VID①b類：242, VID①d類：234・237,
 VID③a類：231, VID③d類：243, VIB①c類：228, VID①a類：240, VID①b類：236,
 VID①d類：230・232, VID②d類：226・239・241, X①b類：238

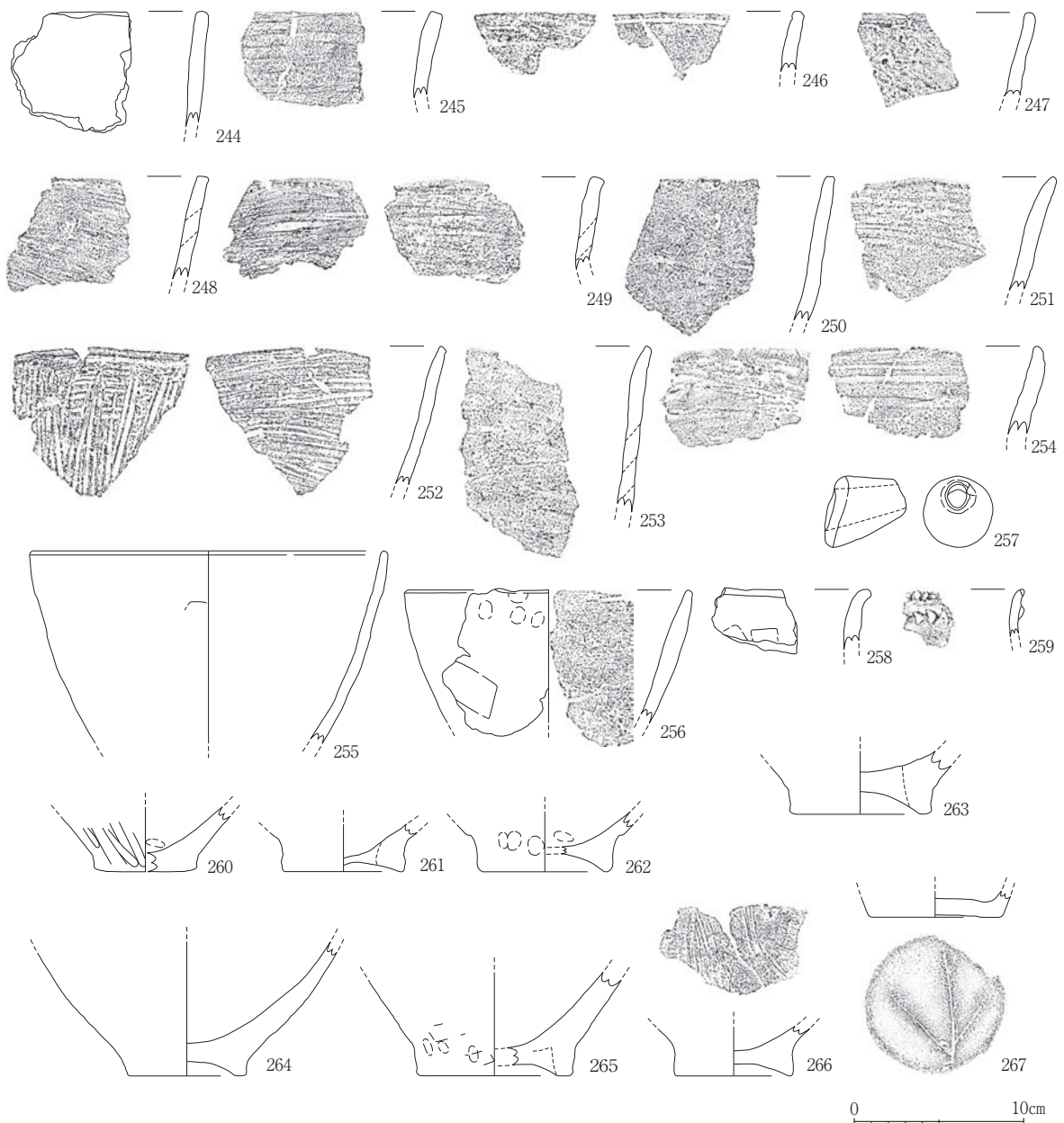


Fig.64 3-1-3 区IV群の土器②

深鉢 VIII①a類：252, VIII①b類：246・248・249, VIII①d類：244・245・247,
 VIII②a類：254, VIII②b類：251, VIII②d類：250・253・256, IX①d類：255,
 X①d類：258, XIIA②b類：259

二条の微隆起帯を貼付している。199は胴部で一条の微隆起の上に浮文を貼付している。

IV群の土器(222～290)

222・223・225は口縁部内面に段状の沈線を施すIV B類、224は沈線を描くIV C類である。無刻目突帯の形状は222・225が僅かに張り出すa類、223は微隆起帯状のb類、224が三角形を呈するc類である。225は粘土紐接合部が突帯状をなしていることが観察できる好例である。224の上胴部には一条の沈線、頸部外面は横方向の削り、内面は巻貝条痕の上をナデ調整している。他は内外面ナデ調整を基調とする。225は粘土紐接合部で剥離している。227・229は内面に沈線を持つV B類、233は段を有

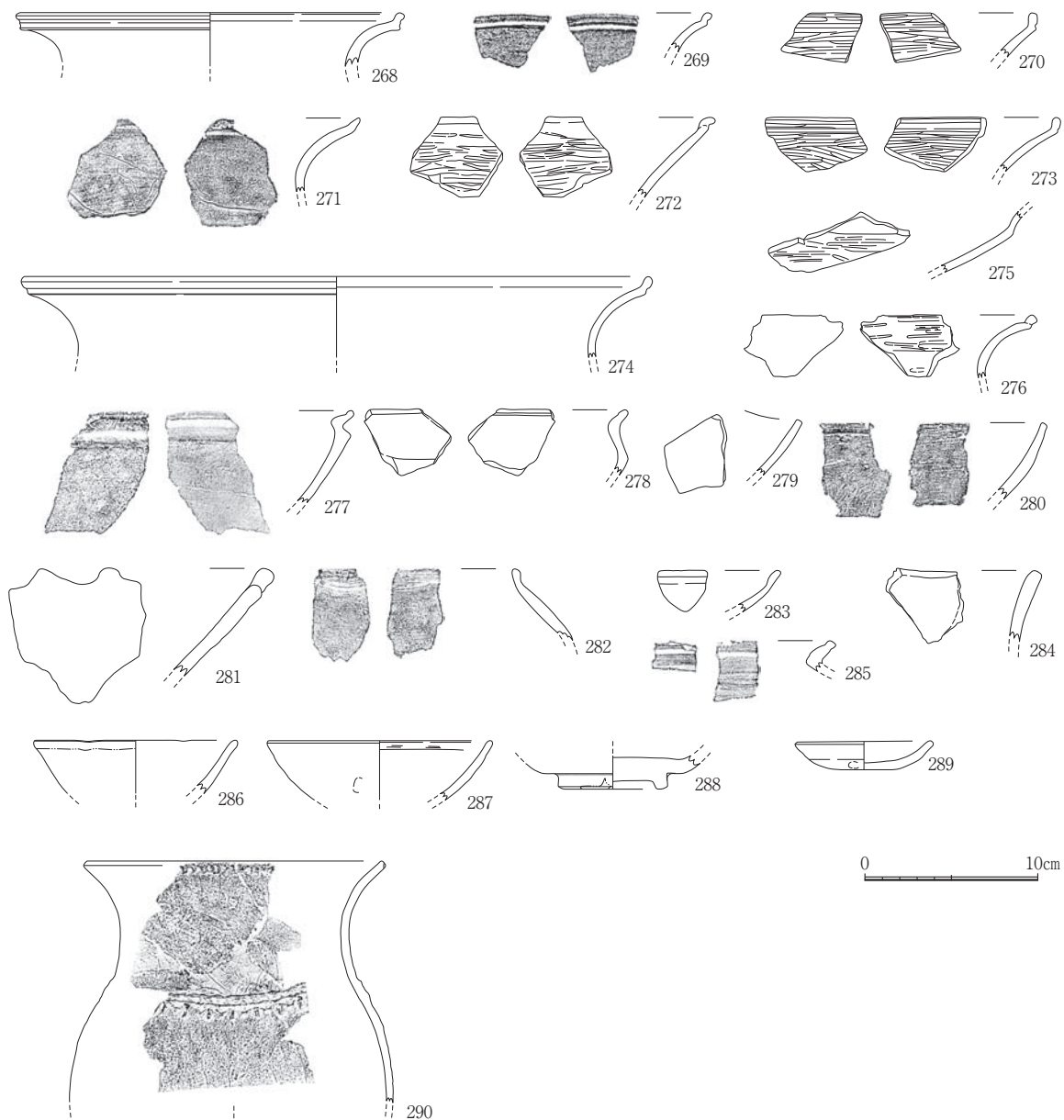


Fig.65 3-1-3区IV群の土器③

(縄文土器：268～285，弥生土器甕：290，青磁碗：286・288，瓦器：287・289)

浅鉢 A類：271・275， AⅡa①類：269・274・276， AⅡa③類：270・273， AⅢb③類：272

BⅠa①類：268， DⅠ類：279， EⅡ①類：277， FⅡ①類：285， I類：282

G②類：283， G④類：280・281， K類：284， L類：278

するV A類である。229は内外面二枚貝条痕、233は外面巻貝条痕を施す。231・234・235・237・242・243はVI類である。235が口縁部内面に沈線を有するVI B類であるが、他はVI D類である。226・228・230・232・236・239～241はVII類である。228が内面に沈線を有するVII B類で、他はVII D類である。244～254・256はVIII類である。252・254は内外面二枚貝条痕、248・249は内面巻貝条痕、251は内面二枚貝条痕を施し、他はナデ調整がなされている。255はIX類で内外面ナデ調整を施す。238・258はX類である。238は内外面巻貝条痕の上をナデ調整、258は繊維束状の原体でナデ調整を施す。259はXII

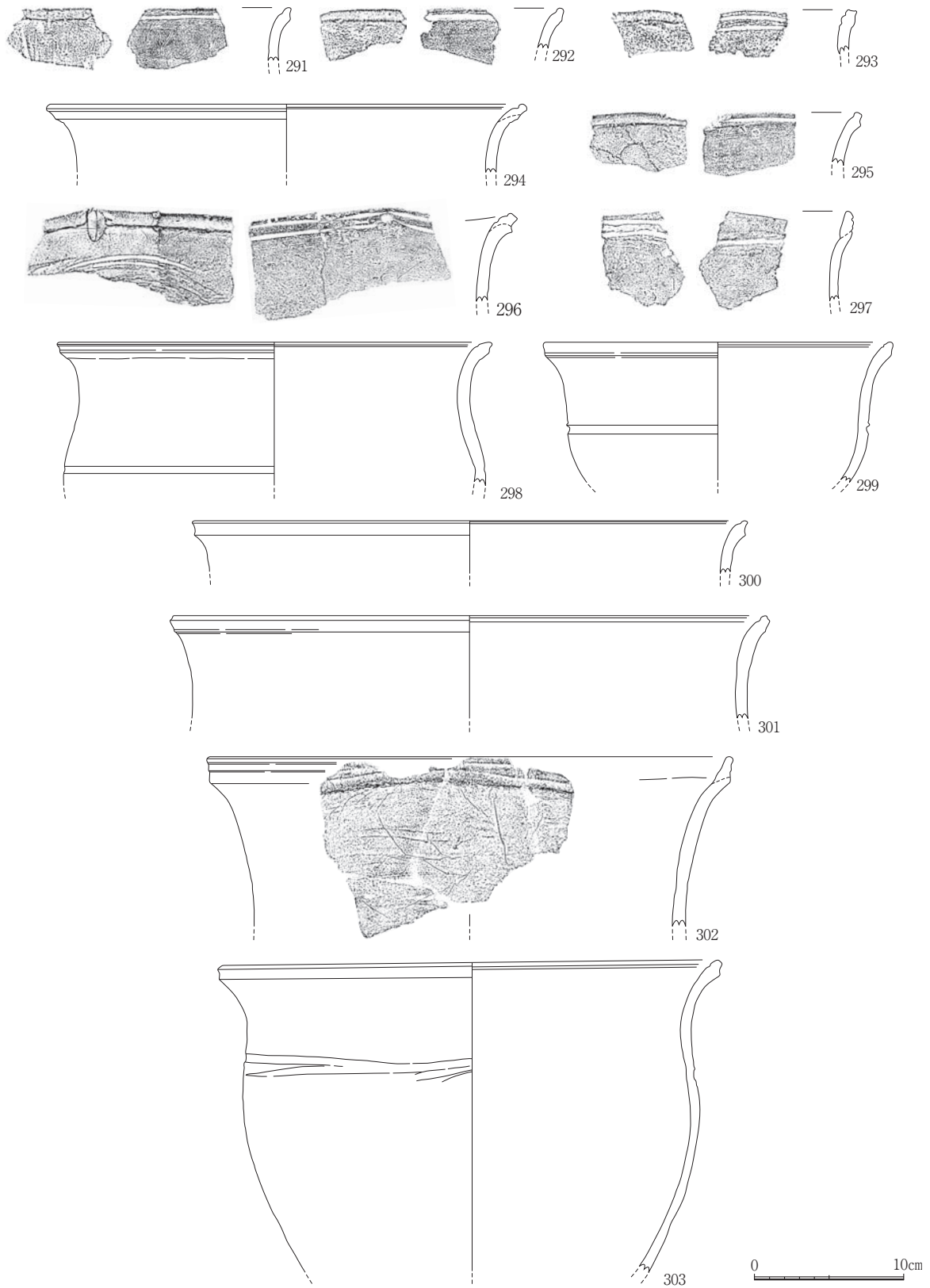


Fig.66 3-1-4区I群の土器①(テラス2)

深鉢 IIIA①類：297, IIIA②類：302, IVB①b類：294・301, IVB①c類：292・295, IVC①a類：303
 IVC①b類：293, IVC①c類：296, IVC②a類：298・299, IVC②c類：291, IVC③a類：300

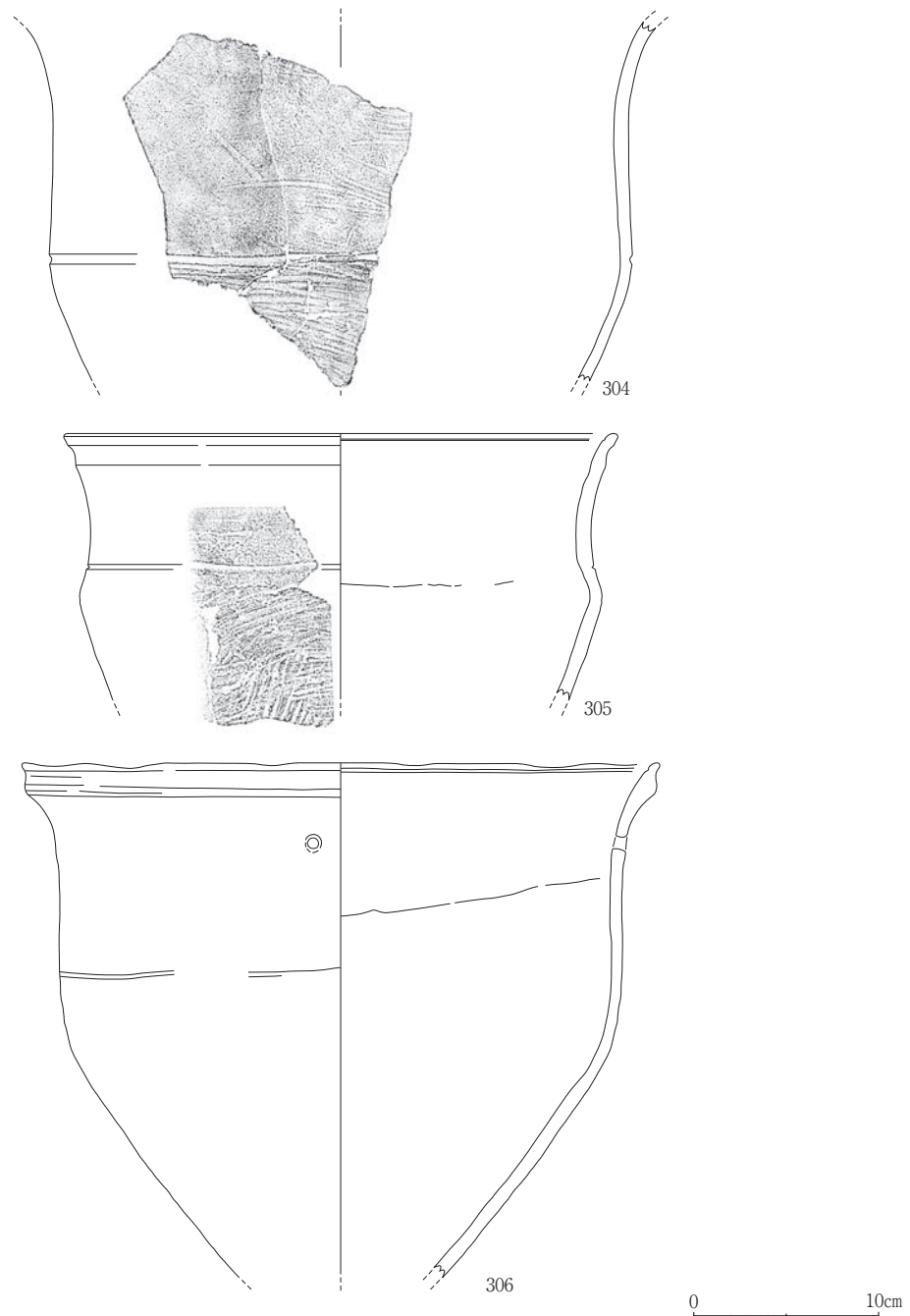


Fig.67 3-1-4区I群の土器②(テラス2)
深鉢 VB①d類:305, IVC②d類:306

類で口唇部にも刻目を有する。257は注口土器である。先端部で外径1.4cm、内径1cmを測り、丁寧なナデ調整がなされている。260～266は深鉢底部である。260が平底である以外は上げ底である。260の外面には縦方向の巻貝条痕が見られるが、他はナデ調整を基調としている。267は弥生土器底部で、広葉樹の木葉圧痕が見られる。

268～284は浅鉢である。269～271・273～276はAⅡ類である。269・274・276は口縁部外面に段状の抉りを有し、270・273は口縁部外面に沈線を有する。272はAⅢ類で口縁部が内面に肥厚し外



Fig.68 3-1-4区I群の土器③(テラス2)

深鉢 VA①a類：309, VA①d類：308, VB①a類：318, VB①d類：312・316, VC①d類：321,
 VD①d類：307, VIB①d類：315, VIB②d類：324, VID①a類：328, VID①b類：317・326・327,
 VID①d類：310・313・314・323・330, VID②b類：319, VID②d類：311・320・329, VID①d類：331,
 VID②a類：322, VII②d類：325

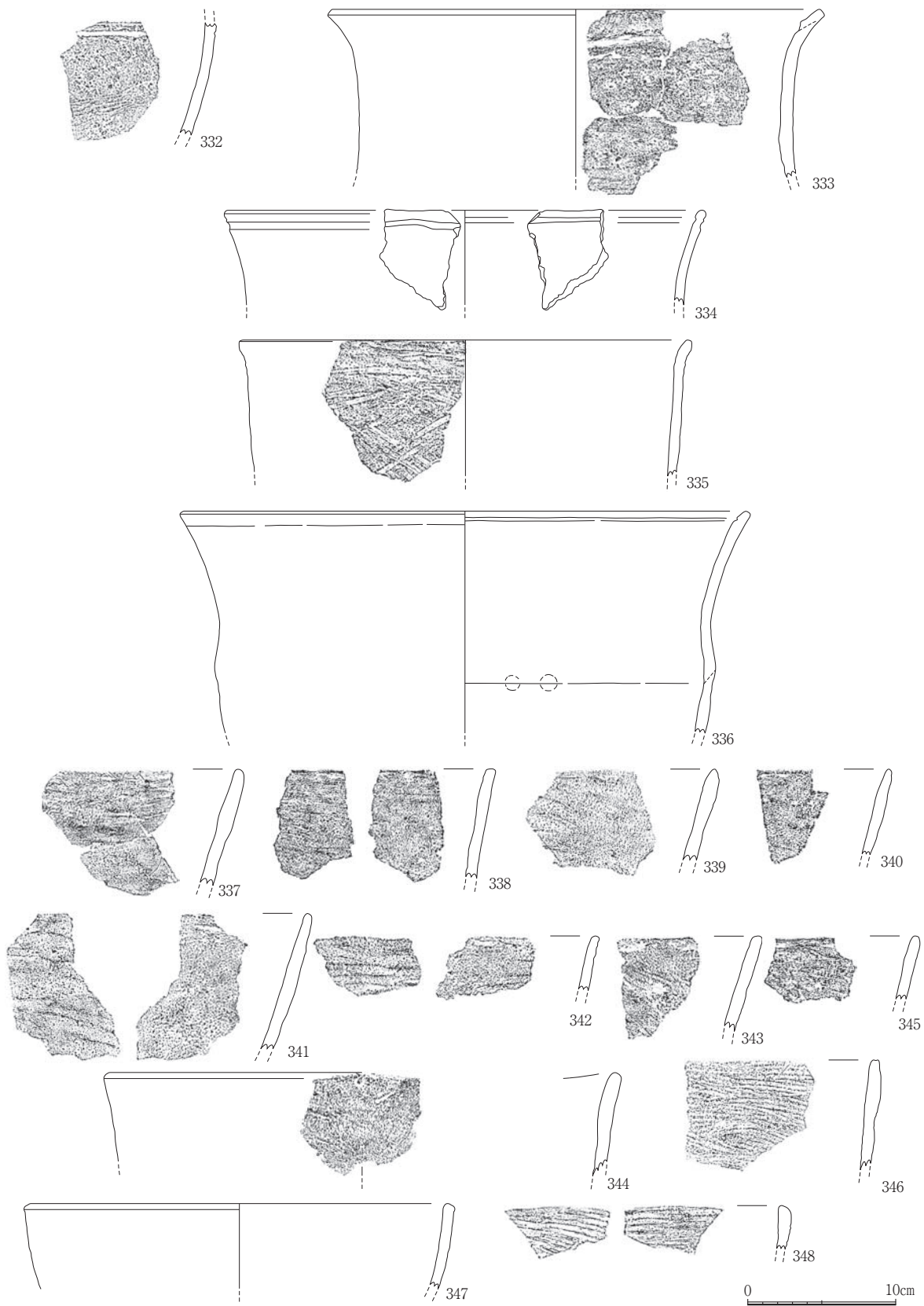


Fig.69 3-1-4区I群の土器④(テラス2)

深鉢 VA①d類: 333, VB②d類: 336, VC①d類: 334, VII①b類: 342・346, VII①d類: 338・343・344,
VII②d類: 337・339・340・341・345, IX①a類: 348, IX①d類: 347, X①b類: 335

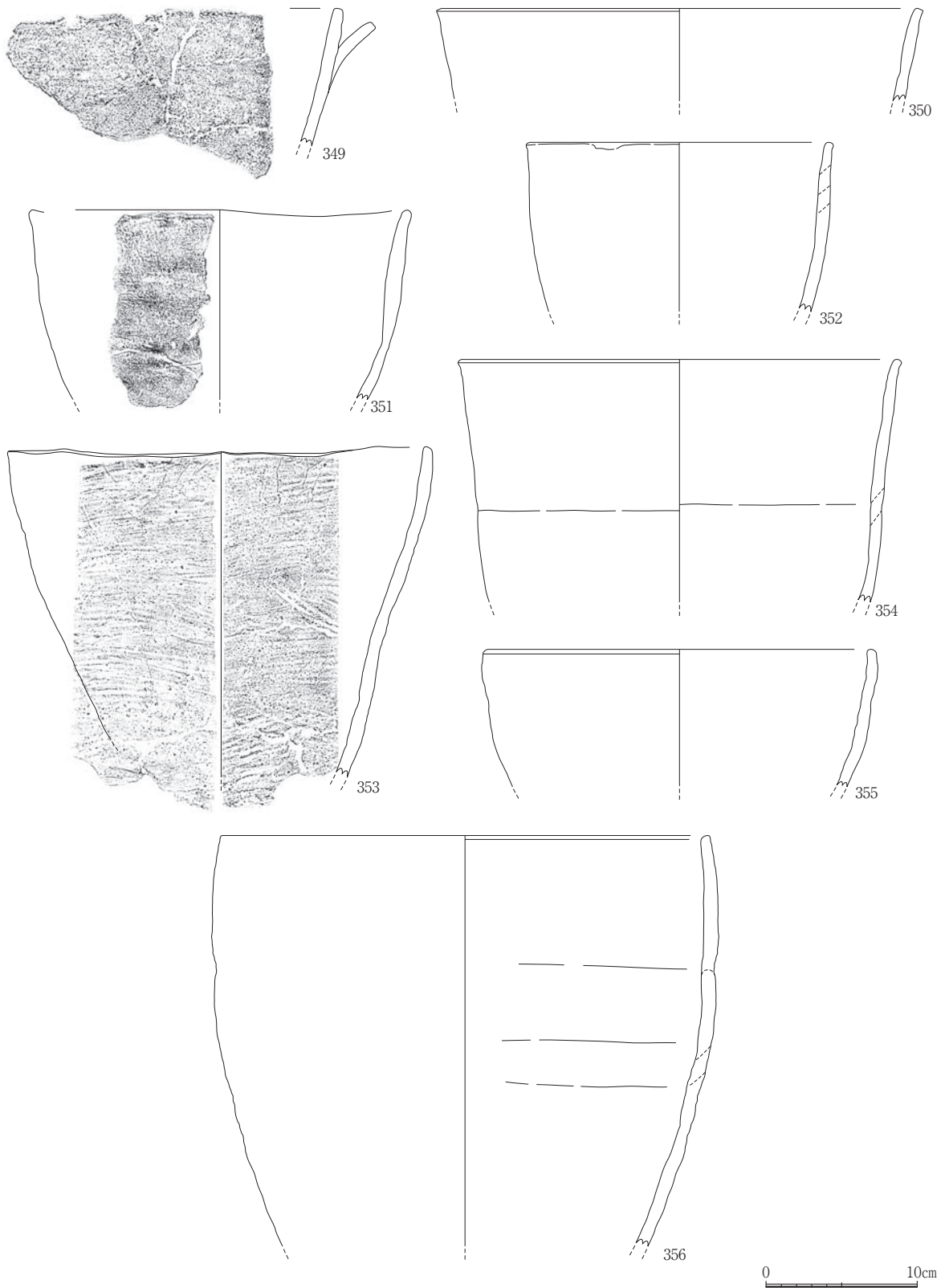


Fig.70 3-1-4区I群の土器⑤(テラス2)

深鉢 VIII①d類：350・354, VIII②d類：349・351・352, IX①d類：355, IX②a類：353, IX②b類：356

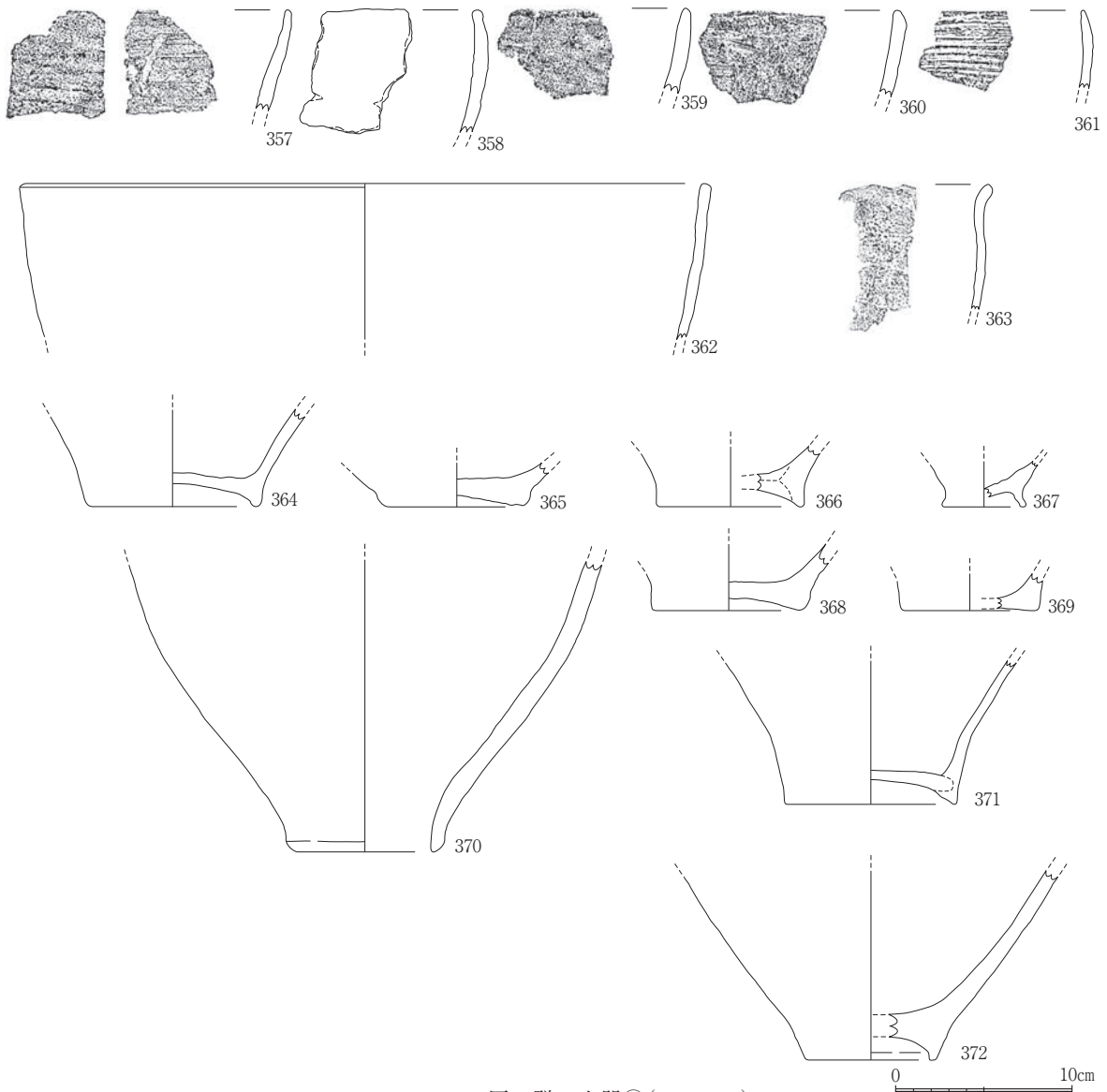


Fig.71 3-1-4区I群の土器⑥(テラス2)

深鉢 VIII①d類：362, IX①d類：357・358, IX②b類：361, IX②d類：359・360, X①d類：363

面には沈線を有する。268はB I類である。279はD I類、277はE II類、285はF II類、282はI III類、280・281・283はG類、284はK類、278はL類である。

290は弥生中期の甕で口唇部刻目、上胴部には二条の微隆起帯を貼付し円形浮文を貼付している。286は青磁の輪花碗、288は青磁碗底部で畳付まで施釉、外底は釉掻き取りである。287は瓦器椀、289は瓦器小皿である。この他にFig.98の古墳時代の土製模造鏡975が出土している。紐の部分を欠くが、径4cm、鏡面は凸状を呈し背面は爪や指の圧痕が顕著である。

④ 3-1-4区 (Fig.66 ~ 84)

最も多くの晩期土器が出土した調査区である。特にテラス2からは大きな破片が折り重なるような状態で出土しており一括性の高い資料として捉えることができる。

a. I群の土器 テラス2出土の深鉢(291 ~ 372)

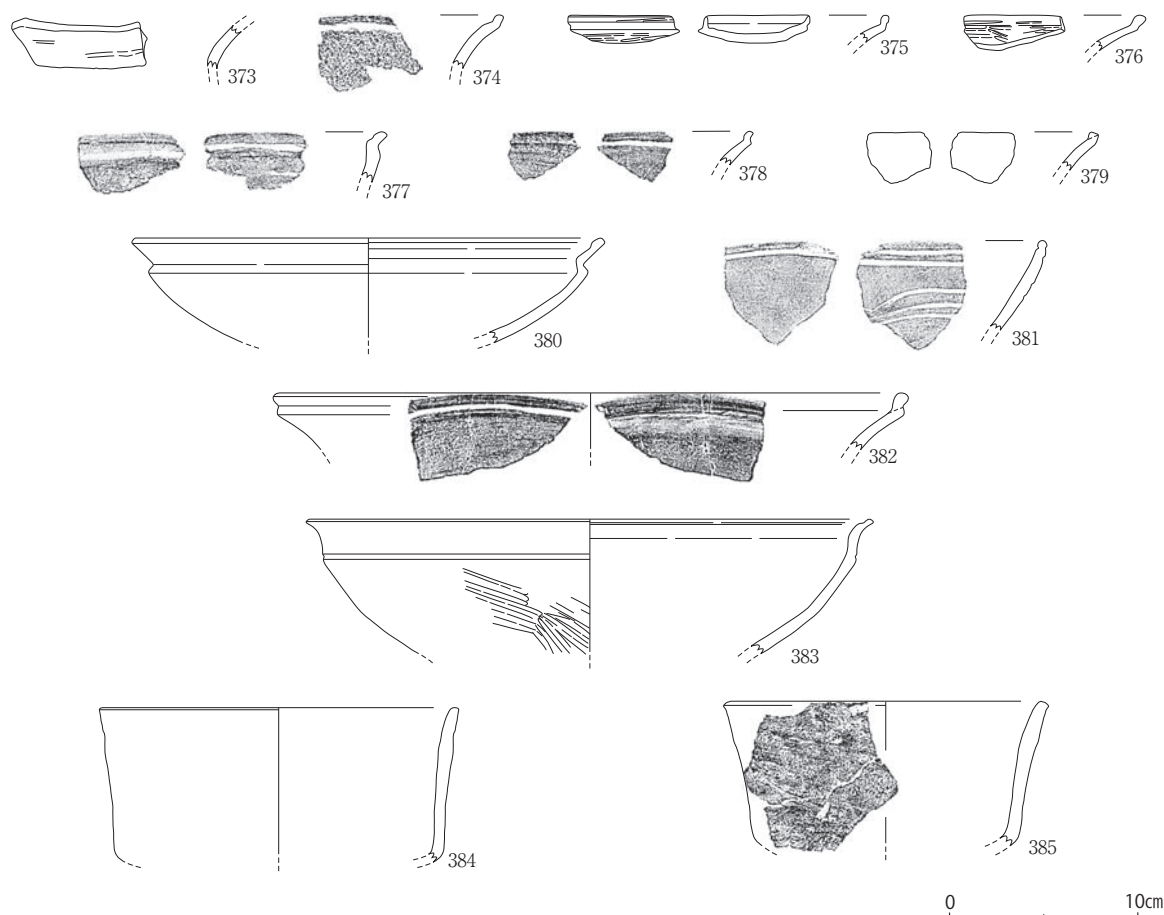


Fig.72 3-1-4区I群の土器⑦(テラス2)

鉢 I類: 384・385

浅鉢 A類: 373, AⅡa①類: 382, AⅡa②類: 374, AⅡb①類: 375・376, AⅡb②類: 378,
AⅡb④類: 379, CⅠ②類: 383, EⅡ②類: 380, EⅢ②類: 377, G③類: 381

297・302は口縁部外面に二条沈線を有するⅢA類である。両者頸部外面は巻貝条痕の下地に丁寧なナデ調整を施している。297の口縁接合部内面は沈線状を呈する。302の内面は僅かに段状を呈し、接合部外面はやや三角形に張り出している。291～296・298～301・303・306は無刻目突帯を有するⅣ類である。292・294・295・301は口縁部内面に段上の沈線を有するⅣB類、291・293・296・298～300・303・306は沈線が施されたⅣC類である。296は緩やかな波状口縁を有し内面に二条の沈線と波頂部に点文を施し、外面にも大きな圧痕が見られる。突帯の形状は口縁部下端が僅かに張り出したa類(298～300・303)、微隆起状のb類(293・294・301)、三角形のc類(291・292・295・296)、大きな三角形のd類(306)が見られる。298・299・303の上胴部には棒状工具による幅広の沈線が施されている。306は細い沈線が描かれている。Ⅳ類の胎土色調、器面調整手法などはⅢA類と同様で半精製の深鉢である。304は口縁部を欠いているがⅣ類とすることができる。305・307～309・312・316・318・321・333・334・336はⅤ類である。口縁部内に段状の沈線を有するⅤA類(308・309・333)、沈線を持つⅤB類(305・312・318・336)、内外面に沈線のあるⅤC類(321・334)、何も施さないD類(307)がある。頸部内外面は巻貝条痕の上に丁寧なナデ調整を施すが309・318は下地の条痕が顕著に認められ



Fig.73 3-1-4区I群の土器⑧(テラス3)

深鉢 IIIA①類: 386, IIIB①類: 389, IVC②c類: 387, IVD①b類: 388, IVD②c類: 390,
 VB①d類: 398・399・402, VD②d類: 404, VID①a類: 403, VID①b類: 392, VID①d類: 401,
 VID②d類: 400, VID①b類: 391・396, VID①d類: 393・394, VID②b類: 395, VIII①b類: 397・
 VIII①d類: 405・407・408・409・411, VIII②d類: 406, IX①a類: 410・413, IX②d類: 414

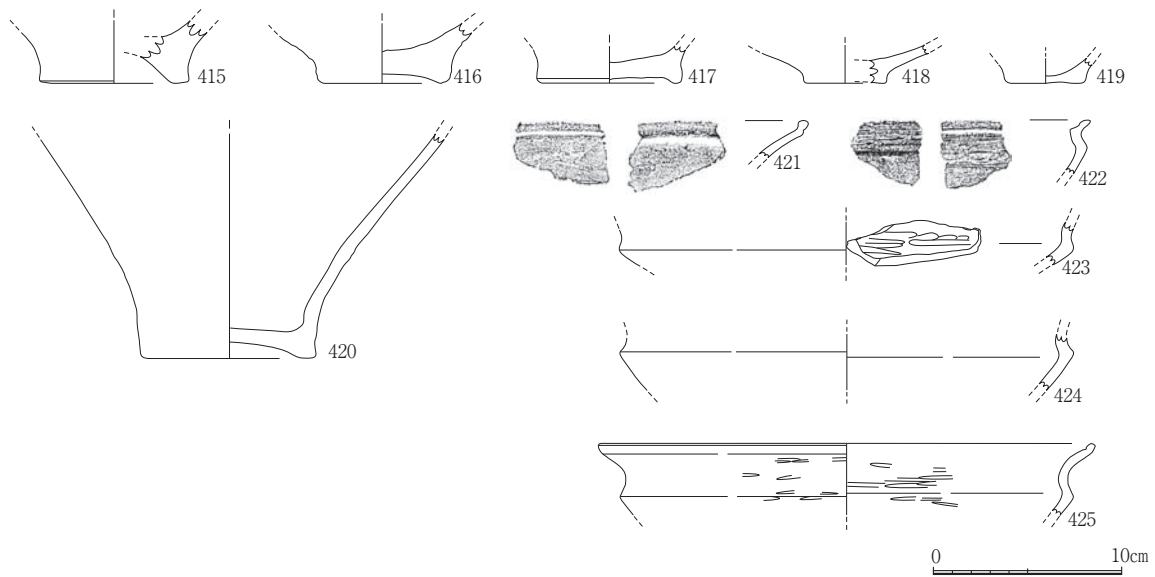


Fig.74 3-1-4区I群の土器⑨(テラス3)

浅鉢 A II b③類: 421, E III①類: 422, C類: 423・424, C I①類: 425
 深鉢底部: 415~420

る。胎土、色調はⅢ・Ⅳ類に類似しているものが多い。310・311・313～315・317・319・320・323・324・326～329はⅥ類で、315・324が口縁部内面に沈線を有するⅥB類である。他はすべてⅥD類である。器面調整は内外面ナデ仕上げが多いが、320・328は内外面巻貝条痕、317・319・326・327は外面に巻貝条痕が見られる。322・331はⅦD類である。322は内外面二枚貝条痕、331は内外面ナデ調整である。325・337～346・349～352・354・362はⅧ類である。342・346の外面に巻貝条痕調整が見られる以外は全て内外面ナデ調整で仕上げられている。347・348・353・355～361はⅨ類である。器面調整は353・356が内外面、361が外面を二枚貝条痕、他は内外面ナデ調整である。363はⅩ類で内外面ナデ調整である。底部は369が平底、他はすべて上げ底である。370は口縁部の可能性もあるが、底部の充填部が欠落しているものとした。

b. I群の土器 テラス2出土の鉢・浅鉢(373～385)

384・385はコップ型の鉢Ⅰ類である。374～376・378・379・382は浅鉢AⅡ類である。内面が肥厚しないAⅡa類は374・382、他は内面肥厚のAⅡb類である。口縁部外面が段状を呈する①類(375・376・382)、凹状の②類(374・378)、何も施さない④類(379)が見られる。383は口縁部が外反し口縁部内面に弱い段を持つCⅠ②類である。380はEⅡ②類、377はEⅢ②類に属する。381は椀状のG類で外面に二段の沈線帯が見られる。

c. I群の土器 テラス3出土の土器(386～425)

386～420が深鉢、421～425は浅鉢である。386はⅢA類、389はⅢB類である。387・388・390は無刻目突帯のⅣ類で、387は内面に沈線を有するⅣC類、388・390は何も施さないⅣD類である。突帯は387と390が三角形状のc類、388は微隆起帯状のb類である。398・399・402・404はⅤ類で、内面に沈線を有するⅤB類(398・399・402)と何も施さないⅤD類(404)がある。器面調整は全てナデ調整である。392・400・401・403はⅥD類である。392は外面巻貝条痕、403は内外面二枚貝条痕が見ら

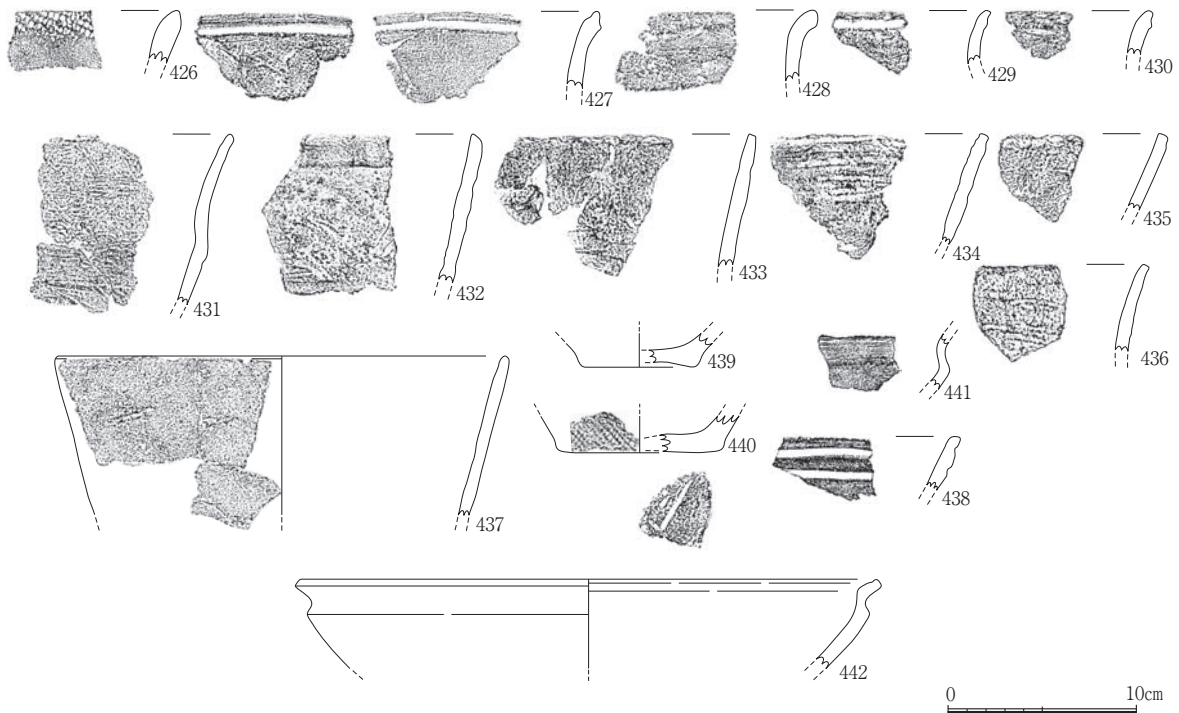


Fig.75 3-1-4区I群の土器⑩(テラス4・SX2)

深鉢 II類：439, IIB類：426, IIIC①類：438, IVB②c類：427, IVD②a類：428, IVD③b類：429・430,
 VD②d類：431, VID①b類：436, VII①c類：434, VIII①d類：433・435・437, VIII②d類：432
 浅鉢 C類：441, EII①類：442

れ、400・401はナデ調整である。391・393～396はVII D類である。391は外面巻貝条痕、395・396は外面二枚貝条痕、393・394はナデ調整である。397・405～409・411・412はVIII類である。412は外面に二枚貝条痕を施すが他は内外面ナデ調整である。410・413・414はIX類である。410は内外面巻貝条痕、413・414はナデ調整を施すが413は下地の条痕調整が見られる。415～420は底部である。418・419が平底、他は上げ底である。420は胎土からIII類或はIV類に属するものと考えられる。体部内外面ナデ調整、外底は繊維状原体によるナデ調整である。

421は浅鉢A II b③類、422はE III①類、425はC I①類、423・424は口縁部を欠損しているがC類に属する。

d. I群の土器 テラス4・SX2出土の土器(426～442)

426はIIB類である。口縁部外面にRLの縄文を施文する。片粕式土器である。438は胎土が精緻で浅鉢の可能性もあるが深鉢IIIC類とした。427～430はIV類で、427がIVB類、他はIVD類である。突帯は427が三角形状のc類、428は口縁下端に僅かに張り出すa類、429・430は微隆起帯のb類である。431はVD類である。内外面ナデ調整を施すが外面には下地の巻貝条痕が認められる。436はVID類で外面に巻貝条痕が見られる。432～435・437はVIII類である。434の内面には二枚貝条痕を認めるが他は全てナデ調整である。439・440は深鉢底部である。440の外面にはRLの縄文が見られる。

441は口縁部を欠くが浅鉢C類、442は浅鉢E II①類である。

e. II群の土器(443～488)

443～479は深鉢、480～485は浅鉢である。447は口縁部に凹線文を持つIIE類、450は口縁部に



Fig.76 3-1-4区Ⅱ群の土器①

深鉢 ⅡB類：450, ⅡE類：447, ⅢA①類：444・446・448・449, ⅢA②類：443, ⅢB①類：445,
 IVB①c類：455・457, IVB①d類：452, IVC①c類：453, IVC②c類：454・456・458, IVD③b類：451,
 VC①d類：464, VD②d類：470, VID②d類：459・462・465・466, VID①b類：463・467,
 VID②a類：461・468, VIII①d類：472, VIII②b類：460, IX①d類：471, IX②c類：474, IX②d類：469・473

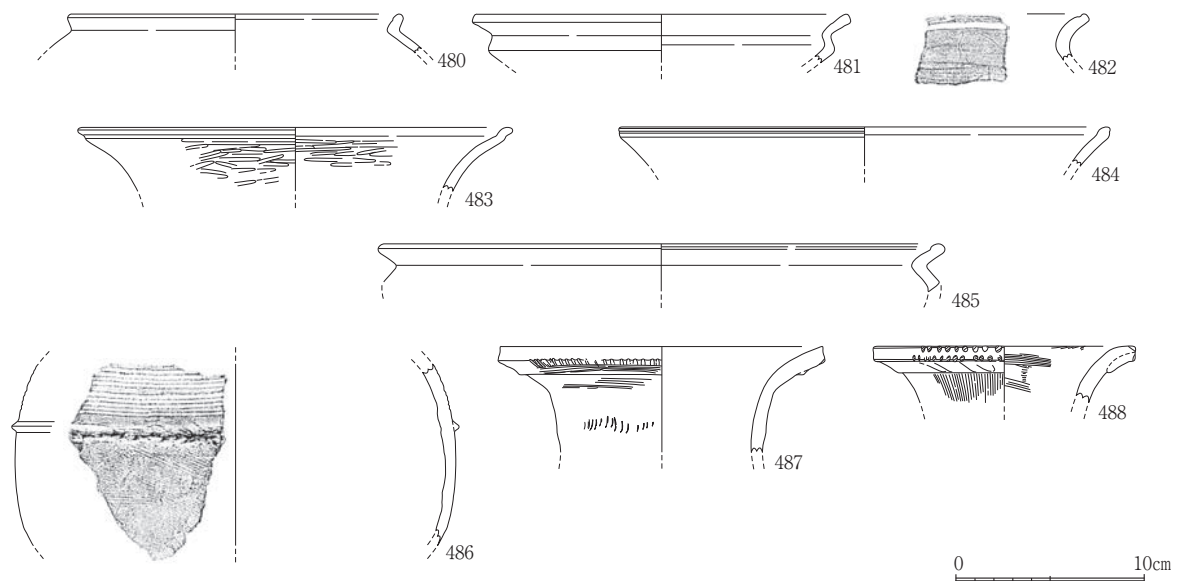


Fig.77 3-1-4 区Ⅱ群の土器②

浅鉢 AⅢb②類：483, AⅢb③類：484, CⅠ③類：482, EⅡ④類：481, FⅡ②類：485, FⅢ②類：480,
弥生中期壺：486～488

縄文帯を有するⅡB類である。475はⅡB類の胴部である。443・444・446・448・449はⅢA類である。444は波状口縁を呈し、443・448は断面に口縁部の接合痕跡が見られる。これらは褐色系で精緻な胎土、内外ナデ調整を施すなど共通している。445はⅢB類である。451～458はⅣ類である。口縁部内面に段状の沈線を有するⅣB類(452・455・457)、沈線を有するⅣC類(453・454・456・458)、何も施さないⅣD類(451)が見られる。突帯の形状は微隆起帯状のb類(451)、三角形のc類(453～458)、太い突帯のd類(452)がある。457の口縁部外面には径5mmの大きな刺突が施される。Ⅳ類の胎土色調はこれまでも触れたように褐色系で精選された胎土を有し、内外面ナデ調整を施す。464はⅤC類、470はⅤD類である。459・462・465・466はⅥD類で、内外面ナデ調整である。461・463・467・468はⅦD類である。461・468は内外面二枚貝条痕、463は外面巻貝条痕、467は外面二枚貝条痕が見られる。460・472はⅧ類で460の外面は巻貝条痕、472は内外面ナデ調整である。469・471・473・474はⅨ類である。476～479は底部である。476・477は丸みを持って立ち上がる。478は高台状を呈する。479は浅鉢の底部となる可能性もある。

480～485は浅鉢である。483・484はAⅢ類で、483は外面赤彩されている。482はCⅠ類で、内面には削り出しによる段が見られる。481はEⅡ類、480はFⅢ類、485はFⅡ類で、ともに口縁部内面が肥厚している。485は粘土帯接合部で剥離している。これらの浅鉢は、内外面丁寧なヘラ磨きを施した黒色磨研浅鉢である。

486～488は弥生土器である。486は胴部に断面三角の突帯を貼付し突帯から上に櫛描直線文を配している。中期前葉に属する。487は口縁部外面に櫛描直線文を二帯配しその間に微隆起帯を貼付する。また口縁部外面に刻目を施す。488は口縁部外面に1.5cm幅の粘土帯を貼付、口縁端部上下に刻目を施す。



Fig.78 3-1-4区Ⅲ群の土器①

深鉢 ⅢA①類：489・490・491・492, ⅣB①b類：494, ⅣC①b類：495, ⅣC②a類：505,
 ⅣC②c類：500・502・504, ⅣC③c類：498, ⅣD①c類：496, ⅣD①d類：497,
 ⅣD②b類：499, ⅣD②c類：493・501・503, ⅣD③b類：506, ⅤD①a類：511,
 ⅤD①d類：510・521, ⅤD②b類：507, ⅤD②d類：519, ⅤD①a類：512・514・516・520,
 ⅤD①b類：508・515・518・522, ⅤD②b類：509, ⅤD②d類：513・517

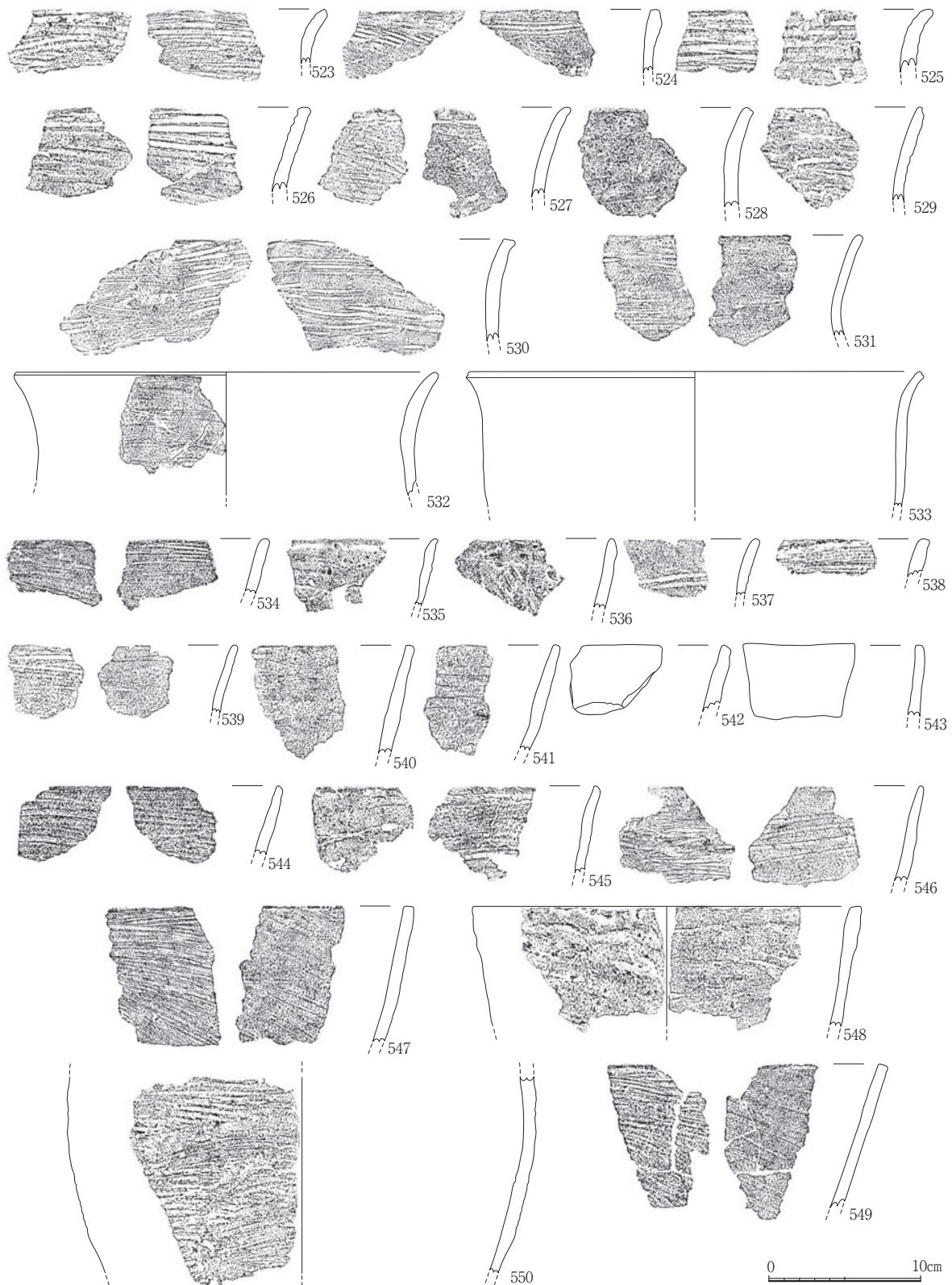


Fig.79 3-1-4区Ⅲ群の土器②

深鉢 VC②b類：527, VID②b類：537, VID①a類：530, VID①b類：529・531, VID①d類：528,
 VID②a類：523・525・526, VID②d類：532, VII①a類：534・538・544, VII①b類：540・547・549,
 VII①d類：542・543・548, VII②a類：539・546, VII②d類：541・545, IX①d類：535, IX②d類：536,
 X②d類：533, XI①a類：524

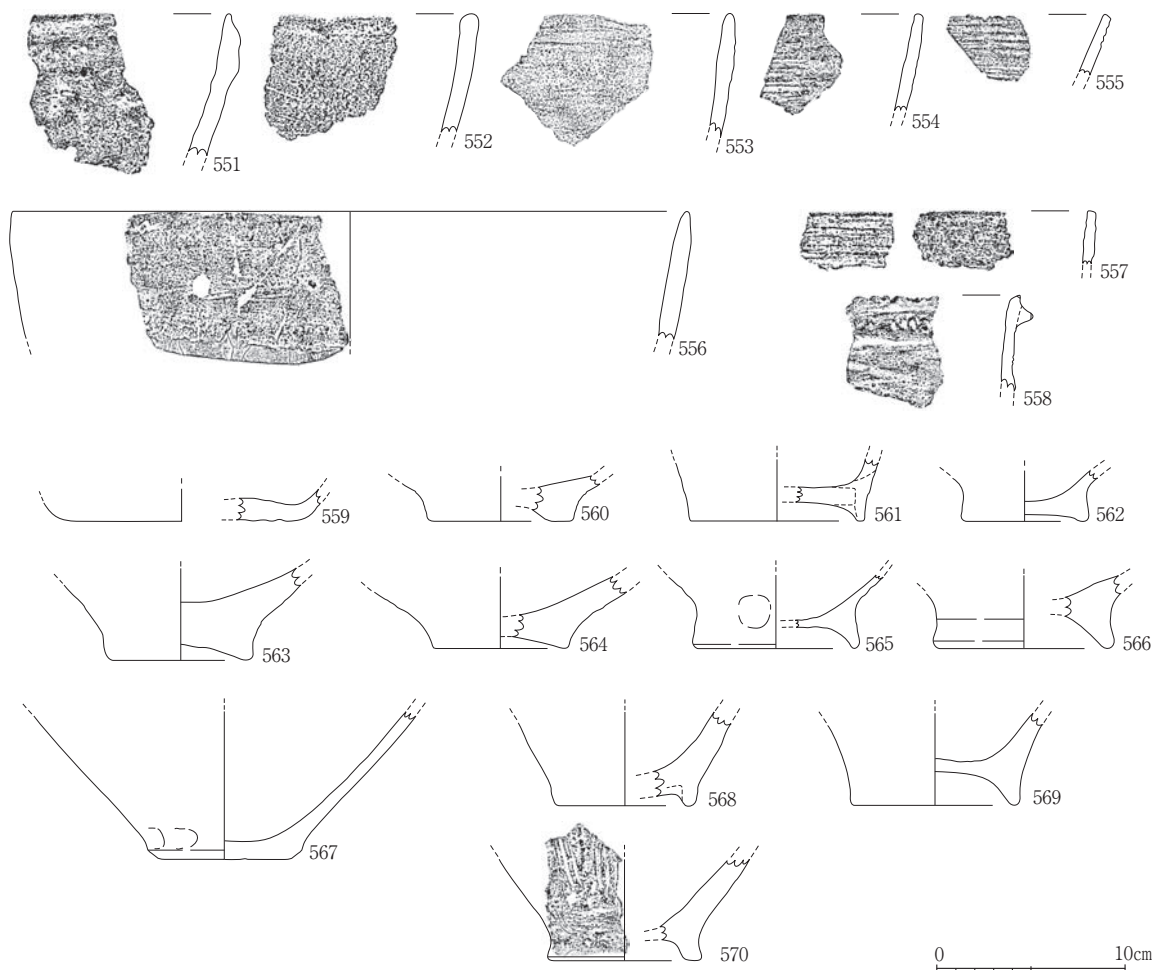


Fig.80 3-1-4区Ⅲ群の土器③

深鉢 Ⅷ①a類：557, Ⅷ①b類：555, Ⅷ②d類：556, Ⅸ①b類：554,
Ⅸ②b類：553, Ⅸ②d類：551・552, ⅪA③a類：558

f. Ⅲ群の土器

深鉢(489～570)

489～492はⅢA類である。489は口縁部の接合痕跡を明瞭に観察することができる好例で、下端が少し突帯状に突き出ている。頸内外面は丁寧なナデ調整がなされている。493～506は無刻目突帯のⅣ類で、ⅣB類(494)、ⅣC類(495・498・500・502・504・505)、ⅣD類(493・496・497・499・501・503・506)がある。突帯の形状は、僅かに張り出しが見られるa類(505)、微隆起帯のb類(494・495・499・506)、三角形状を呈するc類(493・496・498・500・502・504)、大きな三角形状のd類(497)がある。Ⅳ類は総じて褐色に発色する精緻な胎土が使われ、頸部内外面は丁寧なナデ調整が施されている。527はⅤC類で、外面は巻貝条痕が見られる。507・510・511・519・521・537はⅥ類である。器面調整は内外面条痕の511、外面条痕の507・537、内外面ナデ調整の510・519・521が見られる。508・509・512～518・520・522・523・525・526・528～532はⅦ類である。条痕が見られるもののなかで527は巻貝の可能性はあるが他は全て二枚貝条痕である。530は内外面二枚貝条痕の後、外面は巻貝条痕を施している。534・538・539・544・546～548・549・555～557はⅧ類である。534は外面繊維束状の原体でナデ調整、

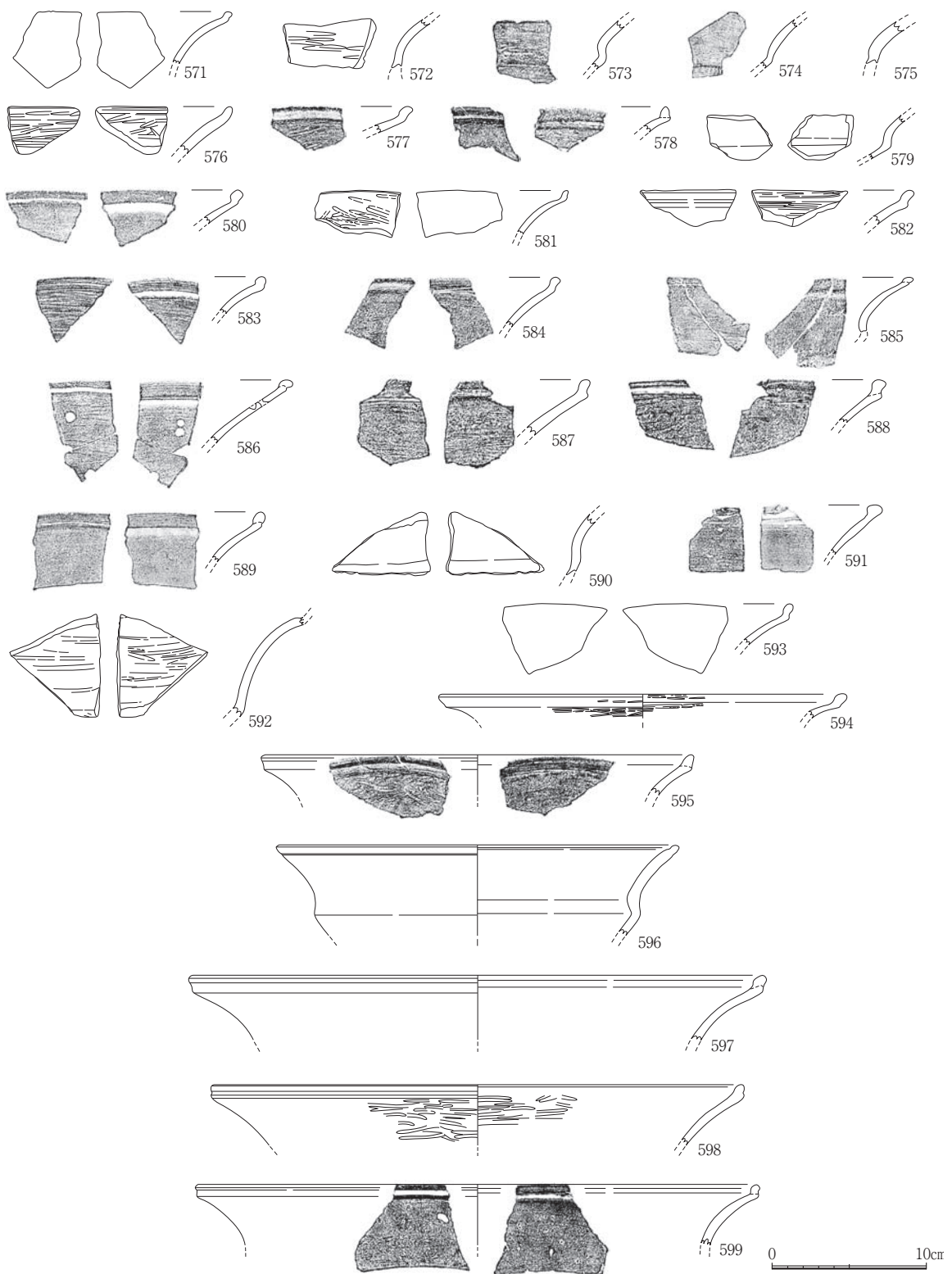


Fig.81 3-1-4 区Ⅲ群の土器④

浅鉢 A 類：572・573・574・575・579・590・592, A Ia③類：578
 A IIa①類：571・587・588・593・595・598・599, A IIa③類：581, A IIa④類：576
 A IIb①類：594・582・597, A IIb②類：577・584, A IIb③類：580・583・589
 A IIIb③類：585・586, A IIIb④類：591, A IIIa⑤類：596

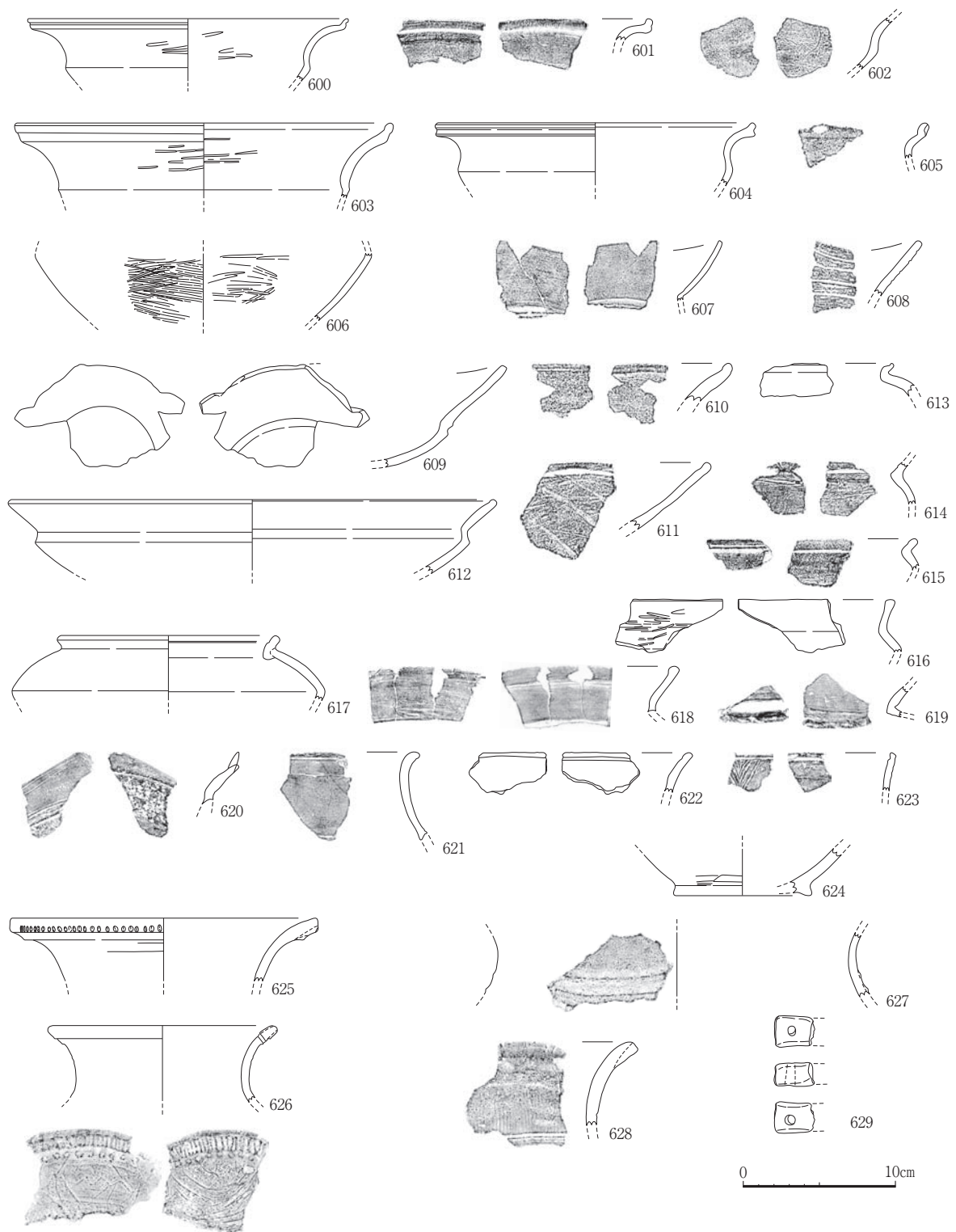


Fig.82 3-1-4 区Ⅲ群の土器⑤

浅鉢 BⅠa①類：604, BⅠa③類：601, BⅡa①類：603, BⅡa③類：600, C類：602・606
 CⅠ①類：605, DⅠ類：607・608, D類：609, EⅠ①類：612, F類：619, FⅠ②類：616・618
 FⅢ①類：615, FⅢ②類：613・614, FⅢ④類：617, G①類：610, G③類：611
 HⅠ類：621, JⅠ②類：622, M類：620, K類：623
 弥生中期土器：625~628 棒状土錘：629



Fig.83 3-1-4区IV群の土器①

深鉢 II B類 : 630, III A①類 : 631・632, IV B②a類 : 640, IVC②c類 : 635, IVC②d類 : 638
 IVD①c類 : 634・637, IVD②a類 : 636, IVD②c類 : 633・639, VD①a類 : 647
 VIB①d類 : 643, VID①b類 : 644・646, VID②c類 : 642, VID②d類 : 648, X②d類 : 645

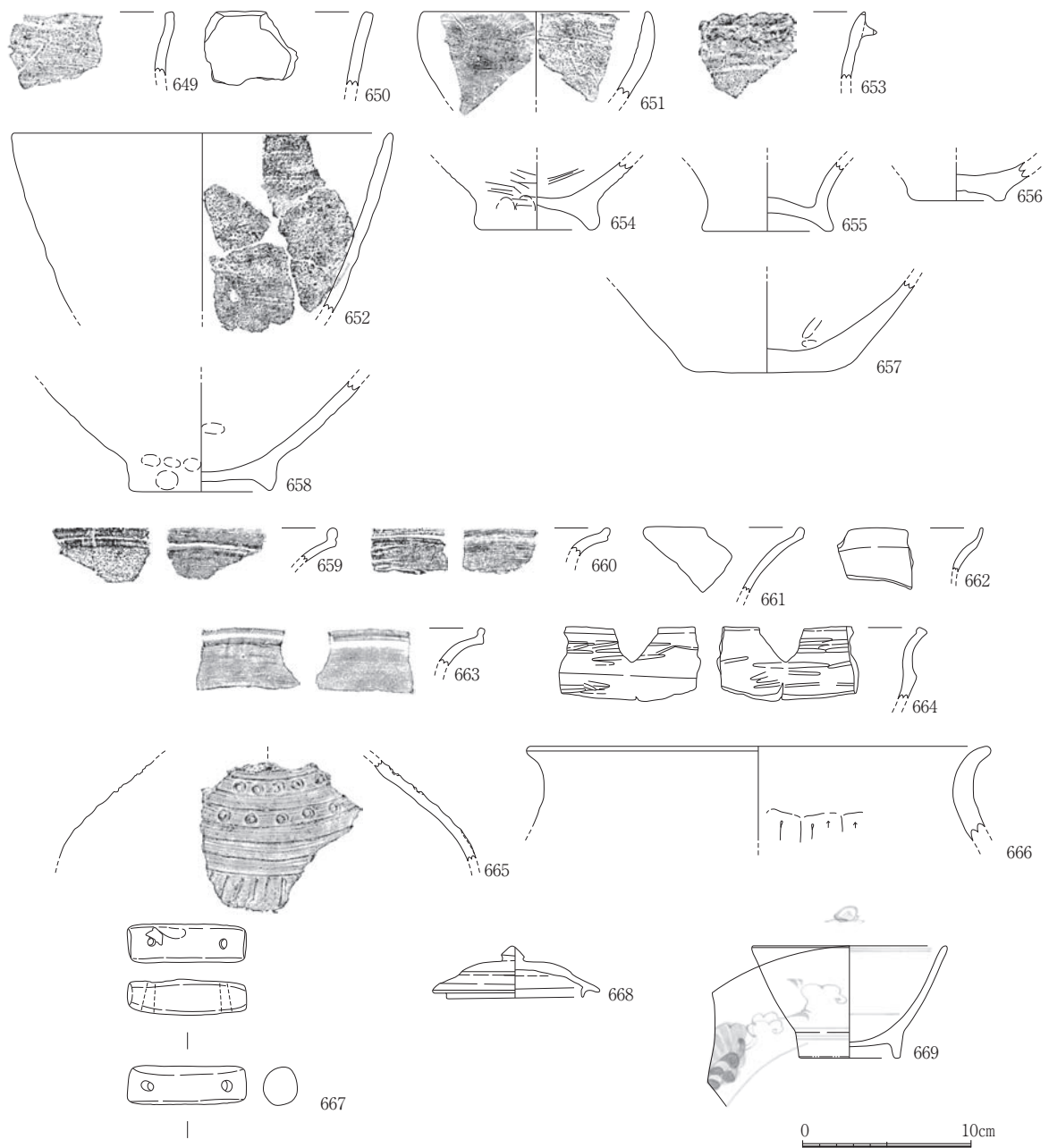


Fig.84 3-1-4 区IV群の土器②

深鉢 VIII①d類：650, VIII②d類：652, IX②d類：649・651, XIIA③a類：653

浅鉢 AIIa③類：661, AIIb③類：659, BIIa①類：663, BIIa③類：660, BIIa④類：662,

CI①類：664

弥生中期壺：665 棒状土錘：667 土師器甕：666 須恵器杯蓋：668 近世陶磁器：669

内面は二枚貝条痕が見られる。538・544・557は内外巻貝条痕、539は内外二枚貝条痕である。547・549は内外面巻貝条痕を施し内面は丁寧なナデ調整がなされている。他の多くは条痕の上をナデ調整で仕上げている。556は6mmの円孔が焼成後に穿たれている。535・536・551～554はIX類である。内外面ナデ調整を基調とするが553・554は外面の下地に条痕が認められる。524はXI類で内外面二枚貝条痕を施している。558は刻目突帯文を有するXII類である。しっかりした三角突帯を貼付し口唇

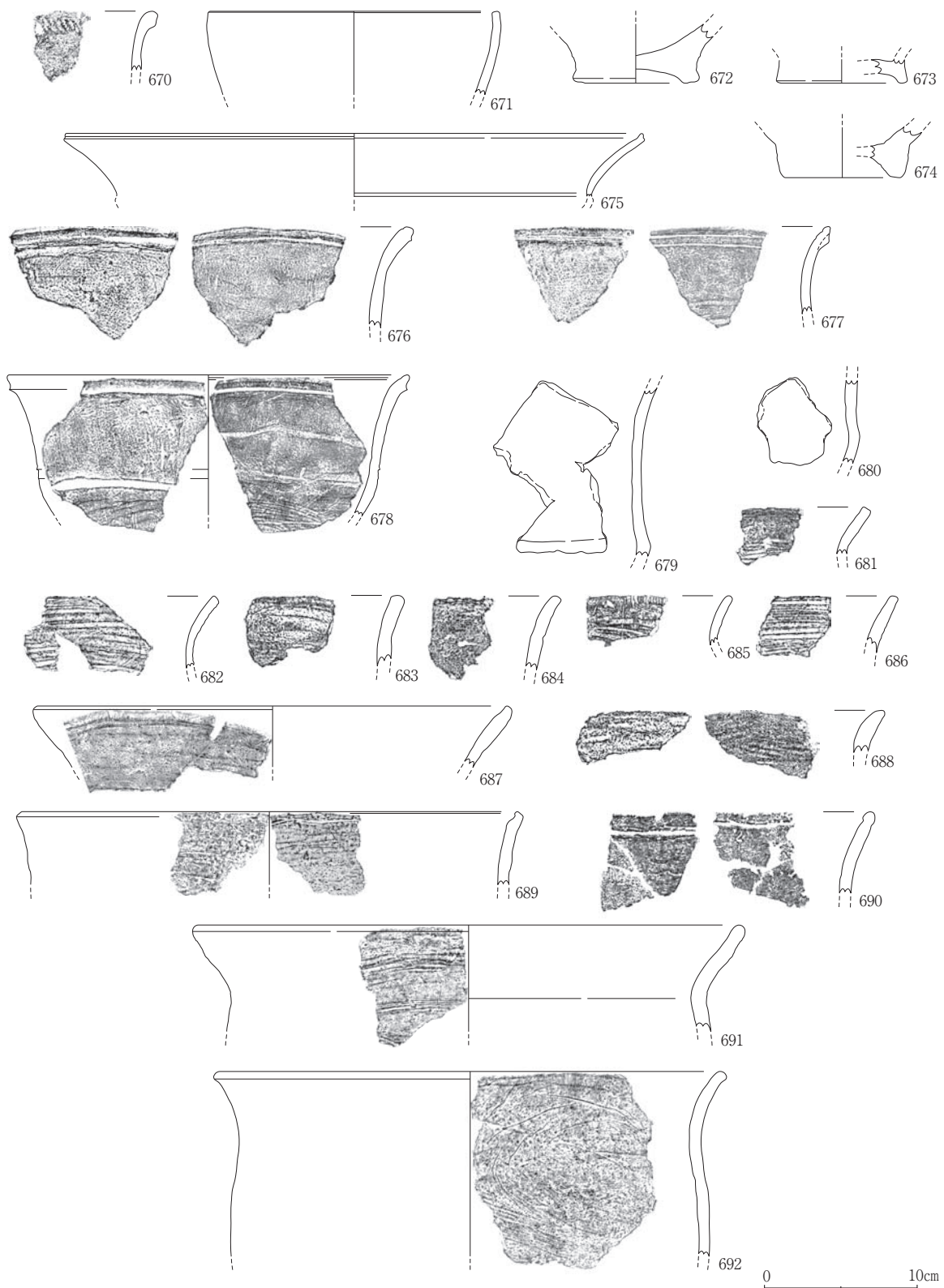


Fig.85 3-1-5区出土土器①(Ⅱ・Ⅲ層, SX 1)

深鉢 ⅡB類: 670, ⅣC①c類: 676, ⅣC②c類: 677・678, ⅤB①d類: 689, ⅤC②d類: 690
 ⅥD①d類: 684, ⅥD①a類: 682, ⅥD①b類: 681・686, ⅥD①d類: 687・692, ⅥD②b類: 691
 ⅦD②d類: 683・685・688, Ⅸ①d類: 671
 浅鉢 AⅠa①類: 675

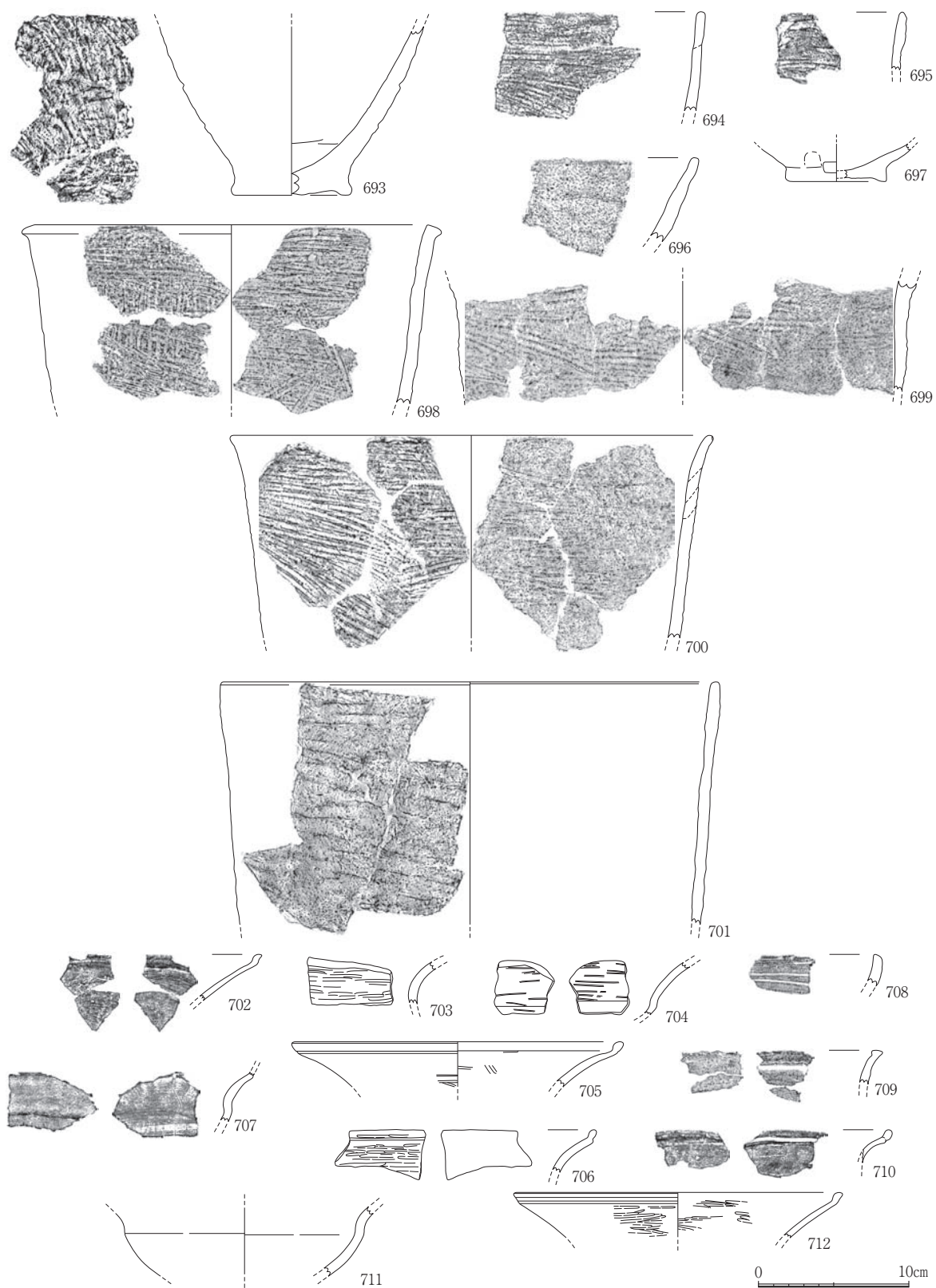


Fig.86 3-1-5区出土土器②(SX1)

深鉢 VID②a類：700, VIII①a類：698, VIII①d類：701, VIII②d類：696, XI②b類：695, VIII②b類：694
 浅鉢 A類：703, AⅡa①類：706, AⅡb③類：705, AⅡb②類：702・712, AⅡb③類：710,
 B類：707, C類：711, CⅠ①類：709, G⑤類：708

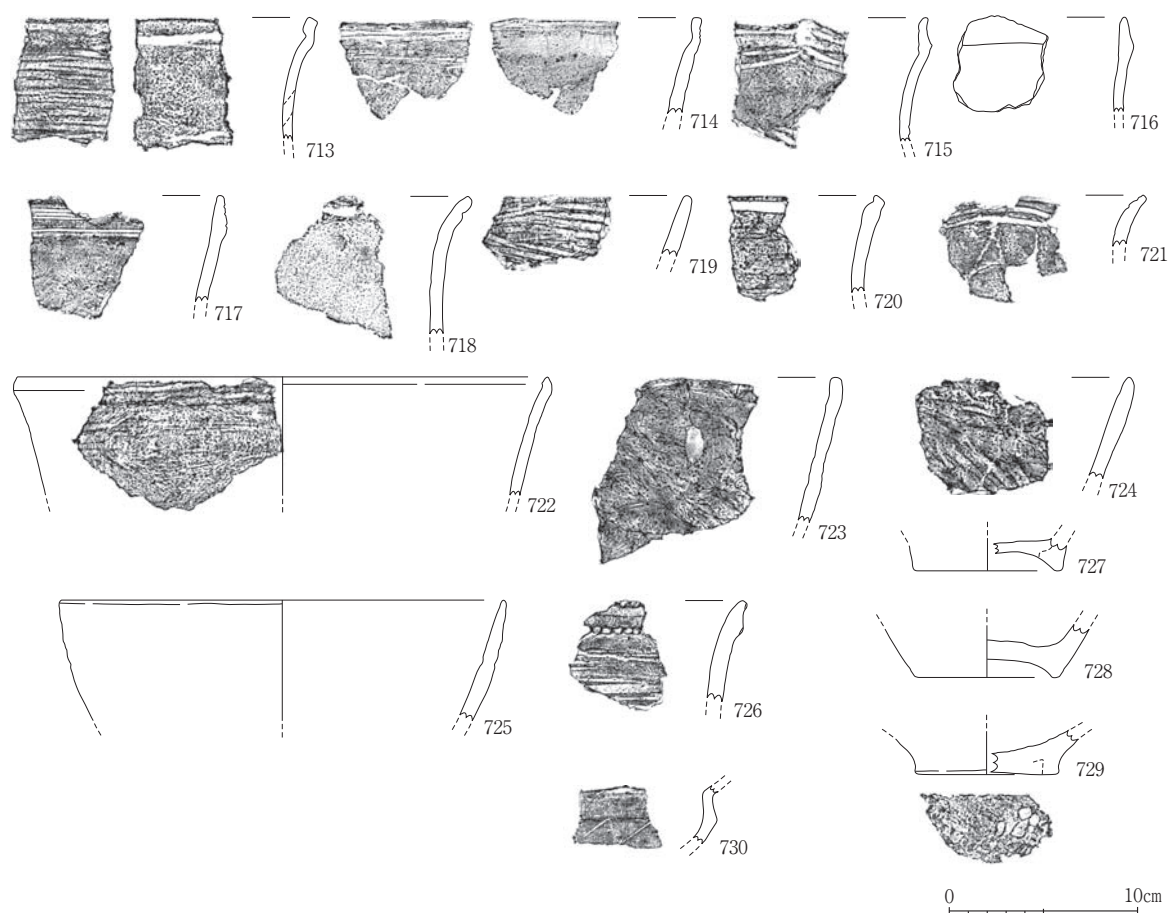


Fig.87 3-1-5 区出土土器③(SX2)

深鉢 IIIA①類：714・715・717, IIIB①類：713, IIIB②類：716, VA①d類：720,
 VB①d類：721, VD①d類：718, VD②d類：722, VII②b類：719・724,
 IX②b類：723, IX②d類：725, XIIA①b類：726
 浅鉢 C類：730

部にも刻目を施す。外面には二枚貝条痕が見られる。550は胴部片である。外面は二枚貝条痕、内面はハケ条原体による調整が施されている。559～570は深鉢底部である。559・567が平底である他は上げ底である。後者は接地部が面をなし高台状の底部(560・568・570)と接地部が丸味を帯びてアーチ状の断面を有する底部(561～566・569)がある。569は色調胎土からⅢ類あるいはⅣ類の底部と考えられる。

浅鉢(571～624)

578はAⅠ類で口縁部外面は凹状を呈する。571・576・577・580～584・587～589・593～595・597～599はAⅡ類である。口縁部内面が肥厚しないa類(571・576・581・587・588・595・598・599)、肥厚するb類(577・580・582～584・586・589・594・597)がある。口縁部外面が段状をなす①類(571・582・587・588・593・595・597～599)、凹状の②類(577・584)、沈線を有する③類(580・581・583・589)、外面に何も施さない④類(576)がある。585・586・591・596はAⅢ類で、596以外は口縁部内面がカマボコ状に肥厚するb類である。口縁部外面は沈線を有する③類(585・586)、何も施さない④類(591)、内外面に沈線を施す⑤類(596)が見られる。572～575・579・590は口縁部を欠いている。572・575・590は粘土紐の接合部で欠落しており擬口縁が観察できる好例である。以上のA類は全て黒色磨研で丁寧な作りである。



Fig.88 3-1-5区出土土器④(VI・VII層)

深鉢 II A 類：731, IVD①c 類：732, VID①d 類：736・747, VID②d 類：737,
 VID①b 類：740, VID②b 類：734・735, VID①d 類：733,
 VIII①d 類：738・739・742・745・746, VIII②d 類：741・743・744・748

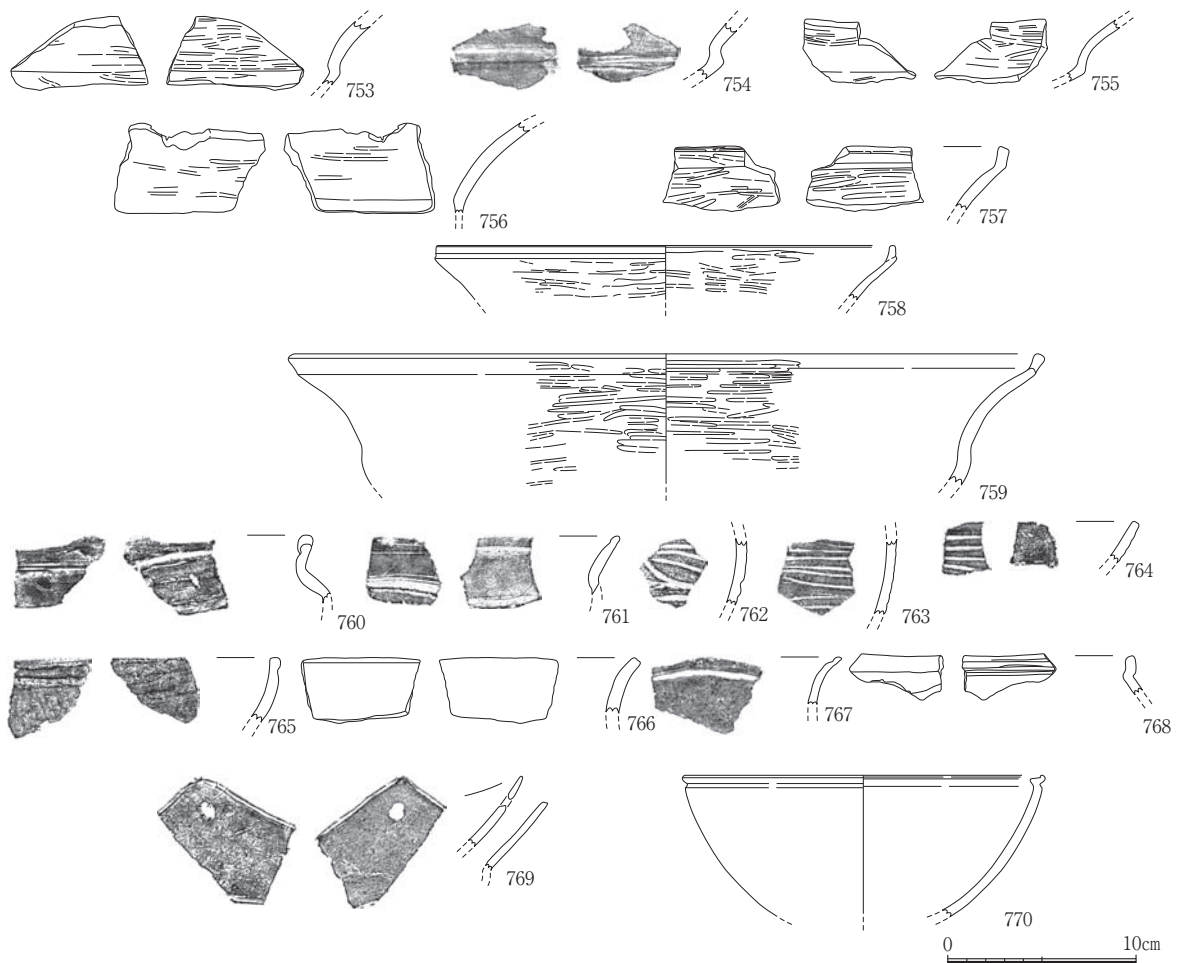


Fig.89 3-1-5区出土土器⑤(VI・VII層)

浅鉢 A類：753・754・755・756, AⅡa②類：757・759, AⅡa③類：758,
 CⅠ②類：767, DⅠ類：769, EⅢ①類：770, FⅠ⑤類：766,
 FⅡ②類：760, G⑤類：764・765, I類：768, M類：761

601・604はBⅠ類で共に口縁部内面が肥厚しないa類、601は外面に沈線を有する③類、604は段をなす①類である。600・603はBⅡ類である。口縁部外面は段を持つ①類(603)、沈線を持つ③類(600)がある。605は波状口縁部を有するCⅠ①類で、波頂部外面に圧痕が見られる。602は口縁部を欠くがC類と考えられる。607～609はD類で、608には外面に4条の沈線が施される。612はEⅠ類で、口縁部内面に段を有する①類である。616・618はFⅠ類で共に口縁部内面が肥厚する②類である。617は算盤玉状の胴部を有するFⅢ④類である。615はFⅢ類で、口縁部内面は段を有する①類(615)と内面肥厚する②類(613・614)がある。619は口縁。610・611はG類で、前者は口縁部内面が肥厚する①類、後者は沈線を有する③類である。621はHⅠ類で口縁部外面と胴部に1条の沈線が巡る。622はJⅠ類で口縁部内面に沈線を有する②類である。623はK類で内面に沈線を有し外面には鋸歯文様の文様が描かれている。620は平面方形のM類で外面に沈線が見られる。頸部は胴部との接合部で剥離し擬口縁が見られる。口縁部接合部も内傾接合痕が観察できる。624は数少ない浅鉢底部である。これらの浅鉢は622を除いて黒色磨研仕上げである。

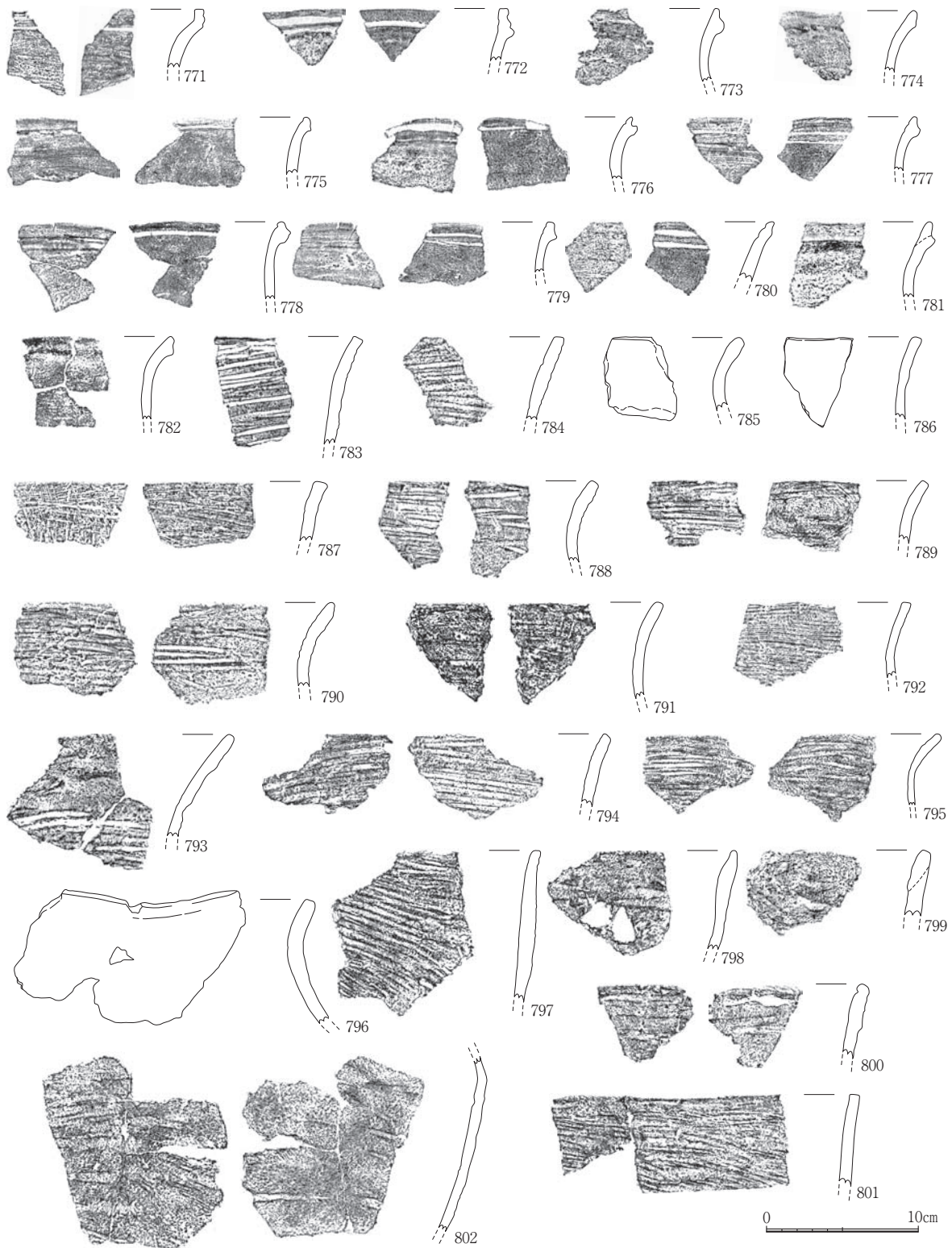


Fig.90 3-1-5区出土土器⑥(上層)

深鉢 IIIA①類: 771・772, IVC①a類: 780, IVC①c類: 775・777, IVC②c類: 779, IVC②d類: 778, IVC③d類: 776
 IVD②c類: 774・781・782, IVD②d類: 773, VID①d類: 786, VID①b類: 784,
 VID①a類: 787・788・794・795, VID①b類: 783・789・792・793, VID①d類: 791・796, VID②a類: 790
 VID②d類: 785, VIII①b類: 801, VIII①d類: 799, VIII②b類: 797, VIII②d類: 798, XI②a類: 800

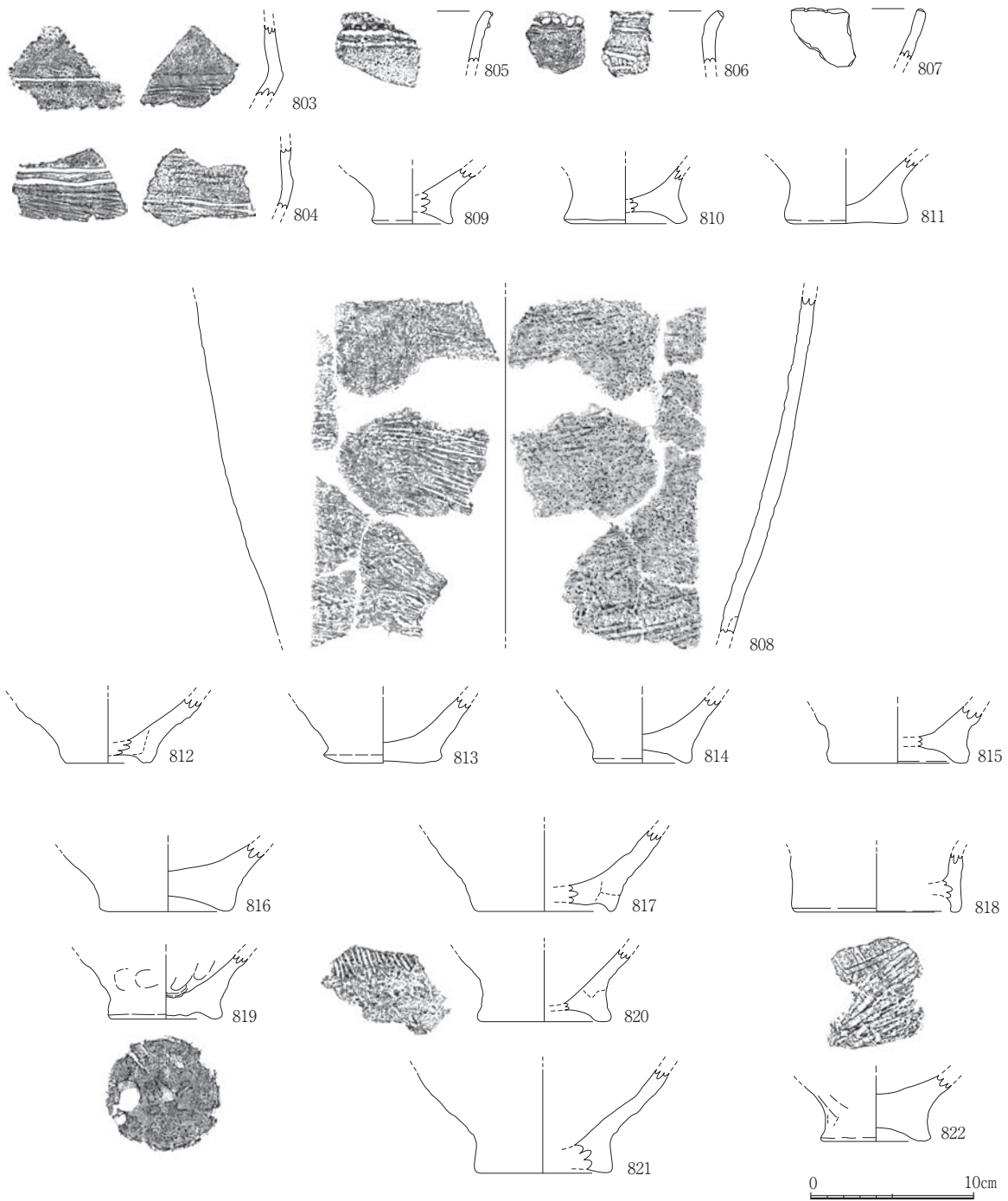


Fig.91 3-1-5区出土土器⑦(上層)

深鉢 III~IV類：803・804, IX②d類：807, X①d類：806, XIIA①c類：805

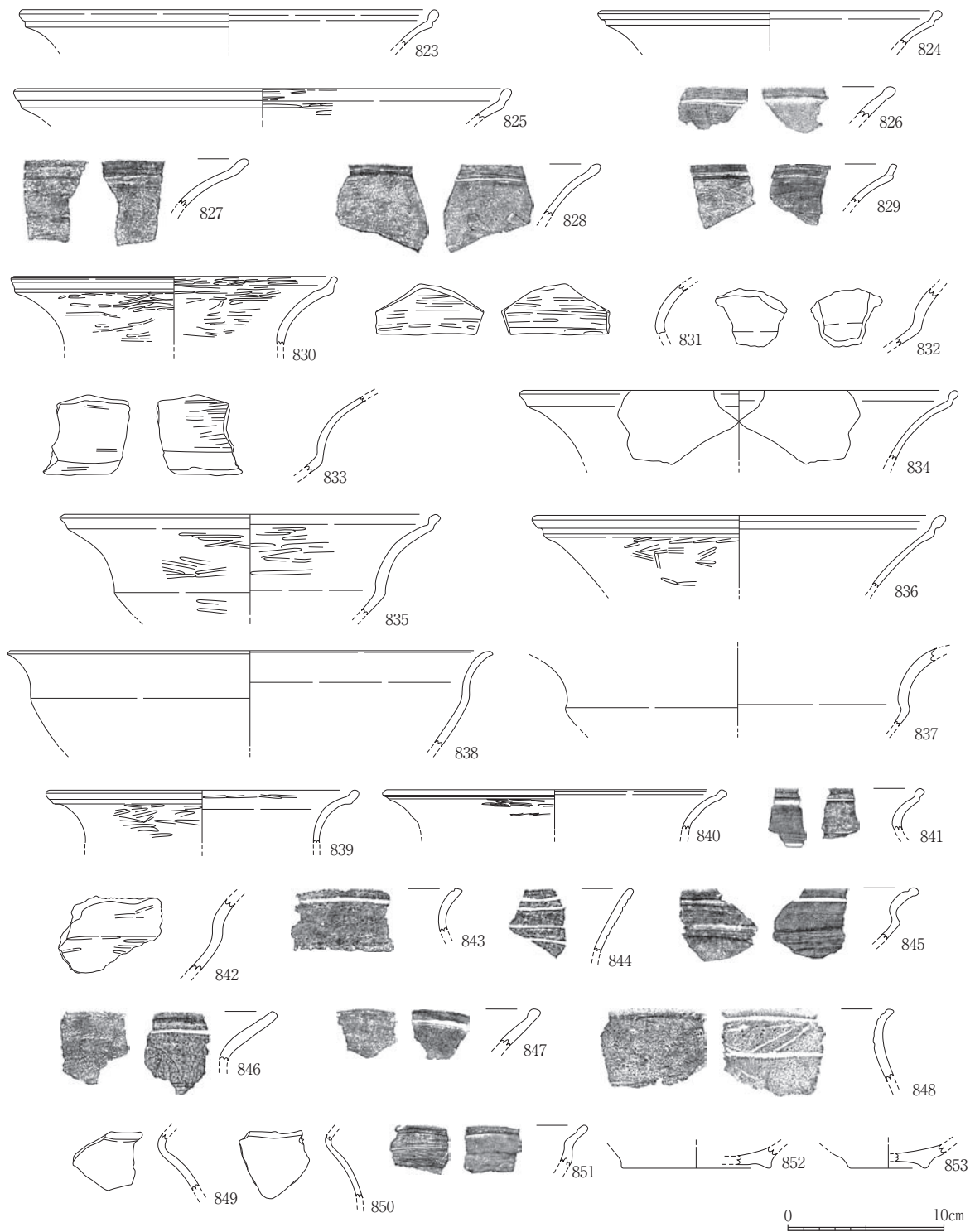


Fig.92 3-1-5 区出土土器⑧(上層)

浅鉢 A 類 : 831・832・833・837, AⅡa①類 : 823～825・829・834, AⅡa②類 : 830,
 AⅡb②類 : 827・835, AⅡb④類 : 828, AⅢb①類 : 836, AⅢb③類 : 826, B 類 : 842,
 BⅡb②類 : 841, BⅡb③類 : 839, BⅢb③類 : 840, CⅠ 類 : 838・843, D 類 : 844,
 EⅠ③類 : 845・846, F 類 : 849・850, G②類 : 847, HⅠ 類 : 848, JⅡ①類 : 851

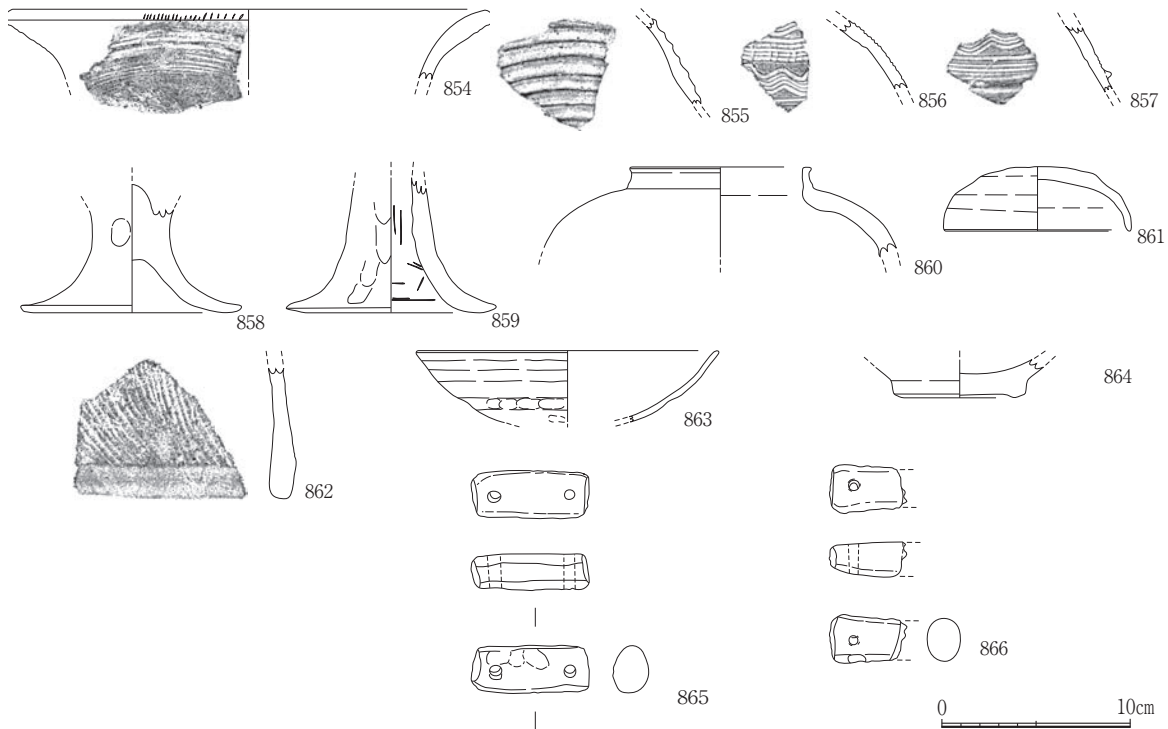


Fig.93 3-1-5 出土土器⑨(上層)

弥生中期壺：854～857，土師器高杯：858・859，須恵器壺：860，同杯蓋：861
 移動式竈脚：862，瓦器椀：863，白磁碗：864，棒状土錘：865・866

625～628は弥生中期の壺である。625は口縁部外面に微隆起帯を貼付し頸部には櫛描文が見られる。626は口縁部外面に幅8mmの扁平な粘土帯を貼付し、内外面に列点文を施す。さらに口縁部内面から外面に径2mm前後の小孔列を巡らす。頸部外面には櫛描直線文と波状文を施す。628は口縁部外面に2cm幅の扁平な粘土帯を貼付し頸部外面には櫛描文が見られる。627は南四国型甕の上胴部である。外面に3条の微隆起帯を施している。629は棒状土錘の一方の端部で、断面楕円形、7mmの孔が穿たれている。

g. IV群の土器(630～669)

630～658が深鉢、659～664が浅鉢である。630はⅡB類で後期の片粕式土器に属する。口縁部外面を肥厚させLRの縄文を施文、口唇部には列点文が見られる。631・632はⅢA類である。631は波状口縁をなす。両者ともに一次口縁の上に二次口縁を継ぎ足しており632は接合痕跡が観察できる。両者とも一次口縁端部が突帯状をなしている。631は頸部内外面丁寧なナデ調整、632は頸部に下地の巻貝条痕が認められる。633～640はⅣ類である。内面に段状の沈線を持つB類(640)、沈線を有するC類(635・638)、何も施さないD類(633・634・636・637・639)があり、突帯の形状は僅かに張出すa類(636・640)、三角形状のc類(633～635・637・639)、太い三角形のd類(638)が見られる。640は胴部最大径付近に2条の沈線を巡らしている。641はⅢ類またはⅣ類の頸胴部片で外面に2条の沈線が見られる。647はⅤD類で内外面巻貝条痕が施される。643はⅥB類である。642・644・646・648はⅦD類である。642は内面、644・646は外面二枚貝条痕、648はナデ調整である。650・652はⅧ類で内外面ナデ調整である。649・651はⅨ類である。共にナデ調整を施すが649は繊維束状の原体である。

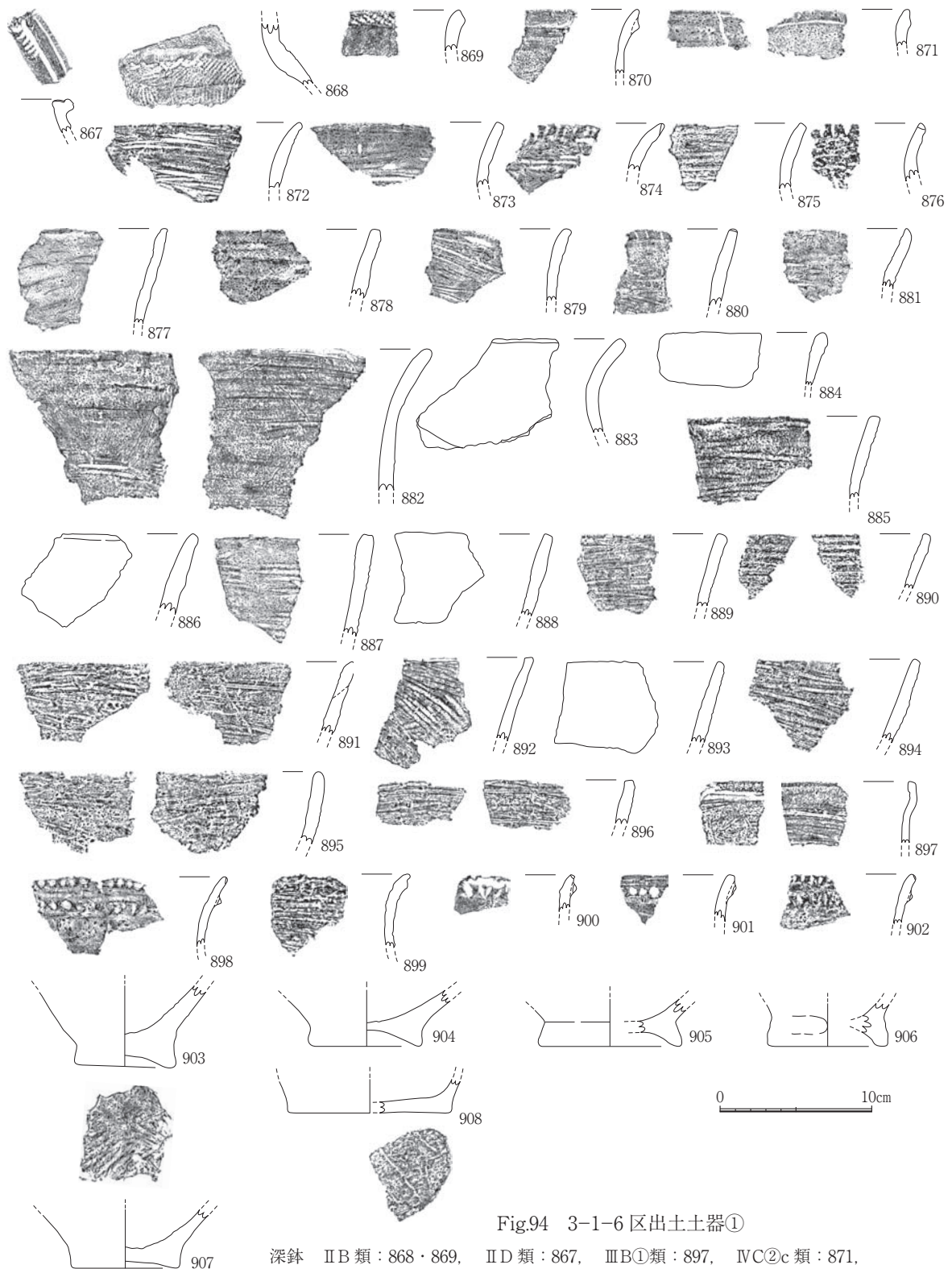


Fig.94 3-1-6 区出土土器①

深鈹 II B 類：868・869， IID 類：867， III B ①類：897， IVC ②c 類：871，
 IVD ②c 類：870， VID ①a 類：879， VID ①b 類：873・875， VID ②a 類：885，
 VID ②b 類：872， VID ②d 類：881・882・883・884， VII E ②b 類：874，
 VII E ②d 類：876， VIII ①a 類：890， VIII ①b 類：887・889・892・894，
 VIII ①d 類：878・880・886・888・893， VIII ②a 類：891， VIII ②d 類：877，
 IX ①a 類：896， IX ②a 類：895， XII A ②b 類：900・902，
 XII A ②c 類：898・899， XII B ①b 類：901

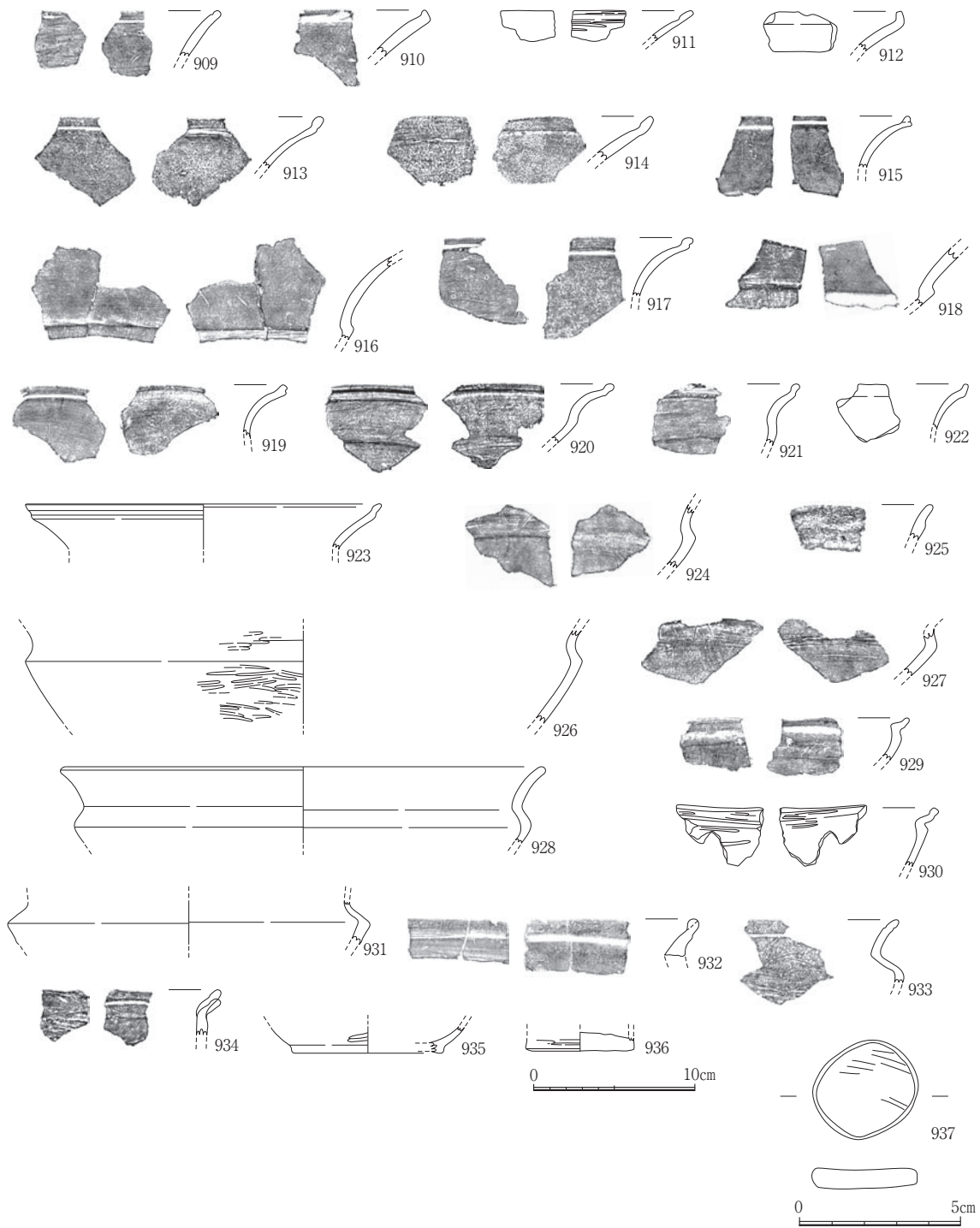


Fig.95 3-1-6区出土土器②

浅鉢 A Ia①類：915, A IIa③類：913, A IIa④類：912, A IIb③類：917, A IIb④類：914,
 A IIIa⑥類：909, A IIIb④類：911, A IV類：910, B Ia①類：919, B IIa①類：923,
 B IIa②類：920・921, B IIa④類：922, C II④類：925, E I④類：928, E II①類：930,
 E III①類：929, F I②類：932, F I③類：933, J II①類：934
 土製円盤：937

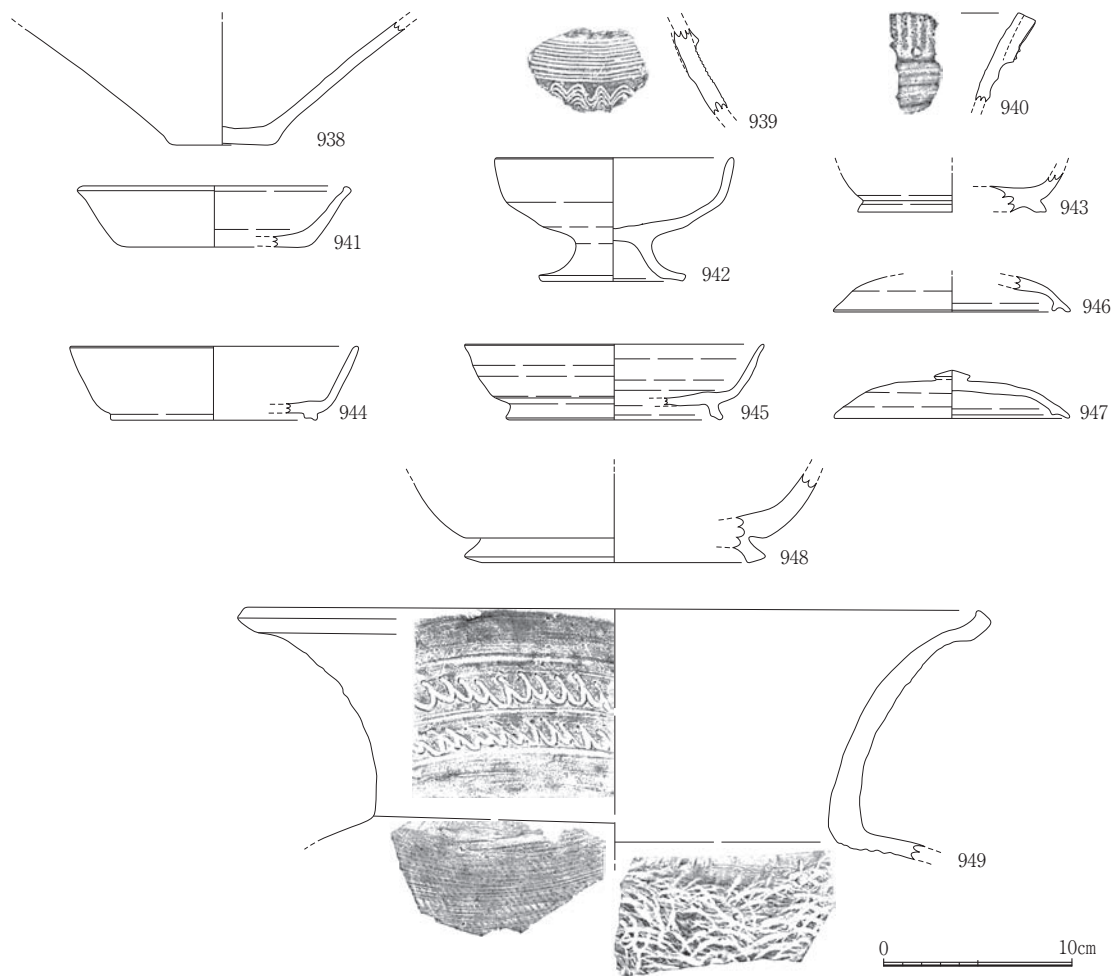


Fig.96 3-1-6区出土土器③

弥生中期壺：938～940，土師器杯：941，須恵器脚杯：同 942
同杯：943～945，同蓋：946・947，同壺：948，同甕：949

653は刻目突帯文のⅫA類である。口唇部は尖り突帯は大きな三角形をなしている。654～658は深鉢底部である。657が平底で他は上底である。654・655・658はアーチ状をなし、656は高台状の底部である。

659～664は浅鉢である。659・661はAⅡ類で659は口縁部が内側に肥厚するb類、661は肥厚しないa類、両者ともに外面に沈線を施している。660・663はBⅠa類で、660は口縁部外面に沈線、663は段を有する。662はBⅡa④類である。664はCⅠ類で口縁部内面に段を有する。全て黒色磨研土器である。665は弥生中期壺の上胴部である。微隆起帯を貼付しその間に櫛描文を配し、上部には円形浮文、最大径付近に棒状の浮文を貼付する。666は土師器甕の口頸部で内面にヘラ削りが見られる。667は棒状土錘である。長さ7cm、幅2.2cm、重さ35.5gを測り両端に4～7mm前後の円孔を穿っている。668は須恵器杯蓋である。宝珠摘みを有し口縁部内側にかえりを有する。669は能茶山焼染め付け椀である。この他、Fig.98に示した古墳時代の土製模造鏡974・976が出土している。前者は紐の一部が欠けるがほぼ完形品で径4.2cmを測る。鏡面は凸状を呈し、背面には指や爪圧痕が顕著に

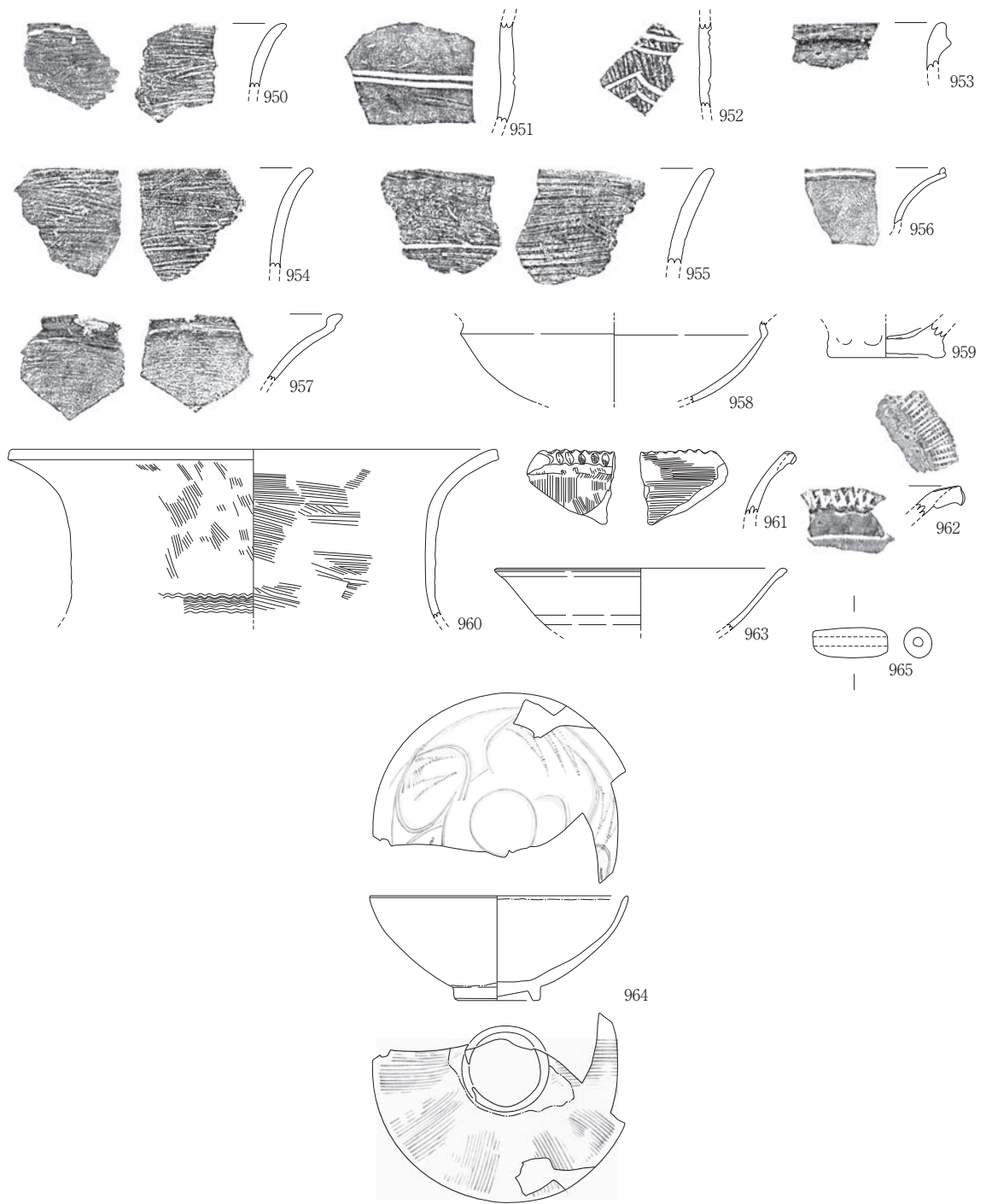


Fig.97 3-1-7区出土土器

深鉢 IVD②c類：953, VD②a類：954, VD②d類：950, VID②a類：955,
 浅鉢 A I a①類：956, A II b②類：957, C類：958
 弥生土器壺：960・961・962, 白磁碗：963, 青磁碗：964, 土錘：965

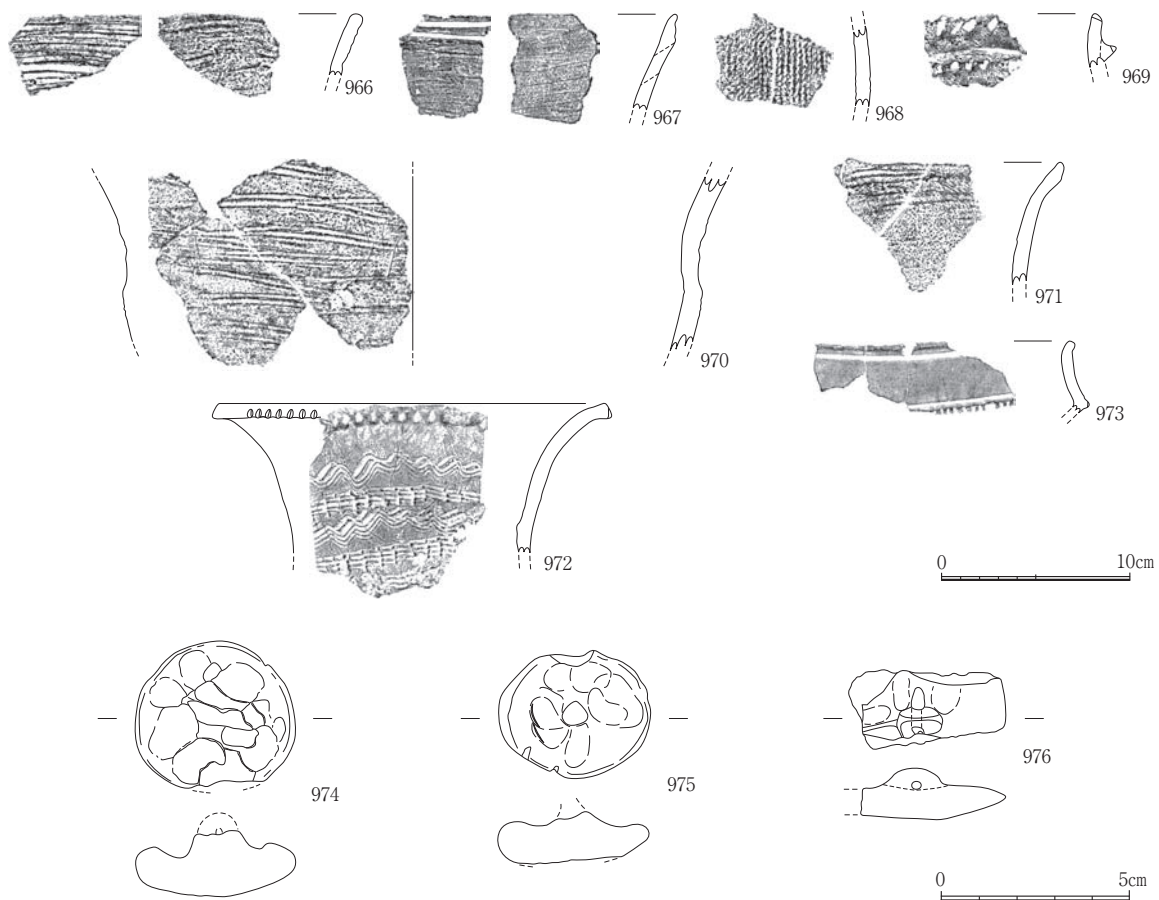


Fig.98 3-2区・他出土土器

深鉢 I類：968, III C②類：967, VID②b類：966, XIA②a類：969, VD②d類：971
 浅鉢 HII類：973
 弥生土器壺：972, 土製模造鏡：974・975・976

見られる。後者も同様の形状を有するものと考えられる。

⑤ 3-1-5区(Fig.85 ~ 93)

a. II・III層の土器(670 ~ 675)

670は深鉢II B類で口縁部外面が肥厚しRLの縄文を施す。片粕式土器である。671は深鉢IX類である。672~674は深鉢底部、全て高台状の上げ底である。675は黒色磨研の浅鉢A I a①類で口縁部外面に沈線を施す。

b.SX1 (676 ~ 712)

676~701は深鉢、702~712は浅鉢である。676~678はIV C類、677は内面に2条の沈線を有する。突帯はすべて三角形のc類である。678の頸胴部界には幅広い沈線を挟むように入れている。頸部外面はハケ状原体による縦方向のナデ調整、胴部外面はヘラ磨き、内面はナデ調整の下地に巻貝条痕を認める。679・680はIV類の頸胴部片である。689は内面に沈線を有するVB類、690は内外面に沈線を有するVC類である。両者ともに内外面ナデ調整である。700はVID類で内外面二枚貝条痕が施される。684はVID類である。681~683・685~688・691・692はVID類である。681・682・686は二枚貝条痕が見られる。694・696・698・701はVIII類である。694・698は巻貝条痕、696・701はナデ調

整である。699は胴部片で内外面二枚貝条痕が見られる。

702・705・706・710・712は浅鉢AⅡ類である。706は口縁部内面が肥厚しないa類であるが、それ以外は内面が肥厚するb類である。口縁部外面は段状をなす①類(706)、凹状の②類(702・712)、沈線を施す③類(710)がある。703はA類の頸部である。707はB類の頸部、709はCⅠ①類、711はC類の頸部である。708はG⑤類で外面に2条の細い沈線が巡る。全て黒色磨研である。

c.SX2 (713～730)

713～729が深鉢、730は浅鉢である。714・715・717はⅢA類である。内外面ナデ調整を基調とし、715は波頂部外面に楕円形の押圧文が施される。713・716はⅢB類である。713は外面に巻貝条痕が見られ、口縁部内面に沈線を施す。718はVD類で外面に沈線を施す。720は口縁部内面に段を持つVA類、721は内面に沈線を持つVB類である。V類は内外面ナデ調整である。722はVI類である。口縁部が内傾して終わっている。外面はナデ調整の下地に削りが認められる。719・724はⅧ類で前者は外面に二枚貝条痕が見られる。723・725はⅨ類で外面はナデ調整の下地に巻貝条痕が見られる。726は刻目突帯のⅪ類である。口唇部にも刻目を施し胴部外面は二枚貝条痕が見られる。底部はアーチ状の上げ底(727・728)と平底(729)がある。

浅鉢730は口縁部を欠くがC類と考えられる。

d.VI・Ⅶ層(731～770)

731～752が深鉢、753～770が浅鉢である。731はⅡA類、口縁部外面にLRの縄文帯を施し、その上に幅広の沈線2条を配している。732はⅣD類、突帯は三角形状のc類である。断面から僅かに外反する一次口縁の上に短い粘土紐を接合して突帯が形成されていることが分かる好例である。736・737・747はⅥD類、ともに内外面ナデ調整である。733～735・740はⅦD類、734・735は外面二枚貝条痕、735は巻貝条痕が見られる。738・739・741・742～746・748はⅧ類、内外面ナデ調整である。底部は高台風の上底(750・752)、アーチ状の上底(749・751)が見られる。

757～759はAⅡ類、口縁部外面は凹状を呈する②類(757・759)、沈線を施す③類(758)が見られる。753～756は口縁部を欠くがA類と考えられる。767は内面にしっかりした段を有するCⅠ②類である。769は波状口縁を有するDⅠ類である。内面下端に段が形成される。波頂部下に径4mmの焼成後穿孔が見られる。770はEⅢ①類、内傾する短な頸部を有し口縁部は段が形成される。内外面赤彩が施される。766はFⅠ⑤類、760はFⅡ②類である。760は口縁部に半月形の突起が見られる。764・765はG⑤類で前者は外面に沈線が施される。768はⅠ類で口縁部が僅かに肥厚している。762と763は胴部片である。762は榎原系文様が施されており胎土も異なることから搬入品の可能性もある。

e.上層(771～866)

771～822が深鉢、823～853が浅鉢である。771・772はⅢA類である。両者とも口縁部外面に2条の沈線を施すが、772は口縁部下端が突帯状を呈する。775～780はⅣC類、773・774・781・782はⅣD類である。突帯の形状は僅かに張出すa類(780)、三角形状を呈するc類(774・775・777・779・782)、太い三角形或は台形状を呈するd類(776・778)が見られる。781は一次口縁の内側に内傾接合によって粘土紐を接合し、一次口縁の下端が突帯を形成している。786はⅥD類である。783～785・787～796はⅦD類である。785・796のように内外面ナデ調整を施すものもあるが、二枚貝条痕を残す例(784・787～790・793・794)、783は外面を棒状工具で多条の沈線を施し条痕状に仕上げている。796は高熱により歪みが生じている。797～799・801はⅧ類である。797は外面二枚貝条痕、801は外面

巻貝条痕である。他はナデ調整を施す。800は口縁部が肥厚するⅪ類、802は上胴部で屈曲する胴部片である。805はⅪA類で刻目突帯は微隆起帯状を呈する。806はⅩ類で口唇部に刻目を施す。807はⅨ類で口唇部に刺突風の刻目を配し、内面に条痕が見られる。803・804は上胴部片である。逆「く」字状に屈曲し1～2条の沈線を配している。下地には巻貝条痕が認められる。Ⅲ類或はⅣ類の胴部片である。808は内外面二枚貝条痕が見られる胴部片である。底部は、平底(811・813)、アーチ状の上底(809・814・816・817～819・821)、高台状の上底(810・815・820・822)が見られる。

823～825・827～830・834・835は浅鉢AⅡ類である。口縁部内面が肥厚しないa類(823～825・829・830・834)、肥厚するb類(827・828・835)が見られる。また外面に段を有する①類(823～825・829)、凹状を呈する②類(827・830・835)、何も施さない④類(828)がある。826・836はAⅢ類である。両者とも口縁部内面が肥厚するb類で、826は口縁部外面に沈線を施す③類、836は段を有する①類に属する。831～833・837は口縁部を欠くがA類である。839・841はBⅡ類で両者とも口縁部内面が肥厚するb類に属し、839は外面沈線の③類、841は凹状を呈する②類である。840はBⅢ類で口縁部内面が肥厚するb類、外面に沈線を有する③類に属する。842は口縁部を欠くがB類と考えられる。843はCⅠ類で口縁部内面に沈線を有する②類に属する。844はD類で外面に沈線を施している。845・846はEⅠ類で共に口縁部内面に沈線を持つ③類である。849・850は口縁部を欠くがF類で、同一個体と考えられる。847は口縁部内面肥厚するG②類である。848はHⅠ類で内面に文様帯を有する。851はJⅡ①類である。852・853は底部である。これらの浅鉢は黒色磨研土器である。

854～857は弥生中期の壺である。854は口縁部外面に微粒起帯と櫛描文を配する。855は胴部外面に微粒起帯を多条貼付している。856は櫛描直線、同波状文、同廉状文を配す。857は三角突帯と櫛描直線文と波状文が見られる。858・859は土師器高杯脚部である。860は須恵器短頸壺、861は須恵器蓋である。862は移動式カマドの脚部で外面は木理の粗い原体による縦ハケ調整、端部は強いナデ調整を施している。863は瓦器椀、864は白磁碗Ⅳ類底部である。865・866は棒状土錘ある。865は完形品で長さ6.2cm、幅2.5cm、重量31.2gを測り、両端に径5mmの円孔が穿たれている。

⑥ 3-1-6区(Fig.94～96) (867～949)

867～908は深鉢、909～936が浅鉢である。深鉢は867がⅡD類で鐘崎式土器、868・869はⅡB類で片粕式土器である。897はⅢB類で、頸部外面は巻貝条痕が見られる。870はⅣD類、871はⅣC類で無刻目突帯の形状は共にc類である。872・873・875・879・881～885はⅦD類で二枚貝条痕が多く見られる。874・876は口縁部に刻目を有するⅦE類である。877・878・880・886～894はⅧ類である。条痕調整が見られるもの(887・889～892・894)とナデ調整のもの(877・878・880・886・888・893)が同数存在する。前者は二枚貝条痕と巻貝条痕がほぼ同程度見られる。895・896はⅨ類で内外面条痕が施される。898～902は刻目突帯のⅪ類である。901が口唇部を刻まないのに対して他は全て口唇部も刻んでいる。903～908は深鉢底部である。908は平底、他は上げ底である。903～905はアーチ状の上底、906・907は高台状の上底である。908には木の葉様の圧痕が見られる。

浅鉢は915がAⅠ類で口縁部外面に段状の沈線を有する。912～914・917はAⅡ類である。口縁部内面に肥厚しないa類(912・913)と肥厚するb類(914・917)があり、口縁部外面は沈線を施す③類(913・917)と何も施さない④類(912・914)が見られる。909・911はAⅢ類で、909は内面に肥厚しないa類、911は肥厚するb類である。910は端部を上につき上げるAⅣ類である。916・918は口縁部を欠くがA類である。919はBⅠ類で口縁部外面に段状の沈線を有する。920～922・923はBⅡ類

である。すべて内面に肥厚しないa類で920・921は口縁部外面が凹状をなす。923は段状を呈する。925はCⅡ④類である。924・926・927は口縁部を欠くがC類である。928はEⅠ④類、930はEⅡ①類、929はEⅢ①類である。932・933はFⅠ類で、932は口縁部内面肥厚の②類、933は沈線を巡らす③類である。931はF類の胴部と考えられる。934はJⅡ①類である。935・936は浅鉢底部である。937は黒色磨研浅鉢転用の土製円盤で、長軸3.1cmを測る。

938～940は弥生中期土器である。938はいわゆる薄手式土器底部、939は壺胴部片で三角突帯と櫛描直線文・波状文が施されている。940は南四国タイプの壺口縁部である。口縁部外面に2.5cm幅の粘土帯を貼付して列点文を施し、頸部には微粒起帯を貼付する。941は回転台成形の土師器杯で内面に段を有する。942は須恵器低脚杯、943～945は須恵器杯である。いずれも高台がたくしっかりしている。古相を呈する。946・947は同蓋で内面にかえりを有する。947は擬宝珠摘みを持つ。948は同壺底部である。949は同大型甕である。口縁部は外方に肥厚、頸部には波状文を巡らす。胴部外面は平行叩きの上をハケ調整、内面は青海波文が顕著に残る。

⑦ 3-1-7区(Fig.97) (950～965)

縄文後期土器から中世の白磁・青磁まで出土している。952は条痕調整の上に併行沈線が2帯施されている。後期深鉢の胴部である。951は深鉢Ⅲ類ないしⅣ類に属し頸胴部界に2条の沈線を配する。953は深鉢ⅣD類で突帯は三角形のc類に属する。950・954はVD類、955はVID類、前者は内外面巻貝条痕が、955は内外面二枚貝条痕が認められる。956・957は浅鉢口縁部である。956は口縁部外面に段上の沈線を有するAⅠa①類、957は口縁部内面が肥厚し外面が凹状を呈するAⅡb②類である。958は口縁部を欠くが浅鉢C類に属する。959は深鉢底部で高台状の上底である。960～962は弥生中期の壺の口縁部である。960は頸部下端に櫛描波状文、961・962は口縁部外面に粘土帯を貼付している。963は白磁碗V類、964は同安窯青磁碗の大型片である。965は管状土錘である。

⑧ 3-2区(Fig.98) (966～976)

968は撚糸文を施した中期の深鉢胴部細片である。967は口縁部外面に2条の太い沈線を巡らす深鉢ⅢC類である。971は深鉢VD類、966は外面二枚貝条痕を施すVID類である。969は刻目突帯を有し、口唇部にも刻目を施すXIIA②a類である。970は深鉢胴部片で外面は二枚貝条痕が見られる。973は黒色磨研の浅鉢HⅡ類で、屈曲部に刻目が施されている。972は弥生中期中葉の広口壺である。口唇部に刻目、頸部外面には櫛描波状文と廉状文を交互に施している。

5 石器

打製石鏃、伐採斧、加工斧、打製石斧、装身具などが出土している。縄文晩期に属するものも多いが弥生時代のものも見られる。出土状況から帰属時期を明らかにできない例も多い。ここでは、器種別に概観していくことにする。なお、3地点東斜面からの流れ込みの可能性が高い3-1区包含層出土の例も一緒に掲載している。

(1) 打製石鏃(Fig.99～102)

打製石鏃は、基部の形態から3種類に大別、6種類に細別することができる。

A類:平基式

B類:凹基式

1:基部が凹状に湾曲する。

2:基部が逆V字状に開く

3:基部中央が挟れる。

C類:突基式

1:基部全体が凸状

2:突基式有茎式石鏃

石鏃は74点出土している。3-1-3区、3-1-4区、3-1-5区、3-1-6区、3-2区から出土している。

3-1-3区は、17点出土している。A類1点(4)、B1類8点(8・14・16・18・20・21・24・30)、B2類5点(44・55・57・59・61)、B3類3点(66)、他2点(71・73)である。石材は66がチャート、73が赤色頁岩、他はすべてサヌカイトである。サヌカイト製石鏃のほとんどは金山産石材を使っているが、18は石材鑑定の結果、二上山産のサヌカイトであることが判明した。金山産は灰色に発色するのに対して二上山産は黒色を呈し質感も異なっており肉眼でも判別が容易である。これらの中で4・8・21・24・30・61・66・73はテラス1・2出土で一括性が高いが、他はⅡ～Ⅳ群土器とともに出土している。

3-1-4区は28点出土している。A類3点(1・5・6)、B1類9点(7・10・13・15・17・19・25・26・27)、B2類15点(31～37・43・46・48・50・53・56・60・63)、C1類1点(72)である。石材はチャートが6点、サヌカイトが22点である。これらのうち5・7・13・31・32・34・35・37・43・53はテラス2・3、SX1出土で一括性が高い出土状況を示しているが、他はⅡ～Ⅳ群土器とともに出土している。

3-1-5区は29点出土している。A類1点(3)、B1類7点(9・11・12・22・23・28・29)、B2類15点(38～45・47・49・51・54・58・62・64)、B3類3点(65・67・68)、C2類(69)、他(70)である。石材はチャートが3点、他はすべてサヌカイトである。サヌカイトは金山産のものがほとんどであるがB2類の18は後述するように石材鑑定の結果二上山産である。金山産が灰色に発色するのに対して二上山産は黒色を呈している。肉眼でも違いを見分けられる。これらの石鏃も出土状況から一括性の高いものは認められない。3-1-6区からはA類1点(2)、3-2区からはB2類1点(52)が見られる。ともにサヌカイトである。

(2) 石錐

3-1-5区から1点(74)出土している。サヌカイト製である。

(3) 磨製石斧(伐採斧)

細片を含めて23点確認している。形態的な特徴から縄文時代の伐採斧をA類、弥生時代の太形蛤刃石斧に属するものを伐採斧B類とした。前者の細片の中には後者が含まれている可能性もある。

① 伐採斧A類(Fig.103・105)

3-1-3区から7点、3-1-4区から5点、3-1-5区から2点(81・94)の計14点が出土している。極細片も見られ帰属時期を含めて位置付けの難しいものも多い。

3-1-3区出土例(77・80・85・87・92・98・99)

77は身部表面が薄く剥がれたもので、A類の可能性もある。結晶片岩である。80も同様の剥離片で、石材は蛇文岩である。85は非対称の刃部が見られる。粘板岩製である。87は刃部の一部を留める。結晶片岩製である。92はほぼ完形品である。刃部は研磨されているが他の部位は自然面が多く残っている。結晶片岩製で河原石を利用したものである。98は刃部細片で先端部に僅かに研磨が見られる。頁岩製である。99も摺理に沿って剥離欠損した刃部の一部である。結晶片岩製である。

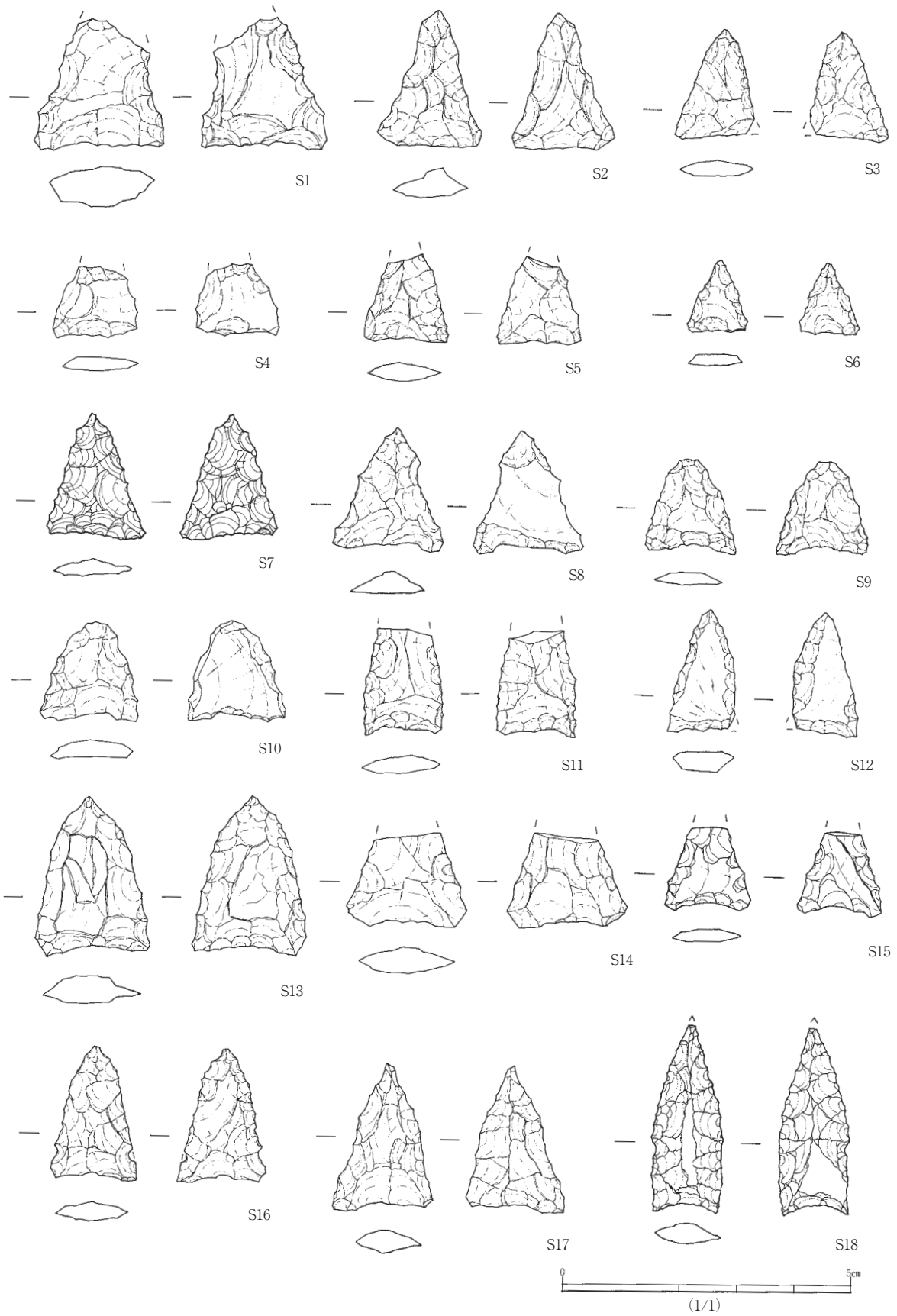


Fig.99 石鏃①(A類:S1 ~ S6, B1類:7 ~ 18)

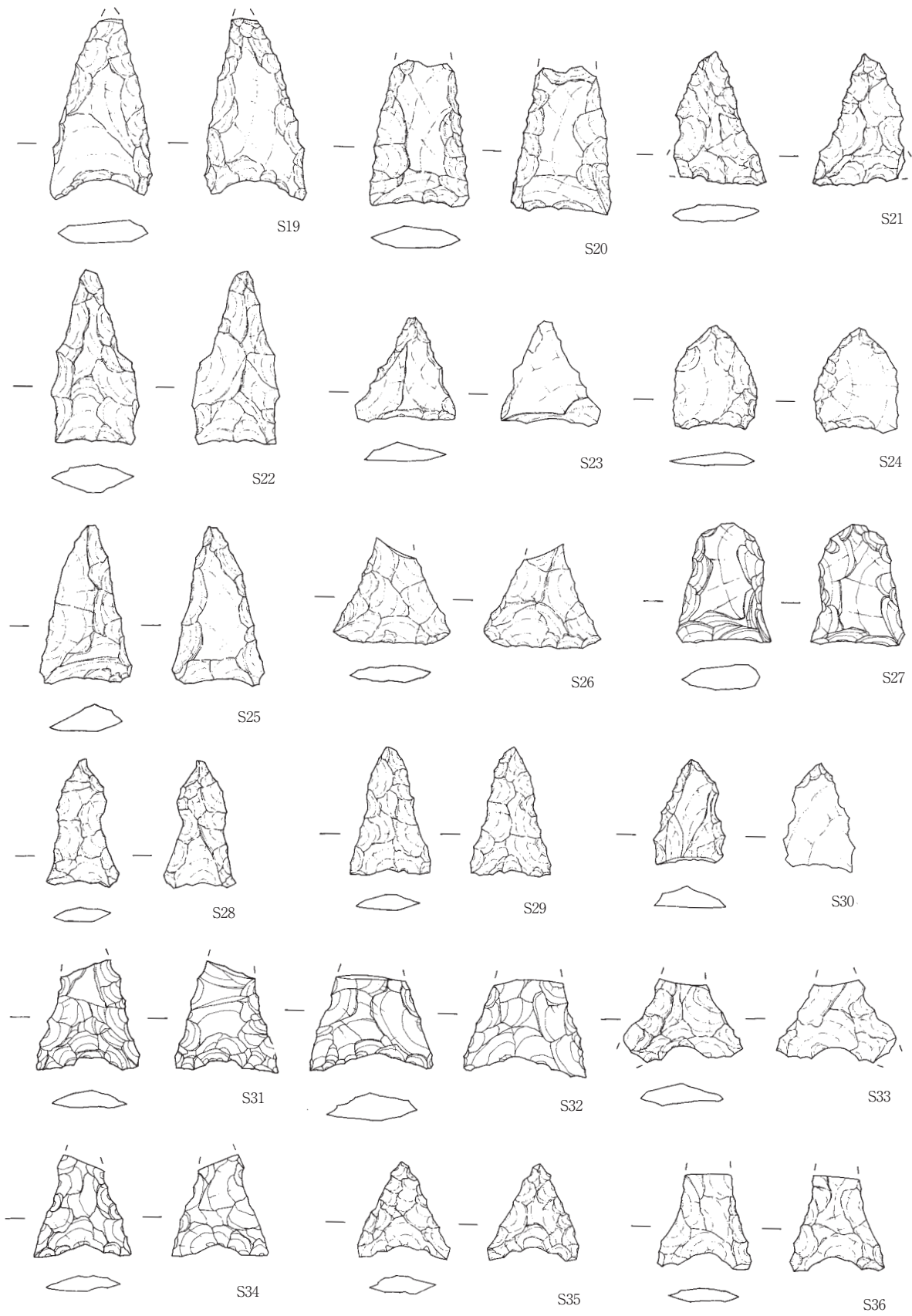


Fig.100 石鏃②(B1類:19 ~ 30, B2類:31 ~ 36) (1/1)

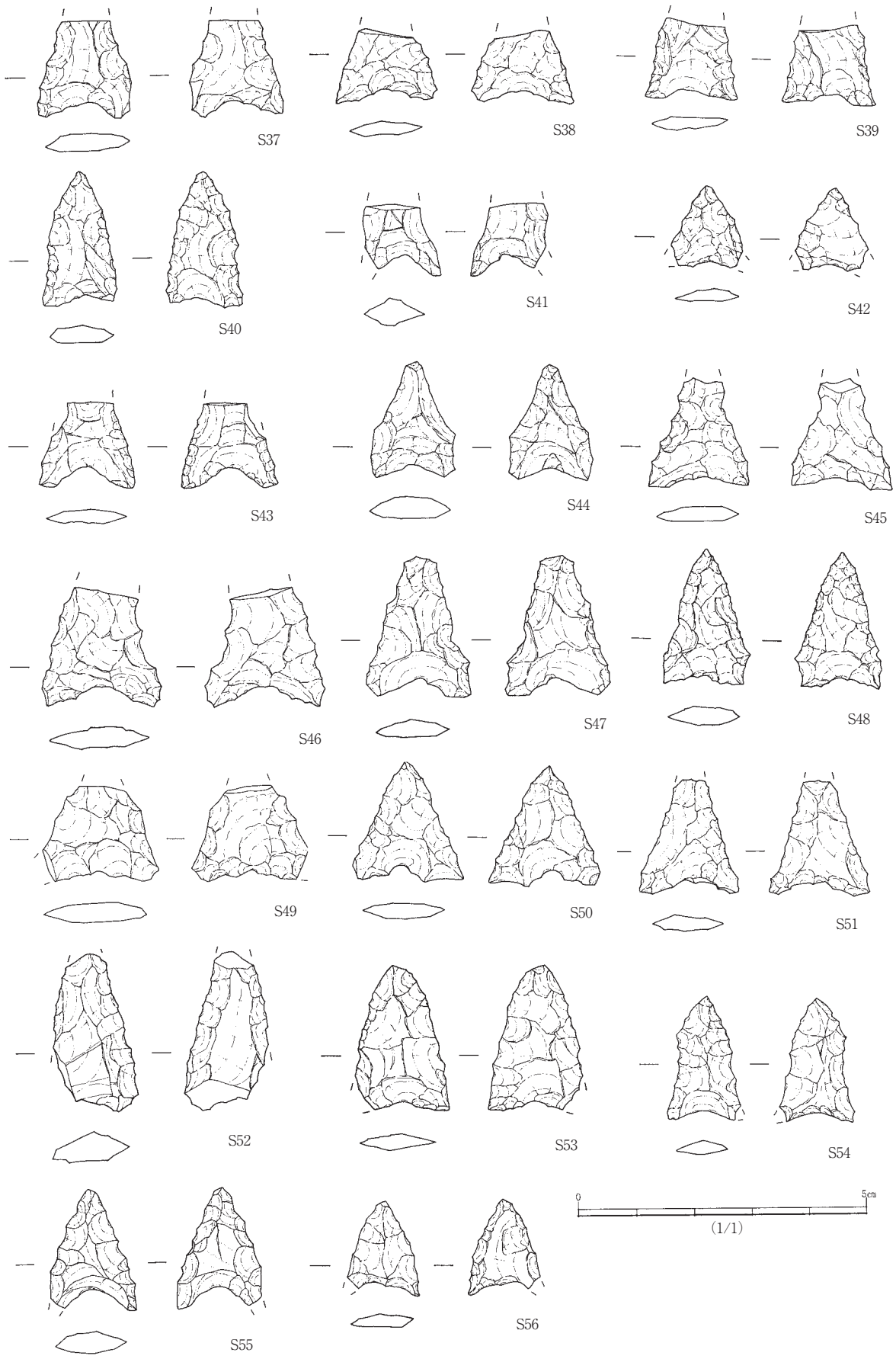


Fig.101 石鏃③(B2類)

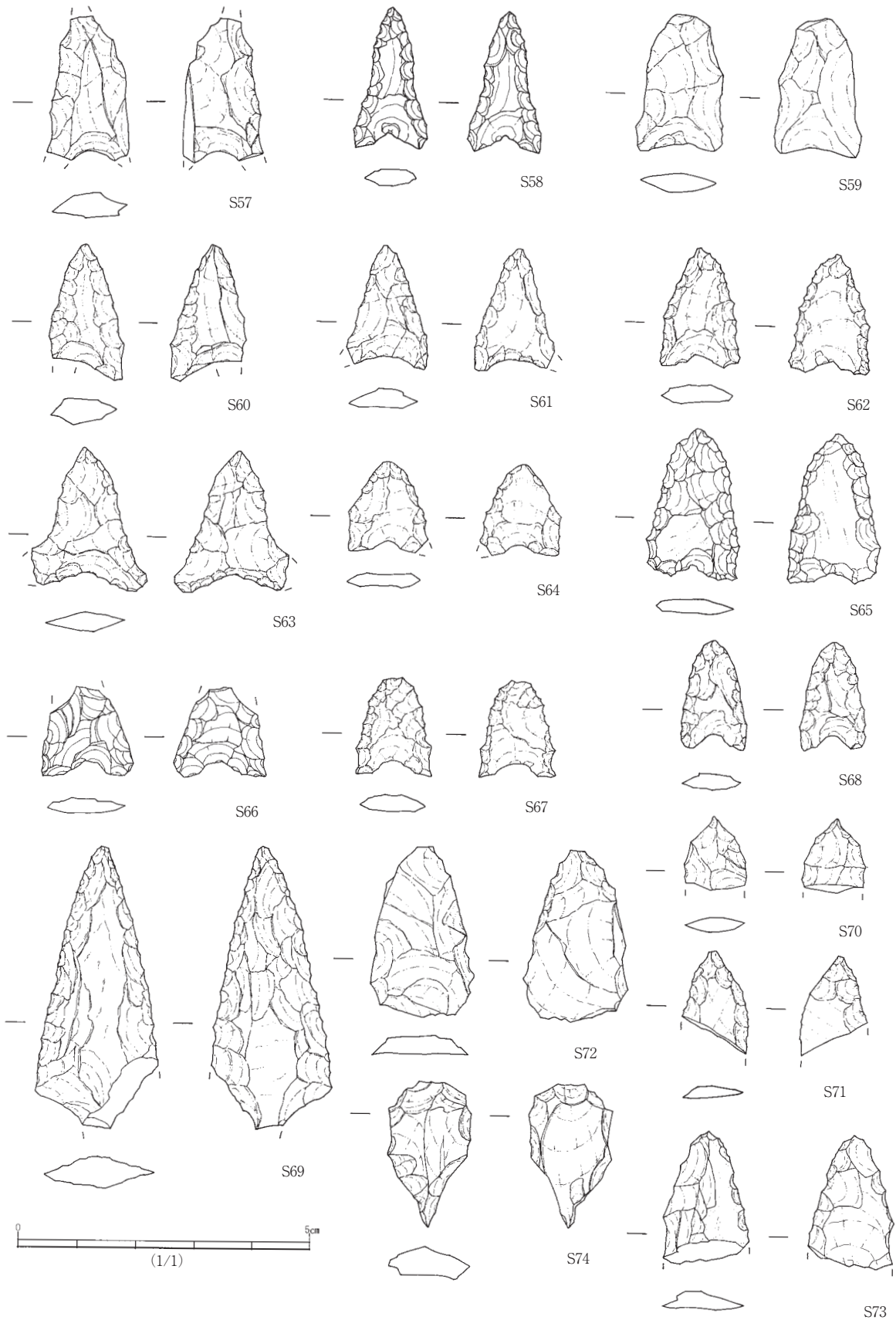


Fig.102 石鏃④・石錐(B2類:57～64, B3類:65～68, C1類:72, C2類:69, 石錐:74)



Fig.103 磨製石斧①

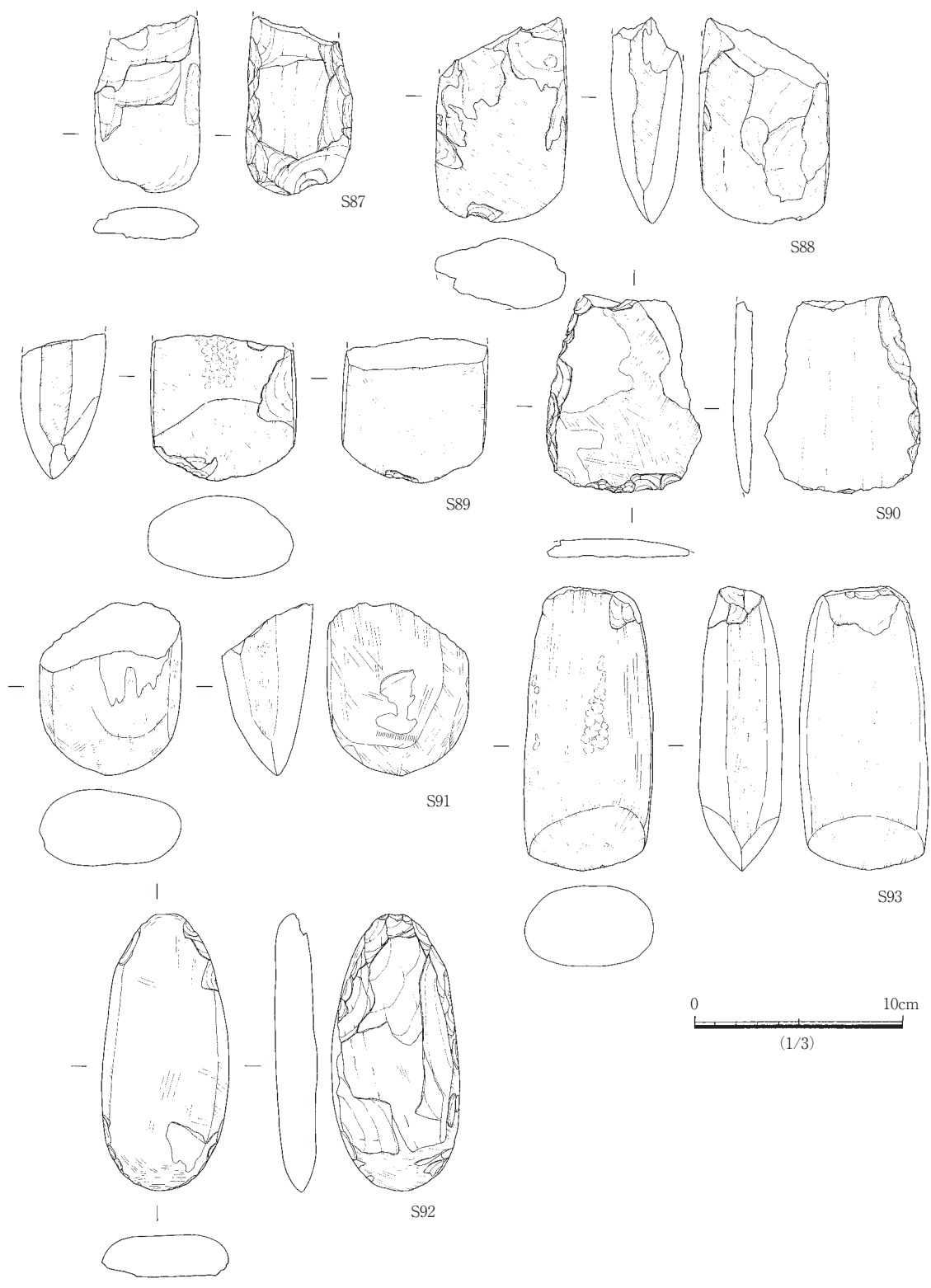


Fig.104 磨製石斧②

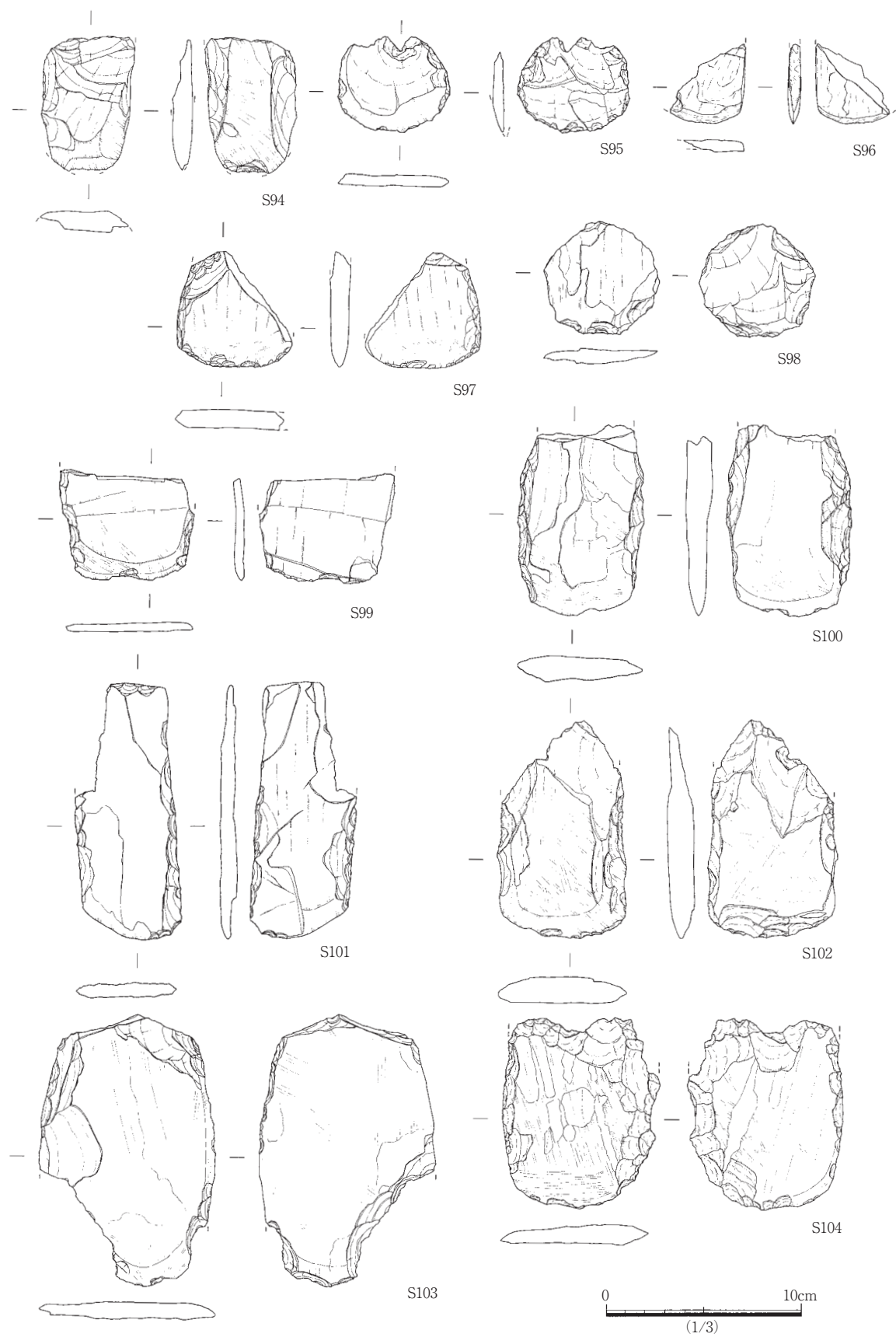


Fig.105 磨製石斧(S94 ~ 96·98·99) ·打製石斧(S97·100 ~ 104)

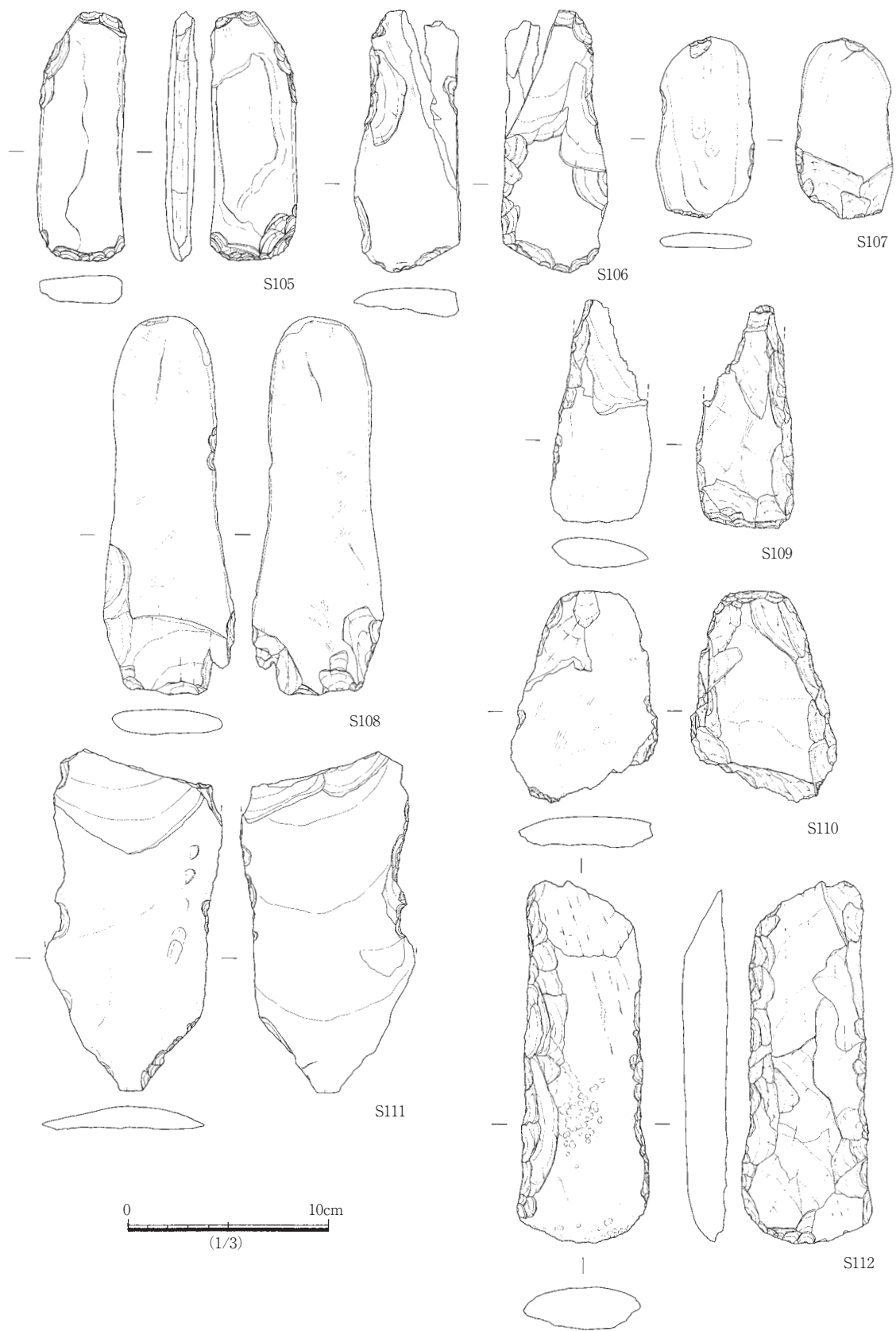


Fig.106 打製石斧②

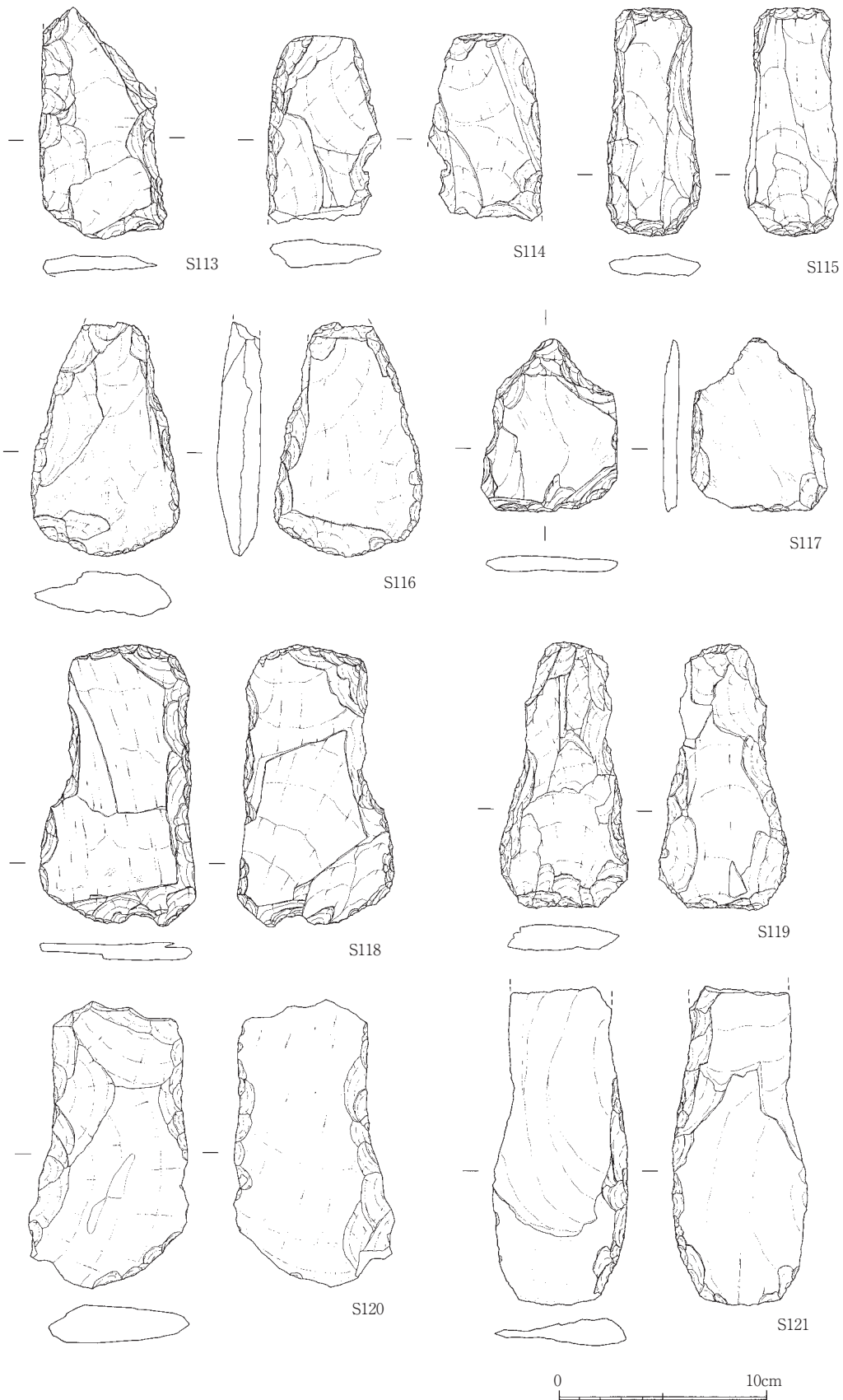


Fig.107 打製石斧③

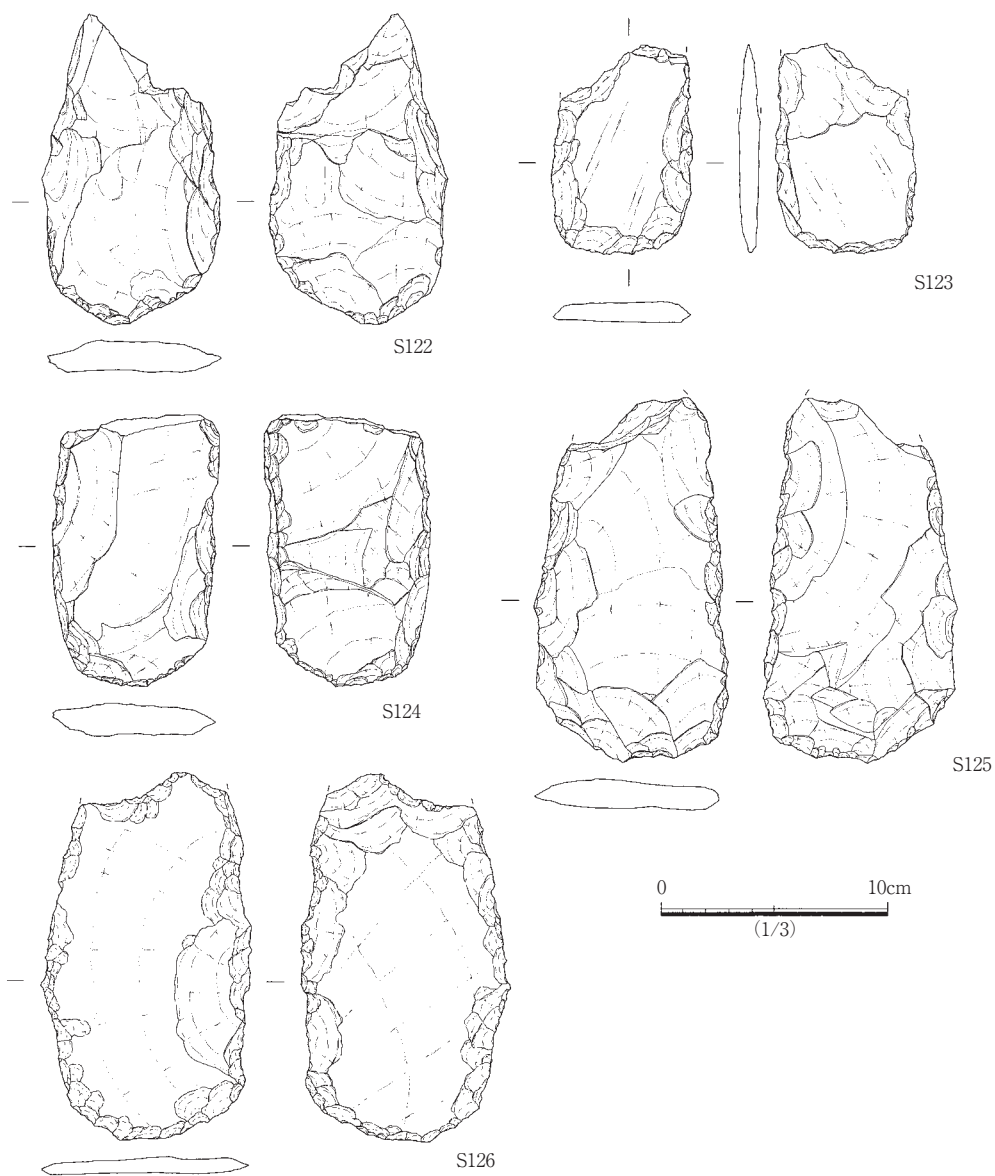


Fig.108 打製石斧④

3-1-4区(78・83・90・95・96)

78は比較的小型の伐採斧である。基部を欠き、刃部以外の各部位には敲打痕が顕著に認められる。結晶片岩製である。83は扁平な両刃石斧の刃部細片である。本例は78とともにテラス2出土で縄文晩期に属するものと考えられる。頁岩製である。90は刃部付近の剝離片である。粘板岩製である。95・96は刃部細片で、前者は頁岩、96は結晶片岩製である。95はテラス2出土で縄文晩期に属する。

3-1-5区(81・94)

81は刃部の細片で頁岩製、94は摂理で剝離している。結晶片岩製である。

3-2区(76・86)

76は扁刃の両刃で結晶片岩製である。86は刃部が著しく非対称であり鋭く研ぎ出されている。蛇文岩製である。両者ともに縦方向に剥がれるように欠損している。

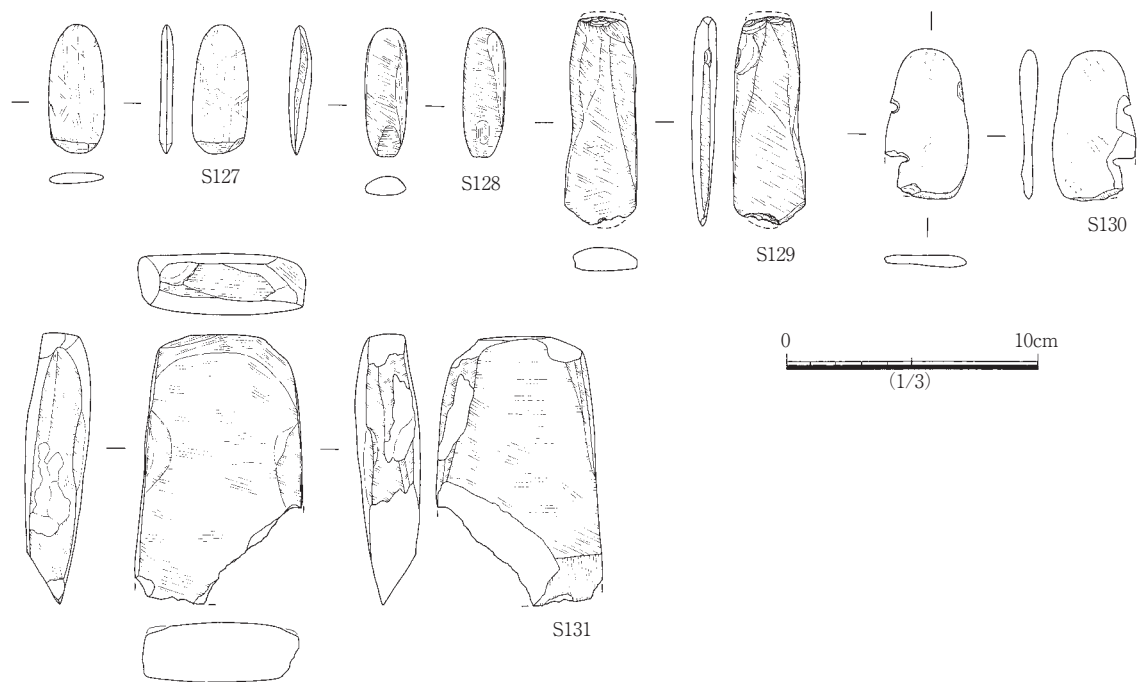


Fig.109 加工斧

② 伐採斧B類 (Fig.103・104)

3-1-3区から5点、3-1-4区から1点、3-1-7区から1点の計7点が出土している。

3-1-3区 (75・79・82・89・93)

75は基部側を大きく欠いている。棒状の河原石を加工したもので刃部は研磨されているが身は左右非対称である。結晶片岩製である。79は断面楕円形で円基式の基部である。緑色片岩である。82は基部を大きく欠損している。刃部は鋭く対称的に研ぎ出されている。両側縁に激しい敲打痕が見られる。蛇文岩製である。89は刃部片で横方向に欠損している。全面研磨されており両側円は面取りがなされている。結晶片岩製である。93は完形品である。平基式で全面丁寧な研磨がなされ刃部も対称に研ぎ出されている。560gを測る。結晶片岩製である。

3-1-4区 (88)

88は両主面に研磨の及んでいないところがある。一側縁は面取りがなされている。刃部は鋭く研ぎ出されているが左右非対称である。頁岩製である。

3-1-7区 (91)

刃部片で横方向に欠損している。刃部は全面丁寧な研磨が施され刃部も対称に研ぎ出されている。結晶片岩製である。

(4) 磨製石斧(加工斧) (Fig.109)

3-1-4区を中心に5点(127～131)出土している。製作手法から二つに分けることができる。打割、敲打、研磨などの一連の製作工程を経てつくられたもの(A類)と自然石の一端に刃部を作り出したもの(B類)である。A類には129と131が該当し共に扁平片刃石斧である。129は凸状の刃部を有し、横断面はカマボコ状を呈する。全面丁寧に研磨されている。結晶片岩製で、36.8gを測る。131は刃部が3分の2ほど欠損しているが、全体の形状は把握できる。平面は刃部が開く台形状を呈し、基部は

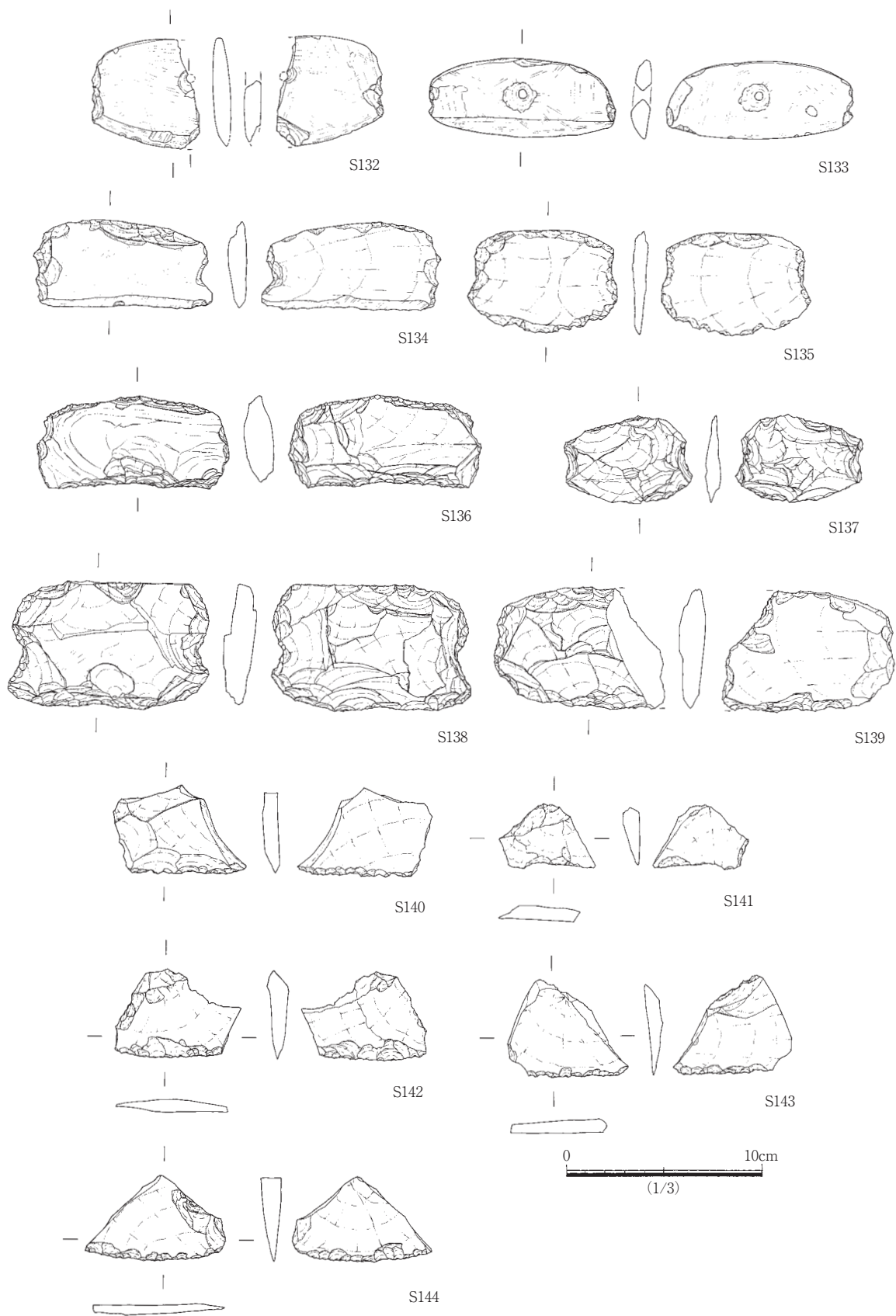


Fig.110 石包丁(S132～S139)とスクレイパー (S140～S144)

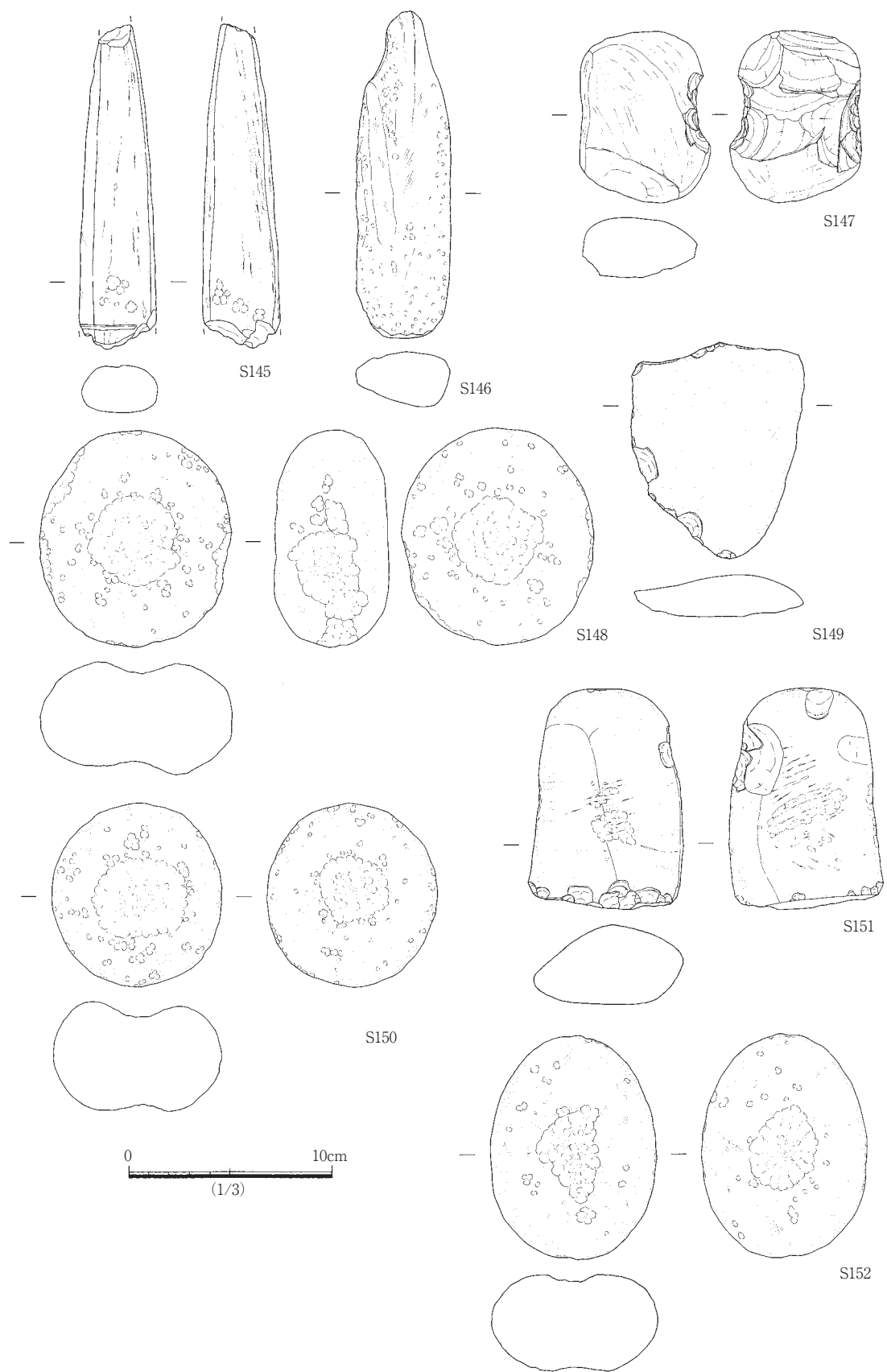


Fig.111 石棒(S145), 石錘(S147), 叩石(S146-S148 ~ S152)

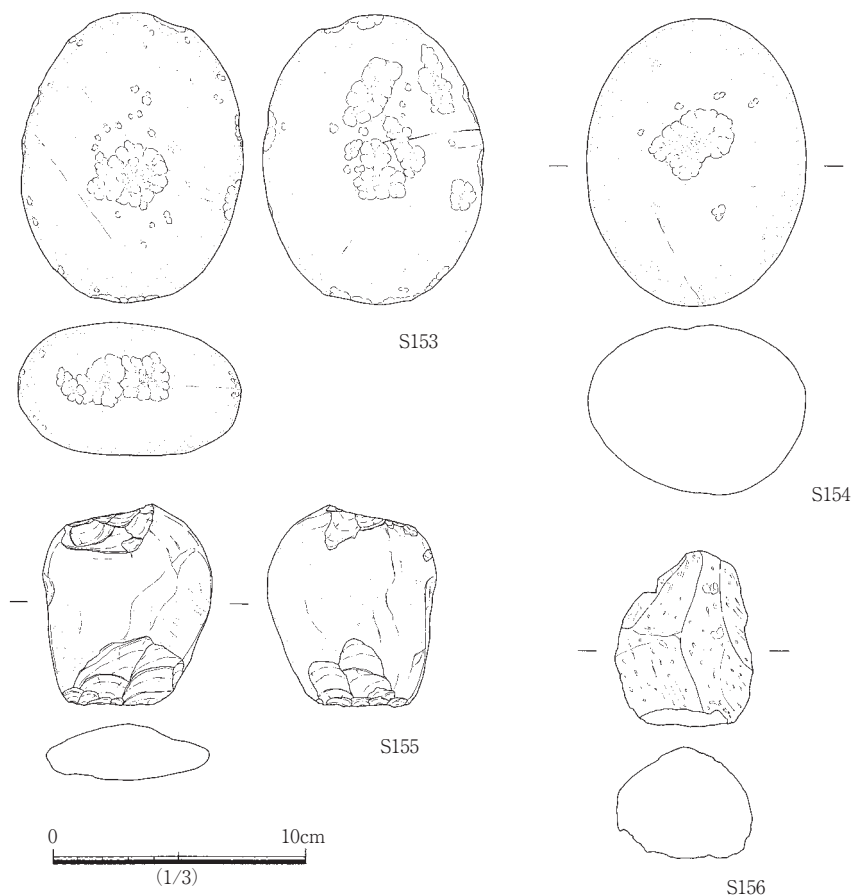


Fig.112 叩石(S153・154), 石錘(S155), 軽石(S156)

やや丸味をもつ。鋭く研ぎ出された刃部、研磨された各面と稜線を有する。図示したように後主面の両側縁側に凹みを観察することができる。石材は近隣に産出例を見ない玄武岩製である。後主面右側には基部から3cm程下に長さ2.7cm、幅1cmの凹みが、左側には基部から2.7cm程下に長さ2.4cm、幅0.8cmの凹みが作り出されている。この左右対称の凹みは着柄に関係する凹みと考えられる。本例は一見弥生時代の偏平片刃石斧と見紛えるが、出土地点は129と共にセクションベルト3 (E-F) のVI層、3-1-4区テラス2出土の一括遺物を包含する層準から出土しており縄文晩期に属するものとしなければならない。

B類は127・128・130が該当する。127は扁平な河原石の一端を加工して両刃を作り出している。刃部以外は自然面が残る。結晶片岩製で長さ5.1cm、9.7gの小型品である。128も同様の作りであるが、127に比して両刃の刃部が長く作り出されている。全長5.1cm、10.2gを測る。頁岩製である。130も扁平な河原石の先端に両刃の刃部を作り出している。刃部以外は自然面を残している。長さ5.9cm、18.1gを測る。緑色岩である。

(5) 打製石斧(Fig.105 ~ 108)

打製石斧は3-1-3区8点(100・102・103・105・107・112・117・122)、3-1-4区14点(84・97・101・104・108 ~ 111・116・118・119・121・123・126)、3-1-5区5点(113 ~ 115・124・125)、3-1-6区1点(120)、

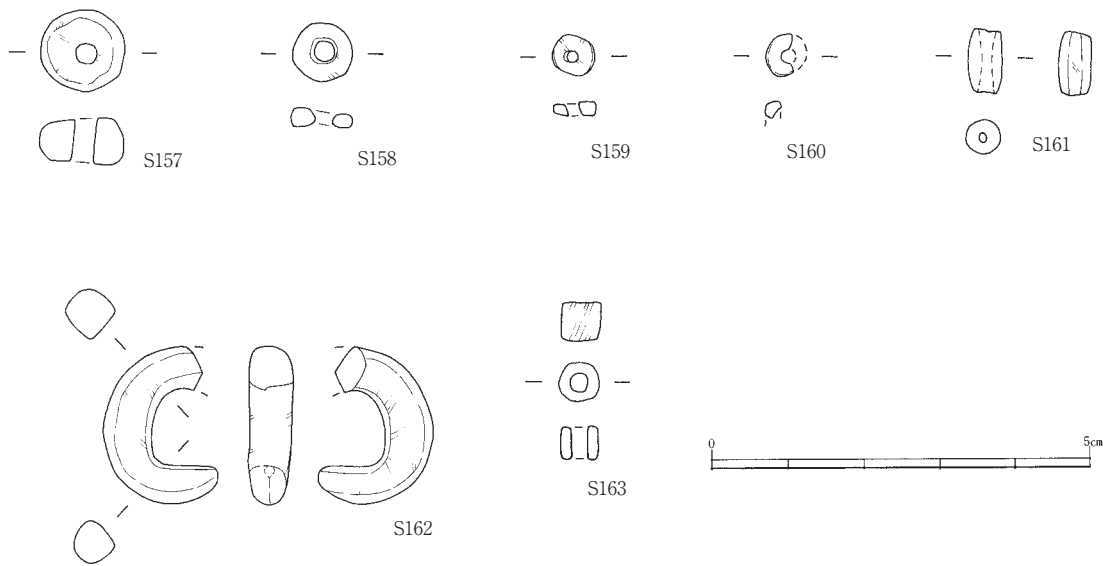


Fig.113 玉類(勾玉:S162, 小玉:S157～S160, 管玉:S161, 白玉:163)

3-2区1点(106)の計29点が出土している。大きさは大小さまざまであるが、薄く扁平であることを特徴とする。片方の主面に自然面を残すものや両主面が剥離面であるものが見られる。側縁に剥離調整を施して成形している例が多い。平面形態からA類とB類に分けることができる。A類は基部から刃部に向かって幅が広がる撥形の平面形態を有するタイプ。B類は長方形を呈するものである。前者が6点、後者は23点である。

3-1-3区の102・107、3-1-4区の111・116・121はテラス出土で原位置を保っているものと考えられるが他の多くは二次的な堆積としなければならない。石材は頁岩が13点と最も多く、次いで結晶片岩9点、緑色片岩3点、チャート2点、粘板岩とサヌカイトが各1点見られる。120はサヌカイト製であるが両面ともに風化が激しく表面は白色化している。石材研究所の石材鑑定の結果、これまで明らかとなっているサヌカイト産地とは異なる産地を想定しなければならないとの結果を得ている。

(6) 石包丁

磨製、打製、石包丁状、未成品など8点(132～139)が出土している。132は3-2区出土の磨製石包丁である。3分の2近くを欠損している。外湾刃片刃で、全面丁寧な研磨が施されている。両面からドリルで穿孔している。頁岩製で激しく被熱赤変している。133は3-1-7区出土の磨製石包丁で完形品である。僅かに外湾刃をなし全面丁寧に研磨されている。中央部に一孔を敲打穿孔している。砂岩である。134は3-1-5区出土である。下半に膨らみを持った自然面と垂直な面をなす剥離面からなる。自然面には刃部作り出しと考えられる剥離痕が見られ、外湾刃をなす。片方の側縁に紐掛け袢が作り出されている。未成品である。結晶片岩製である。135は3-1-6区出土である。両主面剥離面で両側縁に敲打による袢が見られる。天地は定かでない。未製品と考えられる。砂岩製である。136は3-1-3区SX2の床面出土の石包丁状石器である。両主面が剥離面である。内湾気味の刃部には両面から剥離調整が見られる。137も3-1-3区出土の未製品である。両主面が剥離面で下半が膨らみ外湾刃を呈する。両側縁に袢がある。粘板岩製である。138は3-1-7区出土の未製品

である。両主面ともに剝離面で下半の刃部側が厚みを持っている。両側縁には細かな敲打による抉りが見られる。頁岩製である。139は3-2区出土の未製品で半分近くが欠損している。打製石斧の可能性もある。凝灰岩質緑色片岩製である。これらの中で136は出土状況から縄文時代晩期に属するものと考えられるが、それ以外のものはすべて弥生時代に属する。

(7) スクレイパー

5点(140～144)を図示し得た。全てサヌカイト製で長側縁に両側から剝離をおこなって刃部を作り出している。141が3-1-4区VI層の縄文晩期層準から出土しているが、他は二次堆積によるものである。

(8) 石棒

145は残存長15.9cmを測る。結晶片岩製で断面楕円形をなし全面研磨されている。一方の先端部は細くなっている。他方の欠損部近くに1.5mm幅の沈線が認められる。

(9) 叩石

146は棒状を呈する。両主面と一方の側縁に痘痕状の敲打痕が多く見られる。緑色岩である。148・150・152～154は楕円形の河原石をそのまま利用している。148・150・152は両主面に敲打による大きな凹みがあり側縁にも敲打痕が見られる。ともに細粒花崗岩である。153・154は両主面に僅かな敲打痕が見られ、153の側縁にも敲打痕が見られる。ともに砂岩である。151は長い叩石で欠損している。側縁や主面に敲打痕が見られる。砂岩である。

(10) 玉類

S157～S160は小玉である。S157～S160は3-1-5区、S163は3-1-3区SX1出土である。後述するように前者は結晶片岩様緑色岩(クロム雲母)である。後者は両端が欠けている可能性があり管玉になるかも知れない。S161は管玉である。長さ0.85cm、最大径を中央部に有し0.45cmを測る。平面形態はエンタシス状を呈する。0.1～0.2cmの小孔を両方から穿っている。石材は結晶片岩様緑色岩(クロム雲母)である。162は勾玉である。穿孔部が欠損しているが全体の形状を留めている。コ字状を呈し断面は方形状である。全長2.1cm、幅1.5cm、1.9gを測る。結晶片岩様緑色岩(クロム雲母)である。S163は3-1-3区テラス1の出土であるが緑泥石片岩製の白玉の可能性はある。

(11) その他

147・155は打欠石錘である。147は長側縁の両側に、155は短側縁の両側に敲打によって抉りが入れている。147はチャート、155は頁岩である。149は河原石に敲打し剝離したものである。156は軽石で特に使用痕は認められない。

表11 第3地点拡張区土器観察表①

遺物 番号	時期 器種	出土地点 層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	特徴	分類
1	縄文後期 深鉢	1-1区 IV層		(6.4)		チャートの粗粒砂多し	僅かに波状口縁、外面に窓枠状を含む沈線、内外ナデ調整。	II A
2	〃	〃		(5.1)		石英粗粒砂多し	内外ナデ調整、鐘崎式土器。	II A
3	〃	〃		(2.9)		石英、角閃石、雲母を含む	口唇部、口縁部、上胴部に沈線、内外面ナデ調整。	II D
4	〃	1-1区 II層		(3.3)		石英粒多し	口唇部口縁部にRLの縄文、頸部内外面ナデ調整。片粕式土器。	II B
5	〃	〃		(3.4)		精土	口縁部外面、LRの縄文地にワラビ手状の枕線。片粕式土器。	II A
6	〃	〃		(6.7)		チャート小礫多し	内外面横方向の条痕。	VI D①a
7	〃	〃		(7.6)		長石、石英粒を多く含む	口唇部 LR の縄文、頸部無文、内外面ナデ調整。	II B
8	〃	〃		(5.7)		小礫、粗粒砂を多く含む	外面横方向ナデ調整、内面ナデ調整。	VII D②b
9	〃	〃		(2.0)	9.2	精土	内底に貝殻状痕あり。	
10	〃	1-1区 IV層		(4.4)		精土	上胴部が「く」字条に屈曲、外面上半にLR縄文。	
11	縄文中期 深鉢	1-1区 採集		(4.8)		石英その他の細粗粒砂を含む	燃糸文に半截竹管による沈線を施文。里木2式土器。	I
12	〃	1-2区 II層		(3.3)		チャート粗粒を含む	口唇部、肥厚した口縁部にLRの縄文を施す。	I
13	〃	1-2区 IV層		(4.6)		チャートの細粗砂多く含む	口縁部を内側に入り曲げる。外面に燃糸文を施す。	I
14	縄文後期 深鉢	1-2区 II層				チャート他の細粗粒	口縁部内湾、口縁外面LR縄文地14条沈線を施す。	II A
15	縄文晩期 深鉢	1-2区 下層		(2.4)		粗粒砂を含む	無刻突帯文。内面2条の沈線 内外ナデ調整 外面煤ける。	IV C①a
16	〃	〃		(7.1)		精土	無刻目突帯文。僅かに波状口縁を有し、内面は抉るように1条の沈線を施す。外面ナデ調整。	IV B②a
17	〃	〃		(6.5)		精土	ハケ状の原体で横方向にナデ調整、外面屈曲部に2条の細い沈線。外面煤ける。	V D②d
18	〃	1-2区 II層		(9.5)		チャート他の粗粒砂多し	内外面ナデ調整。	VI D②d
19	〃	1-2区		(3.5)		チャート、頁岩粗粒多し	内外巻貝条痕+ナデ調整、外面煤ける。	V D①d
20	〃	〃		(9.4)		チャート、赤色風化礫の粗粒	内外面巻貝+ナデ調整。	VIII②d
21	〃	1-2区 IV層		(2.9)	10.4	精土	内面煤ける。平底。	
22	縄文晩期 浅鉢	1-2区		(2.5)		精土、角閃石を含む	内外面丁寧なヘラ磨き、口縁部外面段上の太い沈線。	A II a①
23	〃	1-2区 II～IV層		(2.1)		砂粒を少量含む	口縁部内面に沈線、内外面ナデ調整。	F II④
24	〃	1-2区 II層		(3.1)		精土	口縁部内面凹線状の太い沈線、内外面ヘラ磨き。	C II③
25	〃	〃		(3.3)		チャート他の粗砂を多く含む	口縁部内面に段、内面ヘラ磨き、外面は器表が荒れる。	E III①
26	〃	〃		(3.1)		砂粒を少量含む	口縁部内面沈線、内外ヘラ磨き。	F I④
27	〃	1-2区 下層	12.4	(3.8)		精土	算盤玉状の胴部、口縁部内面削りによる弱い段、外面ヘラ磨き。胴部最大径16.2cm。	F III④
28	〃	1-2区 II層	22.2	(3.0)		チャート他の粗砂を多く含む	口縁部内面1～2条の沈線、内外面やや粗雑なヘラ磨き。	C II③
29	〃	〃	29.8	(3.3)		石英粒を多く含む	口縁部内面に段、内外面ヘラ磨き、外面煤ける。	E II①
30	中世土師器 杯	1-2区 I層	14.6	(4.0)	7.6	精土	内外横ナデ調整、糸切り。	
31	縄文晩期 深鉢	1-3区 テラス1		(3.0)		〃	無刻目突帯文。外面巻貝条痕+横ナデ調整、内面ナデ調整。	IV C①c
32	〃	〃		(2.8)		〃	無刻目突帯文。内外面ナデ調整。粘土紐内傾接合痕を認める。	IV B①c
33	〃	〃		(3.1)		精土 角閃石	頸外面タテ方向擦痕 内面横ナデ調整。	IV C②c
34	〃	〃		(3.4)		精土	口縁外面沈線文帯を意識した巻貝になる施文。頸部内外面横ナデ調整。	III A①
35	〃	〃		(4.9)		チャート、結晶片岩	口縁内面に段、頸部内外「ハケ」状原体による横ナデ調整。	V B①d
36	〃	〃		(4.3)		粗粒砂を含む	外面二枚貝条痕、内面ナデ調整。	VII D①b

表12 第3地点拡張区土器観察表②

遺物番号	時期器種	出土地点層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	特徴	分類
37	縄文晩期深鉢	1-3区テラス		(3.0)		〃	内外面ナデ調整。	VI D②d
38	〃	〃		(3.4)		粗粒砂を多く含む	口縁外面2条の細い沈線 器表が荒れている。	III A②
39	〃	〃	34.0	(5.8)		チャート他の粗粒を多く含む	外面条痕+ナデ(わずかに条痕終る)。内面横ナデ調整。	V D②d
40	〃	〃		(4.3)		〃	内外面ナデ調整。	VI D①d
41	〃	〃		(3.4)		粗粒砂を多く含む	外面二枚貝条痕、内面ナデ調整。	VII D①b
42	〃	1-3区テラス1-SX1	32.6	(4.3)		チャート他の粗粒を多く含む	外面は二枚貝条痕具、内面は巻貝条痕の可能性あり。	VII D①d
43	〃	1-3区テラス1		(3.7)		粗粒砂を含む	内外面ナデ調整。2cm幅の粘土紐単位を認める。	IX①d
44	〃	〃		(4.9)		チャート他の粗粒砂多く含む	内面ナデ調整、外面横方向の巻貝条痕、外面煤ける。	IX②c
45	〃	〃	31.9	(6.8)		チャートの粗粒を多く含む	内面横ナデ調整、外面横位条痕。	VII D②b
46	〃	〃		(6.5)		チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	外面は横方向巻貝条痕+板状工具によるナデ調整、内面も同様の工具によるナデ調整。	〃
47	〃	〃		(3.4)		チャート他の粗粒砂を含む	内外面ナデ調整。	VII②d
48	〃	〃		(3.8)		粗粒砂を含む	〃	IX②d
49	〃	1-3区テラス-SX1		(4.2)		チャート他の粗粒砂多く含む	〃	VII②d
50	〃	1-3区テラス1		(4.8)		〃	外面横方向ヘラ磨き、内面横ナデ調整。	VII①d
51	〃	〃	33.5	(26.5)		チャート、結晶片岩、風化礫の小礫、粗粒砂多く含む	口頸部外面は横方向巻貝条痕+ナデ調整、胴部外面は左上がりの巻貝条痕+ナデ調整。	VI D②d
52	〃	〃	15.0	(9.6)		精土	外面ナデ調整、内面は「ハケ状」原体による横方向ナデ調整。	IX②d
53	〃	〃		(6.5)	8.4	小礫、粗粒砂を含む	外面ナデ調整、内面は下→上の削り+ナデ調整。平底。	
54	〃	〃		(4.0)	8.8	精土	外面繊維状の原体でナデ調整。無刻目突帯の付くタイプ。上底。	
55	〃	〃		(2.5)	5.8	粗粒砂を多く含む	内外面ナデ調整。上底。	
56	〃	〃		(2.5)	4.0	チャートの粗粒を多く含む	上底。	
57	〃	〃		(5.4)	7.6	チャートの粗砂、小礫を多く含む	僅かに上底。	
58	〃	〃		(4.3)	8.2	小礫、粗粒砂を多く含む	内外面ナデ調整。上底。外面煤ける。	
59	〃	〃		(6.5)	6.3	チャート、他の粗砂、小礫を多く含む	内外面ナデ調整。上底。	
60	〃	〃		(3.3)	8.0	チャート、風化礫の粗粒砂を多く含む	内外面ナデ調整。上底。	
61	縄文晩期浅鉢	〃		(3.9)		精土、角閃石を含む	口縁部内面肥厚し内側に段、外面沈線。内外面ヘラ磨き。	F I①
62	〃	〃		(2.9)		角閃石、石英粒多い	口縁部外面は凹線状の太い沈線。丁寧なヘラ磨き。	A II a①
63	〃	〃		1.3		精土	黒色磨研。口縁部外面は削り出しによる鋭い沈線。	A I a①
64	〃	〃		(3.3)		〃	口縁部内外面沈線、内外面ヘラ磨き(内面下地に状痕を認める。)	G③
65	〃	〃		(2.3)		〃	口縁部内面は段を意識した沈線。内外面ヘラ磨き。	F III④
66	〃	〃		(1.5)		〃	口縁部内面沈線、内外面ヘラ磨き。	F II③
67	〃	〃		(2.2)		チャート他の粗粒砂	内外面ヘラ磨き。	C
68	〃	〃		(3.5)		精土、角閃石を含む	内外面細い丁寧なヘラ磨き。	A
69	〃	〃		(6.3)		精土	口縁部内面にしっかりした段部、内面は右下がり、外面は水平方向を基調とする丁寧なヘラ磨き。	E I
70	〃	〃	33.3	(5.4)		〃	口縁部外面に太い沈線、内面は段を有す。内外面ヘラ磨き。	A II b③
71	縄文晩期深鉢	1-3区テラス2		(6.0)		粗粒砂を多く含む	内外面横方向の巻貝条痕、外面は大部分ナデ消されている。	VII①d
72	〃	〃		(4.2)		チャート他の粗粒砂	内外面二枚貝条痕。	VII D①a

表13 第3地点拡張区土器観察表③

遺物 番号	時期 器種	出土地点 層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	特徴	分類
73	縄文晩期 深鉢	1-3区 テラス2		(3.8)		精土	口縁部下端を下方に摘み出し突帯状を呈する。内外面横ナデ調整。	VD②d
74	〃	〃		(3.6)		小礫粗粒砂を含む	内外横方向ナデ調整、頸部外面巻貝条痕。	III B①
75	〃	〃	28.0	(9.6)		チャートの粗粒砂を少量含む	頸胴部界に幅広い点線が巡る。口頸部外面四個ナデ調整、胴部外巻貝条痕、外面煤ける。	VD①d
76	〃	〃		(3.5)		チャート他の粗粒砂	外面は条痕+ナデ調整、内面はナデ調整。	VIII①d
77	〃	〃		(3.5)		精土	内外面横方向ナデ調整。	〃
78	〃	〃		(4.0)		チャートの粗粒砂を多く含む	外面は条痕+ナデ調整、内面はナデ調整。	〃
79	〃	〃	40.6	(18.9)		粗粒砂が多い	外面は横方向巻貝条痕+ナデ調整、内面はナデ調整。	VIII②d
80	縄文晩期 浅鉢	〃	24.6	(3.7)		精土	内外面ヘラ磨き。粘土紐接合部で剥離している。	FI⑤
81	〃	〃		(1.8)		〃	口縁部外面段上に削り出す。内外面ヘラ磨き。	AII b①
82	縄文晩期 深鉢	1-3区 SX1		(5.4)		チャート他の粗粒多し	内外面ナデ調整。	IX①d
83	〃	1-3区 SX1		(3.4)		粗粒砂が多い	内外面ナデ調整。内外面煤ける。	IX②d
84	〃	1-3区 SX2		(7.3)		チャート他の粗粒多し	口縁内外面横方向ナデ調整、頸部外面横方向巻貝条痕+ナデ調整、頸部内面ナデ調整。	III B①
85	〃	1-3区 SX1		(5.3)		〃	内外巻貝条痕+横ナデ調整。	VIII①d
86	〃	1-3区 SX1		(3.3)		〃	内外面ナデ調整。	VI D①d
87	〃	1-3区 SX2		(9.1)		チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	外面は右上がり状痕+ナデ調整、内面は横方向ナデ調整。	VIII②b
88	〃	1-3区 SX1	19.4	(7.5)		チャート、風化礫の小礫、粗粒砂を多く含む	内外面横方向の巻貝条痕、外面煤ける。	VIII①a
89	〃	1-3区 SX1		(4.8)		チャート他の粗粒砂を多く含む	内外面繊維状の細い原体で横ナデ調整。	IX①b
90	〃	1-3区 SX2	1.2		11.1	精土	底部円盤である。体部が剥離欠損。内底面外縁に1.5cm幅で体部との接合痕跡が明瞭に残る。	
91	縄文晩期 鉢	1-3区 SX1	14.8	(4.4)		チャート他の粗粒砂を多く含む	内外面ナデ調整。	
92	縄文晩期 浅鉢	〃		(3.3)		精土	口縁部内面に段、外面沈線。内外面ヘラ磨き。	CI①
93	縄文晩期 深鉢	〃		(3.0)		結晶片岩を多く含む	口縁外面3-4条のヘラ描沈線、胴外面は巻貝条痕+ナデ調整。	III C①
94	縄文晩期 浅鉢	〃		(2.1)		精土	口縁部内面段、外面は沈線。内外面ヘラ磨き。胴部との接合部で剥離欠損。	FI①
95	縄文晩期 深鉢	1-3区 バンク		(7.5)		チャート他の粗粒砂を多く含む	外面は巻貝条痕+ナデ調整、内面は横方向ナデ調整。外面煤ける。	VIII②b
96	〃	1-3区バンク ク2 XIV層		(4.6)		粗粒砂を多く含む	内外面ナデ調整。内外面煤ける。	VIII②d
97	〃	〃		(5.2)		〃	内外面横ナデ調整。	VIII①d
98	〃	1-3区		(3.0)		チャート、頁岩などの粗粒砂を多く含む	〃	VB①d
99	〃	1-3区 VIII層		(6.5)		粗粒砂を多く含む。	内外面横ナデ調整、下地に巻貝条痕ありか?	VI D①d
100	〃	1-3区 バンク2		(8.7)		チャート他の粗粒砂を多く含む	外面横方向の巻貝条痕、内面はナデ調整。外面煤ける。	VII D②d
101	〃	1-3区		(3.5)		粗粒砂を多く含む	内外面横ナデ調整。	VI D①d
102	〃	〃		(10.0)		チャート他の粗粒砂含む	外面巻貝条痕+ナデ調整、内面ナデ調整。	VI D②d
103	〃	1-3区 バンク2	12.6	(5.2)		粗粒砂を多く含む	外面ナデ調整、内面は繊維束状の原体による横方向のナデ調整。	IX②d
104	〃	〃	22.4	(4.5)		チャート他の粗粒砂含む	内外面横ナデ調整。	〃
105	〃	1-3区		(17.1)		〃	内外面ナデ調整、外面煤ける。	
106	〃	〃	20.6	(6.6)		石英、他の粗粒を含む	口縁部内面に段がある。外面巻貝条痕、内面ナデ調整。	X②b
107	〃	〃	17.6	(8.3)		チャート他の粗粒砂含む	〃	VIII②d
108	〃	1-3区 バンク2		(2.9)	10.8	精土	上底。IV類の底部と思われる。下胴部外面煤け、底部外面は煤けが見られない。内底には炭化物が付着。	

表14 第3地点拡張区土器観察表④

遺物番号	時期器種	出土地点層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	特徴	分類
109	縄文後期浅鉢	1-3区バンク2		(2.0)		精土、角閃石を含む	口縁部内面にヘラ描き沈線を下方から括るように施文。内外面ヘラ磨き。	F II ④
110	〃	〃		(2.1)		精土	肩が強く張るタイプで粘土紐接合部で剥離欠損。外面ヘラ磨き。	F III ⑤
111	〃	〃		(2.4)		精土	口縁部に鱗状突起がつく。内外面ヘラ磨き。	G ④
112	〃	〃		(3.9)		精土	弱い波状口縁部を有し頂部から1条の垂下沈線、頸部外面口縁部内面にも1条の沈線。内外面ヘラ磨き。外面煤ける。	C I ③
113	〃	1-3区		(3.0)		精土	口縁部内面に段、内外面ヘラ磨き。	E II ③
114	〃	1-3区バンク2		(2.7)		チャート他の粗粒砂含む	内外面ナデ調整。	C II ④
115	〃	〃		(3.0)		精土	口縁部外面は段上の沈線。内外面丁寧なヘラ磨き。	A II a ①
116	縄文後期深鉢	1-3区		(3.8)		チャート、石英、風化礫の粗粒砂	口縁外面LR縄文、内外条痕+横ナデ調整。	II B
117	〃	〃		(5.1)		精土	頸部に把手。内外面丁寧なヘラ磨き。	
118	〃	〃		(4.0)		精土	幅広の口縁部上面にRの刻目、内外面横ナデ調整。	II C
119	〃	〃		(4.6)		石英、チャート、粗粒	口縁外面2条の区画沈線内にLRの縄文を充填、その中にカギ状の沈線を施す。内外ナデ調整。	II A
120	縄文晩期深鉢	〃		(8.6)		精土	口縁は内傾して立ち上がり外面2本の太い沈線、内外面ナデ調整。	III A ①
121	〃	1-3区II層		(4.5)		〃	口縁外面3条の沈線、内面1条の沈線を施す。外面繊維状でナデ調整。	〃
122	〃	1-3区バンク2 X層		(5.0)		〃	口縁部内外に粘土紐接合による段。口縁部外面強いナデ調整。	IV A ①a
123	〃	1-3区		(3.9)		〃	内外巻貝条痕、口縁外面に2条の沈線。	III C ①
124	〃	1-3区バンク2 X層		(4.7)		粗粒砂を含む	口縁外面2条の沈線、内外面は巻貝条痕+ナデ調整、外面煤ける。	III A ②
125	〃	1-3区	29.5	(14.7)		精土	波状口縁を有す。口縁部外面と上胴部に2条の沈線を施す。頸部外面は繊維束状の原体でナデ調整、内面は二枚貝条痕外状痕+ナデ調整。	III A ①
126	〃	1-3区バンク2 X層	33.0	(13.1)		〃	口縁端部が欠損しているが無刻突帯を有するものと考えられる。胴部屈曲部外面2条の沈線、頸部外面は巻貝条痕+ナデ調整。	III A
127	〃	〃	36.7	(12.1)		〃	波頂部を弧状に挟りその下に竹管状体による刺突文、口縁部外面胴部屈曲部に2条の沈線。頸部外面は巻貝横位条痕+ナデ調整。胴部外面は横位巻貝条痕。	III A ①
128	〃	〃	37.4	(13.7)		精土、石英角閃石を含む	口縁部無刻突帯、内面段上の沈線。上胴部に幅広い(5~6mm)の沈線。内面巻貝条痕、外面ナデ調整。	IV B ②c
129	〃	1-3区バンク2 II層		(4.4)		粗粒砂角閃石を含む	無刻目突帯、内面に沈線。内外面ナデ調整。	IV C ①c
130	〃	1-3区		(2.0)		精土	無刻目突帯、口縁内面沈線。頸部外面ハケ状の原体による右下がりの強いナデ調整。	IV C ②a
131	〃	〃		(3.7)		石英他の砂粒を含む	無刻目突帯、口縁内面折るような沈線。内面丁寧なナデ調整、外面右下がりの荒いナデ調整。	IV B ②a
132	〃	〃		(2.6)		石英粒を含む	無刻目突帯、内面折るような沈線を施す。内面及び口縁部内面ナデ調整、頸部外面右下がりの荒いナデ調整。	IV B ①c
133	〃	〃		(4.7)		精土	無刻目突帯、内面枕線。内外面ナデ調整。	IV C ①c
134	〃	〃		(4.4)		〃	無刻目突帯、内面太い枕線。内外横ナデ調整。	IV B ①c
135	〃	〃		(3.6)		石英、角閃石を含む	無刻目突帯、口縁部内面段上の枕線。内面丁寧なナデ調整、口縁外面ナデ調整、頸部外面擦痕。	IV B ①a
136	〃	〃	30.3	(11.1)		精土	無刻目突帯、内面は折り取るような沈線、上胴部外面巻貝による沈線。外面横位巻貝条痕+ナデ調整、内面ナデ調整。外面は激しく煤ける。	〃
137	〃	〃		(4.9)		〃	無刻目突帯、内面深い枕線。内外横ナデ調整。	IV C ②a
138	〃	〃		(4.0)		チャート他の粗粒を多く含む	口縁外面細い沈線。内面段あり。内外横ナデ調整。	III B ①
139	〃	〃		(3.9)		精土	口縁部と頸部の界に鋭い稜線が見られる。口縁部外面横ナデ調整、頸外面横方向擦痕。	III B ②
140	縄文後期深鉢	〃		(5.1)		石英、長石を多く含む	内外ナデ調整。片粕式土器。	II F
141	縄文晩期深鉢	〃		(5.5)		小礫、粗粒砂を含む	口縁内面折り取ったような枕線。内外二枚貝条痕、外面はその上をナデ調整。外面煤ける。	VI B ①a
142	〃	〃		(7.3)		チャート他の小礫、粗粒砂多し	内外面巻貝条痕+ナデ調整。	V D ①d
143	〃	〃		(3.1)		粗粒砂多し	口縁部内面を大きく折り取って段状をなす。内外ナデ調整、外面煤ける。	V A ②d
144	〃	〃		(3.4)		〃	外面は横位の二枚貝条痕を施し2条の弧線を描く。内面はナデ調整。	VII D ①b

表15 第3地点拡張区土器観察表⑤

遺物 番号	時期 器種	出土地点 層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	特徴	分類
145	縄文晩期 深鉢	1-3区		(4.6)		チャートの粗粒砂を多く含む	外面二枚貝条痕、内面ナデ調整。	VII D②b
146	〃	〃		(5.4)		小礫、粗粒砂多し	内外面横位条痕+ナデ調整。外面煤ける。	VII D②d
147	〃	〃		(7.5)		チャート他の小礫、粗粒砂多し	外面横位巻貝条痕、内面ナデ調整。	VII D②b
148	〃	〃		(6.8)		小礫、粗粒砂多し	外面二枚貝条痕、内面ナデ調整。	VIII①b
149	〃	〃		(5.4)		チャート他の粗粒を多く含む	内外ナデ調整、下地に条痕を認む。	V D①d
150	〃	〃		(6.8)		チャート他の粗粒多し	内外横位条痕後ナデ調整。	VI D①d
151	〃	〃		(6.0)		チャート他の小礫、粗粒砂を多く含む	内面条痕+ナデ調整、外面条痕をナデ消す。指頭圧痕あり。	V D②d
152	〃	〃		(6.1)		チャート多く含む	内外面ナデ調整。	V D①d
153	〃	〃		(4.5)		チャートの粗粒砂	〃	V D②d
154	〃	〃		(5.7)		チャートの小礫を多く含む	内面沈線、内外横方向ナデ調整。	V B①d
155	〃	〃	20.4	(5.7)		粗粒砂多く含む	内外面ナデ調整、外面煤ける。	VI D②d
156	〃	〃		(6.5)		チャート他の小礫を多く含む	巻貝条痕+ナデ調整、内面太い沈線。	V B①d
157	〃	1-3区 Ⅲ層	35.5	(11.7)		粗粒砂多し	内外面横ナデ調整。	VII D②d
158	〃	1-3区バン ク2Ⅱ層	19.5	(4.0)		チャート他の粗粒を多く含む	内外ナデ調整。	X②d
159	〃	1-3区 Ⅱ層		(4.8)		粗粒砂多し	〃	VIII①d
160	〃	1-3区		(2.8)		精土	口縁部外面2cm幅の肥厚帯。内面へラ磨き、外面は横位条痕+ナデ調整。	XI①d
161	〃	〃		(4.6)		チャート他の粗粒を多く含む	口縁部外面3.6cm幅の肥厚帯。内面へラ磨き、内外面は巻貝条痕+ナデ調整。	〃
162	〃	1-3区 Ⅲ層		(3.1)		〃	口縁部外面2.3cm幅の肥厚帯。内面へラ磨き、外面は条痕、内面はナデ調整。	〃
163	〃	〃		(3.0)		チャートの細粗粒砂を多く含む	口縁部外面2cm幅の肥厚帯。内面へラ磨き、外面は横位ナデ調整。	〃
164	〃	3-13区 Ⅱ層		(6.4)		粗粒砂を多く含む	内外面二枚貝条痕。	VII D①a
165	〃	〃		(8.7)		チャートの粗粒砂多し	口縁部外面幅2.5cmの肥厚帯あり、内外面巻貝条痕+ナデ調整、外面煤ける。	XI①b
166	〃	〃		(8.0)		小礫、粗粒砂を多く含む	内外面繊維束でナデ仕上げ。	VI D②d
167	〃	〃		(4.6)		チャートの粗粒砂多し	弱い波状口縁を有す。内外面ナデ調整。	IX②d
168	〃	3-13区バン ク2Ⅱ層		(6.9)		小礫、粗粒砂を多く含む	内外面ナデ調整、外面煤ける。	VIII②d
169	〃	〃		(5.7)		粗粒砂を多く含む	内外ナデ調整。	IX①d
170	〃	1-3区		(4.8)		チャート他の小礫、粗粒砂を多く含む	〃	VIII①d
171	〃	1-3区バン ク2Ⅱ層		(3.4)		〃	内面ナデ調整、外面巻貝条痕。	IX①d
172	〃	1-3区 Ⅱ層		(5.2)		粗粒砂を多く含む	内面ナデ調整、外面巻貝条痕。外面煤ける。	VIII②b
173	〃	1-3区		(12.0)		チャート他の小礫、粗粒砂を多く含む	内外ナデ調整。	VIII②d
174	〃	1-3区 Ⅱ層		(7.5)		粗粒砂を多く含む	内外面巻貝条痕+ナデ調整。	〃
175	〃	1-3区		(6.3)		〃	内外面条痕+ナデ調整、外面煤ける。	VII D①d
176	〃	〃		(5.5)		〃	〃	IX①d
177	〃	〃	27.0	(13.1)		チャート他の小礫、粗粒砂を多く含む	口頸部外面は巻貝条痕をナデ消す。頸部界に明瞭な段を有す。粘土紐接合部(内傾接合)で剥離。	VI F②d
178	〃	1-3区 Ⅲ層		(6.7)		粗粒砂を多く含む	内外巻貝条痕、下地に巻貝条痕あり。	IX①d
179	〃	1-3区バン ク2Ⅱ層		(2.8)		精土	三角形の刻目突帯、口唇部も刻目。ナデ調整。	XIII B②b
180	〃	1-3区 Ⅱ層		(3.7)		チャート他の粗粒砂を多く含む	刻目突帯を有する。刻目は刺突状。	〃

表16 第3地点拡張区土器観察表⑥

遺物番号	時期器種	出土地点層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	特徴	分類
181	縄文晩期深鉢	1-3区II層	37.4	(26.1)		小礫、粗粒砂を多く含む	外面横方向巻貝条痕+ナデ調整、内面ナデ調整。	VI D①d
182	〃	1-3区		4.5		チャート他の粗粒砂を多く含む	〃	VII①d
183	〃	1-3区II層	20.5	(6.9)		〃	内外面巻貝条痕。	IX②a
184	〃	1-3区	33.9	(6.3)		〃	外面横方向巻貝条痕+ナデ調整、内面ナデ調整。	VII①b
185	〃	〃	27.3	(11.7)		〃	内外ナデ調整。	IX①d
186	〃	1-3区	43.2	(8.4)		〃	外面巻貝条痕+ナデ調整、内面ナデ調整。	VII①d
187	〃	1-3区II層		(3.6)	8.2	〃	上底。内外ナデ調整。	
188	〃	1-3区III層		(2.7)	9.3	石英、角閃石を含む	上底。内外ナデ調整。特に外底を丁寧に仕上げている。	
189	〃	1-3区II層		(2.5)	8.8	精土	上底。内外底ナデ調整。	
190	〃	1-3区III層		(3.0)	6.8	粗粒砂を多く含む	〃	
191	〃	〃		(9.6)	6.6	チャート他の粗粒を多く含む	上底。内外ナデ調整。外面は下地の条痕を僅かに認む。	
192	〃	〃		(4.5)	6.6	〃	上底。内外ナデ調整。	
193	〃	1-3区		(1.8)	8.8	精土、石英、角閃石	上底。外底は丁寧なナデ調整。	
194	〃	〃		(4.0)	6.8	チャート他の粗粒を多く含む	上底。内外ナデ調整。	
195	弥生中期甕	1-3区バンク3V層	17.5	(4.8)		風化礫の粗粒砂を多く含む	口唇部下端に刻目、頸部外面多条の垂下沈線、部分的に横方向の沈線が施文。	南四国型
196	弥生中期壺	1-3区	16.6	(5.9)		粗粒砂を多く含む	口縁部外面幅1cm程の扁平な粘土帯を貼付し刻目を施す。	
197	弥生前期甕	1-3区バンク3V層	19.3	(4.5)		〃	口唇部下端に刻目、頸部外面に2条の微隆起帯を貼付。	
198	弥生中期甕	1-3区		(3.6)		風化礫の粗粒砂を多く含む	口唇部下端に刻目、頸部外面に1条の微隆起帯を貼付。	
199	弥生中期壺	1-3区バンク3V層		(7.1)		粗粒砂を多く含む	上胴部に微隆起帯を貼付しその上に浮文を貼付、微隆起帯から上位に櫛描波状文、〃直線文、〃波状文を認む。	
200	縄文晩期深鉢	1-3区		(2.1)		〃	口縁外面2条の沈線。内外面横ナデ調整。	III A①
201	縄文晩期浅鉢	1-3区		(3.0)		〃	内外ナデ調整。	G④
202	〃	1-3区バンク3VII層		(3.8)		〃	〃	D
203	〃	1-3区II層		(2.1)		〃	口縁部内面沈線1条、内外面ヘラ磨き。	G③
204	〃	1-3区III層		(2.1)		風化礫の粗粒砂を多く含む	口縁部内面に1条の沈線、その下に斜め方向の沈線が見られる。複線山形文風の文様を描いていたものと考えられる。	H I
205	〃	1-3区II層		(3.4)		精土	黒色磨研。口縁部外面2条の沈線を施すが、沈線間は削り出し突帯状を呈す。	A I a③
206	〃	3-1-3区VII層		(2.3)		〃	内外面ヘラ磨き。	B III b④
207	〃	3-1-3区II層		(2.7)		〃	口縁部内面は段をなして肥厚。内外面ヘラ磨き。	A II b④
208	〃	3-1-3区		(2.2)		〃	口縁部外面は抉るような太い沈線、内面は肥厚して段をなす。	A III b③
209	〃	3-1-3区II層		(3.6)		〃	底部から鋭く屈曲して外反する口縁部、外底に紡錘形の黒斑あり。	A
210	〃	3-1-3区下層		(3.6)		〃	内外面ヘラ磨き。	E
211	〃	3-1-3区下層	30.0	(4.5)		〃	口縁部外面は凹状をなす。内外面丁寧なヘラ磨き。焼成後径5mmの孔を内外から穿つ。	A II a①
212	〃	3-1-3区II III層		(3.1)		精土、角閃石を含む	口縁部内外面段状、内外面丁寧なヘラ磨き。	〃
213	〃	3-1-3区	19.2	(3.5)		チャートの細粗粒砂を多く含む	口縁部内面は抉るような沈線を弧状に配し、端部に径3mmの刺突あり。内外面ヘラ磨き。	C II③
214	〃	3-1-3区		(2.9)		精土	波状口縁。外方に拡張された口縁の内側に段、抉り状の沈線、頸部下にも沈線。	C II①
215	〃	3-1-3区II下層	32.4	(2.2)		〃	口縁部内面肥厚、外面は沈線。胴部との接合部で剥離欠損。内外面ヘラ磨き。	F I①
216	〃	3-1-3区II層		(2.3)		〃	口縁部内外面沈線。内外面丁寧なヘラ磨き。	F II③

表17 第3地点拡張区土器観察表⑦

遺物番号	時期器種	出土地点層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	特徴	分類
217	縄文晩期浅鉢	3-1-3区Ⅲ層		(3.1)		〃	内外面丁寧なヘラ磨き。	F
218	〃	3-1-3区		(4.9)		〃	内外面ヘラ磨きなるも下地の削りが認められる。外面煤ける。	C
219	〃	3-1-3区Ⅱ下層Ⅹ層	24.5	(3.7)		精土、角閃石を含む	口縁部内面に段。内外面ヘラ磨き。	EⅢ①
220	〃	3-1-3区		(2.6)		精土	口縁部内外面沈線。内外面ヘラ磨き。	FⅢ③
221	〃	3-1-3区		(2.6)		精土	口縁部内面に段。内外面ヘラ磨き。	FⅡ②
222	縄文晩期深鉢	3-1-3区		(5.3)		精土	口縁下端をつまみ出して無刻突帯を形成、口縁内面段上の沈線。内外ナデ調整。	IVB①a
223	〃	3-1-3区		(4.1)		精土(雲母、石英粒他)	口縁内面下方を削り取るような沈線。内外横ナデ調整。	IVB①b
224	〃	3-1-3区	30.6	(10.9)		〃	口縁部外面に微隆起帯を貼付して突帯状に仕上げる。口縁部内面に沈線、頸胴界に沈線を施す。頸部外面削り。	IVC③c
225	〃	3-1-3区	28.0	(7.2)		〃	一次口縁をつまみ出すようにして無刻突帯を形成、内面押さえつけるようなヘラ沈線を有す。外面横擦痕。	IVB②a
226	〃	3-1-3区		(6.1)		砂粒を多く含む	内外面横方向の巻貝条痕。一部高熱により海綿状をなす。	VII D②d
227	〃	3-1-3区		(5.2)		小礫、粗粒砂を多く含む	口縁部内面に太い沈線。内外面横ナデ調整。	IVB①d
228	〃	3-1-3区		(2.9)		チャート、風化礫などの粗粒砂を含む	内面段状。内外面巻貝条痕。	VII B①c
229	〃	3-1-3区		(4.3)		精土	内外面二枚貝条痕。	VB②a
230	〃	3-1-3区上層		(3.7)		チャート他の小礫、粗粒砂を多く含む	内外面横方向の巻貝条痕+ナデ調整。	VII D①d
231	〃	3-1-3区上層		(8.8)		精土	外面繊維状の原体でナデ調整。外面煤ける。	VII D③a
232	〃	3-1-3区上層		(8.4)		粗粒砂を多く含む	内外面横方向の巻貝条痕+ナデ調整。	VII D①d
233	〃	3-1-3区上層		(3.9)		チャート他の粗粒を多く含む	内面段をなす。外面は巻貝条痕、内面ナデ調整。	VA①b
234	〃	3-1-3区		(7.8)		〃	内面は削り+ナデ調整、外面はハケ状原体による横ナデ調整。	VII D①d
235	〃	3-1-3区上層		(5.4)		チャート他の小礫、粗粒砂を多く含む	口縁部内面に沈線。内面は二枚貝条痕、外面は二枚貝条痕+ナデ調整。	VII B①a
236	〃	3-1-3区		(6.5)		チャートの粗粒砂を含む	内面ナデ調整、外面巻貝条痕。	VII D①b
237	〃	3-1-3区上層		(6.5)		チャート、風化礫の小礫、粗粒砂多し	内面ナデ調整、外面巻貝条痕+ナデ調整。	VII D①d
238	〃	3-1-3区上層	24.0	(4.2)		チャート他の小礫を多く含む	口縁部内面に沈線。内外面横方向巻貝条痕+ナデ調整。	X①b
239	〃	3-1-3区上層		(5.2)		石英、長石を多く含む	内面ナデ調整、外面巻貝条痕+ナデ調整。	VII D②d
240	〃	3-1-3区上層	32.6	(8.7)		粗粒砂を多く含む	内外面巻貝条痕+ナデ調整。	VII D①a
241	〃	3-1-3区1層	10.6	(5.5)		〃	〃	VII D②d
242	〃	3-1-3区上層	26.8	(11.8)		〃	内面横方向の条痕+ナデ調整、外面上位横方向、下位右下がりの巻貝条痕。	VII D①b
243	〃	3-1-3区上層	20.8	(9.6)		〃	口頸部外面巻貝条痕+ナデ調整、内面ナデ調整。	VII D③d
244	〃	3-1-3区		(6.7)		チャート他の粗粒砂を多く含む	内外面巻貝条痕+ナデ調整。	VIII①d
245	〃	3-1-3区上層		(5.1)		粗粒砂を多く含む	内面ナデ調整、外面横方向の条痕+ナデ調整。	〃
246	〃	3-1-3区上層		(3.6)		チャートの小礫を含む	口縁部内面に沈線。内面ナデ調整、外面繊維状原体によるナデ調整。	VIII①b
247	〃	3-1-3区		(4.4)		チャートの粗粒砂を含む	内外面ナデ調整、器面が凹凸、外面煤ける。	VIII①d
248	〃	3-1-3区上層		(5.0)		粗粒砂を多く含む	内面ナデ調整、外面巻貝条痕+ナデ調整。外面煤ける。	VIII①b
249	〃	3-1-3区		(5.4)		粗粒砂を少量含む	内外面巻貝条痕+横方向ナデ調整。	〃
250	〃	3-1-3区上層		(8.5)		小礫、粗粒砂を多く含む	内面ナデ調整、外面巻貝条痕+ナデ調整。外面煤ける。	VIII②d
251	〃	3-1-3区バンク21b層		(6.7)		粗粒砂を多く含む	内面ナデ調整、外面右下がり二枚貝条痕。	VIII②b
252	〃	3-1-3区上層		(8.1)		〃	内外面二枚貝条痕。外面煤ける。	VIII①a

表18 第3地点拡張区土器観察表⑧

遺物番号	時期器種	出土地点層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	特徴	分類
253	縄文晩期深鉢	3-1-3区		(9.8)		チャート他の粗粒砂を多く含む	内面ナデ調整、外面巻貝条痕+ナデ調整。外面煤ける。	Ⅶ②d
254	〃	3-1-3区上層		(5.2)		粗粒砂を多く含む	内外面条痕。	Ⅶ②a
255	〃	3-1-3区	20.5	(11.3)		チャート他の粗粒砂を多く含む	内外ナデ調整。外面煤ける。	Ⅸ①d
256	〃	3-1-3区上層	16.4	(7.8)		チャート他の小礫、粗粒砂を多く含む	外面ナデ調整、煤ける。	Ⅶ②d
257	注口土器	〃				角閃石、雲母、結晶片岩など	注口部、先端部の外径は1.4cm、内径は1cm。	
258	縄文晩期深鉢	3-1-3区		(3.5)		チャート他の粗粒砂を多く含む	口縁部内外面は繊維束状の原体による横方向ナデ調整。外面は原体による圧痕。	X①d
259	〃	3-1-3区上層		(2.8)		チャートの小礫を含む	突帯の刻みはD型、口唇部にも深い刻目。	XII A②b
260	〃	3-1-3区上層		(3.8)	6.1	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	平底。内面ナデ調整。外面縦方向巻貝条痕。	
261	〃	3-1-3区上層		(2.8)	7.1	チャート、赤色風化礫を多く含む	上底。内外ナデ調整。	
262	〃	3-1-3区		(3.5)	7.4	チャートの粗粒砂を含む	上底。内外ナデ調整。	
263	〃	3-1-3区上層		(3.7)	8.0	チャート他の小礫、粗粒砂を多く含む	〃	
264	〃	3-1-3区上層		(7.9)	7.0	チャートの粗粒砂を含む	上底。内外ナデ調整。外面は下地に条痕、外堤は丁寧なナデ調整。	
265	〃	3-1-3区上層		(6.1)	8.8	チャートの小礫を多く含む	上底。内外ナデ調整。	
266	〃	3-1-3区バンク21b層		(2.9)	6.8	チャート他の粗粒砂を多く含む	上底。内底は二枚貝条痕が残る。他はナデ調整。	
267	弥生土器	3-1-3区バンク		(1.5)	7.8	〃	外底に木葉圧痕。	
268	縄文晩期浅鉢	3-1-3区上層	21.8	(3.1)		精土	口縁部外面は沈線状の段。内外面ヘラ磨き、外面赤彩。	B I a①
269	〃	3-1-3区上層		(2.3)		精土、角閃石を含む	口縁部外面削り出し状の沈線。内外面細丁寧なヘラ磨き。	A II a①
270	〃	3-1-3区上層		(2.3)		精土	口縁部外面沈線、内外面ヘラ磨き。	A II a③
271	〃	3-1-3区上層		(4.3)		〃	口縁部外面凹状。内外面ヘラ磨き。	A II a④
272	〃	3-1-3区上層		(4.6)		〃	口縁部外面は断面V字の太い抉り沈線。内外面丁寧なヘラ磨き。	A III b③
273	〃	3-1-3区上層		(3.1)		〃	口縁部外面沈線。内外面ヘラ磨き。	A II a③
274	〃	3-1-3区上層	36.0	(4.7)		〃	口縁部外面削出しによる段、内外ヘラ磨き。	A II a①
275	〃	3-1-3区上層		(3.5)		〃	内外面ヘラ磨き、外面は下地の巻貝条痕が見える。	A
276	〃	3-1-3区上層		(3.6)		〃	口縁部外面削出し状の沈線、内外細丁寧なヘラ磨き。	A II a①
277	〃	3-1-3区		(5.7)		石英他の砂粒を含む	口縁部内面段を有す。内面ヘラ磨き、外面ナデ調整。外面煤ける。	E II①
278	〃	3-1-3区		(3.8)		精土	口縁部内面に段。器表の荒れが激しい。	L
279	〃	3-1-3区上層		(3.2)		精土	波状口縁を有す。内外面ヘラ磨き。赤彩。	D
280	〃	3-1-3区上層		(4.4)		精土	内外面擦痕+ヘラ磨き。	G④
281	〃	3-1-3区上層		(6.2)		精土、角閃石、雲母を含む	口縁部に2個の突起あり、外面は巻貝条痕+ナデ調整、内面ヘラ磨き。	G④
282	〃	3-1-3区上層		(4.1)		精土	壺の可能性あり。内外面ヘラ磨き。	I
283	〃	3-1-3区上層		(2.4)		精土	口縁部内面肥厚。内外面ヘラ磨き。	G②
284	〃	3-1-3区上層		(4.1)		粗粒砂を含む	内外面ナデ調整。	K
285	〃	3-1-3区		(1.7)		精土	内面カマボコ状に肥厚し段を有す、外面も段状の沈線。内外ヘラ磨き。	F II①
286	青磁碗	3-1-3区上層	11.6	(3.1)		灰白色精緻	龍泉窯。口縁輪花。	
287	瓦器椀	3-1-3区上層	12.8	(3.4)		チャート他の粗粒砂を多く含む	口縁部内外面横ナデ調整。	
288	青磁碗	3-1-3区上層		(1.9)	6.3	灰色精緻	龍泉窯。畳付まで施釉、外底掻き取り。	

表19 第3地点拡張区土器観察表⑨

遺物番号	時期器種	出土地点層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	特徴	分類
289	瓦器 小皿	3-1-3区 上層	7.8	(1.6)		精度	外底指圧痕。	
290	弥生土器 甕	3-1-3区 上層	17.0	(14.0)		〃	薄手。口唇部下端に刻目。頸胴部界に2条の微粒起帯を貼付、その下に楕円形浮文を貼る。内外面ナデ調整。	
291	縄文晩期 深鉢	3-1-4区 テラス2		(3.5)		〃	無刻目突帯、頸部外面耐縦方向削り、内面丁寧な横方向ナデ調整。外面ススケ	IVC②c
292	〃	〃		(2.7)		〃	無刻目突帯、内外横ナデ調整。外面煤ける。	IVB①c
293	〃	〃		(2.9)		チャート他の粗砂多し	内面2条の沈線。	IVC①b
294	〃	〃		(4.6)		精土	無刻目突帯、内面沈線。内外面横方向ナデ調整。	IVB①b
295	〃	〃		(3.5)		〃	無刻目突帯、内面段状の沈線。内外面ナデ調整。	IVB①c
296	〃	〃		(5.6)		〃	無刻目突帯。内面2条沈線。外面は突帯上に大きな押圧痕。内外面巻貝条痕+横ナデ調整。	IVC①c
297	〃	〃				チャート他の粗砂多し	口縁外面2条の沈線、頸部外面横方向巻貝条痕+横ナデ調整、内面横方向ナデ調整。	III A①
298	〃	〃	29.0	(9.8)		精土	無刻目突帯、内面沈線、上胴部に太い沈線。内外面ナデ調整なるも外面下地には巻貝条痕を認む。	IVC②a
299	〃	〃				精土、雲母多し、外面ススケ	無刻目突帯、内面沈線、上胴部に太い沈線。内面巻貝条痕+ナデ調整。口頸部外面は荒いナデ調整。倍面煤ける。	IVC②a
300	〃	〃	36.6	(3.6)		精土、角閃石	無刻目突帯、内外横ナデ調整。外面煤ける。	IVC③a
301	〃	〃	39.6	(6.9)		精土	内外横ナデ調整。	IVB①b
302	〃	〃	35.1	11.0		粗粒砂を多く含む	口縁外面2条の沈線、口縁部に粘土帯の内傾接合痕を認む。頸部外面横方向巻貝条痕。	III A②
303	〃	〃	33.0	(15.9)		精土	無刻目突帯。口縁部内面に沈線、頸胴部界に幅7mmの太い棒状現体で沈線。ナデ調整を主体。外面煤ける。	IVC①a
304	〃	〃		(19.5)		〃	頸胴部に太い沈線、頸部外面は巻貝条痕+ナデ調整、胴部外面は巻貝条痕。	
305	〃	〃	29.6	(14.4)		〃	口縁外面が強いナデにより大きく凹む、内面は細い沈線。頸胴部界に断面V字状の沈線を描く。巻貝条痕+横ナデ調整。	VB①d
306	〃	〃	14.4	(27.7)		〃	無刻目突帯。口縁部内面沈線、頸胴部界にも細い沈線。外面ハケ状原体によるナデ調整。胴部内面横位の擦痕。	IVC②d
307	〃	〃		(4.0)		チャート他の小礫、粗粒砂多し	内外面ナデ調整。	VD①d
308	〃	〃		(3.8)		粗粒砂を多く含む	口縁部内面段状の太い沈線、内外横方向ナデ調整。	VA①d
309	〃	〃		(4.7)		チャート他の粗粒を多く含む	口縁部内面抉り取ったような沈線。内外横方向ナデ調整。	VA①a
310	〃	〃		(4.5)		チャート他の小礫、粗粒砂多し	内外面ナデ調整。外面煤ける。	VID①d
311	〃	〃		(4.4)		精土	内外面丁寧なナデ調整。	VID②d
312	〃	〃		(1.9)		粗粒砂を多く含む	内面に2条の沈線。	VB①d
313	〃	〃		(6.1)		粗粒砂、小礫を多く含む	内外ナデ調整。	VID①d
314	〃	〃		(5.0)		チャート他の小礫、粗粒砂多し	内外面横方向のナデ調整。	〃
315	〃	〃		(3.9)		赤色風化礫を多く含む	内面に弱い沈線。内外面ナデ調整。	VB①d
316	〃	〃		(4.3)		精土	内面沈線。内外面ナデ調整。	VB①d
317	〃	〃		(3.3)		チャートの粗粒砂を含む	外面巻貝条痕、内面は巻貝条痕をナデ消す。	VID①b
318	〃	〃		(5.2)		精土	口縁内面段状の1条の沈線。内外面巻貝条痕。	VB①a
319	〃	〃		(5.5)		チャートの粗粒砂を多く含む	内外面二枚貝条痕。	VID②b
320	〃	〃		(7.5)		赤色風化礫、他の粗粒砂を多く含む	内外面横方向の巻貝条痕。外面煤ける。	VID②d
321	〃	〃		(6.5)		小礫、粗粒砂を含む	口縁を広く拡張。内外に太い沈線。外面巻貝条痕、内面ナデ調整。	VC①d
322	〃	〃		(5.5)		チャートの小礫を含む	内外面横方向の二枚貝条痕。外面煤ける。	VII D②a
323	〃	〃		(8.0)		精土	内外面ナデ調整+一部にヘラ磨き(下地に巻貝条痕)。内外面煤ける。	VID①d
324	〃	〃	23.4	(9.1)		粗粒砂を多く含む	口縁部内面に沈線。頸部外面横方向ナデ調整、胴部外面横方向の擦痕。外面煤ける。	VB②d

表20 第3地点拡張区土器観察表⑩

遺物番号	時期器種	出土地点層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	特徴	分類
325	縄文晩期深鉢	3-1-4区テラス2	26.0	(6.1)		チャート他の小礫、粗粒砂を多く含む	内外面横ナデ調整。	Ⅷ②d
326	〃	〃	27.8	(7.3)		チャートの粗粒砂を含む	僅かに波状口縁。外面横方向の二枚貝条痕、内面ナデ調整。	ⅥD①b
327	〃	〃	27.6	(6.0)		〃	内面横ナデ調整、外面は条痕。	〃
328	〃	〃		(8.0)		チャート他の小礫、粗粒砂を多く含む	内外面二枚貝条痕。焼成後穿孔2箇所。	ⅥD①a
329	〃	〃		(18.8)		小礫、粗粒砂を多く含む	口唇部に刻目を認む。内外面ナデ調整。	ⅥD②d
330	〃	〃	21.2	(9.6)		精度	口頸部外面横方向の巻貝条痕、内面はナデ調整。胴部外面は右下がりの巻貝条痕、内面は横方向巻貝条痕。外面煤ける。	ⅥD①d
331	〃	〃	(36)	(10)		チャートの小礫を含む	内面横方向の巻貝条痕、外面ナデ調整。外面煤ける。	ⅦD①d
332	〃	〃		(7.5)		精土	上胴部に太い沈線。内面ナデ調整、外面横方向の擦痕。	
333	〃	〃				チャート、風化礫他の小礫、粗粒砂を多く含む	内面に巾1.5cm厚さ0.5cmの段あり内傾接合時に生じたもの。内外ナデ調整、下地に巻貝条痕あり。	VA①d
334	〃	〃	16.0	(6.4)		粗粒砂を多く含む	口縁部内外に太い沈線、内外ナデ調整。	VC①d
335	〃	〃	30.4	(9.2)		チャート、石英、結晶片岩の粗粒多し	内面ナデ調整、外面二枚貝による格子状の条痕。外面煤ける。	X①b
336	〃	〃	37.6	(15.0)		赤色風化礫を多く含む	口縁内面沈線。内外ナデ調整(外面の下地に巻貝条痕を認む)。	VB②d
337	〃	〃		(7.9)		チャート他の小礫、粗粒砂を多く含む	内外面ナデ調整、下地に巻貝条痕。	Ⅷ②d
338	〃	〃		(7.4)		チャート他の小礫を多く含む	外面横方向の巻貝条痕+横ナデ調整。	Ⅷ①d
339	〃	〃		(6.2)		チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	内外面ナデ調整。	Ⅷ②d
340	〃	〃		(5.8)		〃	〃	〃
341	〃	〃		(9.6)		チャート、頁岩の粗粒多し	内外面横ナデ調整。	〃
342	〃	〃		(3.6)		チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	内外面横方向巻貝条痕+ナデ調整。	Ⅷ①b
343	〃	〃		(6.5)		チャート他の小礫を多く含む	〃	Ⅷ①d
344	〃	〃	34.0	(7.0)		小礫、粗粒砂を多く含む	内外面ナデ調整。	〃
345	〃	〃		(4.3)		チャート、風化礫、粗粒砂を多く含む	内外面横方向の巻貝条痕+横方向ナデ調整。	Ⅷ②d
346	〃	〃		(7.4)		チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	内外面巻貝条痕	Ⅷ①b
347	〃	〃	28.1	(5.8)		精土	内外面横ナデ調整。	IX①d
348	〃	〃		(2.9)		〃	内外面巻貝条痕	IX①a
349	〃	〃	31.0	(6.2)		チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	内外面横方向巻貝条痕。	Ⅷ②d
350	〃	〃		(12.5)		〃	内外面横ナデ調整。	Ⅷ①d
351	〃	〃	22.0	(11.2)		〃	内外面横ナデ調整。外面煤ける。	Ⅷ②d
352	〃	〃	28.1	21.5		小礫、粗粒砂を多く含む	内外面巻貝条痕+ナデ調整。外面煤ける。	〃
353	〃	〃	28.6	(16.1)		チャート他の粗粒砂を多く含む	内外面横方向二枚貝条痕。	IX②a
354	〃	〃	28.6	(16.1)		小礫を多く含む	内面ナデ調整、外面は繊維束のような原体によるナデ調整。外面煤ける。	Ⅷ①d
355	〃	〃		(9.0)		細粗粒砂を多く含む	器表に凹凸がある。内外面横方向ナデ調整。	IX①d
356	〃	〃	32.2	27.1		チャート他の小礫、粗粒砂を多く含む	内外面二枚貝条痕。外面煤ける。	IX②b
357	〃	〃		(5.7)		チャート他の粗粒砂を多く含む	内面巻貝条痕+ナデ調整、外面ナデ調整。	IX①d
358	〃	〃		(6.9)		チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	内面ナデ調整、外面巻貝条痕+ナデ調整。外面煤ける。	〃
359	〃	〃		(4.8)		チャートの粗粒砂を多く含む	内外面ナデ調整。	IX②d
360	〃	〃				〃	内外面ハケ状原体による横方向ナデ調整。外面煤ける。	〃

表21 第3地点拡張区土器観察表①

遺物 番号	時期 器種	出土地点 層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	特徴	分類
361	縄文晩期 深鉢	3-14区 テラス2		(4.4)		チャート他の粗粒砂を多く含む	内面ナデ調整、外面二枚貝条痕。	IX②b
362	〃	〃	38.2	(8.9)		小礫、粗粒砂を多く含む	内外面ナデ調整。煤ける。	VIII①d
363	〃	〃		(7.1)		チャートの粗粒砂を多く含む	内外面ナデ調整。	X①d
364	〃	〃		(5.5)	9.4	精土(石英、長石、角閃石)	上底。外面ナデ調整。内底から3cmほど上が帯状に煤ける。	
365	〃	〃		(2.5)	8.3	チャートの小礫を含む	上底。内外面ナデ調整。	
366	〃	〃		(3.4)	8.3	チャートの粗粒砂を多く含む	〃	
367	〃	〃		(3.5)	4.6	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	上底。内外面ナデ調整。外面煤ける。	
368	〃	〃		(8.2)	2.4	小礫、粗粒砂を多く含む	上底。内外面ナデ調整。	
369	〃	〃		(2.0)	7.6	チャートの粗粒砂を多く含む	内外ナデ調整。	
370	〃	〃		(16.2)		小礫を多く含む	底部の円盤が欠落。内外ナデ調整。	
371	〃	〃		(8.1)	9.5	チャートの粗粒砂を多く含む	内面ナデ調整、外面は繊維束のような原体によるナデ調整。	
372	〃	〃		(10.7)	7.4	石英、風化礫、他の粗粒砂多し	内面ナデ調整、外面縦方向巻貝条痕。外面煤ける。	
373	縄文晩期 浅鉢	〃		(2.3)		石英、角閃石の粗粒砂を含む	内外面ヘラ磨き。	A
374	〃	〃		(2.9)		精土	〃	A II a②
375	〃	〃		(1.4)		〃	口縁部外面段状に削り出す。	A II b①
376	〃	〃		(1.9)		〃	口縁部内面肥厚、外面段状。内外面ヘラ磨き。	〃
377	〃	〃		(2.7)		〃	口縁部内面に弱い段。内外面ナデ調整。	E III②
378	〃	〃		(1.8)		〃	内外面ヘラ磨き。	A II b②
379	〃	〃		(2.0)		〃	口縁部内面三角に肥厚。内外面ヘラ磨き。	A II b④
380	〃	〃	24.6	(5.5)		〃	口縁部内面カマボコ状に肥厚。内外面ヘラ磨き。外面赤彩。	E II②
381	〃	〃		(3.1)		精土、角閃石	口縁部内面1条、外面2条の沈線、体部外面2条の沈線と弧状沈線が交差する。内外面丁寧なヘラ磨き。	G③
382	〃	〃	33.0	(3.0)		〃	口縁部外面は段状の沈線。内外面丁寧なヘラ磨き。	A II a①
383	〃	〃		(7.1)		精土	口縁部内面削り出し状の沈線。口縁部内外面横ヘラ磨き、体部内外面巻貝条痕+ナデ調整。	C I②
384	縄文晩期 鉢	〃	18.8	(8.2)		粗粒砂を多く含む	内外面ナデ調整。	I
385	〃	〃		(7.7)		チャート他の小礫、粗粒砂を多く含む	外面ハケ状原体によるナデ調整。内面ナデ調整。	〃
386	縄文晩期 深鉢	3-14区テ ラス3 SX1		(3.0)		チャートの粗粒砂多く含む	口縁外面2条の沈線。頭部外面巻貝条痕跡内面ナデ調整。	III A①
387	〃	〃		(2.2)		精土(石英、角閃石、雲母を含む)	無刻目突帯。内面に沈線。内外面横ナデ調整。	IV C②c
388	〃	3-14区 SX1		(3.5)		精土	無刻目突帯。内面丁寧なナデ調整、外面粗いナデ調整(左←右に粒砂が動く)外面煤ける。	IV D①b
389	〃	3-14区 テラス3 SX1		(4.6)		石英粗細粒を含む	内外面横方向ナデ調整。	III B①
390	〃	3-14区 SX1		(3.0)		精土	無刻目突帯。内外面丁寧なナデ調整。	IV D②c
391	〃	3-14区 テラス3		(4.5)		チャートの粗粒砂を多く含む	内面ナデ調整、外面横方向巻貝条痕+ナデ調整。	VII D①b
392	〃	〃		(3.7)		〃	内面横方向の巻貝条痕+横ナデ調整、外面横方向巻貝条痕。	VI D①b
393	〃	34区SX1 VI層(下層)		(5.1)		〃	外面ハケ状原体によるナデ調整。内面ナデ調整。	VII D①d
394	〃	3-14区 テラス3 VI層		(3.3)		〃	内外面ナデ調整。	〃
395	〃	3-14区 テラス3 VI層		(3.9)		石英、チャートの粗粒砂	内面二枚貝条痕+横ナデ調整、外面二枚貝条痕。	VII D②b
396	〃	3-14区 テラス3		(5.0)		チャート、石英粒多し	内面ナデ調整、外面状痕。	VII D①b

表22 第3地点拡張区土器観察表⑫

遺物 番号	時期 器種	出土地点 層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	特徴	分類
397	縄文晩期 深鉢	3-1-4区 テラス3				チャートの粗粒砂を多く含む	内面ナデ調整、外面板状原体によるナデ調整。	Ⅷ①b
398	〃	3-1-4区 SX1		(5.1)		チャートの粗粒砂多し	内面に太い沈線。内外面ナデ調整。	V B①d
399	〃	3-1-4区 テラス3		(3.4)		チャートの粗粒砂少量含む	内面に2～3条の沈線条の圧痕。	V B①d
400	〃	3-1-4区 テラス3		(7.1)		石英粒を含む	口縁部肥厚。内外面ナデ調整。	VI D②d
401	〃	3-1-4区 テラス3	18.8	(5.9)		粗粒砂を多く含む	内外面ナデ調整。煤ける。	VI D①d
402	〃	3-1-4区 テラス3	15.1	5.4		チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	口縁部内面抉るような沈線。内外面ナデ調整。外面煤ける。	V B①d
403	〃	3-1-4区テ ラス3 SX1	28.7	(9.1)		チャートの粗粒砂多し	外面横方向二枚貝条痕+縦方向二枚貝条痕、内面横方向二枚貝条痕。	VI D①a
404	〃	3-1-4区 テラス3	33.4	(4.7)		粗粒砂を多く含む	内外面ナデ調整。	V D②d
405	〃	3-1-4区 SX1		(7.6)		チャートの粗粒砂多し	内外面ナデ調整。煤ける。	Ⅷ①d
406	〃	3-1-4区テ ラス3 SX1		(7.9)		チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	ハケ状原体によるナデ調整。	Ⅷ②d
407	〃	3-1-4区テ ラス3 V層		(5.0)		〃		Ⅷ①d
408	〃	3-1-4区 テラス3		(5.4)		チャート、石英粒を含む	内外面ナデ調整。煤ける。	〃
409	〃	3-1-4区 テラス3		(5.4)		粗粒砂を多く含む	内面ナデ調整、外面巻貝条痕+横ナデ調整。	〃
410	〃	3-1-4区テ ラス3 SX1		(4.0)		チャートの粗粒砂多し	内外面巻貝条痕。	IX①a
411	〃	3-1-4区 テラス3		(3.3)		〃		Ⅷ①d
412	〃	〃		(4.5)		チャート、風化礫他の小礫、粗粒砂を多く含む	内外面横方向二枚貝条痕。	Ⅷ①b
413	〃	3-1-4区テ ラス3 SX1		(6.7)		チャート他の小礫を多く含む	内外面横方向巻貝条痕+ナデ調整。	IX①a
414	〃	〃		16.9	(9.6)	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	内外面ハケ状原体による横方向ナデ調整。	IX②d
415	〃	3-1-4区 テラス3		(3.3)	7.9	チャート他の小礫を多く含む	上底。内外面ナデ調整。	
416	〃	3-1-4区テ ラス3 SX1		(3.2)	6.8	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	〃	
417	〃	〃		(1.9)	7.4	〃	〃	
418	〃	〃		(2.1)	4.4	チャート他の粗粒砂を多く含む	平底。内外面ナデ調整。	
419	〃	〃		(1.3)	4.2	チャートの粗粒砂多し	〃	
420	〃	〃		(11.4)	8.9	精土	上底。外底は繊維状の原体で強くナデ調整。内底には炭化物が付着。	
421	縄文晩期 浅鉢	3-1-4区 テラス3		2.0		精土	口縁部外面に沈線。内外面ヘラ磨き。	A II b③
422	〃	3-1-4区テ ラス3 SX1		(2.8)		精土	口縁部内面に段。内外面ヘラ磨き。	E III①
423	〃	3-1-4区 テラス3		(2.5)		精土	内外面ヘラ磨き。	C
424	〃	3-1-4区SX1 Ⅶ		(3.0)		精土	〃	〃
425	〃	3-1-4区 SX1	25.8	(3.8)		精土	口縁部内面に段。内外面丁寧なヘラ磨き。	C I①
426	縄文後期 深鉢	3-1-4区 テラス4		(2.8)		石英、雲母を多く含む	口縁外面RL縄文	II B
427	〃	3-1-4区 SX2		(4.1)		精土(石英、長石粒多し)	無刻目突帯。内面は段上の沈線。内外面ナデ調整。	IV B②c
428	〃	3-1-4区テ ラス4 SX2		(3.8)		精土(石英、雲母、長石)	内外面ナデ調整。	IV D②a
429	〃	〃		(2.9)		チャート、風化礫を含む	無刻目突帯。口縁部外面に微隆起帯を貼付。内外面ナデ調整。外面煤ける。	IV D③b
430	〃	〃		(2.3)		精土	無刻目突帯。内外面ナデ調整。外面煤ける。	IV D③b
431	〃	3-1-4区 SX2		(9.1)		チャートの粗粒砂多し	内面ナデ調整、外面巻貝条痕。	V D②d
432	〃	3-1-4区 SX2		(7.9)		チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	内面巻貝条痕+横方向ナデ調整、外面削り+ナデ調整。	Ⅷ②d

表23 第3地点拡張区土器観察表⑬

遺物番号	時期器種	出土地点層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	特徴	分類
433	縄文晩期深鉢	3-14区③テラス4下VI層		(7.1)		チャート、石英の粗粒砂	内外面ナデ調整。	Ⅷ①d
434	〃	〃		(5.8)		チャートの小礫、粗粒砂を含む	内面二枚貝条痕、外面ナデ調整。	Ⅷ①c
435	〃	3-14区テラス4 SX2(上)		(4.1)		チャート他の粗粒砂を含む	内外面ナデ調整。外面煤ける。	Ⅷ①d
436	〃	3-14区SX2		(4.6)		チャートの粗粒砂多し	内面ナデ調整、外面巻貝条痕。	ⅥD①b
437	〃	〃	23.6	(8.4)		〃	内外面巻貝条痕+ナデ調整。	Ⅷ①d
438	〃	〃		(2.8)		精土、角閃石を含む	口縁部外面2条の太い沈線。内外ナデ調整。	ⅢC①
439	〃	3-14区テラス4 SX2		(1.8)	6.2	チャートの粗粒砂多し	上底。内外面ナデ調整。	
440	縄文後期深鉢	3-14区テラス4		(1.9)	8.7	風化礫の砂粒を多く含む	平底。外面RLの縄文。	
441	縄文晩期浅鉢	3-14区SX2		(3.0)		精土、角閃石を含む	内外面ヘラ磨き。	C
442	〃	〃		(4.7)		細粗粒砂を多く含む	口縁部内面に段。内外面ヘラ磨き。	EⅡ①
443	縄文晩期深鉢	3-14区		(6.5)		チャート他の粗粒多し	口縁外面2条の沈線がわずかに認められる。一次口縁に二次口縁をつぎ足している。内外面ナデ調整。	ⅢA②
444	〃	3-14区バンク3Ⅷ層		(3.4)		精土	口縁部外面に2条の沈線。内外条痕の上を横ナデ調整。	ⅢA①
445	〃	3-14区バンク3Ⅵ層		(3.9)		チャート他の粗粒砂を多く含む	内外面ナデ調整。	ⅢB①
446	〃	3-14区		(3.2)		精土	口縁外面2条沈線。内外ナデ調整(下地に巻貝条痕あり)。	ⅢA①
447	縄文後期深鉢	3-14区バンク3Ⅶ層		(4.9)		粗粒砂を多く含む	口縁部外面2条の凹線。内外面ナデ調整。	ⅡE
448	縄文晩期深鉢	〃		(2.7)		精土	口縁外面3本、内面2本の沈線。内外横ナデ調整。	ⅢA①
449	〃	3-14区		(2.5)		チャート他の粗粒砂を含む	口縁外面2本の沈線。内外ナデ調整。	ⅢA①
450	縄文後期深鉢	〃		(2.8)		精土	口縁外面RLの縄文。内外ナデ調整。	ⅡB
451	縄文晩期深鉢	3-14区バンク3Ⅷ層		(3.7)		粗粒砂を含む	無刻目突帯。内外面横ナデ調整。外面煤ける。	ⅣD③b
452	〃	〃		(3.5)		精土、内外ナデ仕上げ、玉縁状を呈す、外面スケ	無刻目突帯、口縁部は玉縁状を呈する。内外ナデ調整。外面煤ける。	ⅣB①d
453	〃	〃		(5.9)		精土(角閃石)	無刻目突帯。内外面横ナデ調整。	ⅣC①c
454	〃	〃		(5.1)		精土	無刻目突帯。口縁部内面1条の沈線。頸部内外面巻貝条痕+横ナデ調整。	ⅣC②c
455	〃	〃		(3.2)		精土(角閃石)	無刻目突帯。口縁部外面強い横ナデ調整、内外ナデ調整。	ⅣB①c
456	〃	3-14区テラス1Ⅵ下層		(1.6)		精土	無刻目突帯。内外丁寧なナデ調整。	ⅣC②c
457	〃	3-14区バンク3Ⅷ層		(6.8)		〃	無刻目突帯。口縁部内面に沈線、外面に1cm大の師突。内外ナデ調整。	ⅣB①c
458	〃	3-14区Ⅳ層		(5.0)		〃	無刻目突帯。内外面横ナデ調整、下地に巻貝条痕。	ⅣC②c
459	〃	3-14区バンク3Ⅷ層		(6.2)		チャート他の粗粒多し	内外面ナデ調整。	ⅥD②d
460	〃	3-14区バンク3Ⅶ層		(6.1)		〃	内面横方向巻貝条痕+ナデ調整、外面右下がりの巻貝条痕+ナデ調整。煤ける。	Ⅷ②b
461	〃	〃		(4.8)		粗粒砂を含む	内外面二枚貝条痕。外面煤ける。	ⅦD②a
462	〃	3-14区バンク3Ⅷ層		(5.6)		チャートの小礫、粗粒砂を含む	内外面横ナデ調整。	ⅥD②d
463	〃	3-14区バンク3Ⅶ層		(6.1)		精土	内外面巻貝条痕。	ⅦD①b
464	〃	3-14区バンク3Ⅷ層		(5.1)		チャート他の小礫、粗粒を多く含む	口縁外面沈線、内面に抉り取るような太い凹線が走る。内外繊維束状の原体によるナデ調整。	ⅤC①d
465	〃	3-14区バンク3Ⅷ層		(8.7)		チャートの小礫多し	内外面ナデ調整、下地に巻貝条痕。	ⅥD②d
466	〃	3-14区バンク3Ⅶ層		(8.5)		粗粒砂を含む	内面ナデ調整、外面は巻貝条痕+繊維束状の原体でナデ調整。	〃
467	〃	3-14区Ⅶ層		(3.7)		チャート他の粗粒多し	内面ナデ調整、外面巻貝条痕。	ⅦD①b
468	〃	3-14区テラス1		(5.5)		〃	内外面横方向条痕。	ⅦD②a

表24 第3地点拡張区土器観察表⑭

遺物番号	時期器種	出土地点層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	特徴	分類
469	縄文晩期深鉢	3-1-4区		(4.3)		粗粒砂を含む	内外面ナデ調整。	IX②d
470	〃	3-1-4区バンク3IV層		(4.6)		チャート粗粒砂を多く含む	内外面ナデ調整、外面煤ける。	VD②d
471	〃	3-1-4区バンク3VII層		(3.9)		チャート、風化礫、粗粒砂を多く含む	内外面ナデ調整。	IX①d
472	〃	3-1-4区VI層		(4.5)		チャートの粗粒砂多し	〃	VII①d
473	〃	3-1-4区バンク3VII層		(3.6)		粗粒砂を含む	内外面巻貝条痕+ナデ調整。	IX②d
474	〃	3-1-4区テラス1	35.0	(8.6)		チャートの小礫多し	内外面横方向ナデ調整。外面煤ける。	IX②c
475	〃	3-1-4区		(6.3)		精土	外面RLの縄文を羽状に施す。内面は丁寧なヘラ磨き。片柏式土器。	
476	〃	3-1-4区テラス1		(2.4)	11.0	チャート、砂岩の小礫	内外面ナデ調整。	
477	〃	3-1-4区テラス1VI下層		(2.0)	8.0	チャートの小礫、粗粒砂を含む	平底。内外面ナデ調整。	
478	〃	3-1-4区バンク3VI層		(2.9)	8.0	チャートの粗粒砂多し	上底。内外面ナデ調整。	
479	〃	3-1-4区バンク3VI層		(1.9)	5.6	チャートの粗粒砂多し	平底。内外面ナデ調整。	
480	縄文晩期浅鉢	〃	17.3	(2.1)		精土	口縁部内面肥厚し弱い段。内外面ヘラ磨き。	FⅢ②
481	〃	3-1-4区テラス1		(2.6)		精土	内外面ヘラ磨き。	EⅡ④
482	〃	3-1-4区XII層		(2.5)		精土	内面はヘラ削り状の沈線。内外面ヘラ磨き。	CⅠ③
483	〃	3-1-4区バンク3VII層		(3.4)		精土	口縁部外面凹状を呈す。内外面ヘラ磨き。外面赤彩。	AⅢb②
484	〃	〃		(2.1)		精土	口縁部内面極細い沈線。内外面ヘラ磨き。	AⅢb③
485	〃	〃	29.3	(2.6)		精土	口縁部内面肥厚し段をなす。粘土帯接合部で剥離。内外面ヘラ磨き。	FⅡ②
486	弥生中期壺	3-1-4区バンク3VIII層		(9.6)		チャート他の粗粒砂	胴部中に三角突帯、その上に櫛描直線文を二帯まで認む。	
487	〃	3-1-4区バンク3VI層	17.0	(5.6)		チャートの粗粒砂多し	口縁部外面にハケ状原体による刻目+櫛描直線文+断面三角突帯+櫛描直線文を配す。	
488	〃	3-1-4区バンク3VII層		(3.0)		チャート他の粗粒砂	口縁部外面に1.5cm幅の粘土帯を貼付、口唇部上下に刻目突帯目。	
489	縄文晩期深鉢	3-1-4区IV層		(8.4)		雲母、石英、赤色風化礫を多く含む	口縁外面2条の太い沈線、一次口縁の上に二次口縁を足している。口縁部内外面は横ナデ調整。	ⅢA①
490	〃	3-1-4区IV層		(5.0)		精土	口縁外面2本の沈線、口縁外面丁寧なナデ調整、頸部外面はヘラ状の原体と指による粗いナデ調整。内面ナデ調整。	〃
491	〃	3-1-4区		(4.5)		〃	波状口縁、外面2本の沈線、内面1条沈線、口縁内外ナデ調整、頸部外面は条痕+ナデ調整、頸部内面巻貝条痕。	〃
492	〃	3-1-4区IV層		(3.5)		〃	内外面ヘラ磨き。	〃
493	〃	3-1-4区バンク3		(5.2)		精土(角閃石、石英)	無刻目突帯。口縁下端をつまみ出し横ナデ調整して突帯状を呈する。外面煤ける。	IVD②c
494	〃	3-1-4区IV層		(4.0)		精土	口縁部内面段状の沈線。内外横ナデ調整。	IVB①b
495	〃	3-1-4区バンク3		(3.0)		〃	無刻目突帯。突帯は微隆起帯状を呈する。内外横ナデ調整。	IVC①b
496	〃	3-1-4区IV層		(4.2)		精土、石英他	無刻目突帯。内外面ナデ調整。	IVD①c
497	〃	〃		(2.9)		チャート他の粗粒砂を多く含む	〃	IVD①d
498	〃	3-1-4区バンク3		(2.6)		精土	無刻目突帯。口縁部内面に沈線。内面丁寧なナデ調整、外面はやや荒いナデ調整。	IVC③c
499	〃	3-1-4区IV下層		(4.4)		〃	無刻目突帯。内外面横ナデ調整。	IVD②b
500	〃	3-1-4区		(3.3)		〃	〃	IVC②c
501	〃	3-1-4区IV下層		(3.6)		〃	無刻目突帯。内外面荒い横ナデ調整。外面煤ける。	IVD②c
502	〃	〃		(4.0)		〃	無刻目突帯。内面沈線。内外面横ナデ調整。	IVC②c
503	〃	3-1-4区バンク3		(6.1)		精土(石英、長石)	無刻目突帯。内外面横ナデ調整。	IVD②c
504	〃	3-1-4区IV下層		(4.8)		精土	無刻目突帯。内面に沈線、内外面横ナデ調整。	IVC②c

表25 第3地点拡張区土器観察表⑮

遺物 番号	時期 器種	出土地点 層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	特徴	分類
505	縄文晩期 深鉢	3-14区 バンク3		(4.5)		〃	無刻目突帯。内面沈線。内外面ナデ調整。外面は激しく煤ける。	IVC②a
506	〃	3-14区 IV層		(4.6)		粗粒砂多し	無刻目突帯。内面横方向、外面縦方向のナデ調整。外面煤ける。	IVD③b
507	〃	3-14区 IV層		(4.8)		〃	内面ナデ調整、外面巻貝条痕。	VID②b
508	〃	3-14区 IV下層		(4.2)		〃	内外面ナデ調整。外面横方向二枚貝条痕。	VII D①b
509	〃	3-14区 IV層		(4.2)		〃	内外面ナデ調整。外面横方向二枚貝条痕。外面ナデ調整。	VII D②b
510	〃	3-14区 IV層		(2.5)		〃	内面ナデ調整、外面横方向状痕+ナデ調整。	VID①d
511	〃	〃		(3.2)		チャート、風化礫などの小礫、粗粒砂多し	内面太い条痕、外面巻貝条痕。	VID①a
512	〃	〃		(4.4)		粗粒砂を含む	内外面二枚貝条痕。	VII D①a
513	〃	〃		(6.0)		石英粒多し	内面巻貝条痕+ナデ調整、外面ナデ調整。外面煤け。	VID②d
514	〃	〃		(2.9)		粗粒砂を含む	口縁部に小さな突起が見られる。内外状痕。	VII D①a
515	〃	〃		(8.7)		チャートの粗粒砂多く含む	内面ナデ調整、外面二枚貝条痕。	VII D①b
516	〃	3-14区 IV下層		(4.4)		粗粒砂を含む	内外面二枚貝条痕。外面煤ける。	VII D①a
517	〃	〃		(6.1)		チャート他の粗粒砂、小礫多く含む	内外面横ナデ調整。	VII D②d
518	〃	3-14区 IV層		(4.6)		精土	内面ナデ調整、外面巻貝条痕。	VII D①b
519	〃	3-14区 バンク3	17.6	(9.1)		〃	内外面巻貝条痕+ナデ調整。	VID②d
520	〃	3-14区 IV層		(7.7)		チャートの小礫、粗粒砂を含む	内外面二枚貝条痕。	VII D①a
521	〃	〃		(6.2)		チャート他の小礫を含む	内外面ナデ調整。	VID①d
522	〃	3-14区 IV下層		(6.9)		チャートの小礫、粗粒砂を含む	内外面巻貝条痕+ナデ調整。	VII D①b
523	〃	〃		(3.6)		チャート他の粗粒砂、小礫多く含む	内外面二枚貝条痕。	VII D②a
524	〃	3-14区 IV層		(4.2)		粗粒砂を含む	内外面二枚貝条痕+ナデ調整。	IX①a
525	〃	3-14区 IV下層		(4.2)		〃	内外面巻貝条痕。	VII D②a
526	〃	〃		(5.5)		チャートの粗粒砂多く含む	〃	VII D②a
527	〃	〃		(5.9)		粗粒砂を多く含む	口縁部内外面に細い沈線。内面ナデ調整、外面巻貝条痕。	VC②b
528	〃	3-14区 IV層		(6.6)		チャート他の粗粒砂	内外面横ナデ調整、内面の下地には巻貝条痕を認む。	VII D①d
529	〃	〃		(6.3)		〃	内面ナデ調整、外面横方向条痕。	VII D①b
530	〃	3-14区 IV下層		(6.7)		赤色風化礫の粗粒砂、小礫を含む	内外面条痕、外面は細い原体と太い条理の原体の二種が使われている。内面は太い原体のみ。	VII D①a
531	〃	〃		(6.6)		粗粒砂を多く含む	内外面二枚貝条痕。	VII D①b
532	〃	〃	27.4	(8.2)		精土	内外面巻貝条痕+ナデ調整。	VII D②d
533	〃	3-14区	28.4	(9.0)		石英粒を含む	内外面ナデ調整。	X②d
534	〃	3-14区 IV層		(3.6)		チャート他の粗粒砂	内面ナデ調整、外面繊維束状の原体による横ナデ調整。	VIII①a
535	〃	3-14区		(4.4)		〃	内外面ハケ原体による横方向のナデ調整。	IX①d
536	〃	3-14区 IV層		(4.7)		チャートの小礫、粗粒砂を含む	内外面ナデ調整。外面には擦痕あり。	IX②d
537	〃	〃		(3.7)		粗粒砂を多く含む	内面ナデ調整、外面二枚貝条痕。	VID②b
538	〃	3-14区 IV下層		(2.5)		チャート、風化礫、粗粒砂を多く含む	内外面巻貝条痕。	VIII①a
539	〃	3-14区 IV層		(4.4)		チャート粗粒砂を多く含む	内面ナデ調整、外面二枚貝条痕。	VIII②a
540	〃	〃		(7.2)		チャートの粗粒砂を多く含む	内面ナデ調整、外面横方向の巻貝条痕+横ナデ調整。	VIII①b

表26 第3地点拡張区土器観察表⑩

遺物番号	時期器種	出土地点層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	特徴	分類
541	縄文晩期 深鉢	3-1-4区 IV層		(9.0)		風化礫を多く含む	内外面ナデ調整。	VII②d
542	〃	3-1-4区 IV下層		(4.4)		チャートの小礫、粗粒砂を含む	内面ナデ調整、外面横方向の巻貝条痕+横ナデ調整。	VII①d
543	〃	〃		(4.7)		粗粒砂を含む	〃	〃
544	〃	3-1-4区 IV層		(4.5)		チャート、風化礫、粗粒砂を多く含む	内外面横方向巻貝条痕。	VII①a
545	〃	〃		(5.7)		チャート他の粗粒砂	内面横方向巻貝条痕、外面は横方向巻貝条痕+ナデ調整。	VII②d
546	〃	〃		(6.3)		チャートの粗粒砂	内外横方向のヘラ磨き。	VII②a
547	〃	3-1-4区 IV下層		(9.5)		粗粒砂を含む	内面右下がり巻貝条痕+ナデ調整、外面右下がり巻貝条痕。	VII①b
548	〃	3-1-4区 バンク3	25.0	(7.9)		チャートの粗粒砂を含む	内外面巻貝条痕+ナデ調整。	VII①d
549	〃	3-1-4区 IV下層		(9.5)		チャート他の粗粒砂	内面ナデ調整、外面右下がり巻貝条痕。	VII①b
550	〃	3-1-4区 IV層		(13.0)		チャートの粗粒砂を多く含む	内面ハケ状原体による横ナデ調整、外面二枚貝条痕+ハケ状原体によるナデ調整。	
551	〃	〃		(7.6)		チャート他の粗粒砂	外面は器表の凹凸が激しい、内外ナデ調整。	IX②d
552	〃	〃		(6.3)		粗粒砂を多く含む	内外面ナデ調整。	〃
553	〃	3-1-4区 B		(6.6)		石英、細粗粒砂を含む	内面ナデ調整、外面二枚貝条痕。	IX②b
554	〃	3-1-4区 バンク3		(5.1)		チャートの粗粒砂を多く含む	内外面二枚貝条痕。	IX①b
555	〃	3-1-4区 IV層		(3.3)		精土	内面ナデ調整、外面二枚貝条痕。	VII①b
556	〃	3-1-4区 IV層	35.6	(6.8)		小礫を多く含む	内面ナデ調整、外面巻貝条痕+横ナデ調整。焼成後に径6mmの孔を穿つ。	VII②d
557	〃	3-1-4区 IV下層		(2.8)		粗粒砂を含む	粗粒砂を含む	VII①a
558	〃	3-1-4区 IV層		(5.1)		チャート他の粗粒砂を多く含む	刻目突帯、突帯は断面三角で大きい、口唇部にも刻目、外面擦痕。	XII A ③a
559	〃	〃		(1.7)	13.4	チャートの小礫を多く含む	平底。内外面ナデ調整。	
560	〃	〃		(2.4)	7.7	チャートの小礫、粗粒砂を含む	上底。内外面ナデ調整。	
561	〃	3-1-4区 バンク3		(3.2)	9.2	精土	〃	
562	〃	3-1-4区 IV層		(2.8)	6.6	チャートの小礫、粗粒砂を含む	〃	
563	〃	3-1-4区 IV層		(4.9)	7.4	チャートの小礫を多く含む	上底。内面ナデ調整、外面粗雑なナデ調整により器表に凹凸。	
564	〃	3-1-4区 IV下層		(3.8)	7.1	チャート、風化礫、粗粒砂を多く含む	上底。内面ナデ調整、倍面巻貝条痕+ナデ調整、外底は丁寧なナデ調整。	
565	〃	3-1-4区 IV層		(3.9)	8.8	チャートの粗粒砂を含む	上底。内外面ナデ調整。	
566	〃	3-1-4区 IV層		(3.9)	9.6	チャートの粗粒砂多し	上底。内外面ナデ調整。	
567	〃	3-1-4区 バンク3		(7.9)	6.8	石英、長石、雲母を多く含む	平底。内外面ナデ調整。内面は底部から3cm程上から帯状に煤ける。	
568	〃	3-1-4区 IV層		(5.0)	7.2	チャート、頁岩粗粒を含む	上底。内外面ナデ調整。	
569	〃	〃		(4.9)	8.8	精土(長石、石英)	上底。内外面ナデ調整。	
570	〃	〃		(5.4)	8.2	粗粒砂を含む	上底。外面縦方向の二枚貝条痕、内面ナデ調整。	
571	縄文晩期 浅鉢	3-1-4区 IV層		(3.4)		精土	口縁部外面沈線。内外面丁寧なヘラ磨き。	A II a①
572	〃	〃		(3.1)		〃	粘土紐接合部で剥離。内外面丁寧なヘラ磨き。	A
573	〃	〃		(3.2)		〃	内外面丁寧なヘラ磨き。	〃
574	〃	3-1-4区 IV下層		(3.2)		〃	〃	〃
575	〃	〃		(3.0)		〃	粘土紐接合部で剥離。内外面丁寧なヘラ磨き。	〃
576	〃	3-1-4区 IV層		(3.1)		〃	内外面ヘラ磨き。	A II a④

表27 第3地点拡張区土器観察表⑰

遺物 番号	時期 器種	出土地点 層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	特徴	分類
577	縄文晩期 浅鉢	3-1-4区バ ンク3 VI層		(1.7)		〃	口縁部外面は凹状を呈する。内外面ヘラ磨き、下地に条痕。	A II b②
578	〃	3-1-4区IV 層		(1.6)		精土(角閃石を含む)	口縁部外面に沈線。内外ナデ調整。	A I a③
579	〃	〃		(2.9)		精土	内外面ヘラ磨き。	A
580	〃	3-1-4区 IV下層		(2.2)		精土(角閃石を含む)	口縁部内面肥厚、外面沈線。内外面ヘラ磨き。	A II b③
581	〃	3-1-4区 IV層		(2.8)		精土	口縁部外面に細い沈線。内外面ヘラ磨き。外面に黒斑あり。	A II a③
582	〃	〃		(2.2)		〃	内外面細く丁寧なヘラ磨き。	A II b①
583	〃	〃		(2.4)		〃	口縁部外面沈線、内面肥厚し段をなす。内面ヘラ磨き、外面巻貝 条痕。外面は赤彩。	A II b③
584	〃	3-1-4区 IV下層		(3.2)		〃	口縁部外面凹状、内外面ヘラ磨き。	A II b②
585	〃	3-1-4区 IV層		(3.5)		〃	口縁部外面細い沈線。胴部との接合部で剥離。内外ヘラ磨き。	A III b③
586	〃	〃		(5.1)		〃	口縁部内面肥厚、外面は抉り取るような断面V字の沈線。焼成後 径2.5mmの孔を内外から穿つ。内外面丁寧なヘラ磨き。	〃
587	〃	3-1-4区 IV下層		(3.6)		〃	口縁部外面凹状。内外面ヘラ磨き。	A II a①
588	〃	3-1-4区 IV層		(2.7)		〃	口縁部外面は削り出しによる沈線。内外ヘラ磨き。	〃
589	〃	〃		(3.3)		精土(角閃石を含む)	口縁部外面沈線。内外面ヘラ磨き。	A II b③
590	〃	〃		(3.9)		精土	内外面巻貝条痕+ヘラ磨き	A
591	〃	〃				〃	口縁部内面肥厚。内外面ヘラ磨き。	A III b④
592	〃	〃		(6.5)		〃	内外面ヘラ磨き。	A
593	〃	〃		(2.7)		精土(角閃石を含む)	口縁部外面凹状。内外面ヘラ磨き。	A II a①
594	〃	〃	25.3	(1.6)		〃	口縁部内面に肥厚。内外面丁寧なヘラ磨き。外面に黒斑。	A II b①
595	〃	〃	27.4	2.7		頁岩の粗粒砂を含む	内外面ヘラ磨き。	A II a①
596	〃	〃		(5.8)		精土	内外面ヘラ磨き、下地の巻貝条痕を認む。	A III a⑤
597	〃	〃	36.7	(4.2)		精土(角閃石を含む)	口縁部内外面段状をなす。内外ヘラ磨き。	A II b①
598	〃	〃				精土	口縁部外面に沈線。内外面ヘラ磨き。	A II a①
599	〃	3-1-4区 IV下層	35.9	(4.0)		〃	口縁部外面凹状、内外面ヘラ磨き。	〃
600	〃	3-1-4区 IV層	20.6	(4.1)		精土(角閃石を含む)	口縁部外面沈線。内外面丁寧な細いヘラ磨き。	B II a③
601	〃	3-1-4区 VI下層		(1.4)		精土	口縁部外面沈線。内外面ヘラ磨き。	B I a③
602	〃	〃		(3.4)		〃	内外面ヘラ磨き。外面に黒斑あり。	C
603	〃	〃	24.3	(4.9)		〃	口縁部外面段状に削り出す。内外面丁寧な細いヘラ磨き。	B II a①
604	〃	〃	20.6	(5.1)		〃	口縁部外面下半を抉り沈線状を呈する。内外面ヘラ磨き。内外面 赤彩。	B I a①
605	〃	〃		(2.5)		〃	波状口縁、波頂部外面に凹点文、内面は段をなす。内外面ナデ調 整。	C I ①
606	〃	3-1-4区 IV層		(4.4)		〃	内外面ヘラ磨き。	C
607	〃	3-1-4区 IV下層		(4.0)		〃	胴部から鋭く屈曲して内湾しながら長い口縁部が立上がる。波状 口縁部。口縁部内面に段部。内外面ヘラ磨き。	D
608	〃	〃		(3.7)		〃	波状口縁部。外面はナデ調整後に4条のヘラ描き沈線、土手を残 す。内面は丁寧なヘラ磨き。	〃
609	〃	3-1-4区		(6.6)		〃	皿状の胴部から短い頸部が立ち上がり長い口縁部が伸びる。	〃
610	〃	3-1-4区 IV下層		(2.5)		チャート、頁岩粗粒を含む	口縁部内面肥厚し段状を呈する。内外面ナデ調整。	G①
611	〃	3-1-4区 最下層		(3.6)		精土	口縁部内面に太い沈線。内外面ヘラ磨き、下地に条痕を認む。	G③
612	〃	3-1-4区 IV層	31.5	(4.8)		〃	内傾して短く立上がる頸部から口縁部が直線的に伸びる。口縁部 内面に沈線。内外面ヘラ磨き。	E I ①

表28 第3地点拡張区土器観察表⑱

遺物番号	時期器種	出土地点層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	特徴	分類
613	縄文晩期浅鉢	3-1-4区IV層		(2.2)		チャート他の砂粒を含む	口縁部内面肥厚。内外面ヘラ磨き。	FⅢ②
614	〃	3-1-4区IV下層		(2.7)		精土	口縁部内面に段。内外面ヘラ磨き。	〃
615	〃	3-1-4区IV層		(2.1)		〃	口縁部内面に段、外面沈線。内外面ヘラ磨き。	FⅢ①
616	〃	〃		(3.5)		〃	内外面ヘラ磨き。	FⅠ②
617	〃	〃	14.0	(4.3)		チャート他の粗粒砂	算盤玉状の胴部、口縁部内面に沈線。内外ナデ調整。壺となる可能性あり。	FⅢ④
618	〃	〃		(2.9)		精土	口縁部内面肥厚。内外面ヘラ磨き。	FⅠ②
619	〃	〃		(2.0)		〃	口縁部は内面に鋭い稜をもって屈曲。内外面ヘラ磨き。	F
620	〃	〃		(3.4)		〃	波状口縁、上下に2本単位の沈線。口縁部内面は肥厚し段をなす。	M
621	〃	〃		(5.8)		〃	口縁部は外反、壺型の器形を有す。口縁部外面、頸胴界に1条の沈線を認む。	HⅠ
622	〃	〃		(2.6)		砂粒を含む	口縁部内面に沈線。内外面ナデ調整。	JⅠ②
623	〃	〃		(2.5)		精土	口縁部内面に沈線、外面には綾杉状の沈線を描く。外面赤彩。	
624	〃	3-1-4区IV層		(3.1)	9.0	精土(角閃石を含む)	底部。外底脇は弱い削り(左←右)、他の部位はナデ調整。	
625	弥生中期壺	3-1-4区バンク3V層	20.0	(4.1)		風化礫他の粗粒砂を多く含む	口唇部下端に刻目、その下に断面三角突帯貼付。内外面ナデ調整。	
626	〃	〃		(5.0)		粗粒砂を含む	口縁部内外面に幅8～10mmの扁平な粘土帯を貼付しハケ状原体の小口で刻む。頸部外面櫛描文を施す。	
627	〃	3-1-4区IV層		(4.2)		風化礫他の粗粒砂を多く含む	上胴部に微隆起帯を2条まで認む。	
628	弥生中期甕	3-1-4区バンク3		(5.0)		赤色風化礫の粗粒砂、小礫を含む	口縁部外面に1.5～2cmの粘土帯を貼付。頸部外面櫛描直線文。外面縦ハケ、内面横方向ハケ調整。	
629	弥生時代	3-1-4区IV層				精土	棒状土錘。残存長2.6cm、孔径0.5～0.7cm。	
630	縄文後期深鉢	3-1-4区		(3.5)		石英粒を多く含む	口縁部肥厚帯にLRの縄文。口唇には列点文。	ⅡB
631	縄文晩期深鉢	〃		(5.5)		精土	波状口縁部を有する。口縁部外面に2条の沈線。内外面丁寧なナデ調整。	ⅢA①
632	〃	〃				石英粒を多く含む	口縁部外面2条の沈線。頸部外面巻貝条痕+ナデ調整。	〃
633	〃	〃				精土	無刻目突帯。内外面ナデ調整。	ⅣD②c
634	〃	〃		(2.0)		チャート他の小礫粗粒砂	〃	ⅣD①c
635	〃	〃		(6.6)		精土	無刻目突帯。外面はハケ状原体によるナデ調整。内面はナデ調整。外面は激しく煤ける。	ⅣC②c
636	〃	〃	25.2	(7.8)		チャート他の粗粒砂多し	無刻目突帯。口縁部外面凹状粘土紐の接合痕を認む。	ⅣD②a
637	〃	〃		(4.4)		チャート他の粗粒砂多し	無刻目突帯。内外面横ナデ調整。	ⅣD①c
638	〃	〃	35.7	(6.4)		精土	無刻目突帯。口縁内外面、突帯上下強い横ナデ調整、頸内外面ナデ調整。	ⅣC②d
639	〃	〃		(4.9)		精土(石英、角閃石)	無刻目突帯。頸部内外面横ナデ調整、下地に巻貝条痕。	ⅣD②c
640	〃	〃	31.8	(13.1)		精土	無刻目突帯。口縁部内面沈線、頸胴部界に鈍い2条の沈線。口頸部外面巻貝条痕+ナデ調整、胴部外面巻貝条痕。	ⅣB②a
641	〃	3-1-4区IV層		(8.3)		〃	頸胴部界に2条の沈線。内外面ナデ調整。	
642	〃	3-1-4区		(4.3)		精土	内外面巻貝条痕、外面はナデ消す。	ⅦD②c
643	〃	〃		(6.3)		チャートの粗砂多し	口縁部内面沈線。外面は削り+ナデ調整、内面はナデ調整。	ⅥB①d
644	〃	〃		(8.7)		チャート他の粗粒砂多し	外面二枚貝条痕、内面ナデ調整。	ⅦD①b
645	〃	〃		(5.7)		〃	内外面横ナデ調整。外面煤ける。	X②d
646	〃	〃		(4.8)		チャートの粗砂多し	外面二枚貝条痕、内面ナデ調整。	ⅦD①b
647	〃	〃	28.4	(6.3)		粗粒砂多し	内外巻貝条痕。	V D①a
648	〃	〃	24.7	(7.2)		〃	内面ナデ調整、外面巻貝条痕。	ⅦD②d

表29 第3地点拡張区土器観察表⑨

遺物 番号	時期 器種	出土地点 層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	特徴	分類
649	縄文晩期 深鉢	3-1-4区		(3.5)		〃	内面ナデ調整、外面は繊維状の細い原体で横ナデ調整。	IX②d
650	〃	〃		(3.0)		チャートの粗粒砂を多く含む	内面ナデ調整。	VIII①d
651	〃	〃	13.4			小礫を多く含む	〃	IX②d
652	〃	〃	22.0	(10.6)		チャートの粗粒砂を多く含む	内面はハケ状原体によるナデ調整、外面ナデ調整。	VIII②d
653	〃	3-1-4区 IV層		(4.0)		チャートの小礫を多く含む	刻目突帯目、口唇部も刻目。内外面ナデ調整。	XII A③a
654	〃	3-1-4区 バンク3		(4.0)	6.8	チャートの粗粒砂を多く含む	上底。外面縦方向の二枚貝条痕、内面ナデ調整。	
655	〃	3-1-4区		4.1	7.8	精土	上底。内外面丁寧なナデ調整。	
656	〃	〃		(2.3)	5.2	粗粒砂多し	上底。ナデ調整。	
657	弥生土器 壺	3-1-4区バ ンク3 III層		(5.4)	9.0	チャート他の細粗粒砂を多く含む	外面丹塗り。	
658	縄文晩期 深鉢	3-1-4区		(6.5)	8.4	チャート他の粗粒砂を多く含む	外面に凹凸あり。内外面ナデ調整。	
659	縄文晩期 浅鉢	〃		(2.0)		細粒砂を多く含む	口縁部外面に沈線。器表の荒れが激しい。	A II b③
660	〃	〃		(1.7)		精土	口縁部外面に沈線。内外面ヘラ磨き。	B I a③
661	〃	〃		(3.9)		〃	口縁部外面に細い沈線。内外面ヘラ磨き。	A II a③
662	〃	3-1-4区 II層		(2.6)		細粒砂を多く含む	内外ヘラ磨き。	B II a④
663	〃	3-1-4区		(2.8)		精土(角閃石を含む)	口縁部内外面に段上に削る。	B I a①
664	〃	3-1-4区 バンク3		(4.2)		精土	口縁部内面に段、内外ヘラ磨き。	C I ①
665	弥生中期 壺	3-1-4区 II層		(6.0)		細粒砂を多く含む	外面7条の微隆起帯を貼付しその間に撫描直線文、円形浮文、棒状浮文を貼付する。	
666	土師器 甕	3-1-4区	27.2	(5.6)		チャート、赤色風化礫の小礫を含む。	口縁部内外面横方向のナデ調整、胴部内面ヘラ削り。	
667	弥生時代 土錘	3-1-4区 バンク3				風化礫他の粗粒砂を含む	棒状土錘。長7.0cm、幅2.2cm。重さ35.3g。孔径0.4～0.7cm。	
668	須恵器 蓋	3-1-4区	8.1	3.1		粗粒砂を多く含む	内外面横ナデ調整。	
669	近世陶磁器 碗	3-1-4区	11.4	6.7	6.0	白色精緻	能茶焼。肥前系染付け碗。	
670	縄文後期 深鉢	3-1-5区 II層		(3.9)		チャート粗粒を含む	口縁肥厚し外面にRL他はナデ仕上げ。	II B
671	縄文晩期 深鉢	3-1-5区バ ンク4 III層	19.0	(5.5)		チャート小礫を多く含む	内外面横ナデ調整。	IX①d
672	〃	3-1-5区バ ンク4 II層		(3.8)	8.2	チャートの小礫、粗粒砂を含む	上底。ナデ調整。	
673	〃	3-1-5区バ ンク4 III層		(1.5)	8.6	石英、長石粒を多く含む	〃	
674	〃	3-1-5区 II層		(3.3)	7.7	チャート他の粗粒砂	器表の荒れが激しい。	
675	縄文晩期 浅鉢	3-1-5区バ ンク4 III層	37.9	(4.1)		精土	口縁部外面に削り出し状の沈線。丁寧なヘラ磨き。赤彩。	A I a①
676	縄文晩期 深鉢	3-1-5区 SX2		(6.6)		精土	無刻目突帯。内面弱い沈線。内外面ナデ調整。外面煤ける。	IV C①c
677	〃	3-1-5区 SX1				〃	無刻目突帯。内面2条沈線。内外面横ナデ調整。煤ける。	IV C②c
678	〃	〃	26.0	(9.2)		〃	口縁部内面沈線、上胴部幅0.6cmの太い点線。頸外面ハケ状原体による荒いナデ調整。胴外面ヘラ磨き。	〃
679	〃	〃		(11.0)		チャート粗粒を含む	内外面ナデ調整。	
680	〃	〃		(5.4)		〃	内外面ナデ調整。下地に巻貝条痕を認む。	
681	〃	〃		(2.1)		チャートの細粗粒砂を含む	口縁部内外面ナデ調整。外面煤ける。	VII D①b
682	〃	3-1-5区 バンク4		(4.8)		チャート粗粒を含む	外面二枚貝条痕、内面横ナデ調整。	VII D①a
683	〃	3-1-5区 SX1		(4.6)		〃	内外面ナデ調整。	VII D②d
684	〃	〃		(5.0)		〃	〃	VI D①d

表30 第3地点拡張区土器観察表②

遺物番号	時期器種	出土地点層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	特徴	分類
685	縄文晩期深鉢	3-1-5区SX1		(3.3)		精土	内面ヘラ磨き、外面条痕+ナデ調整。	ⅦD②d
686	〃	〃		(3.7)		チャートの粗粒を多く含む	内面ナデ調整、外面二枚貝条痕。	ⅦD①b
687	〃	3-1-5区バンク4				砂粒を含む	内面横方向巻貝条痕、外面は横方向巻貝条痕+ナデ調整。	ⅦD①d
688	〃	3-1-5区SX1		(3.4)		チャート他の粗粒砂多し	内外面二枚貝条痕+横ナデ調整。	ⅦD②d
689	〃	3-1-5区バンク4	32.2	(4.8)		粗粒砂を含む	内面横方向の巻貝条痕、外面ナデ調整。	VB①d
690	〃	〃				粗粒砂を多く含む	口縁内外沈線、沈線は下方に押し付けるように施文。内外横方向ナデ調整。	VC②d
691	〃	〃	35.0	7.0		〃	内面ナデ調整、外面巻貝条痕。	ⅦD②b
692	〃	〃	32.4	(12.1)		小礫、粗粒砂を多く含む	内面強いハケ、外面ナデ調整。	ⅦD①d
693	〃	3-1-5区SX1		(11.2)	7.8	チャート、風化礫の小礫を含む	内面ナデ調整、外面二枚貝条痕。	
694	〃	3-1-5区バンク4Ⅵ層		(6.5)		チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む	内面ナデ調整、外面巻貝条痕。外面煤ける。	Ⅷ②b
695	〃	3-1-5区SX1		(3.8)		チャートの粗粒を多く含む	口縁部外面肥厚。内面ナデ調整、外面擦痕。	XI②b
696	〃	〃		(5.6)		〃	内外ナデ調整。	Ⅷ②d
697	〃	3-1-5区バンク4		(2.5)	6.6	砂粒を含む	上底。ナデ調整。	
698	〃	〃		(11.9)		チャート他の粗粒砂多し	口縁部が外方に突出。内外面巻貝条痕。	Ⅷ①a
699	〃	〃		(7.3)		〃	内外横方向を主体とする条痕。	
700	〃	〃	31.6	13.5		小礫、粗粒砂を多く含む	内外面二枚貝条痕、内面は条痕+ナデ調整。	ⅥD②a
701	〃	3-1-5区SX1	33.1	(16.1)		チャート、他の小礫、粗粒砂を多く含む	内外面巻貝条痕+ナデ調整。	Ⅷ①d
702	縄文晩期浅鉢	〃		(3.0)		精土	口縁部外面凹状、内外面ヘラ磨き。	AⅡb②
703	〃	〃		(2.8)		〃	内外ヘラ磨き。	A
704	〃	3-1-5区バンク4		(3.1)		粗粒砂を多く含む	〃	〃
705	〃	3-1-5区SX1		(3.0)		石英、角閃石を多く含む	口縁部内面肥厚、外面沈線。内外面ヘラ磨き。	AⅡb③
706	〃	〃		(2.8)		精土(角閃石を含む)	内外面丁寧なヘラ磨き。	AⅡa①
707	〃	〃		(3.3)		〃	〃	B
708	〃	〃		(2.1)		〃	口縁部外面2条の沈線、内外面ヘラ磨き。	G⑤
709	〃	〃		(2.2)		精土	口縁部内面に段、内外面ナデ調整。	CⅠ①
710	〃	〃		(2.2)		〃	口縁部外面沈線。内外面ヘラ磨き。	AⅡb③
711	〃	〃		(4.6)		〃	内外ヘラ磨き。	C
712	〃	〃		(3.0)		〃	口縁部内面肥厚、外面凹状。内外面丁寧なヘラ磨き。	AⅡb②
713	縄文晩期深鉢	3-1-5区SX2		(6.6)		チャート他の粗粒砂多し	口縁内面段をなす。口縁部内外面ナデ調整、頸部外面巻貝条痕。	ⅢB①
714	〃	〃		(5.0)		粗粒砂多し	口縁部外面2条の沈線。内外面ナデ調整。	ⅢA①
715	〃	〃		(6.5)		チャート他の粗粒砂	波頂部に楕円形の圧痕、口縁下圧痕端から2条の沈線が重弧文風に描かれる。内外巻貝条痕+ナデ調整。	〃
716	〃	〃		(5.0)		チャート他の粗粒砂多し	波状口縁を呈する。内面ナデ調整。	ⅢB②
717	〃	〃		(5.6)		精土(石英、長石)	口縁外面3条の沈線。内外丁寧なナデ調整。外面ははげしく煤ける。	ⅢA①
718	〃	〃		(7.1)		粗粒砂多し	口縁部外面に沈線。内面横巻貝条痕、外面ナデ調整。	VD①d
719	〃	〃		(3.2)		チャートの粗粒砂を多く含む	内面ナデ調整。外面は二枚貝条痕。外面煤ける。	Ⅷ②b
720	〃	〃		(5.1)		チャート、頁岩、粗粒砂を含む	口縁部内面抉り取るような沈線。内外面ナデ調整。外面煤ける。	VA①d

表31 第3地点拡張区土器観察表①

遺物 番号	時期 器種	出土地点 層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	特徴	分類
721	縄文晩期 深鉢	3-1-5区 SX2		(2.7)		チャート粗粒砂多し	口縁部内面2条の沈線。内外面ナデ調整。	VB①d
722	〃	〃	28.1	(6.4)		チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	内面ナデ調整、外面削り+ナデ調整。	VID②d
723	〃	〃		(7.7)		チャート粗粒砂多し	内面ナデ調整、外面巻貝条痕+ナデ調整。外面煤ける。	IX②b
724	〃	〃		(5.4)		〃	内外面巻貝条痕+ナデ調整、外面煤ける。	VIII②b
725	〃	〃	23.3	(6.4)		チャート、頁岩の小礫、粗粒砂を含む	〃	IX②d
726	〃	〃		(5.4)		チャートの粗粒を含む	刻目突帯目、口唇部も刻目。内面ナデ調整。頸部外面二枚貝条痕。	XIIA①b
727	〃	〃		(1.7)	7.8	精土	上底。ナデ調整。	
728	〃	〃		(2.8)	8.4	チャート、風化礫の粗粒砂を含む	上底。内外面ナデ調整。内底が煤ける。	
729	〃	〃		(2.3)	7.6	チャート粗粒砂多し	平底。内外面ナデ調整。	
730	縄文晩期 浅鉢	〃		(3.0)		精土	内外へラ磨き。	C
731	縄文後期 深鉢	3-1-5区 VII層		(3.2)		長石、石英、雲母粗粒	外面LR縄文地に3条の枕線。外面煤ける。片粕式土器。	IIA
732	縄文晩期 深鉢	3-1-5区 VI層		(3.2)		チャートの粗粒砂	内外面ナデ調整。	IVD①c
733	〃	3-1-5区パ ンク4VI層		(5.1)		チャート他の粗粒砂	内面ナデ調整、外面指頭によるナデ調整、器面に凹凸あり。	VII D①d
734	〃	〃		(4.7)		風化礫の粗粒砂を含む	内面ナデ調整、外面二枚貝条痕。	VII D②b
735	〃	3-1-5区 VII層		(3.6)		精土	内外面横方向ナデ調整。	〃
736	〃	3-1-5区パ ンク4VII層		(10.0)		チャートの粗粒砂	内外面ナデ調整。内面の下地に条痕を認む。	VID①d
737	〃	3-1-5区 VII層		(6.9)		チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	内外面ナデ調整。	VID②d
738	〃	3-1-5区パ ンク4VII層		(9.4)		チャート粗粒砂多し	〃	VIII①d
739	〃	〃		(6.5)		〃	〃	〃
740	〃	〃		(4.3)		〃	口縁部僅かに肥厚、外面に条痕。	VII D①b
741	〃	〃		(4.6)		〃	内外面ナデ調整。	VIII②d
742	〃	〃		(9.8)		〃	〃	VIII①d
743	〃	3-1-5区パ ンク4VII層		(6.2)		チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	〃	VIII②d
744	〃	3-1-5区パ ンク4VII層		(6.2)		チャート他の粗粒砂	〃	〃
745	〃	〃		(4.5)		赤色風化礫の小礫を含む	〃	VIII①d
746	〃	〃		(6.7)		チャートの粗粒砂を含む	〃	〃
747	〃	3-1-5区パ ンク4VII層	40.5	(7.1)		チャートの粗粒砂多し	内外面ナデ調整。外面下地に横方向条痕を認む。	VID①d
748	〃	3-1-5区パ ンク4VII層	34.7	(19.6)		チャートの粗粒砂を含む	内外面ナデ調整。	VIII②d
749	〃	3-1-5区 VII層		(4.2)	8.1	精土	上底。内外面ナデ調整。	
750	〃	〃		(4.4)	8.4	チャートの粗粒砂多し	平底。内外面ナデ調整。	
751	〃	3-1-5区パ ンク4VII層		(3.3)	8.4	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む	上底。内外面ナデ調整。	
752	〃	3-1-5区 VII層		(2.4)	6.8	チャートの粗粒砂を含む	〃	
753	縄文晩期 浅鉢	3-1-5区パ ンク4VII層		(3.3)		〃	内外面へラ磨き、外面は下地に擦痕を認む。	A
754	〃	3-1-5区 VII層		(3.0)		〃	内外面へラ磨き。	〃
755	〃	3-1-5区 VI層		(3.3)		〃	〃	〃
756	〃	3-1-5区 VII層		(4.8)		〃	〃	〃

表32 第3地点拡張区土器観察表②

遺物番号	時期器種	出土地点層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	特徴	分類
757	縄文晩期 浅鉢	3-1-5区バ ンク4Ⅶ層		(3.4)		〃	口縁部外面凹状。内外面ヘラ磨き。外面に鋸歯状の黒斑がある。	AⅡa②
758	〃	3-1-5区 Ⅶ層	23.8	(2.9)		〃	口縁部外面に1条の沈線。内外面やや雑なヘラ磨き。	AⅡa③
759	〃	3-1-5区バ ンク4Ⅶ層	39.2	(7.0)		〃	口縁部外面凹状、内外面ヘラ磨き。	AⅡa②
760	〃	3-1-5区 Ⅶ層		(3.5)		〃	半円状の突起が付き、口縁部内面段がある。内外面ヘラ磨き。	FⅡ②
761	〃	〃		(3.2)		精土(角閃石を含む)	口縁部内面に段、外面は上下に2本ずつの沈線。粘土継接合部で剥離、内外面ヘラ磨き。	M
762	〃	3-1-5区バ ンク4Ⅶ層		(3.0)		〃	有文浅鉢。陽刻部分に1~2条の沈線を弧状に施す。内外面ヘラ磨き。榿原文様を有す。	
763	〃	〃		(4.0)		〃	外面平行沈線間を弧先で繋ぐ。内外面ヘラ磨き。	
764	〃	3-1-5区 Ⅶ層		(2.2)		精土	外面に4条まで沈線を認む。内外面ヘラ磨き。	G⑤
765	〃	3-1-5区 Ⅶ層		(3.4)		〃	口縁部外面太い凹線。内外面ヘラ磨き。	〃
766	〃	3-1-5区バ ンク4Ⅶ層		(3.0)		〃	内外ヘラ磨き。	FⅠ⑤
767	〃	3-1-5区 Ⅶ層		(2.5)		チャート他の粗粒砂多し	口縁部内面に段。内外面ナデ調整。	CⅠ②
768	〃	3-1-5区 Ⅶ層		(2.1)		精土	口縁部内外面に段。内外面ヘラ磨き。	I
769	〃	3-1-5区バ ンク4Ⅶ層		(5.1)		〃	波状口縁。内面下端に段部。内外ヘラ磨き。焼成後4mmの孔を穿つ。	DⅠ
770	〃	3-1-5区バ ンク4Ⅶ層	18.9	(7.5)		〃	碗状の体部から頸部は稜線を持って短く立上がり、口縁部は短く外反。内外面ヘラ磨き、赤彩。	EⅢ①
771	縄文晩期 深鉢	3-1-5区 Ⅷ層		(3.8)		〃	口縁外面2条の沈線。内面屈曲部にも弱い1条の沈線。内外面ハケ状原体による横方向ナデ調整。	ⅢA①
772	〃	3-1-5区		(3.4)		〃	口縁外面2条の沈線。内面は抉るように1条の沈線。内外面ナデ調整。	〃
773	〃	3-1-5区 Ⅷ層		(4.8)		石英、雲母粗粒	無刻目突帯。内面横方向ナデ調整、外面荒いナデ調整。	ⅣD②d
774	〃	3-1-5区		(4.1)		チャートの粗砂多し	無刻目突帯。内外面横ナデ調整。	ⅣD②c
775	〃	〃		(3.8)		精土	無刻目突帯。内面に抉り状の沈線。内外面横方向ナデ調整。	ⅣC①c
776	〃	〃		(4.1)		石英粗砂多し	無刻目突帯。内面に抉り状の沈線。内外面ナデ調整。	ⅣC③d
777	〃	〃		(3.5)		精土	無刻目突帯。内面2条の沈線。内面丁寧なナデ調整、外面ハケ状原体による横ナデ調整。	ⅣC①c
778	〃	3-1-5区 Ⅷ層		(5.1)		精土(石英、角閃石)	無刻目突帯。内面に抉り状の沈線。内外丁寧なナデ調整、外面煤ける。	ⅣC②d
779	〃	3-1-5区		(3.3)		精土	無刻目突帯。内面に抉り状に2条の沈線。内面丁寧なナデ調整、外面ハケ状原体による横ナデ調整。	ⅣC②c
780	〃	〃		(4.0)		〃	無刻目突帯。内面は2条の太い点線。内面丁寧なナデ調整、外面ハケ状原体による横ナデ調整。	ⅣC①a
781	〃	3-1-5区 Ⅷ層		(4.9)		石英粗粒砂多し	無刻目突帯。一次口縁の下端が突帯状を呈す。内外面やや荒い横ナデ調整。	ⅣD②c
782	〃	3-1-5区バ ンク4Ⅷ層		(5.5)		精土(石英、長石など)	無刻目突帯。内外面横ナデ調整。	〃
783	〃	3-1-5区 Ⅷ層		(7.1)		チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	内面横方向のハケ状原体によるナデ調整。外面は棒状工具による横方向の条痕が多条施される。	ⅦD①b
784	〃	3-1-5区		(5.5)		チャート他の粗粒砂	内面二枚貝条痕+ナデ調整、外面二枚貝条痕。	〃
785	〃	3-1-5区 Ⅷ層		(4.8)		チャートの粗砂多し	内外面ナデ調整。外面煤ける。	ⅦD②d
786	〃	〃		(5.4)		〃	内外面ナデ調整。	ⅦD①d
787	〃	〃		(3.9)		チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	内外面巻貝条痕、外面はその上に縦横の条線を付加している。	ⅦD①a
788	〃	〃		(5.3)		チャート、他の小礫、粗粒砂を多く含む	内外面二枚貝条痕。	〃
789	〃	〃		(4.2)		チャート、風化礫の粗粒砂を含む	内面横方向二枚貝条痕+ナデ調整、外面横方向二枚貝条痕。	ⅦD①b
790	〃	〃		(5.5)		〃	内外面二枚貝条痕。	ⅦD②a
791	〃	〃		(6.3)		チャートの粗粒砂多し	内外面横方向ナデ調整。	ⅦD①d
792	〃	〃		(5.0)		精土	内面ナデ調整、外面横方向条痕。	ⅦD①b

表33 第3地点拡張区土器観察表③

遺物番号	時期器種	出土地点層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	特徴	分類
793	縄文晩期深鉢	3-1-5区Ⅷ層		(6.7)		チャートの粗粒砂多し	内面ナデ調整、外面二枚貝条痕+ナデ調整。	ⅦD①b
794	〃	〃		(4.8)		チャート、他の粗粒砂多し	内外面二枚貝条痕。	ⅦD①a
795	〃	3-1-5区		(4.7)		チャートの粗粒砂多し	内面二枚貝条痕+ナデ調整、外面二枚貝条痕。外面煤ける。	〃
796	〃	〃		(8.2)		〃	内外面ナデ調整。大きく歪んでいる。	ⅦD①d
797	〃	3-1-5区Ⅷ層		(9.9)		〃	内面ハケ状原体による横方向ナデ調整、外面は二枚貝条痕。外面煤ける。	Ⅷ②b
798	〃	3-1-5区		(6.7)		〃	内外面ナデ調整。煤ける。	Ⅷ②d
799	〃	3-1-5区Ⅷ層		(4.3)		〃	内外面ナデ調整。	Ⅷ①d
800	〃	〃		(4.9)		〃	〃	XI②a
801	〃	〃		(6.0)		〃	内面ナデ調整、外面巻貝条痕。	Ⅷ①b
802	〃	3-1-5区		(11.5)		〃	上胴部で屈曲、内面ナデ調整、外面巻貝条痕+ナデ調整。	
803	〃	3-1-5区Ⅷ層		(4.4)		〃	上胴部で屈曲、屈曲部に1条の沈線。内外面ナデ調整。	
804	〃	3-1-5区		(3.8)		〃	胴部緩やかに屈曲、屈曲部に2条の沈線。内面と外面屈曲部下は巻貝条痕、屈曲部上はナデ調整。	
805	〃	〃		(3.2)		〃	刻目突帯目、口唇部も刻目。突帯下に2条の沈線。	XII A①c
806	〃	3-1-5区Ⅷ層		(3.2)		〃	口唇部に刺突状の刻目。内外ナデ調整。	X①d
807	〃	3-1-5区		(3.1)		風化礫の粗粒砂を含む	口唇部に刻目。ナデ調整。	IX②d
808	〃	〃		(3.1)		チャート、他の小礫、粗粒砂を多く含む	内外面二枚貝条痕。外面煤け。	
809	〃	3-1-5区Ⅷ層		(3.4)	4.7	チャートの粗粒砂多し	上底。内外面ナデ調整。	
810	〃	〃		(3.5)	7.6	〃	〃	
811	〃	〃		(4.0)	7.4	〃	平底。内外面ナデ調整。	
812	〃	3-1-5区		(3.9)	5.2	〃	上底。内面はハケ状原体による縦方向ナデ調整、外面ナデ調整。	
813	〃	〃		(4.1)	7.2	チャート、他の小礫、粗粒砂を多く含む	平底。内外面ナデ調整。	
814	〃	〃		(4.1)	5.8	チャートの粗粒砂多し	上底。内外面ナデ調整。	
815	〃	〃		(3.4)	8.4	〃	上底。内外面ナデ調整。外面煤ける。	
816	〃	〃		(4.1)	7.4	〃	〃	
817	〃	3-1-5区Ⅷ層		(5.0)	8.3	チャート、他の粗粒砂を含む	〃	
818	〃	〃		(3.6)	10.2	石英粒を含む	〃	
819	〃	3-1-5区		(3.9)	7.0	チャートの粗粒砂多し	上底。内面は指頭によるナデ調整、外面は条痕+ナデ調整、外底は丁寧なナデ調整。	
820	〃	3-1-5区Ⅷ層		(4.4)	7.8	〃	上底。底部内外面ナデ調整、下胴部外面二枚貝条痕。	
821	〃	3-1-5区		(6.4)	8.2	〃	上底。内面の一部に二枚貝条痕、他はナデ調整。	
822	〃	3-1-5区Ⅷ層		(4.0)	6.8	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	〃	
823	縄文晩期浅鉢	〃	26.5	(2.3)		精土(角閃石を含む)	口縁部外面は段状を呈す。内外面ヘラ磨き。	A II a①
824	〃	〃	21.4	(2.2)		〃	〃	〃
825	〃	〃	3.13	(1.9)		精土	〃	〃
826	〃	3-1-5区		(2.0)		精土(角閃石を含む)	口縁部内外面肥厚。内外面ヘラ磨き。	A III b③
827	〃	3-1-5区Ⅷ層		(3.1)		〃	口縁部内面肥厚、外面凹状を呈す。	A II b②
828	〃	〃		(3.3)		精土	口縁部内面弱い肥厚、内外面ヘラ磨き。	A II b④

表34 第3地点拡張区土器観察表②

遺物番号	時期器種	出土地点層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	特徴	分類
829	縄文晩期 浅鉢	3-1-5区 Ⅷ層		(2.5)		〃	口縁部外面は凹状を呈す。内外面ヘラ磨き。	A II a①
830	〃	〃	20.4	(4.5)		〃	〃	A II a②
831	〃	3-1-5区		(3.2)		〃	内外面ヘラ磨き。下部は粘土紐接合部で剥離。	A
832	〃	〃		(3.7)		精土(角閃石を含む)	内外面ヘラ磨き、下地の削りを認む。	〃
833	〃	〃		(5.0)		〃	内外面ヘラ磨き。外面に大きな黒斑あり。	〃
834	〃	3-1-5区 Ⅷ層	27.6	(4.5)		精土	口縁部外面段状を呈す。内外面ヘラ磨き。	A II a①
835	〃	3-1-5区	23.7	(6.5)		石英、角閃石などの細粒砂を多く含む	口縁部内面肥厚、外面凹状。内外面ヘラ磨き。	A II b②
836	〃	3-1-5区 Ⅷ層	26.5	(4.6)		精土(角閃石を含む)	口縁部外面をV字状に抉る。内外面ヘラ磨き。	A III b①
837	縄文晩期 浅鉢	3-1-5区		(5.0)		精土	内外面ヘラ磨き。	A
838	〃	3-1-5区	30.6	(6.1)		チャート他の粗粒砂多し	内外面ナデ調整。	C I②
839	〃	3-1-5区 Ⅷ層	19.4	(3.4)		精土	口縁部外面太い沈線。内外面ヘラ磨き。	B II b③
840	〃	〃	21.5	(2.5)		〃	口縁部内面に肥厚、外面は凹状。内外面丁寧なヘラ磨き。	B III b③
841	〃	〃		(2.7)		〃	口縁部外面凹状を呈す。内外面ヘラ磨き。	B II b②
842	〃	3-1-5区		(4.6)		砂粒を含む	内外面ヘラ磨き。	B
843	〃	3-1-5区 Ⅷ層		(2.8)		チャート他の粗粒砂多し	口縁部内面弱い段。内外面ナデ調整。	C I②
844	〃	〃		(4.1)		精土	外面に4条まで沈線を認む。内面ヘラ磨き、外面ナデ調整。	D
845	〃	〃		(3.4)		〃	短い頸部が内傾して立ち上がり口縁部は外反、口縁部内面は沈線。内外面ヘラ磨き。	E I③
846	〃	3-1-5区		(3.2)		粗粒砂を含む	口縁部内面に沈線。内外面ヘラ磨き。	〃
847	〃	〃		(2.4)		精土	口縁部内面肥厚、内外面ヘラ磨き。	G②
848	〃	3-1-5区 Ⅷ層		(4.7)		風化礫の粗粒砂を含む	口縁部内面の上と下に1条ずつの区画沈線、その中に右上がりの沈線を2~3本描く。壺となる可能性あり。	H I
849	〃	〃		(3.7)		精土	内外面ヘラ磨き。850と同一個体。	F
850	〃	〃		(4.1)		〃	〃	〃
851	〃	3-1-5区		(2.7)		〃	口縁部内面段。内外面ヘラ磨き、下地に巻貝条痕。	J II①
852	〃	〃		(1.3)	9.6	〃	底部。内外面ナデ調整。	
853	〃	3-1-5区 Ⅷ層		(1.5)	5.1	〃	内面ヘラ磨き、外面ナデ調整。	
854	弥生中期 壺	3-1-5区	25.0	(3.7)		石英、チャート、他の粗粒砂を多く含む	口唇部下端に細い刻目、口縁部外面に1条の微隆起帯を貼付し、櫛描直線文を配する。	
855	〃	3-1-5区バンク4ⅥⅦ層		(4.5)		風化礫の粗粒砂を含む	上胴部に断面三角形の微隆起帯を貼付。	
856	〃	3-1-5区 Ⅷ層		(3.6)		精土	上胴部に櫛描波状文、同廉状文、波状文を配す。櫛描は5条単位。	
857	〃	3-1-5区		(3.5)		細粒砂を多く含む	外面に櫛描波状文、同直線文、三角突帯を貼付。	
858	土師器 高杯脚	3-1-5区バンク4ⅥⅦ層		(6.8)	(11.7)	チャート、他の粗粒砂	杯部が挿入部から剥離欠損。ナデ調整。	
859	〃	〃		(7.2)	(11.1)	〃	柱状部内面にヘラ削り。	
860	須恵器 壺	3-1-5区 Ⅷ層		(9.6)	(4.8)	精土	内外横ナデ調整。	
861	須恵器 蓋	3-1-5区	9.8	(3.4)		〃	〃	
862	土師器 甕	〃		(7.0)		石英の粗粒を多く含む	脚端部内外横方向ナデ調整、体部外面は右下がりの荒いハケ調整。	
863	瓦器 碗	〃	15.8	(3.8)		砂粒を含む	口縁部内外横方向ナデ調整。体部外面指圧痕顕著。	
864	白磁 碗	〃		(2.0)	7.0	白色精緻	壺付を斜めに削っている。太宰府分類Ⅳ類底部。	

表35 第3地点拡張区土器観察表⑤

遺物 番号	時期 器種	出土地点 層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	特徴	分類
865	弥生時代 土錘	3-1-5区 Ⅷ層				風化礫の粗粒砂を含む	長さ6.2cm、幅2.5cm、厚さ1.8cm、重さ31.2g、孔径0.6cm。	
866	〃	〃				〃	残存長さ4.1cm、幅2.4cm、厚さ1.7cm、孔径0.6cm。	
867	縄文後期 深鉢	3-1-6区		(2.2)		石英、角閃石粒を多く含む	鐘崎式土器搬入品。口縁を外方に大きく肥厚させ上面に1条の沈線 を施しその内側に短沈線を連続施文。	II D
868	〃	3-1-6区バン ク5V層		(4.0)		長石粒などを含む	肩部外面LRの縄文+結節縄文。片粕式土器。	II B
869	〃	3-1-6区 Ⅶ層		(2.7)		石英粒を多く含む	口縁外面RLの縄文。頸部無文、内外ナデ調整。	II B
870	縄文晩期 深鉢	3-1-6区バン ク4IV層		(4.2)		精土	無刻目突帯。突帯をつまみ出して強く横ナデ調整。内外面横ナデ 調整。	IV D②c
871	〃	3-1-6区		(2.4)		チャート他の粗粒砂多し	無刻目突帯。外面に弱い三角形突帯、内面にふい沈線1条、内外ナ デ調整。	IV C②c
872	〃	〃		(4.2)		チャートの粗砂多し	内面はナデ調整、下半に擦痕。外面横方向二枚貝条痕。	VII D②b
873	〃	〃		(4.2)		〃	内面ナデ調整で下地に条痕、外面は二枚貝条痕。	VII D①b
874	〃	〃		(3.2)		チャート、風化礫の小礫を含む	口唇部にLのしっかりした刻目。外面横方向二枚貝条痕、内面ナ デ調整。	VII E②b
875	縄文晩期 深鉢	3-1-6区バン ク5X層		(4.3)		チャートの粗砂多し	内面ナデ調整で下地に条痕を認む、外面横方向二枚貝条痕。	VII D①b
876	〃	3-1-6区バン ク5ⅧⅠ層		(3.8)		チャートの小礫、粗粒砂を多く含 む	口唇部に深い刻目。内外面ナデ調整。	VII E②d
877	〃	3-1-6区		(6.3)		風化礫を含む	器表に凹凸が多く見られる。内外面ナデ調整。	VIII②d
878	〃	〃		(4.5)		チャートの小礫、粗粒砂を多く含 む	口唇部しっかりした面取り、内外ナデ調整。	VIII①d
879	〃	〃		(4.7)		チャート他の粗粒砂多し	内面ナデ調整、外面横方向の条線(原体不明)。	VII D①a
880	〃	〃		(5.0)		チャート他の粗粒砂多し	口唇部に細い刻目。内面ハケ状原体による横ナデ調整、下地に擦 痕あり。外面横方向条痕(原体不明)	VIII①d
881	〃	〃		(3.9)		チャートの粗砂多し	内面ナデ調整。外面二枚貝条痕。	VII D②d
882	〃	3-1-6区バン ク5Ⅰ層	27.5	(9.3)		〃	内外面二枚貝条痕+横ナデ調整。	VII D②d
883	〃	3-1-6区		(6.2)		〃	内外面ナデ調整。	VII D②d
884	〃	〃		(3.4)		風化礫、チャート粗粒砂を含む	内外面器表の荒れが激しい。	VII D②d
885	〃	3-1-6区バン ク5ⅧⅠ層		(5.4)		チャート他の粗粒砂多し	内面ナデ調整。外面二枚貝条痕+ナデ調整。	VII D②a
886	〃	3-1-6区バン ク5Ⅲ層		(5.3)		チャート、風化礫を多く含む	内外面ナデ調整。	VIII①d
887	〃	3-1-6区		(6.7)		チャートの粗砂多し	内面ナデ調整。外面横方向二枚貝条痕。	VIII①b
888	〃	〃		(5.5)		〃	内外横ナデ調整。外面煤ける。	VIII①d
889	〃	〃		(4.8)		〃	内面ナデ調整、外面巻貝条痕。	VIII①b
890	〃	3-1-6区 Ⅶ層		(3.6)		チャート、風化礫の粗粒砂を含む	内外面横方向二枚貝条痕。	VIII①a
891	〃	3-1-6区バン ク5Ⅷ層		(4.8)		チャートの粗砂多し	〃	VIII②a
892	〃	3-1-6区バン ク5Ⅲ層		(5.5)		チャート、風化礫の粗粒砂を含む	内面ナデ調整。外面二枚貝条痕。	VIII①b
893	〃	3-1-6区		(5.3)		チャートの粗砂多し	内面ナデ調整。外面煤ける。	〃
894	〃	3-1-6区バン ク5Ⅲ層		(5.5)		〃	内面ナデ調整。外面二枚貝条痕。	VIII①b
895	〃	3-1-6区 バンク5		(4.8)		チャートの小礫、粗粒砂を多く含 む	内外面巻貝条痕+ナデ調整。	IX②a
896	〃	3-1-6区バン ク5Ⅰ層		(2.9)		チャートの粗砂多し	内外面二枚貝条痕。	IX①a
897	〃	3-1-6区 バンク5		(4.0)		チャート他の粗粒多し	口縁内面段。内面及び口縁外面ナデ調整、頸部外面巻貝条痕。	III B①
898	〃	3-1-6区バン ク5Ⅰ層		(4.5)		チャート、風化礫の粗粒砂を含む	刻目突帯。口唇部も刻む。内外面横ナデ調整。外面煤ける。	XII A②c
899	〃	3-1-6区		(4.8)		チャートの粗砂多し	刻目突帯。口唇部も刻む。内面ナデ調整、外面二枚貝条痕。	〃
900	〃	〃		(3.5)		〃	刻目突帯。口唇部も刻む。内外面横ナデ調整。	XII A②b

表36 第3地点拡張区土器観察表②

遺物番号	時期器種	出土地点層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	特徴	分類
901	縄文晩期深鉢	3-1-6区		(3.0)		〃	刻目突帯。刻は刺突風。内外横ナデ調整、内面には繊維状原体による痕跡が見られる。	XII B①b
902	〃	3-1-6区バンク5Ⅸ層		(3.5)		チャート、風化礫の粗粒砂を含む	刻目突帯。口唇部も刻む。内外面横ナデ調整。外面煤ける。	XII A②b
903	〃	3-1-6区バンク5ⅩⅠ層		(5.4)	5.9	チャートの粗粒砂、風化礫を多く含む	上底。内外面ナデ調整。	
904	〃	〃		(3.7)	7.0	赤色チャートの粗粒砂を多く含む	上底。内外面ナデ調整。	
905	〃	3-1-6区バンク5ⅩⅠ層		(3.1)	9.2	チャート、風化礫の粗粒砂を含む	上底。内外面ナデ調整。	
906	〃	〃		(2.8)	8.0	チャートの粗砂多し	上底。内外面ナデ調整。	
907	〃	〃		(3.8)	6.8	チャート、頁岩などの粗粒砂を多く含む	上底。内面二枚貝条痕、外面ナデ調整。	
908	弥生土器底部	3-1-6区		(2.2)	10.8	チャート他の細粒砂を含む	外底に広葉樹木葉圧痕あり。	
909	縄文晩期浅鉢	〃		(2.8)		精土	口縁部内面沈線。内外面ヘラ磨き。	A III a⑥
910	〃	〃		(2.9)		〃	口縁部端部摘まみ上げ。内外面ヘラ磨き。	A IV
911	〃	〃		(1.9)		〃	口縁部内面肥厚。内面ヘラ磨き。	A III b④
912	〃	3-1-6区バンク5ⅩⅠ層		(2.5)		〃	口縁部は短く立上がる。内外面ヘラ磨き。	A II a④
951	縄文後期浅鉢	3-1-6区		(6.2)		〃	胴部外面2条の沈線、内面巻貝条痕+ナデ調整、外面はナデ調整。	
952	〃	〃		(5.3)		石英の粗粒を多く含む	外面条痕+沈線。	
953	〃	3-1-7区バンク6		(3.0)		精土(石英、角閃石細粒)	無刻目突帯。内外面丁寧なナデ調整。	IV D②c
954	〃	3-1-7区		(6.2)		精土(石英、長石細粒)	内面巻貝条痕+ナデ調整、外面条痕+ナデ調整、外面煤ける。	V D②a
955	〃	〃		(5.9)		チャート、他の粗粒砂を多く含む	内外面二枚貝条痕。	VI D②a
956	縄文晩期浅鉢	〃		(3.6)		精土	口縁部外面削り出し状の沈線。内外面ヘラ磨き。	A I a①
957	〃	〃		(4.1)		〃	口縁部内面肥厚、外面凹状。内外面ヘラ磨き。	A II b②
958	〃	〃		(4.9)		細粗粒砂を含む	内外面ヘラ磨き。	C
959	縄文晩期深鉢	〃		(2.1)	7.2	チャート、頁岩などの粗粒砂を多く含む	僅かに上底。内外面ナデ調整。	
960	弥生中期壺	〃	30.0	(10.5)		チャート、他の粗粒砂を多く含む	頸部下端に櫛描波状文。外面右下がり、内面横方向のハケ。	
961	〃	3-1-7区バンク6		(3.9)		精土	口縁部外面に幅1.5cmの粘土帯を貼付、口縁部上下に深い刻目を配す。内面横方向、外面縦方向のハケ。	
962	〃	〃		(1.9)		赤色風化礫の粗粒砂を含む	口縁部外面2cm幅の粘土帯を貼付、口唇部は格子の刻目を配す。口縁部内面ハケ状原体による列点文。外面縦ハケ。	
963	白磁碗	〃	18.1	(3.8)		白色精緻	太宰府分類V類。	
964	青磁碗	3-1-7区バンク6Ⅵ層	18.9	6.5	5.3	灰色精緻	内外面櫛目、内面口縁部下に界線1条。同安窯系。	
965	須恵器土鍾	3-1-7区バンク6Ⅷ層				精緻	長さ4.6cm、径1.8cm、口径0.5cm、重さ17.7g。	
966	縄文晩期深鉢	3-2区		(3.2)		チャートの粗砂多し	内外二枚貝条痕。外面煤ける。	VII D②b
967	〃	〃		(5.1)		石英粒を含む	口縁部外面2条の凹線。内外面横方向。	III c②
968	縄文中期深鉢	〃		(4.3)		石英砂粒多し	外面熱糸文。	
969	縄文晩期深鉢	〃		(2.9)		チャートの粗砂、小礫多し	刻目突帯。口唇部も刻む。内外面横ナデ調整。	XII A②a
970	〃	〃		(9.3)		チャートの粗砂多し	外面二枚貝条痕、内面は繊維状の原体によるナデ調整。	
971	〃	〃		(6.5)		チャート他の粗粒多し	口縁に突起を有し外面に指頭の圧痕が施され爪痕が明瞭に残る。内外二枚貝条痕+ヨコナデ。	V D②d
972	弥生中期壺	〃	20.4	(7.9)		石英、チャート、他の粗粒砂を含む	口縁部に太い刻目、頸部下半に櫛描麻状文と櫛描波状文を交互に施す。	
973	縄文晩期浅鉢	〃		(3.8)		精土	口頸部界と頸胴部界に沈線、屈曲部に刻目を施す。内外面ヘラ磨き。	H II
974	土製模造鏡	3-1-4区Ⅱ層				〃	径4.2cm、厚さ1.7cm、重さ20.4g。鏡面は突状を呈する。鈕上部が欠落、背面は指爪圧痕が顕著。	

表37 第3地点拡張区土器観察表㉔

遺物番号	時期器種	出土地点層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	特徴	分類
975	土製模造鏡	3-1-3区Ⅱ層				〃	径4.0cm、厚さ1.3cm、重さ13.8g。鏡面は突状を呈する。鈕上部が欠落、背面は指爪圧痕が顕著。	
976	〃	3-1-4区Ⅱ層				細粗粒砂を含む	鈕の孔2mm。鈕が残った細片、鏡面は突状を呈する。背面は指爪圧痕が顕著。	

表38 第3地点拡張区石器観察表①

遺物番号	器種	石材	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類	特徴
S 1	石鏃	サヌカイト	3-1-4区Ⅳ層	(2.2)	2.2	0.65	2.6	A類	
S 2	〃	〃	3-1-6区Ⅷ層	2.35	1.8	0.5	1.2	〃	
S 3	〃	〃	3-1-5区SX2	1.9	1.35	0.25	0.5	〃	
S 4	〃	〃	3-1-3区	(1.2)	1.4	0.25	0.3	〃	
S 5	〃	〃	3-1-4区SX1	(1.5)	1.45	0.35	0.6	〃	
S 6	〃	〃	3-1-4区Ⅵ層	1.25	1.05	0.2	0.2	〃	
S 7	〃	チャート	3-1-4区テラス2	2.15	1.7	0.3	0.9	B1類	
S 8	〃	サヌカイト	3-1-3区テラス	2.1	1.9	0.4	0.8	〃	
S 9	〃	〃	3-1-5区	1.55	1.6	0.25	0.6	〃	
S 10	〃	〃	3-1-4区	1.7	1.7	0.3	0.9	〃	
S 11	〃	〃	3-1-5区	(1.85)	1.35	0.3	0.9	〃	
S 12	〃	〃	3-1-5区Ⅶ層	2.1	1.1	0.35	0.6	〃	両面に主剝離面が広く残る。
S 13	〃	〃	3-1-4区テラス2	2.6	2.0	0.5	2.2	〃	
S 14	〃	〃	3-1-3区Ⅱ層	(1.6)	2.05	0.45	1.3	〃	
S 15	〃	チャート	3-1-4区Ⅵ層	(1.45)	1.45	0.2	0.5	〃	
S 16	〃	サヌカイト	3-1-3区	2.3	1.5	0.3	0.9	〃	
S 17	〃	〃	3-1-4区Ⅵ層	2.6	1.7	0.4	1.1	〃	平面駒形。
S 18	〃	〃	3-1-3区	(3.1)	1.2	0.4	1.5	〃	二上山
S 19	〃	〃	3-1-4区Ⅵ層	3.1	1.75	0.35	2.1	〃	
S 20	〃	〃	3-1-3区Ⅱ層	(2.5)	1.7	0.4	1.6	〃	
S 21	〃	〃	3-1-3区テラス	2.3	(1.6)	0.3	0.7	〃	
S 22	〃	〃	3-1-5区	2.95	1.5	0.5	1.6	〃	
S 23	〃	〃	3-1-5区Ⅶ層	1.75	1.7	0.3	0.8	〃	
S 24	〃	〃	3-1-3区テラス	1.8	1.45	0.21	0.6	〃	
S 25	〃	〃	3-1-4区Ⅳ層	2.7	1.6	0.45	1.4	〃	
S 26	〃	〃	3-1-4区	(1.8)	1.8	0.3	0.8	〃	
S 27	〃	チャート	3-1-4区Ⅷ層	2.05	1.6	0.45	1.3	〃	
S 28	〃	サヌカイト	3-1-5区	2.15	1.2	0.25	0.5	〃	平面駒形。
S 29	〃	〃	〃	2.2	1.4	0.25	0.6	〃	
S 30	〃	〃	3-1-3区テラス	1.8	1.2	0.4	0.8	〃	主剝離面が大きく残る。
S 31	〃	チャート	3-1-4区テラス3	(1.9)	1.8	0.3	0.9	B2類	
S 32	〃	〃	3-1-4区テラス2	(1.6)	2.05	0.45	1.3	〃	

表39 第3地点拡張区石器観察表②

遺物番号	器種	石材	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類	特徴
S 33	石鏃	サヌカイト	3-1-4区	(1.4)	2.0	0.4	0.6	〃	
S 34	〃	チャート	3-1-4区テラス3	(1.75)	1.65	2.5	0.6	〃	
S 35	〃	サヌカイト	3-1-4区テラス2	1.65	1.6	0.35	0.5	〃	
S 36	〃	〃	3-1-4区Ⅷ層	(1.6)	1.6	0.2	0.6	〃	
S 37	〃	〃	3-1-4区テラス4	(1.65)	1.6	1.3	0.9	〃	
S 38	〃	〃	3-1-5区Ⅶ層	(1.25)	1.75	0.25	0.5	〃	
S 39	〃	〃	〃	(1.4)	1.6	0.2	0.5	〃	
S 40	〃	〃	3-1-5区Ⅵ層	2.3	1.3	0.3	0.9	〃	
S 41	〃	〃	3-1-5区SX2	(1.2)	(1.3)	0.5	0.5	〃	
S 42	〃	〃	〃	1.4	1.2	0.2	0.3	〃	
S 43	〃	〃	3-1-4区テラス4	(1.5)	1.65	0.25	0.5	〃	
S 44	〃	〃	3-1-3区上層	2.0	1.45	0.4	0.9	〃	
S 45	〃	〃	3-1-5区	(1.9)	1.75	0.25	0.6	〃	
S 46	〃	〃	3-1-4区	(2.05)	2.05	0.3	1.2	〃	
S 47	〃	〃	3-1-5区Ⅶ層	2.4	1.8	0.3	1.0	〃	
S 48	〃	〃	3-1-4区	2.35	1.5	0.35	0.9	〃	
S 49	〃	〃	3-1-5区	(1.6)	2.0	0.35	1.0	〃	
S 50	〃	〃	3-1-4区Ⅵ層	2.1	1.9	0.3	0.7	〃	
S 51	〃	〃	3-1-5区Ⅶ層	(2.0)	1.75	0.25	0.6	〃	
S 52	〃	〃	3-2区	(2.7)	(1.5)	0.5	1.8	〃	
S 53	〃	〃	3-1-4区テラス2	2.55	1.6	0.3	1.0	〃	
S 54	〃	〃	3-1-5区Ⅶ層	2.15	1.3	0.25	0.5	〃	平面駒形。
S 55	〃	〃	3-1-3区上層	2.1	1.5	0.4	0.7	〃	激しく被熱赤変。
S 56	〃	〃	3-1-4区Ⅵ層	1.65	1.25	0.2	0.4	〃	片面に大きな主剥離面。
S 57	〃	〃	3-1-3区Ⅱ層	2.45	1.4	0.4	1.6	〃	〃
S 58	〃	チャート	3-1-5区SX 1	2.4	1.25	0.3	0.7	〃	
S 59	〃	サヌカイト	3-1-3区上層	2.35	1.5	0.3	1.2	〃	風化が激しい。
S 60	〃	〃	3-1-4区Ⅵ層	2.3	1.3	0.45	1.0	〃	
S 61	〃	〃	3-1-3区テラス	2.1	1.4	0.35	0.7	〃	片面に大きな主剥離面。
S 62	〃	〃	3-1-5区Ⅶ層	2.0	1.35	0.3	0.8	〃	〃
S 63	〃	〃	3-1-4区	2.45	2.0	0.3	1.1	〃	左右非対称。
S 64	〃	〃	3-1-5区SX2	1.5	1.4	0.25	0.5	〃	
S 65	〃	チャート	〃	2.55	1.6	0.25	1.2	B3類	
S 66	〃	〃	3-1-3区テラス	(1.5)	1.6	0.3	0.6	〃	
S 67	〃	サヌカイト	3-1-5区Ⅶ層	1.65	1.3	0.3	0.6	〃	
S 68	〃	〃	3-1-5区SX2	1.85	1.1	0.3	0.5	〃	白色化が進行。

表40 第3地点拡張区石器観察表③

遺物番号	器種	石材	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類	特徴
S 69	石鏃	サヌカイト	3-1-5区	(4.9)	2.0	0.5	4.1	C2類	基部欠損。
S 70	〃	〃	3-1-5区SX2	(1.25)	1.05	0.25	0.2	-	
S 71	〃	〃	3-1-3区	(1.7)	(1.1)	0.2	0.4	-	
S 72	〃	〃	3-1-4区	2.9	1.8	0.3	1.7	C1類	
S 73	〃	赤色頁岩	3-1-3区テラス	(2.25)	(1.9)	0.25	0.9	-	
S 74	石錐	サヌカイト	3-1-5区SX2	2.5	1.4	0.5	1.5		大きな主剥離面が残る。
S 75	伐採斧	結晶片岩	3-1-3区	(8.3)	4.7	3.0	180	B類	
S 76	〃	〃	3-2区	(7.0)	6.5	(1.7)	118	A類	扁平な両刃石斧、確認できる側縁は面取り。
S 77	〃	〃	3-1-3区IV層	(8.8)	(4.3)	(0.8)	42	〃	
S 78	〃	〃	3-1-4区テラス2	(8.8)	5.2	3.0	240	〃	側縁部面取り。
S 79	〃	緑色片岩	3-1-3区	(3.7)	4.9	3.15	103	B類	基部端面は丁寧に磨かれている。
S 80	〃	蛇文岩	3-1-3区上層	(7.2)	(6.4)	(1.4)	59	A類	細片。
S 81	〃	頁岩	3-1-5区	(3.7)	(3.4)	(0.7)	8	A類	
S 82	〃	蛇文岩	3-1-3区	(10.2)	6.1	3.4	350	〃	両側縁に敲打痕が顕著に見られる。
S 83	〃	頁岩	3-1-4区テラス2	(5.4)	5.9	0.8	36	A類	扁平な両刃石斧。
S 84	打製石斧	凝灰岩質 緑色岩	3-1-4区VI層	14.4	7.9	1.3	215	A類	刃部のみ研磨。
S 85	伐採斧	粘板岩	3-1-3区上層	(8.4)	4.2	1.7	99	A類	基部を含めて大部分が欠損剥離。
S 86	〃	蛇文岩	3-2区	(9.3)	(6.0)	(1.5)	131	〃	刃部が非対称となっている。後主面が大きく剥離している。
S 87	〃	結晶片岩	3-1-3区上層	(8.5)	(5.0)	(1.8)	94	〃	
S 88	〃	頁岩	3-1-4区IV層	(9.8)	6.2	3.4	300	B類	一方の側縁は面取りされている。
S 89	〃	結晶片岩	3-1-3区	(6.9)	6.9	4.0	300	〃	両側縁面取り。
S 90	〃	粘板岩	3-1-4区VI層	(9.4)	7.4	(0.9)	99	A類	
S 91	〃	結晶片岩	3-1-7区III層	(8.2)	6.7	4.1	291	B類	全面研磨されている。
S 92	〃	〃	3-1-3区	13.3	6.1	2.0	245	A類	扁平な自然礫を利用し刃部を研磨。
S 93	〃	〃	3-1-3区II層	13.6	6.1	4.0	560	B類	基部の一部が欠損するが、ほぼ完形である。
S 94	〃	結晶片岩	3-1-5区III層	(6.9)	4.5	1.1	45	A類	扁平な自然礫を利用し刃部を研磨。
S 95	〃	頁岩	3-1-4区テラス2	(4.8)	(5.7)	(0.5)	20	〃	細片。
S 96	〃	結晶片岩	3-1-4区	(4.0)	(3.8)	(0.6)	11	〃	側縁部研磨面取り。
S 97	打製石斧	チャート	〃	(5.8)	(5.8)	0.9	47	〃	側縁調整剥離。
S 98	伐採斧	頁岩	3-1-3区	(5.7)	(5.9)	(0.8)	30	〃	細片。
S 99	〃	結晶片岩	〃	(5.5)	6.8	(0.5)	31	〃	〃
S 100	打製石斧	緑色片岩	〃	(9.6)	6.4	1.3	126	〃	基部欠損。側縁調整剥離。
S 101	〃	頁岩	3-1-4区	13.0	5.1	0.8	78	〃	側縁調整剥離。
S 102	〃	凝灰岩質 緑色岩	3-1-3区テラス2	(11.0)	6.6	1.3	148	〃	刃部階段状剥離、側縁調整剥離。両主面研磨。
S 103	〃	結晶片岩	3-1-3区	(13.8)	8.9	0.8	158	〃	側縁調整剥離、主面一部研磨。
S 104	〃	頁岩	3-1-4区	(9.6)	7.7	1.0	101	〃	側縁調整剥離、刃部付近研磨。

表41 第3地点拡張区石器観察表④

遺物番号	器種	石材	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類	特徴
S 105	打製石斧	チャート	3-1-3区	12.4	4.2	1.5	121	ク	扁平短冊形の河原石を利用。
S 106	ク	結晶片岩	3-2区	13.0	5.2	1.4	120	ク	扁平な河原石を打製、一方の主面は自然面。
S 107	ク	頁岩	3-1-3区テラス1	9.0	4.8	0.7	54	ク	扁平な河原石の端部を加工している。
S 108	ク	結晶片岩	3-1-4区Ⅱ層	18.8	6.5	1.2	266	ク	ク
S 109	ク	頁岩	3-1-4区	11.0	4.9	1.5	82	ク	扁平な河原石を打製、一方の主面は自然面。
S 110	ク	ク	3-1-4区Ⅳ層	(10.5)	7.25	1.4	138	A類	ク
S 111	ク	ク	3-1-4区テラス2	(17.0)	8.0	1.1	203	ク	ク
S 112	ク	結晶片岩	3-1-3区テラス1	(18.0)	6.5	2.1	358	B類	ク
S 113	ク	粘板岩	3-1-5区Ⅵ層	(11.0)	6.0	0.75	65.6	ク	側縁を調整剥離。
S 114	ク	頁岩	3-1-5区	(9.0)	5.4	1.3	94	ク	刃部欠損、側縁調整剥離。
S 115	ク	結晶片岩	3-1-5区SD1	10.9	4.5	1.0	89	ク	側縁、刃部調整剥離。
S 116	ク	ク	3-1-4区	(11.2)	7.1	2.0	200	A類	刃部及び両側縁調整剥離。
S 117	ク	ク	3-1-3区テラス2	(8.3)	6.5	0.75	61	B類	刃部付近の細片。
S 118	ク	ク	3-1-4区	13.5	7.5	0.8	140	ク	刃部、側縁を調整剥離している。
S 119	ク	頁岩	ク	12.7	6.2	1.2	121	A類	刃部、側縁部両面から調整剥離。
S 120	ク	サヌカイト	3-1-6区	13.7	7.6	1.8	227	B類	刃部は片側から、側縁は両側から調整剥離。両面風化が激しく表面は白くなっている。
S 121	ク	頁岩	3-1-4区Ⅳ層	15.3	6.4	1.3	138	ク	河原石を打製、側縁を調整剥離している。
S 122	ク	ク	3-1-3区下層	(13.6)	7.7	1.3	157	ク	扁平な河原石を使用。
S 123	ク	ク	3-1-4区	(9.2)	6.1	0.9	68	ク	扁平な河原石を使用。側縁部は調整剥離。
S 124	ク	結晶片岩	3-1-5区	(11.9)	7.3	1.4	190.8	ク	両主面とも一部に研磨が見られる。
S 125	ク	頁岩	ク	(15.9)	8.4	1.2	237	A類	側縁、刃部は調整剥離。
S 126	ク	ク	3-1-4区Ⅳ層	(16.1)	9.2	0.7	154	B類	ク
S 127	加工斧	結晶片岩	3-1-4区テラス3	5.1	2.2	0.5	9.7	ク	扁平な河原石を使用、両刃。
S 128	ク	頁岩	3-1-4区	5.1	1.6	0.8	10.2	ク	細長い河原石を研磨して一端に刃部を付ける。
S 129	ク	結晶片岩	3-1-4区Ⅵ層	8.2	2.8	0.9	36.8	A類	全面研磨、断面カマボコ状を呈す。片刃。
S 130	ク	緑色岩	3-2区	5.9	3.3	0.7	18.1	B類	扁平な自然礫を使用、刃部のみ研磨。
S 131	ク	玄武岩	3-1-4区Ⅶ層	10.6	6.4	2.4	294.1	A類	全面研磨、側縁面取り、後主面両側縁に凹み。
S 132	石包丁	頁岩	3-2区	(5.4)	(5.5)	0.8	38		全面研磨、僅かに外湾、片刃。
S 133	ク	砂岩	3-1-7区	9.5	4.0	1.0	49.9		ク
S 134	ク	結晶片岩	3-1-5区	(9.1)	4.5	1.0	64.8		打製、一方の主面に自然面、側縁に抉り。
S 135	ク	砂岩	3-1-6区	7.6	5.2	0.7	42.3		打製、側縁に抉り。
S 136	ク	チャート	3-1-3区SX2	9.7	4.7	1.5	92.5		打製、刃部・背部に細かな調整剥離。
S 137	ク	粘板岩	3-1-3区	6.5	4.5	0.8	26.4		打製、両側縁に抉り。
S 138	ク	頁岩	3-1-7区	10.1	6.4	1.6	134.4		打製、側縁に抉り。
S 139	ク	凝灰岩質 緑色片岩	3-2区	(8.7)	6.2	1.3	109.8		打製、磨製石包丁の未製品の可能性あり。
S 140	刃器	サヌカイト	3-1-5区	(6.8)	4.5	0.8	29.6		両側縁から刃部が作り出されている。

表42 第3地点拡張区石器観察表⑤

遺物 番号	器種	石材	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類	特徴
S 141	刃器	サヌカイト	3-1-4区Ⅵ層	(3.2)	(4.9)	0.7	11.5		長側縁に細かな剥離。
S 142	〃	〃	3-1-3区	(4.5)	6.3	1.1	21.1		長側縁と他の側縁に細かな剥離。
S 143	〃	〃	〃	(4.9)	(6.1)	0.7	22.8		両側縁から刃部が作り出されている。
S 144	〃	〃	3-1-1区	(7.1)	(4.3)	1.1	23.7		〃
S 145	石棒	結晶片岩	3-1-3区	(15.9)	3.7	2.3	223.2		器面は研磨、破損部に沈線が見られる。
S 146	叩石	緑色岩	3-2区	(15.9)	4.6	2.6	354.5		両主面に痘痕状の敲打痕。
S 147	石錘	チャート	3-1-3区	8.4	6.4	2.9	228.4		打欠石錘。
S 148	叩石	細粒花崗岩	3-1-7区	10.6	9.4	5.6	760		両主面中央部が凹む。
S 149	〃	砂岩	3-1-4区	(10.6)	8.5	2.1	216.9		河原石を打裂。
S 150	〃	細粒花崗岩	3-1-6区	9.0	8.3	5.3	564.8		両主面中央部が大きく凹む。
S 151	〃	硬質砂岩	3-1-3区	10.8	7.3	3.9	472.3		各面に敲打痕あり。
S 152	〃	細粒花崗岩	〃	10.9	8.1	4.7	600		両主面中央部が大きく凹む。
S 153	〃	砂岩	3-1-7区	11.4	8.7	5.3	710		両主面中央部、側縁に敲打痕。
S 154	〃	〃	3-1-2区	11.3	8.6	6.7	840		一方の主面に敲打痕。
S 155	石錘	頁岩	3-1-6区	7.9	6.7	2.3	152.2		打欠石錘。
S 156	砥石?	軽石	3-1-4区Ⅷ層	(6.9)	(5.4)	4.4	39.4		
S 157	小玉	結晶片岩様 緑色岩	3-1-5区SX2	径1.1		0.5	1.1		丸味を持っている。径0.25cmの小孔を穿孔。
S 158	〃	〃	3-1-5区Ⅶ層	径0.75		0.2~0.3	0.2		丸味を持っている。径0.25cmの小孔を穿孔。
S 159	〃	〃	〃	径0.5		0.1~0.2	0.1		丸味を持っている。径0.15cmの小孔を穿孔。
S 160	〃	〃	3-1-5区SX2	径(0.55)			0.1		丸味を持っている。径0.15cmの小孔を穿孔。
S 161	管玉	〃	3-1-4区Ⅷ層	長さ0.85		最大径 0.45	0.3		エンタシス状を呈し僅かに面取りを施す。0.1~0.2cmの小孔を両側から穿つ。
S 162	勾玉	〃	3-1-4区Ⅷ層	長さ2.1		1.5	1.9		穿孔部が欠損、断面は方形状を呈する。コ字形の勾玉である。
S 163	白玉	緑泥石片岩	3-1-3区テラス1	長さ0.5		径0.5	0.2		円柱状を呈し径0.2cmの小孔を穿つ。両端が欠損している可能性あり。

第Ⅳ章 第6地点

1 調査区の概要

第6地点は新居城の山腹(南側斜面)に位置する。新居城の「詰め」の標高は41 mで平野部との比高差は38m程である。新居城は1960年代に行われた公園造営工事や道路敷設工事によって大部分が破壊されており、現状で確認できる遺構は「詰め」の一部と東側斜面の縦堀のみである。公園化に伴い発掘調査が行われたという伝えがあるが詳細は不明である。城関連の遺構とは別に南斜面東部にある細尾根に沿うように南北方向に伸びる交通壕を確認することができた。旧日本軍による本土決戦陣地である。

第6地点の調査は、南側斜面に残る僅かな平場に4個のトレンチを設定し、遺物・遺構の有無や土層観察を行った後、半ば埋没している交通壕を完掘し写真測量を行った。

2 トレンチ調査

(1)TR1-1

公園造営時に削平されたと見られる60 m²程の平場に設けた5 × 5 mのトレンチである。表土直下から黄褐色風化礫による地山層である。

(2)TR1-2

東西方向に伸びる狭いテラス状地形に設けた1 × 10 mのトレンチである。ここでも表土直下から地山層がでた。

(3)TR2

斜面の東寄りで僅かに湾曲している部分が認められ、縦堀の可能性を期待してトレンチを設定した。長さ16 m、幅1～4 mのトレンチである。層準は図示したように縦堀と考えられるような落ち込みは認められなかったが、北壁で柱穴状の落ち込みが二箇所で見られた。西側の落ち込みは幅40cm、深さ50cmを測るが明らかに近現代に属する。中から図示したように鉄板が出土した。その東側のⅡ層の落ち込みからは白磁皿(3)と常滑の甕と見られる陶器片(4)が出土した。Ⅳ層からは東播系捏鉢(2)と砥石(5)が出土している。後者の石材は砂岩である。この他、近世磁器細片(1)と弥生土器細片が出土している。

3 陣地跡

1945年アジア・太平洋戦争末期、本土決戦に備えて旧日本軍が作ったものである。城山の詰めから少し下がったところから南北方向に30 mほど伸びる尾根上に作られている。尾根の南端の標高は28.5 m、北端の付根部では30.0 mで、下の平地との比高差は26 m前後を測る。眼下に仁淀川河口から土佐湾を臨むことができる。

陣地跡は、南北方向に伸びる通路状の遺構とそれに直交して枝状に派生した遺構とに分かれる。便宜上前者を①、後者を②～⑦と呼称する。①は、軸線を少しずつ左右に振りながら南北方向に伸びており延長21.5 mを測る。南端部は尾根の先端近くまで伸びているが、北端は電柱や公園造営時に壊されている。本来はもっと北側に伸びていたものと考えられる。幅は0.7～0.8 m、掘削面からの深さは1m前後を測り、掘削土を両側に盛上げて掩体を作っている。盛土はかなり流出しているもの

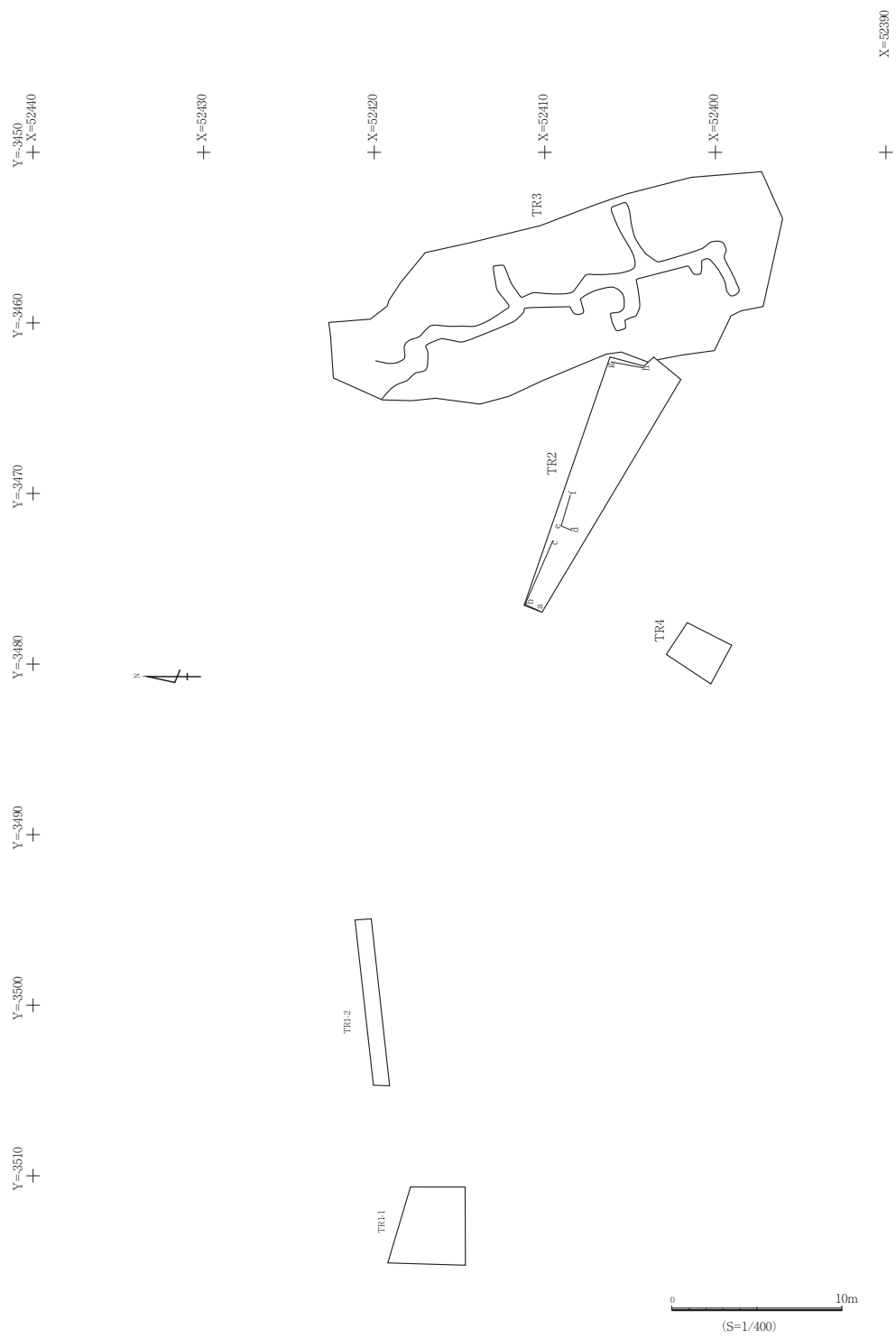


Fig.114 第6 地点調査区位置図

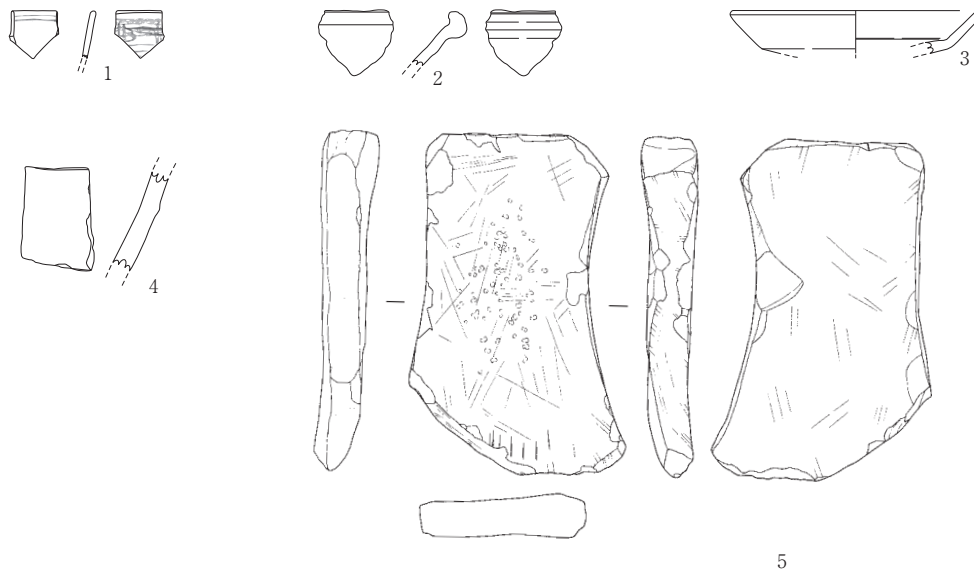
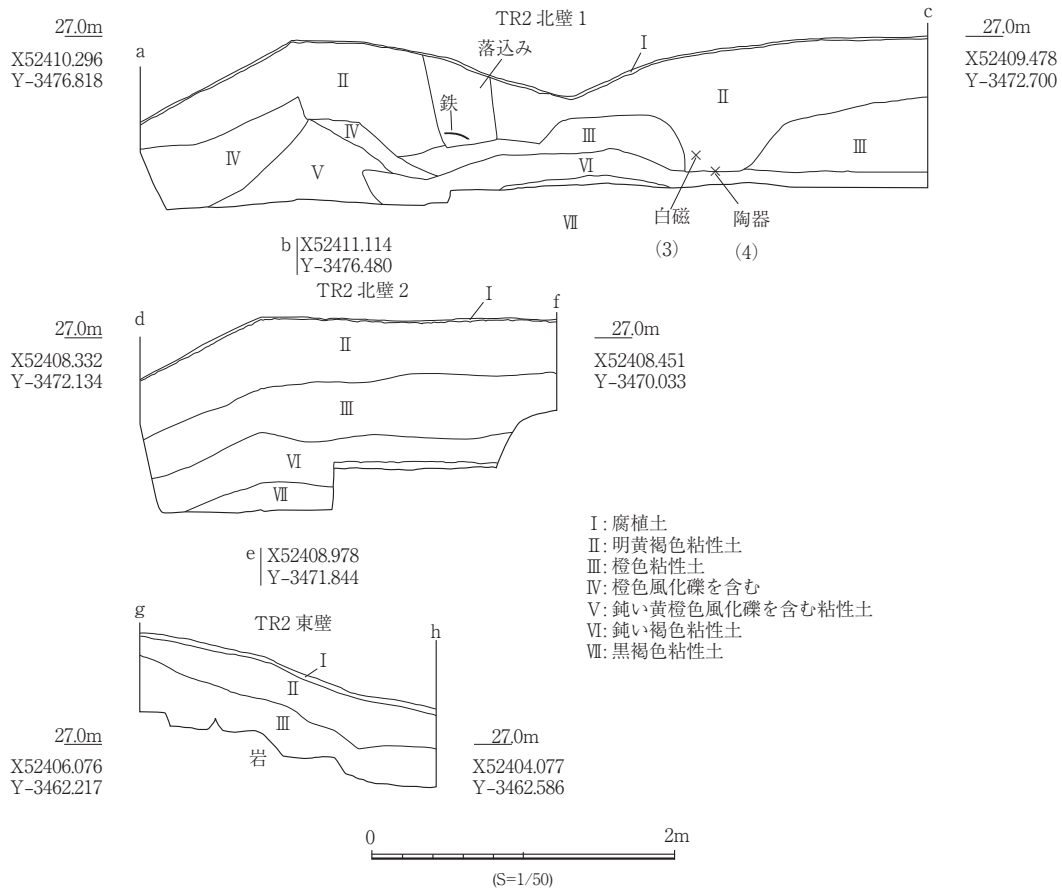


Fig.115 TR2 セクション・出土遺物

0 10cm

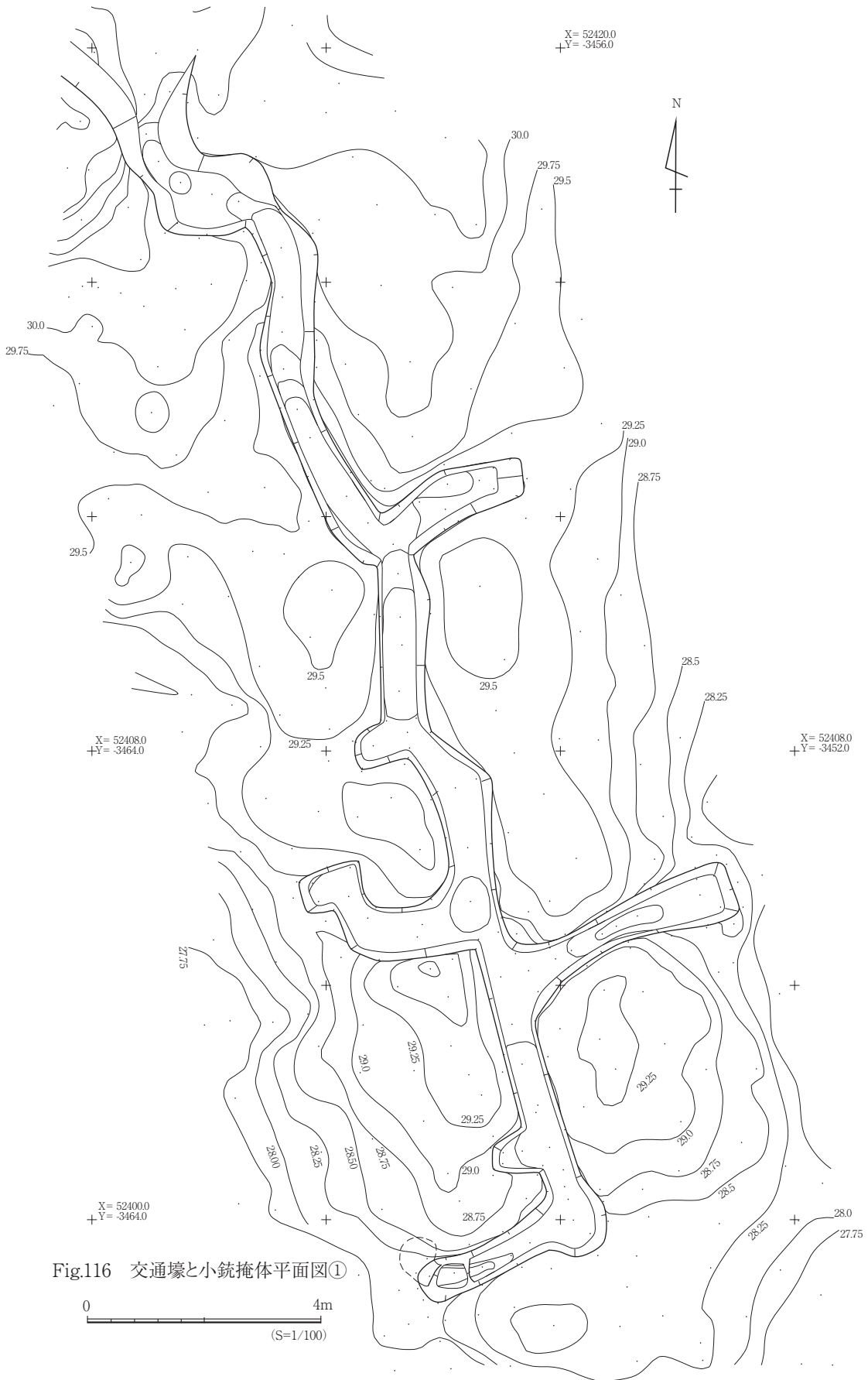


Fig.116 交通壕と小銃掩体平面図①

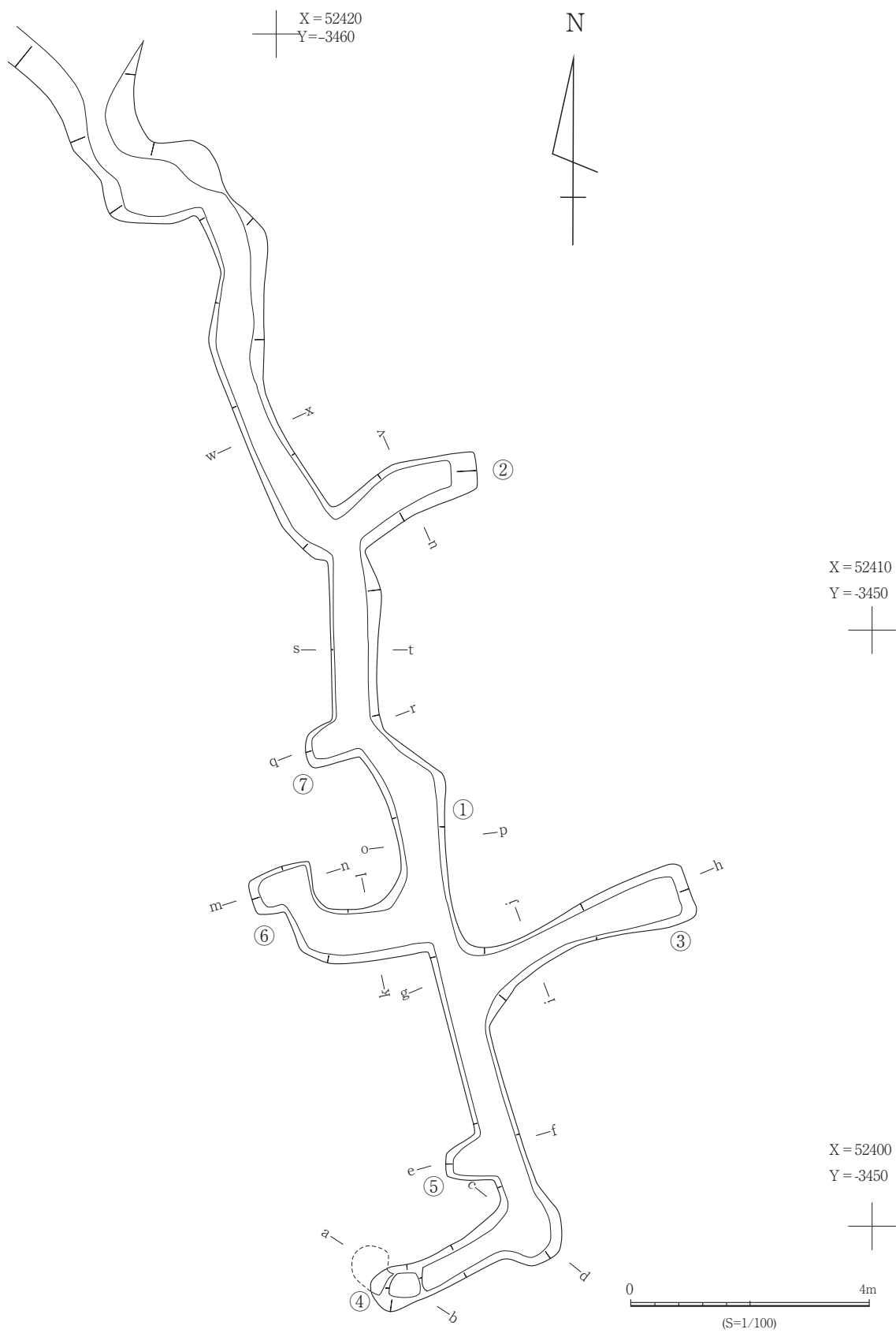


Fig.117 交通塚と小銃掩体平面図②

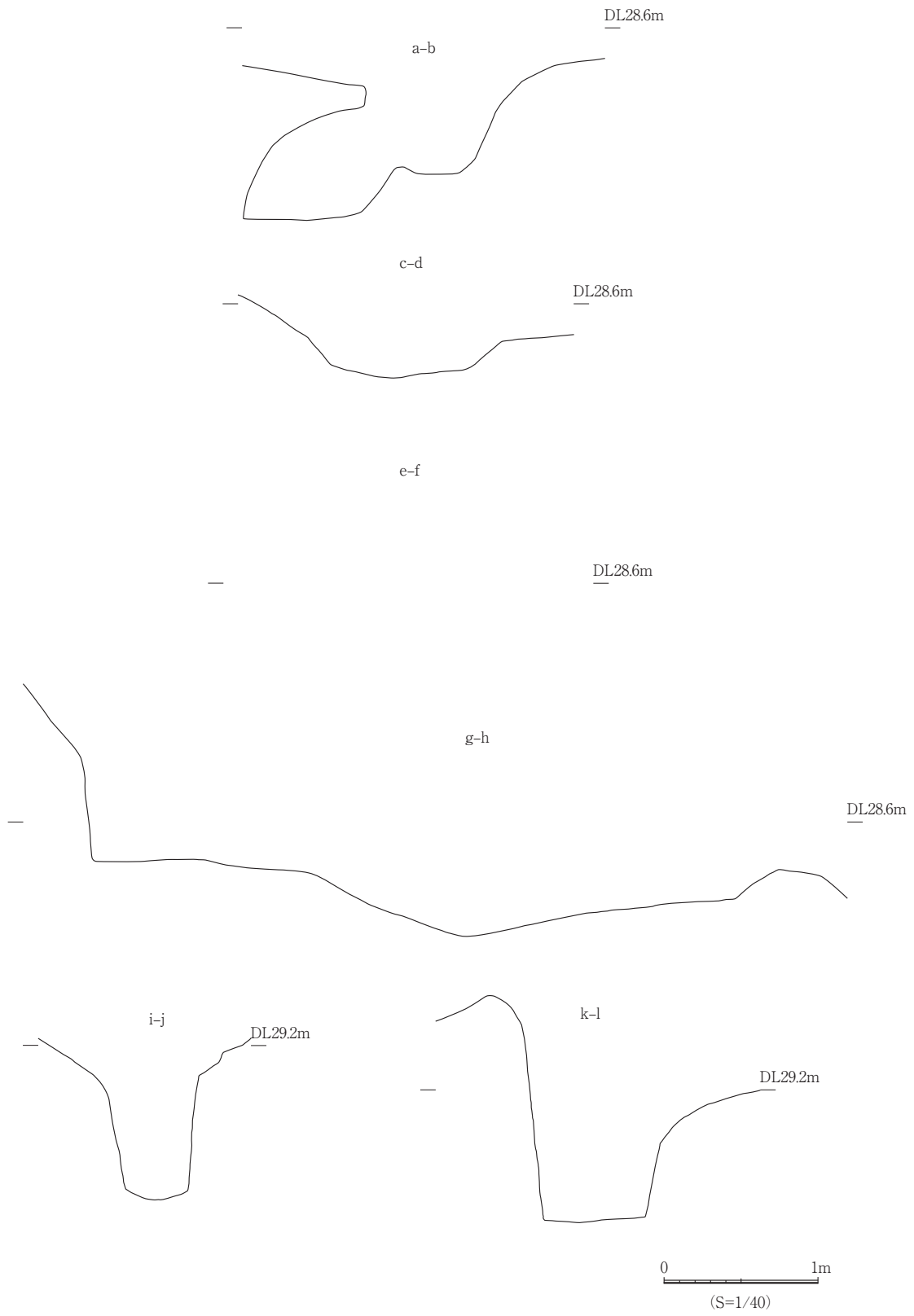


Fig.118 交通壕及び小銃掩体エレベーション①

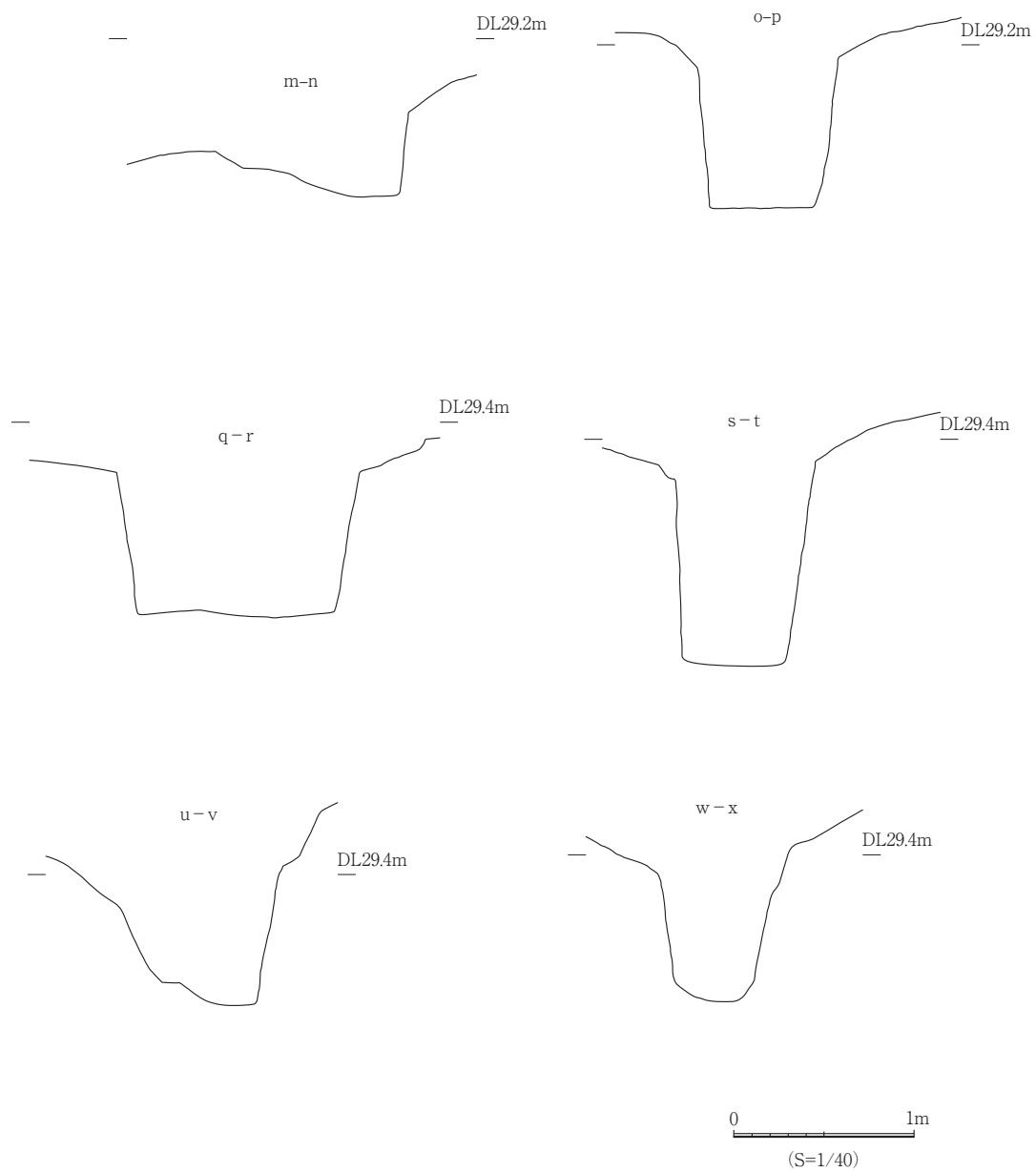


Fig.119 交通壕及び小銃掩体エレベーション②

と考えられるが横断s-tでは1.7mを測る。本来はもっと深かったことが想定される。風化礫層を垂直に掘っており断面は箱形を呈するが、壁面の崩れはほとんど見られない。

②は長さ2.5m、幅0.7～0.8m、深さは掘削面から約1m前後を測る。③は長さ4.0m、幅0.6～1.0mで中程が狭くなっている。狭くなっているところから東は図示(横断g-h)したように床面が30cm程深くなり、再び緩やかに上がっている。東端の深さは30cm前後と他の例に比べて著しく浅い。④は南端に位置する。長さ2.8m、幅0.7m、掘削面からの深さは0.5m前後である。④には西端に大きくオーバーハングした横穴が掘られている。床面から0.4m程深く掘られており横穴の奥行きは0.8m、高さは入り口付近で0.7mを図り断面ドーム状(横断a-b)を呈する。⑤は長さ0.7m、幅0.5～0.7mを測る台形状の張り出しである。⑥は入り口幅1.0m、長さ2.0mを測り端部が北に短く屈曲し0.6×1.0mの長方形に掘削されている。⑦は⑤に類似する。入口幅0.7m、長さ0.8m、掘削面からの深さは0.9mである。

4 小結

②～④・⑥はその構造から見て小銃掩体、①はそれらを結ぶ交通壕、⑤・⑦は交通壕脇に設けられた待避所と考えられる。④のドーム状横穴は一人がしゃがみ込めるくらいの大きさであり待避壕的な遺構と考えられる。戦争末期、この付近には第11師団隷下の歩兵第44連隊第1大隊が布陣しており、新居城周辺には第1中隊が展開していた。中隊本部は現在の新居小学校におかれていた。元兵士の証言によれば、この陣地は第1中隊によって構築されたもので、仁淀川沿いに前進してくる「敵」を想定して構築したということである。

第V章 自然科学分析

1 上ノ村遺跡出土骨の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社
金井 慎司

はじめに

本報告では、発掘調査で検出された動物遺存体についての同定結果を述べる。

1. 試料

試料は、テラス、SX1、IV下、VII層、NE上層SD20 (J91) などから出土した骨9試料(No.1～9)である。No.6・8・9を除く試料は、1試料中に複数点の骨片が含まれる。いずれも破片状である。なお、試料の詳細は、結果とともに表示する。

2. 分析方法

一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合する。自然乾燥後、試料を肉眼および実態顕微鏡で観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。

3. 結果

確認された種類は、魚類4種類(サメ類・ニシン類・コイ類・タイ類)、鳥類、哺乳類2種類(イノシシ・ニホンジカ)である(表43)。同定結果を表44に示す。いずれも白色～灰黒色を呈し、破片で表面に細かなひび割れが生じており、焼骨の特徴を示す。以下、試料ごとに結果を示す。

・No.1<3-1-3 テラス>

サメ類の歯牙、タイ類の歯牙、魚類の腹椎と鱗棘等、鳥類の四肢骨・指骨/指骨、獣類の歯牙・肋骨・四肢骨などが確認される。

・No.2<3-1-3 テラス>

サメ類の歯牙、ニシン類の耳石、コイ科の胸鱗、タイ類の歯牙、魚類の椎骨と鱗棘等、鳥類の四肢骨・基節骨・末節骨、ニホンジカの歯牙・中手骨/中足骨、ニホンジカの可能性がある歯牙片、小型獣類の中手骨/中足骨遠位端、獣類の後頭骨の可能性がある破片・肋骨・四肢骨・肋骨/四肢骨などが確認される。

・No.3<3-1-3 テラス3、SX1>

獣類の歯牙・肋骨/四肢骨・四肢骨などが確認される。

・No.4<3-1-3 テラス2>

獣類の四肢骨・指骨などが確認される。

表43 検出分類群の一覧

軟骨魚綱	Class	Chondrichthyes
板鰓亜綱	Subclass	Elasmobranchii
サメ類	Ord. et. fam. indet.	
硬骨魚綱	Class	Osteichthyes
条鰭亜綱	Subclass	Actinopterygii
ニシン目	Order	Clupeiformes
ニシン類	Fam. et. gen. indet.	
コイ目	Order	Cypriniformes
コイ科	Family	Cyprinidae
コイ類	Gen. et. sp. indet.	
スズキ目	Order	Perciformes
スズキ亜目	Suborder	Percoidei
タイ科	Family	Sparidae
タイ類	Gen. et. sp. indet.	
鳥綱	Class	Aves
鳥類	Ord. et. fam. indet.	
哺乳綱	Class	Mammalia
ウシ目(偶蹄目)	Order	Artiodactyla
イノシシ科	Family	Suidae
イノシシ	Sus scrofa	
シカ科	Family	Cervidae
ニホンジカ	Cervus nippon	

・No.5<3-1-4 テラス3、SX1>

タイ類の歯牙、魚類の椎骨・鰭棘等、鳥類の四肢骨、獣類の四肢骨などが確認される。

・No.6<3-1-4 IV下>

獣類の四肢骨片である。

・No.7<3-1-4 テラス2>

鳥類の四肢骨、イノシシの中手骨/中足骨・基節骨/中節骨、獣類の四肢骨などが確認される。

・No.8<3-1-5 VII層>

獣類の部位不明破片である。

・No.9<NE上層 SD20 (J91)>

中型獣類の肋骨片である。

4. 考察

今回出土した動物遺存体は、その特徴から焼骨と判断される。この特徴および出土状況などから、同定試料の多くは、食用として採取・利用されたものの残滓と推定される。このうち、魚骨については、海水性と淡水性の双方が検出された。海水性は、サメ類、ニシン類、タイ類、ニシン類が産出した。サメ類やタイ類は、大型になる種類を含む。ニシン類は、小型種に分類される。これらの種類は、遺跡の立地から、南側に近接して広がる海域で漁獲された可能性が高いと判断される。淡水生は、コイ科が産出した。本遺跡は、仁淀川河口域に位置している。このことから、コイ科は、調査区周辺の流路や沼沢地から漁獲されたと考えられる。

魚骨以外の動物遺存体では、鳥類、イノシシ、ニホンジカが産出した。なお、イノシシと同定された試料では、中手骨/中足骨の骨端が骨化しておらず、幼獣であったと考えられる。

以上、同定を行った動物遺存体では、海水魚、淡水魚、鳥類、獣類と種類に富む産出状況が確認された。このような種類構成は、本遺跡が仁淀川河口域に立地し、後背地に丘陵地や氾濫原、湿地が近接し、前面に海域が広がる地形的特徴を反映したものと捉えられる。今後、遺構埋土の炭化種実などの植物遺存体についても併せて試料化していくことによって、本遺跡では、動植物資源採取のより詳細な動態が明らかになるものと思われる。さらに、これらの結果と出土遺物の詳細な検討からは、狩猟採取活動の一端が復原できる可能性がある。

今回の動物遺存体の同定結果は、多様な動植物資源が近接して分布する上ノ村遺跡の生業領域を示していると解釈され、当該期における本地域の人間活動を考えるうえにおいて貴重な知見が得られたと判断される。今後、本遺跡の生業については、既往の花粉分析や地形解析結果などもふまえ、動的な古環境復原を基軸に、さらなる検討を行えればと思う。

表44 骨同定結果

番号	試料				種類	部位	部分	数量	備考
1	07-8TK	3-1-3	テラス	12/5	サメ類	歯牙	破片	1	
					タイ類	歯牙	破片	5	白歯状
					魚類	腹椎	椎体片	1	
						鱗棘等	破片	4	
					鳥類	四肢骨	破片	2	
						指骨	近位端欠	1	
						四肢骨/指骨	破片	3	
					獣類	歯牙	破片	2	
						肋骨	破片	1	
						四肢骨	破片	6	
2	07-8TK	3-1-3	テラス	12/4	不明	不明	破片	10.6g	
					サメ類	歯牙	破片	1	
					ニシン類	耳石	破片	1	
					コイ科	臀鱗棘	破片	1	
					タイ類	歯牙	破片	21	白歯状
							破片	3	犬歯状
					魚類	椎骨	椎体片	3	
						鱗棘等	破片	17	
					鳥類	四肢骨	破片	19	
						基節骨	近位端欠	1	
						末節骨	遠位端欠	1	
						ニホンジカ	歯牙	3	
							中手骨/中足骨	遠位端片	2
						ニホンジカ?	歯牙	破片	21
						小型獣類	中手骨/中足骨	遠位端	1
						獣類	後頭骨?	破片	1
							肋骨	破片	1
							四肢骨	破片	14
							肋骨/四肢骨	破片	5
3	07-8TK	3-1-3	テラス3、 SX1	12/16	不明	不明	破片	52.7g	
					獣類	歯牙	破片	1	
						肋骨/四肢骨	破片	1	
						四肢骨	破片	9	
						不明	不明	破片	101+
4	07-8TK	3-1-3	テラス2	12/7	獣類	四肢骨	破片	1	
						指骨	破片	1	
						指骨?	近位端?	1	
					不明	不明	破片	17	
5	07-8TK	3-1-4	テラス3、 SX1	12/7	タイ類	歯牙	破片	4	白歯状
					魚類	椎骨	椎体片	1	
						鱗棘等	破片	5	
					鳥類	四肢骨	破片	3	
					獣類	四肢骨	破片	1	
					不明	不明	破片	44	
6	07-8TK	3-1-4	IV下	12/6	獣類	四肢骨	破片	1	
7	07-8TK	3-1-4	テラス2	12/12	鳥類	四肢骨	破片	1	
					イノシシ	中手骨/中足骨	遠位端	1	未化骨骨端
						基節骨/中節骨	遠位端	1	
					獣類	四肢骨	破片	12	
					不明	不明	破片	37	
8	07-8TK	3-1-5	VII層	12/13	獣類	不明	破片	1	
9	07-8TK	NE上層	SD20 (J91)	11/20	中型獣類	肋骨	破片	1	

許諾手続き中

許諾手続き中

許諾手続き中

許諾手続き中

許諾手続き中

許諾手続き中

許諾手続き中

許諾手続き中

許諾手続き中

許諾手続き中

許諾手続き中

3 上ノ村遺跡出土サヌカイト製遺物の原材産地分析

有限会社 遺物材料研究所
藁科哲男

1 はじめに

石器石材の産地を自然科学的手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法によりサヌカイトおよび黒曜石製遺物の石材産地推定を行なっている^{1, 2, 3)}。最近の黒曜石の伝播距離に関する研究では、伝播距離は数千キロメートルは一般的で、6千キロメートルを推測する学者もでてきている。このような研究結果が出てきている現在、正確に産地を判定するということは、原理原則に従って同定を行うことである。原理原則は、同じ元素組成の黒曜石が異なった産地では生成されないという理論がないために、少なくとも遺跡から半径数千キロメートルの内にある石器の原材産地の原石と遺物を比較し、必要条件と十分条件を満たす必要がある。ノーベル賞を受賞された益川敏英博士の言を借りれば、科学とは、仮説をたて正しいか否かあらゆる可能性を否定することにある。即ち十分条件の証明が非常に重要であると言い換えられると思われる。『遺物原材とある産地の原石が一致したという「必要条件」を満たしても、他の産地の原石にも一致する可能性が残っているから、他の産地には一致しないという「十分条件」を満たして、一致した産地の原石が使用されているとはじめて言い切れる。また、十分条件を求めることにより、一致しなかった産地との交流がなかったと結論でき、考古学に重要な資料が提供される。

2 産地分析の方法

先ず原石採取であるが、本来一つの産地から産出する全ての原石を採取(産地の何処の箇所から古代人が採取したか不明、現在採取地点が風雨で消滅している可能性のため)し分析する必要があるが不可能である。そこで、産地から抽出した数十個の原石でも、産地全ての原石を分析して比較した結果と同じ結果が推測される方法として理論的に証明されている方法で、マハラノビスの距離を求めて行うホテリングのT2乗検定がある。ホテリングのT2乗検定法の同定とクラスター判定法(同定ではなく分類)、元素散布図法(散布図範囲に入るか否かで判定)を比較する。

クラスター判定法はクラスターを作る産地の組み合わせを変えることにより、クラスターが変動する。例えば、A原石製の遺物とA、B、C産地の原石でクラスターを作ったとき遺物はA原石とクラスターを作る。しかし、A産地の原石を抜いて、D、E産地の原石を加え、B、C、D、E産地の原石でクラスターを作ると、遺物がE産地とクラスタを作る。このように、A産地が調査されていないと、遺物はE原石製遺物と誤判定される可能性があり結果の信頼性に疑問が生じる。また、A原石製遺物と分かっていたら、意図的にE原石とクラスターを作らないようにもできる。このように、クラスター分析を行う遺物の原石産地を予め推測し、クラスターを組み立てる必要があり、得られた結果は主観的なものに左右される恐れがある。元素散布図法は原石群元素散布図の中に遺物の結果が入るか図示した方法である。原石の含有元素の違いを絶対定量値を求めて地球科学的に議論するには、地質学において最も適した方法であるが、産地分析の観点から見るとクラスター法よりさらに後

退した方法である。まず、何個の原石を分析すればその産地を正確に表せるのか不明であり、分析する原石数が少ないときにはA産地とB産地が区別できていたのに、原石数を増やすとA産地、B産地の区別ができなくなる可能性があり(クラスター法でも同じ危険性がある)判定結果に疑問が残る。以上をふまえて産地分析を正しく行うには、地質学の常識的な知識(高校生)さえあればよく、火山学、堆積学などの専門知識は必要なく、実際の分析においては非破壊で遺物の形状の違いによる相対定量値の影響を評価しながら同定を行うことが必要であり、地球科学的なことは関係なく、如何に原理原則に従って客観的な判定を行うかである。クラスター法、元素散布図法の欠点を解決するために考え出された方法が、理論的に証明された判定法であるホテリングのT²乗検定法である。それにはある産地の原石の元素組成と遺物の元素組成が一致すれば、その産地の原石と決定できるという理論がないために、多数の産地の原石と遺物を比較し、必要条件と十分条件を満たす必要がある。

考古学では、人工品の様式が一致すると言う結果が非常に重要な意味があり、見える様式としての形態、文様、見えない様式として土器、青銅器、ガラスなどの人手が加わった調合素材があり、それらが一致すると言うことは古代人が意識して一致させた可能性があり、一致すると言うことは古代人の思考が一致すると考えてもよく、相互関係を調査する上で重要な意味をもつ結果である。しかし、石器の様式による分類ではなく、自然の法則で決定した石材の元素組成を指標にした分類では、例えば石材産地が遺跡から近い、移動キャンプ地のルート上に位置する、産地地方との交流を示す土器が出土しているなど主観的要素が入った事象を十分条件の代用にすると産地分析は中途半端なものとなり、結果として遠距離伝播した石材を近くの産地と誤判定する可能性がある。人が移動させた石器の元素組成とA産地原石の元素組成が一致し、必要条件を満たしたとき、確かにA産地との交流で伝播した可能性は否定できなくなったが、偶然(産地分析法が不完全なために)に一致した可能性も大きくB、C、D・・・の産地でないとの証拠がないために、A産地だと言い切れない。そこで、考えられるのは、可能なかぎり地球上の全ての原産地(A、B、C、D・・・)の原石群と遺物を比較して、A産地以外の産地とは一致しないことを証明すればそれが十分条件となり、石器がA産地の原石を使用したものであると決定することができる。この十分条件を肉眼観察で求めることは各々の観察者で分類基準が異なるため混乱し不可能であると思われる。また、自然科学的分析を用いても全ての産地が区別できるかは、それぞれが使用している産地分析法によってそれぞれ異なり、実際に行ってみなければ分からない。産地分析の結果の信頼性は何ヶ所の原材産地の原石と客観的に比較して得られたかに左右され、比較した産地が少なければ信頼性の低い結果と言える。黒曜石、安山岩などの主成分の元素組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分の元素組成には違いがあると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して、各平均値からの離れ具合(マハラノビスの距離)を求める。次に、古代人が採取した原石産出地点と現代人が分析のために採取した原石産出地点が異なる可能性は十分に考えられる。従って、分析した有限個の原石から産地全体の無限の個数の平均値と分散を推測して判定を行うホテリングのT²乗検定を行うことにより、古代人が原石を採取した地点を推測して産地分析ができる。この検定を全ての産地について行い、ある原石遺物原材と同じ元素組成の原石はA産地では10個中に一個みられ、B産地では一万個中に一個、C産地では百万個中に一個、D産地では・・・一個と各産地毎に求めら

れるような、客観的な検定結果からA産地の原石を使用した可能性が高いと同定する。即ち多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

今回分析した遺物は高知県土佐市新居に位置する上ノ村遺跡出土のサヌカイト製遺物で産地分析の結果が得られたので報告する。

3 サヌカイト、ガラス質安山岩原石の分析

サヌカイトでは、K/Ca、Ti/Ca、Mn/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srの値を指標として用いる。サヌカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題にのぼる産地、および玄武岩、ガラス質安山岩など、合わせて50ヶ所以上の調査を終えている。図1にサヌカイトの原産地の地点を示す。これらの原石群を良質の原石を産出する産地および原石産地不明の遺物を元素組成で分類すると220個の原石群・遺物群に分類できる。安山岩の原石産地の一部を簡単に記すると、香川県の坂出市、高松市に位置する金山・五色台地域では、多数の地点から良質のサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数ヶの群に分かれる。近年、丸亀市の双子山の南嶺から産出するサヌカイト原石で双子山群を確立し、またガラス質安山岩は細石器時代に使用された原材であり善通寺市の大麻山南からも産出している。香川県内の石器原材の産地である金山・五色台地域のサヌカイト原石を分類すると、金山西群、金山東群、国分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の6つの群に分かれ、金山・五色台地域外の産地では城山群および双子山群に分かれた。また、ガラス質安山岩は金山奥池、雄山、神谷町南山地区で採取され、さらに大麻山南産は大麻山南第一、二群の2群にそれぞれ分類されて区別が可能なることを明らかにした。これらガラス質安山岩は成分的に黒曜石に近く、また肉眼観察では下呂石に酷似するもの、西北九州産の中町、淀姫産黒曜石、大串、亀岳原石と酷似するものもみられ、風化した遺物ではこれら相互に似た原材を肉眼で区別するのは困難と思われる、正確に原材産地の判定をおこなうには分析が必要である。また、金山・五色台地域産のサヌカイト原石の諸群にほとんど一致する元素組成を示すサヌカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円礫状で採取される。さらに大阪府和泉・岸和田産地の礫層、和歌山県梅原産地礫層からも、金山・五色台地域の諸群の一部に一致するものがみられ、長い年月の間にこれらが金山・五色台地域から流れ着いたのではないかと推測される。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大崩地区からもサヌカイト原石が採取される。奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山の原石で二上山群を作った。二上山群に一致する原石は柏原市奥山遺跡の地山転礫で見られ、地山転礫産出地を奥山礫層と名付ける。奥山礫層からは板状に剥離する原石が産出し剥離面には酸化鉄層が薄くあり、分析は主に酸化層面に直角な面を分析し奥山礫層2群を作った。奥山礫層中の奥山礫層2群と二上山群の出現比は約1:55であった。また、二上山群と元素組成の類似する原石は和泉・岸和田の礫層産地から6%の割合で採取される。梅原産地からは二上山産と一致する原石は見られなかった。中国山地のサヌカイト産地として代表的な産地は山口、島根、広島県の境に位置する冠山地域で、冠山、鬼ヶ城の山腹には安山岩の露頭があり、また山麓からは崖錐角礫の転石として見られる。伴蔵地区の冠高原スキー場一帯(冠高原地点と呼ぶ)から良質の原石が採取でき、冠高原群および伴蔵C、A群を作った。冠高原スキー場から南方の飯山地区の針山地点(飯山地点と呼ぶ)の原石で飯山群を作った。また、頓原地区産出の原石で冠山東群を作った。また、考古学者の間で石器原材として使用されたのではないかと話題にのぼ

る産地の一つである山口県熊毛郡平生町産の安山岩原石を分析し平生群を作り、この原石を使用した石器か否かの判定ができるようにした。九州地域産地では、佐賀県多久、老松山と隣の岡本、西有田、嬉野町では松尾、椎葉川などで良質の原石が採取できる。長崎県では大串、亀岳産地の安山岩と黒曜石の間のようなガラス質安山岩的な原石で、崎針尾島古里地区からはも崎針尾産原石が黒曜石と同じ地点で採取できる。川棚地区では川棚産原石が、福井洞窟遺跡地域で産出する福井産原石と松浦半島産の牟田産原石は組成が似ている。また、山下実氏発見の雲仙駒崎鼻産サヌカイトと福岡県昭和池採取原石の群が整備され、駒崎鼻産サヌカイトと老松山、岡本産サヌカイトの組成が酷似し、安山岩製遺物を分析したときしばしば、両原石産地に同定されることが多い。この他原産地不明の遺物で作った遺物群などが調査されている。

4 結果と考察

安山岩製遺物の非破壊分析については、表面が黒色で、白い風化層が肉眼で見られない場合は完全な非破壊で産地が特定される場合が多い。また、表面分析になる軽元素比は風化の影響を受けやすく、判定のときに軽元素比を除いて、表面から奥深い新鮮部が多く分析できる軽元素より重い元素で産地同定が可能である。このとき重い元素が同量含有している産地同士は区別出来なくなるが、実際に分析を行って見ないと特定される産地が一個か複数かは不明である。軽元素を抜いても判定出来ないときは、表面にエアブラシ処理を行い風化面を取り除き、新鮮面を出して同定を行う。貴重な製品でエアブラシ処理ができないときは、エアブラシ可能なフレイクの風化面を含む非破壊分析を行い風化フレイク群を作る。そして貴重な製品の風化面を測定し、フレイクの風化面の群とホテリングのT2乗検定を行い一致するか同定を行う。一致すればフレイクをエアブラシ処理を行い新鮮面をだして同定し、フレイクの新鮮面で同定された結果を、貴重な製品の原石産地と推測する。この方法は石器の割れ面を接合して石器の製作技法を再現することに似る。接合面は形が同じであるように、原理的には接合した両面は元素組成も同じで、割れた時期が同じで風化の開始も同じととえられる。従って、風化面の元素組成の一致する物を探すことは『元素接合法』といえる。接合する元素組成が同じ加工品を集めて使用産地の原石をまとめて、風化層遺物群を作る。群を作るとき、製品またはフレイク一個の遺物の分析場所を変えながら、ホテリングのT2乗検定が可能な回数分析を行い群を作り、できた群に他のフレイクの風化面分析値の検定を行い同定確率の高いフレイクを接合フレイクとみなす。製品と接合フレイクの新鮮面分析の同定結果を製品の原石産地とする正当性は同じ風化をする遺物は同じ産地の原石であることを前提にしている。この前提を証明するために複数の同じ風化層群に同定される遺物の新鮮面の産地が一致することを確認する必要がある。このとき重要なことは、フレイクの新鮮面測定で求めた結果は必要条件の一致する原石産地を求める以外に、他の原石産地に一致しないという十分条件も満たす必要がある。一方、黒曜石製遺物の風化層厚さは含有成分によって異なるが1000年で約1マイクロ程度とみられ、旧石器末で約6ミクロンの厚さと推測される。X線励起(50KeV)でマトリックスをシリカとしてモデル計算を行うと、表面から、カリウム元素など軽元素で数マイクロから10マイクロ、鉄元素で約300マイクロ、ジルコニウムで約800マイクロの深さまで分析され、鉄元素より重い元素では風化層の影響は相当無視できると思われる。風化層以外に表面に固着した汚染物が超音波洗浄でも除去できないときはその影響を受ける。また被熱黒曜石の風化層は厚く、表面ひび割れ層に汚染物が入り込んでいるときも分析値に大きく

影響する。風化層が厚い場合、軽い元素の分析ほど表面分析になるため、水和層の影響を受けやすいと考えられ、Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて産地分析を行なう。軽元素比を除いた場合、また除かずに産地分析を行った場合、いずれの場合にも同定される産地は同じである。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやゝ不確実さを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。

今回分析した上ノ村遺跡から出土したサヌカイト製遺物の分析結果を表48に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためRb/Srの一変量だけを考えると、分析番号107803番の遺物はRb/Srの値が0.386で、上ノ村遺物群の[平均値]±[標準偏差値]は、 0.385 ± 0.010 であるから、遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から0.1 σ 離れている。ところで上ノ村遺物群の産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から±0.1 σ のずれより大きいものが92ヶある。すなわち、この遺物が、上ノ村遺物群の原石から作られていたと仮定しても、0.1 σ 以上離れる確率は92%であると言える。だから、上ノ村遺物群の平均値から0.1 σ しか離れていないときには、この遺物が上ノ村遺物群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を金山東群に比較すると、金山東群の[平均値]±[標準偏差値]は、 0.293 ± 0.022 であるから、遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から4 σ 離れている。これを確率の言葉で表現すると、金山東群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から4 σ 以上離れている確率は、十万分の一であると言える。このように、十万個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、金山東群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は上ノ村遺物群に92%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから上ノ村遺物群の原石が使用されていると同定され、さらに金山東群に対しては一千分一%の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%に満たないことから金山東原石でないと同定される」。遺物が上ノ村遺物群と一致したからと言っても、分析している試料は分析誤差が大きくなる不定形(非破壊分析)であることから、他の産地に一致しないとは言えない。また、同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地(上ノ村遺物群)に一致し必要条件を満たしたと言っても一致した産地の原石とは限らないために、帰属確率による判断を表1の221個すべての原石群について行ない、十分条件である低い確率で帰属された原石群を消していくことにより、はじめて上ノ村遺物群の石材のみが使用されると判定される。実際はRb/Srといった唯1ヶの変量だけでなく、前述した8ヶの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群では、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、仮にA群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT2乗検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する^{4, 5)}。産地の同定結果は1個の遺物に対して、サヌカイト製のものは221個の推定確率結果が得られている(表50-1~4)。上ノ村遺物群と判定された遺物について、金山東群産原石とか佐賀県多久産、香川県城山、北海道旭山の原石の可能性を考える必要が

ない結果で、ここでは高い確率で同定された産地のみの結果を表49に記入した。原石群を作った原石試料は直径2cm以上で精度良く分析される。遺物は、大きさ、形がさまざまで、これらの影響により分析値が少しは変化していることを推測し、判定の信頼限界を0.1%に設定した。判定結果には推定確率が求められているために、先史時代の交流を推測するときに、低確率の遺物はあまり重要に考えないなど、考古学者が推定確率をみて選択できるために、誤った先史時代交流を推測する可能性がない。

今回分析した上ノ村遺跡のサヌカイト製遺物1個のホテリングのT2乗検定法で表1の原石群・遺物群と比較した結果、今回分析して作った上ノ村遺物群以外の220個の原石・遺物群には一致しなかった。今回、産地同定の必要条件を満たした上ノ村遺物群以外に一致する産地が特定できなかったが、十分条件の220個の他の原石・遺物群と一致しないという十分条件を満たしているため(表3)、石器原材料から推測して、上ノ村遺跡はこれら220個の原石産地と遺物群を作った遺跡と関係がなかったと言える貴重な結果を得た。今後、上ノ村遺物群は、新しく発見されたサヌカイト産地、他の遺跡で使用されているサヌカイト遺物との比較を行うことにより、上ノ村遺物群の使用圏が求まると思われる。

参考文献

- 1) 藁科哲男・東村武信(1975)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(II)。考古学と自然科学、8:61-69
- 2) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌(1977)、(1978)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(III)。(IV)。考古学と自然科学、10、11:53-81:33-47
- 3) 藁科哲男・東村武信(1983)、石器原材料の産地分析。考古学と自然科学、16:59-89
- 4) 東村武信(1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9:77-90
- 5) 東村武信(1980)、考古学と物理化学。学生社

表48 上ノ村遺跡出土のサヌカイト製遺物の元素比分析結果

分析番号	元 素 比									
	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
107803	0.829	0.456	0.034	4.481	0.386	0.056	0.976	0.031	0.038	0.346
JG-1	1.265	0.284	0.052	2.736	0.737	0.171	0.854	0.045	0.036	0.410

JG-1:標準試料 - Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochimical Journal, Vol.8 175-192 (1974)

表49 上ノ村遺跡出土サヌカイト製遺物の原材産地分析結果

分析番号	ホテリングT2検定
107803	上ノ村遺物群(62%)



Fig.120 サスカイト及びサスカイト様岩石の原産地

表50-1 上ノ村遺跡出土サヌカイト製遺物(107803番)の必要条件と十分条件の産地分析結果

番号:統計処理使用元素比(2:K/Ca, 5:Ti/Ca, 7:Mn/Sr, 8:Fe/Sr, 12:Rb/Sr, 14:Y/Sr, 15:Zr/Sr, 16:Nb/Sr)0.2E-05%-E以下は指数部を表す(0.000002%, 0.0E+00%-0%)

原石・遺物群名 必要条件満たす群名	ホテリングT ² 検定(%)	マハラノビスの距離	群内個数	統計処理使用元素番号										
				2	5	7	8	12	14	15	16			
高知・上ノ村遺物群	61.98%	7.7	44	2	5	7	8	12	14	15	16			
十分条件満たす群名														
多久第2	1.00E-07	111.4	42	2	5	7	8	12	14	15	16			
松尾・転礫	3.00E-15	326.7	47	2	5	7	8	12	14	15	16			
多久第1	3.00E-14	385.4	40	2	5	7	8	12	14	15	16			
岡本・寺山	4.00E-20	544.4	50	2	5	7	8	12	14	15	16			
老松山	3.00E-24	559.7	62	2	5	7	8	12	14	15	16			
椎葉川崖-2	2.00E-17	587.2	41	2	5	7	8	12	14	15	16			
芝原風化21遺物群	1.00E-18	592.9	44	2	5	7	8	12	14	15	16			
荒船山	2.00E-18	610.7	43	2	5	7	8	12	14	15	16			
駒崎鼻	5.00E-18	613.2	42	2	5	7	8	12	14	15	16			
椎葉川崖-4	5.00E-16	617.8	37	2	5	7	8	12	14	15	16			
牟田第2	1.00E-17	652.7	40	2	5	7	8	12	14	15	16			
椎葉川崖-1	1.00E-18	670.8	42	2	5	7	8	12	14	15	16			
小田元2遺物群	2.00E-21	706.8	48	2	5	7	8	12	14	15	16			
小田元17遺物群	1.00E-21	718	48	2	5	7	8	12	14	15	16			
佐賀・梅野	6.00E-22	745.4	48	2	5	7	8	12	14	15	16			
和泉	1.00E-11	750.7	26	2	5	7	8	12	14	15	16			
牟田第1	3.00E-23	760	51	2	5	7	8	12	14	15	16			
長谷95遺物群板層	4.00E-21	797.3	45	2	5	7	8	12	14	15	16			
川棚第1	5.00E-27	807.7	59	2	5	7	8	12	14	15	16			
大原野27遺物群	1.00E-22	823.7	48	2	5	7	8	12	14	15	16			
森添-26遺物群	4.00E-22	900.9	45	2	5	7	8	12	14	15	16			
芝原風化26遺物群	8.00E-22	925.2	44	2	5	7	8	12	14	15	16			
和歌山・梅原第1群	0.00E+00	933.8	61	2	5	7	8	12	14	15	16			
芝原風化A遺物群	3.00E-24	997.4	48	2	5	7	8	12	14	15	16			
淡路第3群	2.00E-24	1004.6	48	2	5	7	8	12	14	15	16			
岩屋第1	4.00E-14	1055	28	2	5	7	8	12	14	15	16			
金クソ谷3遺物群	2.00E-23	1081.3	45	2	5	7	8	12	14	15	16			
芝原風化24遺物群	3.00E-23	1116.9	44	2	5	7	8	12	14	15	16			
崎針尾第1	0.00E+00	1120.6	67	2	5	7	8	12	14	15	16			
槇ヶ峠石斧遺物群	1.00E-25	1165.3	48	2	5	7	8	12	14	15	16			
金井谷峰9遺物群	4.00E-24	1175.4	45	2	5	7	8	12	14	15	16			
松尾・第2群(ガク質)	1.00E-21	1185.4	40	2	5	7	8	12	14	15	16			
久木野No.17遺物群	3.00E-24	1198.5	45	2	5	7	8	12	14	15	16			
芝原風化27遺物群	1.00E-24	1355.6	44	2	5	7	8	12	14	15	16			
文殊嶺-I No.335遺物群	7.00E-25	1386.8	44	2	5	7	8	12	14	15	16			
旭川・台場C	0.00E+00	1415	50	2	5	7	8	12	14	15	16			
旭川・台場B	0.00E+00	1462.7	82	2	5	7	8	12	14	15	16			
西有田	3.00E-24	1490.6	42	2	5	7	8	12	14	15	16			
上関町・長島蒲井群	0.00E+00	1548.2	48	2	5	7	8	12	14	15	16			
永追334遺物群	0.00E+00	1584.1	50	2	5	7	8	12	14	15	16			
旭山動物園	0.00E+00	1656.8	80	2	5	7	8	12	14	15	16			
喜時雨No.1-3遺物群	2.00E-26	1687.1	44	2	5	7	8	12	14	15	16			
椎葉川崖--3	9.00E-22	1788	36	2	5	7	8	12	14	15	16			
芝原風化28遺物群	5.00E-27	1849.9	44	2	5	7	8	12	14	15	16			
城山	0.00E+00	1893.5	65	2	5	7	8	12	14	15	16			
芝原風化23遺物群	2.00E-27	1927.6	44	2	5	7	8	12	14	15	16			
小田元23遺物群	0.00E+00	1950.1	48	2	5	7	8	12	14	15	16			
国分寺	0.00E+00	1959.3	50	2	5	7	8	12	14	15	16			
旭川・台場A	0.00E+00	1965.7	48	2	5	7	8	12	14	15	16			
頭無川遺物群	3.00E-26	1965.7	42	2	5	7	8	12	14	15	16			
川棚第2	3.00E-26	1971.5	42	2	5	7	8	12	14	15	16			
吹上6遺物群	0.00E+00	2005.5	45	2	5	7	8	12	14	15	16			
徳島・城ノ内遺物群	0.00E+00	2034.5	50	2	5	7	8	12	14	15	16			
愛知・豊川(只持)	0.00E+00	2052.2	51	2	5	7	8	12	14	15	16			
岩屋第2	5.00E-26	2082.9	41	2	5	7	8	12	14	15	16			
福井第1	0.00E+00	2102.4	46	2	5	7	8	12	14	15	16			
束峰第1群	0.00E+00	2138.8	52	2	5	7	8	12	14	15	16			
福井第2	0.00E+00	2202.1	47	2	5	7	8	12	14	15	16			
金山東南	0.00E+00	2337.1	48	2	5	7	8	12	14	15	16			
芝原風化22遺物群	0.00E+00	2436.3	44	2	5	7	8	12	14	15	16			
茶畑山道S-97遺物群	0.00E+00	2467.8	44	2	5	7	8	12	14	15	16			
酒見遺物群	8.00E-26	2476.5	39	2	5	7	8	12	14	15	16			
雄山	0.00E+00	2476.7	50	2	5	7	8	12	14	15	16			
無加林道露頭	0.00E+00	2573.9	43	2	5	7	8	12	14	15	16			

表50-2 上ノ村遺跡出土サヌカイト製遺物(107803番)の必要条件と十分条件の産地分析結果

芝原風化20遺物群	0.00E+00	2610.4	44	2	5	7	8	12	14	15	16
原石・遺物群名 必要条件満たす群名	ホテリングT ² 検定(%)	マハラノビスの距離	群内個数	統計処理使用元素番号							
高尾原586遺物群	0.00E+00	2683.2	45	2	5	7	8	12	14	15	16
神谷・南山	0.00E+00	2709.5	51	2	5	7	8	12	14	15	16
金山南露頭	0.00E+00	2753.3	42	2	5	7	8	12	14	15	16
金山北	0.00E+00	2847.5	44	2	5	7	8	12	14	15	16
吹上2遺物群	0.00E+00	2855.1	50	2	5	7	8	12	14	15	16
大麻山南第1群	8.00E-27	2866.7	39	2	5	7	8	12	14	15	16
金山西	0.00E+00	2877.4	43	2	5	7	8	12	14	15	16
永迫316-329遺物群	0.00E+00	2914.8	50	2	5	7	8	12	14	15	16
金山南	0.00E+00	2931.5	50	2	5	7	8	12	14	15	16
金クソ谷33遺物群	0.00E+00	2966.7	45	2	5	7	8	12	14	15	16
二上山	0.00E+00	2996.9	50	2	5	7	8	12	14	15	16
吹上3遺物群	0.00E+00	3049.1	45	2	5	7	8	12	14	15	16
蓮光寺	0.00E+00	3055.8	40	2	5	7	8	12	14	15	16
冠高原	0.00E+00	3058.1	60	2	5	7	8	12	14	15	16
地方15865遺物群	0.00E+00	3148.7	48	2	5	7	8	12	14	15	16
吹上7遺物群	0.00E+00	3164.5	45	2	5	7	8	12	14	15	16
小田元22遺物群	0.00E+00	3164.7	48	2	5	7	8	12	14	15	16
金山東	0.00E+00	3187.3	48	2	5	7	8	12	14	15	16
中の社No.86遺物群	0.00E+00	3417.7	48	2	5	7	8	12	14	15	16
白峰	0.00E+00	3504.4	52	2	5	7	8	12	14	15	16
法印谷	0.00E+00	3557.4	49	2	5	7	8	12	14	15	16
福井・法恩寺山	0.00E+00	3614.6	42	2	5	7	8	12	14	15	16
高尾原11遺物群	0.00E+00	3738.8	45	2	5	7	8	12	14	15	16
穴虫-94	0.00E+00	3774.2	46	2	5	7	8	12	14	15	16
金クソ谷34遺物群	0.00E+00	3871.4	45	2	5	7	8	12	14	15	16
八風山-岩塊	0.00E+00	3877.3	38	2	5	7	8	12	14	15	16
東船63-64-101遺物群	0.00E+00	4011.4	48	2	5	7	8	12	14	15	16
極野	0.00E+00	4024.6	48	2	5	7	8	12	14	15	16
高尾原A遺物群	0.00E+00	4050.2	46	2	5	7	8	12	14	15	16
金山-奥池第2	0.00E+00	4086	50	2	5	7	8	12	14	15	16
崎針尾第2	0.00E+00	4424.2	56	2	5	7	8	12	14	15	16
亀岳	0.00E+00	4634.8	38	2	5	7	8	12	14	15	16
旭川・台場D	0.00E+00	4785.5	49	2	5	7	8	12	14	15	16
飯山	2.00E-22	4827	30	2	5	7	8	12	14	15	16
吹上5遺物群	0.00E+00	4860.7	48	2	5	7	8	12	14	15	16
柏岳	2.00E-24	4982.1	32	2	5	7	8	12	14	15	16
八風山	0.00E+00	5297.8	46	2	5	7	8	12	14	15	16
家の後No.4遺物群	0.00E+00	5306.8	48	2	5	7	8	12	14	15	16
長谷78遺物群珪化木	0.00E+00	5545.2	45	2	5	7	8	12	14	15	16
上関町八鳥群	0.00E+00	5573.7	45	2	5	7	8	12	14	15	16
金山-奥池第1	0.00E+00	5678.8	51	2	5	7	8	12	14	15	16
大串	0.00E+00	5744.4	56	2	5	7	8	12	14	15	16
束峰第2群	0.00E+00	5852.8	51	2	5	7	8	12	14	15	16
芝原風化25遺物群	0.00E+00	5875	44	2	5	7	8	12	14	15	16
松ノ木遺物群	0.00E+00	5882	37	2	5	7	8	12	14	15	16
金山東(アブラ)	0.00E+00	6024.7	56	2	5	7	8	12	14	15	16
堅田No.28遺物群	0.00E+00	6452.4	48	2	5	7	8	12	14	15	16
志谷Ⅲ-20遺物群	0.00E+00	6673.6	44	2	5	7	8	12	14	15	16
田ノ浦23-25遺物群	0.00E+00	6690.2	50	2	5	7	8	12	14	15	16
市ノ原34遺物群	0.00E+00	6715.7	48	2	5	7	8	12	14	15	16
原田1遺物群	0.00E+00	6830.9	52	2	5	7	8	12	14	15	16
三朝-坂本	0.00E+00	6879.5	51	2	5	7	8	12	14	15	16
置戸・オンネアンジ	0.00E+00	6884.3	43	2	5	7	8	12	14	15	16
阿蘇第2	0.00E+00	7047.6	44	2	5	7	8	12	14	15	16
野笹No.289他遺物群	2.00E-26	7212.4	32	2	5	7	8	12	14	15	16
愛知・茶白山	0.00E+00	7283.5	48	2	5	7	8	12	14	15	16
田尻・穴虫	0.00E+00	7347.5	44	2	5	7	8	12	14	15	16
五明田44-1遺物群	0.00E+00	7364.3	44	2	5	7	8	12	14	15	16
大麻山南第2群	0.00E+00	7485.2	34	2	5	7	8	12	14	15	16
大陰A27遺物群	0.00E+00	7526.9	44	2	5	7	8	12	14	15	16
田ノ浦47遺物群	0.00E+00	7632.6	45	2	5	7	8	12	14	15	16
高尾原459遺物群	0.00E+00	7708.2	45	2	5	7	8	12	14	15	16
鏡子・宝満	0.00E+00	7726.2	50	2	5	7	8	12	14	15	16
横川	0.00E+00	7741.2	70	2	5	7	8	12	14	15	16
鏡子・黒生	0.00E+00	7992.3	50	2	5	7	8	12	14	15	16
矢野3遺物群	0.00E+00	8703.4	43	2	5	7	8	12	14	15	16
原田2遺物群	0.00E+00	8726.9	48	2	5	7	8	12	14	15	16
福井・滝波川	0.00E+00	8854.5	52	2	5	7	8	12	14	15	16
堅田No.8遺物群	0.00E+00	9053.1	48	2	5	7	8	12	14	15	16

表50-3 上ノ村遺跡出土サヌカイト製遺物(107803番)の必要条件と十分条件の産地分析結果

原石・遺物群名 必要条件満たす群名	ホテリングT ² 検定(%)	マハラノビスの距離	群内個数	統計処理使用元素番号													
				2	5	7	8	12	14	15	16						
原田No.107遺物群	0.00E+00	9398.3	47	2	5	7	8	12	14	15	16						
讀良郡糸里遺物群	0.00E+00	10390.5	46	2	5	7	8	12	14	15	16						
双子山	0.00E+00	10807.4	54	2	5	7	8	12	14	15	16						
道下段76遺物群	0.00E+00	11162.2	50	2	5	7	8	12	14	15	16						
地方19398遺物群	0.00E+00	11897.6	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
小田元16遺物群	0.00E+00	12034.3	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
原田No.93遺物群	0.00E+00	12661.8	47	2	5	7	8	12	14	15	16						
阿蘇第1	0.00E+00	12891.1	39	2	5	7	8	12	14	15	16						
中の社No.89遺物群	0.00E+00	13093.2	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
平生	0.00E+00	13421.9	45	2	5	7	8	12	14	15	16						
吹上1遺物群	0.00E+00	13968.8	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
上太田6遺物群	0.00E+00	14277	45	2	5	7	8	12	14	15	16						
久木野No.26遺物群	0.00E+00	14367	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
中井谷	0.00E+00	15384.1	40	2	5	7	8	12	14	15	16						
JG-1	0.00E+00	15476.3	36	2	5	7	8	12	14	15	16						
中の社No.82遺物群	0.00E+00	16256.7	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
西飯降7106遺物群	0.00E+00	16553.5	44	2	5	7	8	12	14	15	16						
笹畝2No.2遺物群	0.00E+00	16964.2	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
熊内17遺物群	0.00E+00	17762.1	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
向出No.49遺物群	0.00E+00	18168.7	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
中嶺32遺物群	0.00E+00	18417.2	44	2	5	7	8	12	14	15	16						
イトムカ-無加川	0.00E+00	18862.2	46	2	5	7	8	12	14	15	16						
田ノ浦26遺物群	0.00E+00	19625.8	44	2	5	7	8	12	14	15	16						
粟生間谷No.98遺物群	0.00E+00	20044.2	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
イトムカ	4.00E-18	20587.5	21	2	5	7	8	12	14	15	16						
原田No.39遺物群	0.00E+00	20669.2	47	2	5	7	8	12	14	15	16						
久木野No.44遺物群	0.00E+00	20948.1	45	2	5	7	8	12	14	15	16						
粟生間谷No.T5遺物群	0.00E+00	21037.1	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
小田元20遺物群	0.00E+00	21309.8	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
千葉・No.2遺物群	0.00E+00	22578.9	36	2	5	7	8	12	14	15	16						
平田No.13遺物群	0.00E+00	23017.2	46	2	5	7	8	12	14	15	16						
冠山東	0.00E+00	23688.3	34	2	5	7	8	12	14	15	16						
笹畝2No.3遺物群	0.00E+00	24136.6	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
吹上4遺物群	0.00E+00	24415.2	45	2	5	7	8	12	14	15	16						
佐渡・小倉川-1	0.00E+00	24483.3	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
柏原-奥山礫層2群	0.00E+00	25052.9	44	2	5	7	8	12	14	15	16						
平田No.12遺物群	0.00E+00	25535.7	46	2	5	7	8	12	14	15	16						
矢野186-2遺物群	0.00E+00	26972.6	44	2	5	7	8	12	14	15	16						
庵の谷No.3参考	0.00E+00	27924.1	33	2	5	7	8	12	14	15	16						
熊本・菊地	0.00E+00	27939.3	42	2	5	7	8	12	14	15	16						
田ノ浦12遺物群	0.00E+00	27949.5	46	2	5	7	8	12	14	15	16						
向出No.6遺物群	0.00E+00	29486.2	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
田ノ浦15遺物群	0.00E+00	30457.3	45	2	5	7	8	12	14	15	16						
永追328遺物群	0.00E+00	31072.7	45	2	5	7	8	12	14	15	16						
庵の谷遺物群1、2、3合成	0.00E+00	31195.3	60	2	5	7	8	12	14	15	16						
愛知朝日No.15遺物群	0.00E+00	32501.3	34	2	5	7	8	12	14	15	16						
甲山	8.00E-21	32506.1	22	2	5	7	8	12	14	15	16						
矢野9遺物群	0.00E+00	32764.5	43	2	5	7	8	12	14	15	16						
田ノ浦24遺物群	0.00E+00	33567.6	45	2	5	7	8	12	14	15	16						
小田元1遺物群	0.00E+00	34024	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
庵の谷No.1参考	4.00E-25	34600	25	2	5	7	8	12	14	15	16						
野笹No.295遺物群	0.00E+00	34991.5	32	2	5	7	8	12	14	15	16						
長崎・金石	0.00E+00	36618.2	55	2	5	7	8	12	14	15	16						
納内NN17遺物群	0.00E+00	37274.6	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
小田元18遺物群	0.00E+00	37404.1	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
久木野No.10遺物群	0.00E+00	37815.9	34	2	5	7	8	12	14	15	16						
下山No.11遺物群	0.00E+00	39510.9	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
大原野KUH遺物群	0.00E+00	41346.8	53	2	5	7	8	12	14	15	16						
堅田No.24遺物群	0.00E+00	41846.8	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
中の社No.104遺物群	0.00E+00	42933.1	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
金井谷峰383遺物群	0.00E+00	43779	46	2	5	7	8	12	14	15	16						
原田No.67遺物群	0.00E+00	43866.6	47	2	5	7	8	12	14	15	16						
小田元21遺物群	0.00E+00	44523.6	48	2	5	7	8	12	14	15	16						
野笹No.282他遺物群	0.00E+00	46807.1	33	2	5	7	8	12	14	15	16						
鹿児島・上牛鼻	0.00E+00	49283.1	50	2	5	7	8	12	14	15	16						
昭和池3	0.00E+00	50509.2	50	2	5	7	8	12	14	15	16						
庵の谷No.2参考	0.00E+00	51070.7	33	2	5	7	8	12	14	15	16						
熊内7遺物群	0.00E+00	52407.1	31	2	5	7	8	12	14	15	16						

表50-4 上ノ村遺跡出土サヌカイト製遺物(107803番)の必要条件と十分条件の産地分析結果

原石・遺物群名 必要条件満たす群名	ホテリングT ² 検定(%)	マハラノビスの距離	群内個数	統計処理使用元素番号							
				2	5	7	8	12	14	15	16
永迫2No.18遺物群	0.00E+00	52595.9	48	2	5	7	8	12	14	15	16
寺田No.117遺物群	0.00E+00	54727.5	48	2	5	7	8	12	14	15	16
火打沢	0.00E+00	56204.8	40	2	5	7	8	12	14	15	16
熊内13遺物群	0.00E+00	63278.6	55	2	5	7	8	12	14	15	16
火打沢-岩塊	0.00E+00	64748	39	2	5	7	8	12	14	15	16
下砂見	0.00E+00	65153.2	46	2	5	7	8	12	14	15	16
下山遺物群	0.00E+00	66336.8	60	2	5	7	8	12	14	15	16
佐渡・東猿八川	0.00E+00	69919.3	42	2	5	7	8	12	14	15	16
久木野No.43遺物群	0.00E+00	74401.5	48	2	5	7	8	12	14	15	16
下呂	0.00E+00	75047.9	93	2	5	7	8	12	14	15	16
六ツ目遺物群	0.00E+00	82071.9	31	2	5	7	8	12	14	15	16
赤ヶ平13遺物群	0.00E+00	82550.1	48	2	5	7	8	12	14	15	16
久木野45遺物群-風化	0.00E+00	91068.4	48	2	5	7	8	12	14	15	16
愛知朝日No.7遺物群	0.00E+00	96915.2	35	2	5	7	8	12	14	15	16
大原野24遺物群	0.00E+00	99212.4	48	2	5	7	8	12	14	15	16
馬ノ山	0.00E+00	106548.9	41	2	5	7	8	12	14	15	16
野笹No.261他遺物群	0.00E+00	112626.6	56	2	5	7	8	12	14	15	16
有吉No.14遺物群	0.00E+00	113225.9	48	2	5	7	8	12	14	15	16
下山No.5遺物群	0.00E+00	114737	48	2	5	7	8	12	14	15	16
金井谷峰A遺物群	0.00E+00	116458.7	46	2	5	7	8	12	14	15	16
千葉・No.4遺物群	0.00E+00	119535.8	48	2	5	7	8	12	14	15	16
天瀬I遺物群	0.00E+00	126153.1	54	2	5	7	8	12	14	15	16
久木野No.12遺物群	0.00E+00	127773.4	48	2	5	7	8	12	14	15	16
鬼虎川No.16遺物群	0.00E+00	128001.3	33	2	5	7	8	12	14	15	16
田ノ浦49遺物群	0.00E+00	129718.7	45	2	5	7	8	12	14	15	16
大原野28遺物群	0.00E+00	134673.4	48	2	5	7	8	12	14	15	16
有吉No.13遺物群	0.00E+00	144092	48	2	5	7	8	12	14	15	16
平田石斧遺物群	0.00E+00	146116	48	2	5	7	8	12	14	15	16
野笹No.262遺物群	0.00E+00	150702.9	40	2	5	7	8	12	14	15	16
昭和池第2	0.00E+00	165296.2	50	2	5	7	8	12	14	15	16
千葉・No.1遺物群	0.00E+00	167125.1	32	2	5	7	8	12	14	15	16
金井谷峰388遺物群	0.00E+00	168361.4	45	2	5	7	8	12	14	15	16
横ヶ峠石棒遺物群	0.00E+00	176737.8	48	2	5	7	8	12	14	15	16
熊内33遺物群	0.00E+00	192691.7	48	2	5	7	8	12	14	15	16
大陰B遺物群	0.00E+00	194018.4	44	2	5	7	8	12	14	15	16
伴蔵-C	0.00E+00	205923	45	2	5	7	8	12	14	15	16
原田3遺物群	0.00E+00	207713.5	46	2	5	7	8	12	14	15	16
千葉・No.3遺物群	0.00E+00	210453.5	48	2	5	7	8	12	14	15	16
久木野No.45遺物群	0.00E+00	217338.3	48	2	5	7	8	12	14	15	16
餅ノ沢No.24-25遺物群	0.00E+00	254157.9	40	2	5	7	8	12	14	15	16
鬼虎川No.17遺物群	0.00E+00	283212.2	33	2	5	7	8	12	14	15	16
大陰C遺物群	0.00E+00	289260.7	44	2	5	7	8	12	14	15	16
高尾原383遺物群	0.00E+00	296204	45	2	5	7	8	12	14	15	16
伊豆・河津-1遺物群	0.00E+00	305632	48	2	5	7	8	12	14	15	16
昭和池第1	0.00E+00	318635.8	50	2	5	7	8	12	14	15	16
大陰A31遺物群	0.00E+00	336344.3	44	2	5	7	8	12	14	15	16
野笹No.271他遺物群	0.00E+00	350426.6	35	2	5	7	8	12	14	15	16
昭和池第4	0.00E+00	371143	50	2	5	7	8	12	14	15	16
永迫2No.19遺物群	0.00E+00	425437	48	2	5	7	8	12	14	15	16
大陰A18遺物群	0.00E+00	755895.6	44	2	5	7	8	12	14	15	16
伴蔵-A	0.00E+00	925003.4	51	2	5	7	8	12	14	15	16
平田追加 No.8	0.00E+00	1293509	24	2	5	7	8	12	14	15	16
長谷77遺物群	0.00E+00	2003258	45	2	5	7	8	12	14	15	16
川平I No.2遺物群	0.00E+00	2164295	48	2	5	7	8	12	14	15	16

4 上ノ村遺跡出土玉類の産地分析

有限会社 遺物材料研究所
藁科哲男

1はじめに

玉類の観察は、一般的に肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが真実のよう思われているのが実態である。岩石製では玉類の原材料として硬玉、滑石、軟玉(角閃石)、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉などが推測される。それぞれの岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義を求めるには限度があり、若干の傷を覚悟して硬度、光沢感、比重、結晶性、主成分組成を求めるなどで、非破壊で命名の主定義の結晶構造、屈折率などを正確には求められない。原石名が決定されたのみでは考古学の資料としては不完全で、どこの産地の原石が使用されているかの産地分析が行われて初めて、考古学に寄与できる資料となる。遺跡から出土する勾玉、管玉など玉類の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということ調査するのではなく、何ヶ所かあるヒスイ(硬玉、軟玉)とか碧玉の原産地のうち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味も持っている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法¹⁾および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法^{2, 3, 4)}が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究は蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析より正確に行った例⁵⁾が報告されている。石鏃など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1)石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2)玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない。お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。今回分析を行った遺物は、高知県土佐市新居に位置する上ノ村遺跡出土の結晶片岩様緑色岩(クロム雲母岩)製玉類の産地分析結果が得られたので報告する。

2非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組み合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。

石器の原産地分析で成功している⁴⁾非破壊で分析を行なう蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した⁵⁾。

3原産地不明の結晶片岩様緑色玉類の蛍光X線分析

原産地不明の結晶片岩様緑色製の玉材および玉類は九州南部の遺跡から出土するが、原産地は不明で、肉眼的に均一な石質ばかりではなく、中には不均一で緑色の部分に石英脈状岩石が貫入しているもの、緑色部分に黄色の微小斑点が見られる物、結晶並びが明確なもの、またヒスイ様に見える透明感の部分があるなど様々である。従って、これら玉類はヒスイ製、軟玉製、滑石製、蛇紋岩製など様々に推測されてきた経緯がある。この玉類の岩石名を決定するには、岩石を構成する鉱物の種類を求める必要があり、X線回折など結晶定数から同定する必要がある。蛍光X線分析でこれら玉類から硬玉の主成分組成であるNa元素が検出限界以下であることと、硬玉の比重の3.1以上に達しないとの理由から硬玉の可能性はないと考えられる。また、玉類の比重が2.7以上であることから石材が碧玉の可能性も否定できる。これら玉材の割れ面は平面のものが多く、肉眼観察で結晶に平行な劈開面がみられることから、結晶片岩様緑色岩と仮称する。結晶が一定方向に並んだ岩石は広域変成帯で生成されることから玉材の起源が変成帯の可能性が推測される。広域変成帯ではMgが主成分の蛇紋岩、Mg、Caが主成分の透角閃石とかMg、Ca、Feが主成分の陽起石の軟玉が産出する。玉類に含有されるMg/Siが1.0前後ではMgが主成分の蛇紋岩とは言えない。また、Ca/Kの値が1.0以下ではCaが主成分の軟玉とは言えない。滑石鉱床はしばしば蛇紋岩中の小レンズ鉱床となっている場合が多く、滑石は玉類の原材料に使用される。出土玉類の中には硬度が約2.5のものも見られ、比重なども滑石、蛇紋石に近いが一致しない。緑色であることを考慮すると緑泥石の比重、硬度に一致する。しかし緑泥石の主成分組成のMg、Feの量が少ない。また、緑泥石の可能性が低い理由としてKの含有量が非常に高いことがあげられる。これら玉類の硬度、比重、Al元素、K元素の含有量が多いことなどを考え合わせると雲母系と一致すると考えられるが結晶構造による判断が必要である。遺物のCrの含有量が比較的多くなっている。このクロムがCr³⁺として存在していると、緑色になることが知られているため、Crが緑色の原因元素になっている可能性は考えられ、岩石名はクロム雲母岩の可能性は推測できるが、正確に遺物の岩石名を決定するには様々な鉱物学的分析に基づいた結果から求める必要がある。他の結晶片岩様緑色岩製玉のX線回折の結果によれば、細粒の白雲母の微結晶集合体であると同定している。鹿児島県加世田市川畑2627-1に位置する上加世田遺跡の縄文時代後期出土の玉材は、これら結晶片岩様の緑色岩を使用した玉造遺跡で、平成8年度出土の管玉46個、勾玉6個、小玉6個、未製品12個、玉材39個、平成7年以前の調査で出土した玉類40個の合計150個を蛍光X線分析によって元素を分析し、その結果を分類して上加世田第1群、上加世田第2群、上加世田第3群、上加世田第4群の4個の遺物群を作った(表51)。また、上加世田諸群に一

致しない遺物が、的場遺跡、川平遺跡、大坪遺跡で見つかり、それぞれ遺物群を作り、他の遺跡で使用されているか否かを判定できるように表51・52に登録した。このように各遺物群に分類されるのは結晶片岩様緑色岩の原石産地が分類群ごとに数カ所存在するのではなく、肉眼観察とESR分析結果から推測して、含有される鉱物の種類が多く、分布が不均一なために玉ごとの元素組成の変動が大きくなったと推測される。各遺跡で出土する結晶片岩様緑色岩製玉類の蛍光X線分析値と上加世田遺跡などの遺物群と比較し多変量統計のマハラノビスの距離からT2乗検定(確率は8元素比とし計算、実際より確率値が若干小さく計算される)することにより上加世田遺跡の玉に一致するか否か同定できる。大賀克彦氏提供の長野県茅野市産クロム雲母岩には、砒素が含有され、またバリウムの含有量が検出限界程度で、上加世田遺物群と異なる組成を示している。

4上ノ村遺跡出土結晶片岩様緑色岩製玉類の蛍光X線分析結果と判定

上ノ村遺跡から出土した玉類の肉眼観察では、上加世田遺跡の玉類との様式比較ではエンタシス形管玉、平丸玉など酷似し、石質も酷似し一致していると思う。『上ノ村遺跡の玉類が上加世田遺跡の玉類と一致しないと推定した仮定』の間違いの危険性を求めるのが、産地分析の自然科学分析である。

上ノ村遺跡には表面の泥を超音波洗浄器で水洗いするだけの完全な非破壊で蛍光X線分析を行った。分析番号107798～107801番の遺物は結晶片岩様緑色岩製と推測され観測された元素は、マグネシウム(Mg)、主成分と推測されるアルミニウム(Al)、珪素(Si)であり、その他に比較的含有量の多い元素はカリウム(K)、チタン(Ti)、クロム(Cr)、鉄(Fe)、バリウム(Ba)で、他にカルシウム(Ca)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)、ニオブ(Nb)、マンガン(Mn)の15元素で、これら元素をセイコーインスツルメンツ社製卓上型ケイ光X線分析装置(SEA2110L)により分析を行った。蛍光X線スペクトルをFig.121～124に示した。結晶片岩様緑色岩製玉類の化合物元素濃度および分析した玉の比重をアルキメデス法で測定し表54に示した。計算された濃度は破壊して行う厳密な定量分析値ではなく、半定量分析で、得られた濃度には誤差が相当含まれる可能性がある。この遺物の原石産地を明らかにするためにAl/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Mn/Fe、Ti/Fe、Sr/Rb、Y/Rb、Mg/Si、Cr/Fe、Ba/Zr、Ba/Srなどの各元素比(任意単位)の値を求め表3に示した。また、玉の比重は岩石の種類を同定するときに重要な指標になる。比重はメトラ・トレド社AG245型電子天びんで、遺物の汚染をさけるために蒸留水を用いたアルキメデス法で測定した。得られた玉類のかさ比重は2.828～2.901であり、これらの結果は上加世田諸群、的場遺跡、川平遺跡、大坪遺跡の遺物群の結晶片岩様緑色岩の比重2.6～3.0の範囲にはいる。また、かさ比重が2.679より軽い遺物原石は上加世田群の中に1個見られるにすぎない。これら玉類の元素分析の結果について、上加世田諸群、的場遺物群、川平I遺物群、大坪14遺物群と比較した結果は、分析番号107737～107743番は上加世田遺物で作った上加世田諸群の複数の遺物群にそれぞれ信頼限界の0.1%を大きく越えて一致した(表55)。蛍光X線分析で含有元素が一致することが明らかになったが、さらに、玉類に含有されている鉱物に関する信号を分析するESR分析結果も一致すればさらに正確な同定結果が得られる。

5 ESR法による産地分析

ESR分析は玉類石材に含有されているイオンとか、玉材が自然界からの放射線を受けて出来た色中心などの常磁性種を分析し、その信号から玉材産地間を区別する指標を見つけて産地分析に利用する方法である。ESRの測定は完全な非破壊分析であり、直径が11 mm以下の管玉状のものなら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大のものでも分析できる場合がある。通常ESR信号を出す常磁性種が一種類ではなく4種類以上あるため、ESR信号は複雑なスペクトルになっている。上加世田遺跡では各玉製品とか玉材毎に4種類以上の常磁性種の混合比が不均一に含有されている。したがって、ESR信号はこれら常磁性種の合成した形で観測されるためにESR信号のスペクトルの形は玉毎に異なる。上加世田遺跡の玉の信号と分析した管玉の信号を重ね合わせて一致すれば問題ないが、ここで重要なことは、一致しなくても同じ常磁性種が管玉に含有されているか否かである。

ESR信号を出す常磁性種の個数の同定を鹿児島県上加世田市上加世田遺跡出土の緑色片岩様玉類の分析結果を用いて試みFig.125に示した。(1)のバックグラウンド信号と名付けた信号Ⅱは玉によっては信号形が異なることから複数の鉄イオンの信号で構成されている可能性が推測される幅広い信号である。(2)は幅の広いバックグラウンド信号と上加世田遺跡出土玉類に特徴的なY、X、W、Z、Ⅲの一組になったピーク信号を出す常磁性種とで構成される。信号ⅡにはSiO₂に関係した信号が含まれている可能性が推測される。W→Ⅲ、Ⅲ→W、W→Xのピーク間に見られる小さな常磁性種は玉によっては非常に大きな信号になり、W、Y、Ⅲのピークと重なった部分は相互に変形する。また、一組になったピーク信号は、例えばYが測定されれば、残りのピークも他の信号と合成されて変形して確認が困難な場合もあるが必ず存在する。(3)は幅の広いバックグラウンド信号に、マンガンイオンによると思われるP、Q、R、S、T、Uの同じ信号強度の6本が一組の信号に合成されてできたESRスペクトルである。Mnイオン濃度が低い状態で、(2)の信号と合成されるとPとかP、Q(Wと重なり変形)のピークのみ確認されR、S、T、Uが変形したために確認できないと推測される場合が多い。(4)は幅の広いバックグラウンド信号に、少量の(2)が重なっている状態が確認でき、また、信号を出す常磁性種は同定出来ていないが、O、Vのピーク信号は2:1の比で1000 Gauss(G)間隔で対になって構成されている。以上最低4種類の常磁性種の存在が確認できた。また、W→Ⅲ、Ⅲ→W、W→Xのピーク間に見られる信号が何種類の常磁性種で構成されているか不明で、まだ上加世田遺跡出土玉類のESR信号を完全に説明できない部分が残っている。分光学的に説明ができなくても、Y、X、W、Z、Ⅲのピークを出す常磁性種が上加世田遺跡出土玉類に共通して存在することを利用すれば玉類石材の産地分析に応用できる。

今回測定したESR信号は日本電子社製FA100型電子スピン共鳴装置を用いて分析した。上ノ村遺跡出土玉類のESRスペクトルをFig.126に示す。ESRスペクトルには、上加世田遺跡出土玉類に特徴的なY、X、W、Z、Ⅲのピーク信号を出す常磁性種とマンガンイオンによると思われるP、Q、R、S、T、Uが重なっているように観測されることから、上加世田遺跡出土玉類と一致すると判定した。玉類の産地分析では蛍光X線分析の結果とESR信号の結果を併せて総合的に判定し、それぞれが同じ石材群に同定されたとき、玉類がその群の原石と同じものが使用されていると推定した。

6上ノ村遺跡出土結晶片岩様緑色岩(クロム雲母岩)製玉類の考察

上ノ村遺跡出土結晶片岩様緑色岩製玉類について、蛍光X線分析法により求めたマハラノビスの距離を用いて『上ノ村遺跡の玉類は上加世田遺跡の玉類と一致しないと仮定し』ホテリングのT2乗検定を行ったところ、上ノ村遺跡の玉類4個は、この仮定が間違っている危険度(確率)が非常に高いという結果が得られ、この仮定が間違っているなら、上ノ村遺跡の結晶片岩様緑色岩製玉類は上加世田遺跡の玉類と一致していると判定した。また、上加世田遺物群の玉類の原材がクロム雲母岩と推測されていることから、上ノ村遺跡の4個の玉類の原材もクロム雲母岩の可能性が非常に高い。また、含有鉱物からのイオン信号のESR分析の結果も上加世田遺跡出土玉類の結晶片岩様緑色岩と一致したことから、上加世田遺跡で使用されている同じ原石が使用されていると判定した。今回分析した結晶片岩様緑色岩の原材産地として特に注目されている産地であるヒスイ類似岩の原産地の長崎県大瀬戸町雪浦産原石と誤解されることが非常に多い。確かに、肉眼観察では区別が困難で比重も一致している。この結晶片岩様緑色岩と呼んでいる原材と大瀬戸町産原石の異なる点は、バリウム元素の含有量が結晶片岩様緑色岩の方が桁違いに多いことである。このことにより、両者は容易に区別できる。結晶片岩様緑色岩製玉類、剥片、加工途中の未製品が出土する遺跡は九州南部に集中し、その中で上加世田遺跡、大坪遺跡、ワクド遺跡では剥片が確認されている。また、製品のみでの使用では、縄文時代後期、晩期または後期～晩期に関係する遺跡である宮崎県学頭遺跡の丸玉、岐阜県の西田遺跡(上加世田遺跡より直線距離で約800キロメートル伝播)の丸玉、島根県匹見町のヨレ遺跡の管玉、勾玉、岡山県吉野口遺跡の管玉、向出遺跡出土の小玉、和歌山県溝ノ口遺跡の白玉にそれぞれ使用されている。このことから、結晶片岩様緑色岩も糸魚川地域産硬玉製玉類に匹敵する伝播距離を示す可能性があり、先史人にとって非常に重要な玉類原材であったことが推測される(Fig.127)。本遺跡出土、平丸玉、管玉は九州南部産の玉が伝播した可能性が推測され、本遺跡が九州南部の情報・文化を入手していたと推測できる。

参考文献

- 1) 茅原一也(1964)、長者が原遺跡産のヒスイ(翡翠)について(概報)。長者ヶ原、新潟県糸魚川市教育委員会:63-73
- 2) 藁科哲男・東村武信(1987)、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要6:1-18
- 3) 藁科哲男・東村武信(1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』、14:95-109
- 4) 藁科哲男・東村武信(1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16:59-89
- 5) Tetsuo Warashina(1992)、Allocation of Jasper Archeological Imple ments By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19:357-373
- 6) 番場猛夫(1967)、北海道日高産軟玉ヒスイ。調査研究報告会講演要旨録No.18:11-15
- 7) 河野義礼(1939)、本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質。岩石鉱物鉱床学雑誌22:195-201
- 8) 李弘鍾、朴淳發、朴天秀、朴升圭、李在煥、金大煥、藁科哲男、中村大介、「韓半島における玉類の理化学的分析と流通」第17回湖西考古学会学術大会発表要旨、96-137(2008.4.26)

表51 上加世田、的場遺跡出土結晶片岩様緑色岩製遺物による遺物群の元素比の平均値と標準偏差値

遺物群名	個数	元素比				
		Mg/Si	Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K
上加世田第1群	25	0.359±0.704	0.373±0.062	18.521±1.779	0.287±0.208	0.625±0.202
上加世田第2群	19	0.395±0.346	0.357±0.064	18.508±2.093	0.354±0.312	0.442±0.128
上加世田第3群	59	0.716±0.375	0.260±0.045	17.898±1.578	0.221±0.136	0.422±0.158
上加世田第3群	34	0.662±0.882	0.308±0.294	18.054±1.992	0.228±0.169	0.411±0.252
的場遺物群	45	0.095±0.023	0.339±0.015	20.676±0.540	0.059±0.021	0.237±0.090
三内丸山7069遺物群	43	0.207±0.019	0.096±0.007	2.584±0.278	0.439±0.043	0.413±0.032
蒲生勾玉T-27遺物群	46	0.351±0.017	0.385±0.003	17.792±0.233	0.008±0.002	0.0451±0.003

遺物群名	個数	元素比				
		K/Fe	Ti/Fe	Cr/Fe	Mn/Fe	Fe/Zr
上加世田第1群	25	1.649±0.886	0.913±0.510	0.910±0.555	0.033±0.020	0.787±0.536
上加世田第2群	19	1.097±0.599	0.452±0.294	0.374±0.369	0.020±0.012	2.842±3.064
上加世田第3群	59	0.820±0.535	0.302±0.213	0.318±0.244	0.015±0.009	3.144±2.437
遺物群名	個数	元素比				
		K/Fe	Ti/Fe	Cr/Fe	Mn/Fe	Fe/Zr
の場遺物群	45	1.966±0.093	0.454±0.154	0.324±0.047	0.010±0.007	4.318±1.337
三内丸山7069遺物群	43	0.049±0.008	0.019±0.003	0.014±0.002	0.010±0.001	2.213±0.358
蒲生勾玉T-27遺物群	46	0.698±0.028	0.029±0.001	0.036±0.004	0.024±0.001	4.357±0.426
遺物群名	個数	元素比				
		Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Ba/Zr	
上加世田第1群	25	0.273±0.104	0.634±0.157	0.033±0.028	63.338±25.035	
上加世田第2群	19	0.717±0.653	3.157±3.513	0.049±0.061	161.605±211.1	
上加世田第3群	59	0.984±0.439	0.181±0.162	0.097±0.082	57.082±22.78	
上加世田第3群	34	1.886±5.936	1.174±2.862	0.255±0.591	121.500±156.3	
の場遺物群	45	2.977±0.995	8.079±2.772	0.118±0.117	304.053±224.9	
三内丸山7069遺物群	43	2.178±0.013	0.794±0.078	0.096±0.004	4.370±0.290	
蒲生勾玉T-27遺物群	46	6.040±0.461	23.084±1.775	0.250±0.038	49.799±3.758	
平均値±標準偏差						

但し: の場遺跡小玉は上加世田第2群に45回分析中1回のみ0.2%で一致

表52 川平 I 遺跡出土結晶片岩様緑色岩製遺物による遺物群の元素比の平均値と標準偏差値

遺物群名	個数	元素比				
		Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe
川平 I 遺物群	36	0.232±0.035	10.129±1.777	0.158±0.031	0.094±0.037	0.314±0.199
大坪14遺物群	47	0.332±0.015	19.767±0.718	0.055±0.030	0.101±0.013	0.485±0.132
遺物群名	個数	元素比				
		Ti/Fe	Cr/Fe	Mn/Fe	Rb/Fe	Sr/Rb
川平 I 遺物群	36	0.022±0.007	0.091±0.032	0.014±0.002	1.010±0.642	0.275±0.016
大坪14遺物群	47	0.041±0.009	0.016±0.009	0.005±0.001	0.212±0.071	3.251±0.797
遺物群名	個数	元素比				
		Y/Rb	Ba/Sr			
川平 I 遺物群	36	0.032±0.014	28.803±4.726			
大坪14遺物群	47	0.049±0.038	64.876±11.80			
平均値±標準偏差						

平均値±標準偏差

表53 上ノ村遺跡出土結晶片岩様緑色岩製玉類の非破壊分析化合物元素濃度

分析番号	化合物元素組成(% wt)									
	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Cr	MnO	
107798	0.813	1.481	30.796	52.387	9.817	4.093	0.000	0.001	0.001	
107799	0.700	1.926	27.620	54.813	10.016	4.637	0.000	0.002	0.000	
107800	0.288	1.275	28.768	55.608	11.784	2.011	0.000	0.001	0.000	
107801	0.661	1.783	29.146	54.669	10.275	3.151	0.000	0.001	0.001	
分析番号	化合物元素組成(% wt)								重量 g r	比重
	Fe ₂ O ₃	Ni	Rb	Sr	Y	Zr	Ba			
107798	0.022	0.000	0.001	0.001	0.000	0.002	0.587	1.143	2.876	
107799	0.052	0.001	0.001	0.001	0.000	0.002	0.228	0.215	2.901	
107800	0.030	0.001	0.001	0.000	0.000	0.001	0.232	0.087	2.828	
107801	0.033	0.002	0.001	0.000	0.000	0.001	0.279	0.269	2.861	

表54 上ノ村遺跡出土結晶片岩様緑色岩製玉類の元素分析値と比重の結果

分析番号	元素分析値の比量																	試料比重	試料重量(g)	
	Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Mn/Fe	Ti/Fe	Sr/Rb	Y/Rb	Mg/Si	Cr/Fe	Ba/Zr			Ba/Sr
107798	0.312	17.434	0.489	1.097	0.661	0.202	1.275	0.256	0.649	0.027	0.021	0.671	2.543	0.107	0.651	0.474	84.214	163.680	2.876	1.143
107799	0.260	16.465	0.541	0.664	0.266	0.143	3.113	0.442	0.434	0.141	0.010	0.164	0.985	0.318	0.774	0.223	33.932	98.601	2.901	0.215
107800	0.273	19.030	0.190	0.376	0.572	0.313	3.355	1.047	0.390	0.089	0.010	0.199	0.374	0.085	0.530	0.236	66.749	216.111	2.828	0.087
107801	0.280	17.100	0.357	0.408	0.404	0.206	3.572	0.733	0.146	0.089	0.020	0.153	0.200	0.121	0.748	0.141	75.978	655.661	2.861	0.269
JG-1 a)	0.030	0.169	0.169	0.090	1.320	2.307	0.180	0.002	0.011	0.000	0.401	0.798	0.050	6.020	0.000	0.000	0.770	0.150		

a) 標準試料、Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E.(1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt.

表55 上ノ村遺跡出土結晶片岩様緑色岩製玉類の原材産地分析結果

分析番号	遺物品名	ホテリングのT2乗検定(確率)	E S R 信号形	総合 判定
107798	平丸玉	上加世田第1群(65%), 上加世田第1、2群(37%), 上加世田第2群(33%), 上加世田第4群(25%)	上加世田形	上加世田
107799	小平丸玉	上加世田第2群(91%), 上加世田第1、2群(72%), 上加世田第4群(69%), 上加世田第3群(38%), 上加世田第1群(0.1%)	上加世田形	上加世田
107800	小平丸玉	上加世田第3群(95%), 上加世田第4群(92%), 上加世田第2群(91%), 上加世田第1、2群(27%)	上加世田形	上加世田
107801	小管玉	上加世田第2群(92%), 上加世田第3群(84%), 上加世田第1、2群(83%), 上加世田第4群(58)	上加世田形	上加世田

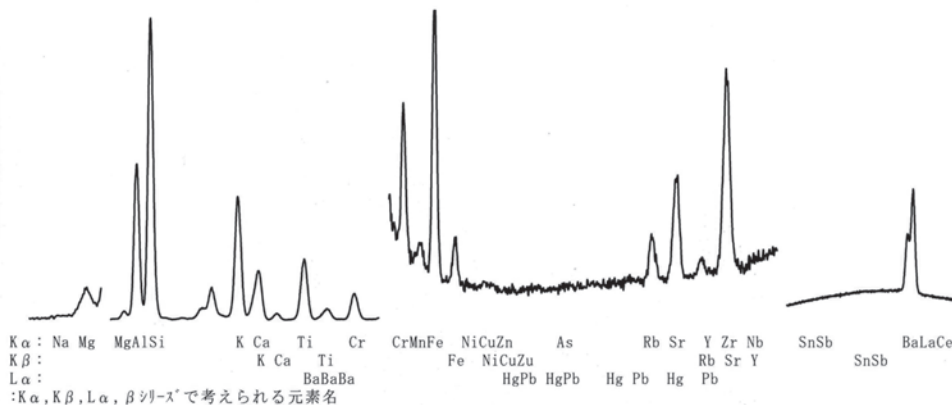


Fig.121 上ノ村遺跡出土結晶片岩様緑色岩製平玉(107798)の蛍光X線スペクトル

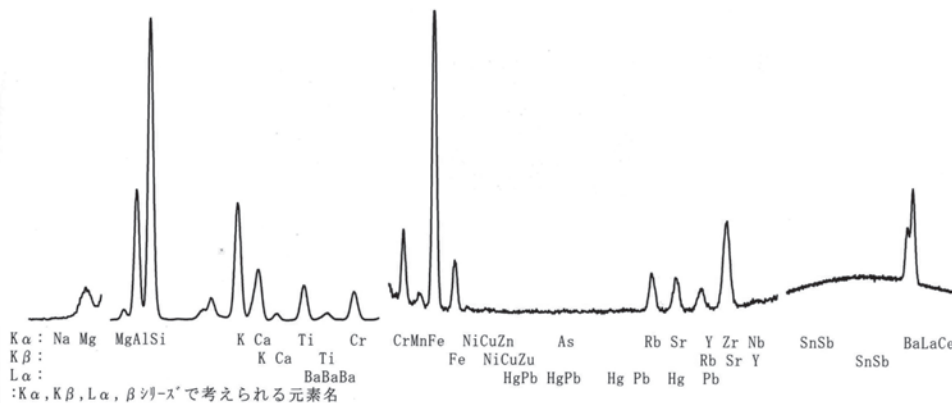


Fig.122 上ノ村遺跡出土結晶片岩様緑色岩製平玉(107799)の蛍光X線スペクトル

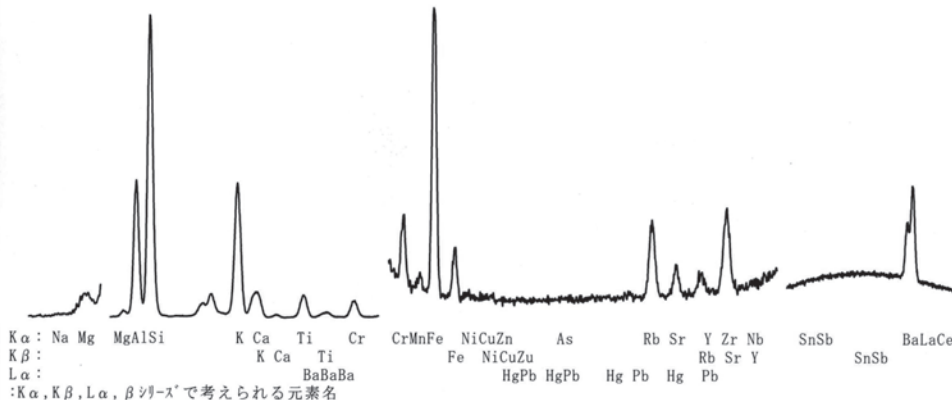


Fig.123 上ノ村遺跡出土結晶片岩様緑色岩製平玉(107800)の蛍光X線スペクトル

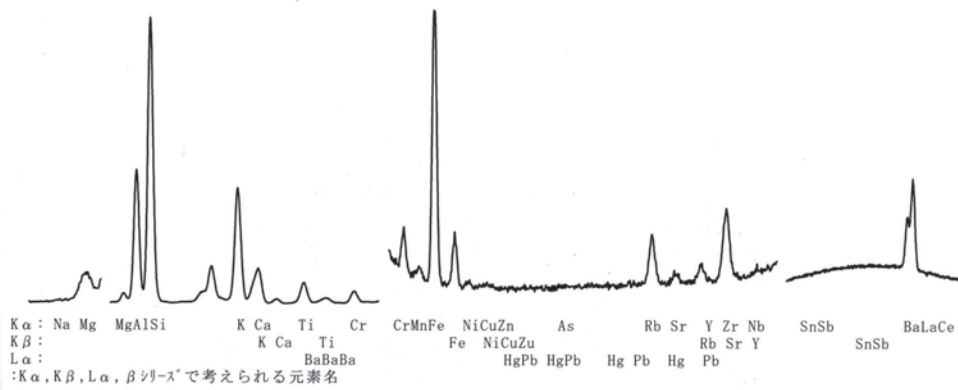


Fig.124 上ノ村遺跡出土結晶片岩様緑色岩製平玉(107801)の蛍光X線スペクトル

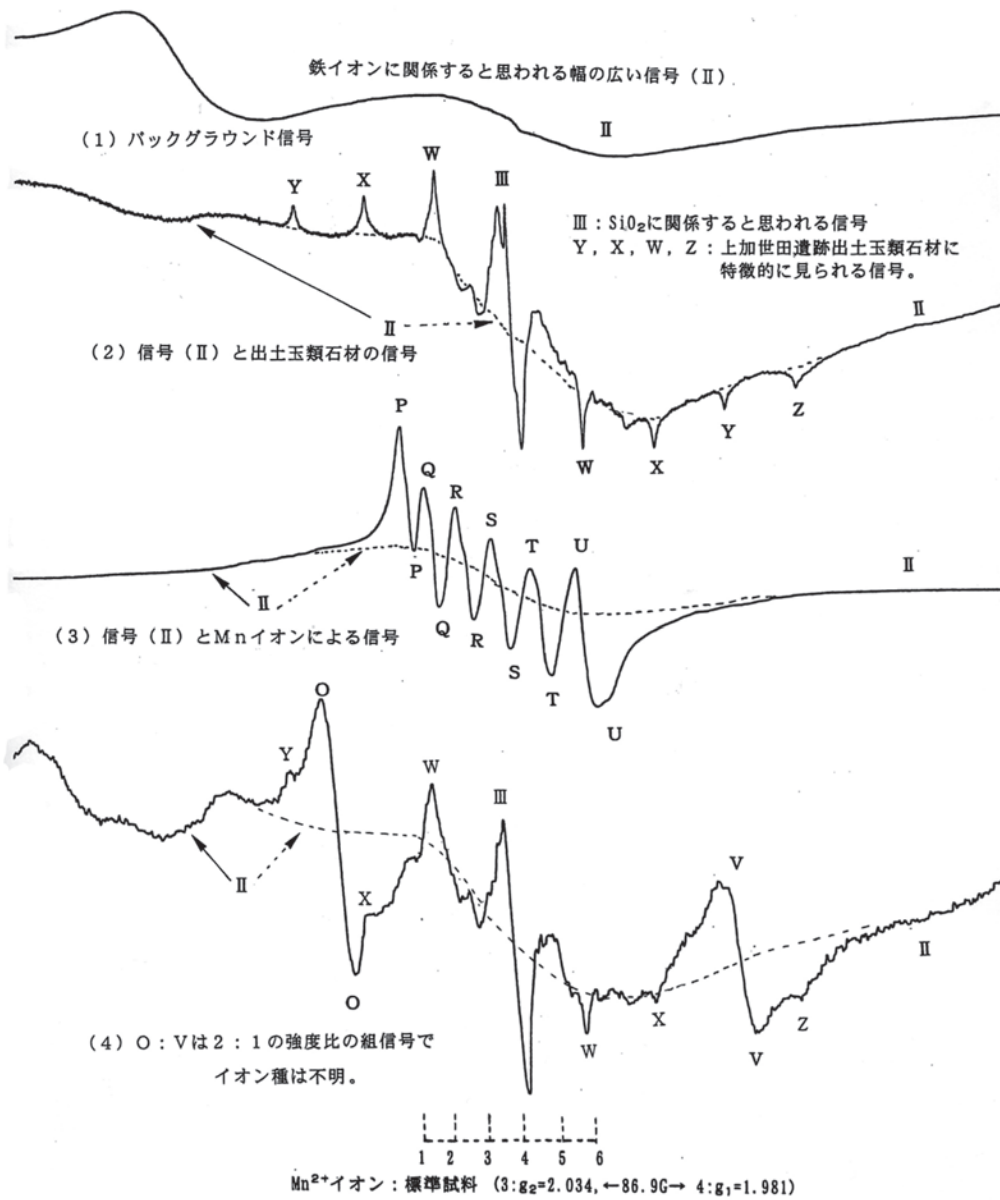


Fig.125 上加世田遺跡出土玉類石材のESR信号(結晶片岩様緑色玉類石材, 比重3.0~2.7)

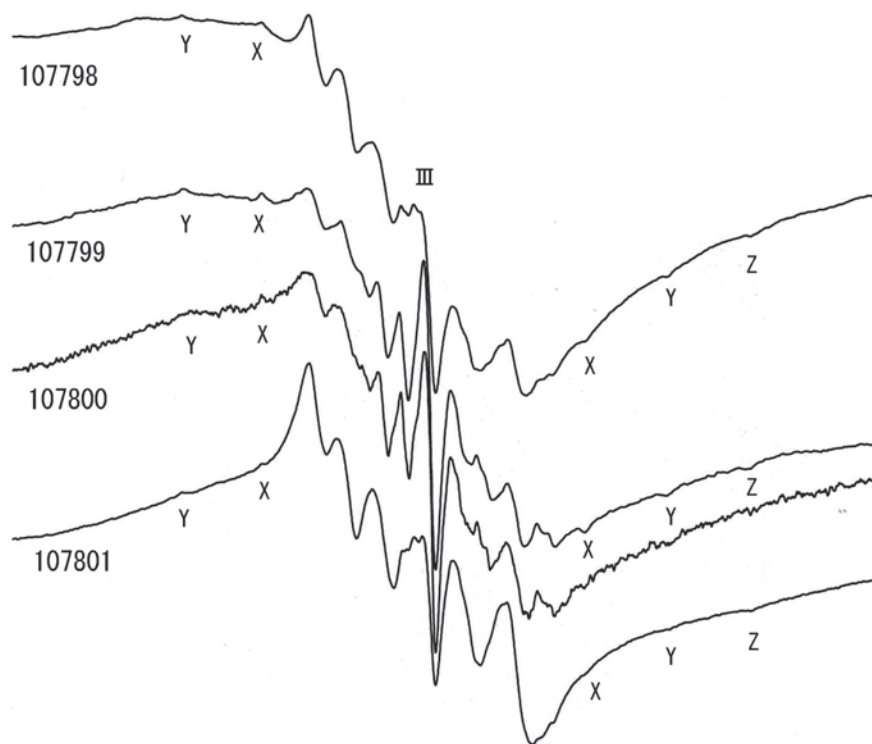


Fig.126 上ノ村遺跡出土結晶片岩様緑色岩製玉類のESRスペクトル

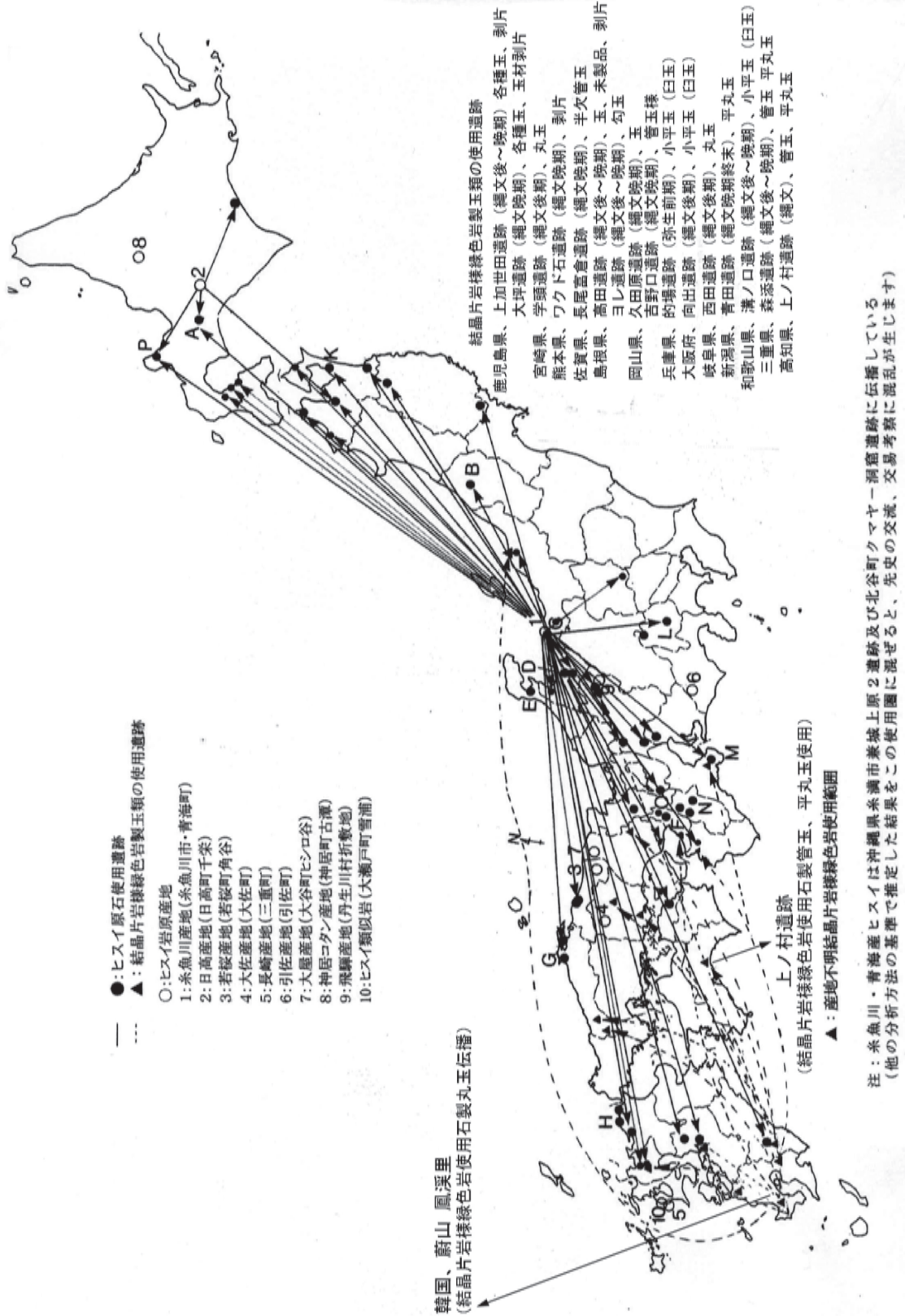


Fig.127 結晶片岩様緑色岩製玉類使用遺跡分布圏及びヒスイ製玉類使用遺跡分布圏

5 上ノ村遺跡出土緑泥石片岩製小玉の産地分析

有限会社 遺物材料研究所
藁科哲男

滑石・緑泥石片岩様製玉類の分析と分類

(1) 蛍光X線分析法による分類と産地分析結果

管玉は、超音波洗浄器で水洗を行うだけの完全な非破壊分析で行い、大きな玉類は肉眼で汚染の少ない面を選んで直径約1cmφ以内の部分进行分析した。

滑石・緑泥石片岩様製玉類のエネルギー分散型蛍光X線分析の蛍光X線スペクトルを勾玉、管玉について図1示す。分析された元素のピークは、マグネシウム(Mg)、アルミニウム(Al)、珪素(Si)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、クロム(Cr)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ニッケル(Ni)で、緑泥石片岩には微量にイットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)などが観測できる。これら元素含有量の分析値には、分析遺物の形状の違いによる影響が含まれているために、遺物相互の組成比較は、元素比を取って形の影響を取り除き元素比組成を求め、また比重を求めて表1に示した。今回は分析した遺物が大阪府阪南市亀川遺跡および可見市昼飯大塚古墳群で使用されている玉類の原材と元素組成が区別できるか、否か判定するために、表2に示した亀川遺物群と昼飯大塚遺物群と上ノ村出土緑泥石片岩製管玉をマハラノビスの距離を求めてホテリングのT2乗検定によって同定結果では、亀川2遺物群(31%)、昼飯大塚1遺物群(0、2%)になり表3に示した。また、さらに判定の精度を上げるためにESR分析を併用した。

(2) ESR分析による分類

ESR分析は滑石、緑泥石片岩などの鉱物結晶および共生鉱物に含有されているイオンとか、岩石が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号違いから産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ESRの測定は、完全な非破壊分析で、直径が11mm以下の玉なら分析は可能で、ESR信号の強度が大きい場合は、胡麻粒大の試料で分析ができる場合がある。滑石、緑泥石片岩の代表的なESRスペクトルとして、昼飯大塚古墳出土遺物のESR信号を図3に示した。

滑石、緑泥石片岩などのESR信号は全て基本的には6本から構成されその間隔はESR信号のg値決定用の標準試料Mn²⁺に一致していることから、滑石、緑泥石片岩の中のMgを置換したMnに関係した信号と推測した。(1)の0mT(ミリテスラー)から600mT間のESR信号の中で、100mT～200mTの信号は鉄の高スピンの信号と推測され、遺物の中には2本に分裂した信号を示すものも見られた。また200mT～600mT間の大波の信号は鉄の低スピンの信号と思われ、この鉄信号に300mT～400mT間にMnイオンの6本が重なる形で分析される。(2)の信号は240mT～430mT間を拡張してMnイオン信号に注目して示した。変成岩では変成度の違いなどで、生成鉱物種も異なり、鉱物ごとにMnイオンの周り原子との相互作用が異なると推測される。Mnイオンの6本の信号は分裂し超微細構造を示し複雑な形となる(仮に複6形と呼ぶ)。この超微細構造はg異方性を示す場合が多く、試料を回転させて分析すると、ESR信号が変化するため、信号が異なる事が直ちに遺物玉材の岩石の種類が違うとはいえない。実際に試料を回転させて信号が変化するか否かを確かめる必要がある。しかし、幅の広い単純な6本(仮に単6形と呼ぶ)の信号を示す遺物は、回転させても、信号

の形の変化はない。従って、複6形と単6形は異なった鉱物の可能性が推測され、岩石を区別する指標になると思われる。同じ変成度で同じ鉱物であれば、同じ信号になることは想像できる。分析番号76965番で明確に確認できる鉄イオンの信号と思われる大波の信号は、多少の差はあるものの全ての滑石、緑泥石片岩に含有されている。分析番号76945は鉄信号と小さな単6形の信号が重なり(鉄・単6形)、さらに不明の常磁性種(他イオン)の小さな信号も重なっている。これら代表的な、4個の形のESR信号と比較するために、上ノ村遺跡出土管玉のESR信号を単6形を図3に示した。比較する昼飯大塚古墳と亀川遺跡の遺物群の表2の中で、単6、複6形など理想化したスペクトルを推測し、同じ鉱物とか結晶が含有されていると推測してのことで、実際の測定スペクトルを重ね合わせてぴったり一致すると言う意味ではない。実際のESR信号には、鉄イオンの信号が大きすぎて、Mnイオンの信号が隠れている可能性もあり、また、鉄、Mnイオン以外の信号が重なっていると思われる場合もみられる。昼飯1遺物群は単6形が主体で、昼飯2遺物群は鉄のみ、鉄と小さな単6、複6形が中心で大きな単6は群の22個の中の2個にすぎない。亀川1遺物群は単6形で、亀川2遺物群は複6形である。上ノ村遺跡の単6形は昼飯1遺物群、亀川1遺物群に一致し比重も誤差範囲内で一致している。判定は蛍光X線分析法とESR分析の両結果が一致した群の可能性があるととして総合判定を行う

(3) 結論

今回分析を行った上ノ村遺跡出土管玉は蛍光X線分析法でマハラノビスの距離を求めてホテリングのT2乗検定によって同定を行った結果、高確率で亀川2遺物群に高確率で、また信頼限界の0.1%に近い低い確率で昼飯1遺物群に一致し、一方ESR分析では単6形で、両分析が一致した遺物群は昼飯1遺物群で、総合判定として昼飯1遺物群であるが、蛍光X線分析法での結果の確率が昼飯1遺物群(0.2%)と低く可能性として推測できるが、積極的に考古学への資料としての利用は慎重にすべきと思われる。

今後、滑石、緑泥石片岩などの原石産地の探索および日本各地の遺跡から出土する玉類を多数分析し同質の石材で作られた玉類の分布圏を明らかにする必要がある。

参考文献

- 1) 茅原一也(1964)、長者が原遺跡産のヒスイ(翡翠)について(概報)。長者ヶ原、新潟県糸魚川市教育委員会:63-73
- 2) 藁科哲男・東村武信(1987)、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要 6:1-18
- 3) 藁科哲男・東村武信(1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研究所紀要『考古学論叢』、14:95-109
- 4) 藁科哲男・東村武信(1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16:59-89
- 5) Tetsuo Warashina(1992)、Allocation of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19:357-373
- 6) 東村武信(1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9:77-90

表56 上ノ村遺跡出土緑泥石片岩製小玉の元素分析結果

分析番号	元素比																重量グラム	比重
	Na/Si	Mg/Si	Al/Si	K/Si	Ca/Si	Ca/Ti	Ca/Fe	Cr/Fe	Cr/Mn	Mn/Ti	Ti/Fe	Mn/Fe	Ni/Fe	Y/Fe	Zr/Fe	Y/Zr		
99735	0.127	4.203	0.212	0.199	1.625	0.453	0.004	0.004	0.563	0.565	0.011	0.006	0.001	0.003	0.020	0.171	0.202	2.723

表57 上ノ村遺跡出土緑泥石片岩製勾玉の産地分析結果

分析番号	遺物番号	種別	ホテリングのT2乗検定結果	ESR信号形	総合判定	比重
99735		勾玉	亀川2遺物群(31%)、昼飯1遺物群(0.2%)	単6形	昼飯1遺物群?	2.723

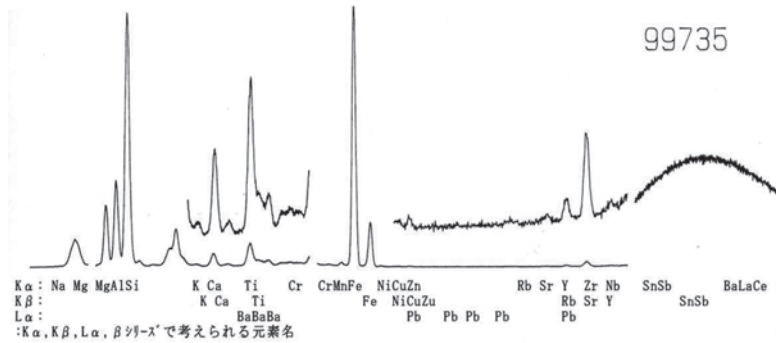


Fig.128 上ノ村遺跡出土管玉(99735)の蛍光X線スペクトル

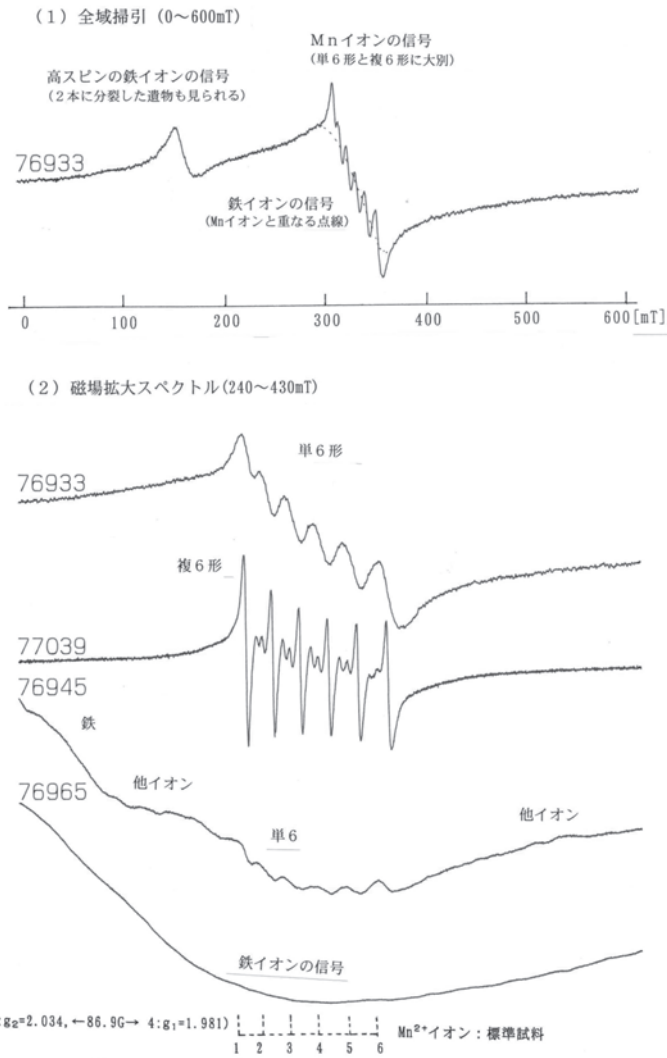


Fig.129 昼飯大塚古墳出土滑石, 緑泥石片岩様玉類の代表的なESRスペクトル

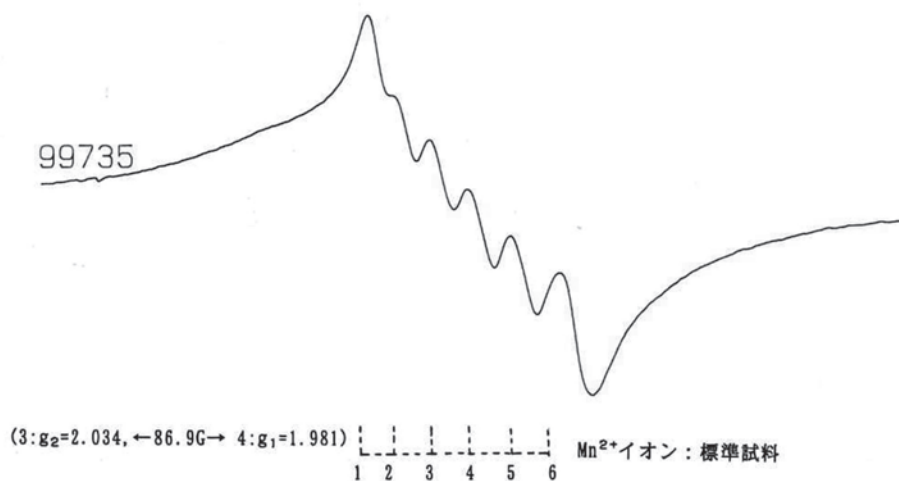


Fig.130 上ノ村遺跡出土緑泥石片岩製管玉のESRスペクトル

6 上ノ村遺跡勾玉の原材産地分析

有限会社 遺物材料研究所
藁科哲男

1 はじめに

勾玉、玉、垂玉、管玉などの岩石名の推定は、一般的には肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが真実のよう思われているのが実態である。玉類の原材料としては滑石、軟玉(角閃石)、硬玉、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉、緑色凝灰岩(グリーンタフ)などが推測される。それぞれの岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義するには限度があり、若干の傷を覚悟して硬度を求める、色、光沢感、比重、介在物の有無、定性的な成分組成を求めるなどであり、岩石名を決める重要な結晶構造、屈折率など鉱物組成を明らかにする情報は得られない。また、肉眼観察で求めた岩石名が岩石・鉱物学界で通用するとは思えない。原石名が決定されたのみでは考古学の資料としては不完全で、例えば緑色凝灰岩の管玉と言う岩石名が決められても産地は沢山あり何れの産地か不明である。また、軟らかく加工が容易だと想像できても、実際の硬度、打撃亀裂性などを測定した上で考察しなければ、古代の管玉製作技術に関する資料として無意味である。地学の専門家でも肉眼観察では、岩石名を間違えることは避けられないと指摘している。岩石名を決定することよりも、どこの産地の原石が使用されているか、産地分析が行われて初めて、考古学に寄与できる資料となり、また産地分析の過程で岩石名決定に関係する情報の一部が得られるが岩石名を特定するには至らない場合が多い。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国雲南省、ビルマなどの国外説が主であったが、発見後は専ら国内説が有力となり、また、岩石学的方法および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行える蛍光X線分析を用いた元素比法が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究では蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析をより正確に行った例)が報告されている。石鏃などの石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1)石器の原材産地推定で明らかになる遺跡から石材原産地までの移動、活

動範囲は、石器が生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2)玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で明らかになるヒスイ製玉類の原石産地からの分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば権力圏を現わしているかもしれないし、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏であることが推測される。石器の原材産地分析では得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。産地分析で遺物の原材産地が特定出来なくても得られた分析値と同じ元素組成の遺物を使用した遺跡の広がりを求めることにより、遺跡間相互になんらかの関係があったと推測できる情報が得られ、将来、原材産地の所在地が明らかになれば原石伝播に関する情報も得られる。今回分析を行った玉類は高知県土佐市上ノ村に位置する上ノ村遺跡の縄文時代晩期の勾玉で産地分析の結果が得られたので報告する。

2 非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかくおこなってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。また、原石産地が不明の玉材を使用した遺物についても、遺物同士の指紋を比較することにより、同質の玉材が使用されているか否かが判定できる。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している)非破壊で分析を行なう蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして試料ホルダーに置くだけの完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。結晶片岩様緑色玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から玉材産地間を区別する指標を見つけて産地分析に利用した)。

3 上ノ村遺跡出土勾玉の結晶片岩様緑色岩製勾玉の原材産地分析

(1)原石産地不明の結晶片岩様緑色(クロム雲母)岩玉類の蛍光X線分析

原石産地不明の肉眼観察で結晶が片岩様整列し明るい緑色をした玉材および玉類は九州南部の遺跡から出土するが、原石産地は不明で、肉眼的に均一な石質ばかりではなく、中には不均一で緑色の部分に石英脈状岩石が貫入しているもの、緑色部分に黄色の微小斑点が見られる物、結晶並びが明確なもの、また良質硬玉様のろうかん質に見える部分があるなど様々である。従って、これら玉類はヒスイ製、軟玉製、滑石製、蛇紋岩製など様々に推測されてきた経緯がある。この玉類の岩石名を決定

するには、岩石を構成する鉱物の種類を求める必要があり、X線回折など結晶定数から同定する必要がある。蛍光X線分析でこれら玉類から硬玉の主成分組成であるNa元素が検出限界程度であることと、硬玉の比重の3.1以上に達しないとの理由から硬玉の可能性はないと考えられる。また、玉類の比重が2.7以上であることから石材が碧玉の可能性も否定できる。これら玉材の割れ面は平面のものが多く、肉眼観察で結晶に平行な劈開面がみられることから、結晶片岩様緑色岩と仮称する。結晶が一定方向に並んだ岩石は広域変成帯で生成されることから玉材の起源が変成帯の可能性が推測される。広域変成帯ではMgが主成分の蛇紋岩、Mg、Caが主成分の透角閃石とかMg、Ca、Feが主成分の陽起石の軟玉が産出する。玉類に含有されるMg/Si比値がMgが主成分の蛇紋岩とは言えない。また、Ca/K比値もCaが主成分の軟玉とは言えない。滑石鉱床はしばしば蛇紋岩中の小レンズ鉱床となっている場合が多く、滑石は玉類の原材料に使用される。出土玉類の中には硬度が約2.5のものも見られ、比重なども滑石、蛇紋石に近いが一致しない。緑色であることを考慮すると緑泥石の比重、硬度に一致する。しかし緑泥石の主成分組成のMg、Feの量が少ない。また、緑泥石の可能性が低い理由としてKの含有量が非常に高いことがあげられる。これら玉類の硬度、比重、Al元素、K元素の含有量が多いことなどを考え合わせると雲母系と一致すると考えられるが結晶構造による判断が必要である。遺物のCrの含有量が比較的多くなっている。白雲母のAl元素がCrで置換しクロムがCr³⁺として存在していると、緑色になることが知られているため、Crが緑色の原因元素になっている可能性は考えられ、また緑色部分にK₂CrO₄（クロム酸カリウム）または埋土中の鉛(II)イオンと反応し表面にPbCr₄（クロム酸鉛）によると思われる黄色の微小斑点が表面に見られる物、結晶並びが明確なもの、岩石名の決定には様々な鉱物学的分析に基づいた結果から求める必要がある。他の結晶片岩様緑色岩製玉のX線回折の結果によれば、細粒の白雲母の微結晶集合体であると同定していて、また、雲母の比重の2.75～3.2の範囲内に一致するなどからクロム雲母を含む岩石と推測している。遺物に含まれるクロム雲母(Fuchsite)の部分が何%なのか遺物毎に異なるようである。鹿児島県加世田市川畑2627-1に位置する上加世田遺跡の縄文時代後期出土の玉材は、これら結晶片岩様の緑色岩(クロム雲母)を使用した玉造遺跡で、平成8年度出土の管玉46個、勾玉6個、小玉6個、未製品12個、玉材39個、平成7年以前の調査で出土した玉類40個の合計150個を蛍光X線分析によって元素を分析し、その結果を分類して上加世田第1群、上加世田第2群、上加世田第3群、上加世田第4群の4個の遺物群を作った。また、上加世田諸群に一致しない遺物が、的場遺跡、川平遺跡、大坪遺跡で見つかり、それぞれ遺物群を作り、他の遺跡で使用されているか否かを判定できるように登録した。このように各遺物群に分類されるのは結晶片岩様緑色岩の原石産地が分類群ごとに数カ所存在するのではなく、肉眼観察とESR分析結果から推測して、含有される鉱物の種類が多く、分布が不均一なために玉ごとの元素組成の変動が大きくなったと推測される。各遺跡で出土する結晶片岩様緑色岩製玉類の蛍光X線分析値と上加世田遺跡などの遺物群と比較し多変量統計のマハラノビスの距離からT2乗検定することにより上加世田遺跡の玉に一致するか否か同定できる。

(2)上ノ村遺跡出土勾玉の蛍光X線分析結果と判定

遺跡から出土した玉類は表面の泥を超音波洗浄器で水洗いするだけの完全な非破壊で蛍光X線分析を行った。分析番号99353～99358番の遺物は結晶片岩様緑色岩製と推測され観測された元素は主成分と推測されるアルミニウム(Al)、珪素(Si)、カリウム(K)であり、その他に比較的含有量の多い元素はチタン(Ti)、クロム(Cr)、鉄(Fe)、バリウム(Ba)で、他にマグネシウム(Mg)、カルシウム(Ca)、

ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)、ニオブ(Nb)、マンガン(Mn)の15元素で、これら元素をセイコーインスツルメンツ社製卓上型ケイ光X線分析装置(SEA2110L)により分析を行った。蛍光X線スペクトルを図1に示した。この遺物の原石産地を明らかにするためにAl/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Mn/Fe、Ti/Fe、Sr/Rb、Y/Rb、Mg/Si、Cr/Fe、Ba/Zr、Ba/Srなどの各元素比の値を求め表2に示した。また、勾玉の比重は岩石の種類を同定するときに重要な指標になる。比重はメトラ・トレド社AG245型電子天びんで、遺物の汚染をさけるために蒸留水を用いたアルキメデス法で測定した。得られた玉類のかさ比重は2.834であり、これらの結果は上加世田諸群、的場遺跡、川平遺跡、大坪遺跡の遺物群の結晶片岩様緑色岩の比重2.6～3.0の範囲にはいる。また、かさ比重が2.679より軽い遺物原石は上加世田群の中に1個見られるにすぎない。勾玉の元素分析の結果について、上加世田諸群、的場遺物群、川平I遺物群、大坪14遺物群と比較した結果は、勾玉は上加世田第1、2群遺物群は信頼限界の0.1%を大きく越えて一致した(表59)。蛍光X線分析で含有元素が一致することが明らかになったが、さらに、勾玉に含有されている鉱物に関する信号を分析するESR分析結果も一致すればさらに正確な同定結果が得られるが、遺物が過大で分析できなかった。以下にESR分析法による産地分析を示す。

(3)ESR法による産地分析

ESR分析は玉類石材に含有されているイオンとか、玉材が自然界からの放射線を受けて出来た色中心などの常磁性種を分析し、その信号から玉材産地間を区別する指標を見つけて産地分析に利用する方法である。ESRの測定は完全な非破壊分析であり、直径が11mm以下の管玉状のものなら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大のものでも分析できる場合がある。通常ESR信号を出す常磁性種が一種類ではなく4種類以上あるため、ESR信号は複雑なスペクトルになっている。上加世田遺跡では各玉製品とか玉材毎に4種類以上の常磁性種の混合比が不均一に含有されている。したがって、ESR信号はこれら常磁性種の合成した形で観測されるためにESR信号のスペクトルの形は玉毎に異なる。ここで大切はことは、上加世田遺跡の玉の信号と分析した管玉の信号を重ね合わせて一致すれば言うことないが、一致しなくても同じ常磁性種が管玉に含有されているか否かが重要である。ESR信号を出す常磁性種の個数の同定を鹿児島県加世田市上加世田遺跡出土の緑色片岩様玉類の分析結果を用いて試みFig.132に示した。(1)のバックグラウンド信号と名付けた信号IIは玉によっては信号形が異なることから複数の鉄イオンの信号で構成されている可能性が推測される幅広い信号である。(2)は幅の広いバックグラウンド信号と上加世田遺跡出土玉類に特徴的なY、X、W、Z、Ⅲの一組になったピーク信号を出す常磁性種とで構成される。信号IIにはSiO₂に関係した信号が含まれている可能性が推測される。W→Ⅲ、Ⅲ→W、W→Xのピーク間に見られる小さな常磁性種は玉によっては非常に大きな信号になり、W、Y、Ⅲのピークと重なった部分は相互に変形する。また、一組になったピーク信号は、例えばYが測定されれば、残りのピークも他の信号と合成されて変形して確認が困難な場合もあるが必ず存在する。(3)は幅の広いバックグラウンド信号に、マンガンイオンによると思われるP、Q、R、S、T、Uの同じ信号強度の6本が一組の信号に合成されてできたESRスペクトルである。Mnイオン濃度が低い状態で、(2)の信号と合成されるとPとかP、Q(Wと重なり変形)のピークのみ確認されR、S、T、Uが変形したために確認できないと推測される場合が多い。(4)は幅の広いバックグラウンド信号に、少量の(2)が重なっている状態が確認

でき、また、信号を出す常磁性種は同定出来ていないが、O、Vのピーク信号は2：1の比で1000 Gauss (G)間隔で対になって構成されている。以上最低4種類の常磁性種の存在が確認できた。また、W→Ⅲ、Ⅲ→W、W→Xのピーク間に見られる信号が何種類の常磁性種で構成されているか不明で、まだ上加世田遺跡出土玉類のESR信号を完全に説明できない部分が残っている。分光学的に説明ができなくても、Y、X、W、Z、Ⅲのピークを出す常磁性種が上加世田遺跡出土玉類に共通して存在することを、遺物にも利用すれば玉類石材の産地分析に応用できる。

4 上ノ村遺跡出土結晶片岩様緑色(クロム雲母)岩製勾玉の考察

勾玉は蛍光X線分析法による各原石群・遺物群とのホテリングのT2乗検定の結果が上加世田遺跡出土玉類の結晶片岩様緑色岩と一致したことから、勾玉には上加世田遺跡で使用されている同じ元素組成の原石が使用されていると判定した。今回分析した結晶片岩様緑色岩の原材産地として特に注目されている産地であるヒスイ類似岩の原産地の長崎県大瀬戸町雪浦産原石と誤解されることが非常に多い。確かに、肉眼観察では区別が困難で比重も一致している。この結晶片岩様緑色岩と呼んでいる原材と大瀬戸町の原石の異なる点は、バリウム元素の含有量が結晶片岩様緑色岩の方が桁違いに多いことである。このことにより、両者は容易に区別できる。結晶片岩様緑色岩製玉類、剥片、加工途中の未製品が出土する遺跡は九州南部に集中し、その中で上加世田遺跡、大坪遺跡、ワクド遺跡では剥片が確認されている。また、製品のみでの使用では、縄文時代後期、晩期または後期～晩期に関係する遺跡である宮崎県学頭遺跡の丸玉、岐阜県の西田遺跡(上加世田遺跡より直線距離で約800メートル伝播)の丸玉、鳥根県匹見町のヨレ遺跡の管玉、勾玉、岡山県吉野口遺跡の管玉、向出遺跡出土の小玉、和歌山県溝ノ口遺跡出土の白玉にそれぞれ使用されている。このことから、結晶片岩様緑色岩も糸魚川地域産硬玉製玉類に匹敵する伝播距離を示す可能性があり、古代人にとって非常に重要な玉類原材であったことが推測される(Fig.133)。本遺跡出土管玉は九州南部産の玉が伝播した可能性が推測され、本遺跡が九州南部の情報・文化を入手していたと推測できる。

参考文献

- 1) 茅原一也(1964)、長者が原遺跡産のヒスイ(翡翠)について(概報)。長者ヶ原、新潟県糸魚川市教育委員会:63-73
- 2) 藁科哲男・東村武信(1987)、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要 6:1-18
- 3) 藁科哲男・東村武信(1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』、14:95-109
- 4) 藁科哲男・東村武信(1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16:59-89
- 5) Tetsuo Warashina(1992)、Allocation of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19:357-373
- 6) 東村武信(1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9:77-90

表58 上ノ村遺跡出土の結晶片岩様緑色(クロム雲母)岩製勾玉の元素分析値と比重の結果

分析 番号	元素分析値の比量																		試料 比重	試料 重量 (g)
	Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Mn/Fe	Ti/Fe	Sr/Rb	Y/Rb	Mg/Si	Cr/Fe	Ba/Zr	Ba/Sr		
99734	0.360	19.229	0.134	0.296	2.549	0.764	0.653	0.497	3.690	0.036	0.091	0.699	7.454	0.072	0.369	0.548	106.720	36.479	2.834	1.871
JG-1a)	0.030	0.169	0.169	0.090	1.320	2.307	0.180	0.002	0.011	0.000	0.401	0.798	0.050	6.020	0.000	0.000	0.770	0.150		

a): 標準試料、Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E.(1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt.

表59 上ノ村遺跡出土の結晶片岩様緑色(クロム雲母)岩製勾玉の産地分析の結果

分析番号	試料番号	種別	ホテリングのT2検定結果	ESR信号波形	総合判定	比重
99734	1	勾玉	上加世田1、2遺物群(3%)	試料過大	上加世田	2.834

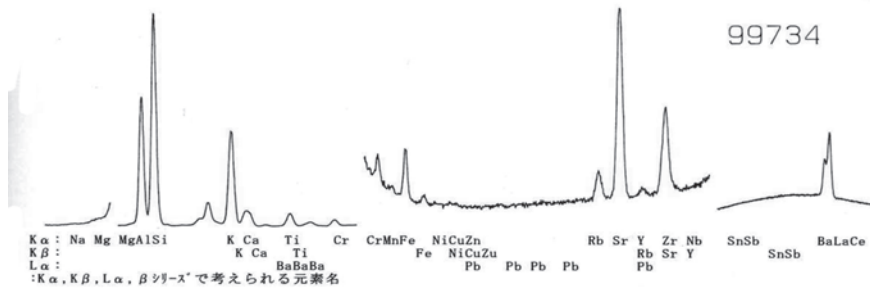


Fig.131 上ノ村遺跡出土勾玉(99734)の蛍光X線スペクトル

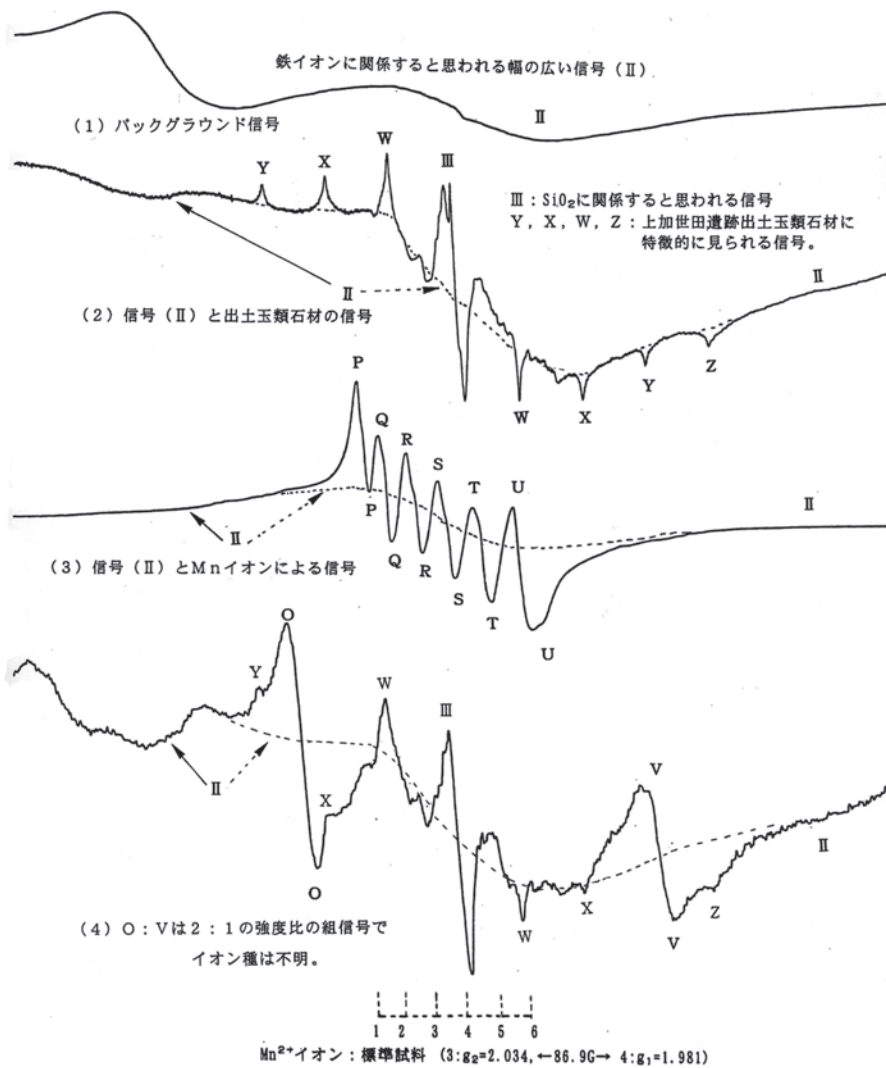
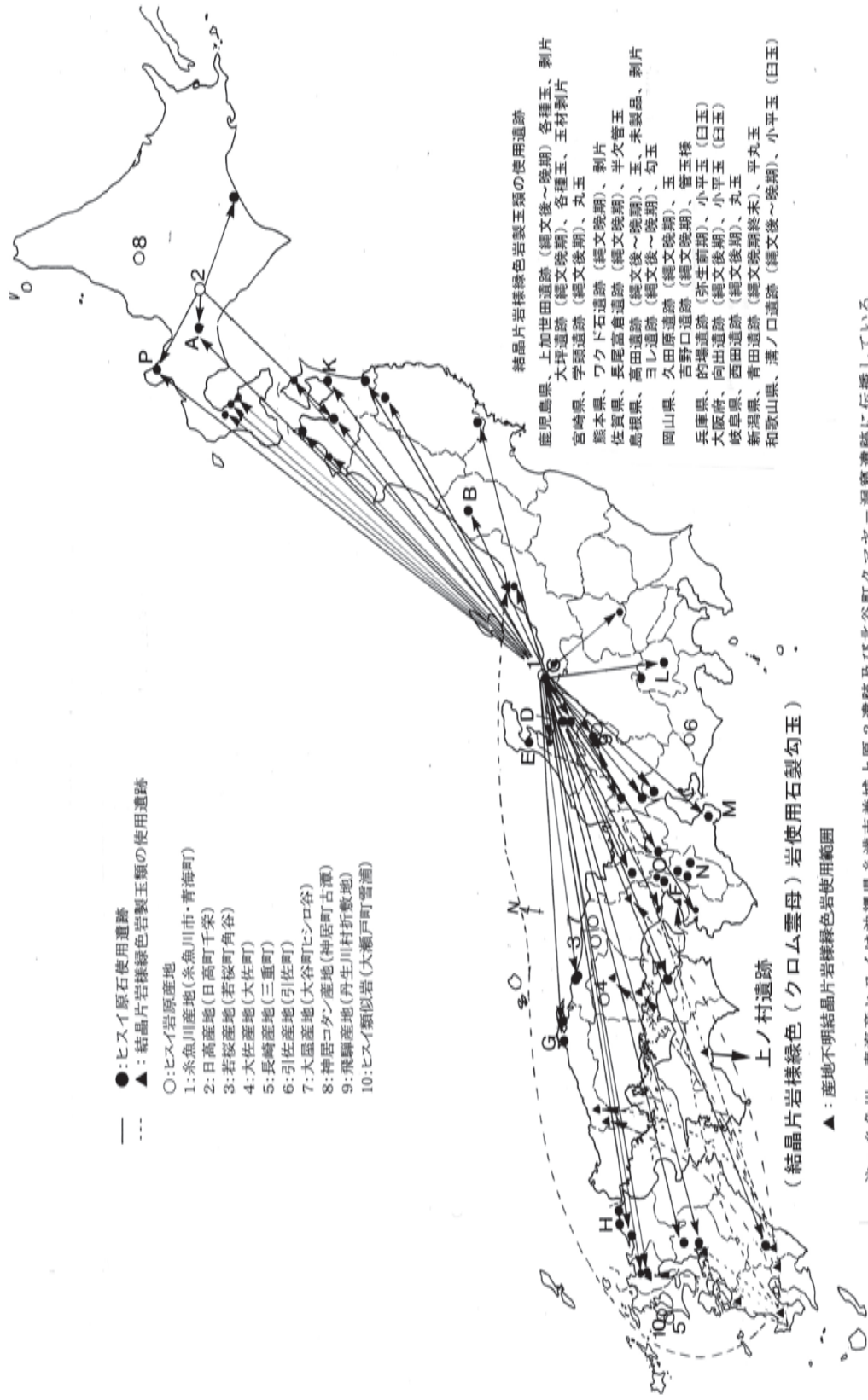


Fig.132 上加世田遺跡出土玉類石材のESR信号(結晶片岩様緑色玉類石材,比重3.0~2.7)



注:糸魚川・青海産ヒスイは神饌県糸満市兼城上原2遺跡及び北谷町クマヤヤー洞窟遺跡に伝播している(他の分析方法の基準で推定した結果をこの使用圏に混ぜると、先史の交流、交易考察に混乱が生じます)

Fig.133 結晶片岩様緑色(クロム雲母)岩玉類使用遺跡分布圏及びヒスイ製玉類使用遺跡

7 上ノ村遺跡出土の安山岩、黒曜石製遺物の原材産地分析

有限会社 遺物材料研究所
藁科哲男

1 はじめに

石器石材の産地を自然科学的な手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法によりサヌカイトおよび黒曜石遺物の石材産地推定を行なっている^{1,2,3)}。最近の黒曜石の伝播距離に関する研究では、伝播距離は数千キロメートルは一般的で、6千キロメートルを推測する学者もでてきている。正確に産地を判定すると言うことは、原理原則に従って同定を行うことである。原理原則は、同じ組成の黒曜石が異なった産地では生成されないという理論がないために、少なくとも遺跡から半径数千キロメートルの内にある石器の原材産地の原石と遺物を比較し、必要条件と十分条件を満たす必要がある。『遺物原材とある産地の原石が一致したという「必要条件」を満たしても、他の産地の原石にも一致する可能性が残っているから、他の産地には一致しないという「十分条件」を満たして、一致した産地の原石が使用されていると言い切れる。また、十分条件を求めることにより、一致しなかった産地との交流がなかったと結論でき、考古学に重要な資料が提供される。』

2 産地分析の方法

先ず原石採取であるが、本来、一つの産地から産出する全ての原石を採取し分析する必要があるが不可能である。そこで、産地から抽出した数十個の原石でも、産地全ての原石を分析して比較した結果と同じ結果が推測される方法として、理論的に証明されている方法で、マハラノビスの距離を求めて行う、ホテリングのT2乗検定がある。ホテリングのT2乗検定法の同定とクラスター判定法(同定ではなく分類)、元素散布図法(散布図範囲に入るか否かで判定)を比較する。

クラスター判定法はクラスターを作る産地の組み合わせを変えることにより、クラスターが変動する。例えば、A原石製の遺物とA、B、C産地の原石でクラスターを作ったとき遺物はA原石とクラスターを作る。しかし、A産地の原石を抜いて、D、E産地の原石を加え、B、C、D、E産地の原石でクラスターを作ると、遺物がE産地とクラスタを作る。このように、A産地が調査されていないと、遺物はE原石製遺物と判定される可能性があり結果の信頼性に疑問が生じる。また、A原石製遺物と分かっていたら、意図的にE原石とクラスターを作らないようにもできる。このように、クラスター分析を行う遺物の原石産地を予め推測し、クラスターを組み立てる必要がある、得られた結果は主観的なものに左右される恐れがある。

元素散布図法は肉眼で原石群元素散布の中に遺物の結果が入るか図示した方法である。原石の含有元素の違いを絶対定量値を求めて地球科学的に議論するには、地質学において最も適した方法であるが、産地分析の観点から見ると、クラスター法よりさらに後退した方法である。まず、何個の原石を分析すればその産地を正確に表現されているのか不明であり、分析する原石数の少ないときには、A産地とB産地が区別できていたのに、原石数を増やすと、A産地、B産地の区別ができなくなる可能性があり(クラスター法でも同じ危険性がある)判定結果に疑問が残る。

以上をふまえて産地分析を正しくおこなうには、地質学の常識的な知識(高校生)さえあればよく、

火山学、堆積学など専門知識は必要なく、実際の分析においては非破壊で遺物の形態の違いによる相対定量値の影響を評価しながら同定を行うことが必要であり、地球科学的なことは関係なく、如何に原理原則に従って客観的な判定を行うかにかかっている。これらクラスター法、元素散布図法の欠点を解決するために考え出された方法が、理論的に証明された判定法であるホテリングのT2乗検定法である。それにはある産地の原石の元素組成と遺物の元素組成が一致すれば、その産地の原石と決定できるという理論がないために、多数の産地の原石と遺物を比較し、必要条件と十分条件を満たす必要がある。

考古学では、人工品の様式が一致すると言う結果が非常に重要な意味があり、見える様式としての形態、文様、見えない様式として土器、青銅器、ガラスなどの人手が加わった調査素材があり、それらが一致すると言うことは古代人が意識して一致させた可能性があり、一致すると言うことは、古代人の思考が一致すると考えてもよく、相互関係を調査する上で重要な意味をもつ結果である。しかし、石器の様式による分類ではなく、自然の法則で決定した石材の元素組成を指標にした分類では、例えば石材産地が遺跡から近い、移動キャンプ地のルート上に位置する、産地地方との交流を示す土器が出土しているなど主観的要素が入った事象を十分条件の代用にすると産地分析は中途半端なものとなり、結果として遠距離伝播した石材を近くの産地と誤判定する可能性がある。人が移動させた石器の元素組成とA産地原石の元素組成が一致し、必要条件を満たしたとき、確かにA産地との交流で伝播した可能性は否定できなくなったが、偶然(産地分析法が不完全なために)に一致した可能性も大きくB、C、D・・・の産地でないとの証拠がないために、A産地だと言い切れない。そこで、考えられるのは、可能なかぎり地球上の全ての原産地(A、B、C、D・・・)の原石群と遺物を比較して、A産地以外の産地とは一致しないことを証明すればそれが十分条件となり、石器がA産地の原石と決定することができる。この十分条件を肉眼観察で求めることは各々の観察者で分類基準が異なるため混乱し不可能であると思われる。また、自然科学的分析を用いても全ての産地が区別できるかは、それぞれが使用している産地分析法によってそれぞれ異なり、実際におこなってみなければ分からない。産地分析の結果の信頼性は何ヶ所の原材産地の原石と客観的に比較して得られたかに左右され、比較した産地が少なければ信頼性の低い結果と言える。黒曜石、安山岩などの主成分の元素組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分の元素組成には違いがあると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して、各平均値からの離れ具合(マハラノビスの距離)を求める。次に、古代人が採取した原石産出地点と現代人が分析のために採取した原石産出地点が異なる可能性は十分に考えられる。従って、分析した有限個の原石から産地全体の無限の個数の平均値と分散を推測して判定を行うホテリングのT2乗検定を行う。この検定を全ての産地について行い、ある原石遺物原材と同じ元素組成の原石はA産地では10個中に一個みられ、B産地では一万個中に一個、C産地では百万個中に一個、D産地では・・・一個と各産地毎に求められるような、客観的な検定結果からA産地の原石を使用した可能性が高いと同定する。即ち多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。今回分析した遺物は高知県土佐市上ノ村に位置する上ノ村遺跡の縄文時代晩期の遺跡から出土した安山岩製遺物8個と黒曜石製遺物1個の合計9個で産地分析の結果が得られたので報告する。

3 安山岩(サヌカイトなど)、黒曜石原石の分析

黒曜石、サヌカイト両原石の自然面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X分析装置によって元素分析を行なう。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素をそれぞれ分析した。塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。

サヌカイトでは、K/Ca、Ti/Ca、Mn/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srの値を指標として用いる。サヌカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題にのぼる産地、および玄武岩、ガラス質安山岩など、合わせて50ヶ所の調査を終えている。Fig.134にサヌカイトの原産地の地点を示す。これらの原石を良質な原石を産出する産地および原石産地不明の遺物を元素組成で分類すると179個の原石群に分類できる。安山岩の原石産地の一部を簡単に記すると、香川県の坂出市、高松市に位置する金山・五色台地域では、多数の地点から良質のサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数ヶの群に分かれる(Fig.135)。近年、丸亀市の双子山の南嶺から産出するサヌカイト原石で双子山群を確立し、またガラス質安山岩は細石器時代に使用された原材であり善通寺市の大麻山南からも産出している。香川県内の石器原材の産地である金山・五色台地域のサヌカイト原石を分類すると、金山西群、金山東群、金山東南群、国分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の7つの群に分かれ、これらの地域外の産地では城山群および双子山群に分かれた。また、ガラス質安山岩は金山奥池、雄山、神谷町南山地区で採取され、さらに大麻山南産は大麻山南第一、二群の2群にそれぞれ分類されて区別が可能なることを明らかにした。これらガラス質安山岩は成分的に黒曜石に近く、また肉眼観察では下呂石に酷似するもの、西北九州産の中町、淀姫産黒曜石、大串、亀岳原石と酷似するものもみられ、風化した遺物ではこれら似た原材と肉眼で区別するのは困難と思われる、正確に原材産地の判定をおこなうには分析が必要である。また、金山・五色台地域産のサヌカイト原石の諸群にほとんど一致する元素組成を示すサヌカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円礫状で採取される。さらに大阪府和泉・岸和田産地の礫層、和歌山県梅原産地礫層からも、金山・五色台地域の諸群の一部に一致するものがみられ、長い年月の間にこれらが金山・五色台地域から流れ着いたのではないかと思われる。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大崩地区からもサヌカイト原石が採取される。奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山の原石で二上山群を作った。二上山群に一致する原石は柏原市奥山遺跡の地山転礫で見られ、地山転礫産出地を奥山礫層と名付ける。奥山礫層からは板状に剥離する原石が産出し、剥離面には酸化鉄層が薄くあり、分析は、主に酸化層面に直角な面を分析し、奥山礫層2群を作った。奥山礫層中の奥山礫層2群と二上山群の出現比は約1:55であった。また、二上山群と元素組成の類似する原石は和泉・岸和田の礫層産地から6%の割合で採取される。また和歌山市梅原産地からは、金山原産地の原石に一致する原石はみられない。仮に、遺物が岩屋、和泉・岸和田原産地などの原石で作られている場合には、産地分析の手続きは複雑になる。その遺跡から10個以上の遺物を分析し、表2、3のそれぞれの群に帰属される頻度分布を求め、確率論による期待値と比較して確認しなければならない。二上山群を作った原石は奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山を中心にした広い地域から採取された。この二上山群と組成の類似する原石は和泉・岸和田の原産地から6%の割合で採取されることから、一遺跡10個以上の遺物を分析し、それぞれの群に帰属される頻度分布をもとめて、和泉・岸和田原産地の原石が使用されたかどうか判断しな

ければならない。中国山地のサヌカイト産地として代表的な産地は山口、島根、広島の県境に位置する冠山地域で、冠山、鬼ヶ城の山腹には安山岩の露頭があり、また山麓からは崖錐角礫として転石として見られる。伴蔵地区の冠高原スキー場一帯(冠高原地点と呼ぶ)から良質の原石が採取でき、冠高原群および伴蔵C、A群を作った。冠高原スキー場から南方の飯山地区の針山地点(飯山地点と呼ぶ)の原石で飯山群を作った。また、頓原地区産出の原石で冠山東群を作った。また、考古学者の間で石器原材として使用されたのではないかと話題にのぼる産地の一つである山口県熊毛郡平生町産の安山岩原石を分析し平生群を作り、この原石を使用した石器か否かの判定ができるようにした。九州地域産地では佐賀県多久、老松山と隣の岡本、西有田、また嬉野町では松尾、椎葉川などで良質の原石が採取できる。長崎県では大串、亀岳産地、川棚、福井洞窟遺跡地域で産出する福井産原石、松浦半島産の牟田産原石、また、雲仙駒崎鼻産サヌカイトと福岡県昭和池採取原石の群が整備された。

黒曜石は、Ca/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zrの比の値を産地を区別する指標をしてそれぞれ用いる。黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に黒曜石の原産地は分布する。調査を終えた原産地をFig.136に示す。元素組成の違いによってこれら原石を分類する。この原石群に原石産地が不明の遺物で作った遺物群を加えると299個の群になる。佐賀県の腰岳地域および大分県の姫島地域の観音崎、両瀬の両地区は黒曜石の有名な原産地であり、姫島地域ではガラス質安山岩もみられ、これについても分析をおこなった。隠岐島、壱岐島、青森県、和田峠の一部の黒曜石には、Srの含有量が非常に少なく、この特徴により産地分析を行う際他の原産地と区別する有用な指標となっている。九州西北地域の原産地で採取された原石は、相互に元素組成が似た原石がみられる。九州西北地域で似た元素組成を示す黒曜石の原石群は、腰岳、古里第一、松浦第一の各群(腰岳系と仮称する)および淀姫、中町第二、古里第三、松浦第四の各群(淀姫系と仮称する)などである。淀姫産原石の中で中町第一群に一致する原石は12%で、一部は淀姫群に重なるが中町第一群に一致する遺物は中町系と分類した。また、古里第二群の原石と肉眼的および元素組成的に似た原石は嬉野町椎葉川露頭で多量に採取でき、この原石は姫島産乳灰色黒曜石と同色調をしているが、元素組成によって姫島産の黒曜石と容易に区別できる。もし似た元素組成の原石で遺物が作られたとき、この遺物は複数の原産地に帰属され原石産地を特定できない場合がある。たとえ遺物の原石産地がこれら腰岳系、淀姫系の原石群の中の一群および古里第二群のみに帰属されても、この遺物の原石産地は腰岳系、淀姫系および古里第二群の原石を産出する複数の地点を考えなければならない。角礫の黒曜石の原産地は腰岳および淀姫で、円礫は松浦(牟田、大石)、中町、古里(第二群は角礫)の各産地で産出していることから、似た元素組成の原石産地の区別は遺物の自然面が円礫か角礫かを判断すれば原石産地の判定に有用な情報となる。旧石器の遺物の元素組成に一致する原石を産出する川棚町大崎産地から北方4kmに位置するところに松岳産地があるが、現在露頭からは8mm程度の小礫しか採取できない。また、佐賀県多久のサヌカイト原産地からは黒曜石の原石も採取され梅野群を作った。九州中部地域の塚瀬と小国の原産地は隣接し、黒曜石の生成マグマは同質と推測され両産地は区別できない。また、熊本県の南関、轟、冠ヶ岳の各産地の原石はローム化した阿蘇の火砕流の層の中にも含まれる最大でも親指大の黒曜石であり、非常に広範囲な地域から採取されるもので、福岡県八女市の昭和溜池からも同質の黒曜石が採取され昭和溜池群を作った。従って南関等の産地に同定された遺物の原材産地を局所的に特定できない。桑の木津留原産地の原石は元素組成によって2個の群に区別することができる。桑ノ

木津留第1群は道路切り通し面の露頭から採取できるが、桑ノ木津留第2群は転礫として採取でき、これら両者を肉眼的に区別はできない。また、間根ヶ平原産地では肉眼観察で淀姫黒曜石のような黒灰色不透明な黒曜石から桑ノ木津留に似た原石が採取され、これらについても原石群を作成し間根ヶ平原産黒曜石を使用した遺物の産地分析を可能にした。遺物の産地分析によって桑ノ木津留第1群と第2群の使用頻度を遺跡毎に調査して比較することにより、遺跡相互で同じ比率であれば遺跡間の交易、交流が推測できるであろう。石炭様の黒曜石は大分県萩台地、熊本県滝室坂、箱石峠、長谷峠、五ヶ瀬川の各産地および大柿産、鹿児島県の樋脇町上牛鼻産および平木場産の各産地から採取されそれぞれ見た目は似ていて、肉眼観察ではそれぞれ区別が困難であるが、大半は元素組成で区別ができる。しかし、上牛鼻、平木場産の両原石については各元素比値が似ているため区別はできない。これは両黒曜石を作ったマグマは同じで、このマグマが地殻の割れ目を通して上牛鼻および平木場地区に吹きだしたと考えられ、両者の原石の元素組成が似ていると推定できる。従って、産地分析で上牛鼻群または平木場群のどちらかに同定されても、遺物の原石産地は上牛鼻系として上牛鼻または平木場地区を考える必要がある。出水産原石の元素組成と同じ原石は日東、五女木の各原産地から産出してこれらは相互に区別できず日東系とした。竜ヶ水産原石は桜島の対岸の竜ヶ水地区の海岸および海岸の段丘面から採取される原石で元素組成で他の産地の黒曜石と容易に弁別できる。

4 結果と考察

遺跡から出土した安山岩製の遺物は、白っぽく表面が風化しているために、エアブラシ処理でアルミナ粉末を風化面に吹き付け、新鮮面を出して分析している。黒曜石製石器、石片は風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。黒曜石製の石器で、水和層の影響を考慮するとすれば、軽い元素の分析ほど表面分析になるため、水和層の影響を受けやすいと考えられる。Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて産地分析を行なった場合、また除かずに産地分析を行った場合、いずれの場合にも同定される産地は同じである。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやゝ不確実さを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。黒曜石でも極端に風化した遺物はエアブラシ処理で風化層を取り除く場合がある。

今回分析した上ノ村遺跡出土安山岩製遺物の分析結果を表60に、黒曜石製遺物の分析結果を表62に示した遺物の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためK/Caの一変量だけを考えると、分析番号99567番の石鏃はK/Caの値が0.277で、二上山群の[平均値]±[標準偏差値]は、 0.288 ± 0.010 であるから、遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から1.1 σ 離れている。ところで二上山群の産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から±1.1 σ のずれより大きいものが27ヶある。すなわち、この遺物が、二上山群の原石から作られていたと仮定しても、1.1 σ 以上離れる確率は27%であると言える。だから、二上山群の平均値から1.1 σ しか離れていないときには、この遺物が二上山群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を金山東群と比較すると、金山東群の[平均値]±[標準偏差値]は、 0.478 ± 0.014 であるから、遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から14 σ 離れている。これを確率の言葉で

表現すると、金山東群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から14 σ 以上離れている確率は、約千億の百倍分の一であると言える。このように、千億の百倍個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、金山東群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は二上山群に27%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから二上山産地の原石が使用されていると同定され、さらに金山東群に対しては千億分の一の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%に満たないことから金山東産原石でないと同定される」。遺物が二上山群と一致したからと言っても、他の産地に一致しないとは言えない。また、同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地(二上山群)に一致し必要条件を満たしたと言っても一致した産地の原石とは限らないために、帰属確率による判断を表1の179個すべての原石群について行ない、十分条件である低い確率で帰属された原石群を消していくことにより、はじめて二上山産地の石材のみが使用されていると判定される。実際はK/Caといった唯1ヶの変量だけでなく、前述した8ヶの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群では、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、仮にA群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT²乗検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する^{4, 5)}。産地の同定結果は1個の遺物に対して、サヌカイト製のものは179個の、黒曜石製の場合は299個の推定確率がそれぞれ得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上『記入』を省略しているだけであり、実際には179個の群全てについて計算しているため、省略産地の可能性が非常に低いことを確認したという重要な意味を含んでいる。すなわち、二上山産原石と判定された遺物について、金山東産原石とか佐賀県多久産、香川県城山、北海道旭山の原石の可能性を考える必要がない結果で、ここでは高い確率で同定された産地のみの結果を表8に記入した。原石群を作った原石試料は直径2cm以上であるが、小さな遺物試料は単位時間あたりの分析カウントは少なくなり、含有量の少ない元素では、得られた遺物の測定値には大きな誤差範囲が含まれ、原石群の元素組成のバラツキの範囲を超えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。また、蛍光X線分析では、分析試料の風化による表面状態の変化(粉末の場合粒度の違い)、不定形では試料の置き方で誤差範囲を越えて分析値に影響が残り、分析値は変動し判定結果は一定しない。特に元素比組成の似た原産地同士では区別が困難で、遺物の原石産地が原石・遺物群の複数の原産地に同定される時、および、信頼限界の0.1%の判定境界に位置する場合は、分析場所を変えて3~12回分析し最も多くの回数同定された産地を判定の欄に記している。また、判定結果には推定確率が求められているために、先史時代の交流を推測するときに、低確率(1%以下)の遺物はあまり重要に考えないなど、考古学者が推定確率をみて選択できるために、誤った先史時代交流を推測する可能性がない。

今回分析した上ノ村遺跡出土の8個の安山岩製遺物の中で分析番号99567番の石鏃が二上山産原石

が使用されていると同定された。また残りの7個のK/Ca、Ti/K、Mn/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srの元素比によるホテリングのT2乗検定で、表1の原石群・遺物群の179個と比較した結果、金山東群、金山東南群、金山西群、城山群などに信頼限界の0.1%以上の確率で同定される遺物が多数あり、これら同じ複数の群に同定された原石・遺物をさらに詳細に特定するために、新元素比のK/Ca、Ca/K、Ti/K、Rb/Fe、Fe/Zr、Sr/Zr、Sr/Zr、Si/FeでホテリングのT2乗検定により弁別したところ、分析番号99564、99570番は金山東南群、金山東群に同定される確率差は約4倍で、どちらの群に同定されるのか決められないが、金山西、城山群群は否定された。分析番号99565、99566、99568、99569、99571番は金山東群に高確率で同定され、どうじに低い確率で金山東南群に同定されるが、その差が10倍以上なれていることから、これら遺物は金山東地点から採取された原石であると判定した。今回分析した遺物の中に二上山産がみられることから、近畿地域との交流が推測され、近畿地方のサヌカイト産地からの伝播も考慮する必要がある。二上山産原石と判定された石鏃については、奈良県、二上山産地の外に和泉・岸和田産地からも6%の割合(表3)で原石が採取されるが、分析した遺物の中に、岩屋第1群、岩屋第2群、和泉群に同定される遺物がないことから、石鏃原石は二上山産地から伝播した原石と判定した。また、金山東群に同定される遺物も岩屋産地から5%(表2)、和泉・岸和田産地から1%(表3)の割合で産出している。これら産地から高い割合で産出している岩屋第1、2群が見られないことから、金山諸群の遺物は坂出市の金山産地から伝播したと判定した。分析番号99736番の黒曜石は、西北九州の腰岳、松浦、古里産地(表6)の何れかの産地から伝播した可能性が推測される。これら産地のを区別する手段は遺物の自然面から角礫原石か、円礫原石かを判定し、角礫状は腰岳産地、円礫状であれば、松浦、古里産地が推定できる。分析番号99736番の黒曜石には自然面がなく腰岳産地からの原石であると判定できなかった。ただ、客観性に欠けるが黒曜石に白い斑点が観測されるが、この斑点は、松浦、古里産にはなく、腰岳産原石に多くみられる気がする。

この結果、上ノ村遺跡には坂出市金山産地地方以外に奈良県、二上山産地、また西北九州地域の広い地域の文化、生活情報が伝播し、また、逆に上ノ村遺跡地方の文化、生活情報が使用されている原石産地に伝播し、原石の使用頻度の高い産地と活発な交流、交易があったと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。

参考文献

- 1) 藁科哲男・東村武信(1975)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(II)。考古学と自然科学、8:61-69
- 2) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌(1977)、(1978)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(III)。(IV)。考古学と自然科学、10、11:53-81:33-47
- 3) 藁科哲男・東村武信(1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16:59-89
- 4) 東村武信(1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9:77-90
- 5) 東村武信(1980)、考古学と物理化学。学生社

表60 上ノ村遺跡出土安山岩製遺物の元素比分析結果

分析番号	元 素 比									
	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
99564	0.427	0.213	0.078	4.557	0.293	0.082	1.151	0.019	0.024	0.169
99565	0.440	0.221	0.083	4.554	0.297	0.077	1.192	0.014	0.024	0.174
99566	0.444	0.222	0.084	4.560	0.288	0.083	1.171	0.013	0.024	0.178
99567	0.277	0.226	0.067	4.446	0.218	0.070	0.630	0.016	0.015	0.122
99568	0.442	0.225	0.083	4.503	0.288	0.086	1.163	0.033	0.024	0.175
99569	0.446	0.219	0.084	4.539	0.298	0.087	1.170	0.025	0.024	0.176
99570	0.450	0.223	0.080	4.531	0.296	0.085	1.182	0.035	0.024	0.180
99571	0.438	0.218	0.080	4.565	0.278	0.086	1.160	0.000	0.023	0.171
JG-1	1.265	0.284	0.052	2.736	0.737	0.171	0.854	0.045	0.036	0.410

JG-1:標準試料-Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T.& Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal, Vol.8 175-192 (1974)

表61 上ノ村遺跡出土黒曜石製遺物の元素比組成結果

分析番号	元 素 比									
	Ca/ K	Ti/ K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/ K	Si/ K
99736	0.215	0.034	0.078	2.669	1.673	0.443	0.310	0.241	0.025	0.329
JG-1	0.780	0.208	0.072	4.113	0.969	1.260	0.310	0.047	0.031	0.317

JG-1:標準試料-Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T.& Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal, Vol.8 175-192 (1974)

表62 上ノ村遺跡出土安山岩、黒曜石製剥片の検定結果

分析番号	No.	ホテリングのT2乗検定(確率)	新元素比によるホテリングのT2乗検定結果(確率)	判定
99564	1	金山東南(41%)、城山(18%)、金山西(6%)、金山東(3%)	金山東(60%)、金山東(4%)	金山東・金山東南
99565	2	金山東(65%)、金山東南(11%)、城山(1%)、金山西(0.3%)	金山東(60%)、金山東(4%)	金山東
99566	3	金山東(95%)、金山東南(13%)、城山(3%)、金山西(1%)	金山東(9%)	金山東
99567	4	二上山(93%)		二上山
99568	5	金山東(54%)、金山東南(45%)、城山(5%)、金山西(4%)	金山東(10%)、金山東南(0.2%)	金山東
99569	6	金山東(93%)、金山東南(43%)、城山(2%)、金山西(0.4%)	金山東(6%)	金山東
99570	7	金山東(93%)、金山東南(87%)、城山(1%)、金山西(0.2%)	金山東(30%)、金山東南(14%)	金山東・金山東南
99571	8	金山東(15%)、城山(4%)、金山西(2%)、金山東南(2%)	金山東(8%)、金山西(0.3%)	金山東
99736	3	腰岳(97%)、松浦第1群(96%)、古里第1群(83%)		腰岳・松浦・古里

新元素比によるホテリングのT2乗検定:K/Si、Ca/K、Ti/K、Rb/Fe、Fe/Zr、Sr/Zr、Sr/Zr、Si/Feの元素比により金山東、金山東南、金山西、松ノ木遺物群、白峰、岩屋第2群、国分寺、蓮光寺岩の各群の区別をホテリングのT2乗検定で行う。この検定で分析でされた遺物は金山東、金山東南、金山西、城山の区別が明確になった。しかし、表1に掲載している他の原石群について、この検定を行っていないために、他の原石・遺物群については、従来のK/Ca、Ti/Ca、Mn/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srの元素比によるホテリングのT2乗検定により判定をおこなった。両検定で、高確率で共通に一致した原石群は金山東南、金山東が必要条件を満たし、また、他の179個の必要条件を満たした以外の原石・遺物群には信頼限界の0.1%に達しなかったことから、十分条件を満たしている。

注意:近年産地分析を行う所が多くなりましたが、判定根拠が曖昧にも関わらず結果のみを報告される場合があります。本報告では日本における各遺跡の産地分析の判定基準を一定にして、産地分析を行っています。判定基準の異なる研究方法(土器様式の基準も研究方法で異なるように)にも関わらず、似た産地名のために同じ結果のように思われるが、全く関係(相互チェックなし)ありません。本研究結果に連続させるには本研究法で再分析が必要です。本報告の分析結果を考古学資料とする場合には常に同じ基準で判定されている結果で古代交流圏などを考察をする必要があります。

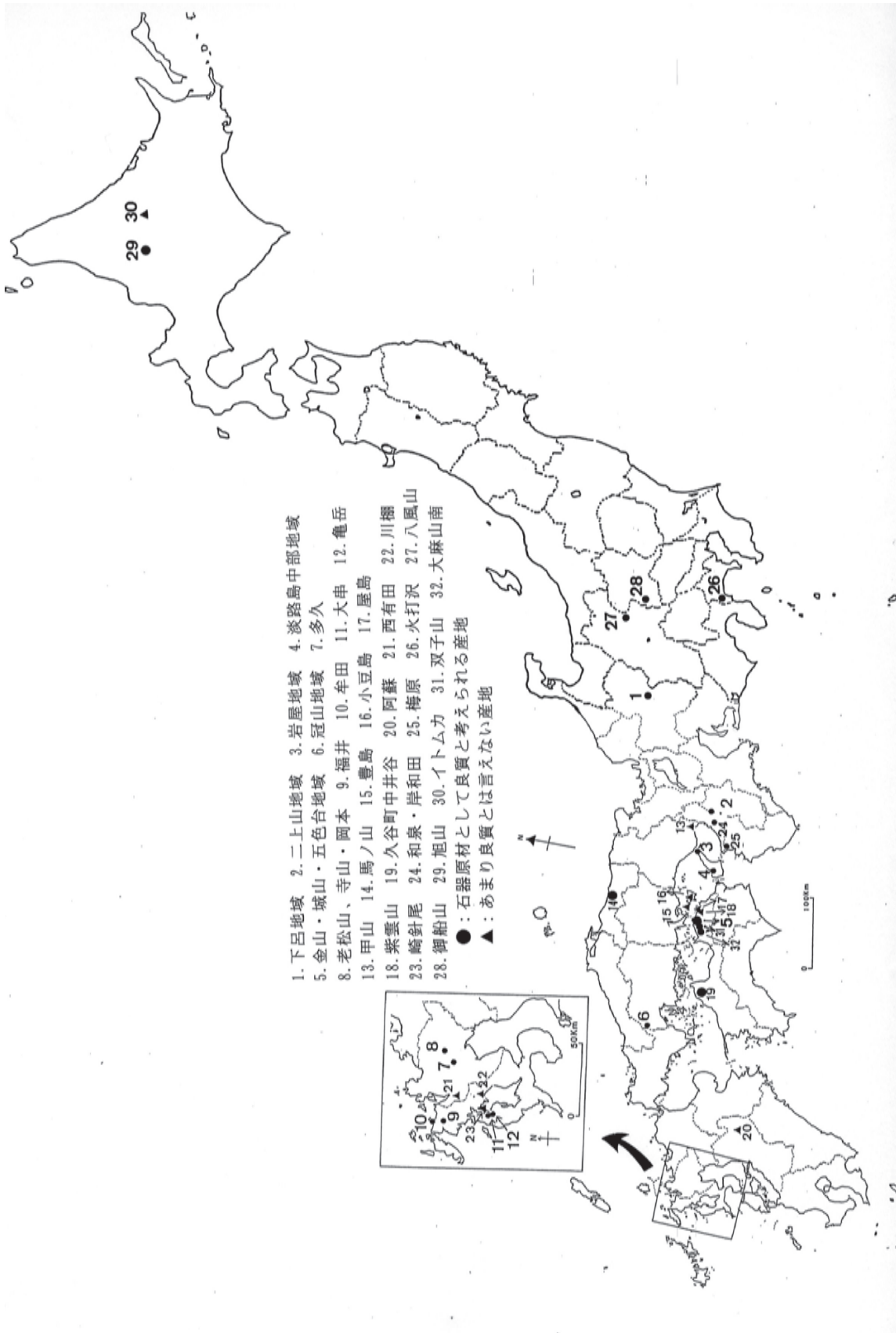


Fig.134 サスカイト及びサスカイト様岩石の原産地

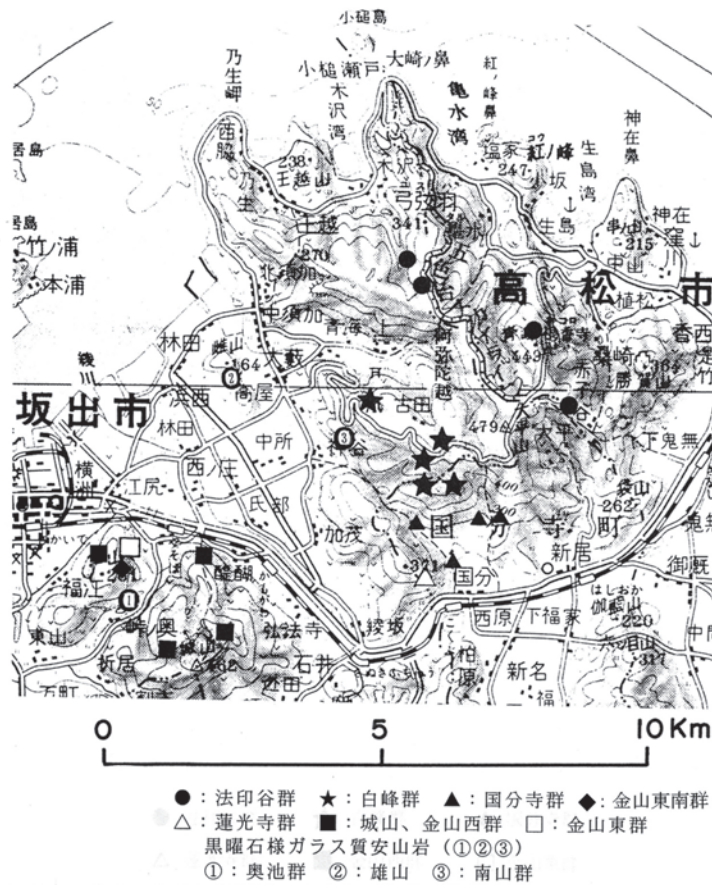


Fig.135 金山・五色台地域サヌカイト、黒曜石様ガラス質安山岩の原産地

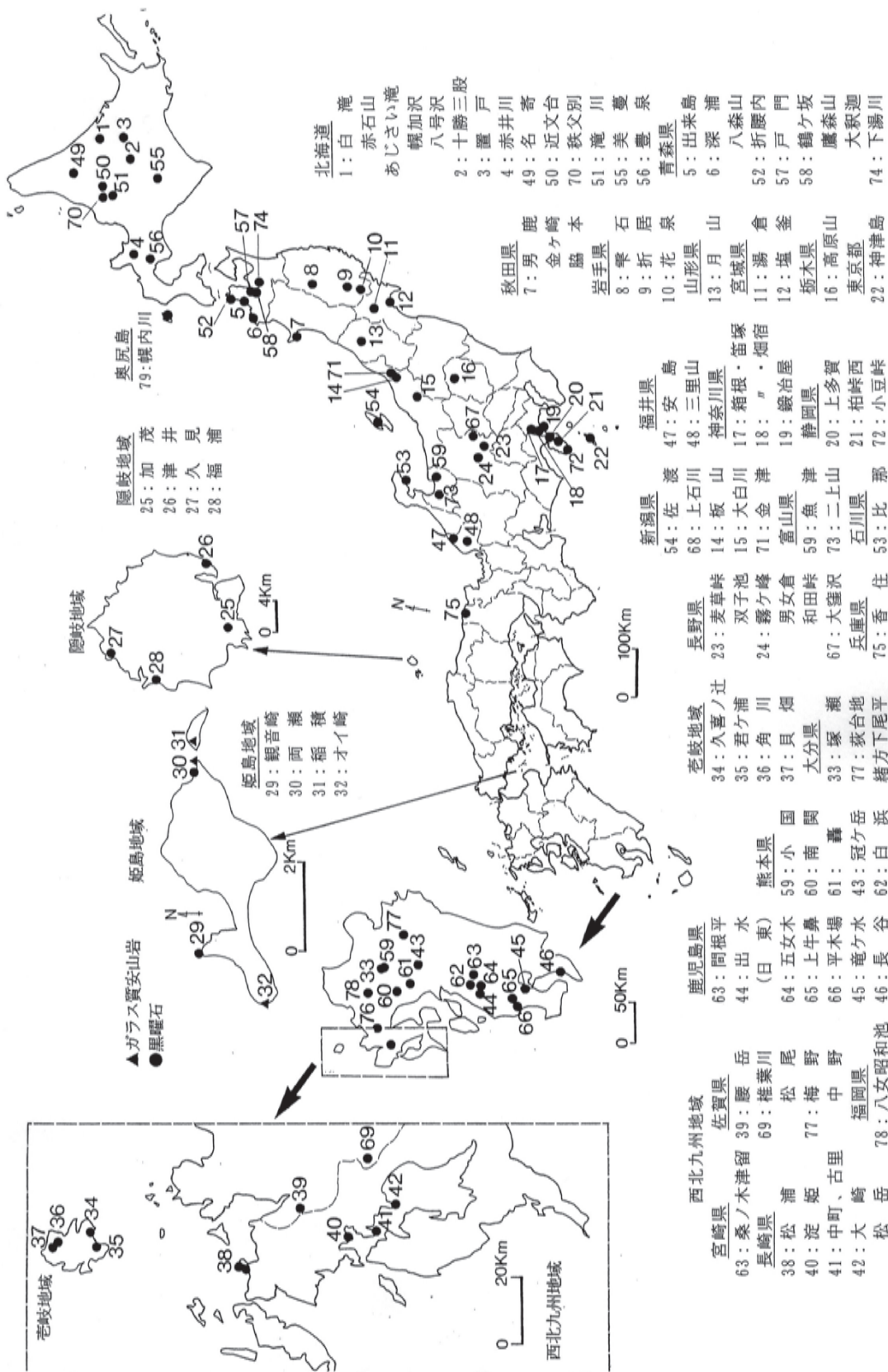


Fig.136 黒曜石原産地

第Ⅵ章 総括

1 縄文土器

第3地点拡張区からは縄文時代中期から近世に至る土器が出土している。これは仁淀川の川岸であるこの地点が、極めて長期間にわたって人々に利用され続けてきた証である。土器の中の大半は縄文時代晩期の土器であるが、既に述べたように出土土器の多くが斜面堆積によるものであり一括性には欠ける。しかしながら一部の刻目突帯文土器を除くとおおよそ晩期前葉の土器として把握することができる。該期の資料は、これまで高知平野においては僅少でありその実態は不明な点が多かった。今次出土の土器はその空白を埋める資料であり、特に無刻目突帯文土器のまとまった出土は刮目すべき成果である。晩期前葉における高知平野の位置付けや土器分布圏を考える上で極めて興味深い現象であると言えよう。

土器の大半は斜面堆積であるが、本文中でⅠ群として扱った土器、特に3-1-4区テラス2出土の土器は、出土状況から一括性の高い資料として捉えることができる。ここでは、前章の分類によって土器の分析を行った後、3-1-4区テラス2土器群の編年の位置付け及び地域性などを抽出し、当該期、西日本における高知平野西部の特徴を明らかにしたい。

(1) 縄文中期土器

Ⅰ類とした土器で口縁部が2点(12・13)と胴部細片(968)が出土している。里木2式に属する。高知平野での中期土器の出土は僅少で、東部の田村遺跡で数点と祈年遺跡で1点が確認されているが、ともに船元式に属する。

(2) 縄文後期土器

Ⅱ類とした土器である。形態や文様の違いからA～F類に分けた。ⅡA類(1・2・5・14・119・731)は、内湾する口縁部外面に文様を有する縁帯文土器で縄文撚りは全てLRである。仁淀川左岸の西分増井遺跡で4群とした土器に該当し、近畿系の土器で北白川上層式3に併行関係が求められる。ⅡB類(4・7・116・426・450・630・670・869)、ⅡF類(140)は四国西南部に分布の中心がある片粕式土器で、県下中西部に広く分布が見られる。やはり北白川上層式3に併行する。縄文は伝統的なRLが5点、LRが3点見られる。ⅡD類(3・867)は鐘崎式土器である。高知平野東部の田村遺跡からは南九州からの搬入品の可能性があるものも含めて多くの鐘崎式土器が出土しているが、西部では今回が初めての例である。ⅡE類(447)は後期末凹線文土器である。中・後期土器の半数近くは、調査区北部の3-1-1・2区からの出土である。

南四国の後期前葉は宿毛式土器や、松ノ木式土器に代表されるような中部瀬戸内との関係の強い土器型式が分布し、中葉に至り在地の片粕式土器に加えて近畿や南九州、瀬戸内の土器型式が見られるようになり地域間交流の盛んな状況が看取できるが(出原2002)、今次調査においてもそのことが確認された。

(3) 縄文晩期土器

深鉢、鉢、浅鉢で構成される。口縁部の点数で組成比率を見ると深鉢：鉢：浅鉢=1032(73.6%)：4(0.3%)：336(32.2%)である。

① 深鉢

表63 晩期土器組成

	深鉢	鉢	浅鉢	計
点数	1032	3	366	1401
%	73.7	0.2	26.1	100

深鉢は形態や文様などから10類(Ⅲ類～Ⅺ類)に大別した。刻目突帯文土器であるⅪ類を除いた晩期前葉段階を中心とする各類について口縁部点数をもとに構成比率を見ると表64のようになる。以下大別にそって特徴を抽出したい。

Ⅲ類

46点(4.5%)出土している。口縁部外面に文様帯を有するもので後期土器の特徴を色濃く残すタイプである。口縁部形態や文様の有無から3つに分けたが、口縁部が屈曲して立ち上がるⅢA類が最も多く31点を数える。ⅢA類は口縁部外面に2～3条の沈線を巡らす、2条例が多い。全体を捉えることのできる例に恵まれないが、125・127から見て頸胴部界には2条の沈線が施されているものと考えられる。口縁部沈線は、多くの場合、ヘラ状工具で施文しているが、断面方形や深いV字(772)を呈するもの、幅広い原体を器面に押し付けて段上の沈線が生ずる(302)などバリエーションが認められる。これらには新旧関係があるのかも知れない。

口縁内面にも1～2条の沈線が施される例が多く、中には弱い段(302・449・715)や段状の沈線(297)の見られるものもある。段や段状の沈線は粘土紐の内傾接合の際に生じたもので、沈線はその退化形態として見ることができよう。ⅢA類の中には弱い波状口縁を有するものが少なからず見られる(124・125・127・297・444・491・631・715)。これらの波頂部には凹点文(127)や楕円形の圧痕(715)が施されるが、後期末の凹線文土器様式の巻貝圧痕のルジメントとして捉えることができよう。在地の有岡KⅢ式の凹点(岡本1968)に比べると小型化している。715はすでに触れたように口縁部文様帯の下や頸部下位にも弧状の沈線が描かれ波頂部で集約しており他の例とは異なっている。

口唇形態は31点中26例が面取りを施し、丸味を持つものは少ない。波状口縁や内面沈線などを有するものは全て面取りを施している。ⅢA類の口縁部形態の中で今一つ注目すべき点は、386・489・631・632・772の口縁部外面屈曲部が三角突帯状に張り出している点である。489や632の断面では粘土紐の接合痕を明瞭に確認することができることから内面の段と同様に接合時に生じた特徴として捉えることができよう。

ⅢA類の器面調整は、口縁部・頸部ともに丁寧なナデ調整で仕上げられており、下地には巻貝状痕が観察される。121・125・771などは繊維束状の原体によるナデ調整も見られる。これらの胎土は次に述べるⅣ類とともに砂粒をほとんど含まず精選された胎土が用いられている。角閃石を含む胎土が見られることもⅤ類以降の深鉢とは異なっている。粗製深鉢というよりも半精製深鉢とするのが相応しいかもしれない。本類は南四国では初めての出土であり、後期末の凹線土器様式の伝統が色濃く残る一群として理解すべきであろう。類似の例を求めれば萩ノ岡貝塚で岩田第四類に該当するとされる3～6層出土土器の中に求めることができよう。(宮本1996)九州では、後藤一重氏が『楠野』で御領式土器に直続するとしたⅡ期の深鉢A1類(後藤1983)や宇土遺跡の深鉢a類(荒井2009)、夏足原遺跡のA-1類(坂本1993)などを挙げる事ができる。九州例は内面沈線がほとんど見られないことから、西部瀬戸内との共通性も有していることが指摘されよう。

ⅢB類は11点確認できる。口縁部の無文化の中でⅢA類から派生した可能性もある。内面に段を

表64 深鉢類型

	Ⅲ類	Ⅳ類	Ⅴ類	Ⅵ類	Ⅶ類	Ⅷ類	Ⅸ類	X類	XI類	計
点数	46	141	66	163	210	273	116	9	8	1032
%	4.5	13.7	6.4	15.8	20.3	26.5	11.2	0.9	0.8	100.1

有する例(138・713・389)や口縁外面の屈曲部が突帯状を呈するもの(139・445)が見られるが、内面に沈線のある例は見られない。口唇形態は、面取り：丸味=7:4である。器面調整はナデ調整を基調とするが下地には巻貝状痕が見られる。

ⅢCは4点、口縁部外面にⅢA類と同様の沈線が施されるもので、鉢となる可能性もある。口唇形態は1点が丸くおさまられるが他は面取られる。器面調整は巻貝状痕とナデ調整である。

Ⅳ類

141点出土し深鉢の13.7%を占める。無刻目突帯の深鉢は田村上層式土器(賀川1965)、上菅生B式土器(高橋1980)として東北部九州を中心に分布が見られ晩期中葉に位置付けられてきた土器型式であるが、宮崎・鹿児島など広い分布圏をもっていることが明らかになっている。南四国では西南部に分布する中村1式土器(岡本1968)を該当させることができるが、高知平野での出土は今回が初めてである。

Ⅳ類はすでに見たように、口縁部内面の文様の有無や施文手法の違いからA～D、突帯の形状からa～d、口唇形態から①～③に細分した。内面に段を有するA類は3点(2.1%)、削出し状の沈線を持つB類は28点(19.9%)、沈線を施すC類は64点(45.4%)、何も施さないD類は46点(32.6%)である。突帯の形状では、口縁部下端がわずかに突出するa類が25点(17.7%)、微隆起帯を呈するb類15点(10.6%)、三角形のc類89点(63.1%)、大きな三角形または台形状を呈するd類12点(8.5%)である。口唇形態は①類47点(33.3%)、②類88点(62.4%)、③類6点(4.3%)である。口縁部内面の施文手法と突帯の形態すなわちA～D類とa～d類の関係を見れば、A類の突帯形態はすべてa類、B類では大半をa類が占めている。C・D類ではa類は僅少でc類が7～8割と最も多く、突帯d類はD類で多く採用されている。次に口唇形態との関係を見るとA類はすべて①類、B類も6割が①類、次いで4割が②類、③類は見られない。C類では64点中、②類が39点(60.9%)、③類が21点(32.8%)、①類が4点(6.3%)、D類では46点中、②類が38点(82.6%)、①類が5点(10.9%)、③類が2点(4.3%)である。

無刻目突帯の成形手法を断面観察から確認できる例は少ないが、粘土紐接合時に生じた段を強調することによって突帯を作り出す手法(32・122・225・296など)と突帯を貼付する手法(31・677・870など)が見られる。前者を①手法、後者を②手法とする。手法は先に見たⅢ類の口縁部成形手法に通じるものであり、手法的には①手法が先行するものと考えられる。

A・B類は古い要素であり、それが沈線のC類へ、さらに何も施さないD類へと型式変遷することが想定されるが、突帯の形態や口唇形態もそれに照応した変化として捉えることができよう。B・C類の中には小型化した波頂部を持ち凹点文が施される例(134・296・457)が見られる。これらはⅢ類で見られた巻貝扇状圧痕のルジメントとして位置付けることができる。Ⅳ類も全体形を捉えられる例がないが、上胴部まで残るものにはほとんど例外なく頸胴部界に1～2条の沈線が見られる。2条例(640)は少なく1条が多い(128・136・224・298・299など)。後者の場合は総じて沈線幅が大きく5mm前後を測る。扇状圧痕のルジメントとともに頸胴部界の沈線もⅢ類に共通する要素である。また器面調整においても巻貝条痕とナデ調整を基調にして繊維束状の原体の使用も認められる。胎土も

表65 浅鉢類型

分類	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	計
点数	199	22	23	15	26	40	26	4	2	3	2	1	2	1	366
%	54.4	6	7.1	4.1	7.1	10.9	7.1	1.1	0.5	0.8	0.5	0.3	0.5	0.3	100.7

精選された胎土で、角閃石を含む例が見られる点などもⅢ類に共通しており半精製の深鉢として位置付けられる。以上のようにⅣ類にはⅢ類との共通要素が多く認められる。Ⅳ類は、Ⅲ類口縁部の無文化の進行の中で派生した形態として位置付けられよう。このことは後述するように無刻目突帯の成立とも関わっている。また2～3段階の変遷を辿ることが考えられる。

V類

66点(6.4%)を占める。全体的なシルエットはⅣ類と似ているが、上胴部の屈曲角度がⅣ類に比べて強い(17・305・402)ものが見られる。口縁部の特徴からA～D類に大別することができる。内訳は内面に段を有するA類が5点(7.6%)、内面に沈線を施すB類が19点(28.8%)、内外に沈線を有するC類が5点(7.6%)、何も施さないD類が最も多くて37点(56.1%)である。口唇形態は①が38点(57.6%)、②は28点(42.4%)である。頸胴部界に沈線を有する例も見られる(17・75・305)。これらの中で75は趣を異にするタイプである。頸部が短く、頸胴部界に幅広の鈍い凹線が見られる。

V類も総じて丁寧な作りで巻貝状痕とナデ調整、繊維束状の原体によるナデ調整も見られる。胎土も精選されたものが多くⅢ・Ⅳ類と共通点を持っており、半精製深鉢と位置付けることができよう。ただ1例だけ二枚貝条痕が見られる(229)。A類については岩田遺跡第四類(潮見1960)の口縁部内面段部に類例を見いだすことができる。B～D類についても先に挙げた萩ノ岡貝塚3～6層遺物の中に類似相を見出すことができるが、143・308・321・334などの段部や沈線手法は岡田憲一が萩ノ岡貝塚4層出土の土器について「内面が強い抉りになるものが見受けられる」と指摘し岩田遺跡第四類第二段階(岡田2000)とした特徴に近似する。このような抉り状の沈線は、南四国では松本安紀彦が晩期前葉(松本2008)に位置付けた姫野々遺跡から出土しており、西南部では大宮宮崎遺跡(木村剛朗1993)でも散見される。東北部九州の坂口遺跡出土の深鉢にも類例が見られる。(後藤1995)

Ⅵ類

粗製深鉢で163点(15.8%)出土している。変化に乏しいことから細片ではⅦ・Ⅷ類との判別が難しい。文様はほとんど施されることがなく、D類が154点(94.5%)を占める。僅かに内面に沈線をもつB類が8点と頸胴部界に段をもつF類が1点見られる。B類にはV類で見た抉り状の深い沈線(141・235など)も見られる。口唇形態はB類では8点のうち7点が①類、D類では①類:②類=85点(55.9%):67点(44.1%)である。

胎土には砂粒を多く含んでおりV類までの主体を占めていた精選されたものは見られない。器面の最終調整はナデ調整が大半を占めるが、巻貝とともに二枚貝条痕をとどめる例が増加する。特にV類までは胴部には巻貝状痕が残っても頸外面は丁寧にナデ調整するものも多く見られたが本類ではそのような調整別けをしない例が多く見られるようになる。

Ⅶ類

口頸部が「く」字状に屈曲、外反する粗製深鉢で、210点(20.3%)を数える。このうち207点、(98.6%)が全く文様を持たないD類である。内面に沈線を有するB類が1点(228)、口唇部に細かい刻目を持つE類が2点(874・876)見られる。口唇形態では①類:②類=106点:104点でほぼ同数である。器面調整

では二枚貝条痕がナデ調整や巻貝調整よりも増加して全体の半分近くを占めるようになる。唯一、二枚貝条痕が卓越する深鉢である。

本類は、家根祥多の滋賀里Ⅲa式(家根1981)に該当するが、その特徴である口縁部の「く」字状に屈曲や頸部の強い横方向のナデ調整が典型的に現れる例は僅少で、調整の削りは見られない。滋賀里式秋篠段階を設定した岡田憲一の分類(岡田1998)に従えば、深鉢AⅣ類とした頸部のナデが不明確で口縁部と頸部が泰然と画されないタイプが多いことを特徴とする。

VIII類

直線的に立ち上がる粗製深鉢である。深鉢の中で最も多く273点(26.5%)を数える。この内271点がD類である。口唇形態は①類:②類=140点:133点でほぼ同数である。器面調整では、内外面ナデ調整で仕上げているものが多いが、条痕を観察できる77点中の比率は、二枚貝条痕:巻貝条痕=25点(32.5%):52点(67.5%)で、巻貝条痕が2倍近くを占めている。

IX類

口縁部が内湾する粗製深鉢で、116点(11.2%)が出土している。口唇形態は①類:②類=37点(31.9%):104点(68.1%)で、丸味を持つ②類が7割近くを占めている。器面調整はナデ調整が主体を占め、次いで巻貝条痕、繊維束状原体(52・89・103など)が見られ、二枚貝条痕(353)は少ない。本類はVIII類とともに滋賀里Ⅲa期を構成するものと考えられる。

X類

口縁部が如意状に外反する粗製深鉢である。9点(0.9%)出土している。内外面ナデ調整を基調とするが巻貝条痕(106)や二枚貝条痕(335)も少し認められる。106には口縁部内面に段状の沈線が施されている。806の口唇には刺突状の刻目が見られる。

XI類

口縁部が外方に肥厚して段状を呈するもので、8点(0.8%)が出土している。口唇形態は①類が多く、器面調整はナデ調整を基調とするが巻貝や二枚貝による条痕も見られる。口縁部形態はバリエーションが多く見られる。粗製土器が多いが160・163はヘラ磨きが施されている。形態的な特徴から先に挙げた滋賀里式秋篠段階に該当させることができようが、頸部の横ナデは顕著ではない。

XII類

刻目突帯文土器である。17点が出土している。突帯は総じて口縁短部から1cm程下に貼付される。口唇刻みのA類:無刻のB類=13点(76.5%):4点(23.5%)、口唇形態は①類:②類:③類=4点(23.5%):11点(64.7%):2点(11.8%)である。これらの数値は居徳遺跡1C区ⅣD層の状況に近い。(出原2010)

②鉢

コップ形のⅠ類(384・385)が2点と浅い椀形のⅡ類が1点の3点を数えるに過ぎない。ナデ調整が施された粗製品である。Ⅰ類は近似例を西坊城遺跡の浅鉢M類(岡田2003)に見ることができるが、西坊城遺跡例が強いナデ調整やヘラ削りが施されている点が異なる。

③浅鉢

黒色磨研土器が大半である。主に口頸部の特徴からA～M類の13類に大別(表65)することができる。各類共にほとんど例外なく精選された胎土が使われている。

A類

199点(54.4%)が出土しており全体の半分以上を占めている。本類はB類とともに晩期前葉の西

日本に広く分布している形態である。口縁部の立ち上がりによってⅠ～Ⅳ類に、口縁部内外面の処理の差異によってさらに細分した。口縁部が直立するⅠ類、外方に屈曲するⅡ類、ほとんど屈曲しないⅢ類、端部を摘み上げるⅣ類の比率は、9点(4.2%)：160点(80.4%)：29点(14.6%)：1点(0.5%)である。Ⅰ類の口縁部処理は口縁部が肥厚するb類は見られず、a類で占められる。そして口縁部外面に1～2条の段状の抉りを施す①類が7点、沈線を有する③類が2点見られる。Ⅱ類では、a類：b類=91点(56.9%)：69点(43.1%)、そしてa類には口縁部外面を段状に抉る①類が56点と最も多く、次いで沈線を有する③類が20点、凹状を呈する②類が9点である。口縁部が内面に肥厚するb類には①類は1点のみで、③類が24点、②類が18点見られるなど口縁部内面の肥厚の有無と外面の処理には関連のあることが判る。Ⅲ類は、a類：b類=4点(13.8%)：25点(86.2%)を示し、Ⅱ類とは逆転している。そしてb類の形態も断面カマボコ状を呈する例(272・585・586・591など)が目立つ。

A類浅鉢は広田式土器など九州後期末の浅鉢に系譜が求められるタイプであり、新しくなるに従って口縁部が直立から外傾に、沈線数も減少し、玉縁口縁が出現するなどの変遷が知られている。中村貝塚や鴨部遺跡では浅鉢の主体を占めているが、前者ではⅠ類は見られずⅡ・Ⅲ類で占められている。後者は逆にⅢ類が見られない。A類は、Ⅰ類→Ⅱ類→Ⅲ類への変遷が考えられる。

B類

22点(6%)と少数である。A類に比べて頸部の短なものをB類としたが細片では区別できないものもある。細部の口縁部形態や処理についてはA類と同様に行うことができる。BⅠ類はa類のみで占められ、且つ①類が多く、ついで③類が見られる点はⅠ類と一致している。BⅡ類もa類：b類=7点(58.3%)：5点(41.7%)とa類が多い。BⅢ類は2点(206・840)と僅少であるがb類、カマボコ状の肥厚を呈している。

C類

23点(7.1%)が出土している。頸部の長短でⅠ類とⅡ類に分かれ、18点(78.3%)：5点(21.7%)で、Ⅰ類が多い。Ⅰ類には口縁部内面に強い段部を持つ①類、弱い段の②類、沈線を持つ③類が5点(27.8%)：8点(44.4%)：5点(27.8%)の比率で見られる。CⅡ類には段を持つものは1例のみで、沈線の③類が3点、何も施さない④類が1点見られる。本類も内面段部から沈線へと変遷を遂げるものと考えられる。CⅠ①類の605には凹点文が、CⅠ③類の112には切り込みと垂下沈線が施されている。後期末のルジメントとして理解できよう。類例は東九州沿岸部Ⅰ・Ⅱ期の浅鉢Ⅳ類や小南裕一が晩期前葉古段階(沿岸部)としている浅鉢B-2類などに求めることができる。(小南2008)また中村貝塚からも少量出土している。

D類

15点(4.1%)である。無文のⅠ類と有文のⅡ類が13点(86.7%)：2点(13.3%)で見られる。本類も九州から近畿まで広い範囲で認められる。他の地域では有文が多く見られるようであるが当遺跡では無文が多い。

E類

26点(7.1%)である。頸部の長さでⅠ～Ⅲ類に分け、口縁部の処理で①～④類に細分した。Ⅰ類：Ⅱ類：Ⅲ類=7点(26.9%)：9点(34.6%)：10点(38.5%)である。Ⅱ・Ⅲ類は口縁部内面に段を有する①

表66 テラス2出土深鉢類型

	Ⅲ類	Ⅳ類	Ⅴ類	Ⅵ類	Ⅶ類	Ⅷ類	Ⅸ類	X類	XI類	計
点数	3	16	12	26	3	27	10	2	0	99
%	3	16.2	12.1	26.3	3	27.3	10.1	2	0	100

類が9割を占めるのに対してⅠ類では3割以下で沈線の③類や何も施さない④類が多い。Ⅲ類→Ⅱ類→Ⅰ類への変遷が考えられる。

F類

40点(10.9%)でA類に次いで多い。胴部が張り出し最大径を胴部に有するタイプである。頸部の長さからⅠ～Ⅲ類に大別し口縁部の処理から①～⑤類に細分した。Ⅰ類:Ⅱ類:Ⅲ類=16点(49%):12点(30%):12点(30%)である。FⅠ・Ⅱ類の口縁部は①類と②類が多く、FⅢ類は④類が多く見られる。本類の胴部形態は算盤玉状を呈するもの(27・110)と楕円形状に張り出すもの(221・486)がある。94や215も後者の胴部が付くものと考えられる。FⅡ①類の760には半円状の突起が見られる。県西部のツグロ橋下遺跡から多く出土しており、中村貝塚や北高田遺跡などからも少量出土している。晩期中葉に盛行するタイプである。

G類

26点(7.1%)出土している。D類と区別し難いものもあるがD類は波状口縁が多いのに対して本類は平縁である。口縁部の特徴から①～⑤類に細分したが、何も施さない⑤類が10点、内面に沈線を持つ③類が8点、突起を持つ④類が3点、内面カマボコ状に肥厚する②類が3点、内面に段を有する①類が2点見られる。

H～M類は、1点～数点の出土である。HⅠ類は居徳遺跡の晩期後葉の壺Ⅰ類へ、Ⅰ類は同じく壺Ⅱ類(出原2010)へ、HⅡ類・L類は突帯文期の逆「く」字状の浅鉢へ、M類は突帯文の深鉢Ⅱ類に伴う可能性がある。この他に注目すべきものとして檀原文様を持つ胴部細片(762)がある。陽刻文風に七宝文を削り出しその上に弧状の沈線を描いている。同系譜の文様は北高田遺跡から出土しているが、北高田遺跡例は沈線によっている。

(4) 3-1-4区テラス2出土の遺物について(上ノ村式土器の提唱)

すでに述べてきたように今次調査出土の土器の大半は斜面堆積によるものであるが、Ⅰ群として扱った土器は一括性の高い土器であり、中でも3-1-4区テラス2(以下テラス2)出土の土器は量的にも恵まれており晩期の一時期を構成する資料として位置付けることができる。上述の分析に基づきその特徴を示し編年的位置付けを試みたい。

テラス2の深鉢の構成は表66に示した。大分類で調査区全体の比率と比較すると、大きな違いはないけれども、口縁部が「く」字状に外反するⅦ類が全体では20.7%であるのに対して3.0%と極めて僅少であること、口縁部肥厚するⅪ類が見られないことが挙げられる。次に、諸属性の違いについて主だった点について指摘する。Ⅳ類は、口縁部内面が段や沈線を施す例で占められており(A類1点、B類4点、C類11点)何も施さないD類は皆無である。全体ではD類が32.6%を占めていたのと比べると大きな違いである。口唇形態は確認可能な15点中、面取りをする①類が10点(66.7%)と全体での数値の2倍を占めている。また296に見られるように口縁部に後期末の特徴である巻貝圧痕の痕跡をとどめる凹点が認められる例が含まれるなど総じて古い要素が認められる。胴部沈線の存在からも本類が口縁部文様帯を持つⅢ類からの系譜上にあることを示している。Ⅴ類は12.1%で全体比率

の2倍を占めている。本例でも古い要素である段や沈線をもつA～C類が83.3%、口唇形態も①類が83.3%を占めている。Ⅵ類は26.3%を占める。口縁部形態はD類が多く、口唇形態も①類：②類＝15点(57.7%)：11点(42.3%)と全体の数値とほとんど変わらない。Ⅶ類は先に挙げたように全体の組成率に比べて極めて僅少である。Ⅶ類はⅪ類とともに滋賀里式秋篠段階に併行関係を求めることが可能であり、テラス2出土土器の時期比定について重要な要素となる。Ⅷ類は全体比率と同様に最も多く27.3%である。ただⅧ類は全体では条痕が確認できる77点のうちで二枚貝：巻貝＝25点(32.5%)：52点(67.5%)であるのに対して、テラス2ではもっぱら巻貝条痕で二枚貝条痕は確認できない。このように粗製土器においても口唇形態や器面調整などに古い要素を残している。

鉢は3点うち2点が出土している。

浅鉢は口縁部13点を確認できる。このうち8点(61.5%)をA類が占めており、全体比率(54.4%)に対して少し上回っている。全てⅡ類でありⅠ類やⅢ類は見られない。次いでクランク状に屈曲する口頸部をもつE類が3点、CⅠ類とG③類が各1点認められる。晩期中葉に特徴的な胴部の発達するF類やカマボコ状に肥厚した口縁部を持つAⅢ類を伴わない。

テラス2出土土器の編年的位置付けであるが、深鉢では後期末の特徴を色濃く残したⅢ類の存在、深鉢Ⅳ・Ⅴ類の口縁内面の段や沈線など岩田遺跡第四類に見られる特徴を有し、二枚貝条痕がほとんど認められない。滋賀里式秋篠段階に併行関係が求められるⅦ類やⅪ類が僅少或いは認められない。浅鉢もAⅡ類が中心となる。以上のような特徴から晩期前葉に編年的位置を求めなければならない。

高知平野における晩期前葉の土器編年は資料的な制約がありながらも松本安紀彦によって精力的に進められている(松本2006・2008)。松本は前葉を3小期に区分し、姫野々上町遺跡2期→鴨部遺跡出土土器→八反坪式土器の変遷を提示している。これを仮に前葉1・2・3とすれば前葉1の特徴として巻貝条痕を挙げている。前葉2は二枚貝条痕の登場や口縁部の肥厚、「く」外反口縁などを挙げている。その上で前葉1を滋賀里Ⅱ式に、前葉2期を滋賀里Ⅲa期に併行関係を求めているが、妥当な見解であろうと思われる。前葉3の八反坪式については、資料が僅一緒に出土している浅鉢から中葉に下る可能性もあるのではなかろうか。

テラス2の土器は、前葉1に併行関係が求められ、当該期の内容を豊かに成し得る資料である。姫野々上町遺跡からは細片ながら深鉢Ⅳ類が1点出土しており、前葉2の鴨部遺跡からは深鉢Ⅶ類や浅鉢AⅡ類が多く見られる。テラス2出土土器と他の地域との平行関係を求めれば近畿では西坊城1・2期＝滋賀里Ⅱ式、東北部九州沿岸部では後藤のⅠ期、Ⅱ期(坂口式)、北部九州沿岸部では小南の後期末葉新段階、中部瀬戸内では平井泰男のⅠ期(平井2009)に該当させることができよう。

テラス2出土の土器は、南四国における晩期前葉の標識的な内容を有する土器型式として上ノ村式土器を提唱したい。上ノ村式土器には無刻目突帯の深鉢が伴うという注目すべき特徴を有していることになる。

(5) 無刻目突帯文深鉢について

無刻目突帯文深鉢はすでに触れたように田村上層式、上菅生B式土器として東北九州の晩期中葉を特徴付ける土器型式として位置付けられてきたが、最近では広く南九州にも分布圏を持つことが知られるようになり、口縁部内面の沈線の有無などによって先後の細分も行われている。(宮崎埋文2006)四国では、先述のように中村Ⅰ式土器が該当する。これまで西南部においてのみ認められてい

た型式であり、豊後水道を隔てて一衣帯水の関係にある東九州との小文化圏を形成する証として理解されてきた。しかし後述するように無刻目突帯文深鉢がどのような変遷の中から出現したのかということについては、必ずしも明らかにされていたわけではなかった。そのような中で、両地域に先行して高知平野に無刻目突帯文深鉢が登場することは、従来の晩期土器分布圏の形成や地域間交流などの諸現象について大きな見直しを迫られることになる。

① 深鉢Ⅳ類と中村Ⅰ式土器

まず今回の分析をもとに隣接する西南部の中村Ⅰ式との関係から見て行きたい。中村Ⅰ式土器はすでに触れたように四万十市の中村貝塚を標識遺跡として岡本健児(岡本1968)によって型式設定されたものである。岡本はその後の研究において中村Ⅰ式土器を晩期中葉に置き「東九州の田村上層式に全く類縁のもの」と位置付け北部九州との関係については菜畑遺跡9～12層の山ノ寺式土器に平行関係を求めている(岡本1984)。一方、木村剛朗はその後明らかとなったツグロ橋下遺跡出土の中村Ⅰ式土器と中村貝塚出土のそれとの比較検討を通して、中村Ⅰ式を古段階と新段階とに細分した。中村貝塚出土の中村Ⅰ式は外反口縁が多く、内面沈線、ナデ調整が施されるのに対して、ツグロ橋下遺跡のそれは内傾口縁、条痕、口縁内面の沈線が認められないなどの違いがあることを示した上で、それらは次の段階の「中村Ⅱ式の先駆的要素」として新しく位置付けた。その上で中村Ⅰ式を晩期中葉の上菅生B式土器に併行を求めた。(木村1987) この木村の細分は今次調査からも肯定されるべきものである。木村は浅鉢との関連については触れていないが、浅鉢においても差異が認められる。中村貝塚では上ノ村遺跡でAⅡ類とした浅鉢が主体であるのに対してツグロ橋下遺跡では胴部張るF類やカマボコ状の肥厚を呈するAⅢ類で占められ、AⅡ類は見られない。前者を古段階、後者を新段階に対応させることができる。そして浅鉢の編年の位置付けから新段階は晩期中葉に置くことが可能と考えられるが、古段階はそれ以前に求めなければならない。

次に、テラス2出土の無刻目突帯文深鉢と中村Ⅰ式古段階を比較すると、すでに見てきたように深鉢Ⅳ類の口縁部A・B類の存在や深鉢Ⅲ類の存在など多くの諸属性からテラス2出土例が先行することは明らかである。南四国の無刻目突帯文深鉢は上ノ村遺跡テラス2(上ノ村式)→中村Ⅰ式古段階→中村Ⅰ式新段階へと変遷をたどるものとしなければならない。

② 無刻目突帯文深鉢の成立

これまで無刻目突帯文深鉢の成立の時期については、上菅生B式土器に代表されるように一般的には晩期中葉に求められてきた。そしてその成立の契機については、北・東部九州の晩期前葉深鉢の型式変化のなかで成立するという見方(高橋1980、水之江1997)と西部瀬戸内沿岸部での深鉢口縁部の成形時に生じたとする見解がある。(後藤1995) 前者の立場に立つ水之江は、上菅生B式に先行する楠野段階の断面二等辺三角形に肥厚する口縁部形態からの変化するものとしている。後者の見解を採る後藤は、東九州沿岸部の晩期Ⅱ期(坂口式)を構成する深鉢Ⅱ類に見られる粘土紐接合時に生じる段に無刻目突帯出現の契機を求めた。すなわち、先に筆者が無刻目突帯文の成形の③手法としたものである。そしてこの手法は家根祥多が「特殊な刻目突帯文土器」の成立について描いたものとも一致する(家根1981)。このような手法による無刻目突帯文深鉢は貫川遺跡(前田1988)の深鉢E類や岩田4類の中にも見出すことができる。まさに周防灘沿岸地域に成立期の無刻目突帯を求めることが可能であり、その内容から内陸部に先行して成立していることは明らかである。しかし後藤も説くように坂口遺跡では、Ⅱ期以降深鉢Ⅱ類はほとんど見られなくなり、他の遺跡においてもそ

の後の展開を見ると内陸部に比べて無刻目突帯が深鉢の一翼を担うことはない。無刻目突帯文深鉢は周防灘沿岸地域に成立の契機があるが、その後は内陸部で発展する土器型式であることが窺われる。

上ノ村式の深鉢Ⅳ類は深鉢の中で16.2%に過ぎないが、成立期の無刻目突帯文深鉢としては現状では最もまとまった資料として捉える事ができる。すでに述べたようにⅣ類は口縁部文様帯を持ち後期末の特徴を色濃く残すⅢ類に系譜を求めることが可能で、口縁部が幅狭くなる過程で登場した晩期前葉の新たな土器型式として位置付けることができる。高知平野西部においても周防灘沿岸地域と同様のステージが存在していたことを示している。縄文後期から晩期への移行期、高知平野西部においては、四国山地を隔てて西部瀬戸内と共通の土器分布圏が形成されていた証である。しかも周防灘沿岸地域よりも典型的な展開が看取できる。

③ 無刻目突帯文深鉢のその後の展開

テラス2出土以外の無刻目突帯文深鉢には内面沈線のないものも多く出ていることから中村Ⅰ式新段階併行期のものも存在することは十分に考えられる。しかし同じ仁淀川右岸にあって晩期中葉段階の土器が出土している北高田遺跡や居徳遺跡では、浅鉢AⅢ類やF類は多く出土しているものの無刻目突帯文深鉢は見られない。このことは高知平野においても無刻目突帯文深鉢は比較的短期間のうちに撤退し、西南部において中村Ⅰ式土器として分布圏を縮小しながら展開したことが考えられる。この背景には、晩期中葉以降、口唇部に刻目や口縁部内面に沈線を持った深鉢の出現、さらに後葉の刻目突帯文の展開などに見られるように瀬戸内的な要素が認められることと無関係ではなからう。南四国は、縄文時代・弥生時代を通して近畿や九州、瀬戸内からの文化が絶えず流入している。総じて西南部は九州の中・東部は中部瀬戸内や近畿からの影響を受け、時に独特の地域性をも発現して多彩な土器型式が展開するが、東西文化の接点とは時代において異なっている。(出原2002)

晩期前葉における無刻目突帯の成立は、高知平野西部の仁淀川流域が九州方面からの影響が高知平野にまで及んでいたことを意味する。しかしこれ以降、時代が降るにつれて西南部に後退し豊後水道を跨いだ小土器文化圏を形成する。

2 石器

石器は石鏃、石錐、伐採斧、加工斧、打製石斧、石包丁、石棒、玉類などが出土している。出土状況から時期比定できるものは少ないが、ここでは器種ごとに特徴を抽出しておきたい。

(1)石鏃

74点出土している。大半は縄文晩期に属すると考えられるが、弥生時代のものも含まれている。石材はサヌカイト63点(85.1%)、チャート9点(12.2%)、赤色頁岩1点(1.4%)、不明1点(1.4%)で、サヌカイトが圧倒的に多い。南四国では縄文早期から石鏃石材の主体をサヌカイトが占めるようになり弥生時代には更に占有率が高くなる。特に弥生時代の高知平野ではほぼ100%をサヌカイトが占めるようになる。サヌカイトのほとんどすべてが香川県の金山産である。S18は、二上山産との鑑定結果が出たが金山産との違いは肉眼でも容易に判別できる。南四国で二上山産の出土は西南部の双海遺跡出土の剥片(早期～前期)に次いで二例目である。先述のように檀原式土器の出土とともに当該期における近畿との交流を示す資料として興味深い。

基部形態には、A類(平基式)：B類(凹基式)：C類(突基式)が見られ、それぞれ6点(8.5%)：63点(88.7%)：2点(2.8%)で、B類がもっとも多くを占める。B類のなかでは基部が湾曲するB1類が25点、逆V字状のB2類が34点、中央部が小さく凹むB3が4点である。S27・28・54は駒形鏃に属する。重量は、1～2gが多い。テラス2からはS7・13・32・35・43・53が出土しており晩期前葉の石鏃として捉えることができる。S7・32はチャート、他はサヌカイトである。

(2)伐採斧

A類とした縄文時代の伐採斧が16点出土している。高知平野における縄文時代の伐採斧は、東部では奥谷南遺跡、西部では柳田遺跡や居徳遺跡などから出土しており前者は製作跡の可能性はある。(出原1999)東西ともに頁岩や蛇文岩、結晶片岩などが使用されている。今次例も結晶片岩が8点、頁岩4点、粘板岩と蛇文岩が各2点出土している。

弥生時代の伐採斧は、田村遺跡を中心に東部で数多く出土しており石材の大半は三波川帯に産する御荷鉾緑色岩類で占められている。(出原1999)縄文時代から弥生時代へ見事に石材が転換している。これに対して西部の出土事例はまだ少ないが、柳田遺跡や鴨部遺跡で散見される事例を見る限りでは、結晶片岩の占有率がやや高い傾向にあるが、頁岩、蛇文岩などが見られ縄文時代の石材をそのまま踏襲している。今次の7点も結晶片岩が5点で、頁岩と蛇文岩が各1点とこれまでと同様の傾向が見られ、東と西で石材の異なる現象を明瞭に示している。

(3)加工斧

自然面を残さず敲打、研磨などの加工工程を経たA類と自然礫の一端を加工して刃部としたB類に分かれる。A類は大型(131)と小型(129)が見られる。大型品は今回の出土が初めてであるが、小型品は上流の居徳遺跡で3点、中央部でも栄エ田遺跡で2点出土している。131は、すでに述べたように面取りや刃部の稜線など一見、弥生時代のそれと見紛うほどの製品であるが出土状況から晩期に属する。後主面に着柄痕跡を示すと考えられる凹みが確認される。着柄痕跡を残す例は伐採斧には僅少なながら認められる例があるが、加工斧については寡聞にして知らない。使用方法の研究に貴重な資料となろう。

縄文時代の加工斧は伐採斧に比べると少ないが、後期以降の九州を中心に類例が増加しつつあり磨製石斧の機能分化の画期として捉えることができよう。(宮内1987、吉留1993)特に南九州では、山ノ中遺跡など大規模な集落遺跡から比較的集中して出土する傾向がある。中四国からの大型品の出土は極めて僅少で四国では本例が初めてである。B類はすべて小型で両刃が作り出されている。B類は弥生時代にいたって下條信行のN類へと継続するタイプである。(下條1996)

(4)打製石斧

29点出土している。石材は頁岩13点、結晶片岩9点、緑片岩3点、チャート2点、粘板岩1点、サヌカイト1点(S120)である。サヌカイトを除けばすべて仁淀川流域で簡単に入手できる。サヌカイトについては、前章で藁科が述べているように未発見の産地を想定しなければならない。全面白色に風化しており晩期以前に遡ることが考えられ打製石斧として一律に論じることができないかも知れない。形態的には撥形が6点、長方形が23点である。製作技法的にはすでに述べたように器厚が薄いこと、自然面を多く残す例が多いこと、側縁加工を施す例が多く見られる。刃部は調整加工を施すものと何も施さないもの、研磨が見られるものなどがある。刃部形態は直刃、外湾を呈するものが見られる。欠損品が多く全体の形状を捉えられる例が少ないが、長さ13～15、幅6～8前後の大型品とそ

れ以下の小型品に別けることができそうである。

南四国の打製石斧は縄文後期中葉に一般化する。田村遺跡から54点が出土している。長方形状を成すものが多いが、4割程度は側縁に抉りを持つ撥形が見られる。ここでの石材は物部川に最も多い砂岩が多く使われている。仁淀川左岸の西分増井遺跡からは後期中葉～後葉に属するものが3例みられるがすべて抉りを持つ撥形である。南四国の打製石斧は抉りを持つタイプから持たないタイプに変遷することが窺われる。晩期には、西南部の遺跡に集中する傾向があり高知平野でのまとまった出土例は今回が初めてである。すでに周知のように晩期の打製石斧は東・南九州に多く分布しており賀川光夫の「縄文晩期農耕論」の根拠となった石器である。(賀川1966)その賛否については議論のあるところではあるが、晩期前葉を中心に高知平野西部まで同様の文化圏が形成されていたことを示唆する遺物である。しかし晩期中葉の北高田遺跡や終末期の居徳遺跡からは数例が見られるのみである。晩期でも新しくなるにしたがって高知平野から打製石斧は退いていくことが窺われる。

(5)石庖丁

磨製石包丁が2点、打製石包丁が6点出土している。すべて弥生時代に属するものと考えられるが、打製のS136としたものは類似例が入田遺跡から2点出土しており晩期終末に属するものかも知れない。本例はチャートであり入田遺跡例は頁岩である。木村は石包丁状石器としている。磨製石庖丁のうち1点は紐孔が1孔である。高知平野では弥生中期末になると1孔例が多く見られるようになる。特に仁淀川流域において顕著で、半分程を1孔が占めている。

(6)玉類

縄文時代の玉類は、勾玉1点(162)、管玉1点(161)、小玉4点(157～160)の計6点が出土している。勾玉は九州に特有の「コ」字型に属している。(大坪2004)勾玉と管玉は出土状況から晩期前葉とすることができ。小玉の4点は出土状況から時期比定することは難しいが形態的に晩期に属するものと考えられる。これらの石材は前章で見たように藁科の産地同定によってすべて鹿児島県の上加世田遺跡などで大量に出土している結晶片岩様緑色岩である。出土状況も比較的近接していることから、これら6点はセットとして南九州から持ち込まれたことが考えられる。藁科は、この種の石材を用いた玉類の製作地を鹿児島に求め、後期～晩期の西日本各地、東は新潟まで分布するとされている。

南四国における玉類は、松ノ木遺跡出土の後期に属する小玉が最も古く遡る例で、蛇文岩製である。晩期になると西南部の有岡遺跡の勾玉が1点、中村貝塚から管玉が1点、高知平野では柳田遺跡から大型の勾玉が出土している。有岡例と中村貝塚例はともに緑色の蛇文岩とされている。(岡本1966)柳田遺跡の勾玉は、「翡翠輝石製か」と報告されているが結晶片岩様緑色岩の可能性が高い。南四国は晩期にいたって玉類が普及するが、九州南部からの影響を強く受けていることが明らかとなった。

(7)石棒

結晶片岩製の石棒の端部片で、横沈線の文様の一部が確認できる。南四国の石棒は後期に属するものが西分増井遺跡と坂本太平遺跡から各1点、晩期末葉～弥生前期土器の共存期の居徳遺跡では2点の石棒が出土している。後期の2例は今次例と同様の小型であるが、居徳遺跡の2例は、径8前後、長さ30以上の大型である。ちなみに田村遺跡前期中葉の土坑出土の石棒は大型に属する。高知平

野の石棒は、晩期末以降に大型化することを示している。本例の類似品として中村貝塚からは中村Ⅰ式土器に伴って有文の磨製石剣が出土している。握り部に格子の沈線文が描かれている。これについて岡本は榎原遺跡出土の有文石剣との共通性を指摘しているが(岡本1968)、本例を含めて晩期前葉の共通要素として捉えることができよう。

3 まとめ

第3地点拡張区は、僅か400㎡の狭い面積の調査であったが、縄文時代晩期を中心に実に豊富な遺物が出土している。特にテラス2から得られた上ノ村式土器は、これまで十分に把握し得なかった高知平野の晩期前葉の様相を明らかにするとともに、出現期の無刻目突帯文深鉢の存在を明らかにした。無刻目突帯成立の契機は、後藤により周防灘沿岸地域における東西土器文化の交流の中に求められていたが、上ノ村遺跡では深鉢Ⅲ類、すなわち口縁部文様帯を持つタイプの口縁部変遷過程の中で生じることが明らかとなり、無刻目突帯の成立についてより具体的に生成過程を示すことができた。縄文時代後期から晩期への移行において、周防灘沿岸地域と同様に東西文化の会交の地として当地が重要な役割を果たしていたことを意味する。晩期前葉の土器については、榎原文様の浅鉢片を含みながらも総じて九州的な様相が強く推移していることが窺える。晩期中葉以降の周辺遺跡の推移を見ると瀬戸内的な様相が次第に現れてくることから晩期前葉を九州的要素のピークとして位置付けることができよう。

石器では打製石斧と結晶片岩様緑色岩製玉類を挙げなければならない。前者はすでに述べたように縄文農耕論の根拠となった石器であるが、晩期前葉の高知平野西部は、東・南九州山間部と共通した石器組成を有していたことになる。そして玉類の出土は注目に値する。これまで、南四国と九州の石材に見られる交流はもっぱら姫島産黒曜石が挙げられていた。結晶片岩様緑色岩の玉類は、上加世田遺跡など鹿児島で製作され持ち込まれた可能性が高く、柳田遺跡例とも相まって南九州との交流を裏付ける証といえよう。居徳遺跡の晩期末の刻目突帯文深鉢の中には、22点の孔列文土器が出ており、宮崎県下の諸遺跡出土の孔列文土器との関連を述べたことがあるが(出原2005)、南九州との継続的な交流として捉えることができよう。

橋口尚武は南九州と南四国はじめ太平洋沿岸地域の交流について「海の道」の存在(橋口2001)を示した。南四国は、北に四国山地を背負い南は太平洋を臨むことから一見閉鎖的な小地域文化圏を形成する地域と思われがちであるが、近年の発掘成果はそのような想定を碎き、九州と近畿、更に瀬戸内との東西南北文化のクロスロードとしての役割を果たし、時として松ノ木式土器に見られるような独創的な土器文化も展開する地域であることが明らかとなっている。(出原2002)縄文晩期前葉の上ノ村遺跡出現の背景はまさにここにある。南九州には当該期、榎原文様を持った石剣や大洞系の土器が少なからず確認されている。これらの遺物の交流・交易の中継点として高知平野の存在が今次調査を通して明らかとなった。高知平野と南九州には黒潮を介した更にダイナミックな交流の歴史の潜んでいることが予想されよう。

上ノ村遺跡は晩期中葉まで営まれるが、後葉の刻目突帯文期には数点の土器を残すのみとなる。中葉以降は少し上流地域の倉岡遺跡や居徳遺跡に中心が移り、無刻目突帯を共有するネットワークは西部に大きく退くが、居徳遺跡に顕著に現れているようにこの地域は、北陸や東日本系の晩期土器

が数多く流入し、日本列島を貫く縄文晩期ネットワークの拠点としての役割を果たすようになる。
(出原2010)

参考文献

- 荒井孝廣 2009 「宇土遺跡(A・B地点)」『宇土遺跡(A・B地点)・長田尾遺跡・北尾鶴遺跡』
竹田市教育委員会
- 大坪志子 2004 「九州地方の玉文化」『季刊考古学』第89号 雄山閣
- 岡田憲一 1998 「縄文時代(滋賀里Ⅲ a式段階)の遺物」『秋篠・山陵遺跡』 秋篠・山陵遺跡調査会
- 岡田憲一 2000 「西日本縄文後期後葉土器編年序論－向出遺跡出土土器の研究」『向出遺跡』
大阪府文化財調査研究センター
- 岡本健児 1968 『高知県史考古編』 高知県
- 岡本健児 1984 「四国の弥生土器の編年と年代」『高地性集落と倭国大乱』 雄山閣
- 賀川光夫 1965 「縄文文化の発展と地域性 九州東南部」『日本の考古学』第Ⅱ巻 河出書房新社
- 賀川光夫 1966 「縄文農耕の一問題－いわゆる扁平石器の用途」『考古学研究』13巻4号 考古学研究会
- 木村剛朗 1987 a 「中村貝塚」『四万十川流域の縄文文化研究』 幡多埋文研
- 木村剛朗 1987 b 「ツグロ橋下遺跡の遺物」『四万十川流域の縄文文化研究』 幡多埋文研
- 木村剛朗 1993 『大宮・宮崎遺跡』 高知県西土佐村教育委員会
- 後藤一重 1983 「縄文式土器」『楠野』 大分県教育委員会
- 後藤一重 1995 『香々地の遺跡』 大分県香々地町教育委員会
- 小南裕一 2008 「北九州地域縄文後期末～晩期前葉土器の研究」『古文化談叢』第59集
- 坂本嘉弘 1993 「東九州における縄文時代晩期開始期の問題－大野町夏足原遺跡採集の遺物紹介を兼ねて－」『おおいた考古』第6集
- 下條信行 1996 「扁平片刃石斧について」『愛媛大学人文学会創立20周年記念論集』
- 潮見 浩 1960 「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『広島大学文学部紀要』18号
- 高橋 徹 1980 「大分県考古学の諸問題－刻目突帯文土器の出現とその背景について」『大分県地方史98』
大分県地方紙研究会
- 岡田憲一 2000 「西日本縄文後期後葉土器編年序論－向出遺跡出土土器の研究」『向出遺跡』
大阪府文化財調査研究センター pp335
- 後藤一重 1983 「縄文式土器」『楠野』 大分県教育委員会
- 後藤一重 1995 「東九州沿岸部における縄文晩期土器編年」『香々地の遺跡Ⅱ』
大分県香々地町教育委員会
- 坂本嘉弘 1993 「東九州における縄文時代晩期開始期の問題」『おおいた考古』第6集
- 出原恵三 1990 「縄文時代」『西分増井遺跡群』 高知県春野町教育委員会
- 出原恵三 1999 「南四国の石器」『古代吉備』第21集 古代吉備研究会
- 出原恵三 2002 「黒潮沿岸地域の交流と南四国」『田辺昭三先生古稀記念論文集』
- 出原恵三 2005 「弥生文化成立期の高知平野」『高知市史研究』第3号 高知市
- 出原恵三 2008 「弥生文化成立期の大陸系磨製石器－田村遺跡からの新視点－」『古文化談叢』第60集
九州古文化研究会
- 出原恵三 2010 「弥生文化成立期の二相－田村タイプと居徳タイプ」『弥生・古墳時代における太平洋ルート
の文物交流と地域間関係』 高知大学人文社会学系
- 橋口尚武 2001 『黒潮の考古学』 同成社

- 平井泰男 2009 「岡山県における縄文時代晩期前半の土器様相」『研究報告』29 岡山県立博物館
- 前田義人 1988 『貫川遺跡1』(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 松本安紀彦 2006 「高知平野の縄文時代晩期について」『高知市史研究』第4号
- 松本安紀彦 2008 「高知県における縄文時代晩期の土器編年－前半を中心に」『文化財学としての考古学』
泉拓良先生還暦記念論文集
- 水之江和同 1997 「北部九州の縄紋後・晩期土器－三万田式から刻目突帯文土器の直前まで－」
『縄文時代』8 縄文時代文化研究会
- 宮本一夫 1996 『萩ノ岡貝塚』愛媛大学法文学部考古学研究室編
- 宮内克己 1987 「磨製石器小考」『東アジアの考古と歴史』(中)岡崎敬先生退官記念論集
- 家根祥多 1981 「近畿地方の土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣
- 吉留秀敏 1993 「縄文時代後期から晩期の石器技術の変化とその評価－早良平野を中心として」
『古文化談叢』第30集(上) 九州古文化研究会
- (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1994 『柳田遺跡』
- 高知市教育委員会 2002 『鴨部遺跡』

写 真 图 版



第2 地点全景航空写真

PL.2



第2地点北部（南から）



第2地点北部（西から）



2-1区南壁層準



2-1区SK1 セクション

PL.4



2 - 1 区 SK1 鍛冶滓出土状況



同上床面の鉄錆



2 - 1区 SD2の集石



同上

PL.6



2-1区 SK2



同 SK4



同 SK5・8～10



同 SK17



同 SK16



同 SK15 セクション



同 SK32



同 SK43

2-1区の土坑・セクション



同 SK45



同 SK50



同 SD1 セクション



同左



同 SD2 セクション



同左



同 P23



同 P103

PL.8



SK1 鍛冶滓



SK2 出土の備前播鉢 (1)



SK6 の集石



SK50 出土の染付皿 (12)



SD2 出土の瓦質羽釜 (32)



SD2 出土の青磁碗 (32)



包含層出土の瀬戸おろし皿 (58)



包含層出土の硯 (91)



2 - 1 区調査作業風景



同上

PL.10



2 - 2区 SK2



2 - 2区 SK2の備前大甕（7）など出土状況



2 - 2区土師器杯出土状況



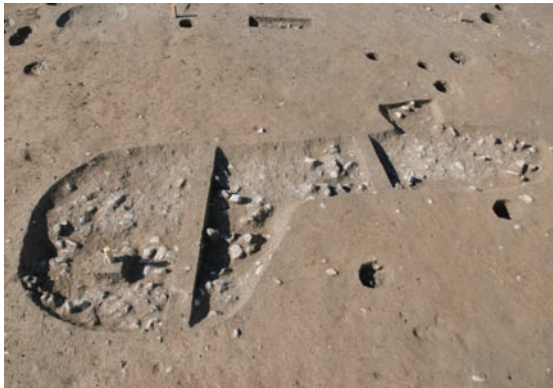
同上



SK1



SK7



SK13



SK32



SK35



SK36



SD1 セクション



SD3 セクション



SK1 出土の備前播鉢 (6)



SK1 出土の青磁碗 (1)



SK13 出土の青磁碗



SK35 出土の近世陶磁器



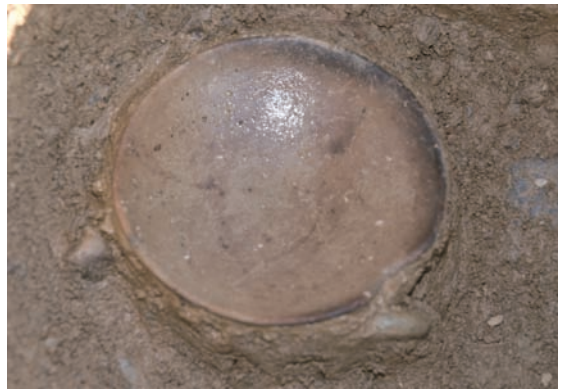
P63 出土の瓦質羽釜 (76)



P64 出土の備前 (70)



P20 出土の備前



P71 出土の瓦器碗 (67)

PL.14



2 - 3区調査前遠景 (写真中央堤防下)



2 - 3区調査前近景 (写真中央堤防下)



2 - 3区北壁土層 (A - A')



2 - 3区旧堤防中央土層 (B - B')

PL.16



2-3区南壁土層 (C-C')



2-3区Ⅵ層上面検出遺構完掘状況 (調査区北より)



2-3区Ⅶ層上面検出遺構完掘状況全景（調査区北より）



2-3区Ⅶ層上面検出遺構完掘状況近景（北より）

PL.18



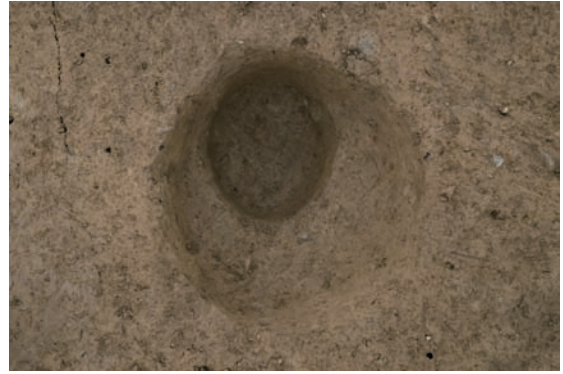
2-3区Ⅵ層上面検出P1完掘



2-3区Ⅵ層上面検出P2完掘



2-3区Ⅶ層上面検出遺構出土状況(北より)



2-3区Ⅶ層上面検出P5完掘



2-3区Ⅶ層上面検出SK8磔出土状況



2-3区Ⅶ層遺物出土状況



2-3区作業風景1



2-3区作業風景2



第3地点南側上空遠景



同地点拡張区遠景（仁淀川の対岸より）



第3地点拡張区完掘状況（直上空より）



同上（北側上空より）



第3地点拡張区完掘状況（北側上空より）



同上（南側上空より）



3-1-2区の完掘状況とベルト1（南西より）



3-1-2・3区完掘状況とベルト3（東より）



3-1-2・3区完掘状況とベルト3（北より）



3-1-2・3区完掘状況とベルト3（西より）



3-1-3区テラス2遺物出土状況（北より）



3-1-3区トレンチ完掘状況とベルト2（南東より）



3-1-1～3区とベルト1～3（南東より）



3-1-4区とベルト3（南東より）



3-1-4区完掘状況（南より）



3-1-4区完掘状況（東より）



3-1-4区テラス2 遺物出土状況



同上遺物出土状況（西より）



3-1-4区テラス2遺物出土状況（西より）



同上（北より）



3-1-4区テラス2遺物出土状況（北西より）



同上



3-1-4区テラス3 遺物出土状況（西より）



3-1-5区ベルト4（南東より）



3-1-5区完掘状況とベルト4（西南より）



3-1-5区ベルト4（南より）



3-1-5区SX1・2 (南より)



3-1-6区完掘状況とベルト5 (南西より)



3-1-6区完掘状況とベルト5（南東より）



3-1-6区完掘状況（西より）



3-1-6区完掘状況（東より）



3-1-7区完掘状況とベルト6（東南より）



3-2区完掘状況と南壁セクション（北より）



3-1-4～6区の作業風景（北東より）



第3地点拡張区完掘状況（東より）



同上（北より）



3-1-3区テラス1 遺物出土状況



同左



3-1-4区テラス2 深鉢出土状況



同左



3-1-4区テラス2 遺物出土状況



同左



3-1-4区テラス3のSX1 セクション



3-1-4区深鉢出土状況



3-1-4区テラス3 SX1 遺物出土状況



ベルト6 深鉢出土状況



3-1-5区 SX1 遺物出土状況



3-1-7区 須恵器大甕出土状況



3-1-7区 須恵器など出土状況



3-1-3区 磨製石斧出土状況



3-1-3区 磨製石斧出土状況



3-1-3区 打製石斧出土状況



3-1-4区テラス2 磨製石斧出土状況



3-1-4区 磨製石斧出土状況



3-1-4区 打製石斧出土状況



3-1-4区 磨製石斧出土状況



3-1-4区 磨製石斧出土状況



3-1-4区 石鏃出土状況



作業風景 3-1-5・6区 (東より)



同左 3-1-4・5区 (東南より)



第6地点交通壕調査前（北より）



同上（南より）



第6地点交通壕と小銃掩体③・⑥付近調査前（南より）



同上完掘状況（南より）



第6地点交通壕壁の立ち上がり



同小銃掩体④付近



第6地点小銃掩体④の横穴入り口



同作業風景（北より）



第6地点交通壕と小銃掩体完掘状況（北より）



同上（直上近景）



第6地点交通壕と小銃掩体完掘状況（直上遠景）



同上（東上空より）



トレンチ1-1完掘（東より）



トレンチ1-2完掘（西より）



トレンチ1-2北壁セクション



トレンチ3掘削前



トレンチ3完掘（西より）



同左（東より）



トレンチ3西壁セクション



同左東壁セクション



トレンチ4完掘（東より）



交通壕掘削前（南より）



交通壕と小銃掩体②付近（南より）



交通壕と小銃掩体③調査前（北より）



交通壕（北より）



同左



交通壕（南より）



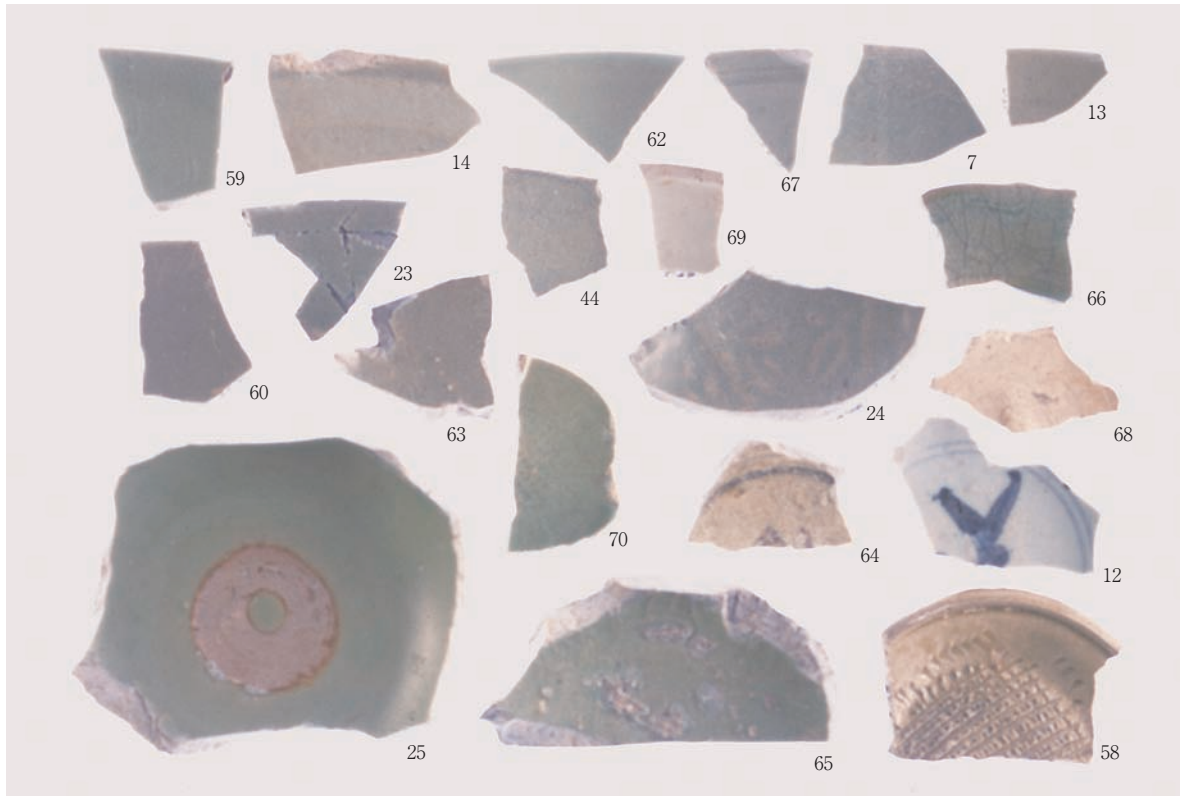
交通壕作業風景（南より）



2 - 1 区出土の備前焼



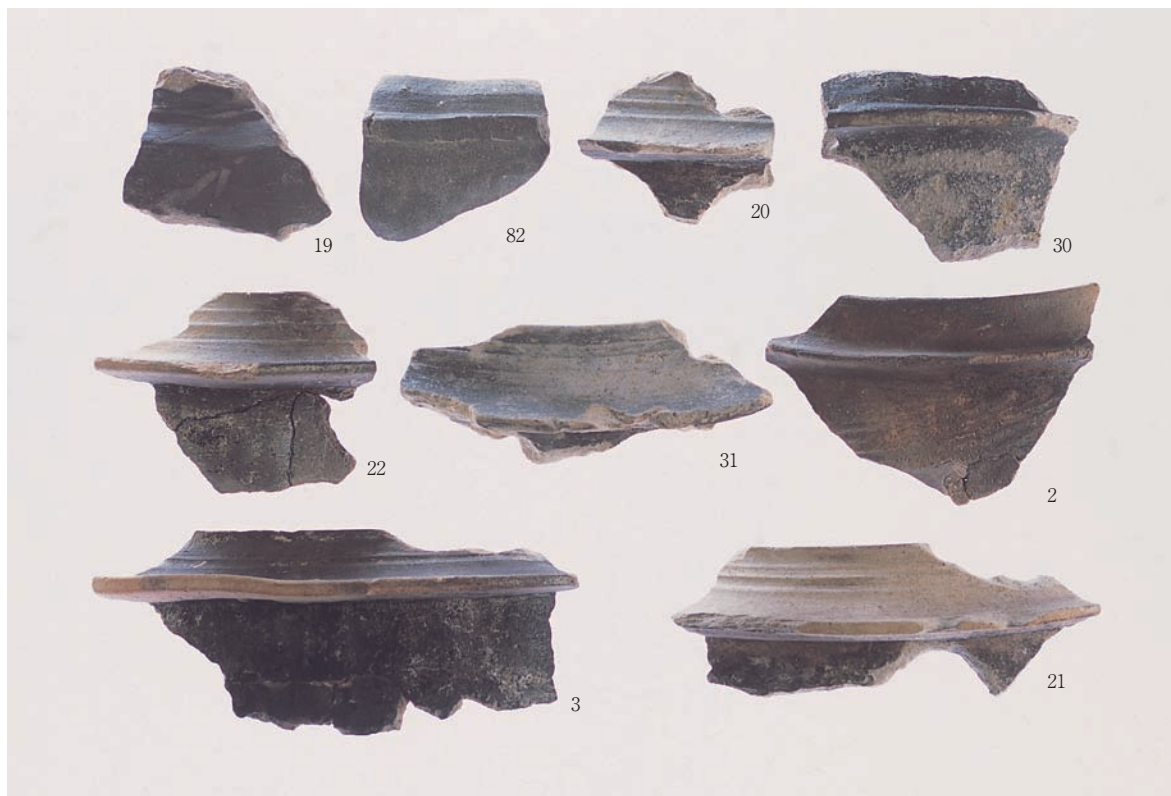
同左内面



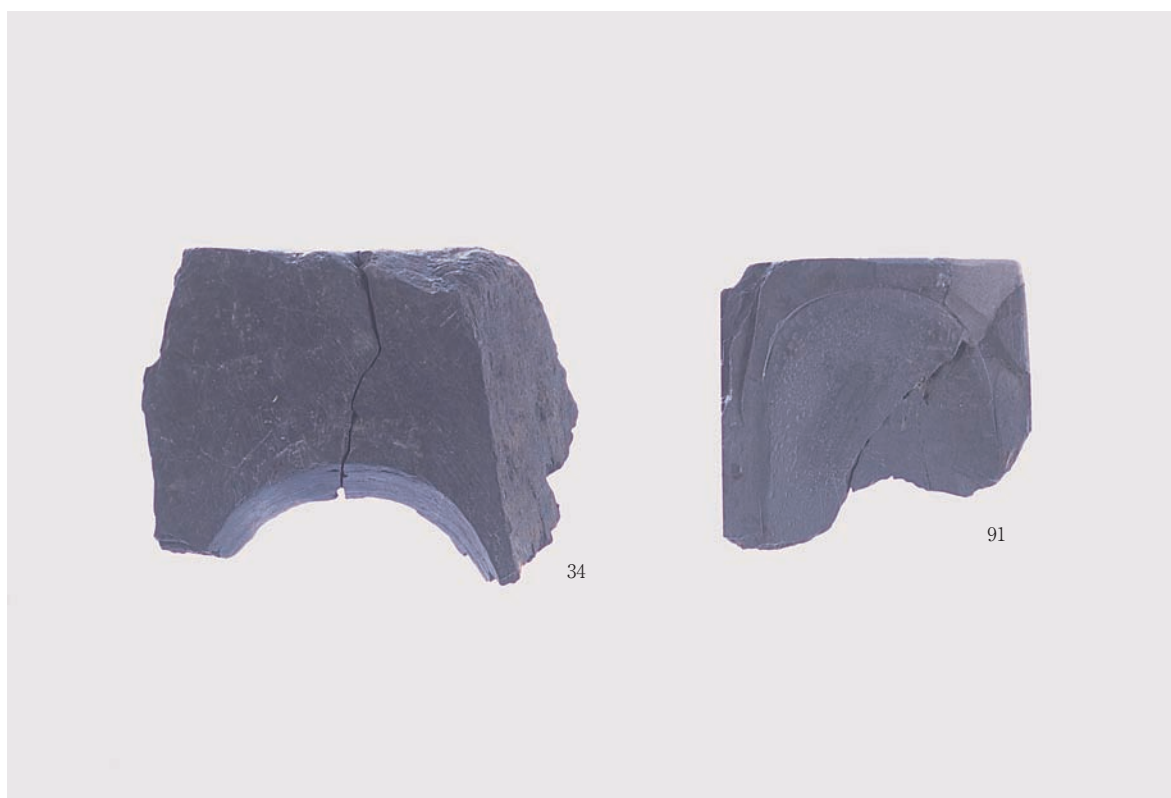
2 - 1 区出土の貿易陶磁器・瀬戸 (58)



同上内面



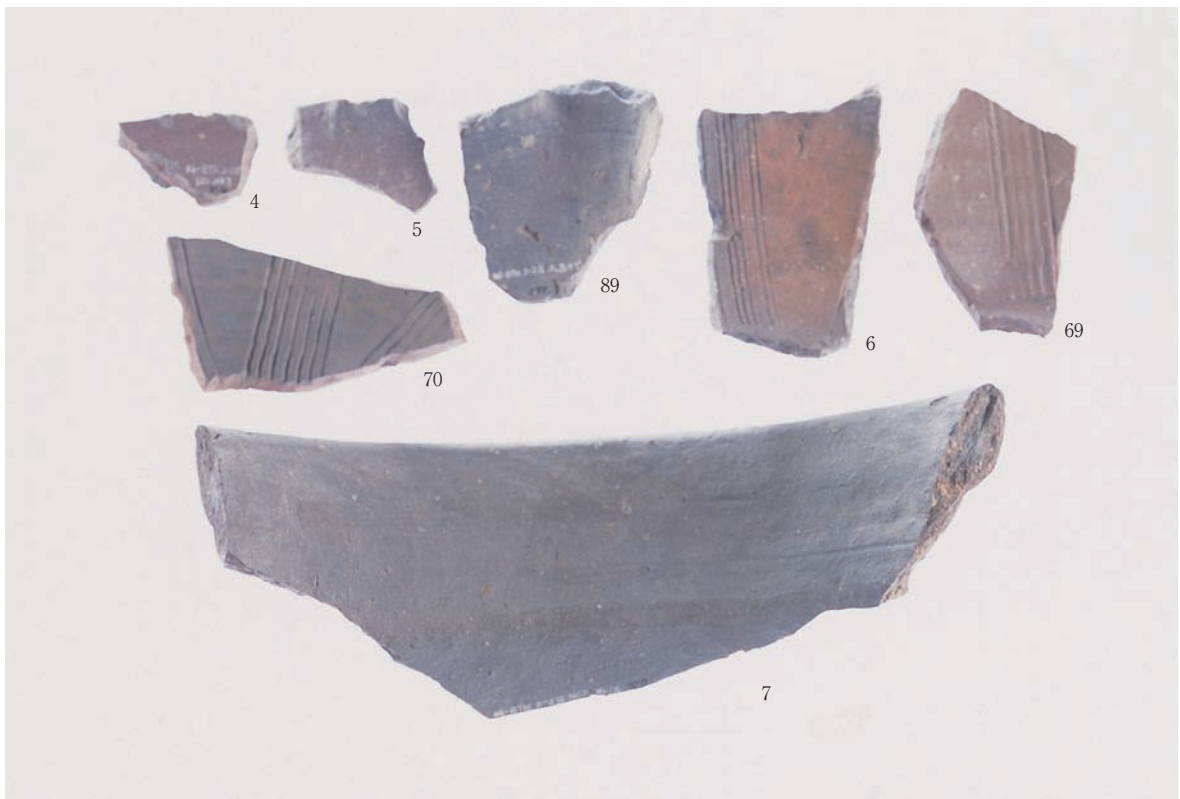
2-1区出土の瓦質羽釜



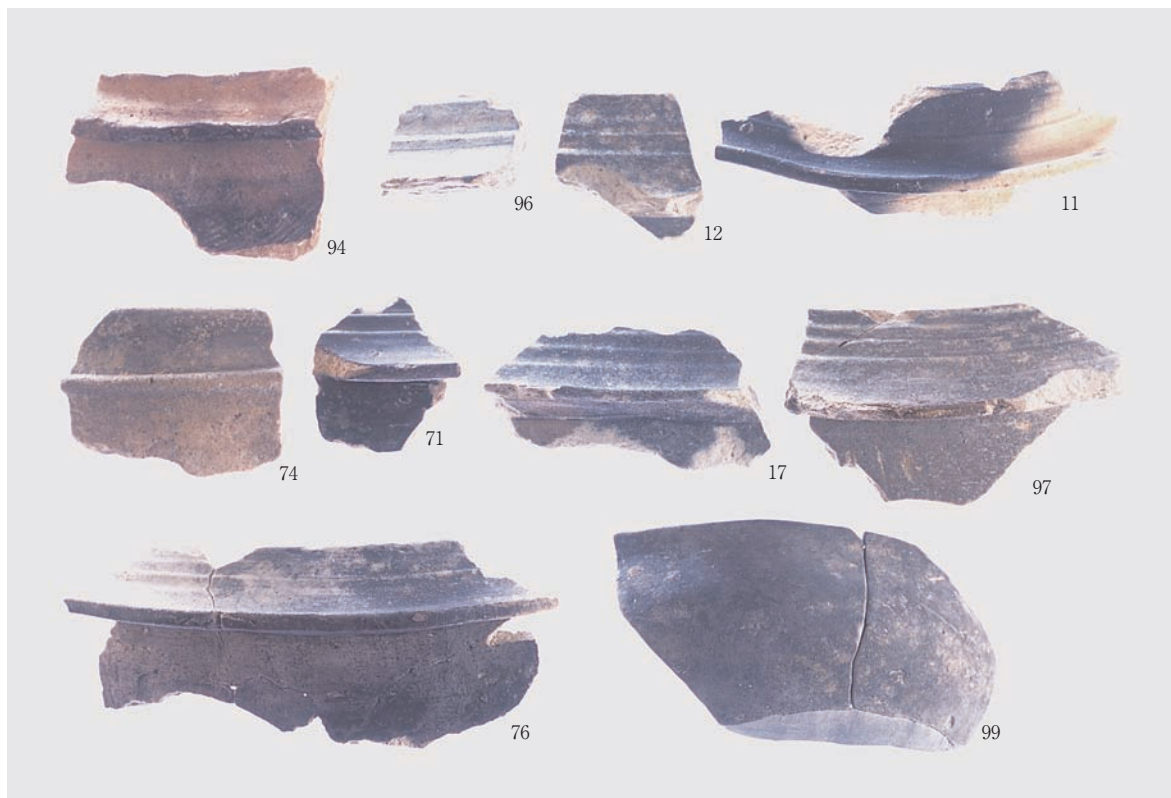
2-1区出土の硯



2 - 2区出土の備前焼



同上内面



2 - 2 区出土の東播磨系羽釜・瓦質羽釜・瓦質鍋



2 - 2 区出土の風炉



2 - 2 区 SK17 (31)



2 - 2 区 SK17 (32)



2 - 2 区 SK17 (33)



2 - 2 区 SK17 (34)



2 - 2 区 SK17 (39)



2 - 2 区 SK24・26 (46)



2 - 2 区 SK26 (48)



2 - 2 区 P71 (67)



2 - 3 区貿易陶磁器・瓦質鍋他



同左内面



2 - 3 区貿易陶磁器



同左内面内面



2 - 3 区貿易陶磁器・瓦質羽釜・土錘



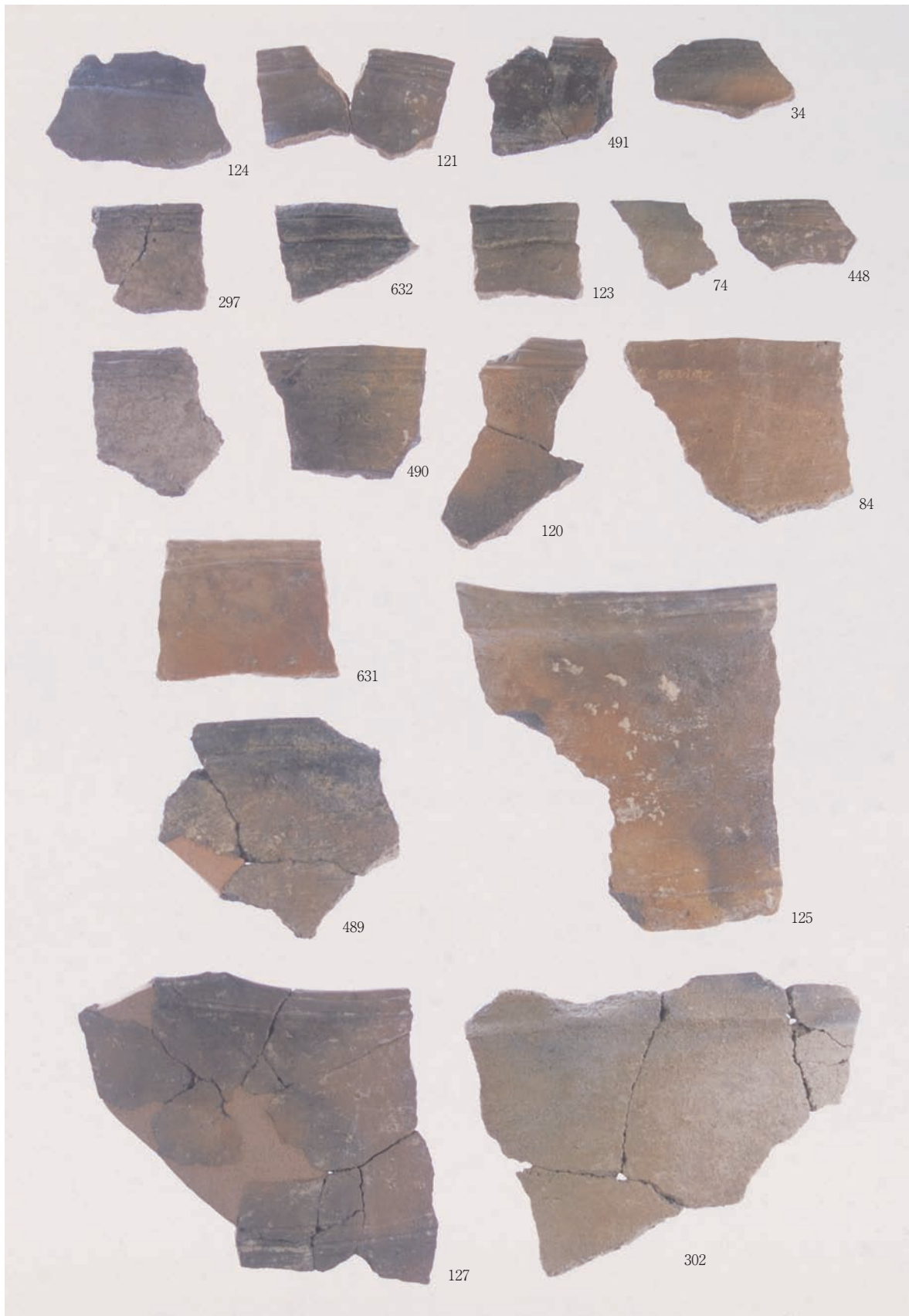
2 - 3 区土師器杯他



2 - 3 区東播磨系羽釜・瓦質羽釜



2 - 3 区貿易陶磁器・近世磁器・土錘・他



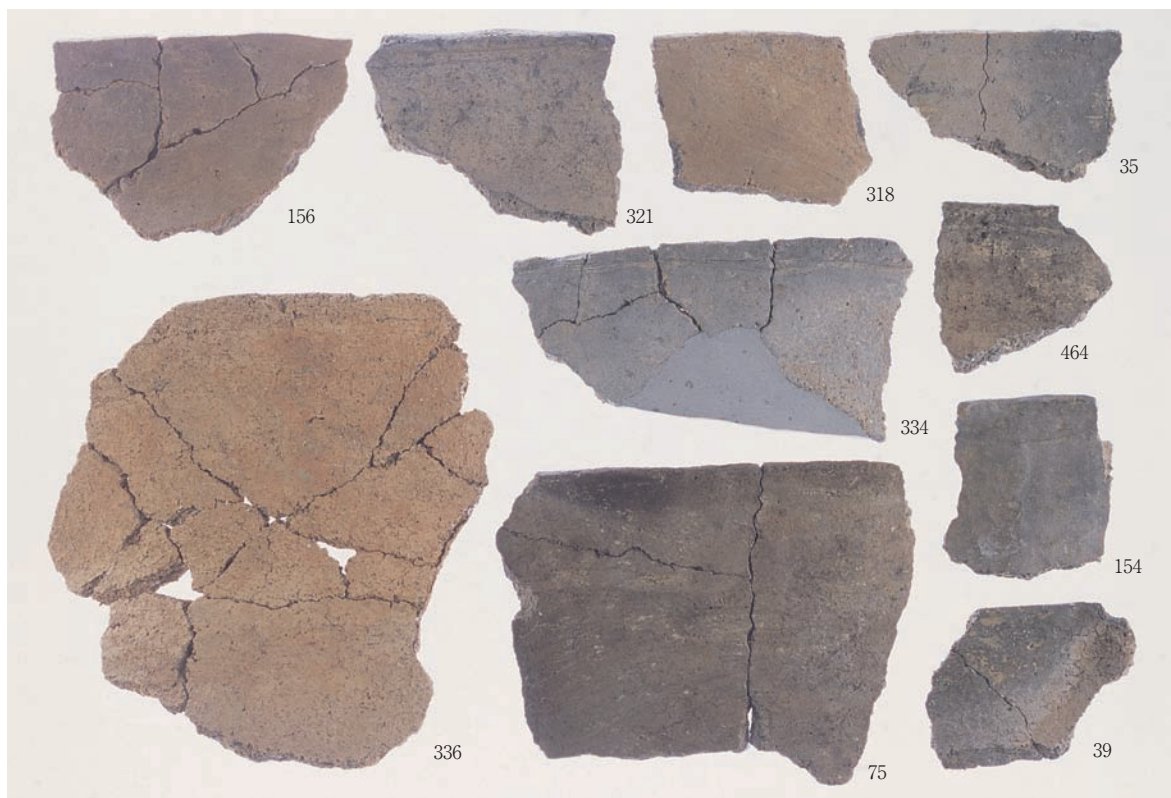
第3地点拡張区出土の深鉢Ⅲ類



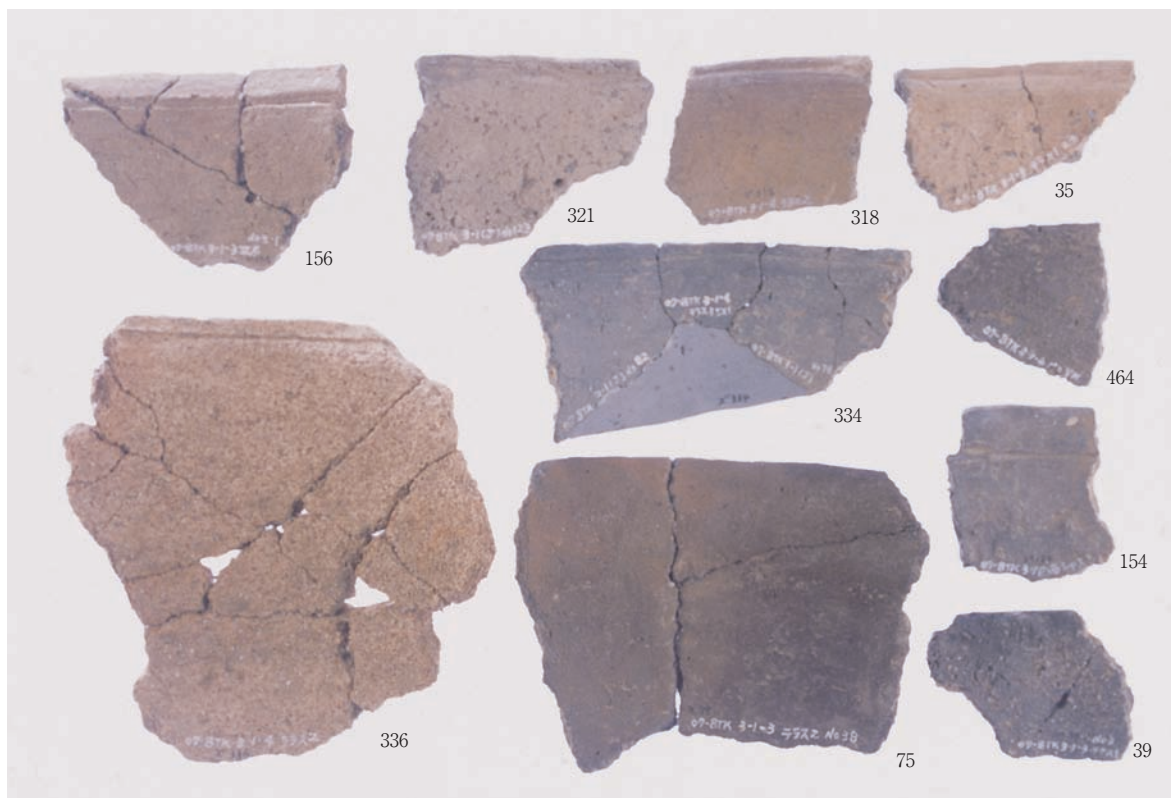
同 深鉢Ⅳ類



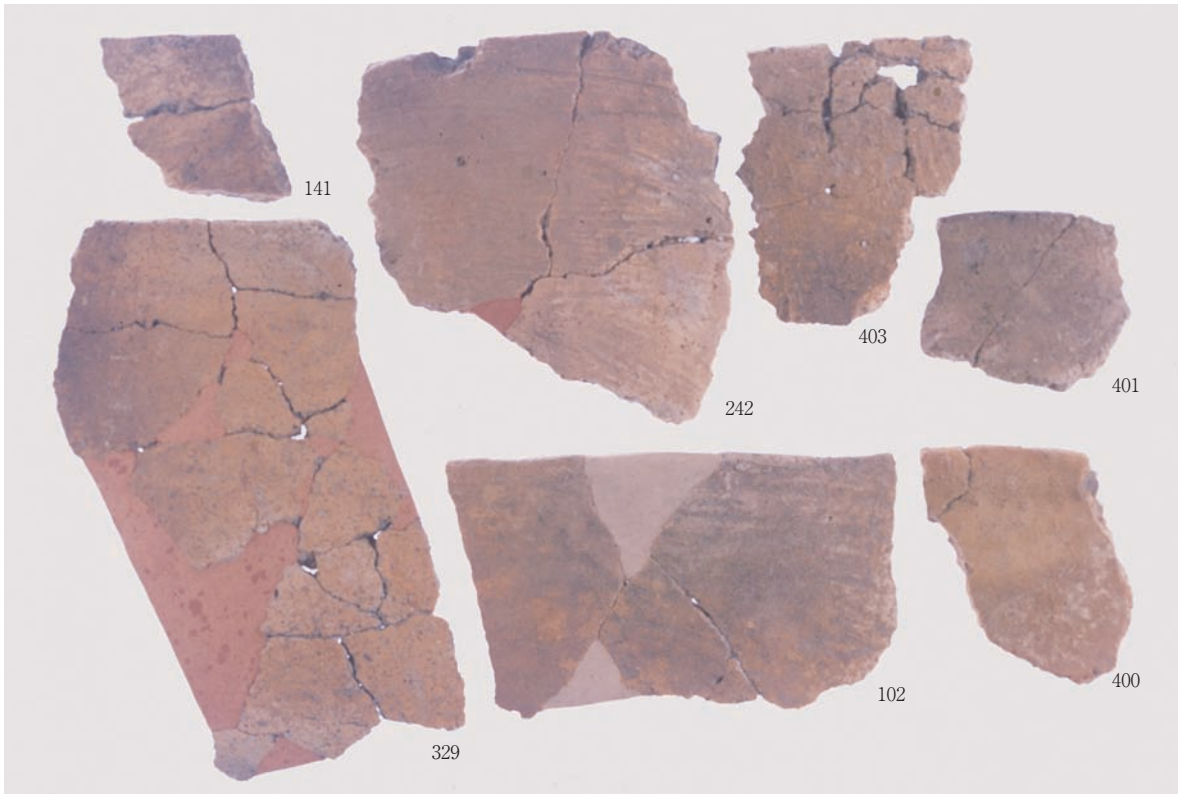
同 IV類 (内面)



同 深鉢V類



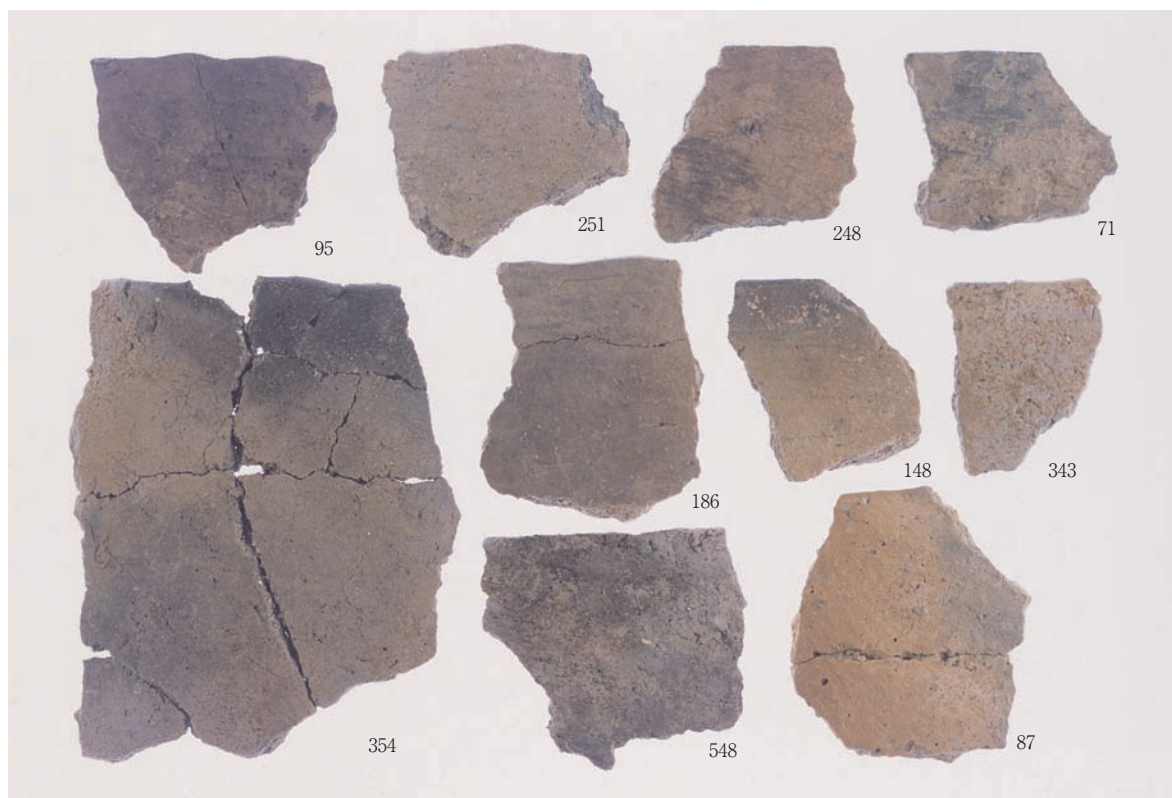
同上 (内面)



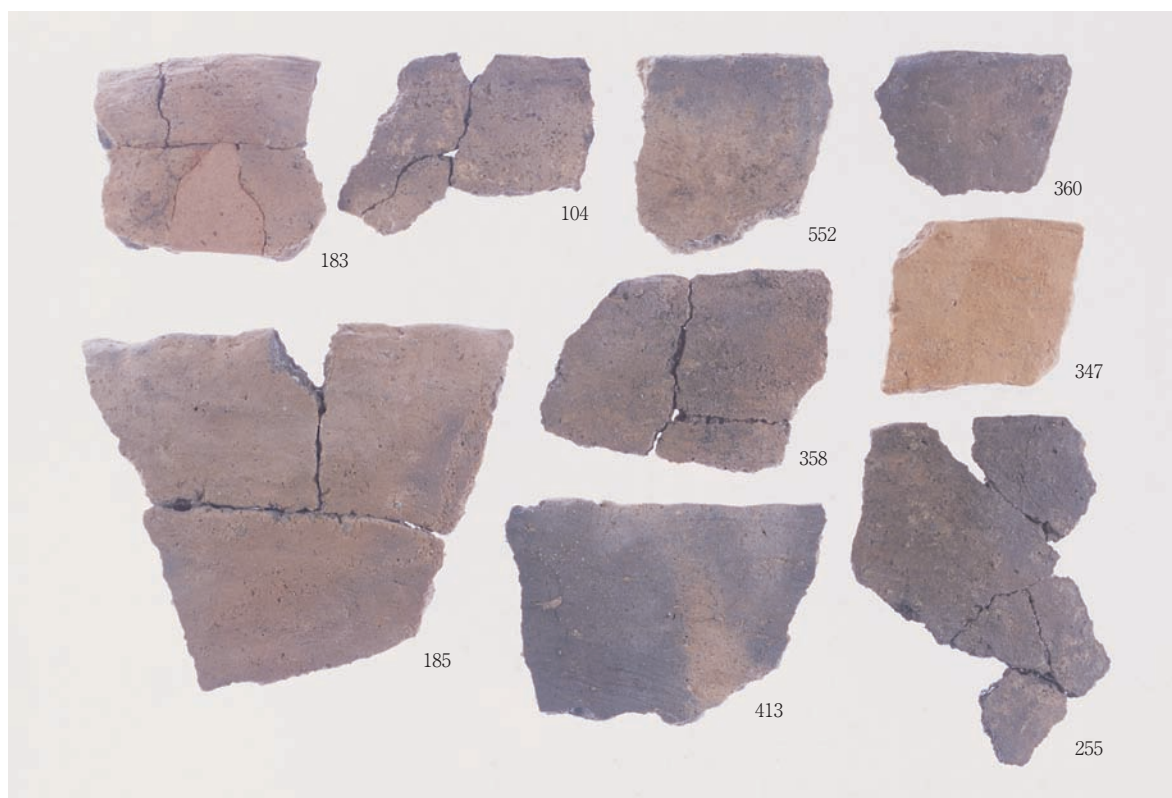
同 深鉢Ⅵ類



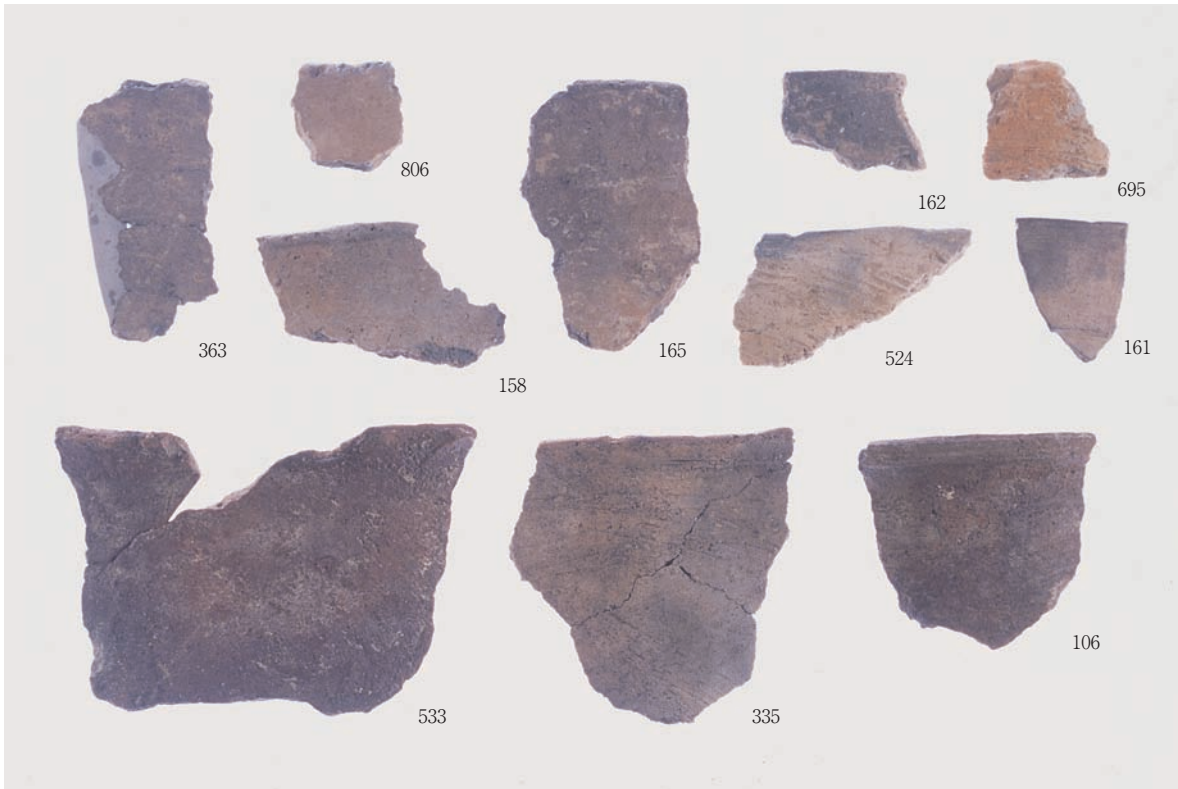
同 深鉢Ⅶ類



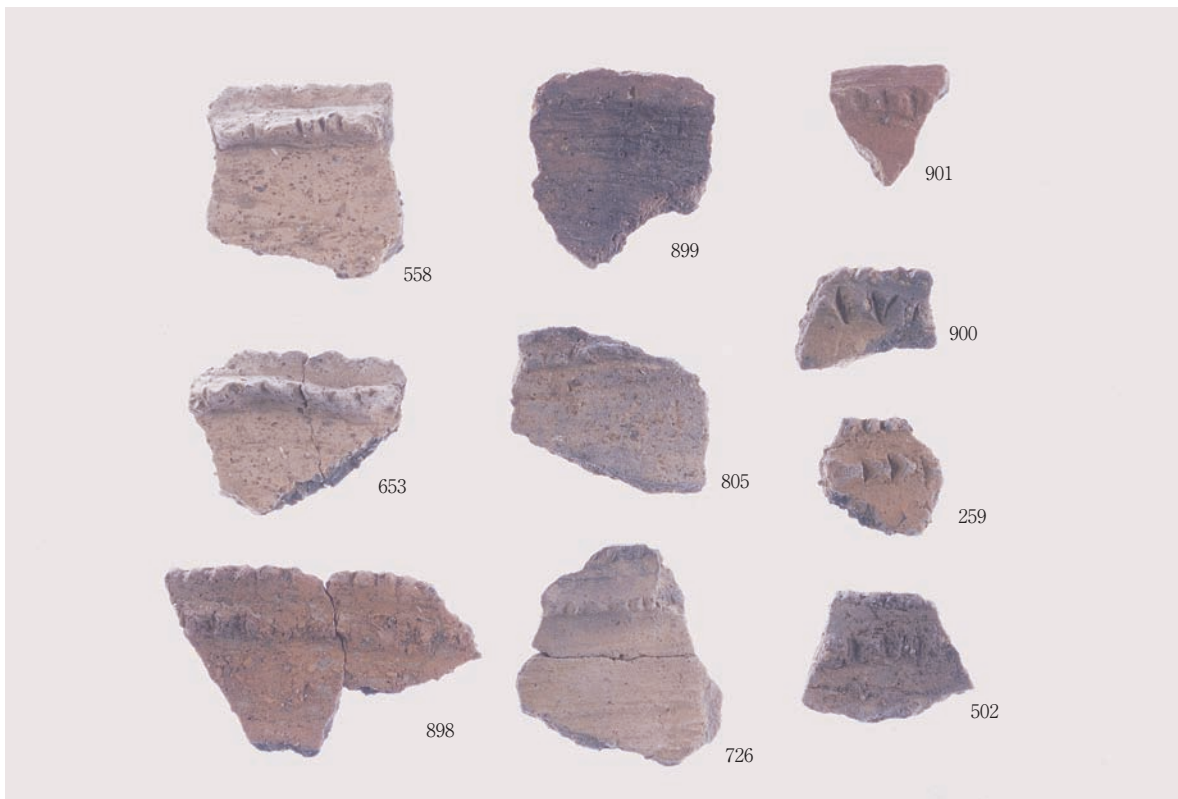
同 深鉢Ⅷ類



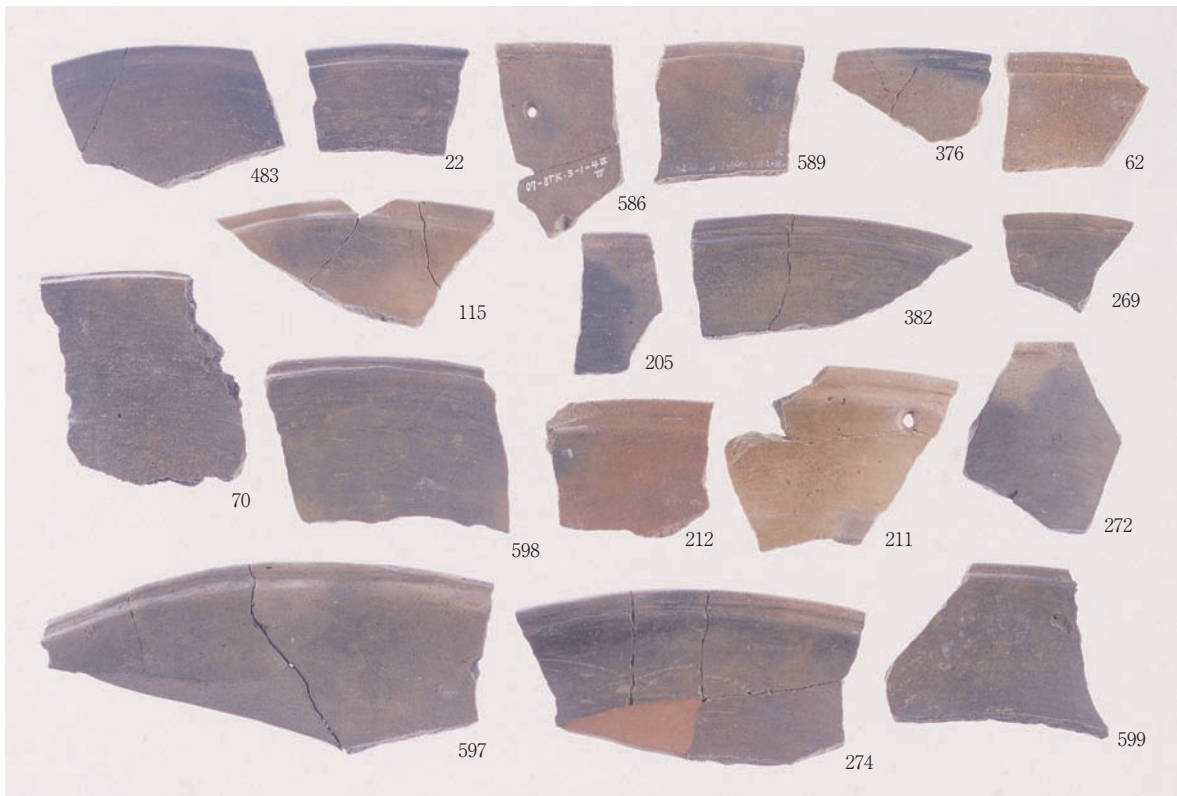
同 深鉢Ⅸ類



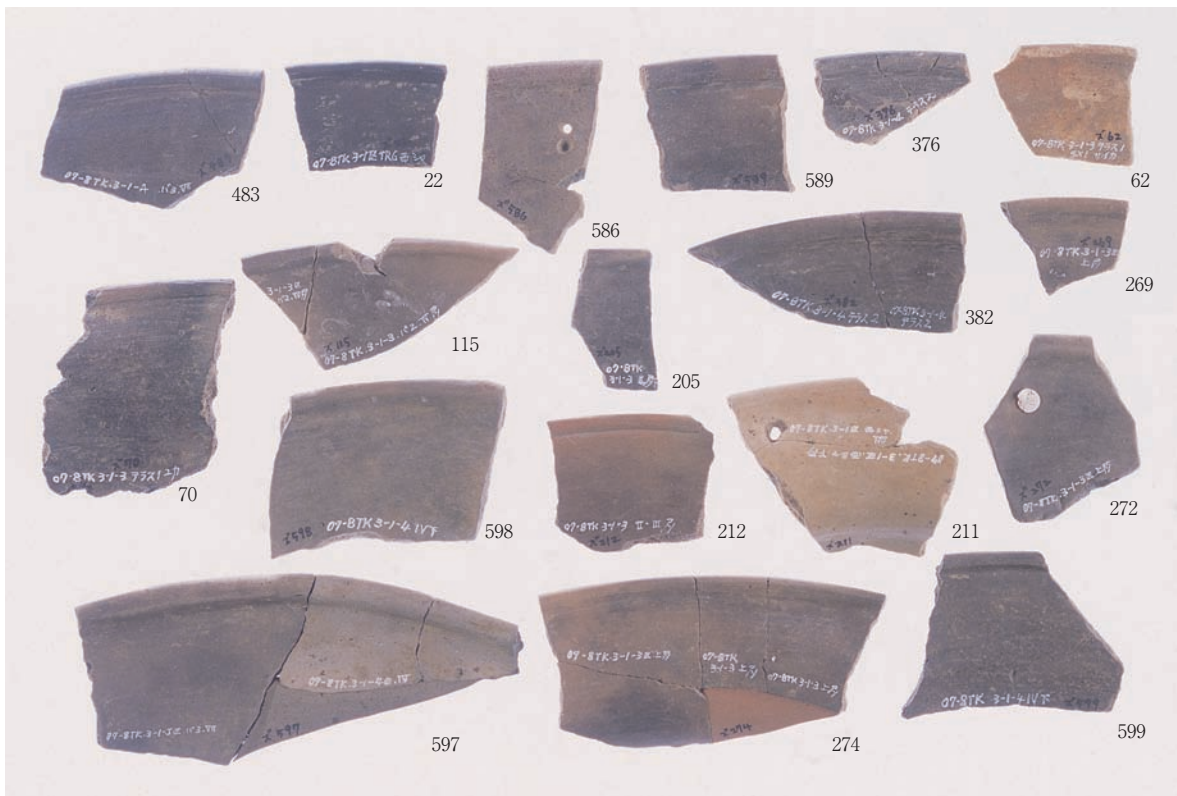
同 深鉢Ⅸ～Ⅺ類



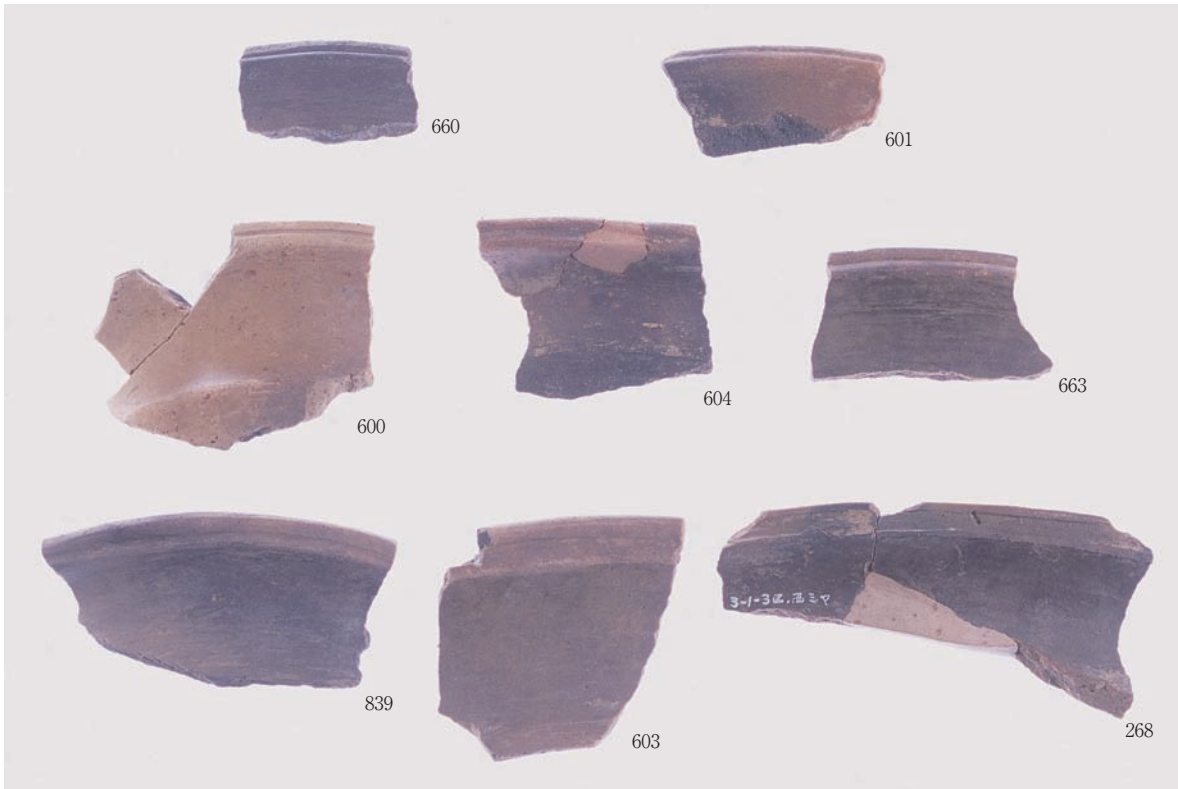
同 深鉢Ⅻ類



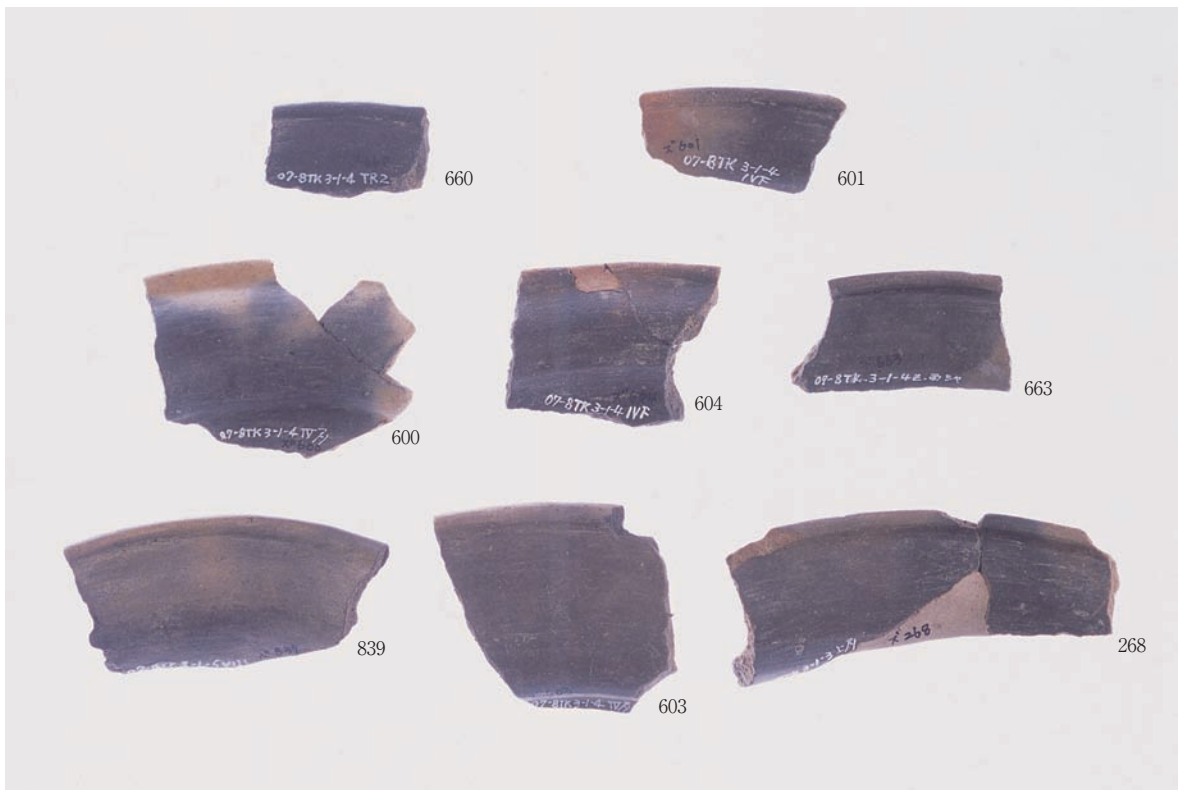
同 浅鉢 A 類



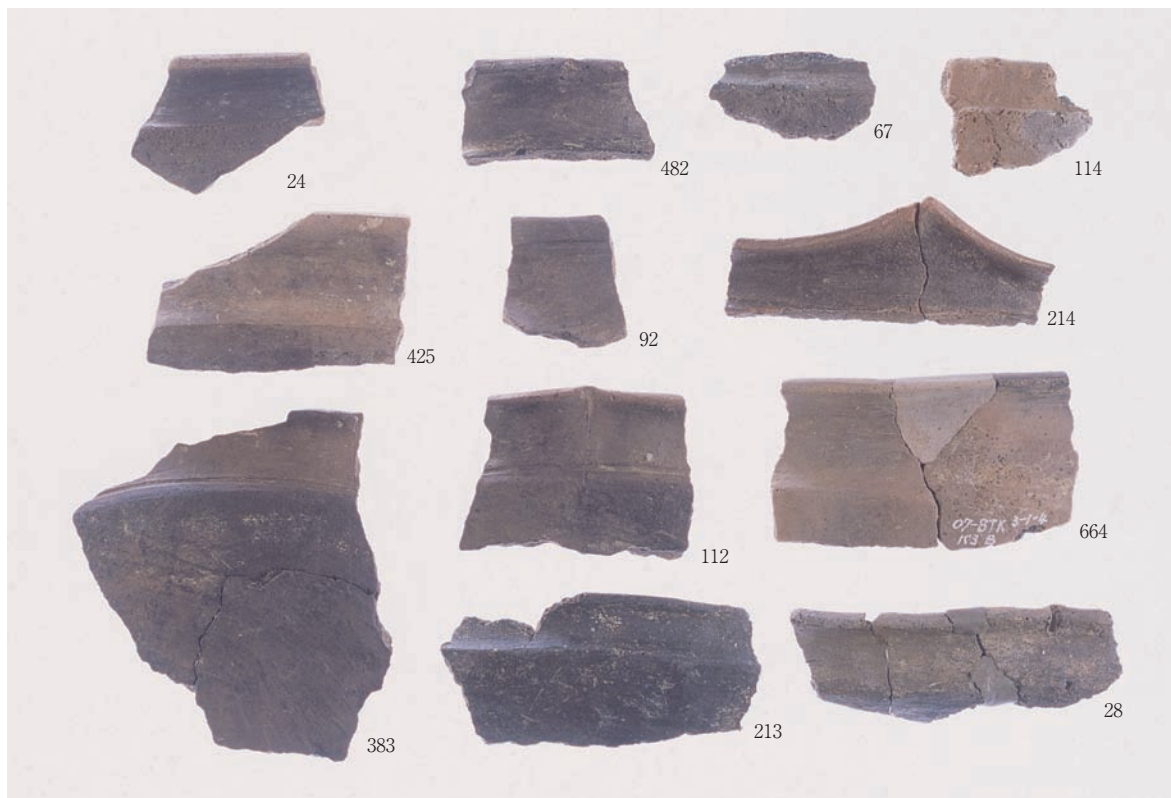
同上内面



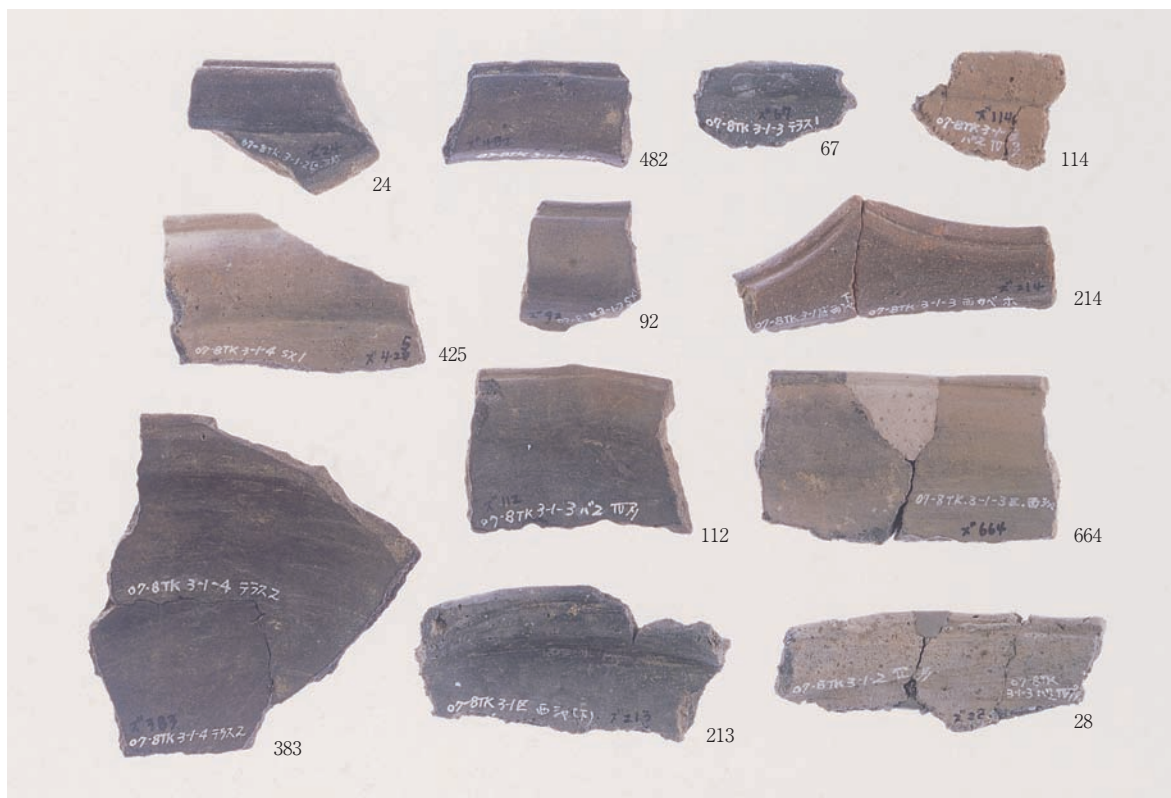
同 浅鉢B類



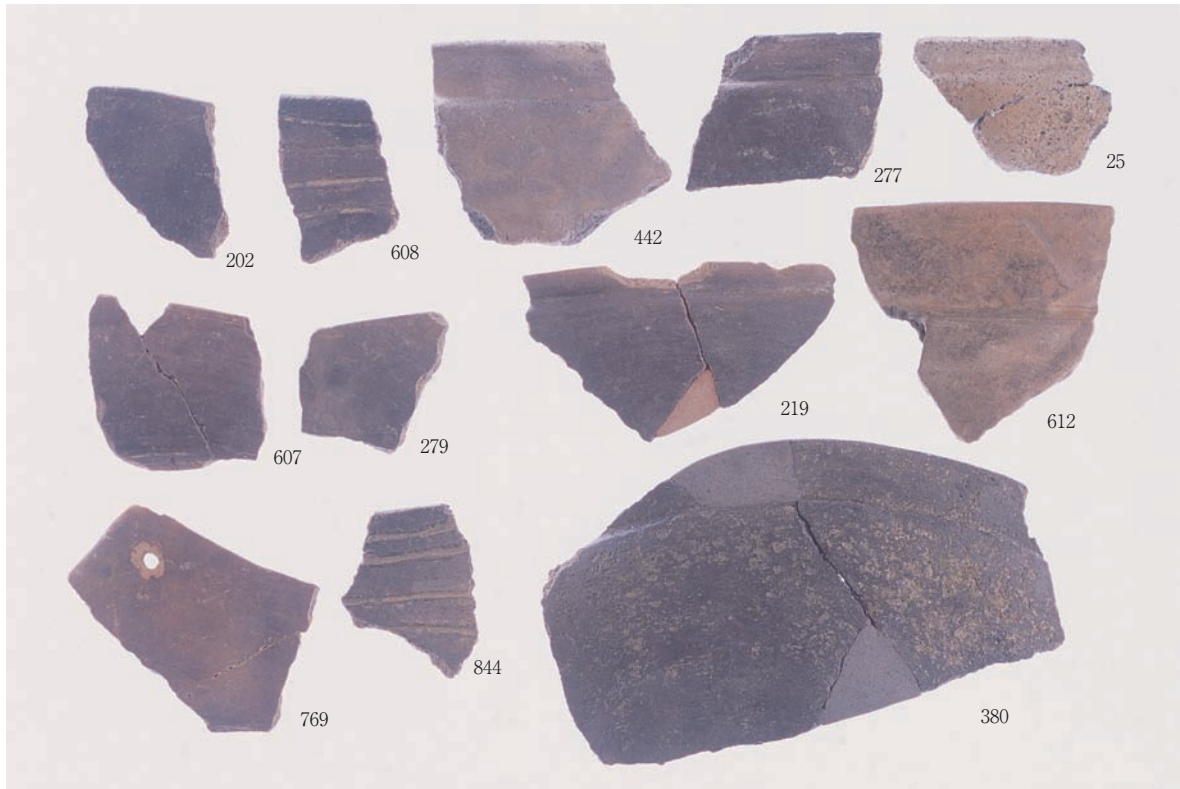
同上内面



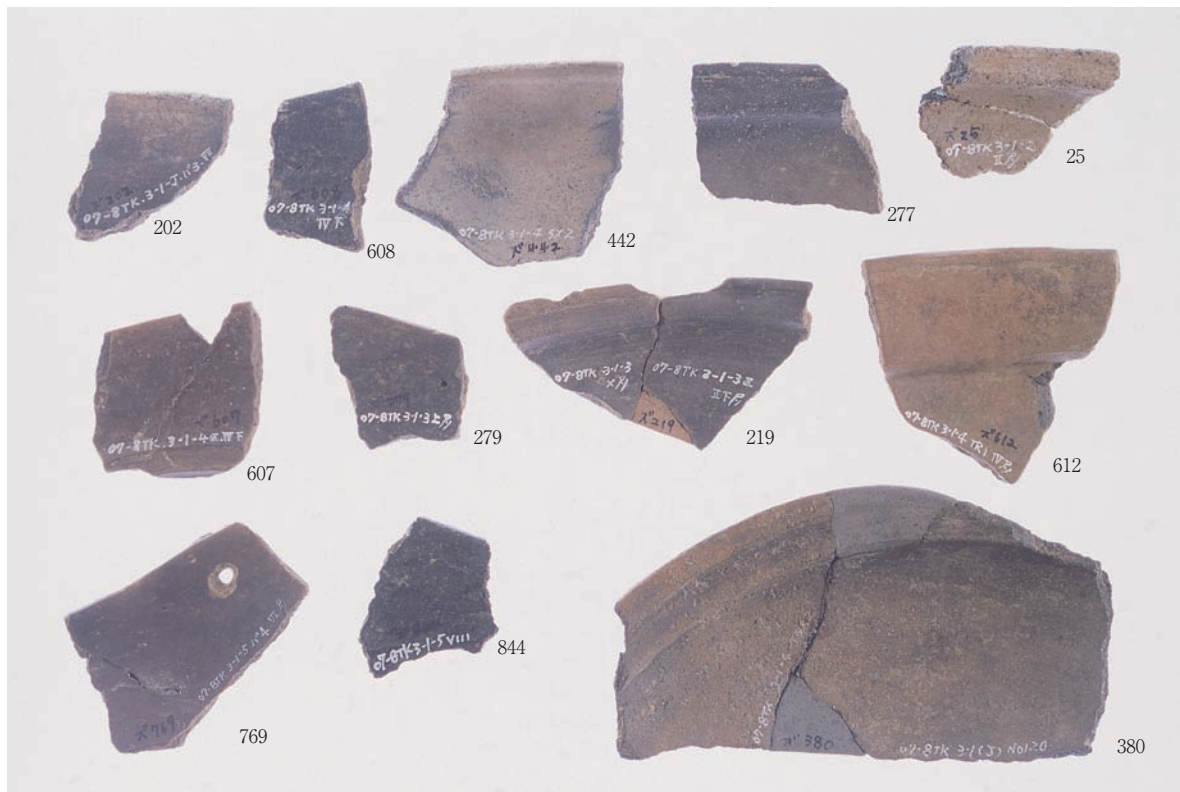
同 浅鉢C類



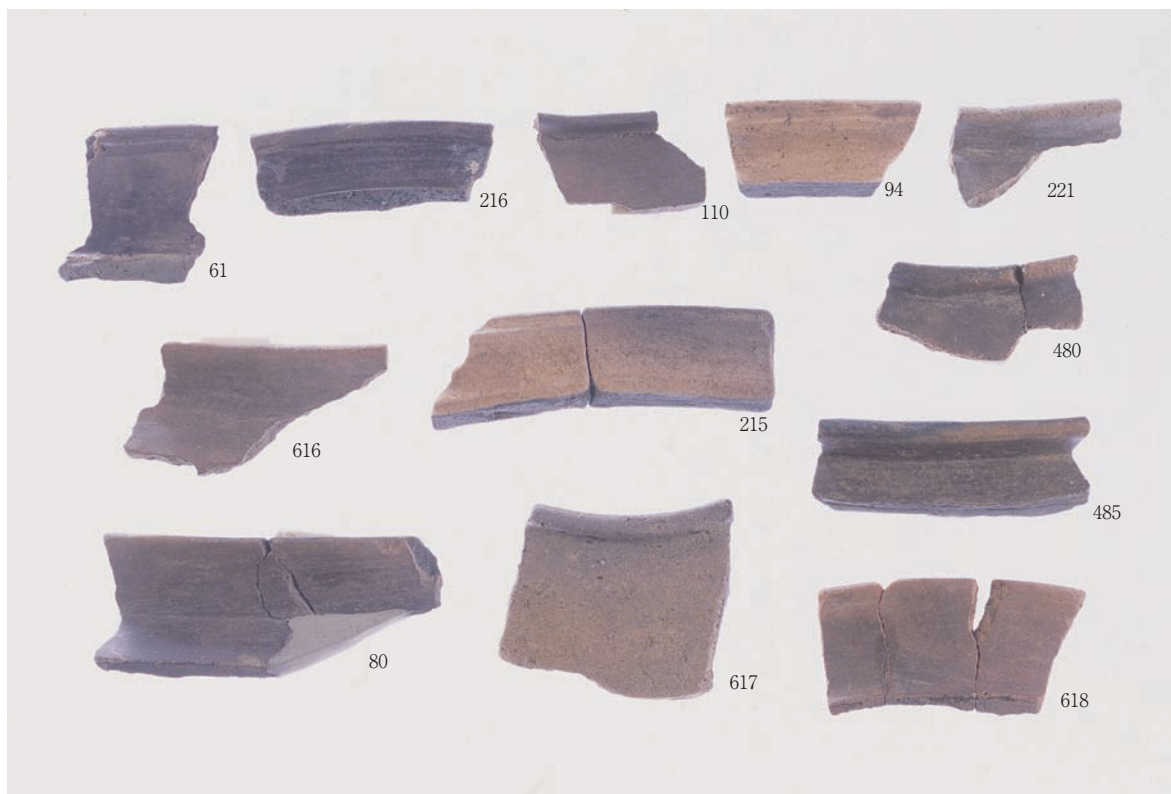
同上内面



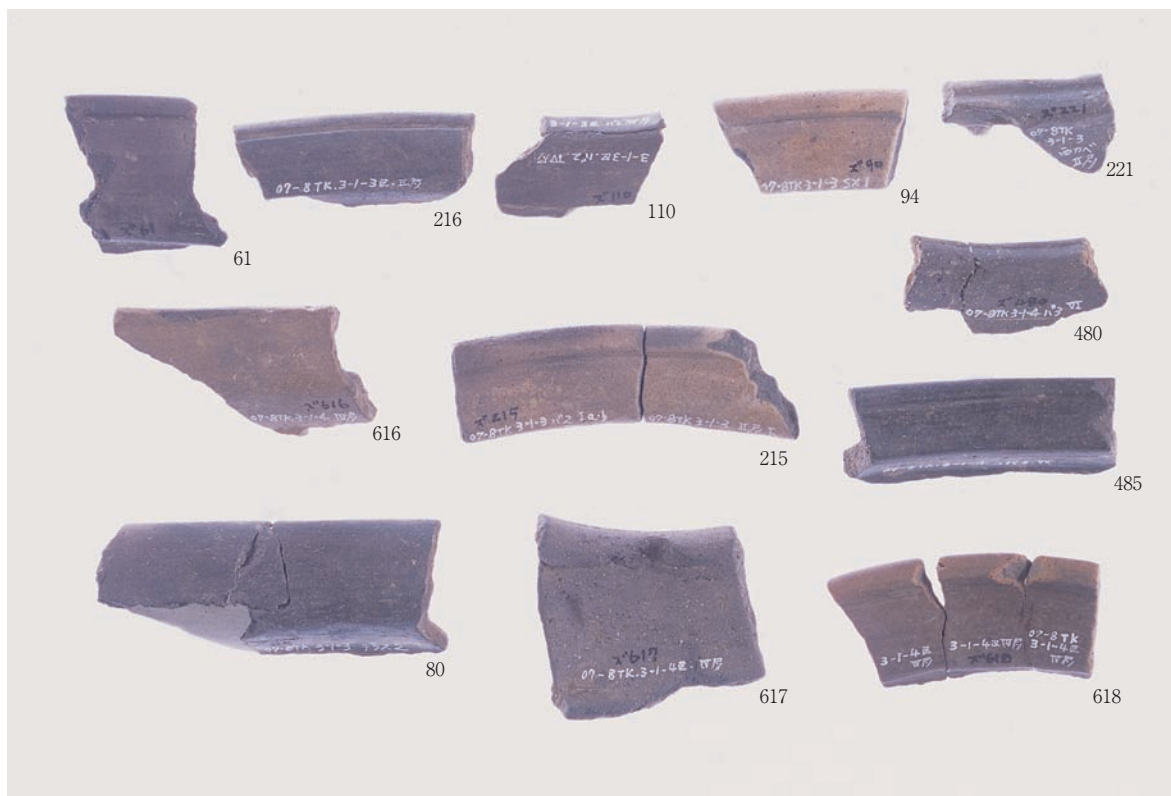
同 浅鉢D・E類



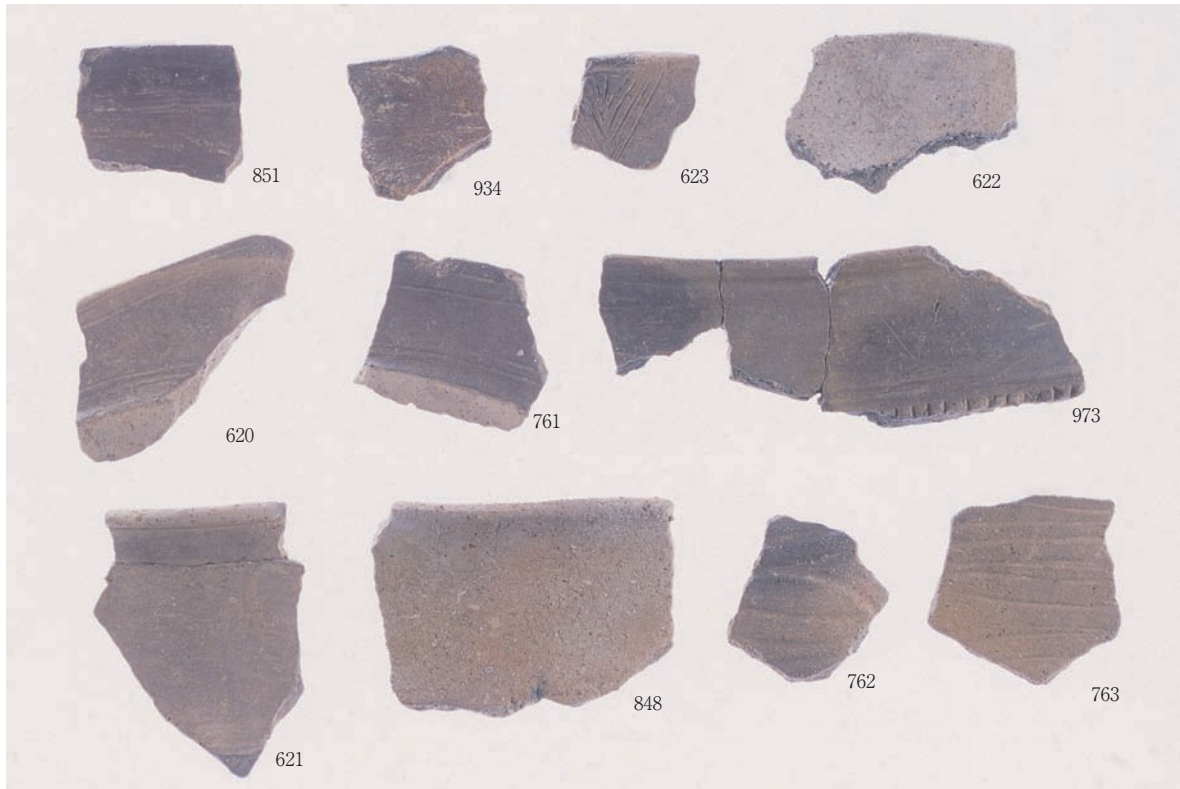
同上内面



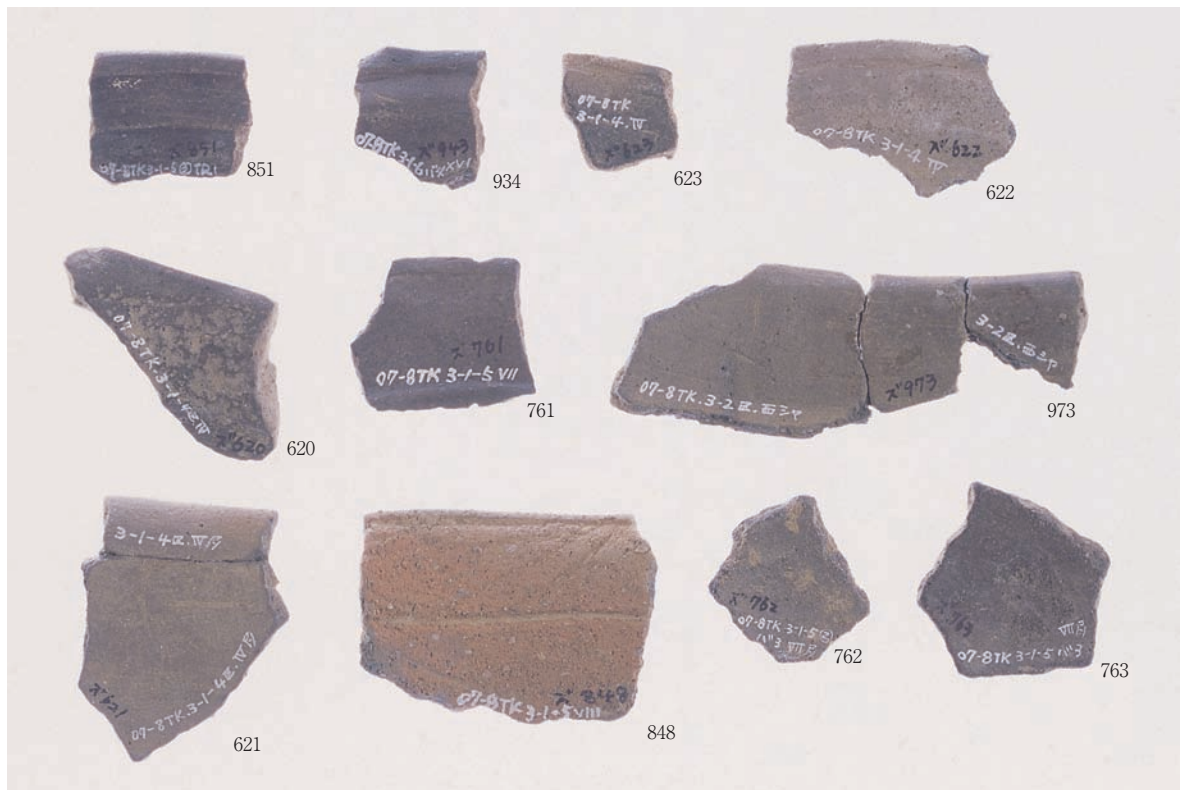
同 浅鉢 F・D 類



同上内面



同 浅鉢H・I・J・K・M類



同上内面



同 深鉢Ⅳ類



同 深鉢Ⅳ類



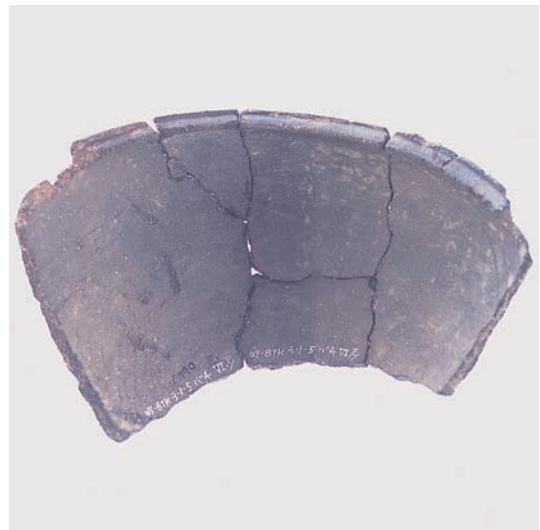
同 深鉢Ⅵ類



同 深鉢Ⅸ類



同 浅鉢E類



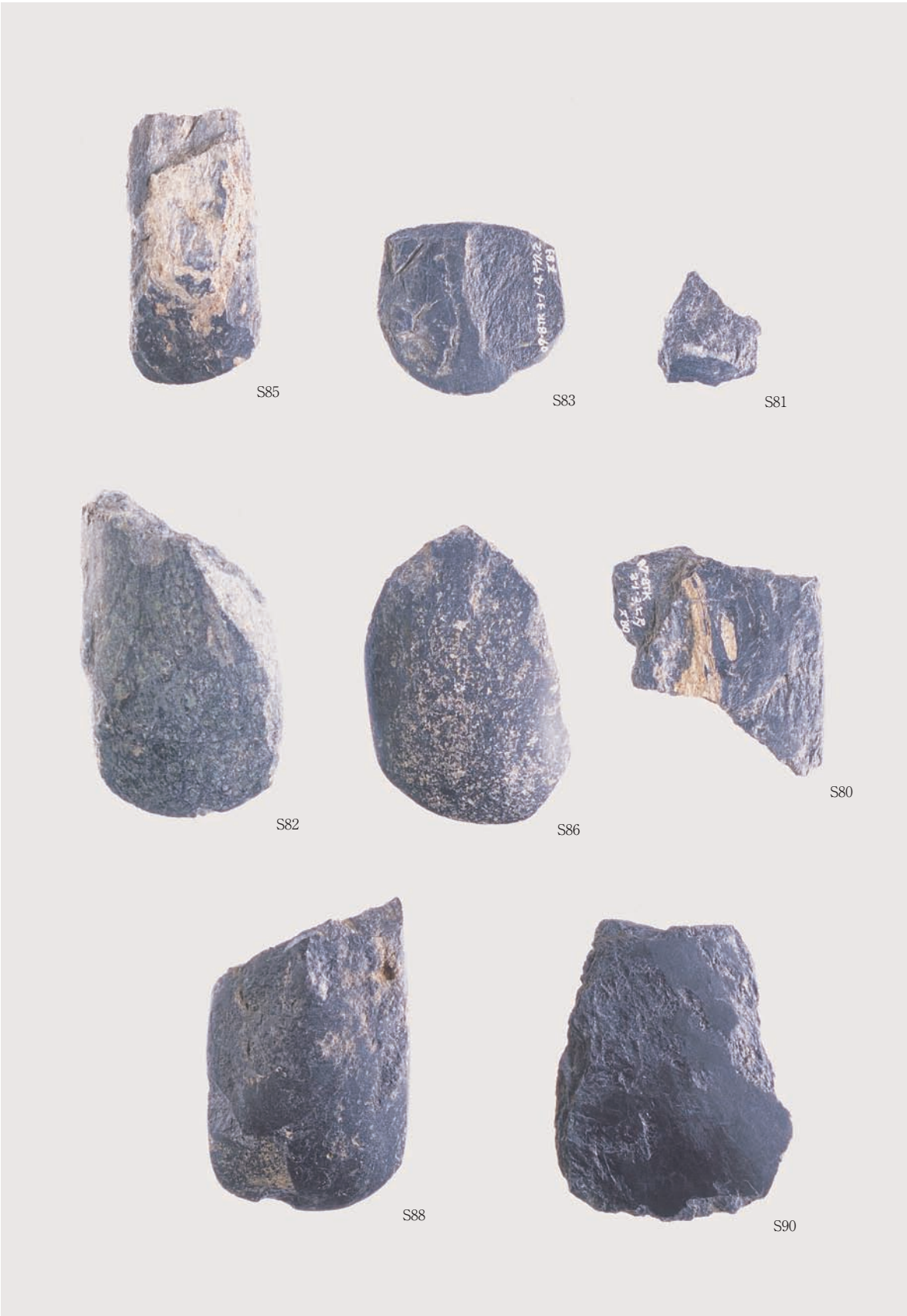
同左内面



同 石鏃①



同 石鏃②・石錐 (S74)



同 伐採斧（縄文）



同 伐採斧 (弥生)



同 加工斧



同上裏面



同 打製石斧①



同 打製石斧②



同 石庖丁



同裏面



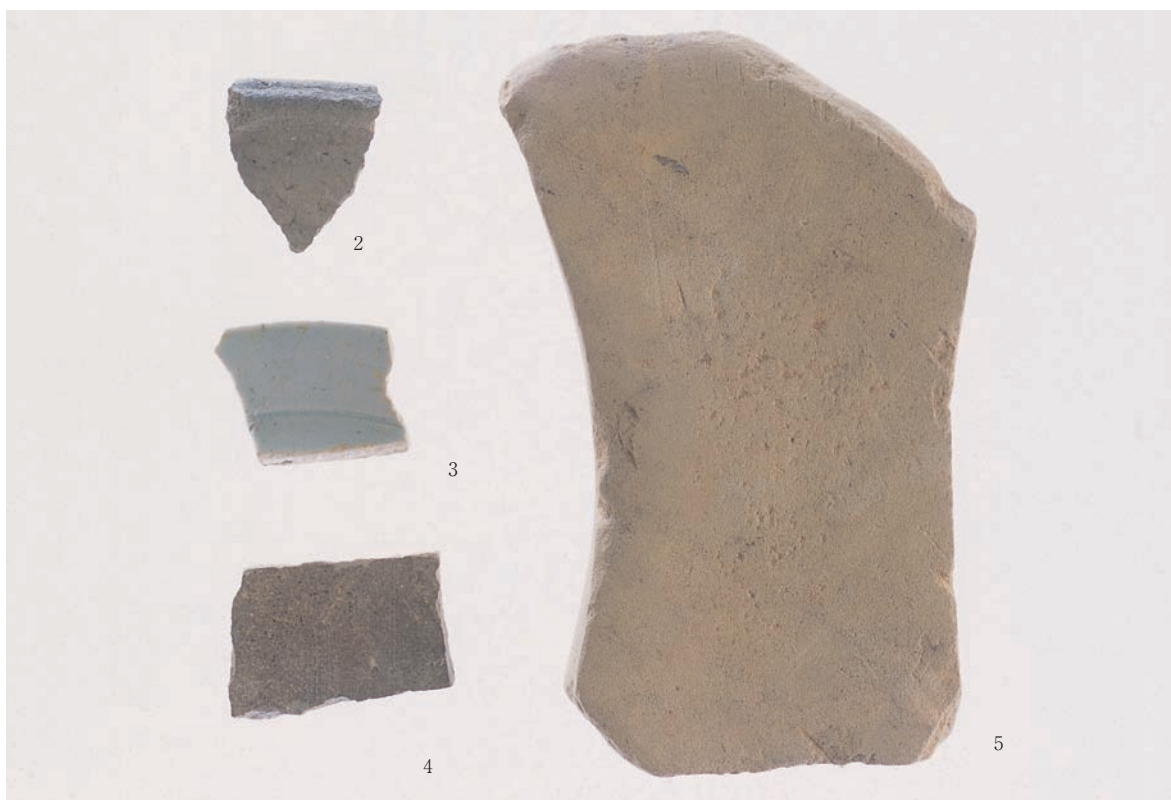
同 石棒・叩石・石錘



同上裏面



玉類（勾玉：162 管玉：161 小玉：158～160・157）



第6地点出土の遺物



- | | | |
|-------------------------|------------------------|-------------------------|
| 1. サメ類歯牙(No.1) | 2. タイ類臼歯状歯牙(No. 1) | 3. 魚類腹椎(No. 1) |
| 4. 魚類鱗棘(No.1) | 5. 鳥類指骨(No. 1) | 6. 鳥類四肢骨(No. 1) |
| 7. 獣類肋骨(No.1) | 8. 獣類歯牙(No. 1) | 9. 獣類四肢骨(No. 1) |
| 10. サメ類歯牙(No.2) | 11. ニシン類耳石(No. 2) | 12. タイ類臼歯状歯牙(No. 2) |
| 13. タイ類犬歯状歯牙(No. 2) | 14. コイ科臀鱗棘(No. 2) | 15. 魚類鱗棘(No. 2) |
| 16. 魚類椎骨(No. 2) | 17. 魚類椎骨(No. 2) | 18. 鳥類基節骨(No. 2) |
| 19. 鳥類末節骨(No. 2) | 20. 鳥類四肢骨(No. 2) | 21. ニホンジカ?歯牙?(No. 2) |
| 22. 小型獣類中手骨/中足骨(No. 2) | 23. 獣類肋骨(No. 2) | 24. 獣類四肢骨(No. 2) |
| 25. 獣類肋骨/四肢骨(No. 2) | 26. ニホンジカ歯牙(No. 2) | 27. ニホンジカ中手骨/中足骨(No. 2) |
| 28. ニホンジカ中手骨/中足骨(No. 2) | 29. 獣類後頭骨?(No. 2) | 30. 獣類歯牙(No. 3) |
| 31. 獣類四肢骨(No. 3) | 32. 獣類肋骨/四肢骨(No. 3) | 33. 獣類指骨(No. 4) |
| 34. 獣類指骨?(No. 4) | 35. 獣類四肢骨(No. 4) | 36. タイ類歯牙(No. 5) |
| 37. 魚類椎骨(No. 5) | 38. 魚類鱗棘(No. 5) | 39. 鳥類四肢骨(No. 5) |
| 40. 獣類四肢骨(No. 5) | 41. 獣類四肢骨(No. 6) | 42. 鳥類四肢骨(No. 7) |
| 43. イノシシ基節骨/中節骨(No. 7) | 44. イノシシ中手骨/中足骨(No. 7) | 45. 獣類四肢骨(No. 7) |
| 46. 獣類部位不明破片(No. 8) | 47. 中型獣類肋骨(No. 9) | |

報告書抄録

ふりがな	かみのむらいせき							
書名	上ノ村遺跡Ⅱ							
副書名	波介川河口導流事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ							
シリーズ名	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第120集							
編著者名	出原恵三 松本安紀彦							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原1437-1 TEL 088-864-0671 FAX 088-864-1423							
発行年月日	2011年3月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
かみのむらいせき 上ノ村遺跡	こうちけんとししにかみのむら 高知県土佐市新居上ノ村	39205	190119	33° 28' 21"	133° 27' 35"	2006.10 ～ 2008.6	7010	河川工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
上ノ村遺跡 第2地点 第3地点拡張区 第6地点	集落跡 本土決戦陣 地跡	中世後期 縄文晩期 近代		土坑・溝・鍛冶関連遺 構・他 テラス状遺構 交通壕・小銃掩体	貿易陶磁器・備前焼他 縄文晩期土器・石器・ 玉類	縄文時代晩期前葉の 無刻目突帯文土器や 鹿兒島に製作地があ ると言われている 同時期の玉類がま とまって出土してい る。		
要約	<p>第2地点 14～15世紀を中心とする集落址である。『上ノ村遺跡Ⅰ』で報告した集落は古代から継続して13世紀を中心とする集落であったが、下流側に位置する第2地点は15世紀に中心があり、仁淀川流域の中世集落の変遷を捉えることができる。出土遺物においても国内産陶磁器では常滑から備前へと転換している様子が明瞭に掴める。当調査区はホノギ「鍛冶ヤシキ」に属しており鍛冶関連遺構・遺物の出土は、ホノギ名の成立が14～15世紀に遡る可能性を示唆しているとともに、当該期の手工業生産を知ることのできる集落址としても注目されよう。</p> <p>第3地点拡張区 3-1-4区テラス2からは一括性の高い晩期前葉の土器を検出し得たことは、該期の良好な資料に恵まれていなかった高知平野の晩期土器編年の充実に資するところが極めて大きい。特に無刻目突帯には注目しなければならない。無刻目突帯はこれまで晩期中葉に属し、東九州を中心に分布し東限は西南四国と考えられてきた。この通説が今次調査によって大きく変わり、成立は晩期初頭、分布は高知平野にまで拡大した。この他にも高知平野における縄文後期から晩期への移行期の特徴を掴むことのできる資料を得ることができた。高知平野は九州と近畿の間であって両地域からの影響を受けていることが知られている。</p> <p>今次出土の土器や石器には両者の影響が見らるが、九州的な要素を強く留めながら推移していることを指摘することができる。</p>							

上ノ村 遺跡Ⅱ

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第120集

編 集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
発 行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原1437-1
電話 088-864-0671
発行日 2011年3月18日
印 刷 弘文印刷株式会社

